

pso2 (仮)

rego

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ps02を出来る限りストーリーを大幅改造してでき得る限り本編をなぞろうとする小説。

投稿者は初投稿です。「こんなのps02じゃ無いわ！タダの自己満よ！」と思われる方は可及的速やかに撤退をお勧めします。

アンチ及びヘイトは（どうなっているかわかりませんが）念の為にしておきます。

タグはts以外全て念の為

色んなキャラがおかしくなっている可能性が有ります。と言うか着地点を見失っています。

最新は基本遅いです。

目次

外伝的なサムシング

オリ主xオーバーな道 | 1

オリ主xオーバーな道 | 2

オリ主xオーバーな道 | 3

p s o 2 旅館編(仮) | 31

各種 てきとう 設定 仮置き

各種 設定 仮 | 47

p s o 2 (仮) 武器関連 | 53

E p l

1 話目 | 61

2 話目 | 66

3 話目 | 71

4 話目 | 78

5 話目 | 85

6 話目 誰に? | 93

7 話目 | 99

8 話目 | 104

9 話目 朝飯 | 108

1 0 話目 | 112

1 1 話目 | 116

1 2 話目 | 122

1 3 話目 | 127

1 4 話目 アフィンから見る相棒 | 132

1 5 話目 アイス | 136

40話目	39話目	38話目	37話目	36話目	35話目	34話目	33話目	32話目	31話目	30話目	29話目	28話目	27話目	26話目	25話目	24話目	23話目	22話目	21話目	20話目	19話目	18話目	17話目	16話目
									ミートソース										脱出準備				お粥	
268	263	256	251	245	241	236	230	225	220	216	211	207	202	196	190	185	180	175	169	160	154	149	145	140

6 5 話目	6 4 話目	6 3 話目	6 2 話目	6 1 話目	6 0 話目	5 9 話目	5 8 話目	5 7 話目	5 6 話目	5 5 話目	5 4 話目	5 3 話目	5 2 話目	5 1 話目	5 0 話目	4 9 話目	4 8 話目	4 7 話目	4 6 話目	4 5 話目	4 4 話目	4 3 話目	4 2 話目	4 1 話目
		カレーライス																						
411	406	400	394	388	381	376	370	365	359	353	348	342	336	330	324	319	311	304	299	294	289	284	278	273

89話目	573
88話目	567
87話目	560
86話目	553
85話目	547
84話目	537
83話目	529
82話目	520
81話目	511
80話目	506
79話目	498
78話目	491
77話目	484
76話目	479
75話目	473
74話目	469
73話目	464
クリスマス番外編	455
72話目	450
71話目	443
70話目	438
69話目	434
68話目	428
67話目	423
66話目	418

113話目	龍祭壇へ	888
就		871
112話目	前半 VS巨軀	
111話目	ラウンド2	861
110話目	後半	849
109話目	アフィンの成	833
108話目	VS巨軀	816
107話目		803
106話目		788
105話目		777
104話		759
103話目		743
102話目	Ep1. 8 AM11:00辺り	729
101話目		714
100話目		700
99話目		684
98話目		675
97話目		660
96話目		646
95話目		634
94話目		620
93話目		608
92話目		597
91話目		587
90話目		579

1 2 6 話目	1 2 5 話目	1 2 4 話目	1 2 3 話目	1 2 2 話目	1 2 1 話目	1 2 0 話目	1 1 9 話目	1 1 8 話目	1 1 7 話目	1 1 6 話目	1 1 5 話目	1 1 4 話目
				帰艦 				1 1 9 4 / 1 0 日 ら へ ん 			一時帰還 	顔合わせ
1097	1084	1058	1043	1017	1001	986	971	958	943	931	918	902

外伝的なサムシング
オリ主xオーバーな道

PSO2 オーバーな道

「ーくそつ、コレもダメか」

そう言い目の前のコンソールに表示される自分の地点から半径数万キロのデータを見る。

「…シエラ？聞こえるか？シエラ？…おい、デュケツト☒」

そう言い耳元に付いているインカムに声を掛けるがー反応無し。

「…通信不可、機体のデータは…くそつ、一回だけか。ジャンプが出るのは」

計器に表示される機体の今のコンディション。

外部からのデータリンク途絶、マップデータは広域フォトンレーダーによる自己収集モードで作ったものを暫定的に使用中、P・フォトンジャンパーの再充電…0.00%

可及的速やかにオラクル船団と交信せよ。

と書かれている。

「宇宙で漂流とかシヤレになんねえぞ…食料ーはナノトランサーに常時しこたま入れてたから問題は無い…無いが…」

そう言いどうにか動きは取れるレベルのコックピットを見回す。

一度ナノトランサーと機体のリンクを解除。ヘルメットを取り出し外に出る。

「…初の宇宙遊泳が漂流とはな…」

そう言い何処を見ても真っ黒な空間を見る。

マトイは大丈夫だろうか。デュケットとーいや、今はシエラか。二人で大丈夫だろうか。

いや、マトイはクラリス姉妹ーサラとクラリーーじゃなくてイリスか。この二人が居るから何とかなる、筈。

「問題は俺を見つけてくれるか、だ…」

一応救難信号を出しておくか、幸いなことにオメガに行った時も数時間で見つけてくれた。オラクルの技術を信じよう。

そう思いコックピットに戻りヘルメットを取り計器を見る。

「レーダーにコンタクトーは…いや、何だこの反応は」

そう言い計器の端の方に出たデータを見る。

「………これ、は…地球☒」

そう言い計器に表示されたモノはー雲で覆われた星が合った。生体スキャンによると人らしき生き物もいるらしい。

「………ここにジャンプすればー」

もしコレが地球ならば帰還できるかも知れない。

そこまで思いふと思う。同じ宙域に居るのに何故交信出来ないのか、と。

「…取り敢えず行ってみよう」

そう言いナノトランサーを機体とリンクさせて機体慣性システムを起動させて、推力を上げて生命体の居る星（仮）に向かった。

「…コレが…本当に生命体が居るのか？」

そう言い俺の目の前に移ったのは…灰色の雲に覆われた惑星である。

こんなんじや太陽らしき光も届かないし、草も生えないし…本当にいるのか？

機体の主翼を機体内に畳み大気圏に突入準備を始める。

「速度合わせ…プラス54.6、43.2…」

『コースに右0.35、下0.54。保持範囲外です』

「分かっている！右0.35、下0.54…インコース！」

そう言い計器に表示されるコース内に入る。

「インコース、航路に入っ…た、燃料…は、そもそも問題なし」

『メインクアッドリアクター、出力安定。サブリアクター共に問題無

し』

『…言い少しづつ減速し、大気圏に突入。機首を上げ機体全体でブレーキをかける。』

「…コックピットの温度上昇、コレは冷却、と」

計器に表示されるデータを適当に搭載A・Iが許可していき、冷却だけは少し多めに下げていく。

『機体温度上昇。安全温度まで後6500』

「…念の為冷却、頼む」

『了解しました』

「…抜けた…なんだ、此処は…」

冷却し、アーマーに覆われた装甲からカメラを通して見える熱に内心大丈夫だろうか、と思いつつも大気圏を突破。主翼を展開してコックピットに映される映像を見る。映像越しに映った大地は…灰色の雲、色のおかしい雨…そして極め付けは…

『警告、周辺大気汚染度大、繰り返す。周辺大気汚染度大』

『…言い騒ぎ始めるA・I。コックピット内に表示されるデータを見ると…何だかよく分からないが凄くヤバそうなのは分かる。』

「…すまんが、何がやばいのか分からない。簡単に説明してくれ」

『分かりました。一言で言いますと外に出ると五分を待たずに死ぬ可』

能性が高いです』

「有毒って事か。こんなん、酸素を主体としていたら生きれないだろう…？」

明らかに突出しているのグラフデータ。いや、そもそも酸素を主体とせずに、俺たちからしたら有毒なガスが酸素なのかもしれない。エルジマントのように。

『警告、外部に出る場合はアンテナを一定距離毎に使う事を推奨』

『警告、機体周囲の汚染度大、外部装置を用いてアンテナを使用』

「使用許可、着陸次第使ってくれ」

『了解しました』

そう言い少しづつ高度を落として行く。

『レーダーコンタクト、観測用電磁波らしき物を感知』

「パッシブとアクティブどっちも使え。まだバレてはマズイ」

『了解しました』

「それと地上に降りたら光学迷彩を使用してくれ。俺が良いと思えば解除、又は雰囲気読んで解除頼む」

『了解しました。もし敵性生物と接敵した場合は？』

「武装は実弾は有限だ、俺の指示を読んで待て」

『了解しました。無事の帰還を』

『そう言い機体が地面と接触すると計器にA・G・L・O　A・L・T・Oと出た。』

着陸したのと同時に機体の一部がスライドして白い光が周囲に展開、数秒ですぐに消える。

『汚染度低下、外部活動可能なレベルになりました』

『了解、コックピット解放』

『了解しました』

(今日も疲れたな……)

『そう言いガスマスク越しの空を見る男性。外見はまるで生物災害などが起こった際に使用する防菌スーツを着た男性らしき人が佇んでいる。』

(毎日毎日同じ様に仕事を繰り返し、体を蝕まれるばかり。かと言って止めることは不可能)

(小卒を雇う所なんてそうそう無いがね)

彼の事を援護すれば間違っても小卒の12前後、と言うわけではない。歳を見れば22歳と充分な大人である。

(それに最近ベースに攻撃してくる人多いしなあ…噂じゃ早くもサービス終了、とまで言われてるしなあ…)

(いくらギルメンが強いって言っても…時間もあるし…)

(…あのゲームが…ユグドラシルが無くなったら俺…どうなるんだろう)

そう言い顔を一度下げ、もう一度上げる男。

(ダメだダメだ！そんな事でしょげてはダメだ！母さんや父さんに顔を向けられないだろう！鈴木悟！)

そう言いこの男性…鈴木悟はスーツ越しに顔を叩く。

「…はあ、とは言ったもの…一ヶ月ぶりの連休、何に使えって言うんだよ…」

何故鈴木悟がこんな場所にいるのか。答えは簡単である。

数ヶ月ぶりの…本人は気付いていないが、役6ヶ月振りの連休である。

本人としては別に仕事をしていても良いとのことなのだが、上が煩く、強制的に5日の休みを貰えた。

だがしかし、本人としては初めての連休。ポンと貰っても何も出来ないし、やる事もないのである。

なので生前生きていた父と母と共に来たことのある場所に来てみたは良いもの…。

(汚染が広がっているなあ…ま、一般人の俺には関係のない事だけど)

そう言い帰ろうかとレンタカーに戻ろうとした時。変な音が聞こえた。

「…何だ？この音？」

そう言い空をーー灰色の空を見上げるとーー空から飛行機が降ってきた。

(飛行機☒こんなご時世に☒)

このご時世に航空機で空を飛ぶなんて…エンジンが壊れちまうに決まってるだよ☒

そう心の中で叫んだ悟だが、何かがおかしいと気付く。

(…待てよう…そもそも航空機を作っている会社なんてあるのか？)

この大汚染時代、一応企業の奴らも減らそうと言う表向きの努力はしている。空気を汚す火力発電、ジェットで汚す航空機は真っ先に消えた筈である。

(…よく見るとあの飛行機ーエンジン前の空気を吸うところが無い…?)

そんな事を思いながらも少しづつ地表に接近、着陸した航空機。

悟は好奇心からか少しづつ、バレない様に近づく。

(なんだいありや…見れば見るほど企業が開発したとは思えない。

…それにアレ)

そう言い悟の視線の先にはー主翼、胴体に増設してある装甲、そして。

(…ミサイルって奴だよな。ユグドラシルで種族のホームクルスで見た記憶が…)

(だけど見た感じすごく小さいぞ。俺の手ぐらいしか無い)

そんな事を思っていると航空機が割れてーコックピットが開いた。

(…良く良く考えたらコレ企業の新型だったらマズいな。下手したら死ぬかもな)

などとある意味楽観的になりながらも建物の壁から顔を出して事の終わりを待つ悟。

少し待つとコックピットから人が出てきたー。

(…アレは…何だあの髪の毛の色？ゲームでしか見た事ないぞーんっ？待て…あのミミは…それに…尻尾)

そう言い出て来た謎の人。

(いやーそもそも…あの人スーツ着てない☒死ぬ気なのか☒そもそもあれば人なのか☒)

そう言い航空機から降りた人ーしかも少女☒更に驚く事に少女が降りると後ろに合った航空機が次の瞬間には消えていた。

(はあ☒ど、どおなってんだ☒人類が透明な航空機作ったなんて話し聞いてないぞ☒)

(それにあの人！ミミと尻尾！それによく見たら耳も尖ってるし！

どおなってんの☒ーあつ☒)

余りの事に動転して間違えて足元にある石を蹴ってしまった悟。しかもそれが運が悪い事に更にドラム缶等に連鎖していく。

「…おい！誰か居るのか？」

音に気づき声を上げる少女、なのだが。

(ウゾだろ☒翻訳機が翻訳しない☒それじゃあアレは…)

悟の中で出てくる答え、それはー。

「宇宙人、なのか…？」

「…声の方位…多分あつちか」

そう言い全身を黒い全身スーツとその上に装甲のような服を羽織っている。脚には黒いブーツでを覆った靴と一体化したものを着ている宇宙人が向かってきた。

(…宇宙人って案外人に近い形をしているんだな)

そう思いながら宇宙人がスルーするのを紙に願っていたが、残念な事に俺の目の前で止まった。

「…人？」

「…胸でか…」

悟は残念な事にこれまでに愛を誓う様な女性にあっていない。そもそも女性が少ない。そんな彼の前に現れた巨乳のミミと耳が尖つ

て尻尾の生えている脚に届きそうな長さの髪を持った少女。まるでゲームから出てきな様な生き物。

その生き物が青と赤い目で俺を見ている。

一瞬とは言え悟の頭をショートさせるのには充分だった。

そのまま後ろに倒れる悟。

「☒おい！大丈夫か☒しっかりしろ！おい！」

そう言い頭を宇宙人の膝に乗せてくる宇宙人。残念な事に顔は見えない。なぜかって？デカイ胸のお陰で見えないんだよ。

そう最後に思い悟は意識を手放した。

オリ主 X オーバーな道 2

「……は☒」

倒れたのを自覚して、目を開けると――大きなおっぱいがあった。文字通り目の前に。

「…ん？起きたか？」

おっぱいの上から何かを言われたが、何を言っているのか分からない。そもそも小卒の悟には日本語以外の言葉など分かるはずがなかった。

それ以前にそもそも他の言語なんぞ勝手に翻訳機が翻訳してくれる。そういう意味でも習う意味は薄かった。

「あ、ありがとうございます。わざわざ助けていただいて…」

道に人が倒れていたら放置するこのご時世。こうやって助けられるだけでもありがたかった。

「…ああ…何を言っているのか全然わからん。翻訳機――も仕事しないなこれ」

そう言い頭を上げて違和感を感じる。あれ？なんで地肌にこの人――なのかどうか分からない生き物の呼吸を感じれるのだ、と。

手を動かし顔を触ると――直に触れてしまった。

「――まずい、まずい――」

「翻訳が出来なきや言葉も分からないからなあ…多分、日本語だと…ん？どうしたんだ？」

やばい、急いでメットを被らないと肺が死ぬ。急いで周りを探してーすぐ隣にあつたのを確認した。

それを手に取り被ろうかと思ふ。腕につけているデバイスの警告音が鳴ってない、と。

視線をデバイスに伏せるとー今まで見る事のなかった、そして企業の連中以外見る事が一生無いであろう緑色の線が出ている。悟はこの意味を思い出す。確か緑色の線は周囲の空気の汚染度が規定以下のライン、即ち呼吸可能な濃度を保っている。つまりー。

「空気が…呼吸、出来る…？」

そもそも倒れた後目の前の宇宙人がメットを外した時点で俺は死んでいる筈。

つまり…。

「あ、貴女は…な、何者なんですか…？」

世界中が重度の大気汚染により復興可能なラインをとつくの昔に突破して、極少数の企業を除き大気汚染から目をそらし、殆どの人が清浄化は不可能、とまで言われた大気汚染。

この…獣人、なのだろうか？はそれをしてしまった。

「…何言っているか分からない…予備の翻訳機無かったけ？」

そんなことを考えていると座っていた獣人が立ち上がり乗っていた宇宙船に戻って行った。

「せめてこんにちはくらい言わないとなあ…」

コックピットらしき部分に入りごちやごちやと音を立てながら何かを探している。

俺はその場で座りながらぼーっとその様子を見ていた。

数分だろうか。ヘッドセットの様なものを耳にーって耳も尖っているのか。エルフで獣人って…ギルメンの人が喜びそうな種族だなあ…。ーじゃなくて、そのヘッドセットを耳に付けて何か弄っている。

「…ああ…テスト、テスト…聞こえる？」

「お、あ…う、うん。聞こえます」

どう言う原理か知らないが急に何を言っているのか分かるようになった。普通に考えてあのヘッドセットのようなものだろうか？

いや、そもそもヘッドセットなのに言った言葉を翻訳するとは…しかもよく聞くとズレなしに言葉がわかる。

「…よし。君はこの星の原生ーいや、ヒト、ですよね？」

「え、はい。そうです。貴女は…？」

「お…私はオラクル船団アークス所属の守護輝士(ガーディアン)のユウナって言います。ーくっそ恥ずかしいいいいー！」

そう言い顔を後ろに向けて尻尾をバタバタ振る少女ーユウナさ

ん、だったか。が言う。

「マトイめえ…人にこんな恥ずかしい事を言わせるては…」

「その、なんてお呼びすれば…?」

「普通にユウナ、と呼んでください」

そう言い手を大きな胸の下にやり軽く頭を下げるユウナさん。

「あ、こちらこそどうも」

そう言い癖で頭を下げる悟。

「…その、所で…少しお願いがあるのですが…」

「は、はあ…」

そう言い言い辛そうに言葉を言うユウナさん。

「今…機体の修復に時間がかかりそうです…会って数十分の方に言うのもなんですが…少し、家に置いて来れませんか?」

「はあ…はあ☒」

悟も男である。こんな少女に止めて欲しいと言われたら困るのは当然である。

「も、もちろん出来る限りはします。ーだめ、でしょうか?」

「で、出来る限り、とは…?」

「例えば…料理、とか？」

「…ユウナさんには悪いのですが、この惑星は環境汚染が酷く自然食品が育たない所です…」

「…あ、食べ物はこちらの物を使うので」

このように、と言い手にー今では悟の様な一般市民では見ること出来ない果物ーリングが現れた。

「…えつと…これは？」

「え？リングですけど…こう言う果物ありませんか？」

「い、いえ、あるにはあるのですが…データ以外で実物を始めてみました…」

「さ、触っても？」

「いえ、上げますよ。おー私はそう見えて不測の事態に備えて食料は出来る限りナノトランサーに積んでますから」

そう言う少女の手からリングを恐る恐る手に取る悟。

「…あ、皮切ります？」

「お願いしますー！」

足の服から小さなナイフを取り出してナイフを切っていく少女。

「…っし、ほらーじゃなくて、どうぞ」

所々から香る言葉を強引に変えている感じに変な気がしつつも出されたリンゴを一口齧る。

「……あ、甘い……これが本物の……」

そう言い目から涙が出てくる。

「ああ☒もしかして不味かった☒変な毒とかあった☒」

「いえ……その、余りにも甘くて、みずみずしくて……」

そう言い無言で食べ続ける悟をユウナは静かに見つっ座る。

「……あ……ご馳走……さまでした」

一心不乱にリンゴを食べた悟だが、物あるものは最後は無くなる。

「……その、まだ色々とありますけど？」

「え☒本当ですか☒」

「ええ。だけどこれ以上はさつき言った通りに」

「……俺の家、調理器具無いですよ？」

「大丈夫、俺……私に考えがあるから」

そう言うユウナと食べ物に押されて一時的に住むことになった。

「……あ、そうだ。一応自己紹介を。俺、じゃなくて……」

「えつと、すのままでもよろしいかと」

「…俺の名前はユウナ。オラクル船団のアークスだ。種族はニューマ
ンビースト。ま、機体が治るまでよろしくな」

「はい。こちらこそ。俺の名前は鈴木 悟。しがないサラリーマンで
す。ーサラリーマンって分かります?」

「会社員だろ。いいことじゃ無いか」

そう言いながら一度離れて不時着した機体の近くに行く。

興味があり俺ユウナの近くに近づく。

「……損傷がひでえな。ーん? 悟さん、興味があるのか?」

「…いえ…なんか、すごい飛行機だな、と」

「飛行機、かあ…まあ、空と宇宙の違いだから変わらないか」

そう言いユウナさんはゲームの様なウィンドウをその場で出した。

「おお…」

「取り敢えず…圧縮、かなあ…」

そう言うのと目の前の機体が赤い菱形の物になる。

「…ま、一週間、一ヶ月…まあ、時間かければいい治るだろ」

そう言い俺の方に振り返り言う。

「取り敢えず悟さんの家に案内してくれ。大丈夫だ、居候の身さ。何も言わないよ」

「……ここが悟さんの家かあ……まって、アンティ撒くわ」

何処からともなく出した武器を振ると赤いラインを突破していたデバイスが緑色に低下する。

今の時間は夜だから誰にも見られていない、はず。

鍵を開けていつもの家にはいる。

「……お邪魔しまああす……」

いつもと違う点は……人では無い人が居候になった点、かな。

「……まあ……(ぎゅ)っくり、って言うのもアレだけど」

そう言い部屋に入ってテーブルの上を簡単に片付ける。

「ふう……(ゆ)ゆ、ユウナさん(何)を(何)を」

テーブルの上のゴミを捨てて戻ると……ユウナさんが下着姿になっっていた。

「ああ。これ？今着替えている最中だから……これでいつか」

ウィンドウを弄っているとさつきまで下着姿だったのが今見ると

普通に服を着ていた。

「…☒…☒」

「まあ、着替える以上下着になるのは仕方ないからね」

「…ペロろんちーのさんが見たらすごいことになりそうだなあ…」

「ペペロンチーノ？塩だけ Pasta か？不格好だが多分作れなくは無
ぞ」

と言う目の前の少女ーユウナさんの下着姿を思い返す。身長の割に胸がでかくつてお尻もでかい、なんと言うのだろうか、彼に言わせればムチムチ、と言うのだろうか？

と手を当てながら考える悟。

「…ん？どうした？」

「いや、なんでも無いさ」

そう言いつつもの流れで冷蔵庫にある液体栄養剤を手に取り、飲むとした所をユウナさんに止められる。

「…ん？なんだそれ？」

「…ああ、これは液体栄養剤って言う…食べ物です」

「…飲み物じゃなくて？」

「…ええ」

「こっちのメイト系の物か…少し見して」

そう言い栄養剤をユウナさんに渡す。

「…読めないな。仕方ない。少し皿に出しても？」

「コップならありますよ」

ありがとうございます、コップを探してテーブルの上に置く。

ぷしゅ、と言う音ともになんとも言い難い色の液体が注がれた。

ユウナさんはまだウィンドウを弄りー変な丸い機械が現れた。

「うわ☒なんですそれ☒」

「これ？マグって言う…まあ、なんか凄い機械。ー機械じゃ無いな」

そう言いながらマグが栄養剤の入ったコップをスキャン、なのだろうか。し始めた。

「……うーん、この世界の栄養剤の平均が分からないが…低く無い？生きていけるのこれ？」

そう言うユウナのウィンドウを見たが、俺には分からなかった。なんだこの変な文字は。

「……取り敢えず、消化に良いもの、だな」

そう言い立つと一言言う。

「悟さん、コンロか電気コンローマあ、なんだ、熱せられる機械はあるか？」

「…れ、レンジしか…」

「しかたない、悟さん、コンロを置くけど良いか？」

「良いけど…何処に？」

「部屋のスキヤンは終わってるから…まあ、ココかな」

そう言い視線をユウナの先に合わせるとーさつきまでなかった家具が出てきた。

「☒え☒なんでえ☒」

「…フォトン濃度が薄いけど充分に使える濃度は最低限あるな。悟さん、鍋、もその様子だと無いな？」

「え、うん」

「…はあ、どんだけ企業に汚染されてんだよ…」

そのため息をつきながら鍋を出して変な粒々を鍋に入れるユウナ。

「塩ーは薄めにして、卵も入れるか。ーいや、柔らかくならないとなあ」

「…ユウナさん？何を？」

「何って…おかゆだよ。食べ易いし俺も食べたいしね」

そう言いニツと笑うユウナ。その笑みから犬の歯が見える。

オリ主 X オーバーな道 3

「…さて。まあ食べながら聞いてください。――あ、飲み物飲みます？」

そう言い小さな部屋にあるテーブルを挟んで向かい側から話を振ってくる少女――ユウナと名乗った――はその人には無いミミと尻尾をパタパタと動かしながら俺に話を掛けてくる。

「ああ…いや…も、貰えるのなら」

「あ、じゃあ何を飲みます？」と聞いてきた。大気汚染に地質汚染などで壊れに壊れている世界でそんな飲み物を飲むなんて…そもそも俺は水――それも最低品質の物しか飲んだ事がないぞ？

「…それじゃ飲み易いもので…」

「分かった。――牛乳って入っていたっけなあ…」

そう言いながら俺のやっているゲームの様にウィンドウをスクロールしたりするユウナさん。目線を落とすと小さな――あまり使ったことの無いテーブルには2つのお椀が。

その中には俺に馴染みのない――半固形だが食べ物が入っていた。

「あの…これ、食べても…？」

「あ、どうぞ？それと飲み物は…牛乳、行ける？」

――

はあ、会社勤めも洒落にならない、そう内心思いながら過密状態の電車からどうにか降りる。

いや、そもそも少卒の俺を雇ってくれている事には感謝はしている。それこそこのご時世じゃあ産まれて直ぐ廃棄処分、なんて話もさも普遍的に聞く。

そう思いながら帰路に着いているとデバイスからフィルターの交換の合図が防護服内に鳴り響く。

片方だけを外し背中にある防酸バックに手を伸ばし――予備のフィルターが無いことに今更気付く。

…だが幸いな事に家までは比較的近い。もう片方のフィルターだけでも十分に着くはずだ。

そう思い込み俺――悟は前に進んだ。

いつもの様に家の前に着き防護服を脱いで自宅の前に向かう。

働きたくない、だが働かないと生きて行けない。そう思いながら玄関を開けると――。

「お帰りなさい、サトルさん」

――そう言ってくる人が居るのを思い出す。

そうだ、俺は今――。

――異星人と同居しているんだった。

シヤコシヤコと皿を洗う音が聞こえる。音の方を見ると――俺の切る様な服ではなく俗に言う上級国民等と言われる人達の着るような服を着て更にその上から…ギルドのメンバーから教えてもらった過去にあったとされるエプロンと言うもの付けていた。

コト、と冷たく飲んでいて安心安全とユウナちゃんの謳う水を飲み干し3日ぶりにパソコンを付ける。

するとメールを凄い数を受診して本来ならVRゴーグルを介し聴く音量だった為に最大音量で何度も音が鳴り引き――ユウナちゃんのミミと尻尾がピーン、となったのを見て咄嗟に謝ってしまった。

「良いんですよ、サトルさん。寧ろおー私が居候させて貰っている立場なんですから」

そう言い豊満な胸を張ってくるユウナちゃん。――一応ユウナちゃん曰く20は超している、とは言うが…その外見が幼いのでとてもじゃないが…うん。

そのままユウナちゃんは彼女の出したキッチンに向かい――この3日間で当たり前前になった温かいお茶をパソコンの横に置いていた。

ありがとうね、と言い、いえいえ、と帰ってくる彼女はゲームと同じ様にウィンドウを表示、何かの3Dデータを弄っている。

まだ完全栄養食から慣れてないからなのか少しお腹に違和感を感じ

じるが、今回は先程送られてきたメールを流し読みする。もしかしたら緊急、とまでは行かないが何かしら案件が来た可能性もあるからな。

そう言いズラーツと流し読みをした結果――。

その殆どがギルドメンバーからの生存確認だった。

たかが3日くらいで、と思いつつもベッドに腰掛ける彼女――本人曰くビーストと言う種族らしい――が来ただけで始めてから1日もログインしなかった事がなかった俺が3日もやってないなんて、と何処か他人の話の様な気がしてきた。

そうだな…ログインするか、とゴーグルを手にとり――ユウナちゃんに一言。

「少しゲームしてくるから好きに過ごしていて良いよ」

と俺はそう告げた。

――

「……アレがVRゴーグルか…典型的な形だな」

そう呟き俺は手元のウィンドウをパラメーターを見ながら呟く。

この惑星に墜落して3日目。何とか現地人と交渉して雨風防げる部屋に居候させて貰っているが…機体の方のエネルギー量が余りにも心ともない。戦闘機動は出来なくはないものの…ジャンプする為の量がない。

「…多く見積もって半年…あの人…サトルさんだったか。半年も居候をさせて貰えるだろうか」

視線はウィンドウからベッドに移りーVRゴーグルと思われる機械をかぶって横になっている20代の男性を見る。

背丈は多分170未満、162の俺よりでかいからまあ、平均的だろうか？但し身体は細い。まあ、あんな物を食べていればそうなるかも知れんが…。

そう思いながらナノトランサーからモノメイトを取り出し、ストローを差し込み口で吸う。

「……完全栄養食って意味じゃコレと変わらんなあ…」

手元を動かし何度もオラクル船団と通信を試みるが…音信不通、繋がらない。

幸いな事にこの星のポスに近いシステムの解析は終わっている。確実に足は付かない方法で接続することは出来た。

と言ったところで見る価値があるか、と言えは…。

(無いな)

そう言い切り新たにウィンドウを作り掲示板らしき場所にアクセス、そこには現社会の上に対するー上流階級に対する余りにも言えないような言葉が書かれている。

「…ぷはあ…ある意味デイストピアって奴か？…シヤオ(全知全

能のコピー」が統括しているこっちもこっちか」

手の前にキーボードを表示、動画サイトなどに向かって見るが…殆どが企業の動画しかない。商品紹介、保険に会社紹介とかとか…。

しかも救いの無いのがほぼ全てが会社内部に闇があるって言う。

「…そーいや此処風呂あつたな…」

玄関入ってすぐに風呂があつたのを思い出しすぐさま前で寝ている、と言うかゲームをしているサトルさんのゲームを解析させてメール機能があるのを確認する。

メールに風呂入っても良いですか?と書き込んで送信。

しばらくするとメールが来てーモモンガと言う名前でメールが来た。

なんだのそモモンガって名前は?そう思いながら中身を読むとーモモンガをどうやって送ったのか等を書いてあつたが、最後の方に余り良いものじゃ無いですよ?と意味深な言葉が。

どう言う事です?と送り返すと直ぐに返答が。

『私達一般人の生活環境は余りにも悪くー水だってマトモに飲めません。そんな我々が風呂に入るには?答えは簡単です。飲めない汚水を使うんです』

その内容を聞いて俺はうわあ、と言う顔をした。

『じゃあ、サトルさん。水と炎さえ用意できればなんとかなるんです

ね?』

『ええ、そうですね…もしかして?』

『ええ、ちよつと…オラクル式をね?』

「そう言いメールを閉じてー浴槽に向かう。サ・パータを使い浴槽に氷を何個も落とす。

その後ラ・フォイエを使い浴槽にある氷を溶かす。

更にラ・フォイエをぶつ放せばー。

「…ふう…水質も問題なし…アカシックレコードに介入出来るって事だな」

「そう眩き今来ている服長いスカートに長袖の上着を脱いで素っ裸になった。」

「……………」

ps02 旅館編(仮)

「…まずった…」

そうー独りでに本格的な浴衣を売っている店を見ながら小声で
呟く。

ここはビーストの多いシップの旅館近くの通り。左右に居る着物を
着た二人ーマトイとデuketトが俺に服を、特に着物を着せよう
と腕を引つ張る。

いや、そもそも男版の浴衣なら良い。それにそもそも俺は男であ
る。堂々と男用の服を着れば良いのではないか。

最初はそう思っていた。だがな。俺の為ー本心かどうかは知ら
ないがーに俺に合うような浴衣を探す二人を見ると言い出せなく
なるし、そもそも無理をして男用の浴衣を着てもー視線を下に移し
胸を触る。

ーこの巨乳じゃ着れないかあ、と思う。

両手で胸の下に手を滑らせて胸を強調させる。

「はあ…」

「?…どうなされましたか?…」

「いや。デカけりやいいってモノじゃないな、と」

「…はあ…」

そう言う店員がマトイとデュケットに呼ばれて奥に消える。

室内にある椅子に座りー最初の頃ー女の体になってしまった時を思い出す。

ー最初のうちはおっぱいでつけえ、やわらけえ！うわっ、尻尾だ、ケモミミだあ!?!と鏡を見て揉んだり触ったりしていた。その時は数日もすれば元の世界ー今居る世界より科学技術はおくれているがーに戻るだろう。そう思っていた。

それから1ヶ月も経てば嫌でも分かる。俺はこのーミミに尻尾に耳がとんがっている女の子の身体で生きるのだろう、と。

男版の服を着ようにもデカイ胸が邪魔でできない、と言うのが多発。

嫌に強調され、且つ露出の多い戦闘服で任務中にマトイを拾い、デュケットが来て。しばらく経ったある日。

二人が旅館に行きたいと言い放つ。ーいや、つい数時間前の筈だが：言い出したのは俺だっけか？

兎も角。その時はよっしゃ行くか、と思っていた。いざ着いて部屋に案内されて一息つくと人間、外にー遊びに出かけたくなるもの。外に広がる景色が尚更良ければ。

そこからは早く、ナノトランサーに入れたものを取り出して部屋にーベットがある部屋に置いておき、外に行こうと言うマトイ。

同じくベッドの上に置くものの、その後押し入れの中に服を入れる用意を始めるデュケット。

俺？俺はそのままベッドの上に荷物置いて壁際にある椅子に座ったよ。

そこで呟いた言葉がある意味地雷だったわけだが。

「あれは…浴衣、か？」

と。

そこからの二人は早かった。デュケットは「折角の旅館なんですか
ら楽しみましょう」と言い、マトイは「私もアレーユカタ？着たい
！」と腕を持つ。

やってきた旅館の人に夕食は19:00からと言われ、部屋で食べるか食堂で食べるか、と言われたが今回は食堂で。と言い俺は無理やり部屋から出された。

外に出ると目の前には温泉街が広がっておりオフシーズンと書かれていたが、普通に人いるじゃねえか。ーと内心思いながらも二人に手を取られて歩かさられる。

そこから更に進みー冒頭の言葉に繋がる。

「ほらっ！ユウナちゃんも！早く！」

「…私ユカタって高いって聞いていたんですが…案外やすいんですね」

「ええ。当店はお客様にお安く、扱い易いユカタを提供してまして。こちらならなんと」

「…5万メセタ…確かに安いわね」

「大丈夫ですよ、お客様。そこら辺にあるやつすつくて脆いユカタと違いーほら。お客様もやってみてください」

「ーうそつ。破けないの？」

「はいっ！私達の先代があるお方ーアークスに戦闘服をお売りしている方とお知り合いでして。ナノテクノロジーを応用させて貰ったユカタなのです」

「…ユウナさん？」

「ユウナちゃん！」

「「買お？」」

「……はあ…分かった。2着だな？」

「…え？ユウナちゃんは？」

「俺？俺は別に…」

「ーおや？お客様はアークスの方でしたか」

「ん？なんで分かったんだ？」

「仕事柄、そうのに詳しく無いとやっていけないので。それに匂いで分かりました」

「匂い？」

「ええ。ほら。ご覧の通りー」

そう言い帽子を取って見せた。

「私もビーストなので」

「そう言うことか。…すまないが2人に浴衣を頼む。俺は外で待つてるから」

そう言い外に出ようと椅子を回して入り口の方に体を向けたらしたら店員に肩をつかまされた。

「ーお客様のような可愛いビーストがユカタを着ないなんてジョーダンじゃありません。是非ともこちらへ」

「えーーうわあ☒」

そう言い座っていたイスから手を取られ立たされて着替えする所ー試着室に入れられる。

「…すいませんが、まだ買うとはー」

『いえいえ！試着してくれるだけでもよろしいので！』

『店員さん！コレとかどうですか？』

『マトイちゃん？黒と水色は合わないわよ…素直に薄水色とかは？』

『良いですねっ！是非とも着てもらいましょう！ーあ。その前に』

『『その前ごっ？』』

『彼女の寸法を測りましょう。何せ彼女のーー特に一部は中々見ないサイズですからね』

『すいませんが服を脱いで待機して貰ってもよろしいでしょうか？中に小型エアコンの端末があるので寒ければ温度をお上げください』

そう言う声の主と二人の声が遠ざかっていく。

え？服を脱いで？

この身体になつてに結構経つがーーまあ案外慣れてしまうもの。

そもそもこのーー今来ている服を脱ぐだけならコンソールウィンドウを起動して下着姿になるようにすれば良いだけだからな。

と思っていたがーーウィンドウが反応しない。その上に追加で表示されたウィンドウにはーーアークスに認可された戦闘服ではない為、自動で脱ぐ事はできません。

と書かれている。

仕方ない。自分で脱ぐか。

そう思い出したウィンドウを消して上着をーー腕の7割位の長さの上着を脱いで次に下着の上に着ている服を脱ぐ。

水色のシマシマのスポーツブラジャー姿になる。

ーー鏡に見事なお椀型の胸を支えるシマシマのスポーツブラ。と言うかアークスはーーいや、オラクル船団は胸がデカイ人が多いのかブラジャー一つとっても凄い。なんせ重さを感じないんだからなコ

レ。

そう試着室に備え付けられている全身を写す鏡で自分の胸の谷間に手を入れながら、こんなにデカくて隣り合うのに全然蒸れてねえ、すげえなこれ、と思いながら触る。

目線を前にやると自分の胸に手を入れている上半身下着姿の少女ーと言うか自分が写り、こんなことをしている場合じゃねえ、と少し暑くなりながらも、次は下ーズボンを脱ぐ。

コイツ自体は前の世界と同じ何の変哲のないズボンだ。それを脱ぎ始めた時、外に何か居るような気配を感じる。ー試着室のドアが開く。

「…えっと…ユウナちゃんの胸のサイズを測るって言うから借りて来たよ。ーあれ？何でミミそんなに立ってるの？」

「…ああ、いや。まあ…」

「?…兎に角。今から身長測るから少し待ってね？」

そう言いマトイが俺の頭の上に何かを乗せた。

「…身長が…うん、店員さんに転送して。胸は…」

そう言い前に来てマトイが止まった。

「どうした？」

「ゆ、ユウナちゃん…」

「ん？」

そう言い俺のブラの前に来て言葉を続ける。

「どうしょ？胸ってどうやって測るの？」

「えっ……」

いや、俺に言われても分からないし…そう言いマトイが俺の周りを見るくる回りえっと、あの、これ？と言いながら胸ではなく腹を測ってくる。

「…そこは腹だよ」

「ううん…やっぱおかしいよね？普通の女の子なら分かるはずなのに…」

ええ…ここで変な暗いスイッチ入るの…？

「ーいや、俺も分からないから大丈夫だぞ」

「ほんと？」

「ああ。…こんなサイズだがな、実際は俺もサイズ分からない」

「それじゃあこれ、どうやって買ったの？」

「えっと…ああ…これは確か…アフィンと一緒に買った記憶があるぞ」

「…そうなんだ。アフィンさんと。ーあ」

「ん？」

「ーなら今のブラジャーにサイズ表示されてるんじゃない？」

「…ああ。確かに。と言うかなんで気付かなかったんだ俺」

「少し後ろ失礼するね」

「いや。俺が後ろ向くよ」

そう言い鏡を前にしてマトイにブラのサイズを見てもらう。

「…うーん。見えないなあ…ユウナちゃん。腕上げて？」

そう言いー肩に掛かっている部分を手に取り上に上げるマトイ。

「…んっ、ん×ちよまつ？マトイ×ああ×」

「ああ、そんなに動いたらとれないよ…んしよーよし。どうしたの？」

するりとスポーツブラのー補強する為のフックを外しブラを外し、ブラジャーを外す。

外したブラを手に取りサイズを見つける為にくるくると動かす。

一方俺は上半身裸になった為、露出する胸を隠す為に手で隠し、開いた手をマトイに伸ばす。

「な、なんで×サイズ見るだけなのに取る必要が×」

「だって取らないと見れないだもん。ーあ、合った」

「そうだけど！少し手え入れて見るって方法がー」

「うん、そうだね。それでね？サイズは、えつとね…」

「早く返してくれえ☒」

「ーもうやだ。俺お嫁に行けない。ーいや、やっぱ関係ねえわ」
そもそも嫁に行く気もないが。と顔を手で多しながら思う。ー
自分でお嫁に行けない、と言ったものの、その言葉自体に変な感じが
したので考えるのは止めることにしよう。

「ほら。ユウナさん。前見て歩かないと。それに女の子同士ならノー
カウントですよ」

「ごめんねユウナちゃん。デuketツトさんが色々と服を選ぶから急が
ないと思って…」

顔を覆う手を離し二人ー浴衣姿のマトイとデuketツトを見る。

「にしてもデuketツトさん。ハオリ?を着せるなんて凄いな。私普通
にユカタを渡していたよ」

「ユウナさんは戦闘服も出来る限り露出が無いものを選んでいたん
で。それならキモノの上にハオリって言うのもありかな、と」

「そのお陰で胸が…」

「マトイさん。言わないでください。まさか私もここまでユウナさん
のが大きいなんて…」

おっきいの羨ましいなあ、と呟くデuketツト。

「デuketツトさん。聞こえてるんだよ。ったく…」

デカイのは良い事、なんてそれは実生活に関わらなければそう言える。こんなの…ブラジャーをしている時以外は重くてシヤレにならない。

…風呂に入る以外無くない？

「取り敢えずエコーさんとゼノさん。メル姉妹にゲツテムハルトさん、それと管制官仲間のラミア、ビター、マリーネにもお土産を買ってかないと」

「デュケットは買うもの多そうだなあ…」

「ユウナさんが渡すはずの人達のものも買うんですよ。それにー」

「ん？」

「…ほら。これ」

「そう言い店入っていくデュケット。俺とマトイが後について行くとー余分に何かを探していた。」

「…まさか？」

「そうですよ、アフィン君にてわたしで渡す為のお土産ですよ」

「ジョーダンだろ？」

「なんだかんだでいつもパーティー組んでいる人を無下に扱うのはちよつと私も思うので。ーマトイさん？まだ買わないよ？」

「ええ☒」

その言葉に反応してマトイを見ると、カゴに複数のお菓子を入れていた。

「こう言うお土産は最終日に買うものなの」

「…そうかなあ…」

そうデuketツトに言われ、渋々お菓子を元の場所に戻していくマトイ。

「…で、手渡しか…」

そう言い頭によぎるは金髪耳長ニューマンのアフィン。そこまでくるとどうしてもあのー告白事件を思い出してしまう。

「なあに？ユウナちゃん。もしかして、緊張してるの？」

「…んなバカな。…手渡し、かあ…」

残念ながら俺は男なんだ、男の相手はまだごめんだ。そう思いながら店内を見渡す。アフィンの家族用にお菓子類を買って…後は…。

「…なら4人で一緒のモノ買うか」

「そうきましたか。良いですね。ちなみに何を？」

「…無難にキーホルダーとか？」

「そこは記念品をー」

「ユウナちああん！デuketツトさああん！こっちにスゴイのがいるう！」

「…あれ？マトイさん？」

「…声の方角からして向こうだ。なんですぐに…」

「まあ良いじゃないですか。記憶が無い今からしたら初めての外のシップなんですし」

その理論で言えば俺も初のシップになるんだが。

そんな言葉を飲み込んでマトイの向かった方にーその前に手に取っていたお土産を置いて、慣れない服装でデuketと共にマトイの方に向かった。

「楽しそうですね、マトイさん」

マトイが叫ぶ方向に走るとーそこには大型の生き物がいた。

その横ですごーい。おつきいー！とはしゃぐマトイ。

それを見て少し笑いながら言うデuket。

「なんだありや？」

その言葉を聞き流しながらマトイが触るーでかい生き物を指差す。

「カウノトスですよ。ほら。あれ一匹で乳製品も200人が飲める量を出すし、肉だつて300人くらいだったかな？が食べれる量を得られるんですよ？」

船団内に出回っている肉や乳製品はカウノトスが作っているんですよ。…と云う。

「…牛って事か」

「牛は…ほら、効率が結構悪いから…」

「まあ、あのでかさを見るとなあ…」

マトイより少しデカイ程度のサイズーそんな生き物が街の中をゆっくりと歩きながらどこかに向かっていている。

「それにほら。見ての通り超温厚なので上に乗ろうが頭を撫でようが滅多に怒りません」

「よく知ってんなあ…」

「まあ、私の通った学校、アークスになる為の専門学校でしたし？見事フォトン適正で落ちましたけど」

「そう言うのって受かる前にやるんじや…」

「手違いでその武器がヤバイ奴らー今で言うバベルズですね、そいつらに渡って反乱でも起こったらどうしようもないですからね」

「…確かにそうかもしれないけど…」

「…それにしてもマトイさん、楽しそうですね」

どっかにゆっくりと歩いているカウノトスの皮膚をペチペチと触っているマトイ。

「デuketもマトイと混ざるか？」

「そうですねえ…ユウナさんもどうです？」

「俺？俺は良いよ。ここで2人を見てるさ」

「ふふっ。まるでマトイの親みたいですね」

「こんなのが親だつて？止してくれ」

そんなことを話していると一通り触り終わったのけマトイが帰ってきた。

「…ねえユウナちゃん」

「ん？どうした？」

「何か…みんなから視線を感じるの」

そんな言葉にそりゃあんなに触っていれば視線を感じるだろうと思っただがどうやらそう言う意味では無いらしい。

「…俺がビーストだからだろ」

「…それもそうですけど」

「デュケット。他にあるのか？」

「…マトイさんとユウナさんの髪の毛の色はその…特徴的ですし…なんなら私もお二人が初めてですよ。地毛が完全な白系の髪の毛は。ーーそもそもここはビースト多いんですから正直最初のは関係無いような気が」

「…ああ…まあ、確かに色んな髪の毛の色はーオラクルに来て見たが、確かに銀髪は余り見た事ないな。ダーカー依頼をくれるラヴェー

ルさん位か？」

「まあみんな髪の毛の色濃いですからね。ーラヴェールさんは…その過去に色々とありまして」

「色々？ーいや、よそう。そう言うのは要らない」

「ですよ。せっかくの温泉街ですし、そう言う嫌な事はペアっと忘れてー」

「ユウナちゃん？」

「…ん、どうした？」

「そろそろ旅館に戻らないと」

そう言うマトイに反応しデュケットが時間を見る。

「夜の7時前ですね。夜が出るらしいですし戻りましょうか」

「分かった。戻ろう」

「うん」

そう言いすつと慣れた様子で手を繋いでくるマトイ。

…本当にこの子は外見相当の年齢なのだろうか？と思いつつもデュケットの後をついていった。

各種 てきとう 設定 仮置き
各種 設定 仮

ローラー世代とはローラー

現在主力は第7世代及び第4世代。

クラスチェンジが並行的なクラスローラー所謂ハンターからファイター、レンジャーからガンナー等と同系列のクラスにしか出来ない。

第四世代がH uからF iへと同クラスなら変更が可能に。

メインクラスオンリー。

第五世代がメインのクラスの他にサブクラスを選択可能に。

第六世代がメインとサブがバラバラでも（フォトン効率が落ちるとは言え）選択可能に。

第七世代がF oの複合テクニックを使用可能かどうか（第六とそれ以外は変わりなし）

第八世代が全てのクラスとサブクラスをデメリット無しで運用可能に（数は少ない）

第八世代より前は軍学校を出てからではないとアークスにはなれなかった。

ローラーサポートパートナーローラー

アークス試験をパスしたものの平均よりフォトン量が少ない人たちがこちらに入る（セミキャスト化すると言う手もあるがそれらは本人の意思による）

船団内であればフォトンの残量を気にせず戦える。

何かしら惑星に降りる時はアークスと共に降下する。

主な任務は船団警備と新人アークスの支援とオペレーター。俗に言うアークス二軍。

本家だと小さな人造人間（デザイナーベイビー？）

――各種族について――

――ヒューマン――

一般的種族。オラクル船団で一番多く、様々な仕事に付いている。寿命は平均60から90前後で妊娠率は高い。(但しアークスに所属している場合半分以下の寿命になる)

オラクル船団の半分――文字通り5割を占める種族だ。

：余りにも平均的過ぎて何も書くことがない。俗に言う、特徴が無いのが特徴、と言ったところだろうか。

フォトンにはバランス的で攻撃にも防御にも扱える。

射撃職や近接、テクニク系列までなんでも可能。

強いて言うならその人の特性が子供に遺伝し難い、と言う所だろうか。

――ニューマン――

耳が尖っていて寿命が長い種族。

お陰でニューマンは外見に騙されるな、といわれる程。

フォトンを扱う力がヒューマンより高い。(後に出るデューマンより低いものその分防御にフォトン回せる)

生まれはダーカー戦術が確立されていない光歴以前の時期、その頃はフォトン許容率が多いほど多くダーカーを倒せると思われており、ヒューマンをベースに当時のフォトナーによって造られた。

寿命が長い理由も現役期間が長ければ、それだけ多くのダーカーを倒せるようにする為。

最も今となってはフォトン許容率も関係ない(あつた方が良くないことはいいが)

妊娠率はとても低く100年生きて一人から二人産まれれば良い方である。

(その訳は余りにも長い寿命の為、遺伝子を残す理由が余りなく、そもそも男性が少ない為である)

そのお陰で重要ポストには大体二人から四人は居る。

更にニューマンの男性は少なく、ニューマンの精子はとても貴重で船団に寄付義務が有る。(但し報酬としてメセタは発生する。)

ニューマン♂とニューマン♀の妊娠率は低いもののニューマン♂と他種族の♀ならば更に倍率は低い（出来るか出来ないかの二択で有れば50/50だが）

女性ニューマンの場合、世間一般的に言われる処女膜が役1日ほどで確実に再生すると言う資料がある。（また世間一般の言う処女膜も完全に塞がっている傾向がある）――それと同時に――これは完全に私情が入っているが、――エラー――がヒューマンに並べとてもキツイらしく、どんな男性でも出て――。

――システムエラー――

――接続切断――

――再接続・情報線確立中……

――再接続・完了――

――お陰で娼婦などに只でさえ少ないニューマンを取られてしまう。此方はダーカー殲滅と言う大義名分があると言うのに……

曰く『長年生きていると――エラー――以外詰まらなくて殆どのニューマンが娼婦になる』との事らしい。

――キヤスト――

フォトンを扱う力があるもののオーパーツ地味たフォトンを扱うのに体が耐えれない為、身体の一部を機械化し、耐久度を文字通り得た種族。一部のみのセミキヤストから全身機械化したフルキヤストまでである。

フルキヤストの方は数は少ない。

オペレーターは何らかの事故により腕を失った元アークスが殆どで腕のみを改造したセミキヤストが多い。

過去にフルキヤストの人工生命体を造る、と言うデータがあるものの、あるパーツ――所謂魂、と呼べるものの作成に失敗し、頓挫したらしい。

コレが出来ればアークスの戦力不足を破れたかもしれないというのに。

フルキヤストの男性や女性はオラクル船団から卵子と精子の提出

が強制され、それらが冷凍保存（テクニックと科学を用いた複合装置）に保存されている。

ーデューマンー

ヒューマンをベースにダーガー因子を加えた（ダーカーを滅ぼす目的のアークスからしたら）諸刃の種族。

お陰でヒューマン、ニューマンより腕っ節が強くヒューマンよりフォトンを上手く扱える。

妊娠率はニューマン以上ヒューマン以下という感じだ。

フォトンを攻撃に特化させすぎた為かニューマン以上にフォトン对身体に纏わせられない為、被弾に脆い上に耐性も低い。

外見的特徴は、頭部に有るツノである。男性は一本、女性は二本という感じで出ている。

尚一説によると過去にあった事件のエネミーの遺伝子らしき物がデューマンの遺伝子にあるらしいが、真実は如何に。

武器にフォトンを纏わせるのを得意とするが反面、体に纏わせるのは苦手の傾向が大いにある。

ーまた、一部であるがその傾向が攻撃寄りな為か短気な者が多い。

ービーストー

一言で言うなら獣人。キャスト以外の3種族が原生生物に孕まされ産まれた種族。

獣耳と尻尾が付いたり居なかったり。

処女膜も他の種族同様持っているものの、ニューマンと同じく処女膜が完全に塞がっている。

ニューマンと同じく子宮内の子宮壁が破れ落ちた際、そのまま子宮内で溶かされ吸収される、と言われる。

妊娠率はバラバラでヒューマンベースなら比較的妊娠するものの、ニューマンベースだと全く妊娠しないとも言われている。

尚妊娠するとヒューマンビーストでは少し遅めに出産するといわ

れるが、ニューマンビーストの場合は生まれるまでに2から5年掛かると言われている。(その理由は不明だが雑多な動物と性交する為の中にいる子を確実に産まれさせるためにこんなにも長期に居させる、とも言われている)

又、人の場合は妊娠しても産まれて来る可能性は低く、母子共々死んでしまう可能性が高い。その為詳細なデータが中々取れない。

妊娠後受精し、着床すれば、成長、無事に産まれるが、ニューマンビーストの場合、一般のニューマン以下の受精率に加え、妊娠時一度10ヶ月程で成長が止まり、それから2年から5年程、母胎の中で過ごすと言われている。

因みに妊娠中の性行為はヒューマン、ニューマン、デューマン、セミフルキャストは安定期に入った場合のみであるが、ビーストの場合、妊娠したその日から性行為が可能である。

である、と断定していないのはニューマンビーストが少ない為である。

ヒューマンビーストは元のヒューマンが多くアークスに所属し、それなりにいるものの、元のニューマンの数が少なく、更に前線に出るようなニューマンはほぼいないからである。

また、一説によると子宮壁が受精した卵子を覆い、ある程度の大きさになるまで受精した所が膨らむとのデータ有り。

各動物と同じ様に発情期と俗に言われる期間があり、その期間に入ると男性なら見境なく襲う、と言われる。

襲われた殆どの男性が脱水症状手前であり、それが治ったとしても、頑なに襲った人物の事を言わないのである。

最も、二度目、三度目と同じ人を襲うと半ば合意の上で、という事になるのだが。

治安の観点から見てもどうにかすべきかと思われる。

また、特徴で一部ー犬系統のビーストのミミはある種のリーダー

の様な存在であり、我々には察知出来ない敵からの殺気を明確に捉えられる、とのこと。

また、未確認情報もあるため注意を。

ピツと言う音と共にホログラムが消える。

今まで暗かった部屋が少しづつ明るくなる。

「成る程…理解はしたが…何故こうも…」

目の前にいる学者が何か言いたそうに口を開けた。

「…？ああ、何故ビーストの項目だけ長いかだつて？」

「それは私的ですが、ビースト、いえ、あのモフモフが好きで。また私が反ビースト組織の認識を…」

「…システムエラー…」

「…管理局のサーバーに異常発生…」

「…再起動…エラー…」

「…そもそも私達オラクル船団…目…種の保存…」

「…サブシステム起動…エラー…」

「…異常事態発生。管理者による強制シャットダウン開始…」

「…閲覧中止、異常個所の訂正を開始…」

ps02 (仮) 武器関連

---R.C.S.o.P, Arms製 武器---

強いて言うならライフルのランク4のビーム系ライフル。

ビームと名を打っておきながら実際はただの実弾ライフル。ただしA.C.ins.製のプルパツフ型とは違い全長は短く、全高が高くサイトを覗き辛い(ビーム系にサイトが無いとか言わない)

基本的にはその武器を扱うクラスの代表と面識があつたりなかったり。

---惑星間超光速空間湾曲航法母機 キャンプシップ---

全長150メートル、幅90メートルの中間大型空母：空母？

…ぶつちやけ戦闘艦。

惑星の宇宙空間に居る。

これを各惑星に置いて拠点にしたら良いんじゃないんですかね？

(新大陸感)

---ジャバस्प JFVa/Sp-68 ジェット及びフォトン

複合垂直離着陸/短距離離陸電子防護機---

本編のジェットオスプレイ、キャンプシップにXP-85の如く格納される。

フォトン複合ジェットエンジンにて駆動。宇宙及び地表、水中などをフォトンエンジンにて、万が一の場合の低出力(オラクル感覚)ジェット(ロケット)エンジンがある。

何故にダーカー相手に電子戦機かって？ほら、ダーカーってJam見たくコピーして電子戦仕掛けてくるかもしれないから…。

---サーレクスmk6 惑星緊急多目的支援航空機---

10発の大型可変フォトンロケット複合サイクルエンジンを積んだ救出機。未開拓惑星でもまずはこれの基地を作る為に一部を伐採するほど重要。

其処を中心に惑星を開拓して行きキャンプシップの中継基地や各

種施設などを建設して行く。

運用としては常時高高度を飛行し交戦中のアークスに何か不具合があり且つ撤退、又は任務終了時に回収する。

自衛用火器としてチャフ・フレア及びノツカー。

ノツカーとは対誘導（ミサイル）兵器迎撃装置のことで超短射程のミサイルを放ち接近するミサイルを叩き落とす装置。

これより大きい大型機を開発中し、それをキャンプシップと統一したい模様。

ローローメインシップ オラクル船団 オラクル級超々々才級大型船 一番艦 旗艦 オラクル ローロー

全長5000km（京都からシンガポール迄）、全高1000km（地上から宇宙までの10倍）を越す超々々才級大型船。

アークス関係者、アークスの家族、非戦闘要員、民間人を収容する超々大型船。

これが24隻程あり約3年間で旗艦が変わる為、オラクル船団員からすれば船の名前などどうでも良いのであろう。

人口は約1隻に10億ほど住んでいて24×10億で2.4e10（240億）ほど住んでいる。その内の10%前後がアークスの戦力として所属している。（果たして24億程度で全宇宙を守れるのだろうか：?）

各食料プラント船にも一隻につき大体5万人前後住んでいる。

大まかに居住、アークスゲートエリア、アークス居住区、ゲートエリア下部の各種航空機格納庫及び大型整備施設、海洋地区、森林地区、民間人用の民間用キャンプシップ宇宙港になっている。

構成は

マザーシップ×1

オラクル級大型船×24（うちアークスが駐屯するのは10機）

アークス級戦闘艦×200

食料プラント船×180

これでオラクル船団。

リーリリーパ 人型兵器 複眼アイー

惑星リリーパの遺跡群の奥、格納庫に眠っていた機体。

コックピットは頭部を上げて入るタイプでありメインモニターとサブモニターが左右上部分にある。他はほら、フロム脳で。

モデルはアリーヤっばいアレ。

コックピット内装は鉄騎みたく。まあ、直ぐにインターフェースがSFに変わるが。デカくてゴツイ宇宙服みたいなパイロットスーツを着て搭乗。理想はゼルシウスをゴツくた奴。

改装後の操作法は……マクロスのEXギアみたいにゴツイスーツで神経察知？

と言うか深遠なる闇戦で宇宙に何も付けずに入れてる時点で何も言えない。強いて言うならフォトンで酸素もついている？又は酸素を必要としない？

初搭乗時は武装は実体ガトリングガン（強制冷却ファンをバレルに装備。回して冷却するのにファンが必要なのか……）と実体アサルトライフル2丁。

後に左右両腕部下部にブレードユニットが有るのが判明。片方1個の2個装備。10秒位ならブレード刃を形成可能。

腕部下部に掃除したまま振るもよし、マニピレーターに保持させて振るもよし。

多分新たにA・I・S用の武器を転用するかも。

A・I・Sには設定上だと中距離支援機とか遠距離支援機がいるのだから……ねえ？左手フリーなんだからテクニクの零式ナ・バータを大型化してビームシールドもどきでもすれば良いのに。

なんでそんな精密機械が砂漠の砂荒れる基地の奥で数百年放置されても動くのか。（エルジマント驚異の科学力）

ほら、V系ACも元は発掘兵器だったし、イケルイケル。

主機は…謎の粒子（すつとぼけ）か重金属水素？

A・I・Sは…小型フォトニックリアクター？

ーA・I・Sー

Arks. intercept. high. maneuverability. Silhouette

惑星リリーパにてあるアークスが鹵獲した人型兵器をオラクル船団の技術部がリバースエンジンアリングしてノウハウや各種データを取得。

取得したデータを元にアレンジ、再構成して量産したモデル。

主機には小型フォトニリアクターを採用。これにより一般兵器より長くD因子に耐えることが可能。

搭乗方は背後及び頭部ユニットから。

背部下部にフォトンリアクター直結スラスターを2基搭載。脚部に小型スラスターを2基合わせ4基搭載。

宙間戦闘時には推力不足が現時点で指摘されているため追加ユニット案を提案中。

但し1G環境下では十分な推力があるため、現段階では然程問題視されていない。

武装はS・マシンガン、P・セイバー、S・Mのグリップ部に外付けのP・ブラスターを装備可能。

またそれらの武装は肩部にラッチ可能。

またS・Mのバレル下部には三連装のP・ミサイルを装備。爆薬タイプはH・E・A・D・F。左腕部にあるP・チャージャーからエネルギーを供給する。

また現段階では先程説明した宙環戦闘用の追加ユニットを装備する案や、中、遠距離用のより装甲を施し、更に無人機ユニットを付けた重装甲型などのプランが上がっている。

――ヤスミノコフ造兵廠――

ヤスミノコフやH系武器を作る。

――弾の種類――

小口径

5.	56x45	Oracle	War-time	Common	ammunition
7.	62x51	Oracle	War-time	Common	ammunition

A. P. 弾

Armor, Piercing, ammunition

D. A. P. 弾

Dark, falz, Armor, Piercing, ammunition

D. H. E. 弾

Dark, falz, High, Explosion, ammunition

アークスでは20ミリまで小口径だから○

H. E. A. D. F

High-Explosive Anti-Dark falz

――アークス 戦闘服――

背中にナノトランサーと呼ばれる四次元収納庫が付いていてその殆どが手元のデバイスでナノトランサーに出し入れできる。

男性は筋力を、女性はフォトンを扱えるようにするため、男性はゴツく重装甲な戦闘服、女性は肌を露出させフォトンを扱いやすくするため薄着になって居る。

一部逆の戦闘服がある。

フォトンである程度のダメージを吸収し、限界を超えた場合は逐一放出する。

破れた場合でもフォトン複合科学アトテクノロジーで完全修復は可能。

フォトンアトテクノロジーの使用は戦闘服又は軍用品に限られている。

フォトンにより敵性生物（及び物）からの攻撃を打撃、射撃、砲撃に瞬時に解析し、防御する。

またパワードアシスト機能もある。

111R・C・S・o・P, Arms製 武器111

強いて言うならライフルのランク4のビーム系ライフル。

ビームと名を打っておきながら実際はただの実弾ライフル。ただしA・C・ins.製のプルパツフ型とは違い全長は短く、全高が高くサイトを覗き辛い（ビーム系にサイトが無いとか言わない）

基本的にはその武器を扱うクラスの代表と面識があったりなかったり。

111A・C・ins.製111

全てのアークスに支給される基本武器、基本的に扱い易い武器となつて居ることが多いが、扱いやすさとコストを重視した為、ダーカーを相手するには少し物足りない。（そもそも人以上のサイズの敵を倒すのに小口径で倒せる111倒せたわ。でも強いて言うなら7.62x51以上が欲しい）

低ランクコモンライフル系。

111A・C・A・Rmk5 アークス用戦闘用アサルトライフル111

ダーガーが確認された年から配備されたアサルトライフルの五代目。

最初のライフルは大口径のボルトライフルだったが時代が進む毎にダーガー自体も少しは解析され小口径弾でもダーガーのコアを壊せばそれで飛散するという事で、ここにきて3台目あたりから小口径化した。

ストック、下部レシーバー、上部レシーバー、バレル周りの大まかに4つに分かれており各レシーバーの交換でスナイパーからマシンガンまで対応可能。

流石にショットガンまでは対応していない。

尚、貫通力に関しては100メートルにて、当たれば20mm程あり初代と殆ど変わらなくなった。

スナイパーモデルに関しては1000メートルにて8ミリの貫徹を有する。

理論上はスナイパーモデルの機関パーツをアサルトライフルに組み替える事で連射で使えなくは無いいものの反動は大きい。

スナイパーモデル、アサルトモデル、マシンガンモデルなどがある。それぞれ有効距離は1500、800、800となっている。

アーキア・C・H・S1 mk3 アークス用戦闘用重ソードアー

アーキスがダーガーとの格闘戦時に使う大型ソード。

刃は鉄ではなく、ソードの両脇をダーガーが苦手とするフォトンで覆わせた刃を形成する事により叩き斬るだけでダーガーを倒す事ができる。大型種及び中型種に対しては特效武器となる。

但し重い。アーHr? 知らん

アーキア・C・H・S2 mk1 Gigaash アークス用戦闘用重ソードアー

重かった前ソードを軽量化したモデル。フォトン出力が小さく扱いやすかった前モデルから出力を少し向上、対ダーカー戦では前モデルより活躍が期待できる。

全モデルはフォトンが全体に

(仮)

アーキアテクニック とはアー

炎、氷、風、雷、闇、光

闇ってなに？
光ってなに？

フォースやテクター、バウンサーやヒーロー、ファントムなどが使うテクニクについて。

そもそもテクニクはオラクル船団が過去に存在したとされるフォトナーの使っていたマジックを科学的に再構成したものである。

しかし再現度は不十分で再現度が高まる毎にそのテクニクのレベルが上がるようになる。

フォイエなどのその場に無いものを目の前に持ってくるにはフォトンを使いアカシクレコードにアクセスしてフォトンがアカシクレコードから、それ、を目の前に持ってくる。

なお、Fo、Teなどのミラージュエスケープは短期間だけ体を周囲のフォトンと同化させ（所謂別の次元に体を隠し）ダーカーからの攻撃を回避することが可能（但しそれすなわちフォトンと融合してしまふ可能性有り）

よってアークス及びオラクル船団では過度のフォトン次元（軸）への長時間の干渉（できうる限り）禁止としている。

「えっ？俺のミミを触りたい、だつて？」

任務はサクツと終わるだろうと高を括り、シップ内の飲料販売機で買ったオレンジ（らしき）ジュースを飲みながら相棒、頼むよ相棒と揺らされる

5日前の最初のアークス適応任務を先輩の救援で九死に一生を得て、その適応任務で成り行きで一緒のコンビを組んだニューマンロー所謂ファンタジーのエルフみたいな耳の長い人種ローのアフィンに言われた。

落ち着けと、手を離してもらい訳を聞く。

「何で、俺の、ミミに、触りたいんだ？」

「何でって…モフモフしてそうだからに決まっているだろう」

「はあ？モフモフ？」

「なあ？頼むよ、相棒の仲じゃないか」

「頼む、と言われてもだな…アフィン、分かっているのか？俺、なんて自分で言ってるが、俺は女だぞ？」

何故自分が俺と呼んでいるか、それは6日前に遡る。

その日はいつもの様にゲームをしていた。ほぼ毎日の様に。

無論二十歳だが、此方には働けない訳があった。

叔母の介護である。その時叔母は90を越しており片目は完全に見え、辛うじてもう片方の目で身の回りをどうにかしていたのである。

そこに俺が入り叔母の介護をしていた、のだが…残念な事に叔母は遠い所に行ってしまった…本人も時折自分の歳を忘れていたが、確か93歳で上った。

その時は泣いた、泣きまくってしまった。ただでさえ涙腺が弱いのだ。

火葬場を出て喪服のまま、空を眺めていると変な音が聞こえたの

だ。

声で表すのなら：ドワチツ！、と言う感じだろうか。

不審に思い、涙を拭き音の方角へ向かおうとした。

その時に、見つけた、と言われた。

そして気がつくときアークスシップの中に居て手にはライフルが握られて居た。

そこからは流れでさつき言った適応任務をアフィンと即席でクリアして晴れてアークスになった訳だが：

「それでも！頼むよー相棒だろ？」

「そんなにガン見されてもなあ：てかアフィン、胸を見るなよ」

「あ、ああ、ごめん、そのー」

「ああ、もう良いーそれより今回の任務は？」

「ええつと：『惑星ナベリウス森林地域分類番号4ノ5番地にて原生生物にダーガーの反応有り、至急確認に迎え』ーだって」

「アフィン、そつちのライフルの残弾数は？」

「対D因子弾五個と対装甲貫通弾五個、それぞれ50連だったかな？シップに連絡すれば追加弾くれるかもしれないけど：どうする？」

「今は良いや。取り敢えず即応弾としてD弾を入れといてくれ。俺は貫通弾入れとく」

「……なあ、やっぱしー」

「駄目だ、アフィン？良いか？そうやすやすと女性に触らせてくれと言っではいけない。それともなんだ？今ここで俺に撃たれるか？」

そう言い脚にあるポーチからハンドガンを指差す

俺とアフィンはレンジャー、ー所謂近距離から遠距離にかけて活動するクラスである。他にも前線を張るソードや槍を使うハンターやナツクルや長めのダガーを使うファイター、サブマシンガンを取り回しに特化させ二丁目持ったガンナー。

近中遠距離から前線を援護する俺たちライフルを持ったレンジャー、テクニックで傷を一時的に治すテクターや、同じくテクニクを使うフォースなどがある。

無論、各クラスにも色々あって、例えばアフィンは近距離から前線を援護する突撃型ライフルを持っているし、

一方俺は中距離から遠距離にかけてダーガーの弱点を狙う準狙撃型ライフルを持っている。

もつともこれらも全てレンジャーと言う括りの中なので自由に交換できる訳だが。

「ごめん、分かったよ…」

そう言い俺から離れていくアフィン

「そうだ、アフィン、待て」

「なんだい？」

「ヘッドセットのバッテリー、入れたか？」

ヘッドセット部分を指で叩く

「相棒に言われなくてもとつくにーあれ？可笑しいな、オフになつてる」

「はあ…アフィン、いや、何でもない」

「え…とーーよし」

『あーあー…此方アフィン、聞こえるか？相棒』

「おーけーだ、此方…はあ、はあー」

『んっ？どうしー』「はあつくしよん！ーくしゃみか…まあ、聴こえているから良いか』

「アフィン、ティツシュ有るか？鼻水が出てきてしまったよ」

『分かった、今行くからー』

「ほらよ、ティツシュ」

「ありがと、アフィン」

「そんな鼻水だらけの顔で言われてもなあ…」

ふー、ふー、と鼻水を出し切りこの先の調査に向かう

「アフィン、先にーいや、今回も2人で行くぞ」

「それじゃあヘッドセットの意味が無いんじゃない」

「保険はかけておくものだ。初弾薬室内に入れたか？」

「入れた。安全装置も掛けてある」

「よし、周囲に展開している他のアークスはいるか？」

「待ってくれ、今管制に問いかけるから…此方アフィン、任務番号ー
なあ、任務番号って何だっけ？」

「えっと……あった、これだ」

立体映像に今回の任務と任務番号が書かれている。それをアフィンのいる所に投げる

「えー、D146596です。任務地域は森林地域4ノ5です。

……はい、分かりました。周辺にアークスは居ないって」

「よし、んじや試し撃ちするか」

チャージングハンドルを引いて薬室内に何も無いのをちゃんと目で見て確認する。

その後貫通弾が20発入った弾倉を準狙撃型ライフルにセットする。

ボルトリリースレバーを押して初弾を薬室内に入れる。

ガシャン！と金属音が鳴りチャージングハンドルが所定の位置に戻る。

未だ忙しくない為念には念を押し、チャージングハンドルを少しだけ引いて薬室内に入っているかを確認ー

よし、入っている。

ゆっくり確認していると隣でパパパッ、とアフィンが撃ち始めた。

「……おい！そうだ！アフィン！今弾何入れた！」

試し撃ちしているアフィンの耳元で大声で話す。此方に気付いたのか試し撃ちを辞めて答えた

「そりや、貫通弾だよ。最初の一発はD弾だけど」

「そうか、それなら、良いや」

そう言いアフィンはまた胸を見始める

「なあ、相棒、思ったんだが…胸、狙撃する時邪魔じゃ無いか？」

「はあ…邪魔も何も、この身体なんだ、どうにかできるわけでもあるまい」

「そうか…」

そう言いアフィンは今度は照準器の設定を始めた。

俺もいい加減始めないと

下部レールに付けられたフォアグリップを握り安全装置を外す。

モードはシングル、単発で試し撃ちをする。

パスツ、パスツ、パスツ―

若干可変光学照準器がずれているな…待てよ？

念の為安全装置にモードを合わせ、口に人差し指を入れてヨダレを付ける。

「…相棒、何をやってんだ？」

人差し指を口から出し体の前に立てる

「何って、風の有無の確認だよ…無風？よし、やっぱり今だな」

もう一度安全装置を解除、さっきの通り照準器を弄る。

「えっと、上に―試しに3回、右に4回…よし」

3度、撃つ

「えー、下1、右2…よし、完璧だ」

「アフィン！終わったか？」

「とつくに終わってるぞ。どうだ？いけるか？」

「いけるいける。サツサとメセタ貰って帰ろうぜ」

2 話目

「おかしい…原生生物…ウーダンとかガルフの鳴き声がしない…」
「寝ているんじゃないか？…ここ暗いし」

「そうは言ってもだな…そういう生き物って夜行性じゃないのかわかる？」

「…俺そう言う考えるの苦手だから、相棒！そういう推測するのは頼んだ！」

「…俺も苦手なんだが…まあ良い、奥に進むぞ。モードは単発にしておけ」

「相棒、頼むからシングルって言ってくれ。第一単発って…何語だよ」「ああ、そうだな、ああ…まあ、気にするな」

「そーいやアークスって英語基準なんだっけ。おいおい直していくかなあ…」

「そこまで伸ばして気にするなって…相棒言い回し独特だから俺以外が隊員としてつかないんだよ…」

「なに、多分、すぐ分かることさ」

「直ぐって…」「待て」…どうした！ダーガーでもでたか！」

「アフィン…何か…嫌な予感がする。周辺の生体反応、調査頼む」「相棒…」

「そう言いアフィンは俺の目を見る。」

「…はあ、分かった。生体反応調査するよ、少し待ってくれ」

「アフィンは手元のデバイスを操作し、無人機をナノトライサーから取り出す。」

「ドローン組み立てるからその間援護…まあ、なにもないと思うけど、頼むわ」

「分かったから、早く頼むぜ。範囲は…俺達から離れない様にして…キロ前後スキャン可能な高度をとって維持するように頼む」

「えっと…生体走査装置と心音と…いや、これだけで良いか。出来た、今から飛ばす」

「カシユ、と手の平サイズのドローンが50メートル位の高さでホバ

リングする

「えつと…生体反応は…えつ？嘘だろ？600先、心音低、やばいぞ、相棒！」

「だから言ったらろ！行くぞっ！」

「居た！アフィン！管制官に連絡！至急救出機を飛ばしてくれ！」

「分かった、誰を呼べば良い！」

「そんなの、ヒルダでもブリギッタでも誰でも良い！…いや、待て！メリツタは駄目だぞ！」

「分かった、此方アフィン、任務番号D146596を遂行中緊急事態発生、ナベリウス森林地域分類番号4ノ5にて救助者を発見、至急救出機を送られたし！」

『こちらヒルダ、了解した。ナベリウス森林地域分類番号4ノ5に救助機を至急送る。新人達、位置の知らせ方は分かるな？』

「えつと…アフィンのランチャーにフレア弾を込めて空に撃つ、ですよね？」

『そうだ、新人達。慣れるよ、これが現場の空気だ、何があるかわからん。注意しろ』

「お、おい相棒！その女性…アークス、なのか？息しているか？」

俺と同じ赤い目をした白髪の少女の手を取り脈を確認する

「してない！取り敢えず人工呼吸を…」

そう言いアフィンを見る俺

「あ、相棒！女の子なんだから相棒がやってくれよっ！」

「…くそっ！…はあ…すう…」

白い髪の長い少女の口に俺の口を当てて酸素を吐き出す

「ま、まだっほい！」

「分かってる！少しは周りに気を配ってくれ！何が起こるか分からんからな…」

心臓があると思われる部分に手を…」

「くそっ！服が邪魔だ！アフィン！後ろ向いてろ！」

「えっ？うそお！」

少女には悪いが服を破き心臓がある部分に両手を重ね10回ほど押す。

押した後心音が無い場合はー息を口に入れるしか無い

「来い、戻って来い…頼むぜえ!」

キーン、と甲高い音が聞こえた。来た、救助機が来た!

「アフィン!いまだ!撃てっ!」

「あいよっ!」

ポンツ、とランチャーからフレアが放たれ空に輝く。

すぐに救助機ー今思い出したが確かサーレクスみたいな名前だった気がする。

大型可変フォトン及びロケット複合サイクルエンジンを10発装備した大型機が空中でギアを出して着陸すべくホバリングする。

「おい相棒…スゲーな、サーレクスmk6だ。新型機だよ…生で見るのは初めてだ…」

『此方サーレクスmk6パイロット、ロメヲだ、救助者はどこだ?』

「こつちの白髪の女性だ!救助頼む!」

『任されて!その為の俺達だ!野郎ども!降車、降車、降車!アークスを死なすな!』

サーレクス後ろのハッチが開き六人くらいの人達が出てくる。

「なあ、アフィン、カッコイイが…いかんせん暑苦しいな」

「でもあいつらのお陰で俺達は何度でも出撃できるんだぜ?戦場の女神だよ」

「出来れば可愛い女神が良いなあ…」

「そ、そうか…」

『救助者の格納確認!コレよりアークスシップに帰還する!』

10発あるエンジンの内2発も水平になりコックピット上部が光り丸い円ができる。

残り8発のエンジンが火を噴きその円の中を潜る。

「ワープ…したのか…外から始めてみたが…成る程、ああなっ居たのか」

「そう言えばさつき救出した少女、何処と無く相棒に似ていた気がする」

るが…姉妹か？」

「いや、俺には居ない…筈だ。多分」

「そうだな。さて、相棒、どうする？任務を切り上げ帰るか？」

「ふむ…さて、どうするか…」

サツサと帰ってメセタ貰って甘いものでも食べようかと考え始めた時、不意に通信が入った

『…ど…だ、マ…イ、こ……さな…』

聞いたことのある…いや、現在聞こえているような声をヘッドセットが拾った

「アフィン、今何か言ったか？」

「いや、俺は何も…どうした？何か聞こえたのか？」

「もつとヤバめな気がする…アフィン、念の為お前はキャンプシップに撤退しろ」

「おいおい、どうしたんだよ…」

「念の為だ、頼むぜアフィン」

「…その代わり絶対戻って来いよ、相棒…いや、ユウ」

「はっ、任されて」

そう言いアフィンはキャンプシップーTSAECー23mk4ーに向かうためテレポーターを使用、その中に消えた。

キャンプシップとは俺達アークスが惑星間を移動する際のテレポーター兼前線基地みたいなものだ。レンジャーのポインターで目標を指示して攻撃してもらったりもする。

さて、アフィンは撤退した。俺の今の身体の声と同じ声がヘッドセットが拾った。

「……これは何かあるか？」

そう言いゆっくり進む。アフィンが居ない今、完全に意味の無い勘が頼り……これしか頼れないが…

「周囲に生体反応…無し、やっぱりおかしい…」

俺とアフィンは元々ダーカー退治に来たのに来てみれば何も無しー少女は拾ったがーおかしい、おかしすぎる。仮に他に何人かアークスが居てその人達が狩って行ったのなら報告して終了なのだ

が…

『何処…だ、マト…そう…いき…アレを壊さ…けれ』

途切れ途切れだが少しづつ回線が安定して来た。多分、近い。

ライフルの安全装置を単発から連射、フルオートに切り替える。念の為チャージングハンドルを少し引き初弾が入っているかどうかを見る…：良し、大事だ。

ゆっくりハンドルを元に戻し可変サイトを4倍から等倍、1倍にする

『マトイを殺さなきゃ…世界が、ヤツに壊される。せめて創世器だけでー』

近い、そう思った瞬間少し先にで爆発が起こった

周囲に生体反応はなー3つ□1つなら分かるがあと2つはーアークス反応□ゲツテムハルトと、メルランディア？

付近にアークスは居ないんじゃないのかよお！

3 話目

「そらっ！」

低い声が木霊する

「まだだ、終われない」

「おいディアア！此奴はナニモンだあ！」

「お待ち下さいゲツテムハルト様ー！生体反応、指紋、血液…：分かりました。少し前にアークスになられたー！えっ？」

地中から湧いてくるダーガーを倒しつつ声のした方に走り、やっと付いたらゴツい男性ー！ゲツテムハルトと名前と表示されているー！と少女ー！メルランディアアー！が一人とー！アレは何だ？女性…：なのか？

ナツクルで女性のー！ソードなのか？ソードらしきものを防いでいる。

男性が右ストレートを女性に放ち、女性はソードの表部分でもう一度ガードする。

それと同時に男性の腹を片脚で蹴る。

「へっ…そんなの効くかよ！」

「そうか、ならこれはどうだ？」

一度女性が距離を取り男性から離れる

「ふんっ！ハンターが距離をとってどうする！」

「誰がいつハンターだといった？」

空いた左手で腰にマウントしてあるSMGを取り出し男性に掃射する

「おいおい！…そんなのアリかよッ！」

男性は木の裏に隠れてリロードのタイミングを計る

いや、アレは…：フォトン弾を撃っている？

それならリロードは多分無い、ならば！

片膝立ちの状態でライフルを持つ。モードは単発、

狙うはSMG、当たらなくても良い。隙を作れば…

光学照準器を覗きSMGに照準を合わせる。いや、初弾をー！時間

がない、今回は無視しよう。

「……ここだ！」

「トリガーを引き弾丸が長いバレルを通り女性のSMGに向かう」

「」

「！今！」

「こつちを見た女性に男性が肉薄、左ストレートを放つ」

「ツ！」

「……今いらつしやったユウナさんと各種情報……ダークフルス反応が有る、という事以外一致しています」

「ナツクルで女性の腹を思いつき殴り吹っ飛ばした。」

「……はっ！差し詰め同姓同名の空似ってか？」

「吹っ飛ばされた少女はソードを地面に差しそのまま体勢を立て直すと同時に左手から……アレは何だ！」

「変な球……オレンジ色の……何だ、アレは」

「うオー！何だありゃ！オイオイツ、ディア！援護頼む！」

「お待ちをゲッテムハルト様」

「そう言い少女……曰くディアの持つロッドから眩しい光がレーザーとなつて女性に向かう」

「くっ……やっぱり、強いなー」

『ゲッテムは』

「女性がそう言うとなリスに持ち帰って何処かに行ってしまった」

「はあ……久しく食べ甲斐のある野郎かと思つたが……逃げられちゃったら仕方ねえな……所で、だ」

「そう言いゴツい男性、ゲッテムハルトが此方を見た」

「お前……さっきの野郎、知ってるか？」

「ゲッテムハルト様、野郎ではなく彼女って言つてください。シーナ姉さんに言いますよ？」

「……つち、ディア、今はそんな事はいいんだ。もう一度聞くぞ？さっきの野……彼女を知っているか？」

「厳つい男がオレを見て言い放つ。」

「いや、知らない。そもそも俺レンジャーであんなソードとか待てな」

いしあんな変な弾撃てない」

「それ位は見れば分かる、ディア、さっきの奴アークスか？アークスじゃないか？」

「ダークファルス反応が少しながら有ったのでアークスの可能性は低いかと」

「はあ…無能な上に上げなくちゃならねエじやネエか…裏切り者がいるってな。ディア、報告書頼む。」

所でお前、中々強くなりそうじゃねえか。将来を期待してるぜ」

そう言いゲツテムハルトはスタスタと俺が走って来た方に歩いていく

「…ゲツテムハルト様が他人を褒めるなんて中々ありませんよ？頑張ってくださいね？」

「ディア！帰るぞ！シーナの見舞いにも行かなくちゃならん！」

「分かりました！ゲツテムハルト様！」

そう言いディアと呼ばれた少女も後に続く

「…何だったんだ、今のは。それにあの女性…」

さつき会ったディアはスペックは俺の身体と同じと言っていたが…

「ダークファルス反応…なんでこんな所に…」

そもそもダークファルスとは、無機物有機物問わず汚染するダークの最上位機種…機種？の人？物？である。現在確認されているのは確か巨躯「エルダー」と若人（アプレンティス）と深遠なる闇の3人のみ…果たして単位が一人二人なのかは兎も角…である。

だが女性のダークファルスなぞさつき言った若人しか知らないいや、アークスの歴史上にはもしかしたら他にもいるのかもしれないが…

それにその若人も髪の毛ピンク？だった気がする。さっきの女性は灰色だった…んっ？

そう思いふと自分の髪を見る。同じく灰色で腰まで届く同じ長さ。

それに一緒にいたディアと言う少女と会話した時のあのサイズ…さっきの女性とほぼ同じ目線だった。

「まさか。正しく他人の空似だろ。そうだ、そうに違いない」

そんな事を自問自答していると遠くから一足先に帰らせた、相棒相棒うるさい声が聞こえて来た。

「おーい、相棒ー！ー！何処だー！ー！」

…あいつ何でヘッドセットで探さないんだ？

「おい、アフィン、なんでヘッドセットで探さないんだ？」

『……ああ！そうだ。これが有るんじゃない！』

「お前…アホかよ…とりあえず任務は終わった。さっさと帰るぞ。救出した少女の容態も聞きたいしな」

『了解、それじゃー』

そう言い林の間からアフィンが出てきた

「さっきの少女を回収した所に行こうぜ。キャンプシップが待ってるから」

「おうよ」

「任務お疲れ様でした。報告書とマグを一時的にお預かりします」

「お願いします。ほら、アフィンも」

「お、お願いします！」

「お疲れ様でした。これにて今回の任務は終了です。ユウナさんには後でメディカルルームに来て欲しいとの連絡がありました」

「メディカルルーム？」

「はい。このロビーに並列してありますので横のドアから行けますよ」

「…つて言う事でアフィン、銃の整備一人で頑張れよ」

「ええっ！相棒居ないとパーツ分からなくなるのに…」

「頑張れ、それじゃ、此処からは別行動だ。んじゃ」

「おう、じゃあな」

そう言いアフィンはエレベーターに消えた。

一方俺はそのままメディカルルームと言われる治療室に向かう。場所はこのロビーに帰って来て向かって右側、アルファベットを少し崩したアークス言語でメディカルルームと書かれている。

立体内板には今日の医者や流行っている病気その他豆知識が書いてある。

その案内板を少し見てメディカルルームに入る。

「いらつしやい。今回はどの様なご用件で？診察でしょうか？」

「いえ、今回救出した少女の様子を見ようかと」

「と言うことはアークスですね？失礼ですがアークスカードを見せてもらってもよろしいですか？」

「はい……これですか？」

「いえ、そちらの蒼いカードですよ？」

「あつ、此方ですか……どうぞ」

「はい。少しの間お借りします……はい。認証が終わりました。ナベリウスにて保護された少女の事でですね？」

「はいーその少女は今どちらに……？」

「はい、フィリアが少女の生体反応を見えています。病室の番号教えてくださいか？」

「おねがいします」

「ルーム番号12……12、此処か」

部屋番号が12と書かれた病室に辿り着く。横を見れば何十個も病室が並んでいた。

何故こんなに必要なかと思つたが、直ぐにああ、そうか。と多分答えがわかつた。

ダークファルスが侵攻してきた時に此処が前線病院になるのだろう。

確か深刻なダメージの人と軽傷な人を色か何かで判別して軽症な人がここで治療を受けるのだろうかー多分。

しかし……

一振りでアークスをバタバタ薙ぎ倒し一人で惑星をも砕く。

何という基地外スペックだろうか。ダークファルス達は。

「……何であんな所にダークファルスが……いや、今はよそう」
そう言い病室をノックする

「どうぞ、空いて居ますよ」

「失礼します」

ドアノブを回し病室に入る。

病室に入ると中にはベッドと小さなテレビ、それと冷蔵庫のみだった。

ベッドの上の少女は俯いている

「貴女がこの少女を見つけたアークスね？」

「はい、ユウナと言います」

「ゆう…な…？」

俯いて居た少女が顔を上げて俺を見る

「えっと…彼女は？」

「えっと私が少しお話ししたのだけど…心を開いてくれなくて…」

「そうですか…」

「ですが、お名前だけは聞けました。マトイさんと言うらしいです」

「マトイ、ちゃんね…？」

「一応シップの登録者をマトイで調べたのだけど…ヒットは無かったわ」

「そうですか…」

マトイ…白髪紅い目の少女…最も俺も少女みたいなもんだが…俺が俺をずっと見ている

「ユウナちゃん？」

「んっ？…どうした？」

「私…ユウナちゃんに会ったことがあるような…無いような…」

「えっ？…俺に？」

不味いな、最初の任務以前の記憶は無いからな…言われても分からない。

「ユウナさん。会ったこと記憶にありますか？」

「いえ、少し分からないです」

「そうですが…彼女、どうしましょう？…登録者にない以上、家も無いですし…」

確かにそうだが…あの2LDK片方使ってないし…一人じゃ寂し

いしー

「それならば俺のー自分の部屋は如何でしょう?」

「ああ、確かにアークスのお部屋ならば大丈夫かも知れませんか? マトイさんは如何でしょう?」

「はい、此方こそよろしくお願いします」

「えつと、此方こそ」

「それでは私は退院の準備をして来ますね」

「そう言い看護師フェリアは病室から出ていった。

「えつと:ユウナちゃんの良いんだよね?」

「ええ、マトイさんでー」マトイで良いよ?」ーマトイで良いんだよね?」

「うん!」

「マトイさーマトイは倒れた前の記憶分らない?」

「うん、なんか、靄がかかったような感じで:ゴメンね?」

「何、ゆっくり思い出せば良いさ。時間はある」

「本当にゴメンね?迷惑でしょ?」

「いやいや、一人じゃ少し寂しいからね?正直嬉しいよ」

「ふふつ、ありがとう」

「そう言いマトイは微笑む」

「ああー何か思い出せそうな事はある?」

「何か:ううん、全然分らない」

「まあ、無理なら寝れば少しは思い出すでだろう。フィリアさんが来たらさつと家に帰ろう」

「うん!」

4話目

4話目

その後フィリアさんが来て早急に退院する事となった。

取り敢えずシップ登録者にマトイの名前を追加しといて貰い、取り敢えず今回は俺の部屋に住んで貰うことになった。

「俺の部屋…その、汚いが、まあ、なんだ。好きに使ってもらって良いよ。使つてない部屋が反対側にあるし」

「ありがとうユウナちゃん。ただで済ませてもらうのもアレだし、掃除とか…」

「ありがと、取り敢えず今回は休もう。なっ?」「うん」

マトイは頷きずつと俺の顔を見ている。可笑しいのか?

「ああ…如何したんだ?俺の顔をずつと見て」

「あつ、いや、違うの、そのお…」

そう言い目線は顔の上ーミミに向かって居た

「ああ、これか。まあ、細かい音を聞くのに便利だよ」

「その…アークスにはこう言うの沢山いるの?」

「…いや、そんなに居ない…筈だ…」

最初の任務終了後、ある先輩ーゼノさんから聞いたのだがー

俺みたく獣耳や尻尾を持って産まれる人達ー影でビーストなどと呼ばれているがーは大体は母親の特徴、例えば俺なら人の耳が少しだけ尖っているから母はニューマンなのだろう、みたく少しは推測出来る。

それでビーストが産まれる訳だが…大抵のビーストの母はアークス経験者で何かしらが原因で辞めた人が多く、何かがあつて救助隊が着いた時にはお腹が膨らんで居て検査をしたら出来ていて中絶出来ずに…つて言う事がほとんどらしい。中には出産して耐え切れずにそのまま母子共に死んでしまう場合もあるとか。

要するに原生生物に拉致られ何かされて居た所を救出されたつて事だ。

染色体が違うとかそういうと言ったんだが…なんでもフォトンが強い傾向の人だとそういうのを無視して出来てしまいうらしい。

内心エグイなあと思ったわ。

こう、暗い所しか言って居ないが明るい話もある。

ビーストは元の種族より身体が頑丈…詰まり多少の無茶が効くらしい。

ヒューマンベースのビーストでクラスがハンターなら寄りタフに、フォトンも沢山扱える。

因みに俺はニューマンベースなので気持ちヒューマンよりフォトンの扱いが上、ニューマンよりタフ程度らしい。

それでも俺は銃が好きだからライフルを使うけど。

動くの苦手…いや、嫌いだし

「その…触って良い？」

「ああ…家についてからでも良いか？色々今触られるのは少し不味い」

「う、うん、分かった」

「所でマトイは何か買う物ある？任務が終わって少しメセタに余裕があるし」

「そうだなあ…無いかなあ…」

「そうかあ…あれ？面白いや今何時だ？」

「面白いマグを操作し時間を確認しようとする。」

「あれ？マグどこ行った？」

「えつと…フェリアさんから聞いたのだけど確かアークスって任務終わったらマグを一時的に預けるんだよね？」

「あ、やべ、忘れてた。マトイ、ゲートルームに行こう。回収しなくちゃ」

「う、うん。でもどっちに行けば良いか分からないよ？」

「そーいや左右を見てもずっと病室があるばかり…しようがない。アフィンに連絡するか。」

「なに、その為のこれさ」

「そー言いヘッドセットを叩く。チャンネルは1、アフィンだ。」

頼むぜ。でてくれよ。

体感時間5分くらい経ってようやく声が聞こえた。

『んっ？如何した相棒。メデイカルセンターに行っただんじや無いのか？』

「いや、済まんがメデイカルセンターから出る方法を教えてくれ。可及的速やかに、だ」

『メデイカルセンターって…今どこらへんにいるんだ？』

「病室10049前にいるわ」

『だったら49の前の48を探してそっちに向かえば良いんじや無いか？』

「…あつ」

『まさか解んなかったの☒惑星じやあんなに指示出せるのに!!？』

「ありがとうアフィン。助かったわ。あとで覚えてろ？」

『おい！相棒！一体ー』

ブチつとアフィンとの通信を切る

「えつと今の人は…？」

「ああ、アフィンって奴だ。ある種腐れ縁ってやつよ」

「腐れ縁…？腐れ縁って何？」

「確か…縁を切っても何かしらで会う事ーだったかな？」

「へえ、そうなんだ。ユウナちゃんとアフィンは仲が良いんだね」

「どうだか…俺の指示に従えるような奴がアフィンしかいなかったって言えば良いのかなあ…」

そう言いマトイを連れて入り口に向かう

「…ユウナちゃんはそのアフィンさんの事好きなの？」

「んんっ？ああ、俺こう見えて少し男性恐怖症の様な気がしてだな、アフィンは気の合う友って感じだな」

「へえ、それじゃあユウナちゃんの好きな人は？」

「…マトイ、幾ら何でも今日会った初めてのー」

人に好きな人を言えるか、と言おうとマトイを見るとその紅い目がじつと俺を見ていた。

「はあ…マトイ？良いか？俺とマトイは今日初めてーいや、俺はマ

トイが気絶している時に会ってはいるが、取り敢えず二人して会話するのは初めてなんだ？良いか？」

「でも、私貴女に、なんて言うんだろ。懐かしい感じがするの」

「ふむう…やっぱ、家に直行するか」

「うん」

メデイカルセンターを無事脱出してゲートエリアを横切っている最中、マトイがふと気になっていたらしいことを言った。

「ねえ？ユウナちゃん？すれ違う人皆ユウナちゃんの事見てるのだけど…」

「んっ？ああ、俺ニューマンの女だけどうやらニューマン自体少なくて、そのほとんどが事務とかアイドルやってるぽい。多分アークスやってるニューマンってそんなにいないんじゃないかな？しかも俺ビーストだし」

「そうなんだ…じゃあユウナちゃんは貴重な存在なんだね？」

「貴重な存在って…俺はものじゃ無いんだがなあ…」

しかし…と考える。

アークス、と言うかこの身体になって6日目だけど未だにこの身体ーニューマン、女+耳が尖っている+獣耳+尻尾には慣れない。

先ずはトイレ。まあ此れは極端な話ーいや汚い話だが、全部大だと思えばまだどうにかなる。我慢が出来なくなるのは本当だったのは少し驚いたが。

2つ目は、2つ目だけに2つの耳、尖った耳と獣耳だ。

この2つは洒落にならないくらいに高性能すぎる。

音で何が何処にいるかとか大体分かるくらいに高性能だ。集中すればもつと詳しく分かるが…知らない事すら聞けちゃうからなあ…デメリットも中々でかい。

3つ目は尻尾。これに関しちや初日はダメダメだった。最初はどろろにか立って銃持ってダーガーと交戦したが、いぎキャンプシップに戻ると途端に立っていられなくなりアフィンに担いで貰って部屋に連れてって貰った。

その時は疲れて、と誤魔化したかふと思えば尻尾で重心のバランス

を取っていたのかもしれない。今となつちやモフモフのあつたかい防寒具だが。

最後に……無いものにとつちや酷だが……胸がデカすぎ。

確かにね？オレも男だった時なら胸はでかい方がいいに決まってるって思ってたよ？思ってたけどさあ……。

この巨乳……（あんましないけど）匍匐とか匍匐で二脚……バイポット立てて援護する時邪魔で仕方ないんだよねえ……軍隊で良く「やっぱ巨乳だと匍匐も難しいかなあ☒」って煽ってニュースになってるのを見たが……笑えないなあ……

などと思っているとエレベーターに着いた。

ふと何か忘れているような気がする。

「なあマトイ……なんか、俺、忘れてね？」

「ユウナちゃん……マグは？」

「ああ、そうだ。マグだマグ。カウンター行って回収してくるから待っていてくれ」

「わかった」

そう言いエレベーター前にマトイを残しカウンターに向かう。

「任務お疲れ様でした。マグを返却しますね」

そうオペレーターが言いマグがふわふわしながら俺の方に向かってくる。

「任務の内容についてですが……質問よろしいでしょうか？」

多分交戦したD・ヒューナルの事についてだろう。

「はい。分かる事……と言っても先に交戦していたお二人の方がもつと情報が分かると思います……」

「いえ、ゲッテムハルトさんとメルランディアさんは姉のお見舞いで事で先に帰られたので……お二人には後日お話を聞こうと思つてます」

「そうですか……それでお話というのは？」

「マグのカメラによりますと彼女……まあ、現在は取り敢えず仮面を付けていたので仮面（ペルソナ）、と名付けましょう。仮面は確認された限りだとアークスが使うソード。今一部で試験運用中のガンナーが

使うショートマシンガン。それとテクターやフォースが使うタリスを使っていたと思われませんが…これに間違いは？」

「無いです。ソードとsmgを同時に使っていました」

「接近兵装と近距離兵装を同時に…中々手強そうですね」

「タリスも何かしら能力があると見て良いかと。警戒する事に越したことは有りませんし」

「確かにそうですね。この事は上層部に上げておきます。ゆっくり休んでください」

「分かりました。それでは」

オペレーターと少し話…謎のダークファルス、仮面についてを話し合った。全く、ライフルさえ変えれば全ての距離に対応出来るが…惑星上じや無理だからなあ…

そんなこと思いながらエレベーター前に着くとマトイが男性アークスに絡まれていた。

うあ…マジかよ、近寄りたく無いなあ…オレンジジュースみたいな奴買ってアークスが逃げるのを待とうかなあ…などと陰から見ているらマトイと目が合ってしまった。

「ユウナちゃん、遅かったね？何か有ったの？」

「いや、新手的敵と有ったからその情報を話していたのさ」

「そうなんだ。アークスも大変なんだねえ…」

そんなことを言っているとマトイに群がっていた数人の人達が小声で何かを話している。

「おい、見ろよ。ビーストだぜ？」

「つたく、いくらアークスが人手不足だからってあんな獣の手まで借りなくちやならん事にイラつくぜ…」

「どうする？やる？」

「よせ、アークスシップ内じゃ武器が使えない。やるとしたら一人の時をー」

「ほオー誰をやるだってエ？」

不穏な事を言っていたら男達の背後から厳つい男…ゲツテムが現れた

「げっ！ゲツテムハルト☒」

「おおう、そうだ。でエ？誰をやるだつてエ？もう一度言ってみろよオ……？」

「お、おい、逃げるぞ。ゲツテムハルトは強いからな」

「おう」

そう言い男二人はテレポーターに消えた。

「まったく、俺の喧嘩相手をやるだつてエー！ふざけやがって」

「全くよね。私がフォトンを使えば殴ってやったのに」

「シーナ姉さん、ここアークスシップですから使えませんよ？」

「だつて、ビーストって可愛く無い？特にあの耳と尻尾！」

「おい、ディア、お前の姉を今すぐ止めろ。うるせエ」

なんか嫌な予感がする…迂回しよう

「なあ、マトイ、ちよつと周リー！「いたいた！ビーストよっ！」ー
えっ？」

まさかもうバレたか？と思ひ声のした方を向くとー

全速力で走ってくる緑色の髪の女性が両手を広げ体当たりしてき
た

「うおおお！」

5 話目

「すいません。私の姉が…シーナ姉さん、可愛いものに目が無くて…」
「さいですか…」

自分の妹にそんな事を言われても止めないメル・ランディアの姉のメル・フォンシーナ。今はこの厳ついファイター、ゲツテムハルトと共に暮らしているようだ。

「そうよお、可愛いは正義なのよお。ああ、モフモフで癒されるわあ、早く退院してゲツテムハルトと暮らしたいわあ…」

現在、シヨップエリアから更に下に降りた居住区の中にあるカフェ、ラフリという所でお茶をしている。

アークスシップにもお茶があるのに驚いたが…。

撫でまくっているメルフォンシーナの隣の席にマトイは座っている。

相変わらず俺と以外は全くと言って良いほど喋らない。

そこでふと思い出したのだが、そういやこの二人と初遭遇した時、見舞いが何かかんとか言っていたが…病気が何か持ってるのか？

「えつと…メルフォンシーナさんはー」「シーナで良いわよ」ーシーナさんは何か病気が何かを持っているのですか？」

「病気だア？…こいつがア？…この絶対に死なないシーナが？ガハハハッ！シーナ？聞いたか？」

「聞いたけどゲツテムの私の評価にうんざりね。フンッ」

「ごふあ」

シーナさんの無慈悲な右ストレートがゲツテムのみぞおちに入る。

「えっ!!？ちよ、ちよつとー！大丈夫なんですか!!？アレー！」

「大丈夫ですよ。あのお二人にはいつもの事ですから。それよりシーナ姉さんの病気ーいえ、入院している理由ですが…」そう言い牛乳に口付けるメルランディアー長いからディアで良いか。

「理由は…」

飲んだ牛乳をテーブルに置き口を開ける。

「10年ちよつと前にダークファルスの大規模侵攻がありました…そ

の時に結構重めな怪我をしてしまいましたね、シーナ姉さんは。その時私はまだ小さかったのですが、恐怖を覚えましたよ。家族が死んじゃうって」

「まあ、どうにか一命は取り留めたのですが、その代わりにフォトンを扱う力をダークファルスに取られて、ほぼなくなってしまうんです。今はそのリハビリをする為に病院に入院しているのです」

「お陰でどうにかガンストラ位は使えるようになったけど…やっぱりツインダガーが良いなあ…」

「ゲツテムハルト様とあの時はお揃いのファイターでしたからねえ…」

「…」

「…ユウナちゃん？ そんなにシーナさんのナデナデ気持ちよかったの？」

「えっ？ 何でだ？」

「だって…尻尾の勢いがなくなってるよ？」

「えっ！ うそっ！ くそっ！ これだからこの尻尾は！」

「…」

「ひゃん！」

「どうしたの？ ユウナちゃん？」

「な、なんでもない…」

「ユウナちゃん…もしかして性感帯さわっー」シーナ姉さん、それ以上はダメ。ここは外ですから」ーはいはい、分かったわよ」

「いてて…おいシーナ、本気で殴っただろオ。痛かったぞ」

「やっ」と再起動したゲツテムがシーナの隣に座る。

「よいしょっと…今日は俺の奢りだ。好きなモンを頼め」

「ほんと？ それじゃあ私このアンリミテッドウルトラゴージャスパーフエクトパフェを2つ頼むね！」

「おい待てディア！ お前まだ病み上がりだろ？ そんなのはー」奢りって言ったよね？」ー…男に二言はねえ…だがーディアからも頼む」

「そうですねシーナ姉さん、此処は5つにしておきましょう。ユウナさん達はどうします?」

「俺は…ダブルミルクバナアイスを…マトイは?」

「えっと…いちごクレープを2つお願いします」

「俺は…パンケーキで良いかアなあ…二人で5つも馬鹿デケエパフエ食べれるのかあ?」

「何言ってるの、ゲツテムハルトも食べるのよ」

「あのなあ…ユウナとマトイに関しては確かに奢らせてもらおうと言ったが…お前らア、限度つて奴、分かってないだろお?」

「もしかして…2つも頼んじやダメだった?」

「良いのよマトイちゃん。こう見えてゲツテムハルトは鬼の様にメセタを稼いでいるから…もし死んでも私達が生きれる様に…」後半がとてもし小さな…獣耳じゃなきや聴き取れない音量で言った。

まあ、アークスつて未開拓惑星に一番乗りしてその安全を確かめる組織だからなあ…他にダークファルス以下略を絶対に殺す組織でも有るが。

「はっ、メセタは有ればあるほど良い…10年前の借りは未だ返せそうにねエからな」

こつちもこつちで何かある模様。面倒だなあ…何だかんだ三人で幸せに暮らせよう…。

「ああ…とにかく…シーナ姉さんもゲツテムハルト様も食べましょう!溶けちゃいます!」

気がつくとテーブルにデザートが置いてあった。よく見るとテレパイプらしき物がテーブルに備え付けられていた。

やはり技術は雇用を無くすのだろうか…

「すいません、ゲツテムハルトさん、今回はご馳走になってしまつて…」

このゲツテムハルト…凄く厳ついが内心はとても優しいのでは? などと思う

「いや、お前…ユウナちゃん?だよな?ゲツテムハルト?」

アンタえのー」「ユウナちゃん?」ーゆ、ユウ：取り敢えず！投資だ！将来出来るアリーナで戦えるのを待ってるからなア！」

そう言い会計を払い走って行くゲツテムハルト。

「全く：素直じゃないんだから：ゲツテムハルトは」

「何だかんだ言ってゲツテムハルトは初心者に投資という名の施し？
賽銭？」

「ディア、それを言うならお小遣いって言って？」

「お小遣いって言うのも違うと思うな…」

厳つい顔してメツチャ良い人じゃないか！

「それじゃあ私達はこれで。病院を無断で出てるからサツサと戻らな
いと」

「最早病院の人達も半ば許してる気がしますがね…」

「はい。それではまた」

「ゲツテムハルトをこれからも宜しくね？」

そう言いメルラン姉妹は店を出て行く

ふとマトイを見ると既にクレープを2つ食べ終えて俺の方を見ていた。

「ああ、なんだ。片方溶けてるが：食べるか？」

「良いの？」

「最早溶けてるし：何より食べたそうだしな」

「ありがとう！」

アイスを食べているマトイを見ながら此れからを考える。

取り敢えず最初はアークス任務をこなしメセタを貯めないと：
アークスは万年人手不足だ。メセタの支払いは大盤振る舞いだ。

現状見つかった新たな惑星はナベリウスのみ。そこを重点的に捜
査することになるだろう。

マトイがアイスを食べ終わり店を出て家（と言ってもマンション）
に戻る。

「へえ…此処がユウナちゃんの家かあ…」

「まあ、何もないけど：ゆっくりしてくれ」

そう言いマトイはリビングにある二人用のソファに座る

「あつ、お帰りなさい。そちらの方は？」

そう言い白髪の小さな人が迎えて来る。

この子供みたくない人はサポートパートナー、ダーガー以外―原生生物やその他の所謂ダーカーに汚染されていない生物やシップ内の警備などに使われる―人だ。

「えつと、買ってきた奴とかどこにある？」

「はい、作業台の上にライフル共々置いてあります」

「弾丸は？マガジン数は？値段は？」

「D弾200発、1発140メセタトータル28000メセタ、通常弾300発、1発40メセタトータル12000メセタ。マガジン20個一個300メセタ6000メセタ。トータルは4万6000メセタです」

「つたく、何でこんなにレンジャーは金が掛かるんだ…」

「金が何だかは存じ上げませんが、弾と言う物を乱射する以上、メセタは掛かるものかと」

「つて言ってもだな…強いて言うならドラムマガジンが欲しい」

そう言いサポートパートナーがその小さな身体でノートパソコンを座っているソファの前に置く

「ドラムマガジンとは―ユウナさんが使っているA・C・A・R―mk5・mod・SmのこのA・C・A・R―3mod・Mmと言う奴ですね？」

因みにこのA・C・A・Rとは―Arks・Combat・Asart・Rifflの略で、

意味はアークス用戦闘用アサルトライフル。

原生生物から大型ダーガーまで使えるレンジャーのメインウェポンだ。7・62mm×51mmを使う。

…正直最初の任務で撃った時、初めて銃を撃った感激と共にトリガーを引けば命を取るつてことにとても震えた。

そして反動が肩にめり込んで痛かった…。

「ですがユウナさんのスナイパーモデルだとフルオートで撃つ機会なんてないと思いますか?」

そんな事を思い出しているとサポートパートナーのポイントが聞いて来た。

「ん……あ? ああ、念の為だ。無いと思うが撃ちまくれるように、な。何かあるかわかったもんじゃ無い」

「マガジンを5個返品し、acar3Mmを一個購入して来ますか?」

「ううん……どうしたものか……」

「えつと……ユウナちゃんは何をしているの?」

買うかどうかを考えている途中、マトイが話をかけて来た。

「俺が使う武器の改造。何を使うか考えてんだ」

「ううん……私はこれとか良さそうだな。カッコイイし」

そう言いノートパソコンの画面を指差す。

「ううん……ロケットランチャーねえ……重くてなあ、とてもじゃないが使えないなあ」

そう言い画面にはロケットランチャー、A・R・L・S・M | m k 3が写される。

ARRSSR正式名称はArks・Rocket・Launcher・Surface・to・Mulch・launcher | m k 3

アークス用地対面々ロケットランチャーの略で使用弾頭は……Dランチャーのみか。

「重量がなあ……30キロじゃ……動けないよ」

「そっか……」

そんな事を言っていると部屋のインターフォンが鳴った。

「んっ? 誰だ? ポイント、わかるか?」

「はい……ゼノさんとエコーさんです」

「よりよってあの先輩お二人か……中に入れてくれ」

「わかりました」

「ユウナちゃん? その、ゼノさんとエコーさんと言うのは?」

「ああ、最初の任務での試験官だったんだが……少しなあ。特にエコー

さんがー」「おおお！そっちが救出した人か！」ーはあ

こう言つちや何だが…この二人はともうるさい。一人だとうるさく無いんだが、二人となると…二人とも好きらしいんだがまだ言えないみたいだし…。

「ちよつとゼノ！ゴメンね？ゼノつたら煩くて」

「おいおい！エコー！うるさいとは何だ、うるさいとは」

「だつてうるさいじゃ無い。此処はユウナちゃんの部屋よ？ユウナちゃんもなんか言つてやつて！」

お二人ともうるさいんだよなあ…頼むから少し静かにしてくれ…

そう思っているとゼノさんが作業台の上に置いてあるライフルと弾を見つける

「おつ、やつぱりレンジャーになったか！いい事だ」

「まあ、ユウナちゃん達は私達第6世代と違って最新の第8世代だからいつでもクラス変更できるじゃ無い。良いなあ…」

「やつぱりゼノさんもライフルに未だ未練が？」

「ゼノで良いって。未練ってほどじゃ無いがな。10年ちよつと前の侵攻作戦時に…俺がもう少し早くゲツテムの援護に付けて少し早く援護を開始出来てれば…」

「でも、シーナちゃんを救えたんだから良いんじゃない。ゼノが遅れていたら死んでいたかもよ。あの戦いじゃ沢山死んでいるから…」

「まあ、そうだが…だから今こうしてハンターを鍛えてんだ。いざとなればライフルを捨てて前線（まえ）を支えるように、な」

十年前の戦いってそんなに酷い侵攻作戦だったのか…

「……って！違う！ゼノ！あれ持って来た☒」

「アレーーああ！そっちの方の退院祝いの品だ！貰つとけ」

「ああ、マトイって言うんだ。ほら」

そう言いマトイに自己紹介を促す

「マトイ…です。よろしくお願ひします」

「此方こそね！マトイちゃん！」

「おう！よろしくな！取り敢えず俺たちはこれを置きに来たただけだからそれじゃっ！」

「任務頑張つてねえ！」

そう言い二人とも部屋を出て行く。

何ともうるさいー良い意味で、だが。ー人達だ

「うるさかったなあ…マトイ」

「でも良い人のような気がするよ？」

そうかなあ…っと思っているとマグが喋った。

「現在時刻は12:00時です。食事を摂りましょう」

そう言えばだが、アークスシップ内の1日の時間は24時間、食事

回数は3回となっている。前と同じ感覚だが…さて、何を作るか。

6 話目 誰に？

現在時刻12:06分:昼の時間だ。

マトイもいる事だし三人前:何を作るか:

「ああ:ポイント、スパゲティ、あるか?冷蔵庫を見てくれ」

科学力が地球の3、4倍くらい有っても大体は同じだ。違うのは軍に関するものくらいか。

「はい、スパゲティならば少し前に買い置きしてあります」

「よし、煮るぞ。ソースは:トマトとケチャップを出してくれ、あと肉も頼む。マトイ!食べられないものとかある☒」

「えつとね:特に:無いかな」

「よし、それじゃー」ユウナさん、あの:」ーああ、玉ねぎか。分かってる」

ポイントが出した肉を鍋に入れて少し油を入れる。

少し炒めて赤い部分が少なくなってきたら缶詰めのトマトを入れて水分を飛ばす。

隣のコンロの上に水の入った鍋を置いて火にかける。

スパゲティの入った袋を破り大体取り出す。

取り出したらペーパーの上に置いておく。

水分が飛びそこに少しの塩胡椒を入れ、ケチャップを大量に入れる。

「よし:ソースは出来た:次は:」

手を洗い s h p i 4 5 産の野菜を水でサツと洗い皿に盛り付けー皿を出さなど。

「ああ、ポイント、皿をー」これで宜しいですか?」ーとって:オーケー。ありがとう」

水を切り皿に盛る。よし出来た。

「ポイント、向こうへ頼む」

「はい、わかりました」

そろそろ鍋の水が沸騰して来たのでアルミ製のザルを鍋に入れる。よし、サイズはピッタリーいや、少し大きいか?まあいい。

そこにスパゲティを入れて少し混ぜる。

20秒ほど混ぜたら蓋をして弱火にして五分ほど茹でる。

「マトイーもう少しでできるぞー!」

「はぁーい!」

「マトイさん、そちらの物には触らない方がよろしいかと…ユウナさんが少し泣きます」

「泣くのっ!」

一体何の話をしているのやら…:そう言いマクに五分たったら鳴るように設定してマトイの方を見る。

マトイが制作途中のアークス規製特殊大型戦術多目的戦闘機のプラモデルArk's. Special. Tactics. Multipurpose. Fighter4. AtMf4、通称モルガンと言われている。何でも設計者がアークス時に救援に来た友人の名前を借りたのかなんとかーを触ろうとしていた。

「待て待て待て!マトイー触っちゃダメ!まだ仮組み状態なんだから!」

と言ったって組んだところはまだ機首に入るTPS、戦術フォトンレーザーシステムを組んだだけだが。

「ご、ごめんね?」

「い、いや。その、でかい声出して悪かった。そうだ。マトイの部屋になる所を見るか?」

「ううん…ご飯食べてからじゃダメ?」

「…後ー20秒?んじゃ食べよっか」

ふと見るとポイントは既にテーブルに座り此方を見ている。早いな、おい。

とうるかサポートパートナー何だから手伝ってくれても…

『こんにちは。ニユースオラクルのお時間がやって来ました。本日のニユースは私、フラビンと、フマルがお伝えいたします。』

12:00のニユースをーあれ?今12:11分くらいじゃないか?

ふと時計を見ると11分ー今12分になった。もしかしてコイ

ツ…遅れてる…？

『お昼のニュース、最初のニュースは…此方。 s h p i 4 5、ナーミスにて大規模な野菜高騰、ですネ』

『はい。ナーミスはシップ全てを使った野菜製造船と言っても過言ではないですね。それで高騰した理由なのですがー』

取り敢えず時計は置いて、スパゲティを3つのお皿に盛りミートソースをかける。

「ええ…ああ…マトイ、すまないがこれを其方に持って言ってくれないか？」

「うん。分かった」

左手に野菜の皿を持ってポイとマトイの座るテーブルに置いていく。

次に俺のを持って行き座る。

何でマトイの皿があるかだって？

多分本来の持ち主がそう言う食器の趣味でもあったんでしよう。多分。

このサラダの皿だってオラクル船じゃ比較的珍しい木のお皿だし……これくらいしか判定出来ないけど。

『次のニュースです。オラクルのアイドル、クーナさんの来日ライブが組み立てられました。各シップのー』

クーナ…ねえ？

「クーナさんのライブだって…所で、ユウナちゃん？」

「んあ？何？」

「ライブって…何？」

「ライブとは…か…何だろうな？歌って踊るんだろう。多分」

「行きたいなあ…」

「って言ったって…絶対高いだろう。幾らすんだよ、このチケット」

「ユウナさん、今調べましたが、アークスであればタダで参加出来ますよ？」

「…マトイはどうする気だ？」

「少し待ってください。…そうですね、一枚のチケットにつき五人

招待できる様です」

「五人…まあ、居ないし…ポイント、行くか？」

「その日は丁度サポート会議があるので失礼します」

「…俺より交友関係良いよなあ…」

「もしもの為です。友はいた方がいいですよ？」

「俺に合う友が出来ればだがな」

「現状、同じ第八世代ではアフィンさんを除いて一人も出来ていませんからね」

「俺の指示に応えられるのがアフィンくらいなんだよなあ…現状はツーマンセルかなあ…」

「二人一組でしたか？いいじゃないですか。同じニューマン同士でお似合いですよ？」

「止してくれ、唯でさえこんなに胸がデカいんだ。そういう視線はもう飽きた。それに…」

「ビーストは…要らないだろ」

「…そうでしょうか？」

「…すまん、食事の時に変な話を…」ユウナちゃん？」「…どうした？」

「おかわり」

「…この短時間…」30秒です」「…30秒で？」

「だって、美味しかったんだもん！」

「そりゃ、嬉しいが…濃くなかったか？」

「ううん、全然！出来るなら後五杯くらい食べたい」

「…まるで空母だな」

「ユウナさん、軍事を齧った人にしかわからない事で例えないでください。空母の方が燃費悪いと思いませんか？」

「？」

「わかった。量は…多めでいいか？」

「うん、お願い。ソースも多めでね？」

「そう言いテーブルから離れもう一度キッチンに向かう。」

「スパゲティはまだ温かいし、ソースも同じ。大事だろう。」

「ソース：大量に作ってあるからいいが：まあ、こんなもんだろう」
皿にスパゲティを盛りローもう少しか。持った後にミートソースを多めにかける。

「…っし、これでどうだ？」

そう言いマトイの前に大盛りミートソースパスタを置く。

「うん！美味しい！」

「そりゃ良かった」

現在時刻は12：15分：だから10分引いて12：05分か。

俺は食べ終わったし：どうするか…。

ふと、マトイは自分の部屋の家具やその他諸々は要らない的な事を言っていた気がするが：でもなあ…

マグに手のひらに乗ってもらいホログラフィックロー今の使っているクラスや、現在時刻、所持メセタなどが浮かぶ。

「：15万メセタ：二人で暮らすには十分だが：しかし…」

マトイを見る。スパゲティを頬張って食べている。

「居住代は向こう（アークス）持ち、電気2万、水5000メセタ、食費…」

今は適当に俺が作るから5万くらいで済むが：二倍：四倍くらいか…？

などと思っているとマトイが食べ終わったらしい。

「ご馳走様！ユウナちゃん！」

「？
そういうや前回マトイを救出したんだっけ：いくら振り込まれた…？」

マグを操作し、メセタの残高を確認する。

「5000ちよつと：まあ、こんなもんか」

使っていない家具をマトイに使って貰うとして：さて、どうするか。時間はあるし。

「マトイはどっか行きたいところあるか？」

「無い。だって私此処のこと知らないし…」

「そっか：んじゃちよつと出かけてくるわ。なに、すぐ帰ってくる。変な人来ても開けるなよ？」

「う、うん」

「ポイント、頼んだ」

「分かりました。またプラモですね？」

「……アイデアと呼べーんじゃ行ってくる」

「うん、行つてらっしゃい」

そう言い玄関から出て行く。

取り敢えずいつもの様にゲートエリアからテレポーターに何個か乗ってシヨップエリアに来た。

シヨップエリアはゲートにて任務を受注したままアイテムとかの補充にこれる所だ。本来なら一度任務を破棄しなければならぬ所此処でのみ受注したまま歩き回れる。

中央には噴水的なモニュメントがありそこから水が噴き出ている。噴水の目の前に黒髪長髪の眼鏡をかけた……科学者？らしき人が佇んでいた。

「私は……謝罪する」

「……誰に？」

7 話目

「待っていた……君を」

「ああ……すいません、何方かと間違っていないませんか？」

「否、この表現は認識の相違がある。待たせてしまった、だろうか」

「――私の名はシオン」

そう言う科学者らしき服装した女性――シオンと言ったか。

「ああ――シオン、さん？すみませんが、私の記憶にはシオンと言う名前は……無いと思いますが……人違いでは？」

「私の言葉が貴女の信用を得る為に幾許かの時間を要することは理解している」

何かオレに理解できないことを話し始めたぞ……科学者は好きだがもつとフレンドリーに來なくちやなあて思う。

「それでもどうか……聞き届けて欲しい。無限にも等しい思考の末、私が見出した事象を……」

「私は観測するだけの存在。貴女には干渉が行わない、否、行えない」
黙って聞いている……なんか此方から話を切り出せそうに無いし。
てか何を話して居るのが分からない。

「だが、動かなければ――道は、途絶える」

「故に私は示す。あらゆる偶像を演算し、計算し――此処に表す」
「偶時を拾い集め、必然と為す。その物を――マターボードと言う」

そう言いシオンと言う女性の右手が光り、マグがダウンした。

「お、おい、何をした！」

「私は観測するだけの存在。貴女を導く役割を持たない……だが、マターボードが貴女を導くだろう」

此方の話を無視し自分の話しを続ける。

「……私の後悔が示した道が指針無き時の、標になる事を願う」

「未だ信用も信頼も得られずと推測する。貴女その思考はまさしく正常である。私もそれを、妥当と判断する」

「しかし、私はそれでも貴女を信じている」

「私は貴女の空虚なる友。何処にでも居るし、何処にも居ない。質問

はいつでも受け入れよう」

「まるでシュレディングアのネー消えた？」

猫、と言おうとしたら消えた…一体どうなってやがる。

「くそっ…一体全体どうなってやがる…ワープでもしたの catt?」

「おーい、相棒! どうした! そんな所で悪態ついて!」

そんな事を思っ居ると相棒…アフィンが走ってきた。

「ああ、アフィンか…確認したいんだが、シップ内でのフォトン関連は緊急時以外使用禁止だよな？」

「そうだけど…どうした？」

「いや…此処にいた科学者がなんか訳のわからん事をしていて…」

「此処には誰も居なかったぞ？」…「…はあ？」

「嘘はいかんよ、アフィン君。だって此処に居たじや無いか。証拠にマグに…くそっ、変な項目が追加されてやがる」

「どれどれ…：マター、ボード? マターボード? なんだそりや?」

「知るか。さつき言った科学者に渡されたんだよ。なんだよコレ…」

「見ろよ、相棒。此処に何か書いてあるぞ。何だ? アークス語じや無いな…」

そう言いこの言語…日本語を指す

「おいおい…日本語じやないか…どうなってやがる…」

「読めるのか? なんて書いてある」

「…：シヨップエリア二階に向かえ…だと」

「二階…行ってみようぜ? 暇だろ?」

「暇だが…まあ、買う物も無いし…行くか…」

「そうだ、相棒。アイス食うか?」

「バニラなら食おう」

途中でアイス屋によりアフィンはトリプルアークスアイス。オレはバニラカップを(奢りで)買ってもらい二階に向かう。

「二階…ああ…つかれたあ…もう無理…」

「相棒…アークスの癖して体力無いよなあ…よくそれでアークスになれたな」

「動かないスナイパーだからな。まあ、その気になればアサルトもマシンガンも出来るが」

「でも動かない中距離スナイパーなんだろう？」

「まあな」

そんな事を話して居ると前から緑色の服を着てメガネーアークスって関係者のメガネ率高い気が…気のせいかな？

「すみません！アークスの方、ですか？もしかして依頼を受けてくれる、とか…？」

「依頼…？どうする？相棒」

「うむ…済まないがお名前は？」

「ロジオ、と言います。アークスで地理学者をやっている者です」

「ううむ…なんも無いし…受けるか？」

「で、でも、相棒！やばい奴だったらー」

「あ、ありがとうございます！いや！本当に助かります！」

「依頼の内容は、惑星ナベリウスの調査をお願いしたいのです。何故かナベリウスだけ情報が少ないので…」

「アークスが最初に向かう訓練惑星みたいなものなのでもっと情報があっても良いと思ったのですが…不思議ですよねえ…」

「あつ、すみません、興奮してしまつて…」

そう言いこの男性ーロジオは眼鏡をクイッと上げた。

「依頼内容はナベリウスの地質調査。それだけです」

「ナベリウス…だって調査は終わったんじゃないのか？」

「いや、それよりもーアークスってこういうクライアントと直接契約しているの？」

「うーん…どうなんだ？」

そう言いロジオさんを見る

「ええ、大丈夫かと。何ならお二人に任務としてクエストカウンターに出しておきます」

「なら頼むわ」

「所で、何でロジオさんは、ナベリウスの地質調査を？」

「いえ…少し成り立ちが気になるというか…正直、カンの様なものな

のですが…どうしても調べて見たくて…」

「ああ…何で俺たちなんだ？オレら駆け出しの初心者だぞ？」

「他のアークスさんに頼もうとカウンターに出したのですが、既に調べ尽くされた惑星という事で余り良い返事を貰えませんでした…最も、出した時期も少し不味かった気もしいのですが…」

「そこに来ていただいたのが…えつとー」

「アフィンです。此方の銀髪がユウナです」

「アフィンさんと、ユウナさんです！」

「時間のある時で構いませんので！お願いします！」

そう言い頭を下げるロジオ、周りからはギョツとした目で見られる

「お、おい！良いよそんな頭を下げなくても！」

「分かった！分かったから！アフィン！2日後行くぞ。コレで良いか？」

「ありがとうございます！」

「んじや、オレ帰るわ。気を付けろよ」

「お前もな。んじや」

「おう、じやあな」

そう言いゲートエリアでアフィンと別れる。

とりあえずマグのカレンダーに、

2日後、アフィンとナベリウスに地質調査、依頼主ロジオ。

と書き込む。

「しかし…あの科学者、シオン、か。何だったんだ…」

訳のわからない事を言うわ、此方の話を聞かんわ、かと思えば渡されたーいや、マグに割り込まれたマターボードとやらには明らかにアークス語じゃ無い言語ー日本語だわ…絶対オレの正体知ってるだろ。

正直関わりたく無い…だが、何故オレがこの身体になったのかも聞きたい…どうすつか…

「前途多難だせ、トホホ…ってか」

取り敢えず今日は帰りーまで、確かプラモと銃器を見に来たんだっけか…でもなあ…

現在時刻13：14分――何だかんだ結構話して居んだな。
マツイにすぐ帰ると言った手前、帰らなくてはならんな。

8 話目

場所は変わり何時ものローと言ったってここに来てからまだ一週間も立って居ないがローマイルームに来る。

現在時刻は13:43分……長居しすぎたか。

「マトイ?居るか?」

そう言い俺は玄関のドアを開ける。

本来は自動ドアなのだが設定で手動にできる。その設定も中々めんどくさかったのだが……。

部屋に入り見るとマトイはソファに座ったまま寝て居た。隣を見るとポイントも寝ている。

「……寝たか……んじゃローあれ、食器類も洗い終わっている」

食器類を洗おうとロー言っても食器洗い機にそのまま入れて終わりだがローしたがどうやらポイントがやって居たらしく、既に片付いて居た。

「……ライフルに弾を込めるか」

リビング窓際の天井付き作業台に座りそこに放置してあったライフルを弄る。

この際、作っている途中のプラモは一度箱に戻し中断する。

ポイントが買ってきたマガジン20個とD弾200発、通常弾300発。それと全く使わないグレネードランチャーとその弾3発。

通常弾が100発余るから温度と湿度の低いところロー日陰に置いていて、マガジンを其々10個づつ作る。

本当は1発づつ交互にローD弾・通常弾・D弾・通常弾、と作ろうとも思っ居たが……それだと対ダーガー戦時に無駄な通常弾を使うし、対原生生物時には高いD弾を使うのもなあ……と言う感じでやめました。

通常弾1発40メセタに対して、D弾140メセタだけ?高すぎる。

そんな事を思いながらカシユ、カシユつとマガジンに弾を込めておく。

えっ？何で弾を込めっぱなしにしないのだった？

マガジン内のスプリングがーまあ、とても長い時間じゃ無ければ問題ないがーへたって薬室内に弾が送れなくなってしまうのよ。それが怖くてな。

などと思っているとマグに反応が。

「…メール？アフィン、か？」

「おいおい！相棒！知ってるか！遂にA・C・A・R以外のライフルが出るってよ！しかもレーザーだぜ！買うしかないでしょ！」

…との事だった。

「レーザーライフル？んなアホな…幾らアークスの技術が地球以上でもそんな…」

取り敢えずマトイ達の寝ているソファの前にあるノートパソコンを持ってきて調べる。

色々なサイトが出てきたが…これか？

「…R・C・S・O・P製の新型レーザーライフル…R・S・Rーレーザースナイパーライフルって捻りも何もないな…射程3キロオーバー、専用バッテリーで200発撃てる…うーん…とてもじゃないが…本当に狙撃専用って奴だな」

オレがサイトを見た感想がそれだった。

確かにレーザーライフルはカッコいい。特にーまあ、アークスに殆ど、いや、ビースト以上は居るが、キャストが持っているのも良い。

特にヒューマンベースの利き腕だけを機械にしたハーフキャストや、全身機械にしたフルキャスト…中々イイ。

と言うか体に似合わず大型兵器を持っているのを見ると心が躍る。まあ、ある種それがロケットランチャーなんだけど。

取り敢えずノートのサイトを消し、マトイ達の前のテーブルに戻し、もう一度弾込め作業を再開する。

そこから十分と少し。どうにか通常弾のマガジンは入れ終わり、次はD弾って時に、又マグにメールが来た。

「なんだよ…D弾終わるまで待って…」

内容は…なにになに…ナベリウス寒冷地帯の服装？

「んなの…あつたかい格好して行けって話だろ…てか考えてくれ」
あんな内股の開いた服を着ているアフィンって寒く無いのだろうか？いや、絶対寒い。

今度聞いてみるか、などと思いつつも一度マガジンに弾込め作業を再開する。

更に十数分後、通常マガジン10個とD弾マガジン10個が完成し、今度はライフル本体のバレルの掃除を始める。

いつもの様に安全装置が付いていて且つ、絶対にトリガーが引けないかどうかを確認する。

チャージングハンドルを少し引き中に弾が無いかを確認、その後誰もいない方向へ出来れば水の中に銃口を向けてトリガーを引く。

全く引けずに安全装置が掛かっているのを確認したら、作業台に戻りバレルの先端部分へハイダーって名前だったか？まずガンオイルと呼ばれる専用のオイルを適当に流し込み、布を巻いた棒を入れて奥からくるくる回しながら手前に引く動作を5回ほどやる。

ライフリングにガンオイルが塗られて、多分、きつと良いんでしよう。

本来だったらここから更に完全分解するのだがいかせんオレはそれだけではできない。いや、やれないことはないのだが…多分、きつと元に戻せない。

拭き終わったら布を水につけておき、これにてライフルの超簡易クリーニングは完了。

多分エアガンより簡単かも知れない。

そう思いながらマガジンを並べて銃も近くに置いて立体鍵を掛ける。

これは空間そのものを箱にしてロッカー見たくするものだ。解除するのも本人が必要だし、信頼性は高い。

それからマトイ達の寝るソファの隣に座りもう一度テレビー極小音且つ字幕ー無論アークス言語だがーを付ける。

番組は…アニメに各種惑星の状況、各シップの事件、事故その他諸々、後武器のニュース…とか？

しかし…何度見てもそうだが…このガンスラッシュって言うなの
ガンソード…御し難いなあ…

「普通に銃とソード持った方が強度高いし融通効くだろう…」

そんな事をして初めてのマトイとの夜は更けていった。

9 話目 朝飯

「ユウナちゃん？おきてー！」

「んあ…ああ、マトイかあ…すまん、後一時間くらい頼む…」

マトイに大声と手で揺さぶられ仕方なく起きようとするも、いやいや、この布団のお陰で中々出れずに二度寝しようとする。

「早く朝ごはんつくろー？私お腹空いちやっただ…」

「んあ…てか昨日俺らソファでそのまま落ちた気が…ああ…そうだ、起きたんだ…」

昨日そのままソファ落ちて、二、三時間して俺が前に倒れて起きて、マトイとポイントをベットに置いたんだっただ…そうだ、忘れてた。

「ああ、待ってくれ、今起きつからーああ、少し出てくれないか？」

「えっ？何で？」

「いや、その…ねえ？」

「ユウナちゃんが下着姿で寝てるから？」

「ちよ、おまつ、なんで！はあ?!」

「あれ？さつき起こす時に触ったよね？その時になんか服を着ていないなあーって思ってた」

「マトイ！絶対に！絶対！誰にも言うなよっ！良いね！」

「？何で？別に隠すものじゃない？」

「俺が嫌なの！ったく、誰がこんな巨乳ケモミミに生まれたかったかってえの！」

見る分には良いんだがなあ…等と思っているといきなりマトイの目から…えっ！涙?!

「ご、ごめんね？そうとも知らずにこんな事を…ゴメンね、ゴメンね」

「お、落ち着けマトイ。た、確かに俺も悪かった。悪かったら…ねっ？だから泣くのやめよ？」

そう言いベットから出る。

「う、うん、こっちこそごめ…」

マトイが此方を凝視してー特に胸を見て止まった

「どうした？何かある？何か欲しいのあるの？」

「…ユウナちゃんって…大きいんだね?」

「だから出たくないんだよ…もう良いや」

そんな事を朝から言いながらリビングに向かう。

そこには既に服を着たポイントが朝食の準備…と言ったってテーブルを拭き、各種皿を置いていくだけだが。

「おはようございます。ユウナさん…その様子だとマトイさんに見られたのですね?」

「ああ、もう嫌だ…こんなの…」

「私は幸運だと思いますよ。それとマトイさんもここに住むので就寝時は服を着た方が…」

「なんかそれだと寝れない」

「そ、そうなんだ…因みにユウナちゃん?今日の朝ごはんは?」

「取り敢えず…スクランブルエッグいつものシップ45産のモーニクスレタスとトマト…はいらないか。マトイはトマト居る?」

そう言いコンロ横の大型冷蔵庫からレタスを2つと新鮮な玉ねぎとトマト、いや、ミニトマトか。それが入った箱を取り出す。

「ううん…欲しいかなあ」

「ポイントは?」

「3個ほどお願いします」

玉ねぎを薄くスライサーで2つほど切って、そこに手でレタスを干切ってドレッシングをかける。

かけた後に、あ、これ向こうでかけるか、かけないか聞けば良かったな、と思っただがもう遅い。

そこからさらに手で揉み、お皿に盛る。

「後は…ウインナーと卵やるか」

鍋に水を入れて火にかけ沸騰するまで待つ。その間にフライパンに油を入れて同じくあつたまるのを待つ。

米は…くそつ、炊くのを忘れていたか!

仕方なくオーブントースターを使い薄い食パンを8枚中に入れ十分ほど表面がきつね色になるまで焼く。

なに?今更だが玉ねぎは毒じゃないかって?

大事だろ。多分。いざとなればメデイカルセンターに行けば良い。そうこうして居る間にフライパンがあつたまってきたので、卵を5個ほど割り掻き混ぜて、少しだけ牛乳を入れる。

「…よし、そろそろかの?」

掻き混ぜた箸についた卵を少しだけフライパンに垂らしすぐに焼けたらそこに全て放つ。

ジュワアアアつとフライパンと卵が叫びひたすら卵をかき混ぜる。

此処で完全に固まったら負けだ。

今度はお湯が沸騰したので空いて居る左手でウインナーを15本放り込み、蓋をする。

「ポイント?今から五分!」

「分かりました。五分ですな?」

そしてスクランブルエッグの完成。3つの皿に適当に盛ってトマトをサラダの横に乗せる。

「ふあ…後はウインナーだけか」

いや、待て…パンがまだじゃないか。

そう思いトースターの方を見ると…良い感じにきつね色になってきた。

冷蔵庫にあるマーガリンを取り出しテーブルに持っていく。

「ユウナちゃん?これ何?」

「マーガリン。持ってくるパンに適当に塗ってくれ」

もう一度キッチンに向かいパンの状態チェック…よし。良いぞ。

横に長いお皿にパン8枚を乗せてテーブルへ

「マトイとポイント、パンにマーガリン塗つといて」

「分かりました」

「うん。分かった」

もう一度キッチンへトンボ帰り。後はウインナーのみ。

蓋お開けて見ると…なんだ、もう浮いて居るじゃないか。

そんな事を思うとポイントに呼ばれた。

「ユウナさん、五分経ちました」

「よし、もう少しだから待ってくれ…」

3つの皿に5本づつ乗せてテーブルへ持っていく。

ポイントとマトイのを先に待って行き自分のは最後に持っていく。その前に今まで使った鍋とフライパンを水を溜めたオケの中に入れて急速に冷やす。

「よし…出来た。さあ、食ってくれ。」

「う、うん」

そう言いマトイがフォークを握った瞬間、俺とポイントが手を合わせている。

「頂きます」

「頂きます、ユウナさん」

「…えっと…ユウナちゃんは何をしたの？」

「んっ？ああ、ご飯を食べる時の…なんて言うんだ？儀式？」

「私もやった方が良いのかな？」

「…良いんじゃない？」

「うん。それじゃあ、頂きます」

「頂きます」

10 話目

食事を食べ終えマトイを残してロジオからの依頼を受けるためアフィンに招集をかける。

「ああ…」

マグを通じてアフィンに招集をかける…がさて、なんて書こうか…
ここは…そうだな。

「任務開始する。大至急クエストカウンターに来られたし」

「…こんな感じで良いだろ」

ライフルをカバンに入れてクエストカウンターのあるゲートエリアに向かう。

このアークスが最初に住むこの居住区からクエストカウンターまではそれ程遠くなく、頑張れば1人でもいける。

通路は広めに取っており車が横に3台ほど通れるくらいに広い。此れならば緊急時でも全力でカウンターに向かえるであろう。

そんな事を思っているとマグに反応が。

なにになに…まあ、アフィンからだよな。内容は…

「なにになに…歳の離れた妹が泣きだして今日は行けそうにない…アイツ妹居んのかよ…」

ツーマンセルの予定がソロになった…さて…

「…即席で誰か探すか…」

レンジャー、特にオレのような中距離にソロはキツイ…。

「すいません、ユウナさん。今回せる方は居なくて…」

「そうですか…分かりました。ロジオさんの依頼を1人でやろうと思
います」

「……分かりました。ロジオさんにも連絡を入れておきますね」

「すいません、よろしく願います。ええ…ああ…」

「あつ、申し訳ありません。セラファイと申します」

「ああ、此方こそ。ユウナと言います」

「それでは任務のご成功を期待して居ますね」

そう言いピンクの髪をした女性——管制官、セラファイと別れた。カウンター直ぐ左の搭乗用通路をまっすぐ進み任務番号——45を探す。

「45…45…42、43からの44…これか」

よく見るとアークス言語でオフラインと書かれている。

惑星間超光速空間湾曲航法機、キャンプシップが止まっている。大きさは100メートル無いが、中に生命装置やオラクル船団と繋がっているオンラインシヨップ、オレ達アークス達が見ている戦場をこれもまたキャンプシップを通じてオラクル船団に送る機能。

これも所謂フォトン複合エンジンなんだろうなあ…などと思っているとオフラインという文字が消えてオンラインとなった。

本当だったらゼノさんと呼ばうとしたのだが…マグで聞いたら今エコーと共に長期任務に出て居て手伝えないとの事。うーん…ゲツテムハルトは…少し無理かな…。

などと思っているとオレの後ろに大型のフルキャストが並んだ。

確かオレ以外に乗らないはずだが…

「済まないが君はユウナ、という名か？」

「そ、そうですが…貴方は？」

「私か…そうだな、ベイスズと言う。ロジオと呼ばれる方から貴女の援護を要請されましたな」

「そ、そうですが…今回はよろしくお願いします」

「こりや礼儀のなってる嬢ちゃんだ事。此方こそ宜しく」

そう言いフルキャスト——ベイスズさんは言った。長いからシズで良いだろうか？

「構わんよ、中々言いにくい名だろうからな」

しまった、声が出て居たか。

「ああ、すいません。えっと…シズさん？」

「何だろうか？」

「その…クラスは一体——」

何ですか？と聞こうとしたらオンラインからオープンに変わり通路が開いた。

「それはキャンプシップに行ってから話そう」

キャンプシップのパイロットーリスキーなんて名前の人らしい。どうやらこのシズさんと旧友の中らしい。何でもリスキーさんはアークスに成れず、それでも友と仕事がしたくてアークスのキャンプシップパイロットになったとか。

「それでな？今ではコイツもこんなになったが、昔は凄かったんだぜ？」

「止してくれ、あれはもう昔の事だ」

「いやな？誰だつてあんな登場の仕方されたら惚れるわ！俺は漢だが」

「えっと…どんな状況だったんです？」

「ユウナさんまでー」「良いじゃ無いか！あの時の状況はなー」

そう言いリスキーさんは嬉しそうに話す。どうやらリスキーさんはシズさんに命を救われたらしい。

「10年前の若人襲撃時に俺はコイツじゃ無い機体に乗ってたんだがな？AAC型ダーガーに落とされてなあ…ベイルアウトしたんだが其処がもう最前線でもうね」

「あん時の闘いは本当にキツかった…何度死ぬかと思ったか…」

「んで、司令部からの通達で前線を押し上げてダーガーを撤退させるって来たわけだ。当然俺も参戦したんだが…フォトンが無くてなあ…足止めしかできなかったよ」

「其処に私 came たわけだ」

「いやあ…あん時程持つべきは友って思った事はないね。断言出来る」

「その友に幾らかしてるんだ？」

「……そ、それは良いじゃないか。後で返すから…」

「……」

そう言いリスキーさんはシズさんに目を合わせなくなった。

どんなに借りているんだよ…

「まあ、こんな奴だが根は多分良い奴だ」

「多分って…」

「リスクー、凍土地帯には後何分で着く？」

「待ってくれ：此方シエルダー12、管制官、ワープ航法の使用許可を
求む」

『此方管制官、ワープ航法使用を許可します』

「了解、管制官。ワープ航法開始……：よし。後はオートで着く」

「いつも思うんだが：管制官との通信って居るのか？」

「まあ、一応報告は上げるべきだし？通信も向こうも見てくれるで
しょう？」

「それはそうだが……」

「因みにだが到着時刻は今から十分後だな」

「案外ナベリウスって近いんですね？」

「いやいや、キャンプシップがワープしてるからであって実際に通常
光速で行ったらそれこそ数年かかるよ」

「そうなんですねぇ……ワープって便利ですねえ……」

光の速さって音速の何倍なんだろう……

11 話目

「コンタクト、シズさん、11時方向30メートルにガルフ4、サウーザン3、ウーダン2、やり過ぎしー」「突撃あるのみ!」ーええ…」
ライフルの安全装置を外し、初弾を薬室内に入れて凍土を少し進んだ所で原生生物の群れと接敵。やり過ぎそうとしたら、原生生物の群れに1人で突撃して行った。

幾ら近接職の戦闘服にはオートメイトって言う特殊機能が付いて居るからって…そんな突撃しなくても…。

シズさんは左手にナツクル、右手にダガーを片方ずつ装備して居る。左ナツクルで倒れたガルフにトドメを刺そうとして居るシズさんにウーダンがシズさんに追撃をかけようとした所を空いている右手のダガーで頭からサクツと…。

「エグすぎない…?」と言うかこの原生生物からD因子を確認出来ないんだけど…」

マグを見るとスキヤナーには緑ーD因子反応無しと出ている。

『念の為に殺そう。これで退路を断られたら溜まったもんじゃない』

そんな事を口走って居ると少し離れた所で交戦して居るシズさんから通信が入った。

「まあ、それはそうですけど…と言うかシズさん、話しながら戦えるんですね」

『まあ、喋ってないからな。喋る口も無いし』

「えっ…あ、キャストだからか」

『頭で考えた事をそのまま伝えられる。結構便利だぞ?』

スコープを通してシズさんの動きが見えるー確かに頭部に口らしきパーツは無い。

「…キャストって便利ですねえ…」

『いや、そうかと思えばそうでも無いぞ?』

「えっ?どう言う事です?」

『それはこの群れを倒してからにしよう』

「援護は必要ですか?」

『腕を疑うわけでは無いが…今回は良い』

「分かりました。頃合いを見てそちらに向かいます」

『了解』

そう言いシズさんは通信を切った。狙撃は必要ない、か…

「そんなに信用ならんか…？」

『まだルーキーに背後を助けてもらうわけにはならんって事さ』

「…聞いてましたか…？」

『言つたら、フルキャストは並みの聴力では無いと』

初めて聞いたんだよなあ…と言う言葉を飲み込み、シズさんが原生生物を倒し終わるまで待つ。

5分くらいして斬撃音や打撃音が聞こえなくなった。

『終わったぞ』

「分かりました。そちらに向かいます」

ライフルのフォアグリップから出ていた二脚を畳み、スコープ横の倍率弄る丸いボタンを回し等倍にする。

念の為、射撃モードをフルオートー ー使うことはないと思うがーに切り替えておく。

「流石に少し遠い、かな？」

「いや、大丈夫だろう…ここいらで地質調査でも開始しようーロジオさん、聞こえるか？」

『はい、感度良好。問題なしです』

「えっと…それで何をすれば…」

『取り敢えず簡易採掘機を転送します。それで2メートルから3メートルほどの土を持ち帰ってきてください』

「分かりました。では、シズさん。始めましょう」

「分かった」

転送された採掘機を組み立てるのは案外簡単だった。と言うか半ば組み上がっていてそれらをくっ付けるだけだった。

「よし…こんなもので良いか。そっちはどうだ？」

「これで…くそっ！サツサと閉まれ！」

ガンツ！と足で蹴って、痛さでその場で座り込む

「いつてえ…んだよ、この硬さ！」

「ああ…大丈夫か？」

「ああ、大丈夫…の筈」

シーンとなり会話が無くなる。

「ああ、さつきと話の続きだがー」

「えつと…フルキャストの利点と欠点でしたか」

「そうだ。利点は言ったように並み以上の聴力と腕の精度ー特に狙撃なんかで役に立つな」

頭で考えた事がそのまま腕に行くし、考えた言葉も通信機を通していえるしな、と付け加えた。

「では、逆に欠点とは？人の身体を失う事ですか？」

「まあ、それもあるが…強いて言うなら子供を作れないって事だな。一番の欠点だな。他はどうにかなる」

「他っていうーあつ、土取れた」

シズさんと会話していると採掘機が上がってきてそれがキャンプシップを通して、シップに転送される。

「そうだ。念の為俺も持つておこう」

「それで、続きだがー待て…ダーカー反応…？凍土エリアはもう駆逐された筈だが…」

「えつ…本当だ。どうします？」

「確認しに行こう。念の為」

「でもこの数…異常ですよ？」

「ふむ…一度キャンプシップに戻り救援を要請しよう。何、十分と少しで戻ってくる」

そう言いシズさんはキャンプシップに戻った。

……………ー

本来ならソロは自分で禁止してるが…行ってみるか。その内ソロでも出来るようにしないと…

ライフルのストックを腕と体の間ー所謂腰だめーにしていつ

でも撃てるようにトリガーに指を掛けておく。

ふとトリガーに指を掛けた時、そう言や撃つ用意したの最初の任務以降かなあ、などと思ったが接近されたら死ぬのは確定に近いのでゆっくり、かつ確実に向かう。

――

「ダーカーは……方位はどっちだ……マグ、方位を」

「視認している方位は89度、東です」

マグに確認してもらいゆっくりと進む。

「どうなってる……ダーカーが集まる反応と言や……ダークファルス……？」

そしたら俺1人じやますます無理、撤退を考えたその頃、何処かで聞いた声が聞こえた。

『……に、創……ク……』

「くそっ、ECMでも食らってんのか……俺に似てるアイツに聞かなきやならん事があるのに！マグ！逆探！」

「分析、分析……ここらか3キロ先に反応あり」

「2・7キロ……遠っ。俺はガリガリの室内系なのに……行くしかない、か」

――

マグが示した地点に近付くにつれ割り込み通信もハッキリとする。

『クラリツサを、創世……を壊さ……いと。』

「なんだ？創世……器？創世器って確か……俺らの武器のプロトタイプ？」

いや、プロトタイプはスペックが低かった筈。こういうのは確か実験機って言うんだっただか。確か。

『んっ？今の声は……貴様か！』

「やべっ！バレた！」

てかダークファルスもこっちの通信拾えてんじゃねえか！通信網ズタボロじゃないか！

『此処で貴様を殺せば奴は！闇は生まれぬ！』

「闇ってなんだよ！くそっ！」

そのまま前に走った所、上からソードが飛んで来た。少し前までいた所に深く刺さる。

「おい！俺は聞きたい事があるんだ！少し話せるか？いや、話せ！」

「断る！貴様とマトイを殺し、世界を、救う！」

「殺すだあ！俺はまだ何もやってねえよ！」

そう言い彼女はソードを突き立て俺に向かってくる。

ライフルを肩に背負い、足に付いている緊急用の低威力コーンと言うか超小口径のハンドガンを全弾、彼女に向かって撃ち放つ。

彼女は足を止めてソードで撃った弾をガードする。

「おいおい、こっちは中距離職なんだ、そこんトコロ、考慮してもらっちゃダメですかねえ？」

「……くそつ、彼女に貰ったソードが……まあ、どうせ直るが……」

「こっちの話は無視かよ」

左脚にある小さなナイフを握り、スライドストップしたハンドガンを入る。右足に入れる。

後ろからライフルを手に取り、ナイフを持った手で保持、彼女に狙いを定める。

「おい！そろそろ答えてくれないんじやないですかね？俺はこっちに来て不思議でしやあないんだ」

そんなことを言っていたら彼女に動きがあった。トリガーに掛けている指に力が入る。

右手に持っていたソードを左手に移し、彼女も右手にサブマシンガンを持ち出した。

「おいおい……それはキツイんじゃないの……？」

『おい！ユウナ！何処にいる！返事をしろ！』

通信が聞こえるがもう何を言ってるのか分かんない。

「くそつ！やるしかないか！」

アークスの任務って楽な任務じやないのかよつ！と、内心悪態をつけながらーいや、帰ったら盛大に付いてやる！

「はあ、はああ……」

大きく深呼吸して、息を整える。手が震えるが……やってやるさ。

「get. ready?」

「ふっ：アークス言語じゃなく、英語かよ。ああー」

「you. ready! 殺してやるさ!」

「you. ready! 絶対吐いてもらうぜ!」

12話目

後ろに去りながらライフルをフルオートにして敵目掛けひたすら撃つ。

毎秒10発の小口径弾が敵を襲う。だが此方は本来狙撃モデル。マガジン内には20発しか入ってなく、それをも2秒ほどで撃ち尽くす。

敵はダークファルス。効くかどうかは分からないが、此処で温存していたD弾を銃に込める。

20発を撃ち終えライフルをマガジンキャッチを押しながら右にスイングしてマガジンを飛ばす。

マガジンなんて拾っている場合じゃない。下手すりゃ死ぬ。

飛ばした後、そこにD弾が入っているマガジンをセット。ボルトキャッチを押ししてリリース。

チャージングハンドルが前に動き、それと同時に薬室に初弾が入る。

光学照準器を除き、ダークファルスに合わせてトリガーを引く。

「ツチ、痛いじゃないか！楽にやろうと思ったんだがな」

「痛いなら俺が聞きたいことを言え！いや、聞け！なんでお前は英語をー」

そう言うとき敵は右手のソードをシールド代わりにして左手のsmgで俺に攻撃を仕掛けて来る。

「ふつぎけん！俺は逃げながら撃てねえんだよ！」

「ならさっさと死ね！」

「死ねしか言えねえのかよ！お前が死ねや！」

「んだとっ！」

逃げながら岩を飛び越え、後ろに隠れて、ライフルのみを岩から飛び出させて撃つ。当たらなくても良い。

「ほお…チキン戦法しか取れないのか？」

「中距離職にしか威張れないのか？」

そう言い4個目のマガジンをセットする。

今度は二脚を立てて確実に狙う。

そう思った時。敵が何かを言っていた。

「来いよユウー、怖いのか?」

「ああ、そうだ、怖いんだよ!だからー」

敵はソードを下ろした。行けるか?

「頼むから!引いてくれ!」

「だろうと思ったよ!」

そう言い敵は左に走り弾丸を回避する。

フォアグリップを持ち腰に抱えて弾幕を張る。

弾が切れたらマガジンキャッチを押しマガジンを落とし、挿入し、

ボルトキャッチを押し弾幕再開。

これを後何回やれば終わるー?」

お互い肩で息を吸いながら相手を見る。

あれだけあったライフルの弾は尽きた。ハンドガンはスライドストップしたまま手に握つてあるだけだ。

弾も元々少なかったが…。

多分相手もそうだろう…:そうであれ。

相手はソードを両手で持ち此方をみたままだ。

今手元にあるのは小型の軍用ナイフのみ。とてもじゃないが…戦えない。これ以上の交戦は不可能だ。

多分…俺は此処で死ぬだろう。女になって少しは楽しかったが…まあ、良い。多分死んだ身だ。

ハンドガンを捨ててナイフを右手に構え直す。一刺し出来ればこちらの勝ち。出来なければソードに貫かれて俺の死亡。

「……………」

「……………」

脚に力を入れていざ特攻、と思ったその時。

「おーい!相棒ー!」

「おーい!ユウナちゃん!ドコー?」

「ユウナー!聞こえたら返事をしろ!」

何処かで聞いたことのある声が聞こえた。

「ツチー！増援か！此処までのようだな」

そう言い目の前の敵は逃げようとする。

「待て！お前はー！お前は、何者なんだ！」

「……ダークファルス、仮面「ペルソナ」。私は名前はユウナーーお前と同じだよ」

一瞬ノイズが走りペルソナの仮面が取れた顔が見えた。

「俺、と同じ？」

「いや、別次元のお前だな、それでは」

そう言い敵ーペルソナは赤い闇に包まれ何処かにワープした。

「ペルソナが…俺？俺は……」

近くの岩に体を任せ座り、上を見上げ空を見る。

それから暫くしてシズさんが呼びに言っていた救援ーゼノさん、エコーさん、そしてアフィンが救援としてやってきた。

そしてあつて早々ゼノさんに怒られた。

なんでも俺の通信のみノイズがかかり、管制官ですら大まかの位置しか割り出せなかったらしい。

その後エコーさんに抱きしめられた。

曰く初心者アークスの殆どが開始一年以内に命を落とす。その理由は大体が実力に伴わない任務を選びそのままM・I・Aー戦闘中行方不明になるらしい。

あとエコーの胸結構大きかったです。

その後シズさんに何と交戦していたか聞かれた。

鬼の様に破かれた戦闘服を見ればさすがに分かるか。

取り敢えず新手のダークファルスと一人で交戦した、とだけ言っておいた。

アフィンは兎も角、他三人がギョツとして今すぐ帰還しようと言ってきた。

訳を聞いたら、とてもじゃないが今の戦力じゃヒューナル体ですら交戦厳禁との事。だかペルソナが話していた創世器……もしかした

「この辺りにあるのでは？」

「アレを奪取出来ればアドバンテージを得れる。」

「三人をどうにかして説得して先に進むことにする。」

「あつ、そうだ。ユウナちゃん、今武器ないよね？」

「あつ：はい、弾も全部撃ち切りましたし：」

「ユウナが撃ち切るって：いや、ダークファルスなら仕方ないな」

「ゼノ？ユウナちゃんにガンストラ貸してあげたら？」

「アレを？別に構わないが：」

「そう言いゼノは手元のデバイスを弄り後ろについているナノトラ
ンサーからガンスラシューガンスラッシュを出す。」

「性能は低いが：無いよりはマシだろ」

「ありがとうございます」

「取っ手部分を握る：悪くない。」

「ああ、そうだ。それ、弾は入ってないから本当にソードモードしか使
えないぞ？」

「そう言い誰もいないところで振り回す。」

「右に、左に、上から下に、下から上に：」

「大丈夫です。なんとかかなりそうです」

「ところで相棒、その創世器ってどの辺にあるんだ？」

「ダークファルスが向かおうとした先にあるでしょ：多分」

「よっしゃ！んじゃ進みましょう。シズ、援護頼むぜ！」

「言われんでもするわ！」

「あれ？シズさんとゼノさんって知り合いなんですか？」

「ああ、ゲツテムと喧嘩して帰りに寄るバーによく居るんだよ」

「私は元から知ってるがな、こいつとゲツテムは何処であっても喧嘩
する」

「そうなんですねぇ：」

「内心、キャストってどうやって酒を飲むんだろう。いや、まず飲む
酒は酒なのか？と思ったのは俺だけでいい。」

「ちよつと！あれだけお酒はダメって！」

「ハイハイ、エコーは少し黙れって。これは所謂飲みニユケーショ

ンって奴だよ」

違うと思うんだがなあ…

アフィンに担がれながら進む事二、三分、それらしきものが見えた。

「お、おい相棒…あれー」

「ああ、多分、これが奴の言っていた創世器…の筈」

ロッド型の先端が雪に半ば埋もれ先端部分が光っている。

「だがどうする。創世器は私達は持てないぞ?」

「だよなあ…回収しようにもなあ…」

「アフィン、俺をアレに近づけてくれ」

「おい、行けるのか?」

「やるしかなからう。頼む。近づけなきゃ、担いでた時俺の胸をガン見していたのを許さん」

「…分かった。あと、見ていたのは仕方ないだろ…そんな巨ー」良
いから近づけろ」ーはいはい」

そう言いロッドらしき武器に近づき手に取るーってあれ?

「おい、アフィン…こりゃ、先端しか無いぞ?握る部分が無い」

「…本当だ」

「回収出来たか?出来たなら帰還しよう」

「早く帰りましょう?何処からダークファルスが来るか…」

「大丈夫だって。怯え過ぎなんだよ、エコーは」

ゼノさんがテレポーターを出しキャンプシップへの道を作った。

「良かった…これで帰れる…」

「ああ、なんだ、ユウナ?」

「ああ?」

「おつかれ様」

「おう、疲れたからなんか奢れや」

13 話目

「こりゃ…クラリツサ。創世器、白錫クラリツサじゃ…しかしなぜ貴様の様なアークスが…？」

至急アークスシップに帰還し、メデイカルチェックを抜け出し、迪々しい足取りで、アフィンと一緒にシヨップエリアにある武器修理施設ペアーリの長、ジグさんに会いに来た。

「相棒…いや、ユウナちゃんがナベリウス凍土地域にて発見したので、創世器の開発者であるジグさんに渡そうかと思ひまして」

アフィンがスラスラと喋る。ふと見るととても手が震えて居た。そんなにジグさんが怖いのか。

握ってやろうかと考えたが辞めた。握ったら倒れる。

「しかし…何故この様な…先端部分しか無いのだ？そもそも白錫クラリツサは数十年前の戦いで無くなったはず…」

「ああ、そうなんですか…取り敢えず此れは渡しときますよ？」

デバイスを操作し、真正面にホログラムを展開、クラリツサを探し、ナノトランサーから出そうとする。

「待て…クラリツサは君が持つて居てくれ。なに、先端部分しか無いからフォトンには吸われん。大丈夫だ。問題ない」

そう言いジグさんはクラリツサの先端の受け取りを拒否した。

「しかし…無くなった創世器を回収して来てくれた事に感謝するのも事実。そこで、だ」

そう言いジグの赤い瞳が光る。

「何か礼をさせて欲しい。出来る事なら何でも良いぞ？」

「それは…武器でも、ですか？」

「そうじゃ。なにが欲しいんじゃ？」

「…射撃武器で格闘戦から狙撃まで出来る完璧な武器を、出来れば下さい。無理なら良いです」

「格闘戦から狙撃まで…ふむ、所で完璧などと言う武器は存在しないのを知っているか？」

「それでも…やらねばならんです。彼女を倒し、訳を聞くには」

「……ふむ。のう、お主ー」

そう言いジグさんがこちらを見る。アフィンを見ると俺とジグさんを交互に何度も見ている。

何秒か考えジグが音を発した。

「ガンスラツシユじゃ、ダメかの？」

「ダメです」

そう言いジグは武器ケースからガンスラツシユを取り出し俺に渡す

「何故じゃ？ガンスラツシユこそお主のー格闘戦から狙撃もできる武器じゃないか？」

シップ内なので勿論フォトン刃は形成されないし弾も入っていない。

ガンスラツシユを一度握り、すぐに離してジグに返した。

「格闘戦と狙撃が出来てもばら撒きーハンターやファイターの撤退時の援護が出来ません」

「ふむ…困ったの…」

「ああ…ジャバズプに付いているガトリングーアレを小さくして持てないか？」

「…お主は自分がニューマンって事を分かった上で言つとるのか？今は無理じゃよ」

「儂みたいなフルキャストなら使えたかもしれないがな、と付け加えた。

「うーん…それじゃ、今回の話は保留で。また何かあつたら来ますわ」

「まあ、ガトリングの小型化は考えておく」

「アフィン、すまんがメデイカルセンターに戻るぞ。怒られたらたまらん」

「だったらチェック終わった後に来れば良いのに…」

「はいはい、終わったら俺の胸を見てた事忘れっからー多分な」

「おまつ、今多分って！」

「はいはい、さっさと行くぞ」

儂の第一印象はーそうじゃな、中々良いアークスを見つけたなつて所じゃな。

あの年で後方職とはいえライフルをまともに扱えて、ダーガーとも一人で交戦可能ー中々、良い人材を見つけたものじゃの。

ここ最近のアークスと言えはたかがダーガー一匹に対し4人以上で袋叩きー儂が戦えた時代から去つていようとも、じゃ。

そう思い儂は一人でウンウンと頷く。

まあ、それは兎も角。

「なんで今頃クラリツサが出てきたのかのお…」

儂はつい修理の手を止め考えてしまう。

そもそもだ。あれは10年以上前のー。

「ジグサーー！頼んどいたソード直りました？」

「おう、今待つとれ！」

取り敢えず、仕事を片付けなければな。

「んだよあれ、何で脱がなあかんの？」

「えっ？相棒脱いだのかよ！」

メイカルセンターでチェックも終わり、いつぞやのカフェ、ラフリにて休息を取っていた。

「おい馬鹿！声がデカイ！」

そう言い脚を思いつき蹴る。

「っー！相棒もデカイから…ッ、イッテエ…」

そう言いアフィンはテーブルにひれ伏す。

「…まあ、なんだ、その、すまん。今回は助かった。ありがとう」

そう言い頭を下げる俺。実際問題、彼処で救援が来なかったら死んでいたかもしれない。本当に援護来て良かった。

「あ、ああ、いや、知らないフルキャストから緊急メッセーじじゃなかつたら行けなかつたよ。妹にも聞いてもらえたし」

「ああ、そうだ。妹だ。妹って何歳なんだ？」

「俺の妹は俺に不釣り合いなほど可愛くつてな？もうほんつとヤバイ

「んだよ！」

「お、お前いきなり、てか歳ー」

「聞いてくれよ？この前もな？お兄ちゃん大好きってな？もうほんつと、もう何が言いたいかって言うのと妹ヤバイ」

「お前、シスコンかよ？」

「いや、妹だけじゃない！俺にも姉が居てー」

居な、まで言つてアフィンが首を横に振つた。

「おいどうしーた？」

急にアフィンが下を向きボソツと言つた。

「俺の姉は…元気、だろうか…」

とても、小さな声で、ボソツと。

席を立ちアフィンに近づく。

「おいアフィン」

「…ああ、相棒、すまー！？ちよ、何を！」

アフィンに抱きつき耳元で言う。

「何が合つたのかは知らん。だから何も言えない。だが、お前が相棒つて言うように俺もお前の相棒だ。何かあつたら言え」

「ちよ、ユウ、相、む、胸、があ！」

「おお、すまんすまん。わざとだ」

「お、おま…」

「まあ、なんだ、何時ものアフィンに戻れよ。あんなしみじみとしたお前なんぞ見たくもない」

「あ、ああ…その、ありがとな」

「礼を言うのはこつちだ。彼処で援護に来なかつたら死んでたからな」

「…その…突然話は変わるが…」

そう言いアフィンが目を逸らす。此処で感想を言う気か？

「何となく読めるが…なんだ？」

「凄く、柔らかかったです」

「そうか…なら今日は奢りだな」

「…ある意味役得なのかもしれないな。別に良いぞ？」

「んじや最後にアイス頼むわ。お前は？」

「ああ：俺もそうするかな」

…アフィンは気づいて居ないかもしれないが……

抱きついた手前、周りがなんか、こう…フワフワした雰囲気になったような気がする。

14話目 アフィンから見る相棒

「んだよあれ、なんで脱がなあかんの？」

そう言い隣の相棒ーユウナは嘆く。

ああ、そうだ。俺の名はアフィン。訳あってアークスやってる。

「えっ？相棒脱いだのかよ！」

相棒のそのー色々ヤバイ体型でか☒

ーダメだ、落ち着け俺。確かに相棒はダーガーが居なければアイドルークーナさんみたいな風にはなれたかもしれない。

ふと、巨乳の人は着痩せする、と言うのをフォトンワークで調べた気がする。

まさかと思うが…相棒、着痩せしてないよな？

同じレンジャーとして気になるレベルの巨乳を一瞬見る。

「おい馬鹿ー声がデカイー！」

相棒がさらにデカイ声で言い、相棒の脚で思いつき蹴られた。

「っー！相棒もデカイから…ツ、イッテエ…」

相棒の着てる戦闘服でーーと言うか女性陣の戦闘服は基本的に足首鋭いんだから…マジでーーイッテエ…

テーブルに突っ伏す。痛みを堪えていると相棒が小さな声で言い始めた。

「…まあ、なんだ、その、すまん。今回は助かった。ありがとう」

顔を上げて相棒の方を見ると視線を下にしながらー少し頬を赤く染め、相棒が礼を言った。

相棒の特徴の耳と尻尾がーいや、此処からじゃ尻尾は見えないなータレている。

普段は頭の上のミミを真っ直ぐに伸ばし、どんなに俺が小さな声で言っても声を拾って何かしら言うミミが、垂れていた。

初めて見たなあ、などと思うのと同時に、可愛いなあ、と思う。こう見えてユウー相棒は結構人気である。

同時に反ビースト派からは敵にされているが…果たして本人は知ってーーいる、のか？

「あ、ああ、いや、知らないフルキャストから緊急メッセージじゃなかったら行けなかったよ。妹にも聞いてもらえたし」

取り敢えず、緊急で来たメッセージを見て驚いたのを覚えている。本音を言うと気が気じゃなかったが。

あの時は遊んでいた妹を急いで母に預け法定速度ガン無視で飛んだ気がする。

今思い返せば警備員に捕まなくて良かったな。

そう思っていると相棒が口を開いた。

「ああ、そうだ。妹だ。妹って何歳なんだ？」

「俺の妹は俺に不釣り合いなほど可愛くってな？もうほんつとヤバイんだよー」

「お、お前いきなり、てか歳ー」

「聞いてくれよ？この前もな？お兄ちゃん大好きってな？もうほんつと、もう何が言いたいかって言うのと妹ヤバイ」

「お前、シスコンかよ？」

「いや、妹だけじゃない！俺にも姉が居てー」

そう言い頭の中でー本当に小さな頃に死んだって聞かされた姉の姿ーと言ったって今の自分より遥かに小さい姿だったがーを浮かべた。

「俺の姉は…元気、だろうか…」

そもそも本当に生きているのだろうか？俺の感は、自分で言うのもなんだが鬼と様に当たる。

だが…今回だけは自信が無い。

居なくなつてから早10年以上。少し、涙が出てくる。

俺は兄として妹に接して来た。だが…そのお陰か甘えるつという事が出来なかった。死んだ姉を思ったらとてもじゃないが両親に甘えられないつて。

「おいアフィン」

そんなことを考えて居いると相棒が俺の名を呼んだ。

「…ああ、相棒、すまー！？ちよ、何を！」

いつのまにか下を向いて居たので顔を上げ、呼ばれた方向を見る

と、急に目の前が真っ暗になった。

「何が合ったのかは知らん。だから何も言えない。だが、お前が相棒って言うように俺もお前の相棒だ。何かあったら言え」

感觸的に俺がちよくちよく見て居た相棒の巨乳、という事が分かったーじゃねえ！

確かに考え込んで居たのも悪かったかもしれない。だけどね？だからって抱きつくのはどうかって話ですよ!!？

凄く良い匂いだけど！ずっと嗅いで居たいけど！それじゃ俺が犬だよ！

「ちよ、ユウ、相、む、胸、があー！」

両手を使い倒さない様にゆっくり押す。正直、今夜はイロイロと撈りそうだ。

「おお、すまんすまん。わざとだ」

そう言い後ろの尻尾をブンブン振りながらこつちを見て安堵する相棒。そのわざとで下半身が少しやばい。

「お、おま…」

「まあ、なんだ、何時ものアフィンに戻れよ。あんなしみじみとしたお前なんぞ見たくもない」

「あ、ああ…その、ありがとな」

正直色々と元気を貰えた。このありがたいは本心で言っている。

「礼を言うのはこつちだ。彼処で援護に来なかったら死んでたからな」

そう言い相棒はもう一度席に着きメニユーを取る。

さっきの手前、何も話せる事が無い。何か、何か話さなければ…

「…その…突然話は変わるが…」

そこまで言っってはっ、思い直す。これ言ったら俺蹴られね？つと。

「何となく読めるが…なんだ？」

一方の相棒はメニユーの肉類の所で指を指しながら何を選ぶか迷っている。

「凄く、柔らかかったです」

「そうか…なら今日は奢りだな」

パタンツ、と閉じてメニューを俺に渡す。奢りか…色々今日は合つたし、別に良いかな？

「…ある意味役得なのかもしれないな。別に良いぞ？」

「んじや最後にアイス頼むわ。お前は？」

「ああ…俺もそうするかな」

メニューをサラツと見て取り敢えずステーキを食べようかと思える。時刻は午前11強、早めの昼食だろう。

サイドメニューにパンと野菜を頼もうか。

「アフィン？良いか？」

「良いぞ？相棒は何食うんだ？」

「えっと…ハンバーグアンドステーキでしょ？ライスでしょ？」

「相棒、ライス食べれるんだな。てか程々に頼むよ？」

「大事だろ？それとー野菜はアフィンのを一口貰えば良いや。後最後にミルクアイス…これは譲れん！」

「誰も譲れとは言っていないよ。それじゃ呼ぶぞ？」

そう言い辺りを見渡し店員を探す。

「アフィン、俺から見て10時、店員居るぞ？」

相棒から見て10時ー右後ろか。

「すいませーん！」

「はーい、少々お待ちをー！」

そう言いこちらに来る店員。

「ご注文はお決まりですか？」

15話目 アイス

「ううんまあいい、この手に限る」

ナイフでステーキを厚めに切り肉を口に入れる。

ジュワーつと肉の旨味がもう：

もぎゆもぎゆと噛んで飲み込み次はハンバーグ、とナイフで切ろうとしたらアフィンがガン見して居ることに気が付いた。

「おい？アフィン？どうした？」

「ああ…いや、可愛いなあーっあ、いや！違うからな？」

そう言いアフィンは手を前に出し左右に振った。

違うって意味か？

「おいおい、俺は同性愛者じゃないんだ。ちゃんと、女に告る事だな」
全く、アフィンは何を言ってるんだか。まあ、ぶっちゃけアフィン、残念な所が有るがな。

そう言いハンバーグを切り口に運ぼうとした時、俺が忘れて居たことを言う。

「いや…俺も同性愛者じゃないし、それ以前に相棒…女の子じゃん」

「…ふえ？」

口にハンバーグを入れ噛もうとした時にアフィンに言われた。

もぐもぐとハンバーグを飲み込み、もう一度アフィンに聞く。

「んっ…はあ、で、誰が？」

「相棒が」

「俺が？」

「女の子」

「…ああ、あああ…そうだった、忘れてたあ…」

そう言い俺は目を手で隠した。そうだ、そうだった。忘れていたわ。

「思うんだけどさ、相棒って、戦闘以外は基本からつきし？全然だよな」

「よせ、それ以上はイカン」

「最初の頃なんか俺が任務の確認に行くと大体裸だからなあ…」

「よせ、外で言うな！痴女扱いになるだろ！てか部屋ぐらいそれで良いだろっ！誰もーポイントが見てたわ」

「……まさかと思うが、今は部屋着、着てるよな？」

「そう言い俺のことは見るアフィン。」

「マトイと一緒に住むとは言え、正直裸で寝たい、と言う気持ちはある。」

「あ、ああ……着てる。着てるさ」

「……寝る時だけ脱ぐってオチも無しだぞ？」

「ッ……！」

「はあ……相棒、頼むから警戒心を持ってくれ。幾らこの船団がそう言うのが中々ないと言ったって、警戒する事に悪いことは無いんだから」

「あ、ああ……」

「だからミルクアイスは無し」

「はあ!?？」

「ううまあい、この手に限る」

「そう言い相棒は大きく肉を切って口に運ぶ。でかく切りすぎて口に入りきらないのか口から肉が飛び出している。」

「皿の上に三つほどあるパンを一つ取り中心をナイフで切り、その中に野菜と細く切った肉を入れて口に運ぶ。」

「その間にも相棒はもきゅもきゅ言いながら肉を口の中に運んでいく。」

「気がつくともミミはピンつと立ち、尻尾も中々揺れて居た。」

「実家でやると母親に怒られるが、腕の皿をテーブルに着き、もう片方の手でパンを食べつつ相棒を見る。」

「そこで視線が合い相棒が口を開いた。」

「おい？アフィン？どうした？」

「喋ると犬歯が見えた。やっぱりビーストなんだなあ……頭撫でたらー殺されそう。」

「ああ……いや、可愛いなあーっあ、いや！違うからな！」

「慌てて手を前に出し防戦体制をとる。相棒の事だ。ぶっちゃけ痛

くは無いが、グーが飛んでくるぞ！

などと思いついて待っているとグーは飛んで来なかった。

「おいおい、俺は同性愛者じゃないんだ。ちゃんと、女の子に告る事だな」

そう言い相棒はもう一度ナイフを持ち、今度はハンバーグにナイフを入れた。

また大きくハンバーグを切り口に運ぶ。

「いや…俺も同性愛者じゃないし、それ以前に相棒…女の子じゃん」

相棒…何を言ってるか自分でわかってるのか？相棒の尻尾はピーン、と真っ直ぐに立ち、相棒の目は俺を見ている。

「…ふえ？」

そう言い、手に刺さったハンバーグを口に入れもぐもぐと食べた後口を開く。

「んっ…はあ、で、誰が？」

「相棒が」

「俺が？」

「女の子」

「…ああ、あああ…そうだった、忘れてたあ…」

そう言い本当に忘れて居たと如く目を手で隠した。

「思うんだけどさ、相棒って、戦闘以外は基本からつきし？全然だよな」

「よせ、それ以上はイカン」

そう言えば時折入る相棒のこの、変な語尾なんだろう。イカン？ダメってことか？

「最初の頃なんか俺が任務の確認に行くと大体裸だからなあ…」

正直下半身がもう、もう…ねっ？凄かった。帰りは前屈みで途中でトイレに寄ったわ。

「よせ、外で言うな！痴女扱いになるだろ！てか部屋ぐらいそれで良いだろっ！誰もーポイントが見てたわ」

自分で大声で言うのか…意味が分からん。

「…まさかと思うが、今は部屋着、着てるよな？」

「あ、ああ…着てる。着てるさ」

そう言い相棒は俺を見るーが俺が見るべき場所はそこじゃない。頭の上を見るとさつきまでピーンと立っていたミミが寝込んでいるし、尻尾を見ると全然元気がないーさては脱いで寝てるな？

「…寝る時だけ脱ぐってオチも無しだぞ？」

「ッ…！」

そう言うときミミと尻尾が同時にピーンと立つ。

「はあ…相棒、頼むから警戒心を持ってくれ。幾らこの船団がそう言うのが中々ないと言ったって、警戒する事に悪いことは無いんだから」

光も大きい小さくても何処かに闇がある。頼むから本当に警戒してくれ。

「あ、ああ…」

「だからミルクアイスは無し」

そう言い相棒が好んで食べるアイスの注文を取り上げる。

「はあ!?!？」

「へいへいへい！それは無いんじゃないか☒」

ダメだ、ミルクアイスだけは…甘い物だけは、無いと、ダメだ。

「お、おいーああ、分かった、ラクトアイスで勘弁ー」

「それもダメっ！ラクトはなんか、こうーなんか違和感があんだよ！濃厚じゃないって言うか！」

なんというか…牛乳感が無い？そういう事を力説してもなかなか分かってくれないアフィン。

「はあ…わかった。分かったから。ミルクアイス頼んでいいよ」

「イエヤア！」

「その代わり、付き合ってくれ」

「アイス、アイーはっ？」

アフィン、お前は何を言ってるんだ？

16 話目

「んだよ、付き合えって買い物ー妹のかよ」

「そうだよ。男の俺より相棒の方が良いだろ？」

「つたつてなあ…俺はこんなヒラヒラした服とか髪飾りつて言うんだっけ？そんなのを買う気にはなあ…」

棚にある服の値段を見てびっくり。んだよこれ、装備一式更新できる値段じゃないか。

「俺とてそんな高いのは買わないよ。買えて髪飾りだな」

「中々妹思いな事で」

「相棒はどうだ？妹とか居るのか？」

「……………どうだかな」

「どうだかつて…居るだろう。親ぐらい」

「アフィン、君が聞くか？それじゃ聞くが、ビーストは何故生まれる？」

「そりゃ、原生ーあつ」

「そういうこつた。親は産んで死んだ」

小声で多分な、と付け加えてな。正直言つて親関連はすっかり忘れていた。後で調べて見るか。

「その、すまん」

「良いさ、さつさと買つて帰るぞ。これなんか良いんじゃないか？俺は帰つて寝たいんだ」

「んな相棒、そんな簡単にー」

「寝る予定はキャンセルよ。ユウナさん」

「えっ？」

「んっ？ーああ、そーいやメディカルセンター抜け出したんだな。相棒は」

「そういう事。という事でユウナさんはメディカルセンターに戻りますよ」

そう言い戦闘用ナース服を着た女性、フェリアさんが俺の手を繋ぎ戻そうとした。

「大丈夫、やる事はお話と交戦したダークファルスの事とマトイさんのことを聞いて終わりだから」

「ちよつ、まつ！アフィン！助けてえ！」

「ああ、とりあえず、これを買うことにするわ。ありがとなあ」

そう言いアフィンは俺が適当に選んだ髪飾りを持ってレジに向かった。んな殺生な……てか殺生の使い方あつてるのか？

「はいはい、ユウナさんはあるーけえますか？」

「歩けはしますが走るのはちよつと」

「とりあえずメデイカルセンターに行きましょう。車も有りますし」

「ーそれで交戦した、と」

メデイカルセンターにフェリアさんの運転で到着し、相談室的な所で交戦した敵に対して話す。

フェリアさんの手元には音声レコーダーが。変な所で古風だな。よく見りや足元にアタッシュケースらしきものあるし。

「はい。ダークファルスーそいういやペルソナって名前でしたね。ペルソナを見て最初は撤退しようと考えたのですが……回り込まれました」

「そのペルソナは、私達アークスが使う武器に似た物を使っていたのね？」

前の報告に書いてあるけど……、フェリアさんは手元のパソコンを弄り報告書を書く。

「はい。ハンターのソード、テクターとフォース共用のタリス。そしてsmgです」

「ソードにタリス、ショートマシンガン、ね？にしても良くこれほどの武器を使えるわね。アークスなら一つの武器にフォトンを覆うだけでも精一杯なのに」

「は、はあ」

パソコンをタップする音が聞こえる。速度的に結構早いーてか、えっ？対ダーガー武器つてフォトン覆うだけなの？んじや通常弾にフォトン覆えばー

「そう言えばライフル弾は中にフォトン充填しないとダメなの忘れて

たわ」

「ーダメか。」

「良いわ。取り敢えずマグは既にカウンターに提出済みで、こっちに預かってあるわ。データも取ってあるし。けど…」

「けど、どうしました?」

「ペルソナとの交戦中のデータが壊れているのよね…音声は無事でも途切れ途切れだし」

足元のアタッシュケースをテーブルの上に置き開ける。

中からは俺のマグが。

「一応マグの検査はー簡易的だけどしてあるし、それに各種データもノーマル、つまり異常なし」

「……」

「まあ、ペルソナの話は置いてーいやね?アークスとしちや、置いとちや行けないけど…マトイさんは元気にしてる?」

「マトイーあつ、一回も会ってね」

やべつ、マトイの奴大事か?これ今すぐ帰った方がいいか?

「まあ、その様子だと大事そうだし、マトイさんのために今日はこの位にしときますね」

「恩にきります。フェリアさん」

マグを追従モード、マグの標準モードにする。

「良いってことよ。早く帰ってマトイさんに会ってやりなさい」

「っしやーんじやーまたー!」

そう言い家目指しメデイカルセンターを走って抜ける

背後から走つちやダメよお〜!っと言われたが走らなければーいや、怪我してっから走つちやダメじゃん。

勢いを付けたものそのまま減速し、歩いて帰ることにする。

クエストカウンター通ってサツサと帰つか。

カウンター隣のテレポーターを使い住んでいる家に向かう。

少し前ならポイントしか居なかったが…今はマトイが居るし、なんだがなあ…。

「と言うか…マトイに連絡一回もしてなくね？」

思えば任務受注時すらしてない。

なんか言われそうだなあ、等思いつつ自室前につく。

インターホンを自分の家で有りながら押して中を確認する。

『…はーい。今出ます！』

そう言いインターホンからマトイの声。良かった。特に何も変わりはないか。

扉が開かれ1日振りの再会となる。

「ああ…少し振り、マトイ」

「……良かった…お帰りなさい」

そう言い抱き着いてくる。マトイも胸大きいなあ…。

そのまま中に入り現状の確認をする。

最初マトイも女の子だから家の中片付いて居るでしょ、などと思っ
ていたが…

「まさか…これ程とは…」

リビングはチリ一つ（多少は有る）無く、マトイの部屋となる所も
一通り掃除が済み後は家具を置くだけ。

俺の部屋も服が散らかっていた所が全て畳まれタンスの中にしま
われて居る。

「ユウナちゃん帰ってくるの遅かったから…心配したんだよ？」

ふと見ると今のマトイの服は救出時来ていた服では無い。

「そーいやマトイ、その服どうした？」

「パソコンで調べて買ったの。似合う？」

マトイはパソコンを指を指す。

「パソコンで…？ノートの方はネット繋げていたっけ？」

「ねっど？それってP・O・Sじゃ無いの？私調べたよよ？」

「ああ、P・O・Sか、そうだ、そうだ。ー似合ってるし可愛いよっ。」

そう言うマトイは笑顔で笑う。ああ、可愛いなあ…。

「にしても今回の任務遅かったよね？何かあったの？」

「いやあ…少し面倒な敵に襲われてねえ…本当ダークファルスってク
ソだわ」

「ドーダークファルス？」

「どうした？何か知ってるーあつ」

最初にペルソナと会った時に聞こえた無線が頭を過る。

『マトイを殺さなきゃ…世界が、ヤツに壊される。』

マトイを殺す？世界がヤツに壊される？

あの時はヒヤツハーしてたから考えられなかったが…そもそも何故ペルソナはマトイを殺そうとーそうか、ヤツが、ヤツに世界が壊されるから？ではヤツって何だ？

「…そもそも何故ドーダークファルスであるペルソナが世界を壊すのを防ぐようにする…？」

アゴに手を乗せ考えてしまう。

「そもそもドーダークファルスとは自分のダーガーを使いD因子で有機無機汚染するヤツ。汚染されたらフォトン以外じゃ現状は戻らない」

「ダーカーの上位がドーダークファルス…壊そうとするヤツが、何故世界を守る？」

「ユウナちゃん？大丈夫？」

「…ああ、クソツ！頭痛くなって来た。てか色々痛い」

「全然大丈夫じゃない！ど、どうしよ!?？」

「大丈夫だ。服を全部脱いで寝ればこんなの治る。ビースト舐めんな」

「それ以上にユウナちゃんは羞恥心をしってえ!?？」

戦闘服を脱ぎリビングのソファを占拠する。

「済まんがマトイ、何か適当に作ってくれないか？腹が減った」

「分かったよ。でもユウナちゃんみたく作れないよ？」

「何でも良い」

「う、うん。それじゃあやってみるね？」

17 話目 お粥

「えっとー和風ダシに塩と…あとお米？」

ソファに横になりながらマトイヤーありやエプロンか？このご時世に？ーがお粥的なのを作るのを見て、目線をテレビに向け、何かやっていないかを確認する。

『ヴァイパー製レーザーライフルー』

そういやレーザーライフルなら弾代とかも要らないのだろうか？でも確か大気で威力がウンタラカンタラ…後で見に行くか。次。

『明日の規定天気は朝6：00から9：00まで晴天、9：00から11：30迄曇り、11：30から16：00までまた晴天、16：00から24：00まで曇りでしょう』

そういや船団だと細かに天気が変わるんだよなあ…唐突な雨に注意しなくても良いっていうのも良い。

『ーはい、緊急速報です。アークス惑星調査隊のD・ヴァリアント船が新惑星、マキナにて消息を絶つたとの事です』

『元々アークスはこういうこともありますからねえ。無事だと良いのですが…フマルさんはどう考えます？』

『そうですねえ…まず消息を絶つたとの事ですが、アークスが普及的に使うー便宜上、シップと呼びますが、コレが壊れた等破損するのは珍しいです。それこそ新惑星から攻撃をー』

なんだか知らないが新惑星が発見されるのと同時にそこに行った調査隊が消息を絶つたらしい。

『ー何でも私のつて曰く「惑星マキナではフォトン係数が現状確認されない。もしかしたらダーガーなどのD因子を持つ物体が居ない可能性がある」と言っていましたし…』

『もしや惑星マキナにはフォトンを検知して攻撃をする。何か。がある可能性が？』

『その確率はあると思いますよ、フラビンさん。最も私達は専門家では無いので何も言えた義理では無いですが…』

『D・ヴァリアント船の船員が無事である事を祈るばかりですね。そ

れでは次のニユースです』

惑星マキナー行きたくねえなあ、そんな所。

『ーそれでレギアスさんのアークスでの役職とは一体何なのでしようか?』

『私の役目はアークスと、船団が生きていける事、それがー』

「ユウナちゃん!何かそれっぽい出来たよお!」

ニユースに質問番組、果は武器紹介などのテレビ内容を見ているとマトイがお玉を持ちながら言ってきた。

「取り敢えず何か分からないからマグで調べて入れてみたの」

お椀に入っているお粥ー丁寧にも梅干しらしき物が鎮座している。

「ああ、すまん。よいつしよっ」

「ああ、手を貸すよ!」

「すまんなマトイ」

ソファに寝た状態からマトイの手を借りつつ座り、スプーンをー
「…なあ、マトイ?こりやなんだ?」

お椀の手前にはスプーンでは無く箸が置いてある。どう食べると?
?

「何って…はし、だよ?」

キョトンと首を傾げつつ口に人差し指を当てる。まさか現実でこんな物を観れるとは…可愛い。

「…すまんがスプーンを持って来てくれないか?箸じゃ無理だ」

「…あつーゴメンね?今持ってくるから」

そう言いマトイはキッチンに撤退する。何だあれは…アレが天然物の天然なのか?

「にしても…」

マトイも料理は出来るんだな。てつきり記憶喪失だから何かハマをやらかすかと思っていたが…。

「ハマをやらかしたのは俺だったがね」

「ゴメンね!スプーンと…後オレンジジュース!そして私の分!」

マトイも反対の席に着き遅めの晩御飯を食べることにするー待

て。

「そーいやマトイ？ポイントは？」

「ポイントさんなら警備員に仕事しに行ってるよ？」

「…いつから？」

「ユウナちゃんが出発してすぐに」

「ああ…なら大丈夫かな？」

「それより早く食べようよ！」

「そ、そうだね。それじゃ、頂きます」

「頂きます」

「頂きます」

「そう言えばいつも気になっているんだけどポイントちゃんのそのイタダキマスって何？」

「ああ、癖で出てしまいましたか。サポートしているユウナさんのご飯を食べる時のーおまじない？ですよ」

「おまじないねえ…」

「そうです。おまじないですよ」

マトイが作ったお粥を口に運ぶ。

どろりとしたお米と少し塩気のある味がする。

「…ハフ、ツグツ、はあ…暑くて美味しいよ」

「ユウナちゃんにそう言われて嬉しいよ」

マトイもお粥を口に入れハフハフしている。

スプーンを置きテレビのリモコンを取り又他の番組を探す。

『ー新発売のフォトン粒子を使用した新しい防具ー』

『ーではマキナ船が消息を絶ったー』

『ー本部に連絡を！ヤツは、ダークファルスは、未だ生きてー』

防具にさつきも出てきたマキナ船の消息事件、そしてアークスとダークファルスが戦うアニメ。見たいものは何もやってないな。

テレビを消してリモコンをテーブルに置く。

スプーンをまた持ち、お粥を口に入れる。

「うん美味しい」

「ーーーー」

自分の料理が上手いと言われご機嫌なマトイが台所に立ち食器を洗っている。

一方俺は対ペルソナ戦時に壊されたライフルに代わる武器を探すためにノートパソコンとは別の、ディスクトップの電源に手を付けた。

「ヤツは全距離戦えるはず…」

近接ソード、近から中距離SMG、遠距離タリスの3つ。

「……対抗しようにもソードだけじゃSMGで負ける。SMGじゃソードで詰められる。タリスは…何か別の能力ー」

そう言えば初戦時、ペルソナが撤退する時タリスでワープみたいなのしていたな。

何故武器を使ってワープを…?

「ペルソナと同じスタイルで行くか…?」

右手ソード、左手SMG…はダーカー戦を兼ねる為に威力ー貫通力の点でダメだ。

「使っていたライフル、あれをショートバレルに出来ないか?」

A: C: A: R | m k 5 ショートバレルと打ち込む。

ー検索結果無し。

おかしい…何故だ?

ー! ああ、アークス言語にすんの忘れてた。

もう一度、今度はアークス言語でショートバレルと打ち込む。

検索結果…よしビンゴ。

「……ってひたすらロングバレルにする事しか書かれてないじゃん…」

確かに今まで出てきたダークファアルスは基本大型ー中にはヒューナル体と呼ばれる人間大の大きさになった奴もとても少ないが確認されているが…。

「……バレルぶった切っちゃダメ…だろうなあ…」

してどうするか…取り敢えずもう一度同じライフルを頼もう。マガジンとその他パーツも有るし。

18 話目

「はあ…やめだやめ、やってられっか」

パソコンの電源を切る。第一、ライフル持ちが近接に喧嘩売る事自体おかしいんだよなあ…。

「と言ったって向こうから来るし…一層の事ペルソナー…ダークファルスと同じ戦い方するか?」

だがなあ…1つの武器にフォトンを纏わせる以上、2つの武器は持てない。

「…俺の筋力で持てるかなあ…ソード」

ソードじゃなくても…ナイフよりデカくてソードより小さい近接武器。

「日本刀…あれば斬撃に難有りだしなあ…」

「ユウナちゃん、食器洗い終わったよ?」

「ん…ありがと。うーん、どうするか…」

食器洗いが終わりエプロンを取ったマトイが近づいてきた。横になつていた体を座らせ、俺の隣のソファに座らせた。

「どうしたの?そんなに悩んで?」

「ああ…もしさ」

「んっ?」

「もしマトイが俺と一緒にアークスやれてそんな時…いや違うな、もし遠距離から敵を倒している時近付かれたらどうする?」

「うーん…近づかれない様に敵を倒す、とか?」

「…じゃあ一人でヒューナル体のダークファルスを倒す時は?」

「うーん…持てる全ての力を使って倒す…とか?」

「もし接近されたら?」

「どうしよつか。一層の事殴る?」

「ダークファルスを殴るとか…俺の筋力じゃ 1ダメすら出ないよ」

「それじゃあ…えっと、うーん…」

「難しかったか?」

マトイが何か案を考えている。テレビを付け何かやっていないか

探す。

『ーそれですね、今回見つかった惑星マキナとそれに続いて発見された惑星、名称はリリーパ、でしたか?』

『はい、この惑星リリーパはその殆どが砂漠で覆われている惑星で生物にとつてはまさしく地獄でしょう』

『砂漠は昼と夜で温度差がとても有りますからね:しかし何故惑星リリーパ、なのででしょうか?』

『未だ情報は有りませんが何でもこの惑星には会話可能な生物がいるとの報告があるそうで...』

『しかし私の方には何も情報は来ていませんよ?』

『ええ、最初に乗り込んだアークスからの情報でして:未だ不確定要素なので回ってきていないのでしよう』

『成る程:我々オラクル船団にいい恩恵が来ればいいのですが:』

惑星リリーパ:砂漠の惑星。暑いだろうなあ。

「リリーパだつて。きつととても暑いんだろうなあ:」

「絶対暑いだろうなあ:行きたくないなあ:」

などと思っているとブザーが鳴った。時計を見ると20:01分:こんな時間に誰だ?

「すまんマトイ、出れるか?」

「うん、待っていて?」

そう言いマトイが玄関に向かう。ソファに横になりながらテレビの続きを見る。

「はーい、開けます。:えつとゼノさんとエコーさん、でしたか?」

「おう!ユウナはいるか?」

「ユウナちゃんにまたお見舞いの品持ってきたの。本当は帰ったらすぐに渡そうとしたのだけどゲツテムハルトさんがね:」

「はい、ユウナちゃんなら中でーあつ、少し待って下さい?」

:もしかしてゼノさんとエコーさん中に入るつもりか?

今の俺、戦闘服のインナーしか着てないぞ?

「ユウナちゃん?ゼノさん達中に入るらしいけど...?」

「よく来た。手伝ってくれ、さつき脱いだ戦闘服を着なくちゃならん」

聞こえていたのか玄関の方からゼノさんの声がする。

「ゆつくりで良いぞ！何ならインナー姿でもー」

「ちよつとゼノ。声が大きい」「イッテ！…っあ、ごめん」

多分だがゼノさんがエコーさんに怒られている。

「…ゆつくりで良いらしいし…上着、着ようか？」

「…うん」

「毎回思うんだけどさ、ユウナちゃん何かしら怪我するよねえ」

「でも必ずー今回はちと危なかったが、帰ってくる。良いことじゃないか」

「うんうん。帰ろう。帰ればまた戦えるから、って本当誰が言ったのかわからないけどそのとうりなんだよねえ」

俺とマトイを挟んでゼノさんとエコーさんがソファな座り俺の事を喋っている。

「…えつと、遅れてしまいましたがああ時は援護に来てくれて本当にありがとうございました」

「良いのよ。ほら？アークスつてわかりかし仕事内容自由じゃん？援護が欲しければいつでも言ってる？」

エコーさんが笑顔で言う。待てよ？確かゼノさんに援護頼んだ時、長期任務つて言ってた気が…？

「ゼノさん…援護頼んだ時確か長期任務つて…？」

「えっ？と言うか俺に援護寄越した？…待ってくれ、今確認をーあつ、本当だ」

「ちよつとゼノ！長期任務つてどう言うこと？特に任務も無かったじゃない！」

「…もしかして早朝だったから寝ぼけて返事したーとか？」

そうマトイがゼノさんに向かって言う。まさか？朝はとつくに迎えていたぞ？

「ゼノ…あんた、もしかして」

エコーさんがプルプル手を震わせながら言う。

「…二度寝…してたかも知れない」

「こおんのお、バカやろおお！」

エコーさんの右ストレートは、美しかった。

「ユウナちゃん？ソファ、倒れちゃったよ？」

「ほんつとうに御免なさい！ゼノがあの時救援を受けてたら、こんな事にはならなかったのに！」

エコーさんが俺に頭を下げて手を合わせている。

「良いんですよ？もう過ぎた事ですし」

「ほら！ゼノも！」

「いやあ、本当ごめんな？もし何かあったら任務放棄してでも向かうわ」

「いや流石にそれは…」

「本当に御免なさいね？謝って治るもんじゃないけど…」

「軽症ですから大事ですよ？問題は他にありますし」

「問題？」

「えっと…敵と交戦時に、ライフルを壊られまして…」

「ライフル…ゼノ、確か持ってたかった？」

「確かユウナが使っていたのって…A・C・A・R—mk5 mod

SRだったか？」

「ええ、そうです。もしかして？」

「同じタイプだがなあ…mod ARだぞ？それでも良いなら俺は使わないし渡せるが…」

「それじゃあ下さい」

「よし、んじや明日持ってくるわ。照準器とか投擲装置とかも付けたくよ」

「本当ですか！ありがとうございます！」

「何、今回は俺が悪かったんだ。これぐらいさせてくれ」

「解決したみたいね？あつ、そうそう、テーブルの上にあるフルーツはゲッテムとメル姉妹と私達からのお見舞い品よ？後で食べてね？」

そう言いエコーさんとゼノさんは腰を上げ玄関に向かう。

見送りに出ようとすると、「良いって怪我してるんだ、やすんどけ」と言われ座らされた。

「マトイ、見送り頼めるか？」

「うん、わかった」

ゼノさんとエコーさんをマトイが玄関まで向かわせて何か話している。

ミミを使えば聞こえるが…今回は良いや。

テーブルの上のフルーツバスケットから小さな赤い果実——イチゴみたいなものを口に持っていく。

「…甘いなあ」

時計は20:56分をさしている。

そろそろ寝ようかな。

「おやすみマトイ」

「おやすみい」

マトイは自室のドアを閉めた。…ちよつと強く閉め過ぎじゃね？リビング挟んで反対にある自室に行く。

自室にはベッドにテーブルとイス、それとプラモデル位しかない。と言っても買ってあった物を組み立てただけで…元の身体の人はずっとうまくいったんだろうか？

「はあ…疲れた…もうヤツとは戦いたくない…」

そもそもソード持ちにライフルでどう戦えと？ストックで殴れっ
てか？

「…もうやめ、寝る」

考えれば考えるほど頭が余計に痛くなる。こう言う時はさっさと寝るに限る。

「…ゼノさんが持つてくるライフル——俺が使っていたヤツとマガジン互換性あれば良いけど…」

唯一の心配はそこだった。

19 話目

「暑い…んだよお…アフィン…水、くれ」

辺り一面砂だらけの所に、少しだけ生えていた木の影に入りアフィンに水を催促する。

「ダメだよ、まだ奥の遺跡群の調査終わってないし」

アフィンも影に入ってきた。

「んな殺生な…」

暑い…今何度だ？

自分の右上を浮遊しているマグを手の上に乗せ周囲の状況を確認する。

「現在温度ー42度☒」

「暑いって言うのが分かっている惑星のデータだからなあ」

「にしたって…暑すぎだよお…これなら薄い戦闘服着てくれば良かった…」

「薄いつて…」目に毒だけなんだよなあ…と俺の優秀なミミが拾った。

「聞こえているぞ。そんなに見たいか？」

そう言いアフィンが座っている方を向く。

「見たい…けど…」

そう言いアフィンの顔がみるみる赤くなってきた。

「やっぱやーめた。アフィン、耳まで赤いぞ？」

「…ツ！あ、相棒！そう言えばゼノさんから貰ったライフル、どうだ？」

話題を変えて行くアフィン。そんなに嫌だったか？

「…俺が前に使っていた狙撃ースナイパーライフルよりは接近時は使いやすいなあ」

地面に置かれたアサルトライフルを見る。少々汚いが、部分部分はある程度綺麗に掃除されており、ゼノさんから貰った時、急いで簡易分解をしたがそこまで酷くはなかった。

「まあ、アサルトライフルだからなあ。少しは酷く扱っても大事なん

だろう」

そう言えばこのゼノさんから貰ったライフル、若干バレルがネットーPOSで見たヤツと比べ短い気がする。

朝に貰った時間けば良かったなあ…。

「うーん、戻ったら聞こーアアフィン」

聞こー、とまで言おうとした時、ミミが機械の動く音を捉えた。

「うん?どうした?」

4、7体、多い。やり過ぎすべきか?

「…：駆動音：7体、アフィン、此処の機械群つて熱センサー持ってたか?」

「分かんない。とりあえず高いところに行こう。そこなら見渡せる」

「ああ、今回は後ろからチクチク刺せないからなあ」

アフィンが近くの壁の下に行き俺を上を上げようとする。

「よっ、と。上がったか?」

「ああ、おっけーだ。アフィン、掴まれ」

壁の上から右手を垂らしアフィンの手を握る。

「ふんっんん!っとお!」

「相棒、声が少しデカイ。そういや距離は?」

周りの音に集中する。

「まで…：1キロから1. 3キロくらい。こつちに来てる。方位2」

3ー4、7体ーいや、別れた。4体向かってくる」

「234、234ーこの辺りか。別れた奴らは?」

「そこまで俺のミミは万能じゃない。レーダーじゃ無いんだぞ?」

と言うかそこまで気になるんだつたらドローン出して見てみるよ。

と言おうとしたがそれだと敵機械群に発見されそうだからやめた。

「最初のマガジンは如何する?通常マガジン?」

「いや…：通常マガジンだと3発に1発入るD弾が勿体ない。A. Pオ

ンリーのマガジンあるか?」

「APオンリー?APってなんだ?」

「徹甲弾だ。ほら、俺らが通うライフル専門店に一番安い弾あったろ?あれだ」

「あのとんがった奴か？」

「とんがったって：俺らが使うライフル弾は大体とんがってるって。んで、A・Pって言うか徹甲弾って言うのが物を貫通させるだけの弾、であってるかな？それなら敵機械群にも致命傷与えられそうだし」

「と言うか良く相棒はそんなのを持って来れるよなあ：俺なんかD弾と通常マガジンの二種類だけだぜ？」

「その代わりマガジンの選択間違えるけどねえ：」

「ダメじゃん」

「：ほら、APオンリーマガジン2つ。アフィン、弾が少ないからシングルでゆっくり撃てよ？」

「分かってる。何時も突撃ばかりしてるとでも思ってるー」思ってるに決まってるんだろ？」ーはい：」

2人揃って高台の上に寝転がり伏せ撃ちの体勢になる。

俺は前から使っていたグリップの根元を押すと二脚になるボタンを押し地面に付ける。

「うお：良いなそれ、後で買つとこう」

「アフィン：妹の為にメセタを使うのは良いが、使う武器にも少しはメセタ掛けるよ？武器が泣くぞ？」

「：俺だっけしたいけど：それじゃあ今度一緒に何時もの武器屋行かね？」

「：はあ：」

「何か一個なら買つてやるからサ」

「ー言つたな？」

「えっ？」

「今一個なら何でも買うと言つたな？」

「待て待て待て！何でもとは言つてないぞ！」

「分かってる：そうだな、んじやレーザーサイトでも買つてもらうか」

「レーザーサイトって：まあ、良いけど」

「：あつ、多分マトイも来るかも」

「マトイ？ああ、あのナベリウスで救出した女の子か。別に良いが：

「その子暇じゃないの？」

「暇って？」

「いや、だってさ、15. 6くらいの女の子が銃とか、弾丸見て楽しいと思う？」

「俺は楽しい」

「そうですか…」

「まあ、何だったら最後にマトイと俺らで何処かーアフィン、来る」
アフィンの肩を叩き、会話を中止し接近中の敵が来る方向へ向く。
ギユイーン、ギユイーンと四脚の脚を動かしながらバラバラになり
つつ敵四脚兵器が此方に向かって来た。

『ユウナさん、聞こえますか？』

「ポイントか？如何した？」

『アークス本部からの任務です。敵機械群の鹵獲、又は良好状態での
撃破だそうです』

「はあ？攻撃方も不明な上にそれらを鹵獲☒アフィン、如何する？」

右を向くとアフィンは俺のポイントに質問をしていた。

「一体だけでも良いのか？」

『はい、一体だけでも鹵獲出来たら追加報酬ーまあ、メセタですね』
「相棒、三体だけやって一体の脚を壊そう」

「うーん…ならもつと弾必要だろう」

腰からAPマガジンを更に3つ取り出してアフィンに渡す。

「5×30の150発あれば足りるだろう？」

「ああ、ありがと」

俺もいつもやる様にコッキングレバーを少し引きチェンバー内に
弾が入ってるのを確認ーした。

「狙うは敵四脚兵器。明らかに弱点で有ろう天辺の青い部分を撃つぞ
？良いな？」

「了解」

「5秒後に射撃開始ー15. 4. 3. 2. …てえ！」

乾いた音が何発が鳴り響く。

俺とアフィンの銃の銃身(バレル)から出た弾丸が容赦無く敵四脚

兵器を貫く。

アフィンの弾丸は天辺を周辺に着弾したものの、俺の短い銃身から出た弾丸は脚や胴体との接続部、砲塔などに当たり跳弾する。

「これだからショートバレルは！」

「次来るぞ！」

敵（俺達）の位置を確認した三体は頭の砲塔を動かし高台を撃ちまくる。

「後ろに下がれえ！下に行くぞ！」

「分かった！おい！先に行くなよ！」

俺らは一足先に一段階下に降りて様子を見る。

「どうだ…来るか？」

「分かんない…俺の予想じゃ、多分、来る」

マガジン内の弾を撃ち切ったので空のマガジンを外し背中の中ノトランサーに近づける。

ナノトランサーに近づけるとそれはふっ、と消えて左手首につけられたデバイスのアイテムの所に格納される。

腰からAPマガジンを取り出し銃本体にセット、リリースボタンを押してボルトを前進させ空の薬莖の排除とマガジン内の1発目をチェンバーに入れる。

アフィンを見ると右手で親指を立てて来た。

「終わったか？」

「ああ、終わった。いつでもどうぞ？」

射撃モードをセミオートからフルオートに変更。反動が痛いけど敵の攻撃を食らうよりマシだ。

顔を少しだけ出してさっき自分たちがいた所を見る。

三体の四脚兵器が砲塔をゆっくり回りながら辺りを警戒している様に見えた。

「アフィン、5秒カウント後、攻撃を仕掛けるぞ？」

「いつでもどうぞ」

「5. 4. 3…レディ…go！」

物陰から2人同時に出て敵四脚兵器を撃つ。

この至近距離だ。外れにくいだろう。

ダダダダッ！と3秒ほどでマガジン内の弾を撃ち切る。

30発も当てられた四脚兵器は動かなくなった。

「次イッ！」

空のマガジンの付いた銃を左手の方に振り、空のマガジンを飛ばす。

飛ばすのと同時にマガジンを左手で取り出し銃にセット、リリースする。

「次ラスト！脚と砲塔を狙えっ！」

「アフィン！セミだ！セミオートにしろ！」

2人で大声で指示しつつ、一体になった四脚兵器を撃つ。

最初に脚を二本壊し動かなくして、次に砲塔はー。

「アフィン！抑えてろ！」

「えっ？あ、うん」

アフィンに砲塔を抑えてもらい胴体と砲塔をつなぐ部分にバレルを押し当てて撃つ。

ギユ、ギユウウ…ン、と砲塔が動かなくなり、鹵獲成功となった。

「ポイント、聞こえるか？敵四脚兵器を鹵獲、至急回収頼む」

『此方でも確認しました。回収班を向かわせます。ユウナさん達は任務の続行を』

「了解、んじやアフィン、先に進もうぜ？」

「もう正直疲れたぜ」

「全くだ」

目的地である遺跡群はあと2キロちよつと。さつさと帰り寝たい。

20 話目

「これ…何言語だ？」

「さあ…よく分からない言語って言うのは分かった」

四脚兵器群と交戦、勝利しさらに先に進み今回の任務目標の遺跡群に到着した。

壁には地球言語でも、アークス言語でも無い別の言語が書かれている。

「一応マグで写真と動画を撮っておくか」

マグに写真を撮るよう指示する。

「文字と言うか…絵と言うか…何だこれ？」

「分からん…どう言う意味が…まあ、そこは他の科学者が調べるだろう」

「それもそうか」

すると一頻り撮り終わったのかマグが此方に来る。

「えっと…よし、撮り終わったな」

帰ろうかなと考えた時、奥の方を調べていたアフィンから通信が入った。

『相棒…こっちにも何かあるぞ…来てくれないか？』

「了解、今向かう。遺跡群の奥か？」

『奥だ。奥の方に大きな…扉がある。そこの中だ』

「了解、んじゃ今から向かうわ」

アフィンとの通信を切りマグを所定の位置…右後ろ…に戻す。

俺のミミには駆動音とかは反応ない。この様子だとライフルも使わないだろう。

ライフルの射撃モードを安全…セーフティに動かし、念の為誰

もない所に向けてトリガーを引く。

トリガーは動かず、弾は出なかった。コッキングレバーを少し引き初弾が入っているのを確認して、マガジンを30発入っている奴に交換する。

こうする事でマガジン内30発+チエンバー内の1発で1発だけ多く撃てる。

「ここか…まるで格納庫…か？」

人型兵器でも出て来そうな気がするぜ。

隣の扉を開けてさらに奥に進む。

「暗いな…マグ、ライトを頼む」

マグが眩しく光り辺りを照らす。

周りには大きなパイプや太いコードと言った如何にもS・Fチツクな物が散乱していた。

「アフィン、アフィン、聞こえるか？こっちは中に入ったぞ？」

『…聞こえている。にしても暗いな此処は。マグのライトがなければ転んでいるぜ』

「全くだ。どのくらい先にいる？」

『俺の足音で分からないか？俺も分からない』

「まで…1キロ以上先だな。待ってる？今から向かう」

『頼むぜ。1人だと怖いわ』

「んじや何で一人で行ったんだよ」

『…いや、探し物の気配がしてね…』

「探し物の気配…?」

『何、こつちの話だ気にするな。此処で待つてるわ。出来る限り来てくれよ?俺か

らもう少ししたら多分行き止まりだ』

「りよーかい。…探し物って…」

アフィンの探し物と言った時の口調が少しおかしな気がしたが：気のせいだろう。多分。

にしても今居るところから1キロ以上先：走っても10分以上は掛かるぞ?」

「…はあ、取り敢えず進むしかないか」

数百メートル位は進んだであろうと思った時、急にアフィンから通信が入った。

「んだよアフィン、俺まだ着いてー」

『緊急事態だ!くそッ!敵機械群が攻めて来た!援護頼む!ーーうわあ☒』

切れるのと同時に断続した発砲音。

歩いてなんていられない。走らなければ。

ライフルの射撃モードをフルオートにして発砲音がして居る方に走る。

走って

走って

走って

走って

走って!!

「アフィン！大事か！」

『今はまだ大丈夫ー』

カキーン、と跳弾する音が通信越しに聞こえた。

『ーじゃないっぽいな』

パパパパンつと断続した発砲音。壁に何かが一弾か何か当たる音も。

「持ちこたえろ！今向かっている！」

『多分だが此処にあるのが、奴ら呼び寄せているんだ。多分ーガキンツーーくそっ！』

後ろでガチャガチャ音がしている。

「おい！まさか…」

『ああ…ジャムつた…最悪だくそっ…』

「おい、他に武器は！」

『弾数少ないハンドガンが一丁とマガジン三個…ああ…くそっ』

「くそおお！待ってろ！」

全速力で走る。ビーストの全力なら、1キロくらい…！

『はあ…はあ…すう…はあ…すうーい”ツ！』

「おい！アフィン！どうした！」

先に光が一アフィンのマグが出している光が見えた。

「もう少しだ！アフィン！死ぬな！」

光が迫ってくる。

「おおおらああー！」

大きな広間に到着、同時に大量の機械兵器群を確認。それも数えるのが笑えるくらい。

奥の方を見るとアフィンが片手でハンドガン撃っているのが見えた。左肩から血が出ている。

「アフィイン！」

片手を真つ直ぐに伸ばしショートバレルのアサルトライフルを出来うる限り当たらないように機械群に向かって撃ちながらアフィンに近づく。

「アフィン！聞こえるか！返事をしろ！」

弾が切れてスライドストップしたハンドガンのアフィンの脚のホルスターに入れる。

「あ、ああ、相、棒…か？すま、ない。やらかし、ちまった、ぜえ…」

周りを見ながら他に移動できるところをないか探す。

「喋るな！右腕で何でもいいから止血しろ！」

「無理だよ…この数…俺達…此处で、終わり、かなあ…」

合った。あそこだけ変なコンテナが積まれている。あそこを盾にすれば…。

「おい！しっかりしろ！気を保て！」

アフィンを抱えながらコンテナで囲まれた所を目指す。その間にも敵機械兵器群はバンバン弾を撃ってくる。

空いた右手でライフルを乱射しつつコンテナまで前進。

「相棒、もう無理だよ…楽にー」「アホ言うな!」ーッ」

「お前には探しもんがあんだろうが!それを見つけれられずに死ぬだ□
いい加減にしろ!」

その間にも敵は真正面からひたすらやってくる。

撃っても、撃っても、撃っても!敵は屍を乗り越え俺達を殺すべく
向かってくる。

「アフィン!的当てだ!撃って撃って撃ちまくれ!」

「……………くそっ、やるしか、ない、のか…」

一応俺たちの着ている戦闘服には申し訳ない程度に止血留めの効
果はある。

それが効き始めたのかアフィンの肩からは血は流れてはいなかつ
た。

「アフィン!コツキンググレバーをマガジンを取って思いっきり何度も
引け!」

「ツ……………クツソオ…」

「良いぞお!その調子だ!」

その間も休む事なくライフルを乱射する。

ガチャン!とコツキンググレバーが手前で止まった。マガジン内の
弾が切れたらしい。

「通常弾ナシ…後は通常マガジンか…」

頭の中で一瞬メセタのことが思い浮かんだが…生き残らなければ
意味がない。

生きる為のメセタだ。逆の為ではない。

「ツ……………ガシャン!ー!良しっ!治った!行けるぞ!」

アフィンのライフルがさつきまでのジヤムは何だったのかと言うくらいに軽快に動き始めた。

「流石に減ってきたか☒」

「寧ろそうじゃないと辛いんだけどなあ!」

「全くだ!ー弾ナシ!リロード!」

「了解!カバー!」

片方がリロードーマガジンチェンジに入るともう片方が敵がいる方に弾を乱射する。

乱射して牽制している間にマガジンをチェンジーリロードして、また片方がーを何回か繰り返す。

何分たつだろうか。はたまた何十分だろうか。

どうにか敵機械兵器群を撃退した俺達は背中を寄せ合って座っていた。

本来ならさつきと帰るべきだがその体力も、もはや無い。

「はあ…全く、アフィン、お前が先に行くから…こんな事に」

「悪かったって。生きて此処を出れたら本当に何でもするよ」

「ほんと、生きて出ればだけどなあ」

あの機械兵器群の数…明らかに多過ぎた。今考えられるのが此処はあの兵器群の生産

工場。敵の生産工場ど真ん中に来たって事だ。

「帰ったら絶対にミルクアイス食べてやる。吐くほど」

「ーなあ、そーいや相棒、このコンテナカタチおかしくね?」

「たしかに…よく見りや脚っぽくね…待て!敵☒」

「ならとつくに動いている筈。マグ、上にーくそつダメか」

「なら俺らで登るしか無いな…ハシゴは何処だ?…アフィン?立てるか?」

右手を伸ばし捕まるよう促す。

「あ、ああ、大丈夫だ、一人でーうわっ！」

アフィンはそのまま立てると言い案の定ー倒れた。

俺に向かつて。

「イッテエ…相棒、大丈夫ー柔らかい…☒」

見事に右手は俺の胸に添えて、俺の上に倒れた。

右手をモミモミ動かしながら戦闘中と生活中に、肩にスリッパダメージを入れてくる胸を揉んだ。

「ちよっ！アフィン！よ、よせっ！やめろっ！」

揉まれた瞬間、ミミと尻尾と足と腕にーと言うか全身に力が入らなくなった。

「わ、悪いい…」

横にアフィンがくるりと周り立つ。さっき転んだ奴とは思えんな。

「さて…アフィンくん？」

「は、はいいい！」

さてと…どう言うか…。

「俺の胸はどうだった？」

「とつても、すごく柔らかかったです！」

ライフルのストックで殴ろうとしたのは誰にも止められなくても良いと思う。

最もこの身体で何だかんだ過ごしたんだ。多少は愛着湧くさ？だからかな？

「アフィン…恥ずかしいから人前で言うなよ？」

「はいー！」

「言ったら…上に言うからな？」

「は、はいいい！」

「よし…なら行くぞ。…女の胸を揉んだんだ。絶対に生きて帰るぞ」
「…ああ。絶対、な」

21 話目 脱出準備

「此処だ、此処からなら上がれそうだ…先に上がれるか？」

コンテナナー脚らしきものの周りにもコンテナが散乱しておりそれらを足場として登って行くことにした。

「俺からか。…ふんっ！ーダメだ、片手じゃ…」

「俺が下から上げる。足場にしろ」

アフィンを退かし登るコンテナの手前に立つ。

「さあ、来い！」

「来いって…どう登れと？」

「こう…俺が両手で足場を作ってそれを乗り越えて上に向かうーみたいなの？」

「…俺の体重支えられるか？」

「…何キロだ？」

「64キロくらいだった筈」

「…無理やん」

「…そうだ。蹲れるか？」

「蹲れ…？体を丸めろってか？」

「四角にして足場になるんだ。これなら多分いける」

「…やるか」

コンテナ手前で体を丸める。

「こうか？」

「ああ、これなら…」

そう言いアフィンを背中に足をつける。

「少し痛いと思うが我慢してくれ…」

「…ッ！…まだか☒」

「もうーっ少しー」

ゆっくりとアフィンはコンテナに登る。

足が離れたら立ちアフィンを下から持ち上げる。

「ふうー良しっ！行けたか☒」

「オーケーだ。コッチにはーうお！」

「どうした！敵か！」

足元に置いてあったライフルをコンテナの上に投げる為に手に掴む。

「見ろよ相棒！ロボットだ！」

「ーロボット？」

急いでコンテナを登りアフィンがロボット、と言うものを探す。

「こいつは…本当にロボットじゃないか…」

そこに鎮座するのは本当にロボットー手持ち兵装を持ちその場で埃を被りながら立っていた。

「しかもちゃんとした二足歩行…このサイズー乗れるんじゃないか？」

「これに乗って此処から脱出ってか？そんな映画みたいな…」

だがこれしかないのも事実。マグを見れば周辺情報はECMと書かれて砂嵐になっている。

徒歩で戻ろうにもアフィンがー今はどうにか歩けるがー被弾しているし、さっきの戦闘で出口付近にも四脚兵器群の足音が少しーギリギリ聞き取れるくらいにはいる。

「コックピットはーアニメとかでは大体胸だよな？」

アフィンは胸と言い一瞬此方の胸を見てきた。

「胸は胸でもその胸ではない」

「…ぱつと見、無いよなあ…」

「んじや頭はどうだ？あの複眼ー彼処は？」

人型兵器は良く胸がコックピットになっているが、もし本当に搭乗型人型兵器が出るなら頭の下か安定する股間部だろう。

股間部はまぐれ当たりが怖いが。

破損したコンテナを伝い頭に向かう。

「あつた…頭だ」

「良くある二つ目ツインアイ二つ目ツインアイじゃ無いんだな」

単眼目モノアイ単眼目でも無いがな。

しかしどうやって上げるものやら…この辺りを探ってみる、と言う手もあるが中々動けない以上、適当に弄るしか無いし。と言うかこれそもそも乗れるんだよな？

そんな事を思っていると急に頭部が前に上がった。

「うおーう、動いたぞー！」

「…入れってか？」

「アニメでもダンデムの奴なんてあつたか☒」

「外にいるよりはマシだ。行くぞ」

コックピットと思われる中に入る。

「ああ！生き残る為には仕方ねえ！」

「おお…完全なコックピットだ…」

周りには色んなスイッチ類が沢山あり、真正面には大きなモニターが何枚もある。一枚も割れていない。

「おいアフィナー！俺達本物の人型搭乗ロボットに乗ってるぜ…」

「ああ…さつきは此処までと思っただけど…これは、何かクルものがあるなあ」

一度二人でコックピットから外に出る。

「にしても狭いな…二人は無理だな…」

「まあ、想像はついたけど…」

サイズは一人はいるのが限界の大きさだった。

「うーむ…仕方ないアフィン、先に入って座れ」

とつた策は一つ。これしか無い。多分。

「えっ？ああ…よいしょっとーおお…すげえよこれ。ヤバイよ」

アフィン君はもう言葉に出来ないレベルで感激している様子。

「よし、座ったな？」

俺もコックピットに入りコックピットシートに座ったアフィンの上に座る。

「お、相棒！何やってんだよ！」

「アフィンと俺が座るにはこれしか無い。我慢しろ」

「いや！俺は別に良いけど…」

「そうか。なら色々スイッチを弄るぞ？」

周りにある色々なトグルスイッチを入れる。

カチリ、カチリ、カチリ…無反応。

「おかしいな…何故動かん？」

「もしかして、メインエンジンが壊れているとか？」

「エンジンが…？待て、考えろ。車に例えるんだ。エンジンをかける時、何時もー」

何時もやっている事、と言おうとしたらアフィンが答えた。

「ーードア？」

「ドア？ーココックピットハッチか！」

上を向き上がっている頭部パーツを見る。

「これ手動か？自動か？」

「さあ、取り敢えずこつちから引き込めるか？」

「試すわーよいしょ」

立ち上がり頭部パーツを閉める。

完全に閉まるとプシュ、と音がして目の前が真っ暗になる。

「閉まったな…」

「ああ…」

少しすると目の前のモニターが明るくなり謎の言語をカーソルが映し出した。

「なんだ…これ？さっきの遺跡群と同じ言葉か？」

「左右のスティックで動かせるか？」

見ると右のスティックにアナログスティックが付いているのがモニターの光で分かった。

「ーああ、動かせる。下に動かして見るわ」

案の定アナログスティックで謎言語のカーソルを下に動かす。

何個か動かすとまた見覚えのある方言語が。

「ーRe, Boot…再起動？」

「どうした相棒、読めるのか？」

「……少しだが……多分、これか？」

再起動にカーソルを合わせる。

——反応なし。決定キーみたいなのが必要なのか？

「……トリガー？」

親指でアナログスティックを操作し、人差し指でトリガーを引く。キュイイイン、と言う音が後ろから聞こえ、コックピット内のボタン類とその下の——今まで謎言語だった文字が英語に変換された。

「お、相棒！何をしたんだ☒」

「…再起動…FCSに各アクチュエータロック、解除？メイン…エンジン、回転数、アップ？」

モニターに色々な情報が上がって行く。

下のコンソールを見ると何個かボタンが光っていた。

そのボタンの下にはFCSやActuator、Motor、engine等色々書かれていた。

「…光っている順に、押すのか？」

何個かおしているとモニターに光が通る。右、左、最後に正面のモニターが光が灯る。

「うお、まぶしっ」

両手で目の前に影を作る。

目が慣れるとモニターに映し出されたのは——今乗っている機体を背後から見た映像だった。

機体を覆うように丸い縁が描かれており右側には0435、左側にはNoneと書かれている。

「起動…成功か…？」

「…すげえよ相棒…こんなモンをいきなり動かせるなんて…」

「まだ動かしてないよ。どれがアクセルだ？」

足元のペダルをゆっくり踏む。

すると機体の足が動き、一步前に進む。

「動いたよ！動いた！」

「落ち着けアフィン。俺も内心テンパってたんだ」

左スティックを動かすと左右に動いた。右スティックを上を動かすとカメラとロー右腕に持っている銃器が一緒に上を向いた。モニターの中の照準器を動かすようだ。

「よし…何となく分かったぞ…アフィン、これは生きて出れるぞ…」
「本当か！」

「ああ…今からこいつを使って此処を強行突破する。出来れば敵と交戦したくないが…」

ゆっくりペダルを踏み左スティックで入り口に機体の進行方向を合わせる。

目指すは地上、最初の遺跡群だ。

22 話目

「よし…此処から出るぞ」

足元のペダルを踏み一度前進、その後右スティックを左に向け此処に來た道に戻る。

「リーダー…みたいな物は積んでないのか？相棒？」

「見た所結構古めだし、壊れているんじゃないか？…まあ確かにリーダーがあればなあ…流石に自慢のミミもコックピットからじゃ分からないしなあ…」

右スティックを動かし左右を見る…コレよく見たら左手も連動しているな。武器を持っていないだけで。

「なあ相棒、このボタンは何の意味があるんだ？」

アフィンがコンソール下部にあるSUBと書かれたボタンを指差した。

アフィンが指をさしたボタンを少し置いてからみる。

「SUB…スブ…ス…サ？ブ？サブか？」

「サブって…良く相棒が言うこのハンドガンの事か？」

「サブって言うのは副…俺らの主兵装のライフルの補助武器って事だな。試しに押せてか？」

「いや、何か有ったらたまったモンじゃない。やめておこう」

それから少し進み…アフィンと少し話し合った頃…少し経った頃。コックピット内に甲高い音が響く。

「なんだ☒」

ペダルを離しその場に止まる。

腕を動かし周囲を見回す。

「何だ？敵か？」

「いや、俺らの敵が此奴の敵だとは限らない。此奴にとつちや多分だが、あの四脚兵器は味方だぞ」

「逆に味方の場所とか分からないのかよ」

「それで敵の位置を探るって？流石にそこまで…」

機体の上半身を左右に振っているとモニターにFriendly

と表示された。

「――本当に居たよ……」

「これズームとか出来ないのか？」

「やってみる……どれだ？……これか？」

そこら辺に合ったボタンを一つ押す。

すると機体が映っていたモニターが今度はコックピットから見たカメラに切り替わった。

「……これ……あつ、下にズームとアウト合ったわ」

照準器をF r i e n d l y に合わせズームボタンを押す。

「……真つ暗で見えないな」

「熱センサとか――熱を捉えるほど発してるか？」

「暗視補正とかは？」

「……ダメだ。分からない。攻撃して来ないと祈って進もう」

「……相棒が言うならまあ……」

ペダルを踏み真つ直ぐ進む。

3秒ほど歩くと一個しか無かったF r i e n d l y のマークがいきなり何個――数十個か？モニターがFのマークで埋められた。

ペダルを離し一度アフィンと話をする。

「……なおアフィン……別の道探さないか？」

「ああ……それがいいだろ。流星にこれは……」

「……此奴の装甲――大体厚いか薄いかの二択なんだが――が機能するかも怪しいしな。さっきの部屋まで戻ろう」

右スティックを右に倒し機体を180度回り、此奴の格納庫に戻る。

「……」

「……今言うのも何だが……アフィン、謝る事、あるか？」

「えっ？何をいきなり――いや、そうだな、ごめん、先行して」

「まあ、それもそうだな。アフィンが突らなければこんな事にはならなかった訳だし……いや、なっていたか？」

喋りながらも両スティックを動かす。

「――本当にごめん……帰ったら何かおごるよ」

「…マトイもな?」

「…はあ、オーケー」

「交渉成立!」

「俺一応怪我人だぜ?頼むよ?」

「そんな事を言っただって…いや、一応見ておくか」

そう言いペダルから足を離し後ろろーアフィンの顔が見えるように反対に座る。

「お、おい☒」

「左肩ろー少し触るぞ?」

「聞けってろーイッタ!」

「まだ痛むか…」

これ下手したら銃弾ろー果たして四脚群が放ったのが実体弾だったらの話だがろー残ってるかもしれないなあ…。

「アフィン、肩の裏はろー良かった。貫通してる」

「貫通している事に良いも悪いもあるか!第一めちやくちやろー」

「ろー貫通してなかったら弾丸取るために摘出手術だぞ?」

「ろーそれでも痛いもんは痛いんだよツ!」

アフィンに力説された。

「よし…此処から出るぞ」

相棒が発進する為の準備をする中、俺は何故こうなったのか思い出す。

俺は相棒より先に先行し、大きな遺跡の中に入り、さらに奥へ奥へと進むうちに敵四脚兵器群に撃たれてしまい、あわやと言うところでのこの俺の膝に座っている銀髪だか灰色だか分からない長髪の相棒ろーいや、少女、ユウナに助けられた。

まただ…思えば最初の適合試験時その場のノリでなった相棒に助けられたなあ…。

そんな事を思い出し始めていると、ふと、この兵器の事が気になり視線を前に戻す。

相棒が動かそうとしているこの大型機械兵器ろーいや、人型兵器を動かそうとろーいや、動かし始めた。

目の前には大きなモニターがあり、沢山のスイッチやスティックが何本か合った。

それらには俺達アークスが一般的に使うアークス言語では無く別の言語を大量ーいや、全てにおいて使っていた。

相棒はゆつくりと足下ーペダルが多分3、4個程あり、相棒はその内の一個をゆつくり踏んだ。

踏むと同時にこの大型機械が動き出し、モニターが向いている方に歩き出した。

此処でふと良くアニメなのであるレーダー的な何かを積んでいないのか気になり、相棒に言ってみた。

「レーダー…みたいな物は積んでいないのか？」

「見た所結構古めだし、壊れているんじゃないかなあ？…まあ確かにレーダーがあればなあ…流石に自慢のミミもコックピットからじゃわからないしなあ…」

そう言い相棒は左スティックを動かしモニターが見ているところを動かした。

相棒の後ろばかり見ていると色々辛いやー特に股間部がーのでその下のコンソール部分を見る事にした。

「なあ相棒、このボタンは何の意味があるんだ？」

パツとみ目に付いたのがこのボタンだったので相棒に聞いてみる。

「SUB…ズブウ…ス…サア…ブ？サブか？」

サブサブサブ…何処かで相棒から聞いた事が…あつ？

そうだ、ハンドングンの事か？良くサブアームは持ったかつて割りかし時折多めに言うしー割りかし時折多め？

「サブって…良く相棒が言うこのハンドングンの事か？」

「サブって言うのは副ー俺らの主兵装のライフルの補助武器って事だな。試しに押せてか？」

そう言い右スティックを離しそのサブボタンを押そうとする。

「いや、何か有ったらたまったモンじゃない。やめておこう」

「ーだろうな」

離れた右手を右スティックに戻し、モニターに注目する。

「そういやアフィン…銃の分解…ちゃんとしてるよな？」

少し、プチんと来た。俺だってそこまでやって貰おうとは…できればやって欲しいけど…。

「な、流石に俺だってしててるよ！…posで見ながら…」

最後の方だけ小さくなったのは仕方ない。今思ったがもしかしてジヤムったの自業自得…？

そして聞こえないと思っていたが、それはヒューマンの話。相棒…事、俺と同じニューマンでビーストな相棒にははつきり聞こえていたらしい。

「ポスターネットでか…だからかよお…それ本当に見た通りに戻したのか？」

相棒がいきなり振り向き俺の顔を見た。あつ、犬歯見えた。

「ああ、見た通り戻した…多分」

「…っ…」

ミミをぺったんこにしながら前を向き直す。

「アフィン…」

「…もしかしてやっちゃった？」

「もう既にやっちゃってるよお…」

此れだから分解は怖くてできないんだよ！

「そもそも銃って掃除しなくても使えるのが銃じゃないのかよ！」

「…アフィン、耳元で…」

「だから俺はレンジャーになったのに！」

「…ッ！だから！耳元で！叫ぶな！」

「あつ…ごめん」

すぐ怒られました。

23 話目

「ー塞がれているな」

「ああ、見事なまでに塞がれているな」

周りでカサカサと四脚群が動き回るのを見つつ、間違つて潰してIFを解除されないようにゆっくり進み出口まで六割、と言う所で上から瓦礫が落ちていて先に進めずにいた。

「どうする相棒？」

両スティックとペダルから手と足を離しその場で止まった。

「吹っ飛ばすか、他の道を探すか…」

前者はそもそも持っている武器が爆発する兵装かすら不明なのでNG。弾数的にも爆発系武器とは考えられにくい。よつて必然的に後者になるわけだが…。

「戻るにしたつて…なあ…」

この地味にこの人型兵器には狭い通路を下にウジャウジャ居る四脚群を潰さずに時間をかけて来たんだ。これから戻れつて言うのもなあ…。

「一度戻つてみようぜ？これに乗っていれば原則四脚群は攻撃してこないんだろう？」

「お前：動かすのは俺なんだぞ。そんな簡単に言うがー」

機体を180度転進。来た道をもう一度戻る。

「よし：到着した」

3分ほどして此奴の格納庫に戻ってきた。

「…何もないなあ。一層の事そこら辺の壁に武器ぶつ放すか？」

「…生き埋めになりたければな。最も此奴の頑丈さが分かればーいや、ダメだな」

万が一壊して抜け出せたとしても、四脚群が来た場合どっちにしろ交戦しなくちゃならんからー詰んでね？

「サブモニターみたいなの無いのか…？」

モニターから目を離れた下のコンソールを見る。

「ウォツシャー、ちゃ：チャフ、マガジンリロードーこれリロードす

る意味あるのか？」

リロードの左にはレフトメイン、ライトメイン、サブと一つの輪になって武器チェンジと書かれていた。

「これレフト押せば武器チェンジ出来るのか…？」

押すとギューーン、と言う音と同時にモニター内の円に600と追加された。

「600発ー左600、右435発…無いよりマシから十分手前になっただな」

「試しに左武器撃ってみようぜ？」

「…アフィン…まだ敵地だぞ？」

「もしかしたら隠し扉みたいなのがー」

ある、と続けると思った時、モニターに明かりが映ったのが見えた。

「ーなんだ？アレ…」

「扉か？近づいてみよう」

「…ああ」

機体を動かし明かりに近づく。するとモニターにdoorロードアと表示されてPush.S.U.Bと下に表示された。

「相棒、なんて書かれてんだ？」

「ええーロードア、サブを押せ？」

「押してみよう」

言う通りにサブを押す。すると右手の武器が消えて五本の指が現れた。

「はあ、やっぱり人型兵器は五本指なんだなあ…」

「この機体絶対高性能機だよ。アニメなら」

「全くだな」

機体をそのまま前に動かし明かりーボタンを押す。

プシューーと音がして辺り一面壁だらけだった格納庫らしき所の一部が割れ、この機体が歩ける程の道ができた。

「道…出来たな」

「これで進めるな」

サイドサブボタンを押し右手に武器を待たせて、ペダルを押し機体

を前に動かす。

ふとサブのボタンの隣にサブモニターと書かれた枠を見つけた。

「モニター…あるじゃないか!」

すぐさまそのモニターボタンを押す。するとモニターの右上に小さなモニターが出て来て何かを表示した。

「どうした?何をキーモニターのボタン、だったか?」

「押しただけが…これか?」

モニターと囲われているボタンをモニターキーメインモニターの明かりで押しまくる。

「これキー来た!リーダーだ。動くか?」

サブモニターにSystem S. up《システム起動》と表示され、棒線が少しずつ伸びていく。

「これで周囲のデータが見ればキーあわよくば出口が見つければ…」

「そうすりゃ出れる。アフィン、忘れてないよな?」

「えっ?…あ、ああ、分かってる。アイスだろ?」

「覚えてんじゃないか。取り敢えず、此奴の起動が終わるまでは待機だな」

サブモニターを指差しスティックとペダルから足を離す。

「あとさ。凄く言いにくい事言っついていい?」

「な、何だ?」

「アフィンってさ?こんなキーこの至近距離で女の子と話した事ある?」

「えっ?そ、そりゃ…ねえ?」

「アフィンの股間。当たってるよ」

「キーし、仕方ないじゃないか!こんなかわキー女の子を膝に抱えて結構経ってるんだぞ!」

「まあ、確かにな?それは経験キーする前になったから無いけど俺も今アフィンと同じ状態になったらそうなるしなあ…」

「経験?なった?キーまさか!」

「んあ?」

「相棒ーいや、ユウナちゃん！」

いきなり両肩を掴み前後に動かす。お前肩はどうした？

「ユウナちゃんって！処女膜あるの☒」

「そうに決まってるだろアホエルフ」

後ろを向けないから左関節を思いっきりアホエルフに叩き込んでやった。

「ごめんって…本当に御免なさい！」

「…」

一悶着あつた後、無事にレーダーが起動し、周囲の情報が3DCGで映るようになった。

止まっていた機体を前進させ出口と思われる所に今は向かっている。

「今度銃買ってあげるからさ！ね？」

「…」

俺は子供か？…いや、今の外見だと子供なのか？

そんな事を考えていると急に甲高い音が聞こえた。

「な、なんだ☒」

左サブモニターにEnemy radar Detection
《敵レーダー波探知》と表示され、右サブモニターに敵のレーダー波を逆探知して、敵の位置が表示された。

レーダーにはFriendlyの文字は無く、Enemyの文字しか写っていない。

「ねえ☒相棒☒ヤバイんじゃないの☒」

「…大事だ、さっきの処女云々の話よりはマシだ」

敵のいる位置に壁越しに照準を合わせる。ステイックにロックのボタンが有るが…これ押すと敵にもレーダー波が飛んで探知ーと思つたが既にロックされている以上、関係ないか。

「交戦するぞ、舌噛むなよ！」

「お、おうー！」

ペダルを思いっきり踏み、大きな通路に出る。

出たと同時に敵にロックオン。敵の方にモニターを固定させる。

ズドンッ！と大きな音がして機体が揺さぶられる。

「うわあああ！」

「ッ！しっかりしろ！次！来るぞ！」

ダメージを気にせず大きな通路を進む。

有る程度近づくと此方の射程圏内に入ったのか左右の武器の残弾の所にロックと表示された。

「よしきたー！」

左右のステイックのトリガーを引き弾をばら撒く。

3秒ほど撃つて中々大破しない、と思い急遽ロックを外し敵の持っている大口徑砲を撃つ。砲身でも壊れれば突破出来ると考えていたが適当に撃った何発かが見事に弾薬に当たり爆破、余波で敵兵器も誘爆した。

「…っはあ…死ぬかと思った…」

「なあ、相棒、俺生きてる？」

「…多分な」

「…相棒の尻尾のモフモフを感じるから生きてるなこれ」

「ああ、そうかい。んじや進むぞ」

モニターには大きな通路を4キロほど直進した後左に3キロで出口と書かれていた。崩れてなければいいが…。

24 話目

「此処をーって扉、無いじゃないか」

機体を動かして約2分。モニターに表示された通りに向かうとやはりと言うべきか、壁しかなかった。

モニターに連動するスティックを動かし周りを見るもそれらしきものは無し。

「アレだろ？どうせどつかにサブアームで押せって言うんだろ？」

「……コンソールは……それらしきものはないな」

もう一度、スティックを振り頭部を動かし、見落としがないか探すが、コンソールらしき表示は出てこなかった。

「アレか？撃つのか？」

「それは最終手段だ。……まあ、簡単に使うんだけど」

扉と表示されて居る所からブレーキペダルを踏み込む。機体は後ろに歩き出し始めた。

少し離れた後、スティックを動かしドアらしきものに手動で武器を向ける。

「お、おい相棒、撃つのは最終手段じゃー」

「アフィン、取れる選択肢が無ければ最終手段が最初の手段になる」

照準を扉ーいや、今は壁か。壁に合わせてトリガーを引く。

「それ最終手段って言わないって！」

壁に向けて両手から放たれた弾丸が襲う。

ほぼ水平に撃つたのにもかかわらず何故か壁が壊れない。

と言うか煙で見えない。

「おかしい……少し下がるぞー」

機体を後ろに下げ煙が晴れるのを待つ。

「おい相棒……壊れてないぞ……？」

「おかしい……何ミリの銃弾かは分からんが……無傷、なのか？」

大体こう言うのって徹甲弾がメインの弾丸ー砲弾？の筈なんだが……。仕方ない。

「……モニターで他の場所ーエグジット、だったか？」

「えぐじっお？なんだそれ？」

「…出口…確かそんな意味だったはず」

正直俺も英語はそこまで詳しくない。意味もあっていたか最早分からない。

モニターを色々触り exit と選択する。何箇所か点が表示された其処に W・P と書かれている。…これで出口に向かえば良いが…。

「…待て。モニターの倍率を上げれば此処の全体図見れるか…？」

だがそんなボタン何処に…モニターの周りに合ったりしないか？

モニターを手で触りそれらしきボタンが無いから探す…無い。カーナビとは違うようだ。

「此処からさらに先…4キロか…」

「4キロ…そういやコイツの燃料って何だ？フォトンジェネレーターか？」

「なんでこんな惑星にそんなフォトンジェネレーターを使った人型兵器があるんだよ。多分化石燃料…だろう。多分」

「化石燃料？なんだそりゃ？」

「ああ…色んな生物の死体？化石？からこう…なんかそれっぽい燃料が出来るんだよ」

「フォトンジェネレーターと違うのか？」

「フォトンジェネレーターは確か…何も出さないクリーンなエンジン…エンジン？…だろ？此奴みたいなエンジンは空気を汚すんだよ」

「その化石燃料って目に見えるの？」

「そりゃ水みたく見える物質だからな…」

「じゃあそれって有限じゃない？」

「……そうだな」

「それって後どのくらい残ってるの？」

「それを見るには燃料計を…燃料計何処だ？オイル、オイル…」

オイル、オイルと言いながら各種装置を見ていく。

「オイル、オイル、オイル」

「相棒、アレじゃないか？」

一箇所を指差すアフィン。其処にはFuel gaugeと書かれていた。

「フュール？フュールか…」

針は八割を示している。充分だ。

「燃料は大丈夫…取り敢えず表示されているように、最初の…W・P1？に向かおう。ー道順モニターにオーバーレイ出来ないのか…？」

「おう、分かった」

壁からモニターを話し来た道を道順通りに進む。

「…おかし…四脚群を見ないぞ…？」

機体を動かしW・P1に向かう途中、1機も見かけなかった。見かけなければ踏み潰す心配は無いとはいえ…。

「確かに…あそこだけでもあんだけ居たんだ。それこそダーカーみたいに…」

モニターにもFriendlyと言う表示もされない。もしかしたら変なボタン押して表示されないようにしたかもしれないが無いが。

「ふむ…」

「…」

話す事が無い。

そもそも何故こんな辺鄙な惑星にこんな浪漫溢れる人型兵器があるのか。

アレか？この惑星の原住民ー今はこの機体の放置具合から言つて居なさそうだがーは戦争大好きで仕方ない原住民だったのかな？

そう思うとあの四脚群も無人機つという事で大量量産して敵地に航空機か何かでばら撒けば攪乱できるし…。

「…案外シャレにならない所に来たのかもしれないなあ…」

「？…どういう事だ？相棒」

「いやな？…なんでこんな惑星にこんな浪漫機体があるのかなあつて」

「……確かに……なんでだろう」

「…まあ、戦争用だと思いがな」

「…戦争って…戦争ってなんだよ?」

「えっ?」

戦争、というの言葉に反応するアフィン。待て待て、なんだ?このーいや、オラクル船団には戦争って言う概念が無いのか?」

「ああ…そうだな…ううむ…」

「…そんな説明しにくいのか?」

「…ううむ…そうだな、俺達がやっているダーカー殲滅戦。これもある意味戦争…戦争か?」

局地戦な気がするが…相手は幾らでも湧いて来るし。

「ああ?だってそれは、ダーカーは俺達が3種族が生き残る為だろ?戦争って生き残る事なのか?」

「…うーん?生き残る事は大事だが…なんて言うんだ?自分と合わない人を攻撃するって言うのがすごく簡単な戦争…戦争?」

戦争とは何だ?

「ううむ…すまん、相棒。俺には分かんないや」

「それで良いさ。そんな事を考えるより先に脱出しないと」

甲高い音が鳴り機体がW・P1に到着した事を告げた。

「W・Pは何個だ…3個ー3個目が出口だから後2個か…」

「もう少しか?」

「ああ、もう少しでー」

甲高い長めの音が一回、短めが5回、急になり始めた。

モニターにL o o kの文字。ロックの文字の周りの円の円の一部が赤くなる。

「何だよこれ!」

「くそっ!ロックされた!動くぞ!」

ペダルを思いっきり踏み敵がいる方向を向く。

「なんだいありや!四脚群がー」

一体だけ、と言おうとしたら後ろに大量の敵マークが。

「くそっ!出口は向こうなのに!攻撃するぞ!」

「りよ、了解!」

左右のトリガーを押し銃器から弾丸が発射される。
キンキンキンキンと甲高い音が断続的に発射される。

弾丸が敵に当たるとびに爆発、木っ端微塵にしていく。

「コレは、榴弾か□APじゃ無いのかよ！」

「榴弾□榴弾ってなんだよ！」

「当たった瞬間爆発する弾だ！アフィン！習わなかったか□」

ロックオンせずステイツクを動かしながら敵のいる所に弾をばら撒く。

モニターの照準器の左右の残弾数がみるみる減っていく。

「残弾数がもう無いな…よし、アフィン！突破するぞ！」

「突破!?？まだ敵はー」

「律儀に相手してたら弾が無くなる！行くぞ！」

ペダルを思いっきり踏み込み進む。思いっきり踏み込むとモニターにBoostと表示され走るより早く動けた。

ブーストモードで敵を吹っ飛ばしながら俺とアフィンはW・P2をを目指す。

25 話目

「よおし、W・P2に到着…アフィン、生きてるか？」

顔を後ろに向けアフィンを見る。

「…ああ、死んでるよお…」

「無駄口叩けるんなら大事だ。残るW・Pは後一個。それで脱出出来る…」

「本当に脱出出来るのかなあ…」

「…す、スター、てい、テイニング、カタパルト、発進口？ 的な事を書かれているからまあ、多分その筈」

サブモニターにはStarting catapultと書かれておりW・P3の場所がそこになっている。

「また敵と会ったらどうすんだ？」

「…残弾的には…キツイな」

モニターの残弾計には左358、右23…右の銃は弾なしと扱っても良いだろう。

「左358発、右23発…右はもう無いな」

「左見たくチェンジボタン押せば何かあるんじゃないか？」

「…押すか」

その場で機体を止めて、右チェンジボタンを押し武器いや、持ち替える。

残弾計が数秒0になり…左もゼロになった。

「どういう事だ？」

「多分、両手で保持する武器だと…思う。いや、武器であってくれよ」
そしてモニターに現れたのは多数のバレルのある銃器…ガトリングだった。

更に数秒後、右側の残弾計が9999発になり、その数字の横に小さくx5と表示されている。

「…ガトリングガン…動くのか？」

「待ってろ、今引く」

トリガーに指を少しかける。

するとガトリングのバレルが回転し始めた。

「お、あ、相棒、大丈夫なのかこれ？爆発しない☒」

「多分。いける…試射するぞ…」

更にトリガーを引き弾を発射する。

ギューイイイイーとガトリングにしては少し遅めの発射レー
トー多分、さつきまで持っていたライフルらしき物の方が発射レ
トはある気がする。

「撃てた…撃てたぞアフィン！」

「やった！残弾数は☒」

「9980と9999×4だからー49976発…か？」

「十分じゃないか！」

「ああ、敵地で弾なしってのは回避できたー最も、もうすぐ脱出出来
るが」

モニター上、サブモニターを指差す。サブモニターにはW・P2
W・P3 15 ETA Error と写っている。

「いや…相棒、俺この言語読めないし」

「ああ、すまん。えつとだな、W・P2からW・P3ー出口だなー
まで15ーキロだよな？多分。到着時刻…エラー…？」

「なんでエラーなんだ？」

さつきまで伸びていたアフィンが口を出す。

「…多分アレじゃないか？俺達今止まってんじやん？」

「ああ」

「止まってるから目的地に絶対着かない。イコール到着時刻が算出
せない、て事じゃ？」

「ああ…成る程。んじや動けば良いわけか」

ペダルを踏み機体を少し動かす。

「…うむ…まだエラーだ」

「とりあえず、そのまま地図道理に真っ直ぐー」

突然鳴り響く警告音。この音はーさつき大量に敵と交戦した時
の警告音！

「相棒！この音！」

「そうだ！またくるぞお！」

モニター左右が赤くなる。どっちだ？いや、こういうので良くあるのはー。

「ケツかあー！」

モニターと連動したステイックを右に振り、モニターが今まで向いていた後ろ側を見えるように振る。

するとモニターには多数のEnemyの文字。隣にはSpar, GやSpar, Aと書かれている。

「アフィン！迎え撃つぞー！」

「俺に言っただって何も出来ねえよ！」

ロックせずに敵が来るであろう場所にガトリングをばらまく。

数十発が敵四脚群に当たり爆発を連続で起こす。

その都度モニターにDestroyと表示される。

「ー見ろ！相棒！あの四脚！」

「ああ！どの四脚だよ！」

俺の後ろから指を指すアフィン。

「あのーほら！アレ！」

「あれえ☒あのGって書いてあるやつか☒」

「わかんねえけど、多分！その頭に主砲ついてる！気をつけろ！」

「マジかよ！奴を優先的にやらなーきゃ！」

「うおー！」

コックピット内を甲高いーそれでいて機体の合成音ではない音ーが響く。

するとモニター左上ー左上モニターに被らない程度ーにこの機体の機体図面が出てきて一部の色が変わった。

「くそっ！何処だ☒どっから撃たれた！」

「分からないよ！機体は大丈夫か☒」

「まってーいや、大丈夫だ！弾いた！」

多分赤じゃないから大丈夫の筈…。

図面から目を離し再び敵を倒すためにトリガーを引き続ける。

ズドンッ、と音がなり最期の四脚兵器が大破、爆発した。

「勝った：勝った、のか？」

「勝ったんだよ、多分増援は無いーいやむしろ来るな」

サイドステイック兼トリガーから手を離す。

サイドステイックが手汗でベトベトだ。

「よし相棒。今の内に出口に向かおう。もうこんな空間いやだ」

「そうだな：いや、このままバックで行こう」

「ー何で？前向いて走った方が速度出ないか？」

「それもそうだが：もし前向いてる時に敵が攻撃してきたら？」

「う、ああ、そうか」

「そういう事。こういう奴って大体背面装甲無いから、背後からやられたらもう、ね：？」

別のペダルを踏み敵が出てきた所をモニターで警戒しつつゆつくり下がる。

「ーあつ、相棒、あそこの文字が変わったぞ！」

「ーあつ、本当だ。ETA30：30分つて所か？」

「30分も☒」

「まあ遅いバックだからな：そりや遅くなる」

「あと30分もこんな狭い空間で：もう」

「何だ？そんなに俺が嫌か？」

「い、いや、違うんだ：その」

「：トイレか？」

「いや、トイレじゃなくてー」

「ーああ、アフィンの股間の事は気にするな。よくある事だ」

「ーああ、そうなのーっなわけあるか！」

すると突然アフィンが耳元で大声を出した。

「：ツ：おいアフィン！俺のミミは敏感なんだ！そんな大声で怒鳴るな！」

「あ、ああ、ごめんーじゃなくて！」

「なんだよもう：」

「股間の事は気にするなって、どうい事☒」

「ああ…うう…アフィン、忘れて？」

「忘れられつかあ！第1、今だから言うけど相棒…ユウナは警戒心が無さすぎる！皆無だっ！」

「はあ？俺の何処が☒寧ろ警戒心ピンピンだろっ！」

「相棒の警戒度は尻尾とミミ見れば分かるの！第一普通考えない☒こんな狭い所で男女二人つきりっ！」

「でもアフィンは手ださないでしょ？」

「うん、まあ…出したいけど」

「ううむ…そんなに可愛いか？俺」

「俺的にはもう…」

「アレってか？なんだかなあ…」

「…：軽蔑しないのか？」

「いや…軽蔑も何も俺もしていたし」

「そうか…：んっ？していた？」

「今はもう無いがな」

「…：相棒、していたってどう言うー」

アフィンと夜のお話をしていた所、モニターにCautionの文字が。

その下にはEnemy Approachingー敵接近、と書かれている。

「敵接近☒またかよ！どんだけ来るんだ！」

「ー意味、ってまた敵！」

「敵の名前はータランマイザー (Transmizer)？」

「マズイぞ！まだー多分距離が有るぞ！」

「…仕方ない。一度出口まで全速力で逃げるぞ」
機体を出口に向けてペダルを踏み込む。

モニターにBoostと表示されすごい速さで出口に向かう。

「これで振り切れれば…！」

「頼む…生きて帰らせてくれ」

サブモニターのETA表示が30分から20分、10分に少なくなり最期には1分未満になった。

「おい！見ろアフィン！明かりだ！明かりが見えるぞ！」

「来たっ！」

「行くぞっ！」

出口を通った瞬間、光に飲まれた。

26 話目

「くそ…脱出できたか…?」

モニターには辺り一面茶色―砂漠が広がっていた。

先程までの真つ暗な格納庫的な所とは違う。

モニターのお陰で明るくなった為、コンソールをじっくり見ることが出来た。

一番右側にH a t c hと書かれたボタンがある。これでハッチに
関するものは一つしかない。

念の為モニターやサブモニターを使い周囲に敵の反応がないか確認する。追って来ていた敵も居ないみたいだ。

ハッチボタンを押し―予想通りコックピットハッチが開いた。

真つ暗に慣れた目に鬼の様な輝きを放つ太陽らしき星。

「生きて、出られた、か…」

格納庫から出たお陰がマグがオンラインになりこの辺りのデータを受信する。

「…帰艦だ。帰艦しよう」

マグを操作し、至急救援をキャンシップシップに要請する。

『こちらラミア、アークスシップ管制員です』

「ああ…任務番号452の任務を遂行して居た…ああ…ユウナだ。デカイ土産が出来た。ああ…」

さて…この兵器をなんて言っって持ち替えるか…そのまま言えまいか。

「敵の大型兵器を鹵獲―いや、奪取?した。目測で10メートルちよつとある。このデカブツと俺たちの回収を頼む」

『―452、遺跡群の調査、ですね?了解しました。至急サーレクス隊とを通信座標に向かわせます』

「分かった。」

本部がサーレクス隊―何時ぞやの大型機を回すとの事。

コックピットから抜け出しコアパーツの上に立つ。

辺り一面茶色―砂漠だ。だが俺たちが先程まで居た真つ黒な格

納庫とは確実に違う。

眩しい太陽らしき惑星が俺の真っ白の肌を照らす。

「…なんで俺はこんな身体になっちまったのかなあ…」

何故こんな事を今思ったか。

ここ最近色々とおかしな事があり過ぎた。

女の子になり、この身体とそっくりな敵に命を狙われーてるのはもう一人の方か。

訳わかんない変な黒い生き物と戦わなくちゃいけないし、俺が居た地球より遥かに技術レベルの高い宇宙船団の一員になってたりー。色々とありすぎる。それにー。

「この身体なあ…」

ムニムニと自分の胸を触る。

この小さい手に伝わる重さ。

「…経験せずに死んだからなあ…」

胸から手を離しコアに座る。

砂まみれの風が俺の灰色の髪を駆け抜ける。

「…これコックピットにいた方が良い…かな？」

そんな事を考えていると下から声が聞こえた。

「…んあ…ここは…あれ？脱出ーうお眩しっ」

コックピットを開けて太陽らしき星の光でアフィンが起きた。

「おうアフィン、脱出出来たぞ」

コックピットの縁に手を置き頭だけコックピットを覗く。

「ーって言うことは生きて帰れるのか！妹に会えるのか☒」

そう言いコックピットから這い上がってくるアフィン。

「その前に」

指を鳴らしアフィンを見る。

「奢りね？」

「……っあ…」

「…おい？どうした？返事は？」

「…いや…」

可愛くて、と言う超小さな声でアフィンから言われた。

「ほおう、そうかそうか可愛いか…中々照れるものだな。言われると」
「聞こえてんのかよお！」

「当たり前！俺の種族をなんだと思ってる！」

胸を突き出し右手でミミを、左手で尻尾を指す。

「…：テンション高いなあ…」

「可愛いって言っついてそれかよ」

「…：なあ相棒ーいや、ユウナちゃん」

「全くこれだらーん？なんだ？」

「俺と付き合ー」

「ーまだ、だな」

「ーってーってまだ言い切れてないって！」

「あのなあ…まだ早いつてえの。アフィン、何歳だ？」

「16だけど…」

「そうだな…20まで待ちたまえ」

「20って…もう同期で子供作ってる友達もいるんだせ☒」

「それはそれ、これはこれ、だから」

16で子供って…アークスには18以下は云々カンヌン無いのか

…？

いや、そもそもアークスにそう言う法律的なのはあるのか？考えれば考える程沼にハマリそうな気がする…生きて帰れたら調べつか。

「付き合う以前にまず友達からーってこれはもうなってるか。いや、友達って言うか相棒か」

「ーはあ、まあ、相棒の事だからこんな事だろうと思つたよ。正直嫌われるまで想像してたし」

「まあ、普通の女の子なら嫌うだろうなあ」

「…：自分が普通じゃないって自覚あるんだ…」

「当たり前前、第一どんな考えを持っていたらあんな痴女みたいな戦闘服を着るんだか…」

「…：そう言や相棒の戦闘服って露出無いよな。なんで？」

「何でって…そりやお前嫌じゃん」

「いやって何が？」

「肌見られるの」

「オレ達男は堂々と見れて良いと思うけどなあ」

「あのなあ…はあ…いや、良いや。言っても分かるまい」

「ああ……だって露出高いとフオトン係数上がってダーカーを倒しやすくなるよう…」

「その理論で言ったら女は全裸でダーカー殴れってか？シユール通り越してホラーだそれは」

「ああ…まあ、そうなる、かなあ？」

「……言つとくが今来ている戦闘服…これだって結構我慢して来ただぜ？」

「…何処が？」

「…このスカート！短すぎんだよ！スースーしてしようがねえ…今は落ち着いたがな」

「…んじゃ逆に相棒はどんな服が良いんだよ？」

「ハンター戦闘服ってあったじゃん？あれ」

「ガッチガチのやつ来たなあ…あれの女の子版なんてあるのか？」

「無い」

「だよなあ…彼処の会社、社長が女関連で酷い目に遭ったらしくて作らなくなっちゃったらしいし」

「ほんくそ。誰だよその社長に関連した女。さっさと逮捕してくれよ」

「ううん…無理かなあ」

「……ところでさ、さつきサーレクス隊が救援に来るって要請送ったんだけど…来なくね？」

「要請送ったのか！良かった。これで本当に…」

『此方サーレクス隊！敵大型可変機械と接敵！追跡されている！救援は困難！』

突如聞こえる無線。主は俺たちを拾う予定のサーレクス隊からの物だった。

「サーレクス隊、聞こえるか！」

『救援予定のアークスか！現在敵大型可変機械と接敵…ミサイルツ

「チャフフレア及びノッカー放て！」

通信の裏からは同じく帰還中と思われるアークスの悲鳴が。

「サーレクス隊！此方の位置が掴めるか！」

『通信座標は確認済みだ！だが後ろの敵機がー』

「此方で引き受ける。こつちに来い！」

「おい！相棒！」

『助かる！左旋回！行くぞ！』

そう残し通信終了。

「おい相棒！行けんのかよ！」

「やるしかあるまい。出来なきや死ぬだけだ」

言ったものの右手が震えるのが分かった。

「アフィン、コックピットへ、お前がいなくちやしつくり来ない」

「ああ…なあ？さっきの言葉告つー」

「告つてなんか無いからな？」

「ーはい」

コックピットにアフィンが最初に座りその次に俺が座る。

「よおし…ハッチ閉鎖」

プシュ、と音がしモニターにもう一度光が灯る。

「システムチェックーっん？」

システムチェック時に一瞬Weaponの所が赤くなったがすぐにNormalになった。

何だったんだ？今のは。

「相棒…今一瞬赤くならなかったか？」

「アフィンも気づいてたか…だがガトリング…考えても仕方ない。相手はサーレクスを追い回るくらいだ。高速戦になるかもしれない。

アフィン、目を回すなよ？」

「相棒こそ。相棒が目を回したら俺も死ぬからな」

「任しとけーサーレクス隊、聞こえるか？」

『此方サーレクス隊、どうした？』

「此方は奪取した大型兵器を使いそちらの大型可変機械の迎撃を試みる。相手はどのくらいの速度か？」

『此方は現在12…67kmで飛行中、相手は少し離れてついて来る』
「1267キロ…マツハ1か…ガトリングで弾幕張るしか無いか？」

『此方はミサイルみたいなこと高出力兵器を喰らえば持たないが40
ミリ迄なら耐えられる。そちらの武装はどうか？』

「40ミリ耐えるのか…すげえな、ガチガチじゃ無いか」

「全くだ。40ミリを耐えるなんてどんな装甲だよ…此方の武装は4
0ミリ以下の可能性大、弾幕を張る為注意されたし」

『了解した。頼むぜ可愛い声のアークス。後ろにも何名かアークスが
乗ってるんだ。俺含め死なせないでくれよ！アウト』

そう言いプツリと通信が切れる。何でこうプレッシャーを上げて
来るかな？

「だと…重くなるねえ本当」

「でも、彼処から脱出出来たんだ。オレ達ならやれる。だろ？相棒」
「勿論だ」

「ところで相棒、後で写真ダメ？」

「使用用途によるな」

27 話目

「なあ相棒、友軍機は何処から来るんだ？」

コックピットにまずアフィンが座りその上に俺が座っている。

「何処からって…聞いてなかったな。…この機体の中からでも行けるか？」

マグを手元に呼び通信履歴を探る。

サーレックスの履歴…一番最初にあつた。

「アフィン、俺は操作に集中する。通信はアフィンがしてくれ」

サーレックスへの通信を一度アフィンのマグに譲渡する。

「俺が☒…ああ、ああ！…」

「ミミ元で大声出すなつて…」

「此方アフィン、聞こえるか？相棒…ユウナから通信が変わった」

『あの可愛いアークスにも彼氏がいたか！まあ、それもそうか。用件はなんだ？』

「侵入経路は…侵入方角は分かりますか？」

『方位2-4-5より其方の通信座標に向かう。速度は落とした方が
良いか？』

「…だつて？どうする？」

速度を落とす…？落としたら攻撃モロ受けしないか？

逆に落とすメリットは…背後の敵機も速度を落とす俺が狙う時間を稼ぐって事か？いや、だが…。

機体を動かしモニターの方位とサーレックス隊が侵入して来る方位を合わせる。

「落とすつて、機体は耐えられるのか？」

『大丈夫だ。幸いな事に奴のミサイルは遅い。その代わり炸薬はタツプリな気がするがな。機銃弾も今の所エンジン部を狙ってない。だが奴の気が変わる前に落として欲しい』

「分かった。速度は落とさずそのまま…いや、やっぱり落としてくれ。ただし敵との距離は離してくれよ」

『了解、頼むぜ。此方は後5分くらいで着く。準備を頼むぜ。ター

ゲットがそつちに向かったら此方も援護を開始する』

通信終了、とマグから表示されるホログラフィックに表示される。アークス言語だが。

「だって、相棒」

「アフィンお前…通信中は名前で言えとあれーいや、言ってなかったな」

「ごめんごめん、つい癖で…」

「初対面の人に相棒呼びはちよつとな。それにー」

「相棒、リーダー、だったか？それに反応があるぞ？」

「ーんっ？」

アフィンが言った通りに右上のサブモニターに二つの点がある。

一つ目の点がUnknownー多分サーレクスだろう。二つ目の点がーTransmizer。

「タランマイザー☒さつき追ってきた敵機じゃないか！あいつ飛べるのかよ☒」

「タランマイザーだつて☒脱出する時には背後から追ってきた奴か☒」

「多分そうだと思う。見ないとわからないが…にしてもまさか飛べるとは…この惑星に、一体何が…」

「さあ、それはおいおい分かるだろ？それよりも、今は目の前の敵を倒そうぜ？」

「…そう、だな。原生物倒すよりは楽だ」

「…急にどうした？」

「…いや…なんか…」

「そうか…相棒、そろそろー」

「ああ、分かってる」

モニター奥に二つのボックスが映った。手前がUnknown、奥がTransmizer。

奥のタランマイザーの進路上に照準を置き弾幕を張る準備をする。

「来るぞ…行けるか？」

「行くんだよ。やるしかない。帰れなくなるからな」

照準器をサーレクスが飛び越えた。

「相棒！」

「分かってる！」

トリガーを引くのと同時に照準をタランマイザーの進行方向に動かす。

ガトリングガンの曳光弾が線を空に描き、何発かが敵に当たる。

『うおー！アークスさんよ！エンジン部には当てないでくれ！ー！うおっ！火を吹いたぞ！落ちたか☒』

通信が入ってきた。弾幕を張ったお陰でタランマイザーが落ちたらしい。

『アークスさんよ、聞こえるか！今から着陸するからその機体を後ろにどうにか積んでくれ！』

通り過ぎたサーレクスが旋回して戻って来て機体の前に貨物室を開けた。

「相棒、入れるか？」

「やってみるーやべつ、ぶつけた」

『その程度は問題ない。早く入って上に来てくれ』

貨物室の空いている所に機体を動かし其処に止める。

「えつと…逆手順、か？」

ハッチを解放、各種スイッチの停止、で良いのか？

「アフィン、先に出ろ。後が続くから」

「分かった。相棒も早く来いよ？」

アフィンを先に出しその他スイッチを弄る。高さはまだ余裕有るし、いざ動かなくなってもそのまま運び出せば良い。

ステイック類とペダルが動かなくなったら機体から出る。

機体から出ると、下の方で他のアークスがアフィンの手当てをしていた。

肩から腕、腕から脚に飛んでおっかなびっくり降りる。

「はいはい、貴女がこのデツカいのを動かしていたの！」

どうにか降りれた所に女性の声を掛けられた。

「ああ、そうだが…君は？」

「君とは失礼な！私は全てのアークー」

「はいはい、馬鹿姉は退いてもらってー」

目の前の少女が自己紹介をしようとした時、背後から来ていたもう一人の少女に遮られた。

「私はティア、この隣の馬鹿はパティって言うの。宜しくね？」

「俺はーユウナって言う。宜しく頼む」

汚れている手を服で吹き、手を差し出す。

「ねえティアー！これ凄いよ！カッコいいよ！」

見ると先程まで後ろにいた少女ーパティがいつのまにか俺の背後に回り機体を見て騒いでいた。

「…良いのか？」

「馬鹿姉はほつといて。私達、実は情報屋をやってるの」

「情報屋？あのー…：すまん、情報屋って具体的には？」

「そうね、具体的にはアークスに関する事、かな？」

「アークスに関する事？」

「例えば私達が普段使っている武器、此れの新型のテストとかアークスが提示する高額任務とか」

「怪しい謳い文句にしか聞こえんなあ」

俺とティアが話している最中も後ろの方で曰く馬鹿姉がうおー、とか、うほおー、とか叫んでいる。…あれで良いのか？

「まあ、とりあえず詳しい話は上に行かない？」

「頼む、正直サーレクスに乗るのは初めてなんだ」

「ひひっ、っていう事はサーレクス処女だね!?!？」

「うお」

なんて事を話していたら後ろにいたパティが前に回り込んで来てこう言い放った。

「こおの馬鹿姉ッ！良い加減にしろッ！」

「ほおばああ！」

ティアにグーで頭を殴られて絶句しているパティ。パティってティアが馬鹿姉って言ってたから姉なんだよな？

「仲良いな」

「馬鹿姉が馬鹿なだけなんです！本当なんでアークスになれたんだから…」

「それはこのパーティちゃんが戦闘に強いからですよっ！」

パーティが胸を強調し俺に言ってくる。……ぶっちゃけ俺の方がデカイ。

俺とパーティの一部を交互に見るティア。残念だが…。

「……一応私とパーティでパーティエンティアって言う情報屋をやってるの。アークスの仕事の傍らね？」

「今回もアークスの仕事ついでに民間のー」

「こら馬鹿姉！クライアントの話はしないんでしょ！」

…こんなんでも仕事が来るとか余程アークスは民間との繋がりが無いか、この2人が優秀かのどちらかなんだろうなあ…。

「そうだった。ごめんごめん。えっと…」

「ユウナだ。宜しく」

「パーティです！よろしくねっ！」

そう言い両手を挙げてタツチを要求して来た。

それに答え両手を挙げてタツチする。

「いええい！貴女中々ノリいいわね！」

「そりやどうも。それより座る所ないか？」

「それなら上にあるわよ。一緒に行かない？」

「頼むわ」

そう言い2人は俺の前に出て座れる所に案内してくれる。

28 話目

ティアの案内で機体上部にある休憩スペースに備え付けられた椅子の所まで案内された。

座ってさっきの話の続きを始める。

「それでー情報屋って何だ？」

この問いにティアが答える。

「さっきも言った通り、情報屋って言うのはアークスに関する情報を扱って居るの」

「そうそう！例えば…何だっけ？」

「…アホな姉は放って置いてーアークスが高価買取する素材、モンスター情報を拾って来たりー」

「噂なんかもあるよー！」

「…噂って…どんな噂だ？」

「うーんとねー…この砂漠の惑星リリーパ！」

「急に説明口調になったわね…」

ティアが自分の姉をジト目で見る。この様子だとどっちが姉だか…。

「この砂と機械兵器群しか居ない惑星に謎の生物が！」

「生物…？そんなの居るのか？」

俺達結構深い所まで行ったと思っただが…機械しかいなかったぞ？

「詳しくはまだ調査中だけど、私達より小さくてー膝くらい、かな？」

「でもでも！近づこうとするとサツサと逃げたり、気がついたら居なかったりで見れないんだよねえー！」

「そうか、居るのか、生物」

そう思うと砂しかない惑星でも少しーなんかいいなって思う。此方に友好前提だが。

「うんーなんでも機械群に襲われて居るところを助けた、とか色々話が上がつてるよー！」

そうかそうか…機械群に襲われているのを助けー助ける？

「……待てよ？その生物って今の所、この惑星の生物、なんだよな？」
「今の所はね？」

「なら何故襲われる？」

「…貴女もやっぱりそう思った？」

そうティアが言った。一方隣でパティはその生物はどんな形でこんなのが良いなあ、と一人で喋っている。

「そりやそうだろう。この惑星の生物ーめんどくさいな、原住民、で良いか。んでこの原住民がこの惑星の各種機械を作ったなら…何故味方の機械群に襲われる？」

「最初は暴走して居る機械に襲われていたって線考えたのだけど…大体聞こえる情報が襲われて居る所を助けた、なの」

「暴走説は無し、か…」

「あれれ？私置いてけぼり食らった？」

「パティちゃんは黙ってジュース飲んでて」

そう言いティアは飲みかけのジュースをパティに渡した。

「となると…あの機械群を作ったのは別の惑星から来た生物、か？」

「…私は今の原住民は後から生まれた、って考えたわ」

「…成る程、今いる原住民の前の原住民がこの惑星の各種機械を作って、それからどっかに消えてその後生まれた原住民が今確認されている奴、か。案外当たってるかもな」

「でしょ？貴女のーユウナちゃんの考えは？」

「俺のか？そうだな…まあ、無いと思うが今の原住民の元がペットみたいな奴で飼い主がー此処はティアと一緒にだな。消えた後、野生化して今に至る…どうだ？」

「うーんどっちもありそうねえ…」

「ああ…攻撃してこないだけマシ、かな」

今までティアの隣でジュースを飲んでいたパティが俺の顔を見るなり騒ぎ始めた。

「ー…ティアちゃん！この人ビーストだよっ！」

考え耽っているとパティが俺の頭を指差して言った。あれ？今頃？

「こらッ！指差すんじゃない！ー！ー！ー！すいません、本当に…」

ティアのグーがパティの頭を殴り、ティアが殴った手を摩る。痛かったのか。痛くなる程の力で殴ったのか。

「いや、慣れているから良いさ。それより大丈夫か？」

「ごめんなさい！ー！ー！フォトン纏わせるべきかしらー！ー！気を悪くしたらー！ー」

フォトン纏わせたらそれ死なない？！ダーカー特攻だけだったっけ？

「ねえティア！撫でて良い☒」

「パティ！」

「良いさ」

「やったー！」

そう言い席を立ち俺の後ろに来るなりミミの間を撫でるパティ。中々気持ち良いかも知れん。

「うはー！えっ☒ニューマン☒ニュースビースト☒」

「んあ？何だ？珍しいのか？」

「珍しいも何も、アークス内にビースト自体そんなに多いもんじやないから…！ニューマンの方が多いけど」

「ビューマンビーストは割りかし居るって聞くなあ…！ビースト自体この距離で見たのは初めてだけど」

「…そんなにビーストって居ないのか？」

「だって産まれが…」

「…そうだったな」

「その…失礼だけどお母さんは…」

「…！察してくれ」

「…！やアフィンにこの前言われて全然調べてなかった。もはや調べる気すら起きないけど。」

「…！ごめん」

「良いさ。慣れているー！そうだ。パートナーカード、あるか？」

「そう言えばそうね。交換しないと」

「マグを呼びフレンドリストにティアを登録する。」

途中で撫でるのを止めさせパティもカードを交換する。

止めて交換しよう、と言ったとき少しパティがゴネたのは内緒だ。ロー果たしてどっちが姉なんだか。

マグを弄ってカードが追加されたのかを確認していると履歴に反応が。宛先はローアフィンからか？

どうやらオラクルに戻って検査が必要らしく多分戻れない。とりあえず今回は助かった。ありがとう。

と、書かれて居た。お礼ぐらいあつて言えよーそうか今会えないのか。

「ユウナちゃん…レンジャーなんだね。意外だわ」

「元々接近戦苦手だから…」

「ねえねえティア！パティエンティアにユウナちゃん入れれば近、中、遠揃って最高じゃない！」

「パティちゃん…はあ…」

「察するよ」

「ねえねえどうかな☒ユウナちゃんもどう思う☒」

「もう少し経験積んだら考えるさ」

「…そうだ。ユウナちゃんお腹減ってない？」

そう俺に言ってくるティア。露骨にパティの話を逸らしたな？

「減ってるけど…何で？」

「サーレクスには簡易的な食事も取れるのよ？」

「すごいな…何処で取れるんだ？」

「今回はちよつと迷惑も掛けたしパティちゃんの奢りで」

「えっ☒…まあ使う事ないし良いけどね」

「ほら、本人も良いって言ってるし」

「そうか…なら甘えさせて貰うわ」

言つちや悪いがこう言うのつて腹が膨れればオツケー的な要素あるからな…正直あんまり期待しないでおこう。

29 話目

3人は休憩室を去り、休憩室奥にある階段に向かった。

「…ローテクだな」

「まあ、腐つても一応サーレクスは軍用機だし？安全面は確実ーと迄は行かなくとも確保しないとね？」

「…まあ、それに関してはパティちゃんの言う通り。ー最もそれじゃあこんな大型機は要らないって話にもなっちゃうけど」

ユウナの呟きに二人は答えた。

「…そう思うと俺達が乗っていたキャンプシップってどんだけデカイんだ…？」

「…まあ…どの位だっけ？」

「パティ…先輩面したいのは分かるけど…えっとね？確かー」

ティアはマグを呼びコンソールを出現させユウナの疑問であったサーレクスの母艦、キャンプシップのサイズを見せてもらう。

「……デカイな」

「ええ、とつても」

「大きいねえ」

答えは三者三様。

「にしてもサーレクスの他に電子戦機も載ってたとは…ダーカー相手に使うのか？」

「電子戦機？なにそれ」

「…なあティアーさん、少し言いづらいんだが…本当にパティさんはアークスなのか？」

「私にさん付けは要らないし、パティちゃんにも要らないわよ。……そうね。残念だけど…事実なのよ」

「えっ？もしかして私…蚊帳の外ッ！」

そう言い階段に倒れ込むパティ、本当に倒れた訳ではなく、ちゃんと最小限のダメージになる様にはしている。

「ああ…そうだな、電子戦機って言うのは……こう、マグの周辺地図や管制官とサポートパートナーとの通信を妨害ーって何に妨害させる

んだ？先輩？」

ユウナがパティに電子戦機の説明をしていた所、説明していた本人も分からなくなりもう一人の先輩アークス、ティアに聞く。

「先輩ツ×…ツオホンツ…妨害って言うよりは周辺地図の3D化と高精度化、位かな？それと新種のダーカーの監視」

ユウナに先輩と言われワザワザ咳をして口を整えつつ答えたティアア。

「ずるーい！ねえユウナちゃん！私にもツ！私にも言っつてツ！」

「いや、ちよつと、待っー」

「そうだツ！コレはせんぱい命令であるツ！さあ！」

両手を体の前に出し来い、と言う意思を表示するパティ。

「…ユウナちゃん、無理して言わなくて良いよ？」

「…パティ先輩？」

瞬間、パティとティアに衝撃が走るツ！

考えて見てほしい。長髪の巨乳ケモミミの付いた少女が上目づかいで先輩、と言う絵面を。

パティはユウナに上目づかいされた直後にすぐに身を引き体制を整えーた状態で固まり、ティアはその様子を横から見て固まった。数秒たち、二人が目を合わせる。

「…パティちゃん」

「…そうね、ティア。コレはダメ、ね」

「…えっコレ？どう言うこと？」

「ユウナちゃん、これから私達がいいって時以外先輩はダメね？」

「うん、それが良い。そうしよう。って事でオツケー？」

「…まあ、先輩ーじゃなくってお二人がそう言うのなら…」

「よーしそう言うことでツ！さっさと食べに行こーツ！」

「もう少しだから…頑張っつてね？」

「ああ、ありがと」

階段を登り切り前にはー。

「おお…すげえなオイ」

階段を上がり扉を開けるとそこにはー超綺麗なーなんだ？こ

のさつき居た休憩室と代わり映えしない景色は——その代わりに俺ら以外のアークスが居るが。

「休憩室二階、だよ！」

パティが俺の後ろから出てきて心の声に応える。

「——んっ？俺口に出してたか？」

「いや？何となくそう思ってるかなあって」

「…エスパ——いや、そもそもこの安直な名前は…休憩室二階って」
「此処はさつき私達が居た休憩室の上部分。本来ならエレベーターで直通の筈なんだけどこのサーレクス、初期型みたいだからエレベーター無いみたい」

「此奴にもロットが有るのか…」

そう言い窓からリリーパを見る。

ふと此奴はそのまんま船団に帰らないのかと思ったが、他のアークスがいたのを見る限り、惑星に居るアークスを回収して回って居るのだろうか？

「はいはい！ユウナちゃん！ここッ！早くっ！」

又してもパティが席を取って座る様急かす。

「…まあ、あんな感じですけど、周りには気を使っていますから…多分」
「…聞こえてるよ。さて、それじゃ甘えて」

パティが先に座りその間にティアが入る。その二人の前に俺が座り——Yの字の様に座った。

「ふっふふんふっふふん！さあて！何食べよっかなあ！」

俺達が座るとテーブルの色が変わりテーブルにメニューが表示された。

「おおう…成る程…」

すげえと騒がなかった自分を褒めたい——マトイに言えば褒めてくれるだろうか？

「それじゃあクリームパスタとオムライス！ティアとユウナちゃんは？」

「そんなに食うのか…？ミートソースパゲティと…おっ、有るじゃん。ミルクアイスを頼むわ」

「それじゃあ私はー」

「ああ」ああ！デザート忘れてた！…このウルトラメガパフエで良いやー」

「ー牛乳とサラダ、パンケーキで頼むわね？」

パティが頼んだ長いパフエは何だろうか？メニューのカテゴリのデザートに触り長いパフエを探す。

「うお、えっ？これ食べれるの？」

メニュー表には全長60センチのアホみたいなパフエが載っていた。お値段8・000メセター18・000

「大丈夫大丈夫！なんだかんだ言って私メセタ使わないから！今日も定期捜査で10万メセタ稼いだし」

「10万もっ」

「ああ、これが情報ってヤツ？」

「パティちゃん、違うから。でも私達が出す情報ってまあこんな感じ。高額任務を紹介したりね？」

「…いや、でも、凄く危ない任務なんでしょ？」

「全然！すこおし奥地まで行って帰ってくるーってイッタアア！」

「嘘は言わないの。そうね。少し…新人のユウナちゃんには少し難しい任務になってるわね。今の所」

「今の所？」

「これね？7日おきに変わるのよ」

「へえ」

7日おきに変わる特殊任務…ウィークミッションって事か？

「簡単なものは安いー普通の任務よりは高いけど、それらから受けて見るのはどうかな？」

「…はっ！もしかして契約金とかー」

「ないない。私達もある種の善意だし」

「…ビーストが珍しいから人体実験にー」

「そんな風に見えます？」

「…全然」

「…善意って言うのは私達アークスが未永くダーカーと戦って生き残

る為の情報皆んなに渡す為。その為にやって居るの」

「情報は何よりも大切だア！味方が死んでも持つて帰れッ！つて何かで聞いたしー！」

「流石に味方を見殺しはマズイよ。…だから安心して？その点は絶対だから」

「まあ…そこまで言うのなら…」

すると隣に完全なロボットが現れた。脚はくっついて居てローラー？か何かで稼働して居るのだろうか？

『お待たせしました。各種料理です』

そう言いロボットが後ろを向きー後ろはバックパックみたいなのを背負って居てその中に料理が入っていた。

「きたきたきたー！」

「落ち着いてパティちゃん。料理は逃げないから」

「えっと…クリームとオムライスがパティちゃん、サラダとパンケーキ、牛乳…牛乳？」

「…ああそれは…ねえ？」

「ねえねえティアちゃん、牛乳飲んでもおっぱいは大きくなるよ？」

「…ッ、分かってる。分かってるけど飲むの！」

「ああ、そう言う…」

自分のミートソースを前に置き食べようとした時。

『すいません、其方のアークス様、デザートのアイスは食後でしょうか？』

頭だけ後ろに回し俺の方を見るロボット。最初からその方向で来れば良いものを…。

「ううん、そうだな。食後で」

『分かりました』

ロボットがカウンターに向かった所でパティが声を上げた。

「さてー！食べよう食べよう！」

「そうしよう」

さて俺も食べるとするか。

30 話目 ミートソース

「うまあいーこの手に限るねえー!」

そう言い左手にフォークを使いクリームパスタを、右手にスプーンを持ちオムライスをととも器用にーいや、服にクリームやケチャップブルーあの赤いのケチャップだよな?ーを飛ばしまくってた。

「パティちゃん…もつとゆつくり食べなよ。逃げないんだしーってさつきも言ったか」

その妹のティアは熱々のパンケーキの中心に切れ込みを入れ、そこに蜂蜜を掛け更に上に同じ皿の少し離れた所にあるアイスを置き溶かしていた。

「あつ、蜂蜜とアイス間違えた…」

順序を間違えたらしい。

「すごい食うなパティさーちゃんは」

両手に持ったフォーク&スプーンに皿からとったパスタとオムライスを口に入れた所で俺がパティに声をかけた。

「!ーんぐつ!でっしょー!ティアちゃんも、このぐらい食べないとおっぱい大きくならないぞおお!」

両手に持ったフォーク&スプーンを持ちながらパティはティアをスプーンを持った手で指す。

「良いのよ私はこのぐらいで。パティちゃん並みに食べると豚になっちゃうから」

そう言いながらティアはモシヤモシヤとサラダーレタスやトマト、きゅうりなどが入った皿を持って食べている。ソースはかけない派なのだろうか?

「ちよつと!酷くない!ねえ?ユウナちゃんはどう思う?」

「ここで俺に振るのか?…ティア、その凄く言いづらいんだが…」

「?」

「胸は無い方が動き易いぞ?」

「ユウナちゃん…ユウナちゃんは持っているから分からないんですよ…」

「分かるさ…こうなる前は無かったしな」

胸自体がな。と言うかミニミと尻尾もだが。

「…こうなる前…それはどう言う…？」

「…昔の話さ。いや、未来かもしれない」

「未来？過去？どう言うー」

『お待たせいたしました。ウルトラメガパフエでございます』

少し勘違いしているかもしれないティアを横目にパティの超デカイパフエがやってきた。

「なんだこいつは…」

座っている俺が上を見上げるレベルの大きさ。

「パティ？これ本当に食べるのか？と言うかもう食ったのか☒」

「あつたりまえ！これを食わずとして何が情報屋かあ！」

「…あ、パティちゃんそれ意味違うよ」

俺の言葉を余程深く考えていたのかパティのネタに直ぐ突っ込めなかったティア。かと言って此処で勘違いを脱ごうにも良い言葉が見つからない。

取り敢えず此処はスルーでいいっか。

話につきつきりだった俺もやっとスパゲティに手を付ける。

肉とトマト、そして玉ねぎのみじん切りのトマトソースがパスタ一杯に掛かっている。

付いていたフォークを使い混ぜないでクルクル回し一口、中に入れる。

ミートソースの肉の旨味と玉ねぎの食感、トマトの少し酸っぱい味と匂い。最後にトマトの甘みと塩っぱさが口を抜けて行く。

ゆっくり噛み砕いて喉と食道の奥、胃袋に落とす。

ごくつと喉が小さく膨らみ、それも胃袋に近づくごとに小さくなつて行く。

「…うまい」

右前ではパティが超巨大パフエと依然交戦中であり、顔色を見る限り多分劣勢である。それもそうであろう。

一人で2人前を食べたのだから。内片方は胃に残るお米のオムラ

イスだし。

ティアはサラダを半分くらい食べ終わりパンケーキをオシヤレにカットしながらこれ又少しづつ食べて行く。姉の方とは真逆の様だ。向こうも俺が見ているのを気が付いたのか此方を見てきた。

「もぐもぐ……くっ。その、ユウナちゃん？尻尾が……」

口の中の物をちゃんと呑み込んでから話すティア。やはりティアの方が姉なのでは？

「尻尾？尻尾がどうしーんっ、なんだ、いつもの事だ。ビーストの日常だ。気にするな」

ティアに言われ手を後ろに動かし尻尾に触ると……尻尾がバツサバツサと左右に振れていた。

因みにだが尻尾とかミミを触るときはゆっくり優しく触る事になっている。

何故なら……その……色々とヤバイからである。

この身体になった当初、尻尾の根元を触りつつ色々とベッドの上で初心者なりにやったものだ。それはもう次の日最悪だったが。

話を戻してバツサバツサと左右に揺れる我が尻尾。正直結構音鳴っていたのに気付かなかったのだろうか？

「……その五月蠅いか？」

ティアはパンケーキを食べる手を止めて俺の事をジッと見てくる。

一度視線を姉の方のパティに合わせる。パティは超巨大パフェと交戦中。どうか一手は取れたものの依然厳しい。本当に食べれるのだろうか？などと思っていると、此処でパティとも目が合う。さて、何と言われることか。

「ユウナちゃん助けて！これ無理っぽい」

「助けてって……ティアちゃんにきいたらどうだ？」

そう言い視線をティアに戻す。

「ふぁ……可愛い……」

ピクリ、と俺のミミと耳が動いた。はっ？

「……えっ？今なんて？」

とても小さな声で言われた。常人なら見逃す程の小声。だが残念

な事にーこれはアフィンにも言っている事だが、俺はニューマン
ビーストで耳とミミ合わせ四つあるんだ。単純計算人の二倍は聞こ
えるー聞こえるのか?である。

「…っあ、いや、何でもないよ?」

そう言い顔の前で手を振るティア。

「ティアちゃん…聞こえてたよ」

「えっ☒」

ボンっと言う音が聞こえそうな典型的に顔を少し紅くするティア。
姉の方はまだ気付いていない。

「えっとお☒は、早く食べちゃいませよ☒冷めないうちに☒」

急にテンションと言動が可笑しくなるティア。パンケーキは冷め
ていると言う突っ込みはやぶ蛇だろうか?

「ティア!パンケーキ冷めてるよ!てかどうしたの急に☒」

姉が突っ込んだ。ボケが突っ込むって相当緊急時じゃね?

「う、嫌い!パーティちゃんには関係ないのっ!」

そう言いサラダを食べるのを再開したティア。

「ええ…どう言う事なの?」

そう言いながらも渋々自分の注文した超巨大パフェを又食べ始め
るパーティ。

俺もさつさと食べ終わらせないと。

そう思いフォークにミートソースを絡めたパスタを取り口に運ん
だ。

31 話目

アレ（俺とアフィンのピックアップ）からサーレクスは他のアークスを何名か拾い、一度惑星リリーパのサーレクス活動拠点に向かうとアナウンスが入った。

「なあパティーいや、ティアちゃん？何でキャンプシップに向かわないんだ？」

「アレっ？おねえさんに聞く所じゃない？」

「そう？ならパティちゃんが答えてくれるって」

質問を投げかけた所、最初パティちゃんに聞こうとしたが、今まで、まあ会ってまだ一、二時間しか経ってないが、余りにも失敗した所しか見てないので慌ててティアちゃんに変えた。

…変えた所で本人に突っ込まれたが。

「えええ！……確か…アレよね？……燃料制限ー」

「ーはフォトンロケット複合エンジンだから関係ないよね？」

「ーじゃなくて…えつと…整備！」

最初の答えを見透かされてしまい投げやりにティアに答える。

「…うーん…正解に近い、かな？」

「えっ☒マジでツ☒私適当に言っただけだよ☒」

「その適当は適切な方が数撃ちや当たる方かーまあいいわ。ユウナちゃん？」

「んっ？」

「さっきの問いだけど、大気のある惑星から真空に行くのに結構機体にダメージが掛かるじゃん？」

「…何で？熱とかか？」

「…少し違うけど念の為の機体チェックよ。異常がなければそのままキャンプシップとドッキングするし」

「…異常なんてなくないか？」

「本来はね？でもー」

ティアは人差し指を俺の口の前にだし、飼い主が犬にやる静かに、と言うのと同じポーズをする。

「ユウナちゃんとその相方さんが交戦している時に救援要請出したじゃん？その時にね？」

「ーータランマイザーか…」

「そつ。一応機体にはそんなダメージ無いと思うけど念の為、ね？」

「と言うと、あれか、足止めか…」

「あれ？ユウナちゃん、任務終わったら何か用事あったの？」

「…いや、少し部屋の様子が気になってな…」

「いや、それ関係ある？」

「すまん、ティアちゃん。気になったらとことん気になるタイプなんだ」

何故か知らないがマトイの事は話せなかった。特に言っても問題は無いはずなのだが…。多分虫の知らせって奴なんだろう。そうに違いない。…違うか…。

「うーん…そうだな！なら、サポートパートナーにメールを入れれば？」

「メール？そうか、マグはもう使えるのか。ならー」

さつきまでなんだかよく分からない電波妨害がずつとかかりつばなしの所に居たから忘れていたよ。

マグを手元に呼びマグのメールを選択、宛先ポイント、題名、マトイはどうか？

送信。…これで何とかなると思う。…短すぎたか？

「メールを送ったのね？大丈夫かな？これで」

「多分大丈夫だとー返信？早いな」

送ったそばからすぐに返信が…内容はー

やけに通信が遅いと思いましたが何か有ったのでしょうか？マトイさんの方は部屋のレイアウトに頭を悩ませています。

ーとの事だった。

「ふむ…問題は無い、な」

「よおーし！これで問題ないね！ねっ？施設内回ろうよ！」

「パティちゃん…降りても施設の手伝いをさせられるだけかもよ？」

「うぐっ…でも、天井のない空だし…」

そう言いパティが窓を見る。そんなに空が好きなのか？…いや、あ

れか、船団の空は偽物だから、こう言う…本物が良いのか？

と言うか宇宙船に窓なんぞ付けても大丈夫なのだろうか？強度とか。

「まあ、凄く喉は乾くけどな。内心水切れたらどうしようかと思っただし。」

「…まあ、確かに天井の無い空は良いけど…ねっ？この砂漠の惑星はちよつと…」

…待てよ？何でわざわざこんな機械と砂しかない星にこの二人は来たんだ？てかナベリウスは？…普通に考えれば任務か。

「…なあ？思っただがナベリウスの空はどうなんだ？」

「私はナベリウスに行きたいのだけど…ティアちゃんの方が少しアレルギーと言うか何と言うか…」

「私だってナベリウス行ってこんな鼻水出なきゃナベリウスに行きたいわよっ！」

鼻水…そういうや船団員ってアークスでも無い限り他の惑星に降らないよな。…降りなきゃそういう花粉に抵抗…対抗は付かないし。いや、まさかな。こんな超技術の塊内で花粉症の一つや二つ無いとかまさか？第一、この二人は俺らより長くアークスを…長くってどの位だ？と言うか情報屋って何時からやっていったんだ？

「なあティアちゃん、ティアちゃん達って何時からアークスやってたの？」

「そうね…私達は士官学校出たから…2年くらい？」

「へえ、士官学校を…士官学校☒バリバリの軍人じゃないか☒」

「いやいや、言っても簡単に入れる所よ？だって、ねえ？」

そう言いティアはパーティの方を見る。パーティは窓に近づき外を見ていた。まるで始めて旅客機に乗った子供だった。

「まあ、確かにそうかもしれないが…なあティア、パーティはサーレクスに乗ると何時もあなののか？」

「ううん、今日に限って、かな？何時もはあんなじゃなくてハイテンションだし」

「うーん…分からん」

「分からないと言えば私のナベリウスに行くと言われ鼻水はなんなんだろう…変な病気だったらどうしよ？他の船員にもうつるかもしれないし…」

「鼻水って…てかそれアレルギーか何かじゃ？」

「とうかだつたら尚更メデイカルセンター行けよと思う。」

「あれるぎー？何それ？」

外を見ていたパティが久し振りに反応した。そこかよ…。

「ああ…まあ、身体が過剰反応するあれだよ」

「ティア、アレルギー、過剰反応…閃ー」

「ーパティちゃんは置いておくとして、ティアちゃん、メデイカルルーム行った？ナベリウスから帰った後に」

「いえ、その時は特に異常なかつたし…」

「今度精密検査？受けてみると良いよ」

「うーん…そうね。ユウナちゃんの通りに受けてみるわね」

「ティアちゃん、これで治ったらピクニック出来るねっ！」

「ええ、そうね。あの綺麗な空の下で食べれたら…」

「その時はユウナちゃんも呼ぼうよ！」

「ええ？俺？俺は良いよ。姉妹で行ってきなーってかナベリウスに用件ピクニックで降りれるのか？」

「ああ…確かに…無理そう？」

「いや、任務帰りの時に此処と同じく活動拠点有るだろ？多分。そこから少し出たところで食べれば良いんじゃないか？」

「うーん…そこはおいおい考えるところ！そろそろ活動拠点に着くつてさ！降りる準備しないと！」

「そう言い先に進むパティ。相方がいなくなったことでティアに一つ聞いて見ることにした。」

「なあティアちゃん。ティアちゃんとパティちゃんって何歳なんだ？」

「…ううんとねえ…何歳に見える？」

「そう来たか…俺より少し下の身長、体も細い…。」

「そうだな…14から16くらい？」

「…んっ？ユウナちゃん、ニューマンってどの位生きると思う？」

「えっ？そこ？…まさか…」

そこでふと耳の長い種族、所謂エルフって言うのは寿命が長いのを思い出す。

「そう言う事ーかも知れない」

そう言いティアは姉の後に続いて先に消えた。

機内アナウンスによると10分程度でメンテナンスは終了するとの事。

周囲を見渡し誰もいないのを確認して一言発する。

「…ご、合法、少女…？んなバカな…」

久し振りに人を前に手が震えた。怖いとかそう言う次元じゃなくて。

額に震える手をやると汗が出て、その手でミミを触ると髪に突っ伏していた。

32 話目

ティアとパーティと別れて俺はアフィンの所に向かうことにした。機内の案内板を見てアフィンが居そうなー治療室みたいな所を探す。

案内板には格納庫の近くらしい。

二階から一階に降りて：取り敢えず格納庫を目指そう。

階段を降りて一階部分に向かう。

休憩室一階部分に着くと、二階とは違い何名かのアークスが寛いでいたりPosで繋がれたテレビを見ていたりした。

因みにPosとはPhotonic work system

フォトニックワークシステム

読んで字の如くインターネットだ。

窓を見るといつのまにか機体が着陸して整備を受けているっぽい。そういや着陸するからシートベルトしろ、みたいな警告すらなかったぞ：重力制御でもしてんのか…？

休憩室の何故かど真ん中に置いてある自販機に向かい何か飲み物を選ぶ。

基本アークスはメセターー所謂お金ーを持つ、と言う概念はほぼ無く、何時ものマグや、アークスカード自体がカード見たいな扱いになっている。前の癖かは知らないが俺は少量メセタは常時持っている。

正直これ（メセタ）：地球の紙幣とあんま変わらないんだよなあ：資源の限られた船団で紙はーーと思っただけど食料船いっぱい居るかからそう言うのも大事：なのか？

いつも持っている財布の中を覗きながら思う。

因みにだがアークスカード、又はーまあ、ほぼ無いらしいがマグを無くすー無くすでは無いな。壊れた場合、申請すれば新型のマグと交換してくれるらしい。アークスカードも同じく。まるで携帯の様だ。

：メール出来たりお金ーメセタを払えらる時点で遠からずとも

言えない。

マグに自販機と接続させ飲み物を選ぶ。いつもの様にオレンジらしき飲み物で良いか。

地球にある自販機の如くボタンを押し飲み物を落とす。落とすで良いのか？

ガシヤンと言う音と共に飲み物が落ちくるーーと思ったが音がせず。

「んっ？何だ？故障か？」

座り込み出口を見るーーなんだ、あるじゃないか。

見ると上から落ちるのでは無く、一度横に向けられーーそうだな、UFOキヤツチャー見たくおちるらしい。丁寧にゆっくりと。

これ又見慣れた缶を手に取りイスに座りテレビを見る。

内容は船団に関する事ばかりだった。

なんでも俺の住むオラクルの食料自給率が400%を超したとかー400%」

「ビュー…一人につき四倍…俺の祖国も見習って欲しいねえ…」

野菜、肉、小麦的なものまで全て引つ括めて一番低いのも150%。因みにそれがお米的な作物だったりする。

テレビではこのオーバーな作物をどう処理するかで議論している様だ。

『ーええ、確かにその案は良いかもしれませんが、しかし、私は万一を考え貯蔵する方がいいと思うのですよ』

『貯蔵には十分なレベルだし、確か8番艦が自給率が落ちているらしいじゃないか。其方に渡すと言うのはー』

「8番艦はなあ…」

「ああ、彼処は色々なあ…」

「そんなんだったら貯蔵した方がいい気がするなあ」

テレビを見ていた3人の男性が話している。8番艦でそんなにやな事が有ったのだろうか？

足を組みながらテレビを見続ける。

「親ダーガー派の多い艦だからな。殆どの市民が他の艦に逃げている

らしい」

「ダーガー滅ぼす組織内に裏切りでるとかもうなあ…」

「だがオラクル船は惑星に降りないと作れないし…」

「…そーいやデサイズはどうなった？」

「デサイズ…？ああ、あのナベリウスと同じ惑星か…彼処なら確かに作れそうだな」

「もしかしてもう作って有ったりして」

「まさか☒此奴を作るのに数十年掛かるって話なのには？」

デサイズ…？なんだ新しい惑星か？

マグをPosに繋ぎデサイズと入力ー出た。

ナベリウスと同じような惑星で気温も比較的落ち着いていて今は宿泊施設と観光施設を建設中…？計画発表年、新光歴214年、計画着手218年。

「今がー今何年だ？」

マグの身体状況の上の方に日付が乗っている。新光歴238年、
「…やけに遅いな」

遅すぎる。彼此20年、環境を壊さない程度に小さな町を作れば良いものをこんなに時間が掛かるものなのだろうか？環境壊さない様
にやってるのならまあという感じだが…。

いや、こんな超科学の船団だ。そんな環境を壊さず作る事ぐらい朝
飯ーいや、起きる以上にカンタンな筈。何故…？

「まさかその土地じゃ建物を作れなかった、てオチじゃないだろう」

そんなへまこの船団がする筈ない。ないに決まってる。

缶ジュースを全て飲み、自販機の隣にあるゴミ箱に捨てて、格納庫
に向かう。

もう一度階段を降りて、地下一階ー航空機に地下、と言う表現は
如何なものかと思つたが、さつきジュースを飲んでいた休憩室が一階
表記なので仕方ない。

格納庫に有る鹵獲、で良いのだろうか？鹵獲した人型兵器を明る
い格納庫で見上げる。

一般的に頭部と言われるパーツはよく居る単眼やツインアイ、バイ

ザータイプでは無く珍しい複眼タイプ。

良くあるツノが無いから多分一般隊員用の機体なのだろう。…ツノが有ったら三倍の速度且つ三倍の速さで燃料消費しそうだな。

腕にはデカイガトリングガンが。ガトリングガンからチェーンで背後のマガジンパックにつながって居るのを見ると結構な…ん？操縦している時マガジン数×3って出ていたよな？その3は何だ？

右手でガトリングガンのトリガーを持ちつつ左手でサイドグリップを握っている。やはりガトリングは良い…見えてココロがオドル。

コアは先端が何故かとんがっている。何であんなにとんがっているんだ？整備する時大変だろうーいや、整備するのが人じゃなければ怪我はしないか。…んじゃ何で人が乗れるスペースがあんだ？

緊急時のーいや、だったらそんな複雑な操縦系統は要らない。何故…？

肩左側には軽機関銃の様なベルト給弾式の銃がラックに保持されている。右側にはアサルトライフルが同じく保持。良く見るとラッチが回る様なパーツ構成をしている。あれを回しているのか？

また沼にハマりそうなのでコアに関する外見判断は中止。今度は脚に移る。

脚は全体的にゴツく、そして太く、とても歩ける様には見えなかった。

脚に近づきもしや、ローラーでも、と思ったがそれらしき物は無し。本当に歩いていたのか？まさかブーストと言う字の如く本当にホバーしていたとでも？

「ローターダッシュとも違うし…本当にホバー？」

しかしローラーの様なものも無し…あとは何だ？高速での移動法。「後は…ん？俺何しに降りたんだ？」

此処で本来のやる事を思い出す。そうだ、アフィンが居る治療室？みたいな所に行こうとしたんだ。

「そうだ、そうだ…忘れてた…って言うは何処だ？」

格納庫近くらしいし…さっき降りて来た階段の隣の通路を行けば

いいのか？

来た道に戻り階段手前まで行く。
階段の隣には広めな通路が。

「デカイねえ…まあ、この先か？」

333 話目

大きめな通路を進み治療室らしき所に向かう。

少し進むと案内板みたいなのが設置されていて、格納庫のあるエリアの情報が少し分かった。

この通路を真っ直ぐ進む、右側に治療室があり、治療室に入り怪我人に会いたければ更に治療室の奥に進み病室的な所がありそこに迎え、つて事か。

「…何でこんなぐるぐる回る様な構造なんだ？嫌がらせか？」

そもそもそんな意味の分からない構造なら直通にすれば良いのに。そう思うユウナであったが、此処でパティエンティアに先程言われた言葉を思い出す。

「…：…そういや、パティが此奴は初期型だって言ってたか…：パティ…：…肉…いや、パン、か…：」

そういや何でパティの親は自分の娘にパティなんて名前を付けたのだろうか…：確か、パティってハンバーガーのパンだか肉だかのどっちかだった気がする。

顎に手を当て案内板を見ながら考えるユウナ。しかしそれもすぐに辞め、治療室に向かう為案内板の前を後にした。

「…しかし解せぬ…：タランマイザーへの攻撃、当たってたか？」

治療室に向かいながらも今回の…この足止めの原因となったタランマイザー戦の事を振り返る。

「パイロットは40ミリまでなら耐えられるって言ったし…：少なからず俺のせいでは無い…：咎だ」

となると俺たちの所に来るまでの間、ケツを取られていた時に攻撃を受けたのか？

…：だが待て。あの機体の格納庫らしき所から脱出した時、モニターにもタランマイザーの…あれ？もしかしてアレタランじゃ無くてトラン…？タランマイザー…：トランマイザー…：トラン、マイザー…：。

「…これタランじゃなくてトランマイザー、か？」

いや、今はそれじゃ無い。

「トランマイザーは、2機…？」

そもそも此処の敵は機械―D因子に侵されていないとはいえ此方（アークス）には敵対的。

「…量産機か？」

マジかよ…生身でアレと戦えってか？

「ロケットランチャー持ってこないと無理やろ…あのロボ使わない限り」

そもそも此方の武器（ライフル）は貫通するのか？と言うか貫通させるだけじゃ内部ダメージ無いも同然じゃ？

「…本格的にロケットランチャーを買わないとダメか…はあ…メセタめ…」

只でさえ今のメインウェポンは先輩のお古だと言うのに…正直使いやすが。

「…ショートバレルは正義だなあ…リコイルと精度を無くすけど」

ロングバレルのセミスナイパーみたいなアサルトライフルを使っていた俺がおかしいのか？…それはないか。

立ち止まって考えていたのを辞めて前に進む。目指すは治療室だ。

「ようやくか…」

そう独り言を言い上を見上げるとアークス言語で治療室と書かれた―看板、と言うかなんというか…こう…何と表現したら良いのだろうか？

自動ドアが開き治療室に入る。入った目の前にはカウンターがありナース服を―アークス流にアレンジされたものだが―来た女性性が3人ほどいた。

「本日はどんなご用件でしょうか？」

「ああ…さっき此処にニューマンの男―いや、男性か？運ばれなかったか？」

「ニューマンの男性ですと…1人運ばれてますね」

「そいつに会うのって―」

「可能かどうか聞こうとした時、久し振りに聞く声が聞こえた。

「おーい！あいぼおおう！」

「アフィンさん、治療室ではお静かに」

「ーかの……会って大丈夫？」

「少々お待ちを……念の為にアークスカード、宜しいですか？」

「ああ、……どうぞ」

「そう言い手首のデバイスを弄りナノトランサーからアークスカードを出す。……これマグじやダメなのか？」

「はい……アフィンさんとバディを組んでいる方ですね？どうぞ」

「はいよ」

「アークスカードを返され、やっと通されたのでアフィンの元に向かう。」

「よおアフィン、その様子だと大事にはならなかったな」

「曰く綺麗に貫通していただと。それも超奇跡的に骨にダメージもなし」

「って事は治療終了？」

「って事だな」

「そう言うとうぐう……と言う腹の音が。少なからず俺ではない。さつき食ったし。となると……」

「……なんか食ったか？」

「いや？点滴だけだ」

「そうか……幸いサーレクスは着陸しているし休憩室行くか？」

「……確か此処に来る途中の自販機にレーシオン売ってなかったか？」

「レーシオンが？自販機に？いやいや、無いだろそれは」

「いや、担がれている時に俺は見たんだ。間違いない」

「……治療より食べることかよ。分からんでもないが」

「そう言い上の休憩室を再度目指す。」

「広い通路を歩き、ふと、アフィンが口を開いた。」

「おかしいな……ここら辺に有ったはずなんだが……」

「周りを見ると広い通路以外何も無い。」

「アフィン……お前、とうとう幻覚をー」

「いやっ！断じて幻覚では無いッ！……………」

「……………本当に？」

「……………た、多分……………」

「……………」

アフィンの言葉にため息をつく俺。第一、食い物なら上ー二回か、二階で取れるだろうに、何故わざわざレイションを？

「なあアフィン。此処の二階に食うところが有るんだよ。知ってるか？」

「えっ？なにそれ知らない。行く？行っちゃう？」

「ああ、俺はもう食って有るから。まあ、同席位はさせてもらうがね」「よっしやあーんじやさっさと行こう！」

そう言い俺より先に前に行くアフィン。怪我はーあの様子だともう大事なのだろう。

「おい！場所分かんのかよ！」

俺も慌てて追従して行く。

「はあ、はあ、はあ、はあ……………おまつ、あふい、アフィン……………は、はええよ……………」

全力でアフィンの後を追った物の底はやはり女の身体のせいかは分からないが、アフィンに追いつけなかった。

後胸が上下にーいや、上に揺れて千切れるかと思った。何だこの脂肪の塊ッ！

「だって、……………相棒少し遅くて……………」

「仕方ねえだろ……………こっちは食った後だぞ……………」

流石に男に胸が千切れるくらいに痛かったから本気で走れなかったなどとは言えまい……………本気で走ったんだがなあ……………

そう言い先程パティとティアと食事をした場所に戻ってきた。

「うおお！何でも有るな！きて、何を食べるか……………」

「俺は……………ミルクアイスとオレンジで良いか」

メニューを見ると値段も書かれており、ミルクアイスが450メセタ、オレンジジュースが600m1200メセタ、4Lが800メセ

タと書かれていた。

「アフィンは何飲む？オレンジなら4L頼んじゃうけど」

「うん、俺もオレンジで良いや。ハンバーグにパンと…相棒、ビザ食べるか？」

「ううん…まあ、一切れくらいなら、な」

「よし、ハンバーグにパンをセットとビザを2人前、ミルクアイスと4Lオレンジだな？」

「おっけい！」

そう言うとアフィンはメニュー表に頼む奴をタップし、注文という所に入れる。

1秒未満で注文完了と表示され到着まであと3分と出ていた。

周りを見ると俺とアフィン以外に数名しか居らず、その人達も食べ物自体は既に運ばれているようだった。

「よおおし…やつとマトモな食べ物が食える」

「…そうは言っただが…メセタは大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫！治療室の人達が言っただけで俺達が乗って来たロボット、アレの報酬ですごいメセタが出るらしいぜ！」

「らしい、って…出てから言えよ」

メニュー表を操作しアフィンの頼んだハンバーグセットの値段を見る。111050メセタ。まあ、そんなもんだろう。ピザはどうだ？11850メセタ、全て合わせて…俺のが800と450で1250メセタ。アフィンは1050と850で1900メセタ。合わせて3150メセターアレ？若干高くね？

マグを呼び俺の持っているメセタを確認する。

………35万メセタ…まあ、十分、とは言えないが大事か。

そもそもアークスは一応基本メセタは決まっているので何とかなる、のか？

電気に水、これだけで月5万は飛んで、次に住居費で10万、後武器類に月5万から10万……弾代が痛い。俺は傭兵じゃ無いんだよなあ…。

そんなこんなで残るお金111じゃ無くてメセタは10万メセ…。

「あれ？案外何とかなる？」

「どうした相棒？」

「いや、少し考え事をね」

「…そうか」

「…つあ！そーいやアフィン。俺に何でも買っつて言っつてたよな？」

ふとロボットの足元での防衛戦時に言っつていたことを思い出す。

「…覚えていたか」

「たりめえよ！そーだな…戦闘服、買っつてもらうか？」

「戦闘服？相棒今のじゃダメなのか？」

「ダメというか…カツコ可愛く無いからな」

「…まあ、別に良いが…」

「言っつたな？門限は取っつたぞ？」

「門限っつて何だよ？…まあ、迷惑かけたからな、御礼だよ」

「……ほんとだよ。彼処で死なれたら困るのはお前だけじゃ無いからな…姉、探すんだろ？」

「ああ」

「あんなアホらしい所で死ぬなっつて生きてたら言っつかもよ？」

「ハハッ。言っつかもなあ」

「……なんだ、気が向いたら、協力してやっつても良い気分でも無いぞ？」

「……いや、それ結局どっちだよ？」

そー言っつアフィンは笑う。それに吊られて俺も笑う。

そーうだ。これで良い。

「はあ…そろそろか？」

「時間的にはそーうだね」

するとロボットが近くに來て注文の品を置いて來た。

「さて、食べますか」

「そーうだな」

そー言っつアフィンはフォークとナイフを持ちハンバーグを切り始めようとした時、俺を見て慌ててそれらを置いて手を合わせた。

「頂きます」

「いただきます、つと」

34 話目

目の前に置かれた大きめの深いお皿には白いアイスが3個、周りに果物がセツトされた物が置かれる。

「そうそう。コレだよコレ」

小さなスプーンを持ちミルクアイスを掬い口の中に入れる。

はむっ、と中に冷たく、そして甘い味が広がる。

「かああーいいねえ、こう言うのを待ってたんだよー!」

甘いといっても明らかかな甘さでは無く、優しい甘さーこれがミルクアイスとラクトアイスの違い

「さてと、もう一口…んっっっ!」

頬つぺたを手で触り冷たさを感じる。舌の上でゆつくりと溶けてくミルクアイス。

するとアフィンが俺にこんな事を言ってきた。

「相棒って、時折女の子みたいな事をするよな」

「くくはあ。女ってなあ?俺はーって、女だったわ」

何時ものように胸を見るー何時もの、コッチに来てから見慣れた巨乳だ。

「ハハッ!いっつも相棒は俺が女って言うのと訂正してくるよなあ…そこが可愛いけど」

「聴こえてるぞお、アフィン。何度俺のミミの精度は凄いと見えばー」

「相棒」

いっつもーってそんなに言っていないか。その事を言おうとした時、アフィンが急にニアニアしながら相棒、と呼んだ。

「ーどんな、ああ?何だ?」

「尻尾、めっちゃ揺れてる」

そう言われて後ろを見ると…バツバツサ尻尾が揺れていた。

「そんなに嬉しかったか?」

「ま、嫌な気持ちでは無いな。…そうだな」

少しアフィンの手の上で踊らされているような気がするなあ…そ

うだ。パティ姉妹にやった事の更に上のことをやって見るか。ミミは犬系で尻尾もあるし…。

ふとコレをやると男としてダメな気がするが、まあ、今の俺は女だし？ノーカンかな？と判断した。すげえ恥ずかしいけど。

—————
「そうそう。コレだよコレ！」

そう言い目の前に座る相棒がスプーンを持ちながら言う。

頭の上のミミは立ったままだった。いや、立ちっぱなしだな。

犬歯が綺麗に見える小さな口を開けて相棒の頼んだアイスを掬い、口に運ぶ。

「かああ！ いいねえ、こう言うのを待ってたんだよ！」

俺は頼んだハンバーグをナイフで切って口に運ぶ。

成る程、確かに美味しい。

オレンジをコップに移し一口飲む。コレもなかなかの甘さだな。

「さてと、もう一口…んっっ〜！」

相棒を見ると手を頬に当てながら俺に「俺に言ってるんだろう、多分」言う。

確かに今まで砂漠に居たから冷たいものをつていうのは分かるが…。にしてもだ。

「相棒って、時折女の子みたいな事をするよな」

こくっ、と言う音が聞こえ相棒が口を開く。

「〜はあ。女ってなあ？俺は〜って、女だったわ」

途中まで怒ったかのような強さだったが、いつもの様自分の女の象徴を見て冷静になる。と言うか今回は冷静になるの早いな。

「ハハッ！いっつも相棒は俺が女って言うのと訂正してくるよなあ…そこが可愛いけど」

本当可愛いよなあ…なんだかんだで俺が今バディ組んでいるけど…正直余り他の人と任務に行つて欲しく無いなあ…その所、ユルソうだし。

「聴こえてるぞお、アフィン。何度俺のミミの精度は凄いと言え

ばー」

その事は何回も聞いて十分分かってるし。まあ、分かっている癖で小声で呟いてしまうのだが。

何時もの私のケモミミ凄い自慢が始まる前に一事言っておくか。

「相棒」

「ーどんな、ああ？何だ？」

本当、この男みたいな言葉がなければなあ…それもそれで良い所だけど。めっちゃやくちや可愛い子がラフに話しかけてくるのって萌えないか？

「尻尾、めっちゃ揺れてる」

俺に言われ即座に自分の尻尾を確認する相棒。

なんだか自宅で飼っている動物を思い出すなあ…。会おうとすれば会いに行けるから寂しいって気はしないが。

「そんなに嬉しかったか？」

「ま、嫌な気持ちでは無いな。……………」

そう言うのと相棒が下を向いて何かを言った。俺も一応ニューマンだがビーストほど耳は良くない。と言うかビーストは耳とミミで四つあるし。

頭を上に向けてを自分の前に出す相棒。なんだ？何をやるんだ？

「…わ」

「わ？」

「わん…わん？」

「…えっ？」

何をするかと思えば、犬の鳴き真似だった。可愛い。

それと同時に股間がヤバイ。コレに乗るまで危機的状況だったのかその…戻るまで持つだろうか？…？ネタが取れただけ良しとしたい。ーマグに録画しとけばー提出した時に何か言われそうだからダメか…。

「……………」

相棒を見ると頬をめっちゃ赤くしながら俯いていた。まあそりやそうだよなあ。相棒あんな事絶対しないタイプだし。ー録画しと

けばよかったわ本当に。

「あ、相棒……」

「ん、んだよアフィン……」

「ど、いや、その……めっちゃ可愛かった」

「う、うっせえ！さっさとハンバーグ食いやがれ！」

そう言い相棒は溶けかけていたアイスの塊を口に入れ、頭に冷たさが来たのか、頭をさすっている。

言われたとうりにハンバーグとパンを食べてしまう事に。

くそ……何度も思うが録画しとけば夜の……いや、やめておこう。心の動画にはとってあるから。

尚、奇跡的にマグがアフィンの心境を察したのか録画をしており、後日そのファイルを見つけアフィンは踊ったそうである。

—————

「わん……わん？」

「……えっ？」

……はああずううかああしいいいい！

何だこの恥ずかしさ！想定以上のダメージだぞ！AP90%減少したわ！もう10%しか無いわ！

シャレにならない恥ずかしさに俯いてしまう。俯いた先には自分の胸が。そう言えばこの胸には何時も色々と邪魔されるなあ……と思いついた。恥ずかしさから逃げるな？俺はにげるぞお！

風呂……アークスの風呂は日本的な奴ではなく浴槽の前にシャワーとシャワーを掛けるところがついたアメリカドラマみたいな感じな奴で、最初風呂にどうやって入ろうかと悩んでシャワー突っ込んで待ってたらポイントに『何やってるんですか？』と言われたのは今でも覚えている……から出た時の着替え。

それこそ最初期はうほおお！などと思って……いや、今は辞めておこう。

もう一つが寝る時。日本……いや、ある種前世か。前世の時はうつ伏せで寝る事が多かったのだがこの身体じゃ物理的に……は可能か

も知れないが、些かきつい。

そんな事を考えているとアフィンが相棒、呼んだ気がしたので顔を上げる。

「ん、んだよ…アフィン」

「ど、いや、その…めっちゃ可愛いかった」

アフィンも動揺してんのか言い出すのに二、三回嚙んでいた。

「う、うっせえ！さっさとハンバーグ食いやがれ！」

やはり可愛いと言われるのは慣れるものじゃ無い…嬉しいが。

……こう思うと身体に精神が引っ張られてるのか？…やめてくれ、せめて精神は男のまままで、お思っているのだ。それまで崩しに来るのは本当にやめてほしい。

35 話目

その後サーレクスが治りリリーパ軌道上にいるキャンプシップとドッキング、俺達アークス達とあの複眼機をキャンプシップに載せ替えた。

俺達を移し替えたサーレクスは活動拠点に戻った模様。

キャンプシップはオラクル船団の居る宙域にワープして毎回思うのだがワープってどうやっているんだ？光の速度以上で飛んで居るのだろうかーし、数十秒後にはオラクル船団周辺宙域に入った。

因みにワープ中は席に座りシートベルトをしながら終わるまで待機ーこの辺は航空機と一緒にだな。

周辺宙域に入ると速度を落とし管制塔に着陸指示を貰い、俺達が住んでいるオラクル船団のメインシッププー名前はなんて言うんだっけ…まあ、いいか。それに着陸ーいや、着艦か？する。

「やつと着いたな…」

そう隣に居るアフィンに言う。その間にシートベルトを外し他のアークスと同じようにキャンプシップから外に出る。

「ああ、こんなに長い任務になるとは思わなかったよ…」

任務受注場ークエストカウンターが有るゲートエリアまで戻ってきた。落ち着いたBGM、と言うのだろうか？それが流れている。

「全くだ。…まあ、あの格納庫に突っ込んだ俺達が悪いんだがな」

アフィンと俺はそのままカウンターに向かう。

「そこは反省してるから言うな…」

「さっさとカウンターに行ってマグを預けるぞ」

「はあい」

そう言いクエストカウンターの列に並ぶ。

おかしい、何か今日あったっけ？

「アフィン？今日何かあったっけ？」

「いや…何も無い、筈」

「だよなあ…って言うと、只の任務待ち？」

「それじゃないか？俺達、アークスに入って数える程しか任務受けてないし」

「まあ、そうだがー」

「次の方あー！どうぞー！」

そう言いクエストカウンターの人が言う。今日は誰だ？

「ほおら、来た。さっさとマグを渡して買い物行くぞー！」

「はあ、はいはい。俺の財布に余りダメージを与えないでくれよ？」

「はい！それでは任務番号と内容を教えて下さい」

「えつと、番号1657ですね、惑星リリーパの遺跡調査、だったかな？」

「番号1657…」

そう言いオペレータがとてつもない速さで指をーって指が分裂している…☒と言うと彼女もキャストなのか？

そんな事を思っているとオペレーターの方から声を掛けられた。

「ふふつ、凄いでしょ？ちよつと諸事情で腕の関節から先が無くなってね、それで交換してもらったんです」

「は、はあ…」

さらつと爆弾投下するのやめて下さい。何でそんなさらつと腕が無くなったって言えるんだよ☒

「と、言うのと貴女も元アークスですか？」

「ええ、元ハンターよ？こう見えて10年前の戦いで活躍したのだから」

こんなに技術が発展してんなら残った皮膚とかから培養出来たりしないのだろうか？

「ーさて、任務番号1657、合ったわよ。やけに長かったわね」

「ええ、少し此方で事情が…」

「えつと、報酬はー敵勢四脚兵器一機の鹵獲で8000メセターーええ”！二足歩行兵器の奪取で、一、十、百、千、万、十万、百万、450万がお二人に支払われますう”☒」

「えつ…？？」

「…今何と？」

「と、トータル4. 510. 000メセタですっ！これが、お二人に支払われます！」

「お、おおう……」

450万、そんなにか……。全く想像できん……。

隣を見るとアフィンが固まっている。まだそりや15. 6が450万も貰ったらねえ……？

「お、おい、アフィン、生きてるか？」

「……ああ、生きてる……4、450万って……」

「アークスカードをお出し下さい。其方に全額支給しますので」

「……さて、帰って来て、懐も厚くなった事だし、アフィン君？」

俺達はマグを返してもらい、ショップエリアの休憩室に座りこの後どうするかを考えていた。

「わ、分かっている……戦闘服だろ？」

「そうそう、後武器な？」

「ぶ、武器もか？ま、まあ、値段による、としか……」

「まあ、良い。ああ、そうだ。今回はマトイは連れて来ないからな？」

そうだ、マトイに連絡しとかないと……メールは適当に元気にしてるか？今日は食べに行こう。……これでよし。さっさと家のPCに送信……終了。これで憂は少し無くなった。

「……まあ、うん。それは良かった」

「次回に持ち越した。無事に戻ってこれた記念に、な？」

「って言ったって何処に行く気だ？」

「其処はアフィン、お前の手の見せ所だ。なあに、女の子が二人いるんだ。両手に武器……じゃなくて、花じゃないか」

「ま、まあなあ……二人とも可愛いし……いてっ」

「お前はいい加減学べって……何度言えば分かるんだ？嬉しいが……すまんが、そう言うのはいい心の中で言ってくれ」

全く……俺は今となつちやケモミミエルフ女の子だが、心は男……だよな？……そうだ、そうに違いない。

そう自分に言い聞かす。

「取り敢えず、戦闘服は何処に買いに行く？」

「そうだな…取り敢えず、居住区に降りよう」

あとそうそう、やはり尻尾は素直に喜んで左右に揺れていたよ…
ポーカーも何も無いな。

「此処か」

「そうらしいぜ？何でもアークスの戦闘服は4割此処の人が設計して
るらしいし」

大きな通りにある少し小さなビル。場所が限られた船団ではデカ
イビルを建てられないのだろうか？

「普通こういうのってどおおん！って構えるもんじゃ無いのか？」

「いいやー！そうとも限らないぜー！」

アフィンの声でも無い男性の声が聞こえる。

その声の主は目の前の小さなビルから出てきた。

「はじめまして、だな。俺はこのB&Sの…まあ、なんだ、マークスだ。
宜しく」

そう言い手を差し出してきた。

「こ、此方こそ宜しくお願いします」

「ほほおう、ビーストー！しかもニューマンか…」

そう言い手を顎に乗せ考える。

「しかも…フォトンが多い、ある種完璧じゃ無いか…」

「お、おいアフィン、本当に大丈夫なのか？」

「あ、ああ、多分」

「…彼女なら…良し！君達！ちよつと来なさい！二人に良いものをお
見せー！いや！譲渡しよう！」

マークスは両手を左右に広げ上にあげたポーズをし、俺達を中に案
内した。この人彼女ならって言ったよね？ナニかヤバいことされな
い？大丈夫？

不安しかないがついて行くしかない。正直、今着ている戦闘服…
名前は忘れたが、確かゲツテムさんが着ていたやつと同じ筈…もそ
ろそろ飽きたしな。

36 話目

「こ、これは…?」

「私が今作っている新型の戦闘服ー騎士をモデルにした…そうね、ドラグニアフラール。どうだ?」

マークスについて行くと店の奥に展示してある戦闘服ードラグニアフラール、だったか?それを見せられた。

「なかなか、どうして。カッコいいじゃないか…!」

「確かに。相棒に合いそうだな」

「分かるか二人よ!物は試しだ!着てー」

「だが肩のマスクって言うのか?とスカートの短さ。アレは頂けない」

そう、マークスが見せたこの戦闘服ードラグニアフラールはスカートが短かった。と言うか無いに等しかった。それに肩のマスク…なんなのだ、これは。

「しかしだね?フォトンを効率良く使うには肌を露出させなきゃー」

「その理論で言ったら男はパンツに女性は下着姿か?」

「ーう…だ、だかね…」

「後肩パーツは要らない。アレ重いだろ?マスクだったら被らせろや」

「あ、相棒…?」

「そう思わないか?」

「えっと…まあ、うん…」

「ほらっ!アフィンもこう言っているし」

「因みに男版のコレーードラグニアカクロスはこんな感じだぞ?」

そう言いマークスはモデル図を見せて来た。

目の前にあるフラールに比べると重武装でそれはそれー。

「なんだコレ!めっちゃやくちやカツケエじゃん!コレを俺に着させろおお!」

「落ち着け相棒、その、相棒が着たら…」

「尻尾用の穴を開けなくちゃならんぞ？それならスカート状の方が尻尾も隠せないか？」

「で、ですが…こんなカツコいいのを見せられて引き返せるわけが…」

「それじゃあこの服要らない？」

「要ります本当に申し訳ありませんでした」

「ふむ、分かれば宜しい。ーさて」

「此処で一つ、コレ。着てみない？」

「しかし貴方も大変だな。あんな子とバディを組むなんて」

「いえいえ、アレでも見ていて可愛いですよ？」

相棒が着替えている最中、外で待っていると先ほどの男性ーマークスさんが出てきた。なんでかは知らないが嫌な予感がする。それに相棒をあんな子呼ばわりされたのに少し頭に来た。

「ーその様子だと何かあったのですか？」

「ー俺は余りビーストは好きになれない」

「ーは？いい、いえ、どうしてですか？」

はっ？と言ってしまったのは仕方ない。あんなに可愛い子が？嫌いだった？

「それはだな…私の娘がー」

「もしかして、ビーストを？」

頼むから間違っていて欲しいと思いい先に言った言葉。しかし最悪な事にそれは当たってしまった。

「ああ、そのお陰で娘は死んで娘の腹から出て来たのは、中に居るビースト見たいなのじゃなくて本当のケモノ。即射殺されたよ」

「そんな…」

「ー最もお陰でアークスをそう言う脅威から守りたいが為にこの会社ーB&Sで戦闘服を作ってる、とも言えるしな。なんともめんどくさい事だよ」

「…産まれて来るビーストに何も罪はー」

無い、と言おうとしたところでマークスに遮られた。

「分かっている。分かっているでも消せない想いは消せないんだよ。俺はそんな簡単に出来て無いからな」

「だから、アークス達を強化する為に、利用はさせて貰う」

「そう言いマークスは中に戻って言った。外に残されたのは俺一人。」

「……そうやって突き放したら解決出来る物も出来なくなるんだよ……」

そんな事を本人に言っただけでやりたいが俺達は戦闘服を作っただけで貰う立場。そんな事を言えた義理では無い。

「……こんな時、姉さんならなんて言うんだ……？」

映された空は、まだ蒼かった。

「ちよ、ちよと待ってくれ。ほ、本当にコレを着るのか？」

「そうよ？ほら？只でさえその胸は牛のデカイのだから強化ブラジャーを着けないとね？」

「だからって何だこの水色のシマシマは！パンツもじゃねえか！」

「はあ、はい、女の子がそんな事を言わないの」

「俺は女だが女じゃねえ！」

外で一頻り悩んだ後、試着室に向かうと中から聞きなれた声が普通に聞こえた。

「……水色のシマシマ……？」

相棒が？そんな少女……いや、今時そんなの小学生でも着ないようなものを？

そんな事を考えていたらちよとトイレに行きたくなってきた。

コレは只の生理現象だ。何のこともない。

店員に聞いてトイレに向かうアフィン。その表情は少し、暗かった。

「はあ、はあ、はあ、はあ……なんだよこれ、結構良いじゃないか……」

「お似合いですよ。出来れば女言葉で話して欲しいくらいに」

「ああ、そうかい。ありがとう」

スツキリしてトイレから出て来ると色々付けた相棒が見えた。手は良く洗ったし大事な筈だ。

「よお、相棒。可愛くなったじゃないか」

「おう、そりゃーんっ?」

相棒のミミと尻尾が上に立っている。何だ?警戒してるのか?というか、頭のミミの隣に何か付いてる。シールドみたいだが:確かヘッドアクセサリー、だっけか。

「ーいや、外に出て言うわ。にしてもこれ凄いぞ。動きやすい」

「だろう?やっぱり女の子は可愛いー」

「カツコ可愛い、だろ?」

「ーじゃなくちゃダメだからな」

「ふむ、やはり俺の目には狂いは無かったな。どうだ?具合は?」

「ああ、さっきの服より動きやす言っちゃ動きやすいが:もう少しスカート長く出来ないか?」

動きを確認するようにその場でジャンプする相棒。その、ジャンプする度に胸が:。

「ああ、その事なんだが、戦闘服ってある程度露出無いと駄目なのは分かるな?」

「それだ。それどうにか出来ないのか?」

「ダーカーを滅ぼすのにはフォトンが必要不可欠だ。それが原生生物とかの討伐ならまだしも、な」

「:~:それで?」

「スカートの長さはこれが限界。長くするなら他を削らない。あつ、パンツの上に黒いスパッツだったか?アレは履くなよ?フォトン効率落ちる」

「:~:分かった。これで行こう。会計はー」

「会計は良い。そいつは俺が趣味で作った次世代戦闘服の実験服だ。有効に使ってくれ」

実験服をタダでか?おかしい、何かあるのか?もしやあの服に爆弾とか:~:そもそも、ビーストを嫌っているのに何故タダで渡す?

「だつとよアフィン。此処は甘えて帰るか?」

そんな事を考えていたお陰で相棒の声に気がつくのが遅れてしまった。

「…あ？あぁ、帰るか」

願わくば心配のし過ぎだと良いのだが…。

「かぁぁ！まさか戦闘服をタダで貰えるとは！しかもカッコ可愛いツ！」

「まあ、落ち着け相棒。…：相棒、マークスについてなんか思ったことあるか？」

戦闘服の買い物が終わり、さてこの後何するか、と考えていた所、アフィンが聞いてきた。

一度止まりアフィンの方に向く。

「…：少し、嫌な奴、か？」

「…：俺、相棒が着替えている時にマークスと少し話したんだが…：彼、ピーストの事嫌いらしいぞ？」

「…：…：なんか、嫌だなぁ…」

急に真面目モードに入り何かと思えばそんな事か。

…：正直ビツクリした。めっちゃ良い人だと思っただのに。

「もしかしたらその服に何か施しているかもしれない」

「…：いやいや、まっさか？第一、何を」

「…：聞いて引かないか？」

「…：その様子だと、エロか」

「…：…：しよ、触手服…」

「…：…」

それを聞いて俺達はまた歩き出す。それに続きアフィンも歩き出す。

「な、なぁ…」

「アフィン…」

正直アフィン君の頭の中がこれ程までに汚染されているとは知らなかった。

「な、なんだ…？」

「俺以外の女の前で、そんな言葉吐くなよ？」

「…ユウナの前だから吐いたんだがな…」

「…なんでアフィンの好感度カンストしてんすかねえ…？」

と云うかお前はマジでそろそろ俺の前で言うことやめろって…俺

はホモじゃーんあ？だが身体は女だぞ☒

「だって、ねえ？格納庫であんな状況で言われたら好きになるわ」

「普通は逆ポジなんだよなあ…」

頼むから他の人を好きになってください。割と切実に。

37 話目

それから少し二人とも黙り居住区の大通りにでた。道路を見ると曲線で描かれた如何にも跳弾しそうな形をした車が走っている。

そのまま歩きシヨップエリアに近づいた頃、見慣れた場所を発見した。

「そもそもな？ 考えてみる？ さつきアフィンは格納庫で俺に救われたから好きーいや、恩を感じた、って事だよな？」

「ああ、まあ、思い自体はアークス試験の時から合ったけど」

場所は居住区にある喫茶店ラフリ、何回か来た事のある喫茶店だ。最も喫茶店自体をこのーいや、まだそんなに出歩いていないから分からないがー船団には少ないと思ってる。

入って直ぐにテーブルに着き会話を再開する。アフィンには少し痛いだろうが。

「合った時からって…一目惚れかよ。尚更何故良いとこ見せないーちよつと待て、格納庫に突っ込んだのって…？」

見せた所でなる気は無いがな。確かに前世ではこう言う女体化？ TSって言うのか？ーいや、獣耳付いて居るからTSFか？ 願望って言うのはあるには合ったが…精神同性愛者になりたいわけでは無い。

「…良いところを見せたかった」

「…それを見せて惚れさせるつもりが逆にもっと惚れたと…はあ…」

「いらっしやいませ。お決まりになりましたら呼んでください」

ウェイターが来てメニューを置いて行った。

「なあ、アフィン…店の中に入らないか？」

「…うん」

メニューと氷の入ったコップを持ち店の中に入る。

中には少数のテーブルとカウンター席が合った。

アフィンにテーブルとカウンター席、どっちが良いかを念のため聞き、テーブルの方に座る。

「さて、さっきの続きだが：アフィン、思わないか？」
「何を？」

「考えてみる。俺がそんな事で惚れるとー」
そう思い一度シミュレーションして見る。

自分は敵の弾を食らって痛くて動けず目の前には敵の大群。自分一人では不可能な量。そこにアフィンが現れて俺を引きながら物陰に隠れて敵を撃つー。

「ー確かにこれ惚れるわ」
「だろ？」

「いやいや待て待て。これで惚れたらチョロすぎだろ。ダメだ」
「：分かった」

そう言いアフィンは周囲を見渡し何かを確認する。俺もつられて周りを見るが俺たち以外誰もーウエイターと店主が居たわ。

「：ユウナ、お前が好きだ」
「……は？」

コップに手を付け口に運びのもうとした瞬間、アフィンの口から爆弾が落とされた。

「……えっ？何？スキ？焼き？」

余りの超展開に分かりなくなかった。正直アフィンの事は分かっ
てはいたが：いや、ダメだろ色々。これが男の娘ならまだー待
て、そっちに行くのはマズイ。

「違う、好きだ。ユウナの事が好きなんだ！」

バンツ！とアニメさながらテーブルに両手を着き立ち上がるア
フィン。そんな事したら塞いだ穴が：

「ーっイッテ……」

音に驚いたのかウエイターと店主が此方をガン見して居る。そ
りやそうか。男が女に告ったもんな。：外野なら良かったがな！

「アフィン落ち着け。塞いだ穴がまた広くなる」

「……相棒、いや、ユウナ。返事を聞かせてほしい」

「……えっ？マジで？待って今考える」

待つてくれ、いつからこんな学園アニメみたいな展開になった。い

つだ、どこでだ☒

そもそも俺は精神男でアフィンも男だ。この時点で恋人も何も：んっ？精神が男？では身体は？

顔を下に向ける。其処にはとても膨よかな胸が自己主張してました。ここでわかる事が胸がある事。

次に利き手の右手を使い股間部を確認する。そこには男に在るべきものが無く、ツルツルだった。

さらに分かった事が胸があり男に在るべきものがない事——女の子やんけ。

「…ユウナ、答えは…？」

震える声でアフィンは言う。そりや好きな子に告って返事待ちだからな。俺にはそんな経験無いけれども。

「…アフィン」

「は、はい！」

返事、か。

「友からな」

「やったああーってそれ今と変わらないじゃねえか！」

一度立ち上がり歓喜した後、冷静に考え俺に指を指した。

「アフィン、親から指を指してはいけないと言われなかったか？」

「いや、だから答えは☒」

「すいませーん、オレンジジュース一つ。アフィン、お前は？」

ウェイターを呼び注文を取る。取り敢えずオレンジでいいか。

「えつとじゃあフライドポテトと…オススメって何ですーって待て！俺の話を無視するんじゃ無い！」

アフィンも流れに乗り注文を言うが、途中で我に振り返りを言うて来た。

「オススメはパンケーキとアイスのセットよ？お二人さん、どうする？」

「アフィン食わなきゃ俺食うし二つでお願いします」

「…はあ、もう良いや」

俺とウェイターのコンビニよりアフィンは折れた。多分折れたの

は心だろう。別の部位では無い。

「アフィン」

「何だよお…」

テーブルに屈し不貞腐れるアフィン。

「俺以外にももつと可愛いーかはどうかは知らんがいい人が居るはずだろう。それにアフィンはニューマンだ。ほしい人はたくさん居るはず」

「それでも、俺はユウナが良いい…」

「はいはい、何もビーストとくっ付かなくても良いんだよ。ビーストを見る目はまだ甘く無いんだから…」

「分かってない。分かってないんだ…」

そう小声でアフィンは呟く。やべえ、これ下手したらアフィンとの交友関係壊したか？

アフィンが元に戻るのに3分ほどかかったそうなの。

「はあ…甘かったわあパンケーキとアイス」

パンケーキとアイスを食べ終わりオレンジジュースを飲みながら、この後何をするかと考える。そこにトイレから戻ってきたアフィンがまだ爆弾を落とす。

「なあ相棒…思ったんだがこれデートじゃね？」

「…確かに。…って言う事はデートの費用は男性が持つって何かに書いてあった気がする」

「ごめん多分デートで欲しいって言う俺の願望だわ」

「…なあアフィン。何でそこまでして俺にこだわる？」

「そ、それは…」

「いや、嫌なら別に良いんだが…思えばずっとバディ組んでくれたし」
「だって…ビースト可愛いじゃん」

「んっ？うん」

「めっちゃ良い匂いー家の犬と遊んでいる時みたいな匂いがして安心する」

「うんうんーうん？お前それー」

「尻尾とかケモミミモフモフしたい」

「……」

第六感が嫌な予感を警告したので、すつ、と静かに席を立ちアフィンの隣に立つ。

「ユウナのお腹に赤ちゃんを作りーうぼあお！」

右ストレートを見舞いした。おかしい、アフィンと始めてバディを組んだ時から此奴はこんな奴だったのか？

「…変態」

「あ、相、棒、ストレートはマジで、痛い」

おうもう二度と言うなや。

倒れたアフィンが目覚めるまでアフィンの金で食うか、それともマトイを呼んで思いつきり食べさせるか、等考えながら待つ事にしよう。どうせこいつの事だ。すぐに起きる。

38 話目

アフィンの告白兼自爆を見守った後、このアホが起きるまでここで待つ事にする。幸い周りには誰もいない。

オレンジジュースと氷の入ったコップを手に取りストローを口に持っていく。酸っぱくて目が醒める。

アフィンが頼んだフライドポテトに手を付け三本ほど口に運ぶ。

思えば脱出してからここに来るまで飲んで食つての繰り返しだなあ…。

周りを見渡すと角の方にテレビを発見。上に引っ掛けているのか？

店主に一応確認し、許可をもらう。

「良いぞ…しかし、振るとはな」

「え？…ああ、振ったわけじゃないですよ。友からです。いきなりは…ちよつと…」

第一死ぬまでこの身体なのかすら分からない現状、無闇にするのは戻った時に色々ある気がする。

「あのニューマン…まあ、最後のぶつちやけが無ければそれなりだな」

「……」

そこについては何も言えない…カバー出来ない。

「まあ、告られちゃったのが運の尽きさ。アンタ、ビーストだろ？」

「あ、え、ええ」

「ビーストに好意を抱いている人は全体で見たら少ない。そのビースト自体も240万分の1だ」

「……」

「240万の1がアンタの価値だ」

そう言い店主は奥に消えていった。

240万分の1……何のことだ？ビーストの何が250万分の1何だ？全く分から…ああ、人数を全種族で割った数か？

テレビのリモコンの電源ボタンを押し電源をつける。

『ーなんと！今ならこのセットでー』

『ーいけえええ！ロケットー』

『へえ、そうなんですか？』

『ええ、他にはー』

『アイドルのクーナさんが近々この1番艦に戻って来るそうです』

『ええ、全24隻、240箇所のトータルライブ。最後はここに決めた
そうですね』

『ええ、クーナさんの初めてのライブもこの1番艦ですしー』

リモコンでテレビの局を回し続けるとニュースにてクーナと言う
アイドル？歌手？がなんかライブをするらしい。

「クーナだつて☒」

テレビの声に急に起き出すアフィン。

「起きたか。さっさと帰るぞ」

「聞いてなかったのか☒クーナだぞ☒あのクーナ！」

「クーナ☒知らんよ興味の無い」

「☒貴様ツ！全船3億のクーナファンを侮辱したな!?？」

全船60億つて…えつと全船で120億だからー40人に1人
はファンなのか…。

「と言うか興味の無いだけで侮辱とかちよつと何言ってるのか分から
ない」

「まあな。その中にはヤバい奴も居るから気をつけてろつて事だ」

そう言いアフィンはとつくの昔に来ていたパンケーキをナイフで
切らずにかぶりついた。

パンケーキの上に乗っていたアイスはもう溶けている。

「うむ…やっぱり甘いな…相棒、食うか？」

二枚あるパンケーキの内一枚だけ食べて甘くて無理と俺に渡すア
フィン。

「そうか。それならー」

手を伸ばし皿を貰おうとした時、ふと先程の会話を思い出す。

「ーアフィン、このパンケーキ、手を付けてないよな？」

「んっ？ああ、食った方しか手を付けてないよ」

「…もしやアフィンって普通モードとネタモードがあるのか？」

「そんな二重人格みたいな事があり得るか…？無いだろう。」

「パンケーキを貰い口に運ぶ。」

「前から甘い物はわりかし好きだったが…女になってからもっと好きになった気がする。」

「溶けたアイスクリームをパンケーキの上に乗せ口に運ぶ。少し大きかったのかアイスが口元から垂れた。」

「…：うん？どうした？」

「そこをじつとポテトを手を持ったまま見ているアフィン。」

「いや…ちよつとね？」

「そう言い目をそらす。」

「口元か？」

「ああ、アイスがね…」

「…：この溶けたアイスって白い液体だよな？」

「もう言うな…みなまで言わなくてもわかる」

「分かりたく無いのは俺なんだよ」

「さっさと口の中に残ったパンケーキを入れ席を立つ。」

「ま、待って！まだポテトがー」

「そんなのさっさと口に入れろッ！帰るぞ」

「無理だつてー！」

「…：すみません、コレ入れられるものありますか？」

「アフィンが全部は口に入らないと言いしようがなくウェイターを呼びポテトをいれてもらう。」

「小さな良くバーガーチェーン店で見える袋だ。」

「よし、アフィン会計は任せた」

「おおい！ここは割り勘だろっ☒」

「ツち、しょうがねえな」

「ここでアフィンに出させようとしたが割り勘と提案して来た。たまには乗るか。割り勘だけ。」

「お二人でパンケーキセット二つ850メセタ、フライドポテト60メセタ、オレンジジュース160メセタで合計2・480メセタになります」

2480円割る2だから…1240か。

足首に付けているポーチから財布を出す。

財布の蓋を開け中身を確認する。

「…やべ、細かいのが…」

「…相棒…いい加減カードで払おうよ…今時メセタを携帯するなんて殆ど居ないよ?」

「うるせえ、万が一があるだろ?」

「その万が一もカードでどうにかなるんだよなあ…」

そう言うので仕方なくアフィンの言う通りアークスカードを取り出し渡す。

「…:はい、お二人様から1240メセタキツカリ頂きました。ありがとうございます。また来て下さいね?」

「はあい、また来るよ」

そう言い喫茶店から出る。

居住区からショップエリアに向かう。そう言いやモノメイトとか残っていたつけ?

アフィンについて行きながらマグを呼びコンソールを呼び出す。

ナトランサーに保管されているアイテム一覧からメイト系を探す。

合った。モノメイト。

「…:そーいやモノメイトって飲んだ事なかったなあ…」

「…ん?飲んだ事ないのか?」

「ああ、元々俺はダメージを食らいにくい中遠距離のレンジャーだったし…」

まあ、そのライフルもイかれてショートバレルのお下がりだけだな。

「…:なあアフィン。このモノメイトって美味しいのか?」

「…:ああ、まあ、なんだ」

「…不味いのか？」

「…飲んで見ればわかる。強いて言うならー」

そう言い前を歩いていったアフィンが俺の方に振り返った。

「俺は好きじゃない」

不味いのか…。

「飲んだ事ないなら飲んで見れば？百間は云々カンヌン、だ」

そこまで言われると飲んでみたくなるじゃないか。

アイテムのモノメイトをタッチ、出現させる、を選ぶ。

ナノトランサーに手を入れソコにあるはずのモノメイトを掴む。

そのまま手を外に出し出てきた物を見る。

ラベルにはアークス言語でモノメイト、と書かれている。

チューブに口を付け吸う。

「まっつずうっつーんだコレツツ！」

吸った瞬間、口の中の物を近くに有るゴミ箱に吐き出した。

「まあ、そうなるわな。美味かったら暇な時でも飲んじまうからだろ
う」

そうだが…ッ！そうだけど…ッ！

「だからって…コレは…うツエ」

「その代わり戦闘服のフォトン係数がダーカーにやられて落ちた時に
元に戻るから飲む事になる」

「…はあ、はあ、はあ、じよ、冗談じゃねえ…ぜってえダメージなんか
食らうものか」

「因みに相棒が落として地面に中身をぶち撒けているモノメイト…そ
れ1個で10回使えるぞ」

「……モノメイト買いに行くぞ。買いー」

「ーそれじゃ俺は帰るわ」

買い物に付き合え、と言おうとしたら先に帰ると言われた。

「付き…そうか、なら仕方ない」

「…まあ、なんだ。ありがとう。今回は助かった」

そう言い面と向かってアフィンが頭を下げてきた。

「アフィン、もう良いって。何回か謝っているだろ？」

「それでも、だ。だからー」

「コレからも俺の友達で居てくれるか？」

「そう言いアフィンは頭を上げて右手をー俺から見ても右手を差し出してきた。」

「勿論、と言いたいが…」

「なんだ？ダメなのか？」

「なんか死亡フラグっぽいからダメだ。因みに俺の答えは勿論、だな」
「なら良かった。任務がある時はまた誘ってくれ。相棒と居ると死に
そうで死なないスリリングな任務になるからな」

「頼むからもつと気楽にやれる任務にしとくよ」

「そう言いアフィンは先にテレポーターに乗り帰った、のか？」

「…さて、モノメイト買いに行くか」

「ショップエリアに到着し、さてモノメイトを買わねば、と思つて居るとモニュメントである中央噴水の前に少し前に見た格好の女性が佇んで居た。」

「新たなマターボードが産まれた…。此れは、貴女の行為が意味を成し事象の好転を示す」

「そう女性が言つた瞬間、周りにいるアークス関係者が急に止まつた。」

「マターボード…？それに周りの人が止まつた…それに貴女は…？」

「そう言い目の前の女性ーシオンが俺の方に振り返つた。」

「私と、私達から、千感謝を」

「易き道程ではない事を、私達は知り、それでも私は貴女を頼つた」

「応えたのは貴女だ。貴女の意味が応えた。故に私は感謝する」

「答えたって…一体何にです？」

「貴女の認識において、優位事象の取得がおこなわれている。得た物は貴女以外に得られぬ物となる」

「ダメだ、話が全く解けない。」

「貴女が手にしたかの武器について、私は知らない。知り得ない」

「武器…あのぶっ壊れた創世機の事、ですか？」

ナベリウスの凍土地域にて俺そっくりのダークファルス、仮面「ペルソナ」と交戦した後に拾った謎の武器のパーツ。アレのことか？

「ただ、貴女にとつて、いづれ分かる事象で有ると私は知っている」

「これ以上語るべき言葉を私は持たない…許して欲しい」

「そして、幾度と無く貴女を頼らねばならない私をどうか…許して欲しい」

そう言うと急に目の前の…そうだ。シオンだ。シオンが消え、周りのアークス達もまた動き出した。

「…一体全体どうなってるんだコレ…」

とりあえず、モノメイトを購入しないと。

シオンと会話…会話か？した場所から直ぐに右に向くと回復アイテムを売っているお店がある。

「…あつ、旅立つ前の準備を忘れずに！此処では回復アイテムを売ってますよ！」

「それならモノメイトを一つ頼むわ」

「ありがとうございます」

そう言い店員の黒髪の人がモノメイトを渡してきた。

「えつと…メイト、デイ、トリ、全部あるな」

他に買うものは無いのを確認し店から離れる。

「気を付けて行ってらっしゃいませ」

任務から帰って来たところだけだな。

39 話目

ショップエリアにて買い物ーモノメイト1個だがーを終えて自分の家に戻る。

「そう言や久し振りの気がするなあ…」

「そう言いふと日付を確認する。あれ？2日しか経っていない…？」

「オラクル標準時間で…」

ああ、やつぱり2日だ。…という事は2日で450万も稼いだのか…。

それにしてもあの機体、何であんな所に…明らかに人じゃ無いものと戦う感じだったけど…。まあそもそも人型兵器つて対人じゃないし。

「まあ、アレに乗れて俺はラッキーだったな」

死にそうな思いしたけど。

「よし…ただいま…あれ？」

自分の部屋の扉を開けてみると中から返事が聞こえなかった。疑問に思い奥に向かうと…ああ。

「二人揃って寝ていたのか…」

寄り添うようにポイントとマトイが寝ている。

念の為、二人の手首に手を当てちやんと呼吸をしているかを確認ーしている。次に額に手を当てるー熱なし。

この船団は、ほぼ全てのことをフォトンで賄っている。前世の電氣やガスとかと一緒だ。

だが俺は近いうちに電氣は兎も角ガスにはしたいと思っている。少なからずのメーカーがあるし。

この閉所空間でガス？と思うが、曰く爆発しそうになったらフォトンがガスを吸い込む？何というか止めてくれるらしい。

最早魔法だな。

…兎も角、フォトン代や、水は全て俺の所から勝手に引かれている

はずだから其処らへんは抜かりない。

冷蔵庫に向かい何か食べるものは無いか探す。

中にはーほぼ何もなかった。

「うっそだろ…まさか…」

真っ暗だったキッチンで電源を入れて明かりをつける。

「やっぱりか…」

シンクの中には全く洗われて居ない食器類が。自分でもミミと尻尾が垂れているのが自分の事のようにーっってこれは自分の事か。

「はあ…」

この残城を見て俺は先ずそれらを洗うことにした。そうでは無いと予備の皿すらない。

キッチンに備え付けのポンプにスポンジを近づけて洗剤を付ける。つけた後に少し水を掛け良く泡立たせる。泡だてた後は、只管食器を洗い、水で濯ぎ、乾かす。この3工程だ。

「んっ…んんう？」

食器を洗う音で起きたのかマトイが声を上げた。

「…マトイか？今日の飯どうする？」

食器をスポンジで洗いながらマトイに聞く。マトイの方はまだ起きてないのか紅い目で俺の方をジイイっと思つめている。

「…ユウナちゃん？」

「…？ああ、そうーおい待て！今洗ってる最中だからっ！」

そうだと返事をするマトイが急にドタバタと俺の方に走って来て後ろから抱き締められた。

「ユウナちゃん…帰ってきてくれたんだ…無事で良かった」

「…マトイ、胸が当たってる」

「…？女の子同士だから大事だよ？」

俺は元男なんだがなあ…男の時にこんなシチュに会いー会ったらフリーズするわ。

「そう言えばやけに長かったけど何処に行っていたの？」

「ああ、それはーすまんが、洗い終わってからでー」

「そこで何で食器がこんなに溢れているのか聞いてみることに。確かに任務に出る時全部洗った筈。」

「ーなあマトイ、話は変わるが何で食器がこんな事にー洗われてないんだ?」

その問いに対してマトイは。

「あはは…その、ごめんなさい」

「何があった?」

「ユウナちゃんが居ない間、何かを作ろうと思つて居ただけ…洗うの忘れてて…」

「料理に失敗したとかじゃないんだな?」

「う、うん。ちゃんとできー」

マトイの会話を遮るように誰かのお腹が鳴いた。

「ー食つてないな?」

「…うん…」

「…幸いもう夜手前だ。何か頼むか?」

「良いの☒それじゃあね…えつと、肉!」

「に、肉☒まあ、良いけど…」

マトイの余りの食い気味に少し驚いた。と言うか肉のデリバリーつてあるのか?」

テーブルに置いてあるノートに向かい肉、デリバリーと調べてみる。

「…案外あるな…ステーキすらデリバリーか。何でもありだな」

大体こういうのは実物と違う可能性があるが…無いものには仕方がない。値段もセットで2000メセタいかないレベルだし。

「ポイント…は寝てるのか…同じセットで良いか。マトイはどうする?」

ポイントのと自分のを決めてノートをマトイに見せる。

「うーんと…ユウナちゃんと一緒ので良いや」

「☒飯とパンならどうする?」

「…☒飯?」

「…多めにしておくわ」

それから暫くしてマトイが今回行った惑星——リリーパか、その話を聞きたいと言ってきた。

「任務で言った惑星の話を聞きたい、ねえ…」

「ダメかな？何かキツカケで思い出すかも」

「思い出す…？ああ、そーいやそーうか」

マトイが言ったキツカケ——そーいや記憶喪失なんだっけ。忘れてたわ。

「つて行つたつて…リリーパなんてあんまい惑星では無いぞ？」

「行つた惑星はリリーパって言うんだ。…それつて今ニュースでやっていた新しい惑星だよな？」

「そう、多分それ。暑いわ砂しかないわ暑いわでロクなことがない」

それに死にかけたし。

「砂だらけの惑星なんだ。確か砂漠つて言うんだっけ？」

「そーう。砂漠で合つてる」

「新しい惑星だしまだ何か隠れてるかもしれないかもね。ゲツテムさんやゼノさんも行つてるのかな？」

…その隠れたものの一部を見つけて回収した、つて言つたらなんて言うだろうか？

「そーう言う隠された物を探すのつて楽しそう。うん、何だか宝探しみたい」

「ううん…なんか思い出せるような事は——無いか」

「…ありがとう、ユウナ。特に思い出すような事は無かつたけど話聞けて楽しかつた」

「そうか。また何かあれば…ううん…明日辺り外に出かけるか」

「明日？別に良いけど…どうして？」

「…マトイの服とか家具とか色々見つけないと。一応記憶戻るまで此処に——居るか？」

「うん、居るから。大丈夫」

「よし。ならさつさと——まだご飯がまだだったな」

「そーうだね。早く来ないかなあ…」

マトイと明日出かける約束をして会話を終わらす。と言うかどの位掛かるのだろうか？

ノートを開き注文履歴を見る。数分で来るようだ。速いな。

「ほら、ポイント。起きろ」

マトイが動いたお陰でソファに倒れて寝ているサポートパートナーを起こす。

「…ふあ、ユウナさん、おはようございます」

「まだ日は開けてないぞ。何も無かったから肉で良いな？」

「…ヤケに羽振りが良いですね？」

「…少し当ててしまつてな…」

あんな大物どんな確率で当てられるんだか…。

「…つあ、食材も買わないと…まあ、明日考えれば良いか」

それから4分くらいマトイとポイント達と惑星出会った事ーロボの事ははぐらかして喋った。自分でも何ではぐらかしたのかは分からない。

40 話目

それから数分してインターホンが鳴り、備え付けのモニターを見る。どうやら来たらしい。

玄関に向かいお金ーメセタを払う。

デリバリーされたステーキセットを二人の前に置き先に食べさせる。

それから店員から店のパンフレットを貰った。

奥の方でいただきます、と言う声が聞こえた。

「ううん、柔くないなあ」

「うん、なんか固いというか何というか…」

まだデリバリーして来た店の人が居るといふのにリビングからそんな声が聞こえた。

「あははは…その、すみません」

「いえ、大丈夫ですよ。少し焼き過ぎたのかもしれないし。少し安くしときますね」

2500x3で7500の筈が500メセタ引かれ7000メセタになった。

「また何も無かった時に頼むよ」

「はい、ありがとうございます」

そういう店の人は帰っていった。

ドアを閉めマトイとポイントの居るリビングに戻る。

二人は先程の声の通り既に食べ始めていた。

「ううん、ソースをデミグラスにするべきだったかなあ？」

「オニオンも中々美味しいですよ？」

そう言いながらステーキを口にどんどん運んでいく。と言うか奮発して600gを頼んだんだが…。

一度皿の方を見ると3分の1近くが無くなっていた。

…よく見ると二人とも口元にソースをつけている。

「?どうしたの?早く食べようよ?」

マトイとポイントの口元を見ていたら二人に言われた。

「あ、ああ、分かった」

既にテーブルに置いてあるステーキの前に座り、いただきます、と言ってからナイフとフォークを使いステーキを切る。

少し間の空いたお陰で少し硬くなつて居る。

ナイフでステーキを切るとーよし、ちゃんと中まで火が通っているな？

大きめに切ったステーキを口に入れる。

「んんっ…確かに…硬いな…」

「でしょ？まあ食べれなくてもないけど…」

「ええ、ユウナさんが居ない時に作った料理はそれはー」

「ポイントさん、その事は言わないで…」

「…まあ、何があつたかまでは聞かないが…」

まあ、後で料理本片手に教えるか…そうしよう。元男の俺が何処まで通用するかは分らんが。

心の中で思いつつ、ステーキにーもうナイフで切るのを面倒だな。ナイフで切らずそのまま行くか。

未だ塊と言えるサイズのステーキをそのまま口に運ぶ。

「…ですが、マトイさんも将来ーと言つたつて三、四年後には結婚出来る年なんですから料理のひとつくらいは…」

「だって、料理本見たって分からないよ！小匙つてどの位なの？大匙つて？塩と砂糖のぱつと見の違いは☒」

最後のは私情だろうに。と言うかぱつと見で分からないのであれば舐めれば良いのでは？

そう言いながらも俺は自分の前にあるステーキを食べ進める。

噛みちぎりよく噛んで飲み込む。

「ほら二人とも、さっさと食つて早く寝るの。明日買い物に行くんだよ…」

「はあ…」

そう言いながらもポイントと話を続ける。

その様子はまるで遠足前の子供ー子供？

「そーいや良くあるSF物ではこう言う…作られた子供？人造人間？いや、それは人のパーツを使ったフランケンシュタインみたいな奴だ。」

「マトイを見る…ツギハギだらけ、と言うわけではない。となると…。」

「デザインーベイビー、か？」

「ベイビー？赤ちゃんがどうしたの？」

「んっ？いや、なんでないよ」

「デザインーベイビー、読んで字の如く設計された…いや、再設計した赤ちゃん、か。」

「…やっぱ科学者って発展するとくそだわ」

「そう肉に被りつきながらも小さく呟いた。」

「その後マトイとポイントに…マトイには同じ事を言うことになるが…今回の任務の事を話し明日に備え就寝した。」

「余談だが夜間トイレに行こうとベッドから起きたらマトイが隣に居たのは最早何も言うまい…。」

翌朝、前日の約束通りに外に出かけることにした。

「ああ…今回買うものは…」

「適当に野菜、肉、米…あと…なんだ？」

「…そーいやマトイ。家具って買ったか？」

「うん？ユウナの使っていない家具を適当に置いて見たよ？」

「…何か欲しい家具ってあるか？」

「…今はないかなあ…」

「そーか…」

「ないのなら仕方ない。そう思いながらクローゼットの扉を開ける。」

「中には…今着ているドラグニアフロール、だったか、それを着る前に着ていた服…ヘレティッククイーンって名前か、その替えが3枚ほど合った。」

「…それ以外には何も無い。」

「…」

ガチャリとクローゼットの扉を一度締め一言いう。

「何か普段着買うか…」

今回はこのドラグニアフロール着たまま行くか。アークスだし…まあ、何か言われたらアークスなんでって言っとけばいいだろう。

「うっし…マトイ?終わったか?」

「うん!今向かうね!」

そう言うとりびんぐを挟んだ反対側から出てきたマトイ。…うん?

「なあマトイ…その服で…救出した時の服で本気で出るのか?と言うか足元寒く無いのか?」

今マトイが着ている服…それは余りにも服と言うには露出が…アークスの女性戦闘服全般に言えるか。

足元は若干生脚晒しているし胸の下辺り出てるし。

「?ダメかな?」

「…周りを見れば変わらんが…強いて言うなら俺がダメ」

今は女でも精神までは男で居たい。居なければならぬ。

「ううん…ならどうしよっかなあ…他に服はパジャマしか無いし…」

「…あれ?少し前に服買わなかったか?」

「あはは…少し興奮しちゃって運動したら引っかけ破れちゃって…」

「…破れた?」

「うん、あそこ…ってそこからじゃ見えないか。こっちに来て!」

リビングから自室を指すものの角度的に見えない。マトイは俺の手を引っ張りマトイの部屋に連れて行った。

「ほお…中々可愛いじゃ無いか」

マトイの部屋に初めて入った感想は、可愛いだった。

戸棚にネコやイヌみたいなデフォルメされたぬいぐるみが3個ほど乗って…んっ?

「マトイ、なんだ?あの黄色い…鳥?」

「あつ、アレね?ラッピーって言うんだよ?なんか可愛くて買っちゃった!」

ラッピーやらを手に取り持つてくるマトイ。

「ラッピー、ねえ…」

美味しいのだろうか。

「…はっ、ユウナ、今変なこと考えなかった？」

「んっ、いや、特に何もーユウナ？」

「っあ、もしかしてダメ？」

「いや、別にいいよ。好きなように呼んでくれて」

「本当☒それじゃあ…：わんこ！」

「…それは痛い記憶を蘇らせるからやめてくれ…」

自分でも尻尾とミミがへこたれるのを感じた。

取り合えず何も着せるものがなかったので俺のお古のヘレティツククイーンを着せる事にした。

41 話目

ショップエリアから下に向かってマトイと俺の服を買うことに。

「さて：マトイ、どこに行こうか」

「ううんとね：まずは買い物かな？」

「：だよな、食べ物買わないと：」

「：：ねえユウナ？ここら辺にーそう言う何か買う所ってあるのかな？」

「俺だって調べて来たんだぜ？」

「そう言いマトイにマグが見えるところまでくっつく。」

「現在位置がここーショップエリアを降りた目の前のエリア。目的地はーこの：ニアールカト？で良いのか？」

「：マグの地図を見る限り合ってるね？」

「：言いにくいな、ルカトで良いや。まずはここに行こう」

「表示された地図に赤い丸が移る。」

「まず食べ物とー食べ物と何買うの？」

「取り合えず食べ物。後はそれから。：ニアールカトって外国語っぽいな」

「がいこくご？何それ？」

「ああ：違う種族が喋る言語かな？」

「ニューマンもセミフルキャストもヒューマンもビーストと皆んな同じ事を喋ってるよ？」

「いや、まあ、そうだが」

「統一言語、それがアークス言語か？」

「そう言う意味では外国語って概念は無いのか。」

「：取り合えずバスで行こう。マトイ、良いか？」

「う、うん：」

「：何かあるのか？」

「その：少し怖くて」

「怖い？何が？」

「他の人の目線が…ほら、私って白銀だから…」

「いや、その理論で言ったら俺やゼノさんやエコーさん、あとアフィナーは金髪だから関係ないな。ゲツテムハルトさんにメル姉妹なんか緑だぞ?」

「…えつと、ユウナは銀…と言うか灰色…でも黒に近い?のかな?にゼノ、さんは赤髪、の人だっけ?」

「そうそう、もう一人いた女の人が…」

「…エコーさん、だよね?」

「そうだ。ゲツテムハルトは…ありや薄青か?」

「そうだねえ。メルフォンシーナさんと、メルランディアさんが…緑髪、だよね?」

「合ってる合ってる。ほら?周りもおかしい髪色ばかりだろ?」

「…染めてんのかな?オラクル船団の人たちは。」

「…染めてんだろうなあ…」

「?何のこと?」

「何でもないさ。それでマトイ。バス、乗れるか?」

「…ユウナと一緒になら…」

「…今思ったが呼び捨てになったな」

「あれ?もしかしてちゃんづけの方が良かった?」

「いや、良いさ。マトイもバスに乗れるって言ったしさっさと行ってさっさと帰ろう」

「…私はもう少し歩きたいなあ…」

「…帰りどつかに降りるか」

「うん!」

なんか子供が出来たみたいだ。身長的にはどっこいどっこいだけど。

「所でユウナ?あんなに沢山買ったけど大事なの?保管できる?」

「ああ、あの量なら問題ないー箒。冷蔵庫にナノトランサーの機能ー四次元ポケットか。それが付いている」

「…ならあんなに大きい必要はない?」

「…マトイ、小さければ良いと言うものではない」

第1小ぎ過ぎると物が入らないからな。

ふと見るとマトイが俺の胸と自分の胸を見比べている。

すまんがぶつちやけクツソ重いからマトイの小振りー。

「…言う程小振りか?」

「えっ?」

「…いや、何でもないさ」

「…ユウナに比べれば小振りだよ?」

「比べる相手を間違えてるんだよなあ…」

そもそも本人ーこの場合はこの体の人か。その人にー。

「…んっ?そもそも戻った時本来の持ち主はレンジャーでやって行けるのか…?」

「えっ?ユウナちゃん忘れ物?」

「いや、ああ。確かに忘れ物だわ。回収出来ないけど」

「えっ?大丈夫なの?」

「問題ない筈。多分」

まあ、その時になつたらなつたであとはその本人の自由にすれば良いや。

「…食料類は買ってもうウチの冷蔵庫に入っている筈だし…どうしよっか?」

「ううんとね…ユウナちゃんが使ってる武器を見たい!」

「ライフルを?なんでいきなりーいや、確かにどうしよっかって聞いたけど」

「ダメかな?」

「…まあ、武器屋ならアークス所属なら大体入れるらしいし…行く?」

「行く!」

「…俺が言うのもなんだがマトイは武器見せて楽しい?」

「楽しいって言うか…なんか、こう…引つかかるって言うの?」

「…まあ、武器見て触って思い出すかもしれないし、言ってみるのもアリか」

「うん!」

「…マトイは何を持ってそう?」

武器屋に舵を切りショップエリアを目指し進む。

ショップエリアには武器屋（6階建）がありその1階で比較的使いやすい武器の販売をしている。

そこで売っている武器は名前に必ずA・C―Ark's.com batの略―が付く。多分ゼノさんから貰ったこのライフルも元を辿ればA・C系列の筈。

「えつとねえ…ソードは重そうだし、パルチも重そうだしー」

「と言うかハンター系列の武器って全て重そうだよな」

「うん、ファイターのダガーは自分の事切りそうだし、ダブルセイバーもソードと同じかな？」

「ナツクルって柄じゃないもんな。マトイは」

「となるとユウナちゃんと同じレンジャーなんだけど…」

「しつくりこない、と」

「…うん、となると…」

「フォースとテクター、か」

「…そこって武器を使う事って出来るの？」

「えつと、確か、鬼の様にリミッターかけられた状態で使えるらしいよ？」

「と言うかそもそもオラクル船団の中じゃ緊急時以外は使用原則禁止だし。」

「…ここでききなり炎どかーんとか来たら死ぬぞ？」

「どの位リミッター？掛かっているの？」

「確か―ライフルに限るが意図的に射程落ちてたな」

「まあ、レンジ自体が射程に対して短いって言うのもあるのだろうが。」

「俺も短いライフル欲しいしなあ…探すか？」

「ううん…でも私マグ持ってないし…」

「ああ…そうか、連絡付きにくいのか…」

「かと言って今すぐアークスになれって言うのもなあ…まずフォトン適性有るのかすら不明だし。」

「まあ、ゆつくり行こうや。時間は―」

『ただ今午前11:00になりました。現在の天気は晴れ、気温は24度、湿度はー』

ビルに付いている大きなテレビが時刻を告げた。

「お昼にすらなっていない。たっぷり有るさ」

「そうだね。まだまだ有るね。……所でユウナちゃん？」

「なんだ？」

歩くのをやめマトイの方を見るために振り返ろうとした。

すると腕にマトイが抱きつきマトイの勢いで自分も歩き出す。

「お、おいマトイ？」

「今日のお昼は何にしようか？」

「……何が良い？」

「お肉！」

「昨日食ったよな？」

「買い物はまだ始まったばかりだ。」

「…あつ、俺ら服買ってなくね？」

「…ああ、忘れてたよ」

「こりや武器屋を見終わったら服を買いに行かなくちな。」

42 話目

「お客様に大変お似合いですよっ!」

「そうかあ?…マトイはー」

「お連れの方でしたら別のお部屋で試着しておられーすいません」
話を遮り耳元のインカムに手を当て始める店員。

「ーはい、はい。分かりました、お客様にお伝えしますーお客様、お連れの方が服を買うとのことですが」

「いったいどんな服だ?」

「此方にお客様のお連れの方が購入する服を着た場合のデータがあります」

そう言いながらホログラフィックを俺に見せる。

「…いいじゃないか。値段は?」

「はい、此方8.000メセタとなっております」

成る程、8000か…今は財布は厚いし買うか。

「うむ、買おうか」

「お買い上げありがとうございますー所でお客様」

「なんだ?」

「お客様は何か買われないのでしょうか?」

「…そうだな、露出が無い服、あるか?」

「…完全に、と言う事でしょうか?」

「そうーいや、出来る限りでいい。あるか?」

「とは言いますもの…」

そう言い店にある商品リストをスクロールする店員。

「…そうなるかスーツーこのダイレクトスカートの様な物しか…」

「…スカートか…長さは?」

「足の関節までです」

「色は?」

「スーツらしく黒、でも白や赤、緑だつてありますよ?」

「…まあ、黒でいいかーそうだ、これ、戦闘に耐えられそうか?」

「戦闘に…？失礼ですがお客様は…？」

「ああ、一応アークスだ、ルーキーだが」

「アークスの方でしたか。そうですか…そうですねえ、戦闘に関しては…うむ…」

「…ああ、取り敢えずコレは買っておくよ。何も戦闘服にするつもりはないからな」

「…うむ…そうですか、分かりました。住所はどちらに？」

「アークス居住区の…いや、こっちで書く」

「分かりました。ではタブレットをどうぞ」

そう言い渡される紙…ではなくタブレット。其処には自分の名前を打ち込むだけで住所を特定出来る、とそんな風に書かれていた。

「…ねえ？これ大丈夫？」

そう言いタブレットを店員に見せる。自分の情報をこんなスラスラ書き出していいものか？

「大丈夫ですよ。オラクル船団のマーケットやショップは必ずと言っていいほど導入されている信頼性の高い会社の物ですから」

「そう、なのか？」

自信満々に言う店員に少したじろぐ。だが…いや、かといって紙で住所を書く…にもなあ…この船団に紙自体あるかどうか…。

周りを見渡せば殆どが機械類。ノートみたいな物…と言うか紙自体がないのかもしれない。

いや、まて。本が有るからそれは無いな。価値もそんなに無いし。「となると…書くという発想が無い…？」

いやいやいや、待って待って。こんなに科学力が発展してんだぞ？そんな事はないはずだ。

「はい？…どうしましたか？」

「いや、何でもありません。此処に入力すれば良いんですね？」

「はい。お願いします」

タブレットを操作し自分の住所を書き込む。

「ああ…電話番号は良いのか？」

「電話番号、ですか？失礼ですが電話番号とは…？」

そう言い聞き返して来る店員。しまった。こつちには電話と言う概念が無いのか。

「ああ…そうだな、いや、やはり忘れてくれ」

電話とは何かを説明しようかと考えたがそれ通信で良くなって事を思い出し辞めた。

「そうですか、分かりました。住所は此方で間違い無いですね？」

「ああ、合っている、筈だ」

「分かりました。それでは同じ物を住所のナノタンスに置いときます」

「いや、玄関に頼む」

「いえ、お客様、ナノタンスならばどの家庭にもあります。其方の方が安全ですよ？」

「…そうか、それならば頼む」

「分かりました。所で…」

そう言い店員は俺の事をジッと見る。

「お客様のお連れの方は服を後数着買うとのことですが…」

「マトイめ…あんまりはしやぐなよ？」

「…すいません、6着ご購入するとの事ですが？」

「値段は？」

「六万メセタです」

「…まあ、良いだろう。購入しよう」

「ご購入ありがとうございます」

なんだか載せられている気がしてならない。

服をある程度買ってショップエリアにある武器修理施設、ペアリーリーの隣にあるアークス製武器販売店に来た。

中は人が沢山いてマトイがキョロキョロ周りを見渡しまくっていた。ヘッドセットでミミを上手い具合に隠しているとは言え中々視線が刺さる。

列に並び彼此5分後、俺らの番になりアークスカードを見せる。

「…はい、認証取れました。アークスのユウナ、さんですね？今回のご

用件は？」

「俺の連れに武器の練習をさせて欲しい」

「失礼ですがアークスに所属している方ですか？それとも一般の方ですか？」

「いや…唯の一般人さ。出来るか？」

「一応フォトン濃度の検出をします。此方に手をかざしてください」

「そう言い手を置く何かそれっぽい物を出した店員。」

「えっと、ユウナ？これに手を置けば良いの？」

「ああ、そうだ。大丈夫だ、何も起きないから」

「そう諭しながらマトイの手を借りそれっぽい何かに乗せる。」

「……はい、測定できました。フォースとテクターに向いているようですね。この二つを練習しますか？」

「…どうする？いつそ全部やって見るか？」

「うーん、ハンターとファイターは良いかなあ…」

「まあ、インファイターって感じは無いもんな…」

「…すいません、ソレですと貸し出す武器にも限りがあるため五つ以内にしてもらえませんか？」

「…ソレならウオンドとロッド、タリスと…ライフル！」

「なんで法撃職からいきなりライフル…？」

「ユウナが使ってるし、使いやすそうかなあって」

「いや、まあ、別に良いけど…後一つはどうする？」

「うーん…ユウナは使いたいものある？この際だから使ってみようよ！」

「そう言いテンションを上げるマトイ。」

「なら、ロケランで良いですか？」

「ロケラン？」

「つあ、ランチャーです、ランチャー」

「ああ、レンジャーのランチャーですか。分かりました。至急手配しますね」

「そう言い目の前に鍵とカードを2組ずつ渡して来た。」

「このカードと鍵がキーになっています。お部屋は145号室となり

ますので、彼方のエレベーターから四階に上がってください」

言われるがままにエレベーターを目指す。隣にはアークス言語でEXITと多分書かれていた。

番号通りの145号室に入ると右側にはラックが置いてありライフルのマガジンとランチャーが各二種類づつ立て掛けてある。反対の左側にはロッド、ウオンド、タリスが同じく2組立て掛けてある。

「さてマトイ…何から始める?」

「うーん、無難にライフルからかなあ…」

人差し指を口に当てながら考えているマトイ。現実で…これが現実かどうかは二の次として…初めて見たわ。

ライフルを取りマガジンが入ってないのを確認してコッキングレバーを引く。

エジエクシヨンポートがパカッと開き薬室内に何も入っていないのが分かる。

安全装置の位置を確認してマトイに渡す。

「これがライフルかあ…重いねえ」

「それにマガジン…って思ったけどナノトランサーから作った数だけ出せるわ」

「重いねえ…ねえ?撃ってみてもいい?」

そう言いマトイがトリガー手を掛けた。

「マトイ、ストップ」

「えっ?」

「…まずはトリガー…その右手人差し指を離そう」

「う、うん」

そう言いトリガーから指を離すマトイ。

「よし、それで良い。良いか?マトイ。銃って言うのは相手に向けてさつきかけたトリガーを引くだけで人を殺せるんだ。本当に撃つ以外かけちゃダメだよ?」

まあ、俺も正直撃ちたくないけどね。見てるだけで本当は十分だったんだけどなあ…。

「ご、ごめんね?…こうであってる?」

「大丈夫。マガジンは抜いてあるしトリガーを引いても安全装置がかかってるから大丈夫だよ」

もつともそれでも向けられたら怖いが。

「持ったら向こうにあるーありやなんだ？カカシか？」

ライルフを持たせ、撃つ方に向くと何だかよく分からないカカシみたいな物があつた。

「唯のカカシーいや、よく見るとあれ、金属の板か」

茶色に塗られたそれはよく見ると金属で出来たターゲットだった。

「未来から送られてーいや、俺は送られたのか」

「何言ってるの？ユウナ」

「いや、こつちの話だ。ホラ。マガジンだ。空いているところに差し込め」

手渡しでマガジンを渡す。

「空いているところ…？此処？」

マトイが刺したのはストック部分。

「マトイ、ブルパップでも無いしそもそも刺す穴がない」

「それじゃ…(こ)？」

そう言い本来の所にマガジンを指したマトイ。

「…マトイ、わかってたろ？」

「ふふっ、何のことでしょ？」

「まあ、いや、コッキングレバーは引いてあるから、マガジンはー入ってるからチャージングボタンを押して見てくれ。…そう其処だ、其処のボタン」

高い金属音がして薬室内に初弾が入る。

「これで射撃準備がー安全装置忘れてた。シングルに変えてつと…よし、整ったな？マトイ、トリガーに指を掛けて撃ってみな？」

「うん！」

43 話目

マトイは射撃場に置いてある椅子に座り台に銃を押し付けて反動を少なくしようとしている。

俺とマトイは耳にヘッドホンをして耳をやられない様にする。無論もう片方のミミも専用の奴が有り、それも用意されていた。

俺がテーブル上にあるこの船団の科学力からしたら余程骨董品じみたボタンを押す。

すると射撃場にターゲットーダーカーを模した的が出てきた。確かあのダーガーはダガン、だったか。俺らの腰辺りまであるからめっちゃ怖いんだよなあ…戦いたく無いわ。

…俗に言う大型犬が突っ込んで来るのか…前の世界風に言うところ。

そんな事を思っ居ると、タン、タン、タン、と連続して甲高い発砲音が鳴り響く。

その後も発砲音が17回ほど鳴り響いた。

「…ああ…ヒット、ヒット…外れ」

マトイと俺が居るテーブルの上にダーカーの横と前、上から見た3DCGのホログラフィックが映し出されマトイが当たった場所、致命的になった場所等を写す。

「ちえ、やっぱりライフルって難しいね?」

「まあ、誰にもある程度扱えるって言うのがライフルだしな?俺だってまだまだだし」

マトイは手に持っていたライフルを台に置き、次の武器を探すため席を離れた。

ホログラフィックを見ると撃った20発の内、半分以上は当たっていた。そのうち数発はコーアー…俗に言う弱点に当たって居る。

「と言うかマトイ。初めて触ったのに良く当てられたな」

「うん?当たれって思えば当たるよ?」

「…さいですか」

思って当たったら世界のスナイパーは発狂もんだな。

マトイが置いたライフルを手に持ち安全装置をセーフティに合わせーの前にマガジンキャッチを押しマガジンを出した後、チャーピングハンドルを引いてチャンバー内から最後の1発を弾き出す。

チャーピングハンドルを引ききつて1番後ろで固定されたのを確認したら元にあつた場所に戻す。

「ねえねえーユウナー！これなんてどう?!」

マトイに呼ばれそちらに向くとロッドを片手に持って向ける方ではない所を地面に押し付けていた。

「これ！かつこよくない?」

「そう言いロッドを振り回すマトイ。」

「マトイ…それはパルチザンじゃないぞ?」

「パルチザン?何それ?」

「…薙刀、かな?」

天井に向けられた尖った部分。其処がアニメの如く光った…様な気がした。

「ねえユウナ。パルチザンってどう使うの?」

「いやあ…俺レンジャーだし、ライフルしか使った事しか無いし…」

「そっかあ…」

「そう言いぐるぐる回していたパルチザンを元に戻す。」

俺も隣に向かいロケットランチャーを両手で持つ。

「ライフル以上にズシンとくる重さ。何キロあるんだこれ?」

「ユウナちゃん?そんな重いのもてるの?」

「…無理…かなあ…」

「持つて撃つだけならなんとかなるかもしれないが走って撃つてまた走ってを繰り返すのは…キツイなあ…」

ランチャーを持ったまま歩き射撃場に立つ。

「安全装置は…グリップセーフティ?ガトリングみたいな奴か?」

「良く見ると右手で握る部分と左手で保持する部分に二つ安全装置が組み込んである。」

「弾種は…APとHE、徹甲弾と榴弾のみ?」

いや、違うな。良く見ると前にPと付いていた。

P：P弾：P r a c t i c e b u l l e t s、練習弾：？まさか？それは無いだろ：多分。と言うと他にあるのは我らがアークスが使うフォトン：そう言や此れも頭文字Pだったな。

と言うことはP h o t o n i c、A r m o r、P i e r c i n g、フォトン徹甲弾つて事か。それじゃ榴弾は爆薬の代わりにフォトン撒き散らすのか？

と言うかフォトンコーティングしただけでダーカー貫通するなんてなあ：。

「まるでウラン弾みたいだなあ：」

記憶が朧げながら確か劣化ウラン弾を撃つと放射線がこう、ばああって広がった様なならなかった様な：そんなだつたはず。それとトレードオフの代わりに鬼の様な貫通力：だつたつけ？

「えっ？：うらん？：なにそれ？」

「：：：そーういや此処にもウランは有るのか？：：：なんでも無いさ。独り言だ」

こんな閉所空間で原子力：事故つたら終わりだな。

マトイになんでも無いさ、と言い手元に集中する。そう？と言いマトイは武器物色に戻った。

左手でランチャー本体から伸びて居るグリップを握り1つ目のグリップセーフティを押す。そのまま右手でグリップを持ち此方のセーフティも解除。解除と共に左手のグリップにあるレーザーサイトから赤いレーザーが照射される。

「これを使って合わせろつてか？」

取り敢えずトリガーを引く。

ズドンツ、とランチャーの砲身ーバレルか？から発射された弾は真つ直ぐターゲットに向かい着弾ーそのまま貫通した。

「あれ？爆発しないつてことはAPか：：：と言うかこれ貫通して良くターゲットは無事だな」

ホログラフィックを方に顔を上げるとk i l l e e 撃破と表示されていた。

「それじゃあ次榴弾。どんだけ山なりになるんだかな」

少し上目に構えズドンツと撃つ。

弾はダガンを目指ーさず大きく奥の方に着弾した。

「…やっぱ榴弾ってゴミだわ。150ミリクラスじゃ無いとダメだな」

「ユウナ？何の話をして居るの？」

「ん？何でも無いよ。次、次行こう」

やはり俺にはライフルが1番だな。

ランチャー後方のリボルバーじみたシリンダーから弾を抜き出す。と言うかライフルみたいなボックスマガジンって言うのか？ーいや、それ軽機関銃のマガジンか…まあ、それ見たいな奴かと思っただが…シリンダーだとは…。

「これアイツに持たせて乗りたいな…」

思い出すは砂漠で奪取した人型兵器。これをそのままー材質と見直して拡大するだけで持てそうだな。

ドカンツ！

そんな事を思っ居ると後ろから大きな炸裂音が聞こえた。

耳を塞ぎその場に伏せてーようとしてそのまま前にコケた。

「いつつ…な、なんだ☒ダーガーの進撃か☒」

周りを見渡すもそれらしきものはない。有るのは壊された射撃場とマトイーマトイ☒

「おい！マトイ大丈夫か☒」

「う、うん」

「な、何があつたか分かるか☒」

「えつとね…」

マトイが目線を外そうとして来る。何があつた？

「フォイエ撃つたらこんなになっちゃった」

そう言い手に持ったウオンドで壊滅した射撃場を指すマトイ。

「ふお、フォイエ、で…？」

生憎俺はアフィンとしか組んだ事ないが、明らかにこれがフォイエの威力ではない事を何となく分かった。

その後この店員数名が駆け付け状況の説明。店員も驚いていた。

曰く

『此処はテクニク系は制限が掛かっていてイル・フォイエーマトイさんが出したフォイエの上級テクニクでも中位に落ちる…筈なんですけどね…』

それを聞くとんじやマトイがイル・フォイエ撃つたらどうなるの？って言う疑問が思い浮かんだ。多分だがマトイを中心に半径25メートルの敵がフォイエで焼かれるに違いない。ーーと言うか気化爆弾かこれ？

隣でオロオロするマトイのスペックに若干怖がりながらもマトイの記憶を思い出させることに失敗したなあと思った。

…てかマトイこんなスペックなら元アークスの可能性が…ある…？

44 話目

マトイが壊滅させた射撃場を後にしてこの後は武器屋に寄ることに。えっ？射撃場の修理費？あれアークス管轄だから壊れる前提らしくて射撃場ーもとい、射撃個室場をユニット交換できるようになって居るらしい。そのまま壊滅した所を重機引っこ抜いて入れてはい、お終い。だそうだ。マトイにアークスに入らないか？と聞こうとしたがこんな戦闘職、割りに合わんな。

そんなこんなでショップエリアにあるベンチに二人して座る。

「ふう…今日は楽しかったよ。ありがとう」

「なに、良いってことよ。まさか射撃場が壊滅するとは思わなかったけど…」

「だって…少しー本当に少しだけ力込めたらあんな事になるなんて…アークスって凄いなだねっ！」

「いや、それはマトイがー」

マトイのスペックがおかしいだけ、と言おうとしたが足を振りながら此方を向きニコニコしている顔を見ると言えなくなる。

「ーまあ、そんな事もあるさ…無いだろうがなあ…」

「んっ？何が無いの？」

「こつちの話ーってこれ何回使ってるんだか」

そんな事を思っているとマグがメニュー画面を投影し、メールの欄を開いた。多分何が来たのか？

メールをチェックするとー。

「アークス統合技術開発部本部？なんだそりや？」

「んっ？どうなの？」

「アークスー長いな、開発部からメールが来た…特に何も無いはずだけど…」

メールを開き中の内容を見る。

『此方の方が先日惑星リリーパにて人型兵器を奪取された方でしょうか？それならば至急出頭を願います。』

簡単に言えばもう一度人型兵器を起動してもらいたいのです』

との事だった。

「なんて書いてあったの？」

「…」

はて…話して良いものか…一応奪取した兵器だし…。

「?どうしたの？」

「…まあ、なんだ。任務で回収した兵器に不具合があったから来て見てくれ、だってさ」

「…ユウナが作ったわけでも無いのに？」

「えっ」

「ねえ?ユウナ。それってどこ製？」

「えっ、さあ?」

「おかしいね?ユウナなら自分の使ってるライフルとかどこ製でどんなパーツを使うとかすぐ分かるのに」

「……」

此処は話すべきか?あの機体の事を。

「…」

少し…本当に少しだが…考えた結果。

「…いや、任務で人型兵器回収してな?少しヤバイ状況だったからそれ使って逃げたんだよ」

「えっ☒身体は大丈夫なの?家帰ったら身体見せてね?」

「えっ…まあ…んで、曰く『起動しないから来て起動してくれ』だってさ」

「人型兵器?なにそれ？」

「いや…読んで字の如く人の形をした兵器だよ。ロボットだな」

「フルキャストを大きくした感じ?」

「キャスト…まあ、そうだな。それで合ってる」

キャストと来たか…確かにロボットだけどなあ…。

アフィンが人型兵器みてロボットだって言っていたぐらいだからそう言うアニメはある…よな?…後で調べるか。

「それで!そのアークス総技課に行くんだよね?今から」

「総技課って…まあ、そうなるわな」

「ねえ？私も一緒に良い？」

「…まあ、だいじょうぶでしょ？多分」

「やったー！」

そう言い抱き着いてくるマトイ。男の時ならとても嬉しいー白髪赤目の少女が抱き着いて来たら警察案件だがーけど残念ながら今は女だ…女の子、なんだ。

そう思いながら総技課って場所何処だ、と思うのと、今俺マトイと胸合わせしてね？等と邪な考えが浮かんだ。

マグで何時もの様に場所を調べ通路を表示ーその通りに向かうことに。

「所でユウナちゃんはどんな人型兵器を拾ったの？」

「拾ったって…まあ、そうだけど…」

「総技課に着けば見れるけどまだ遠いんでしょ？」

「…まあ、な」

マグの写したホログラムをマトイと一緒に覗き込む。距離はまだまだある。

すると急にヘッドセットが鳴り出した。電話主はーアフィン？

「ごめんマトイ。アフィンから電話だ」

「アフィンってあの金髪ニューマン？」

「ああそうだ。…もしもし？」

『もしもして…何時もそうだな電話に出る時』

「仕方ないだろ。コレは癖だ」

『その癖は一体何処からーって今はそんな事を言っている場合じゃないか。相棒、メールは見たか？』

「アークス統合技術開発部本部、だったか？」

『そうだ。脱出に使った兵器を動かせ、だど。泣けるぜ。まだ怪我は完治した訳では無いのに』

「サーレクスから降りた時には半ば完治してた癖に何を言うか」
『保険が入ればその分家族に回せるからな』

「…よおし、ちよつと管制官にアフィンの事チクつてくる」

『お、おい！よせやめろ！』

「…ジョークに決まってるんだろ？俺が言うと思ってるのか？唯一の相棒に」

『……少しだけ』

「ほおおん、そうかそうか、分かった分かった。マトイ。少しゲートに行こうぜ」

『マトイ？マトイさんも居るのか？』

「は、はい…」

『調子はどうだ？記憶は戻りそうか？』

「えつと、その…」

「落ち着けアフィン。マトイが怖がつてる」

『そ、そうか…』

「えつと…アフィン、さんなら大丈夫、の筈」

「…だとよ。良かったな」

そう聞きながらマトイを見る。俺相手だと普通に立ち回るのに、何故他人になるとこうもヘマするのか…分かん。ワンチャン男性恐怖症…？いやでも、本人が大丈夫って言ってるし…ふむ…。

「ううむ…分かん…」

『相棒？おーい、相棒、聴こえるか？』

「っあ、すまん、んで何だっけ？」

『俺が今から車で迎えに行くから場所を教えろって』

「車…？お前免許持ってんのかよ☒」

『めんきよ？んなの無いぞ。こんなの簡単に動かせるしな』

「いや、無免許運転はちよつと…」

『とりあえず場所教えろ！今から向かうから！』

そう言うので今居る場所を伝え、側にあるベンチに座る。

「無免許、かあ…」

警察…に準ずる組織が有るのかは置いといて乗りたくないなあ…。

「ユウナちゃん、無免許って何？」

「無免許って言うのはね……なんて言えば良いんだろうねえ……」
マトイに聞かれたもののあまり良い例えが思い浮かばない。

「さあ、なんて言えば良いんだろうねえ……」

ベンチに腰掛けながら造られた空を見上げる。今の時間は午後1時前、とアナウンスが入った。

知らず知らずの内に尻尾が左右にゆっくりと動く。無意識に。そして何故だか分からないがマトイの手が俺の頭に乘せられ、ゆっくりと撫でられた。

お陰でぼーつとなりアフィンが近くに来て気付かないくらいにぼーつとしていた。

アフィンが俺とマトイのツーショットを近くで写真を撮っていたのを少し後に知った。しかも結構な枚数を撮っていたらしい。

45話目

「ここに居たか☒ーって寝てるし…」

ベンチに座る二人を発見。なんだよ、結構中心部にいたじゃないか。俺の汗はどこに…。

事の発端はこうだ。

アークス統合技術開発部本部からメールが来て内容を見ればあの機体を動かすから起動させてほしい、という内容だった。

アレ、起動できたの俺じゃなくて相棒ーユウナなんだが…。

怪我も治らぬーいや、ほぼ完治してるけど。

車を飛ばしユウナに電話を掛ける。

『もしもし?』

「もしもして…何時もそうだな電話に出る時」

『仕方ないだろ。コレは癖だ』

「その癖は一体何処からーって今はそんな事を言っている場合じゃないか。相棒、メールは見たか?」

『アークス統合技術開発部本部、だったか?』

「そうだ。脱出に使った兵器を動かせ、だど。泣けるぜ。まだ怪我は完治した訳ではないのに』

『サーレクスから降りた時には半ば完治してた癖に何を言うか』

「保険が入ればその分家族に回せるからな」

『…よし、ちよつと管制官にアフィンの事チクってくる』

「お、おい!よせやめろ!」

『…ジョークに決まってるだろ?俺が言うと思ってるのか?唯一の相棒に』

「…少しだけ」

『ほおおん、そうかそうか、分かった分かった。マトイ。少しゲートに行こうぜ』

「マトイ?マトイさんも居るのか?」

そう言うのとマグの立体映像にマトイさんが映し出される。因み

にだが相棒の所はSound Only…何故か出ない。相棒の方で切っているのだろうか？

『は、はい…』

「調子はどうだ？記憶は戻りそうか？」

『えつと、その…』

『落ち着けアフィン。マトイが怖がってる』

「そ、そうか…」

『えつと…アフィン、さんなら大丈夫、の筈』

『…だとよ。良かったな』

『……』

『ううむ…分からん…』

「相棒？おーい、相棒、聴こえるか？」

『っあ、すまん、んで何だっけ？』

「俺が今から車で迎えに行くから場所を教えろって」

『車…？お前免許持ってるのかよ☒』

「めんきよ？んなの無いぞ。こんなの簡単に動かせるしな」

『いや、無免許運転はちよつと…』

「とりあえず場所教えろ！今から向かうから！」

『シヨップエリアのーまあ、シヨップエリアにいるわ』

「わかった。動くなよ？すぐ行くから！」

そう言い通信を切る。相棒の事だ。絶対に動くに違いない。

アークス研修服男性用をハンガーから取り出し急いで着る。

相棒の事だ。多分何時もの戦闘服で出掛けているに違いない。：

まあ、アークスとしては合ってはいるが。

寮を仕切っている管理者に事情を説明、ユウナの部屋を開けてもらいアークス研修服女性用を二着取る。

本来なら女性の部屋に入るのは気が滅入るがー仕方ない。緊急事態ー言うほど緊急事態か？

二着手に取り全てセットなのを確認したらそれを車の中に放り投げ、管理者に礼を言いシヨップエリアに向かう。

管理者に俺が入ったって言わないで欲しいって言いそびれたわ…。

ショップエリアの入り口に車を止めてショップエリアに上がる。
30分ほど探し回りベンチに二人で座り寝ているのを見つけた。
マグで撮影しとこ。

マグに目の前の二人を撮る様に指示し何枚か撮影する。無論本人達の了承は要らない。

「よし、こんなもんでいいだろう」

数枚ほど撮影後2人に声をかける。

「おい、相棒。迎えに来たぞ？起きろって」

「んあ…アフィンかあ…？」

「そうだーマトイさんも行くのか？」

「ふっ…っあ…ああ、見たいつて言うんでな。まあ

大事だろう」

「まあ、そんな機密でもないし…行けるか。取り敢えず相棒とマトイさん。これを来てくれ」

そう言い2人にアークス研修服を渡す。

「…おいおい、これって俺の部屋にあった奴じゃないか。…ちよつと待て、お前まさか…」

「良いから。さっさと着ろ。俺も着たんだからな」

そう言うのと相棒が目を細め俺の体を眺めた。…頼むから股間は見るなよ…」

「確かに何時もの戦闘服じゃないな…だがどこで？着替える場所なんか無いぞ？」

「其れこそマグを使えよ。ほら、マグのファッションって所に服の奴が有るだろ？それでアークス研修服を着てくれ」

「どれどれ…おっ、あったあった」

マグを使いさくつと服を着替えた相棒。

「ここでふとマトイさんが着替えてないことに気付く。

「あれ？マトイさん。着替えないのですか？」

「…なあ、マグって俺以外の人の服も着せられるか？」

「まあ、本人がいいって言えば…なんでだ？」

「マトイってまだ正式な船員になってないーと思うんだ。それだま

だマグが支給されてないんだよ」

「ああ…それじゃあ…相棒、マトイさんに着せてやってくれ」

「俺が☒い、良いのか？マトイ」

「う、うん。ユウナなら…裸を見られー」

☒

「☒ま、マトイ。何を言ってる☒」

「いや、だってユウナが任務に行っている時ばそこん？弄ってたらしいんな風な事を書かれた所があったから…」

「おいしいい!?!?相棒なに見せてんの☒」

「ちげええよ!任務中に見たって言ってるんだろ☒俺関係ないし☒」

「えっと、あのー」

「大体、此処に来るのも大変だったんだぞ☒途中で渋滞にハマるわ、シヨップエリアで爆発とも言ってたわで心配したんだぞ☒」

「あつ、その爆発事故原因俺らだわ」

「お前らかよ☒」

等2人で言い争っているとマトイが相棒の手を握り。

「ごめんね…2人とも」

目元に少し涙を浮かべながら謝った。

「…」

「……相棒」

「ああ、分かった」

そう言い俺がマトイの着替える所を探そうとした時、相棒が言う。

「なあ、アフィンの車の中で着替えれば良いんじゃないやね?」

「いや、無理だから。小さ過ぎで」

取り敢えずマグを一時的に貸して服を着替えました。

「にしてもアフィンが運転できるとはな」

全員研修服に着替えアークス統合技術開発部本部を目指す。

「そりゃ、簡単に取れるからな。正直いざとなればオートクルーズあるし」

「オートクルーズ…?ああ、自動運転か。なるほどね」

相棒の隣でマトイさんがじっとしている。相棒の手を握りつつ。

「なあ、アークス総合ター総技課って何処にあるんだ？」

「この船ターフェオの中心部から外れた所にあるぞ。大体二、三時間程度かな？」

「…なあアフィン。遠くね？」

「まあ、その性質上、周りになにも無い方が色々良いんだろ？新型兵器とかの実験とかもするからな」

「まあ、確かにそうか…」

ミラーを見るとマトイさんは相棒に寄っ掛かりながら寝ていた。

「さて、マトイさんも寝た所だし…相棒も寝たらどうだ？さつきまで寝てたんだろ？」

「…ん？お前寝てた時に来てたのか？」

「ああ、そりや寝顔も2人揃って可愛いター待て、相棒。ライフルは船団内じゃター運転が☒」

「つち、今回は許そう…だが後で念の為見せろ」

「検閲かよ」

当たり前だろ？とーさつだぞとーさつ。と言いながらも車は前に進む。目指すはアークスター総技課だ。

46 話目

「貴方達があの人型兵器を奪取された方ですね。こちらへ。射撃実験場にてリフトアップ済みです」

アークス総合技術開発部一略して総技部に着いてそれなりに大きい入り口に入る。

中には受付する人一いや、人じゃないな。

手首を見ると肌の色が黒や黄色、白色ではなく白いパーツの様な色になっていた。タイプする指が更に割れて片手で10本以上ある気がする。

受付する人一手はキャストだが多分本体は人の筈一は少し高めの声で冒頭に書いた言葉を言った。

「俺たちの事はもう言ってるのか」

「はい。此方に入る第一ゲートにカメラが付いており、そこから車両のナンバー、所持者、同乗者を把握できる様になっております」
「…」

何かを察したのかマトイが俺とアフィンの背後にスツ…と隠れる。

それを横目で見るとアフィンに声を掛けられた。

「んっ?どうした相棒?」

「いや、なんでも無いさ。それで?俺たちはどちらに向かえば?」

「はい。射撃場の案内は此方のアンドロイドに着いて行って下さい」

受け付けがそう言うのと傍から人型の一俺らより少し大きいアンドロイド一ロボットが出てきた。

『此方へ。射撃場マデゴ案内シマス』

メカニカルな音声で言うアンドロイドは射撃場に向かって歩き出した。

「おお…此れが噂に聞くアンドロイドかあ…」

「知ってるのか?」

「ああ、何でもこのアンドロイドを使ってサポートパートナーの仕事をもっと簡単にする為に作られたらしいぜ?」

「簡単って…サポパの仕事って何かあったか？」

「まずアークス船団内の警備と各惑星での拠点警備。それと俺たちが貰って来たクライアントオーダーの代わりだな」

「…クライアントオーダー？何だそれ？」

「えっ？知らなかったのか？…そうだな…俺達はレンジャーだろ？ゲートエリアに女フルキヤストのリサって言う…少し危ない人が居るんだ。その人に話し掛けるとオーダーを貰えるんだよ」

「…危ないって…」

「いやな？テンションが高いとか堂々と人を撃ちたいとか…こう、なんかバイんだよ」

「…オーダー内容は？」

「比較的簡単。例えば1人でダーガー三体倒して来いとかそんなも
ん」

「…帰ったら受けるか」

「気を付けろ？アレは危ないから…」

俺が男だからって事もあるかも知れんが、と最後に添えて言う。

にしても危ないキヤスト…んっ？

「フルキヤスト？」

「リサさんの事か？そうだよ。フルキヤストだ」

「フルキヤスト…全身機械か…アホみたいな狙撃して来そうだな
…」

「…いやな？ココだけの話な？」

周りには目の前のアンドロイドしか居ないのにアフィンは周りを
見て俺の耳に小声で言う。

「リサさん…射撃の腕はすげえんだよ。1キロ離れようが3キロ離
れようが…ココが1番大事なんだが、アサルトライフルで狙撃して
来るんだよ」

「は？専用の狙撃用にカスタムされたアサルトライフルじゃなく？」

それはそれで凄いが。

「ああ、店売りのアークス製のライフルで狙撃して来るんだよ」

「人間F・C・Sかよ…って人じゃなかったな」

「本人の前でそう言うのは言うなよ。何が起こるか分からないからな」

「…まあ、人格的には兎も角、その技量はすげえな」

「ああ…キャストつて言うことを除いても凄い。そして笑えるのがー」

「なんだ？まだあるのか？」

「んっん…『リサはですねえ…的が人ならもつと、もおおつと遠くでも狙えますよおお』…だつてさ」

「リサつてキャスト仕事間違えてるだろ？と言うかアークスはそんなに人手不足かよ」

「そりや十年ちよつと前の戦いでアークス壊滅ーこの場合は全アークスの割合な？ーが4割から5割戦死したからな」

「…なあ、アークスつて防衛ガバガバじゃね？」

「仕方ないだろ。相手はワープしてこっちの本拠地に直接ダーカー送り込めるんだぜ？」

「…そう聞くとダーガーとダークファルスの殲滅とか無理ゲーじゃね？」

「…こんなの糞ゲーやんけ。返却聞かか？」

「…ほら、そのかわり物資は豊富だから…」

「そう言い明らかに視線を前のアンドロイドに向けるアフィン。」

「その補給線が断れたらどうすんすかね」

「…偉い人に聞いてくれ」

「ツテ無いです」

「…」

すると今まで黙っていたマトイが口を開く。

「ねえユウナ？思ったんだけどさ」

「んっ？」

「今のダーカーの殲滅が無理なら過去で何か変えればいいんじゃないのかな？」

「過去に？どうやって過去に行くんだい？」

「えつと…分かんない」

「俺は過去に行けるのならクジの番号覚えるわ」

「そういやってメセタを搔つ攫うのはNG。俺とマトイさんにも渡せ」

「マトイには渡すが…アフィンには考えとくわ」

「この野郎…そう言う子にはな…こうだ！」

「そう言いアフィンは尻尾の根元を思いつきり掴む。

「ひっ！」

身体中がぞわぞわつとなりミミが真っ直ぐ立つ。

「…あれ？」

「アフィンさん、不味いよ！ビ、ビーストは其処は…」

「…あつ」

ペタリとその場で女の子座りする俺。何故だか知らないが足と腕に力が入らない。

「…あ、相棒…いや、ユウナさん？大丈夫…ですか？」

明らかにアフィンの声が可笑しい。変な所でイントネーションが上がってる。

「ユウナちゃん？大丈夫？」

それに反してマトイは肩に手を当てて立てる様に補助する。

「ありがとう、マトイ。アフィン、すまんが肩を貸してくれ。立てない」

「あ、ああ…」

「そう言い近づき肩に手を当てる。

「そのユウナ…ごめん」

「俺じゃなかったらセクハラ物だぞこれ…」

「本当だよアフィン。ユウナちゃんだから良かったもの…」

「ごめんよ2人とも…あれ？マトイさん、俺の名前…」

「あつ、まださん付の方が良かったかな？」

「いや、呼び捨てでいいよ」

「うん。分かったアフィン」

「よいしょ、と言う2人の声に合わせて俺も入らない足に力を入れどうにか立つ。」

2人が呼び捨てで呼び合える中になって良かった良かった…いや、早すぎだろ。

『ドウカナサレマシタカ?』

これまたメカニカルな音声で聞いてくるアンドロイド。

「いや、なんでもない」

『ソウデシタカ。射撃場ハモウ少シデス』

そう言うアンドロイドの後を俺は2人に補助されながら付いて行った。

47 話目

「……アフィン」

「なんだ？」

「射撃場ー遠くね？」

アフィンが俺の尻尾ーイヤラシイ書き方だが敏感な所を思いつきり握ったお陰で2人に補助してもらって入るが…あまりの長さに問いかけてしまった。

『ハイ。先程ノ用に歩イテイレバ2分17秒後ニハ付イテイマシタ。シカシ先程中央ノピーストノ女性ニ何カトラブルガ有ツタ為役1分程遅レテオリマス』

俺の問い掛けに律儀に答えるアンドロイド。射撃場まで後1分ちよいか。この通路窓が無くて感覚なんか狂うわ。

「…今思ったのだけど…私達、受付の人以外に誰にも会ってないよね？」

『ハイ。当施設ニ入ル職員ハ全テ射撃場ノ方ニオリマス』

「まさか動くのを見るために？」

『ハイ。私サイズノ人型兵器ハマダ動力的ニモドウニデモナリマシガ、10メートル前後ニナリマスト人ノ三割カラ五割程強度ヲ上ゲナクテハナリマセン。ナノデ動く、ト言ウダケデモ貴重ナノデス』

「そうは言っても…動かす本人がこれじゃあ…」

そう言いアフィンが俺を見る。

「うるせえ、こうした犯人が」

「まあ、それはごめん」

「…ねえユウナ？こう言うのを傷モノにされたって言うのかな？」

まさかの発言に俺とアフィンはマトイの方を見る。予想した反応と違うのかマトイがオロオロし始めた。

「え！えっと！ほらPOSで調べてたらそんな事がー」

「マトイ？」

「ひゃ、ひゃい」

「インターじやねえ、ポス、2日禁止な？」

「ええ☒：そんなあ…」

「マトイはどんなサイトを見てたんだよ…」

「ほら？私って記憶ないからまず自分の種族から探そうって思ってた」

「種族も何もーヒューマンじゃ無いのか？」

「ううん、私も最初そう思って、そのサイトのヒューマンを調べただけど…フォトンを扱う能力が平均的って書いてあって違うなあ、って思っただの。今日の爆発事故で」

その話を聞いて俺にとつて訳を聞いてくる。

「相棒、そんなにマトイの奴すごかったのか？」

「ああ、テクニツクの炎系のフォイエ、あつたろ？」

「ああ、アレか」

「マトイが使うとー俺は本物見たこの無いが、イル・フォイエになる」

「…やべえ、すげえ」

「お前…語学力が…まあ、仕方ねえな。アレが俗に言う、今のはイル・フォイエでは無い、只のフォイエだ、って奴か」

「なんかゲームでそんなセリフ聞いたような気が…」

「ーつまりマトイはゲームの強キャラ☒」

「絶対強い奴じゃねえか☒」

「ーう、うん。それでね？ニューマンの事も調べたんだ」

俺とアフィンのネタ話をも華麗にスルーし、自分の話を続けるマトイ。

「へえ、なんて書いてあつた？そのサイト」

「確か…妊娠？率がとても低いのと年齢は10で割れって書いてあつた。後ニューマン男性の…何だっけ？まあ、なんとかって言う液体の濃度がー」

そこまで言うとおフィンの大声でマトイストオオオツプ！と叫びマトイの口を塞いだ。

「マトイ、それ以上はいけない。今この場ではダメだ」

「えっ？でもー」

「マトイ？今はーまあ、アフィンに従っておこ？なあ？」

「…まあ、そう言うなら…所で、ビーストの事も調べただけど…：聞
く？」

「…まあ、ニューマンの件で余り信用出来ない、って言うのが分かった
から、まあ、聞いておこう」

信用出来ない、と言う所でアフィンの目がソツポ向いた。特に意味
は無い。無いはずだ…頼むぞバディ。

「ビーストは妊娠期間？が長くて二、三年程掛かるって書いてあつた
よ？」

「げえ、そんなに☒」

二、三年も☒いや、作る予定ーそもそも男とやる予定すら無いが、
ビーストってそんなに掛かるのか。

「相棒、自分の事だぞ？習わなかったのか？」

「…ああ…その時間は貴重な睡眠時間で寝てたんだよチクショー…」

そもそも俺にそんな記憶は無いわ。

「赤ちゃんは普通に育つて10ヶ月前後の成長で二、三年お腹の中で
ゆつくり育つて書いてあつた筈だよ？それと」

「まだ有るのか」

「ビーストには発情期？があるみたい」

「はっ☒」

ピーン、と明らかにミミと尻尾が立ったのが手に取るようにわかっ
た。発情期だつて☒

「ねえ、ユウナ？発情期って何？」

俺に動物みたいな発情期があるって事に驚いて入るのにそこにそ
の質問ぶつ込んでキラークラスしてくるのかマトイイイ☒

「ううん…簡単に言えば男を好きになっちゃう事かな？」

「おま、お前、真面目に回答すんなあ！」

「んっ？と言うことは発情期に相棒の所に行けばー」

「もうやだコイツ…」

お前まだ精神男ーだよな？ーだから良いものを、これ、女から
見たらヤベエぞ。色々。

「…まあ、マトイ、そのサイトは役に立たない。良いね？」

「う、うん。分かった」

『皆様、お話し中失礼シマスガ、射撃場ニ到達シマシマ』

見るとアンドロイドが目の前の3メートルほどの扉を向かって左手で示しながら言う。

『ドウヤラ殆ドノ職員ハ奪取シタ人型兵器ノ整備ニ手間取ツテ居ルヨウデス』

「…そうするとそんなに急ぐ必要無かったパターン？」

アフィンの問い掛けにアンドロイドが答える。

『イエ、技術者達モ奪取シタ人型兵器ガ此方ニ来タ時カラ掛リ切りテ修復ヲシテイマス。他ノ職員モ動ク所ヲ見タイノデシヨウ』

「まあ、行こうや」

『ソレデハドウゾ』

アンドロイドが扉を片手で開け外に出る。人工太陽の光が眩しいが、それに慣れるとー。

「コイツの3Dスキャン！まだか？！」

「コックピットまで届くりフト！それだ！持ってこい！」

「イエッサー！」

「んっ？あの肩を見ろーありや弾痕か？」

「このサイズであのレベルの軽傷…装甲はなんだ？均質圧延装甲じゃ無いのか？」

「いや、曲がりなりにもこんな機体を作った惑星だ。

そんな物で済ませるとは思えん…もしかしたら本当に只の金属ーでは無い、な」

「かと言って現状この貴重な一機を防弾テストに使うなんて以ての外だ」

「…大型スキャナーが到着するのを待つしか無いな」

「見えるパーツだけでも良い！リバースエンジンアリングしろ！」

「見えるだけじゃ分からんだろ☒ハンドスキャナー持ってこい！」

「見ろ、劣化が酷い…数年ってレベルじゃないな」

「詳しくは装甲剥ぎ取って分析掛けなきゃ分からんが…多分100年

以上は放置された物だな」

「100年…」

「コイツを見ると頭部、胴体、腕部、脚部に簡単に分けられるみたいですね。何と戦う目的で…」

「指は基本的な我々ヒューマンと同じ五本指。携帯火器もレンジャーが持つランチャーに非常に酷似」

「しかしパイロット曰くレンジャーのアサルトライフルの他に高連射力の火器もーーもしや背後のアレか？」

「二班に頼んで弾丸を1発拝借して来たが…ランチャーの比では無いな」

「ああ、長さが明らかに違うな。貫通力重視か」

「まあ、此方のランチャーはどちらかと言えば榴弾に近いですからね」

「…なあ、コレまさか中央の奴外れるんじゃないやね？」

「まさか？ 欠陥品ですか？」

「これどちらかと言えばフルキャストに似てませんか？」

「フルキャストをそのまま大きくした奴か」

片膝立ちをした複眼機の周りを数百人が囲いワイワイガヤガヤ色々やっていた。

「ねえ、ユウナ？アレがユウナの乗ったー」

「そう、名前は分かんないけど」

「良く良く思えばあの状況で俺達良く帰れたよなあ」

うんうんと頷く。周りは四脚群だらけ、アフィン是被弾、アホのように売ってくる弾丸を遮蔽物で凌ぎ、弾をばら撒いて、どうにか倒して、その遮蔽物を見たらコイツだったって言うーあれ？

「これ…映画行けね？」

「多分相棒は男になるな」

「…それはそれで熱いな」

「あれ、動くの？」

「まあ、アレに乗って脱出したからなあ…マグには乗ってないけど」

マグにはアークスが何を倒したとかどう行動したとかを記憶するのだが…毎回重要な時に限って動かない。少しポンコツ過ぎません

…？

「あつ!? 貴方達がコレのパイロットですね」

技術者のうちの1人が此方に気付き、他の職員もわらわらやって来る。

「早速ですまないが至急アレに搭乗してもらいたい。せめて腕だけでも動かしてほしい」

「…分かりました。取り敢えず頭部まで案内して下さい」

あの時はアレコレ適当に動かしてたけど…今動かせるか？

「分かりました。おいお前ら！リフトの用意はまだか」

「は、はい！テメエら！主任のお言葉だ！手エ空いてるやつはリフトを探せえ！」

「サー、イエッサー！」

周りに居た数十人の技術者が2人の言葉で散る。

散るのを確認すると副班長らしき人が走って機体の元に向かった。

「つたく…済まないな、三人がた、リフトが来るまでー」

そこまで言う就先程機体に向かった副班長みたいな人が走って此方にやって来て班長の耳元で呟く

「班長、どうやら射撃兵装の準備に手間が掛かるようです」

「射撃兵装の担当は？」

「確か…二班だったかと」

「…二班に伝えろ、今回は客人が居るから不問にしてやる、ってな」
「了解しました」

そう言う副班長は走って何処かに向かった。

「ああ、待った」

「はい? どうしました?」

「客人に椅子か何か持って来てくれ。この熱い中じや大変だろう」

ビシツと短く敬礼すると走って何処かに向かった。

「済まないね、どうやら少し時間が掛かるかもしれない。椅子か何か用意しよう」

そう言い目の前の人が出た。

班長さん、すいません…先程の言葉全て聞こえています。

「こええ…。なんか壊したら怒られそうな気がしてならないわ。

「なあ、相棒。取り敢えず近くに行こうぜ」

「うん、そうしようよユウナ」

「そうですな。まずは近づきましよう」

アフィンとマトイは…この人のなんかオーラって言うのか？それが分からんのか☒

遠くで見えて居たかったユウナだが、アフィンとマトイに補助されて居る以上、2人に逆らえるはずはなく、渋々班長と一緒に機体の近くに向かった。

48 話目

「…所で話は変わりますが、アレの名前とかなんかその他諸々って分かりましたか？」

アレから数十秒後、他の人が早急に俺達三人が座れる長椅子と班長らしき人物が座るイス、それと影を作るためのパラソルを持って来てそれらを近くに刺した。

「いや…現状分かってるのは武器の口径…背部のアレがさしずめ大体30ミリ、左手に持つてるのが50ミリくらいのアサルトライフルだな。他は一切不明」

「はい、それとアサルトライフルの方は一般的な銃弾をそれサイズにアップグレードしたのですが…背部のあの武器のだけは違いました」

此方を、と言い俺達に背部のガトリング砲の弾を俺に渡す。

渡されたそれはよく見る銃弾…と言うよりはダーツの中央が何かで覆われた銃弾だった。

…戦車砲のAP…何たらDSって奴か？いやでもコレ…。

「はい、ダーツの矢に似た弾を装填していたのです」

「相棒、少し貸してくれ…なんか軽くな？」

「はい、レンジャーの50ミリランチャーより遥かに軽いです」

「アフィン？私にも見せて？」

はい、とアフィンはマトイにソレを渡しマジマジと見始める。

「取り敢えず分かってるのはコレだけだ。すまないがリフトが来次第アレに乗って…」

「…班長、リフトが到着したようです」

そう副班長が示す先には…消防車みたいなアームが付いている車両が機体に向かって走って行った。

「さて、我々も向かいましょう。おい！行くぞ」

「はっ！」

班長の一声で副班長が周りに手で指示を送る。

「…それじゃ、行こう」

「…相棒、立てるか？」

「少し休んだ、行ける」

「大丈夫？おんぶする？」

「…いや、歩けるから。大丈夫だから。なっ？」

そう言い俺達は機体に向かう。

「おいお前らっ！パイロットと到着だ！道を開けろ！」

班長がそう言うのと道がザツと左右に分かれる。神様かな？

「さあどうぞ。乗る前に機体でも念のため見てください」

そう言い機体の目の前に立つ。

すると目の前の機体の複眼アイに火が灯り、右手がゆっくり動き、何も持っていない握り拳の右手がゆっくりと平手になり俺の目の前で止まった。

「おお、これは…」

周りを見ると周囲の人…アフィン、マトイ含め全員が俺より10歩ほど下がった位置に退避していた。

その平手に登るとゆっくりと水平を崩さないように首元まで手を上げた。

首元に立つとプシュ…と頭部が持ち上がり前見た時と同じ様にコックピットが露見した。

「あいぼーうー！」

アフィンの叫ぶ声が聞こえ其方に振り向くとー。

「いたっ」

がちや、と何かが頭に当たり、その何かの下に落ちた。これは…。

「ヘッドセット…？」

戦闘中いつも俺がしているヘッドセットが落ちていた。

それを拾い上げふう、と息を吹きかけ手で埃を払う。

多分壊れてないが…大事か？

ヘッドセットを耳にかけシステムをオンにする。

『よし、聞こえてるなっ…』

「…だからって投げる必要はないだろう」

「そう言いコックピットに入る。」

「入ったのを確認するとオートで頭部が元の場所に戻る。」

『コッチからはそのヘッドセットから送られてくる信号で分かるが…まあ、前回と同じように起動させてくれ、だと』

「了解、少し離れてくれ」

『ああ、それと。動作する時は声で言ってくれ』

「？まあ、分かったわ」

「そう言い前回と同じ様にボタンを押して行く。」

「えつと…ハッチ閉鎖、点火スイッチオンー聞こえるか？」

「ハッチを閉鎖すると、頭の位置を固定する変な拘束具？が出て来た。あれ？前はこんな無かったぞ？」

『ああ、バッチリ聞こえてる。良好だ』

「イグニツションスイッチを押すとメインモニターが光り、まるでパソコンで出る様な感じで英文が長々と続く。」

最後に、この機体のOSが起動した。

画面中央に出るVariable Operating Systemの文字。

「…ヴァリアブルOSー可変OSって何だ？」

画面下にVersion 0.01 block 0 model と書かれていた。

「それも消えるとその他のモニターも光り、機体の状況等を表示する。」

「…全パーツのロック、解除」

腕部、脚部、頭部のロックを解除して、機体を立ち上げる。

「プシュ、と音がして機体が立ち上がる。」

「コックピット内からでも分かるほどの歓声が聞こえる。」

「…メインシステム、戦闘モード起動」

「メインモニターに映るMain system Engage mode Activationと言う英文。」

「各種サブモニターに持っている射撃兵装の位置、残弾、機体の損傷」

率が表示される。

他には向こうでよく見たI・N・S／G・P・SやF・C・S、
A・B

のセットアップが完了したーと言うかOS立ち上げ時に此奴ら
もひっそり立ち上がったんだな。

I・N・SとG・P・Sは：確か慣性装置だったか？複合慣性装
置か？

F・C・Sは射撃制御装置だな。コレはわかる。

最後のA・B：アフターバーナーなわけ無いし。ブースターはあ
るがな。そういやアフターバーナーってオーグメンターとかリヒー
トとか色々言い方あったっけ。

『ああ……よし、起動したな。しかしやっぱり人型兵器は良いなあ』

関係のないことを考えているとアフィンから通信が入る。

「その点は同意だが：起動したら何をすれば良いんだ？」

『……えっ？ここで？……この班長からだ、銃をぶっ放せ、だつて』

「…何処に向かつて？」

『…今からの出すからそれを狙えだつてさ』

そう言う画面奥の方に的がパツと立った。

「よおし…狙うぞ…」

そう言うモニター端にWarning F・C・O・f・L・i・n

e と表示される。

その警告を無視して射撃を開始する。

発砲と同時に左右コントロールステイクに変な黒いグローブみ
たいなものが出て来た。

発砲音で気付かず、再度トリガー引く。

ドンツ、と言う音と共に的の遥か手前に弾着、砂煙を舞い上げた。

「……」

『……ああ、2発ともミス』

「言わんで良いわ。次ーんっ？なんだ？」

『どうした？相棒』

「…気が付いたらなんかグローブみたいなのが有る。しかも両セット。なんだこりゃ?」

『…それをヘッドセット前に映せないか?』

右手側に嵌めるグローブを手に持ちヘッドセット前に持つ。

「これで良いか?」

『ああ、大丈夫ーはい? モーショントレーサー? 何ですか? それ?』
『その名の通り動きをトレース、真似するんだよ。もしかしたらそれを嵌めたら撃ちやすくなるんじゃないか?』

『…でも危なくないですか?』

『正直モーショントレーサーがここまで小さくなってるとは思わなかったな』

『はあ…』

『コレだけでも十分なデータだ。船外活動や、下手したら此奴のソーソックリとは行かないが量産出来るかもしれないぞ?』

『まさか? 幾ら総技部でもそれは…』

『俺らを舐めてもらっちゃ困る。ーユウナ、と言ったか。そのトレーサーを嵌めてもう一度撃ってみろ』

「は、はい。やってみます」

トレーサーを両手に嵌める。モニターにWarningの文字の文字。さらにその下に長々しい英文。

Please unlock the parts of the fuselage and use it freely.

「ぶ、プリーズ、アンロックパーツオフザ…読めねえ…」

コレが本物にパイロット好きなら英語出来る、と言うある友の事を思い出しながら操作を続ける。

グローブを付けて数秒後、モニターにUnlockと表示された。

ゆつくりとグローブがキツくなり手に吸い付く。

完璧に吸い付くとモニターに映る手の動きが右手と一致した。

「おお…すげえ…」

思わず呟く。

腕を自分の頭の前に持ってくるると機体の手もそれに合わせて東部

の目の前で同じ動作をする。

「コレならばー!」

左手に持っているライフルを右手に持ち替え両手で保持して狙う。そこには無いものの何というか、ライフルを持っていると言う感触は有る。

『しかし…いかんせんインターフェイスがごちゃごちゃだな』

『確かに。困難だと操作ミスりそうですよね』

『上に話しつける時こっちで弄くれる様頼むか』

『お願いしますね。アークスとしちやこんなのに乗れるとしたらワクワクが止まらん』

『…コレで映画とかも良いかもなあ…』

『良いですねえ! 対大型ダーカーとか対DFとか!』

『おいおい、対ダーカー戦とかDF戦に出したいのは分かるが…侵食されたら意味ないだろ?』

『…う…そこは総技部の総力でー』

『それが出来たらとづくに導入してるわ』

『ですよ…』

2人の会話を聞きつつトリガーを引く。

人差し指を引くとそれに応じ機体の右手人差し指も引き50ミリ前後の弾が放たれる。

パアン!と甲高い音と共に弾が飛翔。そのまま的に当たる。

「いええやあー! 当ててやったぜー!」

癖で右手を直角で曲げガッツポーズ。それに応じて機体もガッツポーズした。

『決めポーズか…分かってるな』

『ふふっ、ユウナ、楽しんでるね。私も嬉しくなるよ』

『…あの50ミリも中々の速度だな…おい! 測ってたか☒』

『…ツ! 役…: 40メートル…で…』

『1540メートル…ザツと音速より早めか。的の様子は』

『こちら観測班、とても細かいー丸で点ですー待ってください! 後ろの防御壁にも被弾してーいえ! 貫通していますー!』

『貫通だと？ウチでもトップの物理防御力を持っていたはずだが…』
『いえ、貫通した穴はとても小さいーいや、当たった所が溶けていま
すーなんて言う…』

『分かった。観測班は退避しろ。今から背部武器のテストも行うー
ユウナさん。宜しいですか？』

『はい、観測班は退避しましたか？』

『ああ…まだですな』

『まあ、数秒で退避できるわけ無いですからね…此方も準備しますね』
『そう言い武器チェンジする為にコレから言う事を口に出す。録音
しているからね。少し面倒だけど…まあ、テストだし。』

『今から武器チェンジをーおっ？』

すると機体の左肩のラックが動き武器を保持する体制になった。

『おっ？もしかして音声アシストあり？』

右手のライフルを左手に持ち替え、其れを肩に近づける。

ラックの位置をモニターで見ながら少しづつ合わせー。

「つてこれ頭部の映像…俺が見たい所に勝手に向いてくれるのか？」

ラックに武器を収めて、勝手に動くかどうかを調べる。

取り敢えずは…左！

心の中で思うとモニターが左に向く。

『おお！相棒！頭部が！頭部が動いた！複眼も左を見てる！いいぞお
！』

ウチー人が発狂手前になってる。

『やはり人型兵器は良い！実に良い！ロマンが足りてる！』

全く、アフィンは…そう思うとモニターが更に左を向きアフィンに
モニターの中心を合わせる。

『うひよよお！たまんねえぜ！生きてて良かったあ！』

『落ち着け小僧』

『いてっ』

余りの嬉しさに踊り出しそうなアフィンを班長が軽くチョップす
る。バッチリモニターに映ってる。

『ユウナアア！大丈夫うう☒』

「ああ、大丈夫だ、問題は……」

モニターの警告を見るが：F・Cの警告消えたな。

「問題ないな」

『はああい！頑張ってるね！』

マトイにモニターを合わせると両手を上でブンブン振っている。

『…さて、ユウナさん。退避が完了したようです』

「分かりました。それでは持ち替えますね」

また武器変え、と思うと機体が答え右背後に有る武器――ガトリングガンがにゅつ、と出てくる。

モニターに残弾が表示された前回の装填数――何発だったっけ？――から減って…いや、多分数発減ってるわ。

右手でまずグリップを保持して、サイドグリップを左手で持つ。

機体のデータの横にガトリングガンのデータが表示される。

「G・A・U-9+／Mk 6―mod 6―30mm gatling
g. cannon：名前は無いのか」

と言うか名前に某制空権前提攻撃機の主砲の後継か？

仕様変更6回、改良も同じ6回…：どんだけ改造されてるんだか。

『ガトリングキャノン…？そのテストを頼む』

「了解、これから開始します」

思ったけどコイツに乗った時、戦闘機で見られるセーフティピンみたいな無かったな。戦闘態勢に入っていたのかな？お陰ですぐ撃てたけど、

機体を動かした的を見る。コイツが空気を読みのをT・G・Tと表示。四角いボックスが出て隣にLockの文字が。

「これから撃ちます。気を付けてれ」

そう言いトリガーを引く。

49 話目

撃つ、と言う意思を確認したのか如何かは知らないが、バレルが高速で回り始めた。

数回だけ持ったことのあるランチャーの様に見よう見まねで持つ。そこで人差し指に力を込め撃つ。

「うおおお☒」

ガトリングの反動が強く、機体の上半身が後ろに倒れる。

後で言われた事だがこのガトリングレート制御ー連射力制御が出来らしくそれで下げれば普通に歩行しながらでも撃てるそう。

「まだまだああ！」

機体を少し後ろに下げバランスを取る。それと同時に背部ブースターを一瞬点火、反動で戻そうと考えた。

モニター端にA・B Onと表示され上半身が上がった。

撃つとほぼ同時に的に着弾、それから発砲音がした。

トリガーから指を外し的を見る。

モニターのT・G・Tと言う表記の横にx6と表示されている。ボタンを押しズームする。

煙が晴れると、先ほどまで有った的はほぼ木っ端微塵に成っていた。無事な所は左右の的を支える柱くらいである。

『ユウナ、聞こえるか？武器のデータは十分取れた。機体を戻してほしい。メインの建物の隣の第1研究室にそれを寝かせてくれ』

「分かりました。向かいます」

そう言い手に嵌めたグローブを脱いだ。手が手汗でびっしりである。

「…はあ…疲れたあ…もう帰って寝たい」

『任務はまだ終わって無いぞ』

「…んだよ聞いてたのかよ」

『そりや、居たからな』

機体を第1研究室に向けて歩かせる。

最初の時に乗った時はペダルを使っていたが、今は念じればどっかの人造兵器や、緑色の粒子を使う兵器の如く使える。後者の様な起動は無理だが。

歩く横をアフィンとマトイが追従する。

「アフィン。危ないから少し離れてくれ。操縦ミスって倒れたらやばいからな」

『そうか。分かった。マトイ！少し離れよう』

『うん、ユウナも頑張ってるね？』

そう言い2人は走って他の職員の後続き第1研究室に向かった。

「…さて、俺も行くか」

ふと、研究室に向かってその後どうするのだろうか、と言う疑問が思い浮かぶ。

1番思うのはコイツの保管方法だ。良くあるのはデツキに寝かせるのと、そのまま立ったままゲージに保管、もう一つは寝かせるタイプか。最初と最後の奴を複合の奴もあるな。保管、と言ったがもつと適切な言葉があるはずなんだがなあ：思い出せん。

考え事をしながら前に進む。少しして第1研究室に到着した。

すると研究室の扉が開き、丁度コイツが入るくらい目測14〜5メートル位の扉が開く。

下で作業している職員を踏まない様にゆっくり歩いて進む。此処でブーストを低速で使うか、とも考えたが熱が下に噴き出るし、地面が耐えられるかも分からないから辞めた。

中央に立つタイプのゲージがありそれに背中を合わせる。こいつに合う奴よく有ったな。これが俺の意見だった。

機体の各種電源を切り最後にハッチを開く。パシユ、と如何にも機械が外れる音がしてコックピットの背もたれ部分を足場に外に出る。

胴体部分に手を掴み背もたれの一番高いところに足を掛ける。

ふんっ、と力を入れて上がろうとするも、中々上がれず。

さてどうするかと考えているとコックピットのハッチ部分に手が差し出された。

「ほら相棒。掴まれ」

「アフィンかーほれ、重いぞ?」

「女に重いって言うほど落ちぶれてないわ」

ヒョイ、とそのまま持ち上げ胴体部分に立つ。

「うお、まぶーしくないわ」

ケージ横に人が通れる様な道がニョーンと伸び出ている。

アフィンに続きマトイも小走りでこちらに向かってくる。その後ろには班長と副班長が歩いて来ている。

「ユウナア!大丈夫☒ケガはない☒」

「ないない、合ったら今頃立ててないわ」

「そっか、それなら大事だね」

そんな事を聞いていると後ろの方で班長に他の職員が何かを話している。

「ー何?機関からオーダーだと?」

「はい、なんでもあるモノが逃げた為協力して欲しいと」

「そのモノって何だよ」

「:禁止事項の為話せない、と:」

「:...んで?何を作って欲しいんだ?」

「対龍用の捕獲兵装を作って欲しいとの事です」

「サイズは?」

「それらを言う為にニューマンの男性を送るとの事です」

「時間は?」

「数十分後との事です」

「:...俺はマトモにコイツの調査ができんのが:頼めるか?」

「分かりました、班長!やってみせます!」

「済まないな、お前ばっかにこんな事を付き合わせて」

「:それでも自分は班長の事を尊敬してますから」

そう言い2人の会話は終わった。機関?マシンかな?

「それで!??どうだった!??射撃訓練!」

「ああ?ああ、そうだな:結構楽しかったよ」

「ねえユウナ?私もこの中に入って良い?」

電源切ったし動かないだろうし…大事か？

「入ってみるか？」

「良いの☑️ありがとあ！？」

そう言いコックピットに入るマトイ。これ俺のじゃ無いんだがなあ…起動できないのを見ると専用機らしいけど…その内OSのプロトコル的な物も破られるでしょうに。

「うわあ、凄い凄い！」

コックピットを除くと座っただけで凄いを連発して言うマトイ。いやまあ、確かに凄いけどさあ…。

「なあアフィン。身もふたもないこと言っただけで良い？」

「何だ？良いぞ？」

「人型兵器をさ、二つのコントロールスティックと数個のペダル、数十個のボタンで動かすのは無理ゲーだよな」

「…まあ、無理ゲーだな。動かせたけど」

「なんか今回乗った時、コックピットの背もたれ部分に変な固定する、なんて言うか変なのが出てきたんだよね。その状態で念じると動いたと言うか」

「…ニューマンだからか？」

「ニューマンって新人類なのか？」

「…さあ？」

取り敢えずさっきの事を班長にそっくりそのまま話すか。

その後、笑顔でコックピットに座るマトイを2人で上にあげて、先ほどの話をやっと来た班長に話す。

その時の班長の顔は新しいおもちゃを見つけた子供のようにだ、と副班長は語った。…技術者的にはこれ自体玩具だと思っただがなあ…。

その後、今回の依頼の報酬を貰い、そのまま出口へ。途中、メガネをかけた変な髪型のニューマンとすれ違った。何だあの髪型は？

すれ違ったニューマンの髪型を後ろを向きながらガン見しているとマトイにダメだよ？って言われた。

「人には人それぞれの髪型があるんだからね?」

「いやでもアレは…」

「相棒、スルーだ。スルースキルだ」

「…はい…」

俺達三人は研修服のままアフィンの車に乗り込み、街の中心部に向かう。

「…って言うかまさか報酬三人前くれるとはな…」

「ああ、てつきり相棒一人分かと思ったが…」

「私ロボット見に來ただけでメセタ貰えるなんて…もらって良いのかな?」

「…まあ、貰えるもんは貰っところぞ」

窓を開けて外を見る。

森林ばかりだった背景ももう少し街に近づけばジャングルビルになる。

「あつ、そうだ。相棒、マトイ。腹減ってない?」

そう言われてマグを出し時間を見ると…もう6時を回っていた。

「そうだな、どっかに食べに行くか?」

「そうだねえ…ユウナはどこに行きたい?」

「俺か?俺はどこでも良いさ。アフィンは?」

「俺?俺も何処でも良いんだがなあ…マトイは?」

「私はほら…まだ覚えてないから…」

そう言われて俺は把握した。これ決まらないやつじゃ無いか、と。

その後仕方なく何時ものカフェ、ラフリで晩御飯を取ること。最初カフェで腹一杯…俺とマトイは兎も角アフィナーになるのかとマグで調べていたものの、何とあのカフェ、夜は夜で量が凄いらしい。

一時間ほどしてラフリに到着、お店横の駐車場にアフィンの車を停めの中に入った。

50 話目

「くそお…クソアフィンの奴う…」

何故こんな所でこんな事を愚痴っているのか。

今現在いる惑星ーアムドウスキア、火山洞窟にいるからだ。

「あのリリーパから此処かよ…第一一人でデカイ龍を倒して来いだあ？」

「それに！俺はまだ休み足らねえのに！上から俺指名☒糞食らえチクシヨが！」

暑さで余計にキレつつも今回のクエスト内容を見る。

オーダーは、火山洞窟奥にD因子に侵された大型龍種が居る。周りの龍族に被害が及ぶ前に至急討伐を頼む、との内容だった。

クソクソ言っていてしも仕方ない、さっさと行くか。ー行きたくないけど。

腰についているゼノさんのお古を手を持ちクツソ熱い溶岩が其処彼処から溢れ出る洞窟を1人進む。

少し歩くと目の前の土が凹み溶岩溜まりになる。

「なんだこー」

次の瞬間、溶岩溜まりが急に吹き出し周りにマグマが飛散した。

「うおおおお☒」

急いで脇を通り抜けマグマが当たらないように必死に走る。

数十メートルほど走り、ようやく安全になったか？程度の所まで来た。

「…もうやだ此処。帰りたい」

そう言っても帰れないのがクエストでして。暑い暑い言いながら進む。

ギヤオオス！

そこから更に歩くと急に鳴き声が響いた。

「☒誰だ？」

更に進むと杖らしき物を持った龍族と剣と盾ーありや一体化しているのか？が2人ほど話している。

手前にある大きめの石に隠れる。隠れた石から少しだけ頭を出し相手の様子を調べる。

奇跡的にも龍族は俺に背後を向けて話していた。

『また 暴れている』

『キ・カイ様 またなのか？』

龍族の言葉はほぼ翻訳が効く。ミミー所謂獣耳ーから聞こえる言語は何を言っているか不明だが、耳ー俗に言うエルフ耳、俺のは格段に小さいがーからの声は小型のヘッドセットを付けているので何を言っているかは何となくわかる。

「キカイ？機械か？」

2人は1、2分話して別れるーかと思ったが。

『またー誰だ！』

まるで頭の上に！マークでも付いたかのように話す龍族。バレたか

頭の中に浮かぶはALERTと言う文字。これで全身ぴっちりスーツならーそれとバンダナも欲しいな。

なんて事を考えている場合じゃない！どうする

『さて アークス 派遣された 奴かもしれん』

『だが アークス あの様な 種族 居たか？』

『第一 このような所 来る アークス位 だろう』

『それもそうか おい！出て来い！』

良かった、アークスに良好な龍族で。クエストカウンターで龍族は過去の話で仲が悪い、って言われてたからなあ。

アサルトライフルを腰に付けてー因みにこれ、万能物質(?)なフォトンでくっ付くらしい。

「出てきましたよ」

『これは 何という』

『分らん アークス か？』

「そうだ、アークスだ。クエストで暴走する龍族の排除に来た」

『やはりか こっちだ 来てくれ』

杖を持つ龍族に言われその後を歩いて行く。

「そうだ。濟まないが今回の討伐する奴の外見を教えてくださいませんか？」

『そうだな そちらの言う キヤタドランと言う 同胞の 討伐を頼む』

『キ・カイ様は 比較的 照れやすい 龍族であつたのだ』

『しかし 急に暴れ出し 今に至る』

『キ・カイ様の様な龍は照れ屋 多い』

『キヤタドラン…成る程、長いな』

マグに映るは長い四つ足の変な生き物。

『左様 しかもキ・カイ様 潜ります故 気を付けてくれ』

「ええ☒潜るの☒」

照れやすいつてそう言う意味☒意味違くねえ☒

『…此処で我々が思っている事 聞いてもよろしいか？』

剣を持つている龍族が顔を向け改まって聞いて来た。

「なんだ？良いぞ別に」

『それでは…アークスよ 何という種族なのか？』

「種族？」

『そう 我々の内では 其方のニューマン ヒューマン セミキヤスト と言われる種族を見た事が有る』

『しかし アークスは 先程の種族には無い 背後から尻尾とミミと思われる部分がある』

『…もしや 同族では？』

「一応ビーストって呼ばれてるぜ？俺の種族」

『ビースト なんと』

「…なあ、この話は話すと長い。すまんが後で…」

「ああああ☒ユウナちやああんはつけええん！」

良いか？と言おうとしたら聞き覚えのある声が洞窟内に響く。

「はああい！ユウナ！」

走って来たのはパティ、情報屋のパティエンティアのでかい方だった。

遅れてティアも走って来た。隣に來ると、はあはあと息を吸って整えている。

「困った時の情報屋さんだよ！新鮮でピチピチな情報はどうだい☒」

「いや、ピチピチってどう言うこっちゃ？」

「む、寧ろ…パティちゃんの…扱いに…はあ…困っている感じがするわ」

会話をしつつも肩で息を吸うティア。

「お、おい、大丈夫か？」

「ありがと…これでも一応鍛えてるから、大丈夫よ」

ティアの隣に行き肩を貸そうとするも手であしらわれた。

「ふーんだ！私を消す方法なんてドキュメントは存在しないからね

☒

「ドキュメント…？」

「そんな事より！今回の情報は話題の此処！ーえつと、なんだっけ？アム、アムムム…？」

「アムドウスキア、でしょ？パティちゃん」

「そうそれ！アムドウスキア！デツカい隕石が衝突してとんでもない形になったった惑星！」

「良く滅ばなかったな、龍族」

「隕石の威力は凄まじいからねえ…船団防衛隊には頭が上がらないよ」

そう言うティア。船団防衛隊？聞いてーいや、こんなクソ暑い所で聞いてられるか。戻ったらポスで調べりゃ良いか。

「そんな過酷なトコなだけ合って住んでいる住人達も屈強なのよ！なんだって龍よ龍！」

『ピーストよ 煩くないか？』

「ピーストなんだが、俺にはユウナって言う名前がだな…」

小声で俺の耳元でその屈強な住人が囁く

「しっ！」

奥でティアが手を鼻の前で人差し指を立てて静かに、と言うジェスチャーをする。

『静かにしとこうか』

『そうだな あの時に従おう』

「アムドウスキア原生の龍族は知能も高く、オラクル船団との交流も少なからず行われているの」

「でも最近、D因子に侵された龍族も増えてきてアークスを見かけると、外敵として襲いかかって来るー」

「降りかかる火の粉は払うのみ！えやーっ！」

そう言うのとパーティはダブルセイバーを出し、それを手に握り適当に降る。

『うお』

『』

『うお、下がれ、危ねえ』

2人の龍族を手で背後に下げながらパーティから少し離れる。

「つてね！ーあれ？」

「あつ？終わった？」

「うん。もう近づいても大事かな？」

「だとさ」

後ろで見ていたティアがパーティの行為を細目で見ながら俺たちに言う。

聞いた三人はパーティに近づく。

「…まあ、良いや。因みにコレ、マジな話だよ？殺らなきゃ殺られるって場合には殺らないとダメだからね？」

そう言いパーティは後ろを向き誰に言うのか知らない言葉を言う。

「なんだ？心配してんのか？」

「だ、だってほら！貴女が居ないとアタシの話、誰も聞いてくれないし！うんうん！そうだ！そーだもん！」

「…えっ？パーティエンティアってそんなに信頼度ないの？」

「要するに危険が一杯だから注意した方が良いよ、つて言いたいみたい」

「まあ、馬鹿姉のお節介かも知れないけど…気を付けてね？後信頼度についてはーほら？私達ってニューマンだから年齢幼めで見られるのよー貴女とあった時と同じくね？」

「ああ、分かったわ。ー所で、ティア達はなぜ此処に？」

「私達もクエストよ？多分同じ様な任務だと思うけど」

それを聞き、そっちもそっちでD因子に侵された龍族の討伐か、と想像できた。

「それじゃ！私達はクエストがあるから！」

そう言い片手を振りながらも元来た道に戻る2人。わざわざ道を外してまで俺に会いたかったのか…？

『アークス と言うのも 大変 だな』

「そこはお疲れって言ってくれ」

杖を持つている龍族が持っていない手で俺の肩を軽く触りそう言った。

『さあ、先に進もう。キ・カイ様もそう長くは持たん』

剣を持った龍族が言い俺たち三人はキカイ、と呼ばれるキヤタドランの元に向かう。

51 話目

「……っで？そのキ・カイ、だっけ？そいつは何処に？」

『今 ある所に 仲間に 閉じ込めてもらっている』

『今は 術式を組み 扉を 閉鎖させてもらっている』

術式：俺らのテクニクみたいなものだろうか？それにしても閉鎖か：いや、キャタドランって確かー。

「さつきキャタドランって潜るって言ってたけど、その扉大事か？」

『その点に関しては 抜かりはない』

そう言う剣を持った龍族が先導しながらこちらを見る。

『そもそも 我らが キ・カイ様を 封じ込めている 場所は 牢

その為 飛行や潜ってでの 脱出は困難』

『万が一 脱出に成功しても 監視員が居る 彼等から報告が 入る手はずになって居る』

その後ろを歩く杖を持った龍族が話を続けた。

「そうかい：：：そういうや龍族からの支援は期待できるか？」

『我等は アークスの言う フォトンを使えず』

『アークスの言う ダーガーとやらの 撃退は不可能なのだ』

「支援は無理、って事ね：：」

でっかい龍族相手にライフル一丁か：：。

「と言うかキカイって龍族も同じ龍族だろ？同族殺しじゃ無いのか？」

『我々龍族は アークスとは価値観が違う』

『我々龍族は 倒された時 身体は消える物の 魂だけは 別の場所
で 生まれ変わる』

『よって 我々は不滅』

『それに 倒れれば 流石に D因子とやらも 浄化されるで あり
う』

「：：：そうか」

それから暫くして大きな扉が見えてきた。

手前には複数の龍族となんかツノが生えた四つ脚の龍族も居る。

『来たか』

四つ脚の龍族が此方向き、周囲の龍族も此方ーいや、杖を持って居る龍族だけは扉に集中して居る。

『来たか アークス 早速だが 中の キ・カイ様を 倒してほしい』

『小賢しい 我等の手で 倒した方が 早い』

『我等だけでは 倒れる筈が ない』

『どんな物でも殴れば倒れる』

『アークスの言う フォトンの話を聞いたことが無いのか☒』

『アークスに頼るなど笑止 此処は我らの星だ 別の種族にくれてやる場所では無い』

なんか四つ脚の内の2人が言い争って居るのだが…大事だろうか？

「ああ…大事か？」

『ああ 済まない 我々も出来うる限り 支援はしよう しかし 我等 フォトンの無い身 余り当てにはしないで欲しい』

「分かった。それじゃ、入っていいか？」

『待て、我等も配置に着かせる 全員聞けッ！今回の 任務は』

このアークスの支援！ キ・カイ様が倒れる迄 支援を忘れるな！』

すると周りに居る龍族と扉の手前に有る二つの通路から続々と龍族がやって来て雄叫びをあげて居る。

『良しっ！では皆の衆！ 戦闘配置を取れ！』

雄叫びと共に奥に行く龍族。

全員が去った後、此処には先程の四つ脚の龍族2人と俺だけになった。

『それではアークスよ よろしく頼む』

『ふっ お手並み拝見と行こう』

そう言い四つ脚の2人も左右に分かれて消えた。

2人が消えると目の前の扉の中心に灯りがともりー扉が消えた。

「何だこれ…オラクルにすら無いぞ」

そう呟くと――開いた扉の奥に細長い――俺の嫌いなエビフライに頭と足を付けたような龍が居た。

『彼がキ・カイ様だ。倒してくれ』

腰にあるライフルを手に握り、安全装置の位置をセーフからフルオートの状態に変える。

ゼノさんのお古ライフルを斜めに持ち、コッキングレバーを少し引いて薬室内に弾が入って居るかを確認――入ってるな。

排莖口から目をそらし少し遠く――50メートルほど先のキヤタドランを見る。

見ると頭部付近に変な出来物が出来ている。

あれは確か…侵食核、だったか？

侵食核を攻撃すれば脳までダメージが入って倒せるとか何とか感とか。

にしても軽いなコレ…こんな短いバレルで当てられるのかよ。

ライフルを両手で持ちキヤタドランを見る。

向こうも此方が確認出来たのか、大声で叫ぶ。

頭目掛けトリガー引く。

肩に来る反動を左手で抑えつつも相手に近づく。

するとキヤタドランが地面に潜った。

「潜った…何処から…？」

歩きながらマガジンキャッチボタンを押し、空になったマガジンをナノトランサーに近づけて中に入れる。

幾らメセタを持ったからと言ってこう言うところで捨てるような真似は出来ない。

腰についているベルトから弾の入っている予備マガジンを抜き出し、ライフル本体に挿入する。

挿入後、ボルトリリースレバーを押し、初弾を薬室内に入れる。

聞いているようには見えなかったな…困難ならグレネードランチャー持ってくれば…！

因みにだが今回の弾にD・APは入れて居ない。いや、正直入れようかと迷ったのだけど疲れからか入れるのを忘れた。

「…つて言うか、レンジャー1人にやらせる仕事ー」
独り言を呟いていると自分の居る地面が揺れ始めた。

「やっべー」

嫌な予感がしてそこから離れるー離れた直後に地面からキヤタドランが、その顔について居るツノで刺そうと地面から勢い良く出て来た。

『出て来たぞー！全員！掛かれ！』

すると壁の上から杖を持った龍族が氷らしきーテクニクつて言うのか？それを使って攻撃を始めた。

キヤタドランの脚や、色々なところに当たって居る。

『アークスよー！彼の頭を狙えー！』

怯んで居る好きに近くに向かい頭に馬乗りしー侵食核にバレルを突っ込んだ。

「おらあー」

バレルを突っ込み、そこでトリガーを引きつ放しにして、マガジン内の弾を撃ち切った。

撃ち切るとマガジンをポイ捨て次を入れる。流石に敵の上でそんな悠長な事をしてられなかった。

マガジンを合計3個程ポイ捨てすると頭をまっすぐに伸ばし、地面に倒れた。

「う、うおおお」

倒れた衝撃で自分も吹っ飛び、体から地面に擦り付けた。

『だ、大丈夫かー アークス殿ー』

「イツテエ…んだよコレ、全然痛いじゃ無いか」

フォトンで覆う癖して全然痛いじゃ無いかこのドラグニアフラー！

頭に手を当てて首を左右に振る。凄く痛いが大丈夫か？

次に耳とミミの確認ーこれも付いて居る、問題ない。

後ろを見るとーどうやらキヤタドランは沈黙して居るようだ。

頭に思いつき銃本体が曲がったのが付いて居る。恐らく地面に頭を付いた衝撃で折れたのだろう。

「……勝った、か？」

『勝ちました！コレでキ・カイ様も浄化されるでしょう』

そう四つ脚が言うときャタドランの遺体が溶けたー溶けた☒

「うお☒と、溶けた☒速っ☒」

『我々龍族は倒されると魂が抜けます 抜けた後、すぐに身体は溶けるなり割れるなりして消えるのです 前の身体は 入りませんから』
『アークスよ有難う あなたのお陰で助かった この件で上の 連中も アークス派に 傾けば 良いのだが』

「…龍族も大変ですね」

『言うな 下っ端は 皆同じ事を 言うさ』

「…さて、クエストは終わったし、俺は帰るわ」

マグを呼びアイテム欄のテレポーターを選ぶ。行き先は…キャンシップで良いか？サーレクスでも良いかと思ったが、そう言やまだ前線基地出来てなかったなここ、と思い出しキャンシップを選択。

『アークスよ 助かった 龍族の心より 感謝する』

「感謝するのはお互い様だろ？」

右手で手を振りながらテレポーターに入る。

テレポーターに入るとそこはいつか見たサーレクスの休憩室より更に豪華だった。

フォトンテレビのある場所に座りモノメイトを飲もう、とした時、違和感があった。ふと下を見るとドラグニアフラールがボロボロになって居たのだ。

「おいおい、嘘だろ…？タダとは言え…」

ついこの間貰ったばっかしだぞ？よく見りや足元とかその他諸々汗が凄い。

「…確かコイツにシャワールーム会ったよな？」

フォトンテレビの前から立ち去り、近くの3D案内板を見る。

それによると案外近い所にあるじゃないか。

「…フロ、かあ…」

余り慣れて居ない此の身体。正直見るのもー第三者として見る

のは良いがー余り好ましくない。それでも慣れなくてはいけないが。

少し重い足取りを風呂に進めた。

52 話目

案内板の通りに進み英語を崩した様な言語「アークス言語で女と男と描かれた扉の前に着く。

さて、ここで迷うべき事は男風呂に入る事なのだが、生憎俺の身体は女である。誰も先客居ないよな?と内心祈りつつも女の方のドアをくぐる。

ドアは自動ドアになって居て近づけば勝手に開く。

中はよく見る完全な個室になっており、服を脱ぐスペース兼確かお化粧直し、だったか?をするスペースと扉を隔てて風呂がある「一言っても風呂は無い。その代わりにシャワーは完備されて居る。

「と言うか水と温める熱源は「あぁ、フォトンか」

何でもありだな、と言い個室に入る。フォトンで出来るなら確かにタダだからな。

個室に入り鍵を内側から閉める。閉めた後に掛かっているかを確認「締まったな。

その後、このボロボロのドラグニアフラールを脱ぎ、幸いダメージの少ないスカートを脱ぎ、下着を脱ぐ。下着までは流石に汚れて「無いな?」

後ろに手を回し、このアホみたいに大きい胸を保持するブラのホック、だったか?を取る。

プチっ、と音がしてブラが地面に「落ちない。

今度は肩の方のホックを同じく取り、ブラをぽいっとそこら辺に置く。

ブラジャーから解放されて一気に重さが俺に伝わる。

凄いのが下に垂れずに真っ直ぐなんだよなあ…二次元じゃ…無いよなあ…。

下の下着を脱ぎ完全な身一つになった状態でそのままシャワーに向かった。内心、コレを第三者で見たかったなあ、と目を瞑りながら。

無論同意の上で。シャワールームに入りそこで目を開ける。ご丁寧にシャワーが掛けてある隣には全身が映る綺麗な鏡が。

「…ッー」

未だに慣れない。この体になってからどうにか風呂には入っているものの、鏡を見る度に顔が赤くなる。

掛けてあるシャワーの蛇口を捻り40度前後のお湯を出す。

「ざあああ」と言う温水と共に腰より下に到達する長い髪の毛に水分が付いて重くなる。

最近思うのが胸も異常だが、この超ロングヘアも異常だと思う今この頃。

出しっ放しで、手にボディシャンプーを大量に出し身体に塗る。

最初の頃ーこの身体になって初めての時か。このシャンプーと多分同じような奴を擦ったらえらいことになってしまったてなあ…アレは大変だった。

身体の主要部分は洗い最後のー下と胸を洗う。

巨乳は敏感じゃ無い、と良く聞いていたが、そんな事はなかった。手で痛くならないように、絶対気持ち良くなならないようー特に先端をゆっくり洗う。

その後ボディシャワーで洗い流しー下はその…ねえ？

髪の毛を温水でさつ、と3回ほど軽く洗い、これまた3回ほどシャンプーで皮膚を傷付けないように、シャンプーを髪の毛に揉み込む。

これで面倒なのがさつき言った髪の毛の長さ。

だってこれ腰より下まで有るんだぜ？

それじゃあどうやって髪の毛を洗っているかって？

面倒いから、マトイとポイントを先に入れて2人が寝静まった頃にお風呂にシャンプーを投入、そのまま髪の毛を風呂の中で洗うと言う超豪快な技だ。

最初の頃はこう言う風にやれば楽に終わる、と考えたがどうしても2人が先に入る、と言う状況上、汚くないか、とも思ったがなんとこのお風呂、水が循環していて常時綺麗で洗う手間ナシ、と説明書に書かれていた。

……それに気付くまで洗っていたのは内緒。

それでそのお風呂に入り髪のお風呂に付けながら入っていた。流石に暇な時はちゃんと洗うが。

さて、戻して此処ではいつもの様に洗うしかない。

髪の毛を左右に分け前に持ってくる。それをシャンプーで揉み込み終わり。それを3回やる。

「こんなんじゃシャンプー代が洒落にならない……」

泡をシャワーで洗いとり、そのまま外へ。

この船団にもタオルはあるが、大体風呂場のすぐ外にー。

ぎゅいいい、と言う音ともに温風が上から流れる。タオルではなくこの温風で乾かす。俺はタオルの方が良いがなあ……。

乾いた後に先ほどまで来ていた下着をもう一度身につけて……。

「……っあ……服……」

底にあるのはダメージの大きいドラグニアフラールが。とてもじゃ無いが着るのはダメだな……。と言うか貰い物とは言えこれ実戦仕様でしょ。一回戦っただけでこのダメージなんですけど。これちゃんとフォトン纏わせれてなくねえ。

此処でズレるがアークスが使う戦闘服についてだ。

基本は男性は重装甲、女性はー理由はあるが肌を露出させる服、これ以外に行くつかの除外があるが大体はこれ。

男性の重装甲は、まあ、単に男性の筋力に物を言わせたって事だろう。万一フォトンが無くなっても多少は長生き出来るように。

女性は……肌を露出させた方がフォトンとの適合？相性？が何とか。と言うかそれで言ったら女性はランボープレイが最強ってことになるが良いのだろうか？

んで、殆どの戦闘服はフォトンを纏う事で衝撃吸収率？とかD因子に汚染されないとか色々メリットがあるのだが……。

もう一度ダメージのあるドラグニアフラールを見る。

……だからって言っても脆いよなあ……。

いやな？もしかしたらダメージを受ける事に敗れることによつて

着ている人にダメージを通りにくするーってそれどんな罰ゲームだよ

そんなどうでも良いことを考えて居たら、ぶるっと震えてしまった。いかん、着れる服を探さないと。

急いでマグを呼び寄せ今着られるような服がナノトランサーにあるかどうかを調べる。

「ああ…いつぞやの研修服しかねえ…」

仕方ない。これを着るか。

ファクションを選択して服の欄をアークス研修服にする。

すると下着のみだった俺の体が一瞬のうちに研修服に早着替えした。

「これもこれで超技術だなあ…」

破れたドラグニアフレールをナノトランサーに収納しシャワールームから出ることにする。

先ほど降り立ったフォトンテレビのある休憩所に着くと、案内板にそろそろオラクル船団宙域にワープするのとアナウンスが入った。

取り敢えずテレビでも見て暇をつぶすか。

「お疲れ様でした。此方が報酬になります」

アレから無事にオラクル船団に到着して、今はクエストカウンターにてさっきのキャタドラン討伐の報酬をもらいに来た。

報酬額は12万メセター少し前ならガッツポーズものだが、今は余裕あるからなあ。

「マグを一度お預かりしますね」

「はい、お願いします」

そう言うとマグがカウンターに向かい奥に消える。

「ーはい、終わりました。またのご利用をお待ちしていますね」

「此方こそ」

そう言いマトイとポイントが居る自室に向かって寝ようかと考え始めたその時。

『あらあら見慣れない人が居ますねえ』

フルキャスト特有のメカニカルな音声が聞こえたと思うと肩を掴まれた。

『ああ☒しかもしかも！私と同じレンジャーじゃないでかああ!?!?』
嫌な予感が…そう思い掴んできた人を確認するために後ろを向くとー。

女のフルキャストが此方をガン見してきた。

丁寧に目に値する部分をジジツ、とズームしながら。

「ひっ☒」

『貴女ーアアレ？レンジャーは例外的にシップ内での武器携行を許可されて居るはずですが…』

「えっと…武器を壊してしまいー」

『壊してしまった☒』

「ッ！」

急に大声をミ耳元で出すもんだからビククリしたわ。只でさえ色々とアレーー敏感だからやめて欲しい。まあ、無理だろうけどなあ…。

『それでは！急いで買いに行きませんか!?!?ホラ!?!?行きましょおお!?!?』

そう言い俺の手を掴みまたまたショップエリアに向かう。そして地味に掴む力が強い。

「ちよ、ちよっと待って☒貴女の名前は☒」

『私ですかあ☒リサ、って言いますよお。こう見えてレンジャーの方に向けてクライアントオーダーを出していますよお』

そう言われて確信した。この人がアフィンの言っていたヤバイ人だ。

『あれ？いまいま、私に対して変な事思いませんでしたかあ?』

「ーいえいえ、そんな初対面の人に、何でそんなことを思うんです?」

『そおですかあ?私の感は当たるのですけどねえ』

そう言い連れていかれたのはいつぞやのペアーリ、武器修理屋だった。

『どうしーおお、リサではないか』

『ジグさん！彼女に武器を作ってくれませんかあ☒』

『はっはっはっ、お主はいつも急じやおお…それでーっってお主はあの時のアークスではないか』

「あ、え、ええ」

『どうした？作って欲しい武器が決まったのか？』

「いえ、ちよつと敵ーエネミーと交戦中にライフルを折ってしまいまして…」

『ふむ…そうじやの。2人とも中に入りなさい。今は人が居ないからな』

『ではではあ、お邪魔しまああす』

「お、お邪魔しまーす…」

53 話目

ジグさんに言われペアーリの中に入る。壁にはいくつもの武器が置いてありその殆どが修理済み、と紙で書かれていた。

『おお？お主、今何で紙で、なんて思ったな？』

「ああ、いえ。単に珍しくて…」

そもそもここに来てから紙媒体を余り見ていない。殆どが3dcgかマグのホログラムで映し出されるからだ。

『儂も老体での…記憶装置にチト限界が来ておるみたいでの。覚えるのがキツくなって来たわい。それで、な』

最も、武器に関しては残っておるがの、と笑いながら。

『あらあらジグもそんな歳ですかあ私も用心しませんとねえ』
『リサ殿もーおっと、それはダメ、でしたな』

そう言い自分の頭の前に人差し指を立てるジグ。

『はいはあい？？それでそれでえ！このレンジャーに武器を作つて欲しいだけど…出来ますかあ？』

『はっはっはっ、儂とリサ殿との仲じやろ？それに元々作る気ではあつたがのお…最近チト、やる気が起きなくてのお…』

そもそも、ガトリングをお主みたいな女子が持つのがちとキツイぞ、と付け加えて。

『そうですかあそれでは無理強いはしませんよお！リサはいい子、ですから！？』

『すまんのお、リサ殿にユウナ殿』

そう言われて俺とリサさんはペアーリから出て行つた。後ろから後で記憶装置をチェックするかの、なんて言葉多分聞こえていない。

『それにしても困りましたねえ。レンジャーにとってライフルは彼氏。それを壊すなんて…』

そう言いながら顎に手を当て考えているリサさん。

いやあ、幾ら銃が好きって言っても彼氏とは思えないです。と言う

か現状男の彼氏を作るなんて無理。

『…あつ、そうだ。貴女ー』

「ユウナです」

『ユウナ、リサと一緒に武器屋に行きませんか？』

さつきみたいな語尾が上がるような話し方では無く真面目な話し方に少し驚く。

「は、はい。ですがー」

『それなら行きましょう。貴女ーユウナは光る』

ビシツとトンガっている指を俺に差しながら言う。

若干怖かったのは内緒。

「光る？頭…？」

怖がりながらも自分の頭を触りーまだ髪の毛がある事を確認する。

『キャストになればその怖さともおさらばできますよ。その代わりにデータを無くしますが』

そう言うリサさんの目は何処か遠い所を見ていたような気がする。

又もや、リサさんの肩に担がれ、足を改造したセミキャスト及びフルキャスト特有のホバー移動に少し心が踊りながらもアークス製武器では無い第三者製の武器を扱う店に来た。

『ここはここは！R.C.S.O.P製の小火器を扱ってますよお』

「R.C.S.O.P製…？それはどんなー」

武器なのか、と聞こうとしたら体を掴まれ米俵を持つかの如く俺を背負い店の中に入った。

「…いらつしやいーあぁ、リサさんですか。あれ？リサさんが同業者を連れてくるなんて珍しい」

『どもどもお。そうなんですすよねえ。この子に一丁、ライフルを見繕って頂戴。私が払うー』

「いえいえ！それならばリサさんには新型のライフルの試射をお願い

したいのですが…」

『…そのライフルは何処に?』

「此方にありますよ。試射して行ってください」

『分かりました。ユウナさんは適当に欲しいものを見つけてくださいね?』

そう言うとりサさんは奥に消えて行く。続いて店員が店をクロージズにしてリサさんの後について行く。

「そうだ。好きなライフルを持って此方にくれば試射出来ますので。お好きにどうぞ」

そう言い店の中にポツンと一人になった俺。周りには数多の銃器が置いてある。

手に取れるもんはーいや、両手で取れる物は全て取り奥の射撃場に向かう。

その中になんか凄いやーブルパップのライフルが合った。

何だこいつは。ライフルーにしてはなんか色々形が可笑しいぞ。ゲテモノ粹か?

そのライフルも持ち奥に向かう。

『あらあら?それはそれは!R. C. S. o. P製のビームライフルではありませんか』

「えっ?ビーム?マガジン付いているの?」

そう聞くとリサさんは待ってましたと言わんばかりに俺に目のフォーカスを合わせて話す。

『そのライフルはですね?Beam driven tactics
Advanced bullpapped rifle Mod
e l l typeの略でしてねー』

そう店員が言うとは何処からともなくマグがやってきてホログラムを空中に映し出す。

「リサさんの説明は長いよ。それは新世代のライフルね。今までのライフルはトリガーを引くとハンマーが落ちてファイアリングピノー撃針って言うパーツを押すの。そうすると弾丸の後ろの火薬

のエネルギーでバレルの中を飛んでいくのーここまで分かる？」

えっと、トリガーを引くとハンマーが外れてファイアリングピンが押されて弾丸が発射されるーよし、何となくわかった気がする。

「……ええ、何となくは」

「このビームライフルはね？トリガーを引くとハンマーじゃなくてビームで火薬のエネルギーの代わりに得るのよ」

「……えっ？」

「お陰で銃特有のうるさい音も無いわ」

『私としては銃の五月蠅さも銃の特徴だと思っただけだね』

そう言いながらもリサしんは射撃体勢を崩さず只管銃のテストをしている。

『取り敢えず撃つてみたらどう？撃つてみないとわからない事もあるから』

言われる通りにリサさんの隣に陣取る。

「……マグは此処で…セーフティは…どこ？」

マガジンはまだ刺さない。この銃のことを知らなさすぎるからな。

そう言い銃を見ていと店員が言う。

「セーフティはトリガー前に有りますよ？」

そう言う店員ートリガー前？

よく見ると良くエアースソフトガンであるようなポッチ、と言うのだろうか？それが有った。

「強度的にどうなのよこれ」

「強度的にはスナイパーライフルでそこを横から撃たれても壊れない程度には」

「そのスナイパー凄いな。一体誰なんだ？」

『えへへへ…そんなに褒めても何も出ませんよ？』

「隣のリサさんです」

「……」

口では嬉しがりながらも顔は全く笑っていない。超怖い。

『何もそれ程までに怖がらなくても。取って食うつもりは……』

今まで前を見ていたリサさんが此方を見て止まる。

「…食うつもりは…?」

『今は無い、ですかねえ?』

そう言い前に視線を戻すリサさん。

い、今は、ねえ…こええ!怖いよ…この人!

「リサさん、弄るのはその辺にして…どうですか?そのレーザーライフルは」

そういう間にセーフティを外し奥の方にある的レーザーカーのホログラムを撃つてみる。

カチリ、とトリガーを1度引くとビュン、と言う音と共にダーカーに当たるー何というか…バッテリー駆動のエアガン撃っているような感覚だな。

今度はトリガーを引きつぱなしにする。

ビュンビュンビュン、と連続した音と共にダーカーに当たる。

「なんか…違うな」

確かに反動が無いのはいい。だがビジュアルがこれでは無いなあ…。

ビームをテーブルに置きマガジンを外し、セーフティを掛ける。

『射撃精度は良好、弾速もレーザーの特有の速さーですがこの長さは少し失点ですね?私みたいな狙撃突撃継続射撃その他諸々出来る人なら兎も角、一点集中のスナイパーとしては中々、ですね』

「有難うございます。彼も喜ぶでしょう」

撃ち終わり射撃場の椅子に座りリサさんが終わるのを待つ。

『これなら売れるでしょう。弾丸は?』

「今の性能で行けば新型フォトン弾を使おうかと」

『新型フォトン弾、ね…それは全アークスのフォトンで扱えるように出来るかしら?』

「…中々無理を仰る。まあ、やってみましょう」

そう言うとりサさんの持つライフルはー照準器が銃本体に格納された。

なにあれかっけえ!

ライフルには意味無いけど超かっけえ!

その視線を感じたのかりサさんは此方に言う。

『撃ってみますか? 良いですよね?』

「ええーどうぞぞ」

リサさんからライフルーレーザーライフルを渡されてトリガーを引いてみる。カチリ、と引くとー。

「んっ?」

『あら?』

「...」

バレルから弾が出ることは無い。

「あれ? 可笑しいですね?」

『:やはりそちらの言う新型フォトン弾が合わないのでは?』

「それも有り得ますね:少し持ち帰って調べてみます」

『これを機に実体弾の物も作ってくださいね!』

そう言う上ー二階に上がっていく店員。

『さて:別のお店に向かいますようか』

そう言うから試射したライフルを片付けようとするとりサさんからそのままでもいい、と止められる。なんでもさっきの店員、試射した奴含め整備したり調整したりするのが好きだとかなんとか。

『私が言うのもなんですが、変わった人ですよ』

私ほどでは無いですがね、と言いつこの店から出て行く。

『ほら、ユウナも行きますよ! 次は定番のーユウナの使っているライフルとマガジンの互換のあるアークス製の武器屋に行きますよ!』

そしてまた担がれて次の店に向かうことになった。

54 話目

『さてさて！お次に来たのが此処！A. C. i n sを多く扱うお店！その名もー』

またリサさんに抱えられ連れてこられたのは此処ー。

「ーペアーリじゃん」

『まあ、そう言わずに。ああ見えてジグはアークス製、その他製の武器を直せてしまうとても凄いキャストなんですよ？』

「…なんでここに？ジグさんがアークス製重火器を作っているとは思えーなくは無いな」

と云うか思っただけで最初に来た時に紹介すれば良かったんじゃ…？

『はい、大体のアークス製、その他製の武器はジグに性能とスケッチを依頼してプロトタイプを完成させてもらうのです。そこから削ったリ付けたりしたりして我々アークスの手に渡る、って訳です』

「それじゃ最初にここに来た時と変わらないじゃん…」

と云うことはアークス製小火器ーソードナックルその他諸々含めてジグさんが作って、いらぬもの削って量産するのか。

「ん？そーいやジグさん作る気力がないって」

『そうなんです。そこで！少し違う貴女ーユウナに何か意欲になるものを言っただけです！』

少し違う…そりゃビーストだからな。風呂場とかで頭洗う時クツソ怠いんだよなあ…入ったら振っただけじゃ水落ちないしーはっ！まてよ！コレを防ぐ奴を提案すればメセタがー。

『ビーストはニューマン以上に居ないんですから提案しても赤字ですよ…それにミミの形状も違うわけですよ』

「ちよ、リサさん、思考まで読まないで！」

『フルキャストになれば此の位お手の物ですよ？』

取り敢えず、はいりましょー！と言いまだ店の中に。

ー

『おお、またあつたな』

『はいはい、なんとなんと！ユウナがジグさんに新しい武器の想像を言ってくれるそうですよ！』

「は☒」

『なんと！それは本当か！』

店の外で言われた事を本当に言いやがった。よおし、考えろ、この船団のライフルで地球にあつてこつちには無いライフルをー。

そこで考えてハツと思う。地球で考えられて世に出なかつたライフル。あるじゃないか。

「じ、ジグさんー複合ライフル、なんてどうでしょうか？」

複合ライフル、お米の国やお隣、果ては寒い国までが開発に精を出しーそして、開発費に見合わないとパージしたロマン銃。

『複合ライフル、じゃと？』

「ええ、例えば私達レンジャーの主兵装のライフルのアサルトモデルにグレネードランチャーを付けたりしますがー弾が一定の放射線に飛ぶため、障害物の後ろにいる敵を倒せない時があるのです」

『ふむん、それで？』

「ライフルに簡単な火器管制装置を組み込み障害物の上でグレネードを炸裂させたり、サイト内に覗けば敵の距離、風速等で計算されどの距離まで貫通するとかを表示するような機能を付けたり…どうですか？」

『うーん、リサ的には要らないですかね？全部出来ますし』

流石にレンジャー先生は格が違った。

『おいおい、リサ。アークスの、特にレンジャーをリサと同等にしてはいかんよ。只でさえレンジャーを志す者はリサを見てクラスを変えらる者が多いのだからな。しかし火器管制装置、か…』

「どうですか？」

『…少しやってみるか？』

「お願いします！」

『良かったですねえ！ー所でユウナ？貴女の武器は如何する？』

「…ジグさん、何かありませんか？」

『そう言えばお主、レンジャーだよな?』

「ええ、そうです」

『なら…』

そう言い席を外し奥に行くジグさん。数分すると肩にデカイランチャーを背負ってやって来た。

『これなんてどうだ?ワシが始めて作ったランチャーじゃ。口径は40ミリDHEETERMPをマガジン内に9発。弾の重さは2キロじゃな』

「ほ、本体は…?」

『簡単に使えるように、重さはこう見えて10キロもないぞ?ほれ、持ってみろ』

言われるがまま持ってみる。一以上に軽い。5キロあるかどうか、かな?

『それにマガジンを刺してーああ、大丈夫じゃ、ダミーカート、訓練弾じゃよ』

向かって右側に刺してーああ、確かに見た目より遥かに軽いわ。

『どうじゃ?使うならその弾とマガジンを急いで作るが?』

「えっ?新規で作るんですか?それなら要らないですよ!」

『なあに、タダじゃよ。倉庫で埃をかぶってたんじゃ、誰かに使ってもらわないと』

そこでふと思った。このグレネードを複合ライフルに入れば完璧じゃね?と。

「ジグさん、ならこのグレネードを複合ライフルに付けてください。この弾種なら真つ直ぐ飛びますし」

『それは良いの!よし!今すぐ取り掛かるから2日3日待ってくれ!お主の使ってる弾のサイズは?』

「確か…7.62ミリだったかと。一だったらジグさん、機関部をユニット化してどっちにも対応すれば行けるのでは?」

『良いぞ!冴えてきた!最高じゃ!』

そう言うジグは世話無しなく動き出た。

『ジグがここまでなるのは何十年振りでしょうねえ…こうなっては何

も効きませんね。帰りましようか?』

ちよつと待つて。リサさんつて何歳なんだ?

あの後またまたーとなる訳ではなく、普通にリサさんとアークスカードを交換して別れる。

その後何時ものマトイとポイントの待つ部屋ールームに向かいドアを開けた。

「あつーいふふつ、お帰りなさい!」

「ああ、ただいま帰ったーこの匂い:~?」

1日ぶりに部屋に帰るとなんとマトイがエプロンをしてキッチンに立っていた。

「うん、そろそろ帰ってくるつてフェリアさんから連絡が来たから料理を作ろうつて」

フェリア:ああ、マトイがお世話になったメデイカルセンターの人か!

「そうかそうか、マトイも料理ーんつ?」

なんでメデイカルセンターの人が俺のクエストの内容知ってんだ?

「なんでユウナちゃんの内容がフェリアさんに分かるかつて?」

「お、おう:~なんで分かった?」

「ユウナちゃん、ミミと尻尾で丸分り!だよ!」

いやいや、分かっても内容まではわからないと思うんだがなあ:~。

「えつと、それでね?フェリアさんてああ見えてメデイカルセンターの偉い人らしいんだつて。それで色々とコネ?つて言うのが合つてそれで教えてくれたの!」

そう言やメデイカルセンターつてアークスが一番近い病院だからなあ:~仲良くしないとアレなのか。

「そうか:~」

「うん!ーいよし!出来たよ!ユウナも座つて!」

「う、うん」

言われるがままテーブルに座る。よく見るとポイントもエプロン

をしている。

「よし！これで完成、だね！」

テーブルには唐揚げ、ポテトサラダ、ポテトがある。勿論白米にお味噌汁（っぽい）ものだ。

「それじゃ、手を合わせて」

「頂きます」

「頂きます。所でユウナちゃん？着ていた戦闘服は？」

「アレか？溶けたんだか破けたんだから分からないからナノトランサーに入ってるーはむっ」

言いながらマトイ作の唐揚げを口に入れる。

美味しい。サクサクして、なんか中身がやわらかい。

「良かった良かった。美味しい？」

「すごく美味しい」

隣を見るとポイントも唐揚げを食べている。

「…ねえ？ユウナ？」

「んあ？」

「クエストに向かったら…必ず、必ず帰ってきてね？」

「無理だったらテレポーター使って帰るわ」

「うん、お願いね？」

そんなことを言っているマトイをポイントが小声で、これはプロポーズでは？と言っている。

女の子同士は結婚出来ないから問題ーえっ？出来るの☒

55話目

その後は特に何もなくそのまま寝ることに。

因みに寝る時、俺のベッドにマトイが紛れ込んできてた事が翌日の朝に分かった。

翌日、マトイの抱きしめで目が覚めて、ふと昨日風呂に入ってたなかつたな、と思い出すーキャンシップで入っただろうだって？風呂に入っていないからノーカんだノーカウント。

研修服を脱ぎ捨て下着姿になり風呂を目指す。

どうにかして髪の毛を洗い終わり風呂に入って彼此一時間弱。そろそろ出るかと思いい立ち上がるー今更だが胸の間にお湯が溜まったぞ：一体どうなってんだコレ。

そのまま外に出て上から流れる温風で髪の毛を乾かし、服を：服を……。

「……」

外に出かけられるような服がナノトランサーには無かった。

裸のまま自室ーマトイが寝ているところに行きタンスを開ける。

「服ーソレっぽいのはアレしか無いな……」

そこに掛かっているのはかつて着ていたヘレティッククロードと呼ばれている、男性用、の戦闘服が掛かっている。

「……キツくてな……」

POS（ネット）で戦闘服ー当初はアークスから支給されたサウザンドリムと言われる戦闘服を着ていたが：余りにも露出が多く、正面から股間部の足、胸の内側、そして肩と脇が見えると言うアークスの戦闘服は痴女専用、と言う考えが分かった戦闘服である。

更に驚いたのがその防御性能で、戦闘服を着る人にも寄るらしいが、10ミリから20ミリ前後の貫通力のある弾を（反動含め）完全

無効化、斬撃もほぼほぼ無効化。外見合わずキチスペックである。

それでもフォトンが纏わせられなければ、殆どの女子用の戦闘服は只の痴女服なんですがね。おかしいと思わなかった…？

反対に男性用の戦闘服はその逆で少ないフォトンで急所を守り、他を通常のリーフォトンを使わない技術で守っている。

その為、戦闘服は露出を無くし防御性能高めてリー高めているのか？コレも少し疑問が残る。

まあその、露出が無いのはいい事なのでPOSで購入して来てみたけど…胸がやはり酷かった。

仕方なく上は1番大きいのを買い、下は160台で着れる奴…予備も合わせて4着買った。

男性用とは言え、そこは戦闘服。高かったのは今にも思い出す。そう思いながらもその服に手をかけてその戦闘服に着替える。

「…：やっぱり露出に慣れるもんじゃないな」

胸の所が相変わらずキツイものの他は問題ない。

マトイに少し出かける、と言いゲートエリアに向かう。

ゲートエリアで何も考えず椅子に座っていると1人の管制官が近づいて来た。

「こんにちは。貴女がユウナさん、ですね？」

久し振りに知らない人から声をかけられ少し声が詰まる。

「ええ…えつと、どちら様で？」

「申し遅れました。私、アークス管制官のマリーネと申します。以後お見知りおきを」

そう言いお辞儀をする管制官…マリーネと言った女性。

「は、はあ…それで何かご用ですか？」

「ええ、少し暇そうに見えたので…依頼を受けてみませんか？」

人を目の前にして暇とは…実際そうだけど。

「…依頼？」

「はい。依頼主は脚部を破損して修理に出しているセミキャスト。こ

の依頼を受けるのならば本人にも言っておきますが…」

お手伝いか…なんかだるそうだしなあ…どうすつかなあ…。いや、お金…メセタは出るのか？

「報酬は…？」

「それは本人に聞いてくださいね？依頼主はショップエリアの噴水前に居る様に伝えておきますから」

そう言うのと踵を返しカウンターに戻るマリーネさん。まだ聞きたい事が…。

「ちよ、まあ、まだ受けるとは…」

「それでは」

そう片手を上げてカウンターに向かって歩いていくマリーネさん。別にいつでも聞けるから別に良いか。

「いっちったよ…怠いけど…」

会いに行くだけ行くか？

場所は変わりショップエリア。あの管制官が言った通りに噴水前で待機する。

「あ…あのっ！貴女…アークス、ですよね？」

すると何処からともなく車椅子に乗った俺と同じくらいの少女…いや、腕を見るにセミキヤストか。しかも両腕。

「はい。一応アークスですよ？」

初めての人に対してもちやんと挨拶できているだろうか？アフィンやマトイ、パティ姉妹はその場のノリで流された感じだったけど…。

「もしかしなくても、依頼を受けてくれたユウナさん？あ、ありがとうございますー！」

そう言う俺の名前を言うセミキヤスト。いつ俺の名前を☒

「い、いつおー私の名前を？」

「はい！管制官が教えてくれました！」

「そうか…」

そう言やアークスって実名登録だからその時にバレるのか。

「それで、依頼の話をする前に、ちよつと良いですか？」
「んっ？良いぞ？」

そう言うのと、それでは立ち話もなんですし、と言い近くのベンチに腰をかける。

「惑星リリーパで小さな影を見かけた事、ありませんか？影が何処にいる、とか知りませんか？」

「いや…お、私が行ったのは地下だったからなあ…多分無いね」

「…ああ、すみません。見た事無い、ですよね…」

「…すまないね」

「いえ…変な質問でした。発見報告はあっても、何処に居るかはまだ誰も分からない事なのに…」

黙々と話を続けるセミキャスト。

「…あ、申し遅れました。私、フリーエといいます。コレでも一応：アークスなんです」

…ここに来てやつと隣に座るこのセミキャストがフリーエ、と言う名前であることが分かる。

「取り敢えず、何処かに座りましょう。立っての話…俺だけか。それもなんですし」

「そうですね」

……
噴水近くにあるベンチに座り話を続ける。フリーエさんはその隣に車椅子を止める。

「それで、リリーパに居る小さな影の話って聞いた事、ありませんか？時々噂になつているんです」

「ああ…すまん、無いわ。その影に何かされたのか？」

「いえ、そうでは無くて。その小さな影に私、この前命を救われたんです……と…」
「…と…」

「と言うことは知的生物か…？」

「…そう言やこんな話どこかで…」

「砂漠で探索している最中に建築物が倒れて来て、下敷きになってしまつて、ああ、もうダメだつて思つて…意識が朦朧とする中、その影

が助けてくれて…」

その影が直接救ってくれた、ってわけでは無いのね。

「その後、いつのまにか救難信号が出ていて、サーレクスに救ってもらって、戻ってこれたのですが…恩人にお礼も言えなかったので」

「だからーだからっ！私からの依頼は！たったひとつ！です！」

そう言いブンブン手を振るフリーエさん。キャストの腕でそれをやられると空気を切る音が結構聞こえる。

「私の代わりに、あの小さな影を探して貰えないでしょうか！」

…黒い影…影…影…そうだ！確かアレは機体を奪取した時にサーレクス内でパティエンティアにそんな話を聞かされた様な気が…。

「本当は自分で行きたいのですが…ご覧の通り、脚部の修理で行けないものでして…」

そこで視点をフリーエに合わすと、フリーエは視線を足に移すー何かジョイントがある。

「私の話を信じる、信じないはどちらでも良いです！報酬も用意しますー！」

「アレが夢だったのか、真実なのか。それだけでもハッキリさせたくて…」

「直ぐに！って訳ではありません。お暇な時で良いので…よろしくお願ひしますー！」

「まあ、暇な時やってみましょう」

「本当ですか！有難うございます！その時に脚部が直っていれば連絡を下さいー！」

コレをどうぞ、とフリーエさんがアークスカードを渡してくる。コレでゲートエリアかショップエリアに入れば直ぐにこれるはずだ。

「因みに私のクラスはレンジャーですが…ユウナさんは？」

「俺？俺も同じくレンジャーー最も、今はその武器が無くて作ってもらっている最中だけど」

「そうなんですか！良かった…コレでハンターとかファイターだったら、誤射してしまう可能性があったので…」

「ご、誤射？」

「ええ、私の武器はランチャーなので爆発範囲が…」

「ああ…殆ど榴弾、だっけ？」

「榴弾と一応DAPDSのカートリッジを何個か」

「…まあ、ダークファルスとは遭遇しないでしょ」

「ええ！遭遇したら私みたいなアークスは死んでしまいますからね！」

…そのダークファルスらしき奴と二回も戦闘したとか言えないわ…正直あの時も死ぬかと思ったわ。

「…まあ、俺もライフル調達し終わったら連絡するわ。マグに直接で良い？」

「はい…いつでもどうぞ！」

それでは、と言いフリーエさんは車椅子を動かしベンチから離れていく。

さて、ジグさんの所に行つて武器の状況でも見に行こうかな？

「あつ、コレ以外の戦闘服も見つけないと」

あれ？もしかして買う物結構ある？

56 話目

それから2日ほどするとジグさんから宅配便が届いた。宛先は勿論俺。

その宅配便のラベルには「銃器、取扱い注意」の文字が。

此処（オラクル船団）では銃器すら宅配なのか…。

嚴重に梱包してある外の段ボールを外すと、中にはガンケースが。ガンケースを取り出し入ってすぐのリビングの作業台にガンケースを置く。

「よっ…」

手前にある鍵を外しガンケースを開けるとー。

「ーぶ、ブルパップ☒バレルが二本？なんだこれ？」

なんだかよく分からないライフルが出て来た。

ライフルを手に取り構えるーフムン、中々、か？

マガジンはどうやら最初に使っていたーと言うか先輩のライフルもそうだがーマガジンが使えるな。地味にありがたい。

中に何も入っていない事を確認したマガジンを手に取りブルパップライフルに入れる。

思うがブルパップってマガジン入れるの少し面倒だな、と思った。

俗に言う一般的なライフルー米製のアーマライトのAR15とかC o i t のM4とかグリップより前にマガジンがあるタイプーだとマガジンを交換する時マグキャッチ押しして、落としてマガジンを入れる、で終わるけど、ブルパップだと落とす、マガジンがちやんと入るかどうか銃本体を動かして入れる、だから敵に銃身を向け続けられないんだ。

一度エアーツフトガンで見ずに交換出来るかをやってみただけ…関係ない所にガンガン当たってマガジンにキズが付いて終わった…でもI W I のブルパップなんだかんと言って使いやすかった。

ライフルを持ってマガジンを入れて構えるーこれ結構しつくり

こないな。

元々が普通のライフルだったから慣れるのは時間が掛かるけど…。念の為コッキングレバーを操作して薬室内に弾が無いからダストカバーがーコッキングレバー…レバー…。

「レバーねえじゃん！」

薬室内に弾が残っていればそれを使って再装填できるけど…。

「取説、取説…」

ガンケースの端に置いてあった取扱説明書ーと言うよりジグさんの殴り書きを読む。

「マガジンに装填された弾は上の方から出る、と。ランチャーはマガジン式、40ミリD・HEを3発、下のバレルはーアークス総合技術研究所、その開発部から新型弾頭のデータが来たからそれを使えるようにー」

そう言いガンケースの二段目を見るとー。

「ーこれ戦車に使われるダーツやん！」

バレルを見ると一つだけのシリンダーになっていてそれにこの弾ーAPFSDSを入れられるようになってる。

「ジグさんはなんてものをーんっ？」

説明書には続きがあり、コレで装甲厚の硬い新種のダーカーが来ても撃ち抜けるはず、との事。但しまだ量産体制に入っていないから高い、と。

お試し用として30発ほど入れて置いた。コレで実戦運用を頼む。との事だった。

因みにマガジンを指すと自動で薬室内に入れるらしい。

「ー只今戻りーあれ？どうしましたか？」

ガチャ、と自動ドアではない音が鳴りヒューマンの（一応）俺のサポートパートナー、ポイントが出てきた。

「ポイントか。いきなりで悪いが、予備で40ミリのランチャー用の弾、持ってなかったか？」

「私はライフル使いですよ？ユウナさんと同じ」

「…だよな…」

「そもそも私のライフルにはランチャー付いてませんし」

仕方なく何時ものPOSにて頼む事に。到着は2日後との事。

作業台脇にある金庫から弾とマガジンを取り出す。いつだか忘れてたか久し振りの弾込めである。

リリーパは機甲種ーの四脚群ーが多い。

前回と同じようにAPー徹甲弾主体のマガジンにするかーいや、初めての銃だし、3発に1発曳光徹甲弾を入れておくか。

ダブルカラムのマガジンに1発づつ入れていく。

「ユウナさん。メセタも余裕のある事ですし、オートスピードローラーを購入してみては？」

「…そうだな、幾らくらいだ？」

「えっとお待ちを」

オートスピードローラー、確かそれは、空のマガジンを下の下に置いておけば機械が勝手に弾を込めてくれる奴だったか？

普通のレンジャーだと殆どがマガジンを戦闘中域にポイ捨てしているため戦闘毎に購入するレンジャーも多い。

「えっと…12万メセタ、ですね…」

「…まあ、ちと高いな」

「で、でもこれ静音製が高いらしいですよ…」

「…サイズは？」

「ーぎつと部屋縦横3マス位ですね」

そう言いポイントが作業台の隣に来る。マグを使いサイズを測り、置けると言うことが分かった。

「まあ、買うか？それなりに有るし」

「分かりました。購入ですね？」

「俺のところから落とすようにしてくれよ？ーああ、それと40ミリランチャーの弾をー」

「分かりましたーはい。購入完了です」

明日には着くようですよ、と言いソファに座りテレビを見始める。
「…遅かったか」

「いえ、40ミリのD・HE弾ですね？それも注文済み——24発で良いですか？」

「まあ、それだけあれば足りるだろう」

「そう言い弾込めに戻る。」

それから数時間後。ポイントが突然立ち上がる。

「ああ☒寝てしまいました！ユウナさん！今何時ですか☒」

「どうやら寝ていたらしい。部屋に掛けてある時計には——」

「んあ？ええ……3——いや、2時か、14：21分だ」

「そう言う」と自室に向かい着替え始めた。

「やばい！オペレーターの仕事に遅れる！」

「弁当はキッチンにあるぞ」

「そう言いキッチンの方を指で指す。」

「有難うございます！行ってきます！」

「おういつてら」

「そう言いアークス管制官の制服を着て仕事に向かうポイント。」

フリーエに2日後あたりにリリーパに出掛けようとメールを送る。

直ぐに返信が来て、『わかりました！此方も脚部の修理が終わった

ので出れます！』との事だ。

「よろしく頼む、と送って終わり。」

銃本体の照準器を弄ってちゃんとピントが合うようにする。

本来ならば照準と弾の着弾点が同じになるゼロインをやりたいが

…外に出る気力が無いためスルーで。

銃本体に油を塗ったりしているとふと思った。

「…俺よりポイントの方が有能じゃね？」

否定する者は居ない。

—————

それから暫くしてマトイが帰ってきた。何をしていたのかを聞いたら、フィリアさんにどうしたらアークスになれるかを聞いていたらしい。

「そしたらね？アークスになるには時間がかかるし記憶も取り戻さないといつて言つて相手にしてくれなかつたの」

「…まあ、実際記憶を取り戻さなきゃ何とも言えんからなあ…」

ブンブン怒るマトイを宥める為に仕方なくスナック菓子を作ることに。

「…マトイ、フライドポテト、食べるか？」

「うん。ユウナの作るものなら何でも食べるよ？」

よしそれじゃあ、と言う時にまたしてもインターホンが鳴る。

「はい。どちら様ですか？」

マトイが小走りで玄関に向かう。俺はキッチンに向かい冷蔵庫から冷凍フライドポテトを取り出す。そうだな、300g位やればー。

そう思った時にあの声が響く。

「おう！元気か！」

「ごめんなさい、ユウナちゃん？」

「ユウナちゃん！ゼノさんとエコーさんが来たよ！」

そう言いリビングに現れたのは赤髪のゼノさんと薄い金髪？のエコーさんだった。

「あつ、そうだ。はいコレ」

そう言うとエコーさんがマトイに袋を渡す。

「エコーさん？コレは？」

「お土産。ほら。女の子は甘い物が好きでしょ？」

…あれ？甘いものって有ったっけ？

そう言い冷蔵庫を探すも特にそれらしいものはない。

「おつ？この匂いーポテトかな？」

「ゼノさん達も食べていきますか？」

「おう！」

200gじゃ足りないな。600gも有れば足りるかな？

数分して出来上がりリビングに持っていく。

ゼノさんとは今の現状を少し話した。ゼノさんからはゲツテムさんとの現状を聞いた。

「こうしてゲツテムの野郎と笑いながらも戦えるのはある意味あの時、メルフォンシーナさんを助けてくれた師匠のお陰、何だよなあ」
そうゼノさんが言うのと隣に座るエコーさんがまたか、と言う顔をした。

「えっと、その師匠さん？って言うのは？」

疑問に思った事をマトイが先に聞いてくれた。

「まあ、俺が勝手に言ってるだけなんだけどな。師匠は凄かったぞ。今試験運用中のブレイバーが使うカタナって言う短いソードとアサルトライフル、タリスを使ってメルフォンシーナさんを守ってくれたんだ！」

「でも肝心な名前を聞き忘れてるんだよね？」

「し、仕方ないだろ…それに、あんな昔から三つもフォトンを纏わせて戦っていたんだ。相当なクエストもこなしている筈。1アークスーいや、あの当時は士官か。名前を覚えてくれる訳ないさ」

まあ、一時期は師匠に憧れてソードとアサルトライフルの二つ持ちをやってみたけどダメだったわ！はっひっは！
と笑いながらゼノさんは言う。

それから三時間ほどしてゼノさん達は帰った。

「さて。2日後の準備をするか」

「ユウナちゃんまた出撃？」

「ああ。直ぐ帰れると思うよ」

「まあ、無事に帰ってきてね？」

「おうーんっ？これフラグ？」

「ふらぐ？」

「まあ、死なないし大事だろ」

今日の夜はナポリタンにしようか、とマトイに言い、一緒に料理を手伝って貰った。

夜は更けていく。

57 話目

あれから家にオートスपीドローラー―確か名称はオートロードシステム、自動装填装置らしい。戦車の装置に同名の物があつたような…？

地味に優秀なのが拳銃弾からランチャー用の弾まで幅広く対応している事だった。

装填されているマガジンをナノトランサーとバックパックに入れる。

ついでに最近発売された、グラビティグレネードとフラッシュバナー―此処ではスタングレネードを腰に付ける。

フラッシュバンは強烈な光と音で視力を一時的に落とすとか何とか…。まあ機甲種には効かないかな？

グラビティグレネードは投げた場所半径2メートルの敵を吸い込む、だけの兵器である。名前に重力で潰すのかと思った。

ちなみにこれらは量産体制に入っているのでとくに数百から数千メセタで買える。

新品の上下2連のダブルバレルの―確かジグさん曰くヴィダブラスターだっけか？を腰に付ける。

ああ、そうだ。グレネードを買うついでにこの背中に付いているバックパッカー―確かサイバ―バックパックと言う名前らしいが、何でもこれ、ナノトランサーが3個入っているんだ。そのお陰で―。

いや、まずはナノトランサーの事を簡単に言わなければいけないな。

まずナノトランサーは、何でも圧縮して収納出来る装置なんだ。なのだけど入れられる物には限りがある。

例えば俺が飲んで不味いと言った何時ぞやのモノメイト。戦闘服

に付いているナノトランサーには1リットル10個、このバックパックには30個まで入るが、それ以上になると入れられない。

他にもナノトランサーにはマガジンが10個入る。バックパックには50個、正直行持久戦になれば1・500発でも心ともない気がしなくも無い。

救いはマガジンは20連、30連とか100連など装弾数が違おうと別扱いになることか。

テープでマガジン二つに巻き付けたら別扱いになるのだろうか？

因みにナノトランサーの外、つまりバックパック内に出しておかない限り重量が存在しないから、恐ろしく軽いぞ、このバックパック。

バックパックを戦闘服のナノトランサーに連結させてーよし。

念の為ベルトも通してー。

これで外れることはないだろう。

腕のデバイスにちゃんとバックパックがリンクされていることを確認してーよし。

「よしーフリーエさん？聞こえますか？」

耳に付いているヘッドセットを触りフリーエさんと呼ぶ。

『ーはい！ゲートエリアにて待機しています！』

元気のある声が聞こえてくる。

「今から向かうから、リリーパ砂漠の探索任務、行こう」

『はいー』

リリーパの砂漠に降り立った俺とフリーエ。熱い風が俺とフリーエさんを出迎える。

「さて、それでフリーエさんはどこか心当たりとかありますか？」

「いいえ、全然無いです。一応私が倒れた所は覚えてますが…」

「取り敢えずそこに行ってみましょう。何もしないで観光するよりはマシでしょうし」

「そうですね」

そう言い俺は腰からライフルを、フリーエさんは手元のデバイスを弄ってランチャーを空間に出現させる。

「へえ…これがランチャーか…」

「ええ！フォトンを使って軽量化した新モデルです！ーそう言えばユウナさんのライフルも中々見ない形ですね？カスタムメイドですか？」

「まあ、そんな感じですかね？」

「少し触ってみても？」

「ええ、どうぞ」

ライフルをフリーエさんに平行に手渡す。

「バレルが2本になっていてマガジンは1つ、下部のランチャーもマガジン式になってるんですかーあつ！下のバレルの所にシリンダーがありますね！それにランチャーから照準器にコードが伸びていてーこれもしかして、敵の真上で爆発とか…？」

「多分できると思いますよ？そこら辺はジグさんに聞かないと分かりませんけど…」

ジグ、と言う名前を聞いて目を見開くフリーエさん。

「じ、ジグさんてあの、創世器を作った、あの☒」

「え、ええ、そのジグさんで合ってるはず」

「と言うことは！コレが近々各メーカーから発売される☒ーあつ、これありがとうございます」

そこまでテンション上げて急に下がるのはちよつと驚いた。そんなにすごい人だったのかあのフルキャスト。

「ふ、フリーエさん？先に行きましょう？影の正体を少しでも掴まないと、ね？」

「はいー」

それからリリーパの機甲種達と何回か交戦ー何体か新型の機甲種も居たがー！した後。遂にソレは訪れた。

戦闘が終わり残骸をマグで撮影していると、りー！と言う声が小さく聴こえた。フリーエさんには聴こえなかったらしい。撮影を切り上げフリーエさん呼び銃を構えつつもその声の元に向かう。

すると崖の間をその声の正体——辺な毛むくじやらの小さな獣が二足歩行で歩くのが見て取れた。マグにも撮つてある。

「あつ！ユウナさん！あそこ、あれ！見てください！」

「あ、ああ、見た、けどあれは……」

「見ました？見えました☒今の！今度こそ、間違い無いんですよ☒」
そう言うのも、ここに来る間の戦闘時にフリーエさんが何か見えた！とか聞こえた！とかで戦闘を突然中止して

、何度機甲種からの攻撃を受けていたことやら……その都度「クラスター弾使います！」と言って殲滅していたつけ……近接だったら何度死んでいることやら……。

「私の幻覚とか、痛覚の間違いじゃない！間違いなく、そこにいたんですよ☒」

「居たな……マグにも撮つてある。後で上に上げよう」

「良かった……ユウナさんも見たのなら、間違いないです！」

少し涙を浮かべるフリーエさん。

「ちっちゃな影さん——うん、小さな人、というのが正しい見た目でしたね」

「人——人？」

俺の疑問にフリーエさんはスルーを決め込む。

「お話ししたり、お礼を言ったりは出来なかったけど……良いんです、じっくりやっていきますから」

「今は取り敢えず、居るって事が分かっただけで十分です！」

「もしかしてあの……ああ……そうだな、へんなのと接触する気か？」

「もちろん！此処からは根気とヤル気の勝負です！大丈夫！私、その2つだけは自信がありますから！」

いやそれ以前に俺たちが触つて大丈夫だとか、辺な病気とか病原菌持つてないとか色々有るだろうに……。

「本当に色々ありがとうございます！ユウナさん！」

「……まあ、こちらこそありがとう。色々とタメになった」

特にランチャー持ちとパーティ組む時は近接はダメって事がね！
そもそも今のこの狼っ娘の俺にソードとか持てんのか？帰ったら試

すか。

「そう言い帰路につく為、キャンプシップにワープする扉を探しているとフリーエさんが言う。」

「所でユウナさん。あの影の正体はやっぱり小さな人では？」

その問いに俺は

「人…人、かなあ？」

疑問は尽きない。そもそもあれは言語を喋れる知的生命体なのだろうか？文化はあるのだろうか？

まあ、そこら辺は全部上が考えるでしょう。丸投げしよう。

そう思い込むことにする。丁度テレポーターも設置出来たのでこれにて撤退。オラクル船団に帰ってアークスに報告して、終わり！

58話目

惑星リリーパから帰還後、いつもの様に自室に帰りマトイとポイントとお話をしてその日は終える。

問題はその次の日だった。

「んっ……あ……朝か」

窓から朝日が入ってくる。

布団を蹴り起きようとするとー。

「ーえ？」

丁度寝ていた所ー股間部に血のシミが出来ていた。

「……コレが俗に言う生理って奴か……」

と小声で言う。朝から気が重くなった。

そもそも生理とは。

後々Posで調べてみると、要約すると子供が産める身体になったらしい、との事。

排卵された卵子が子宮内？に到着して、妊娠しなかった場合子宮の壁と共に外に出る、との事だった。多分。

「う……ううん？」

成る程分からん状態だった。先程書いた物も合っているかどうかすら不明である。

取り敢えずこの血に濡れたベッドー因みに寝る時は下着はつけない派だーーを見る。隣で寝ているポイントにはバレないように静かに処理しなければ。

血が付いたものは落ちない、って言うのはよく聞くし……。

取り敢えず洗濯機にぶち込むか。オラクル船団の技術力を見せてもらおうか。

そう思いながらシーツを丸めて脇に抱え、リビングに続くドアを開

けると、ほぼ同じタイミングで反対側のドアーマトイの部屋のドアも開いた。

「ーえ？」

「おっ？」

そしてマトイも同じく脇にシーツを丸めて抱えている。つまりー。

「……そう言うことか。マトイのも洗おうか」

「……うん」

そう言い二人で洗濯機の所に向かったー同じ部屋内だけど。

「……言うのもなんですが、二人しておねしよはちよつと……」

遅れて起きてきたポイントがパジャマ姿で起きてきた。

おねしよでは無いんだよなあ……。

……マトイのシーツを見たら本当におねしよだったけど。

洗濯機に2つのシーツ、適当に洗剤と柔軟剤を放り込みボタンを押す。

ピツ、と言う音と共に洗濯機に水が入る。

機械音と共に中で水が渦を巻く。

「さて、どうする？」

「え？ううん……どうしやつか？」

さて、何をして1日を潰そうかと考えていた時、ポイントから提案が。

「それならユウナさん、戦闘服を買いに行つては？」

「戦闘服ーああ、そーいやあの服(ドラグニアフル)は破れたんだっけか」

「ええ、任務から帰つて来たのですからお二人で散歩ついでに戦闘服を買つて来ては？」

「……そーだな、そうするよ」

「それじゃ服を変えてくるね」

そーマトイは自室に戻り服を着替え始めた。

「……ユウナさんは？」

「俺？……何時もの戦闘服で行くさ」

「…序でにユウナさんが着る服もお願いしますね」

「…気がむけば、な」

最も、確かに戦闘服以外にも服が無いとな…。

取り敢えず適当に散策するか。

「…そうだ、ポイント、洗濯物、頼めるか？」

「オペレーターの仕事が飛び入らなくて時間が有ればやつと来ますよ」

「ありがとう」

…あれ？これポイントにバレたり…いや、女同士だしバレても関係ないだろう。

「んっ…！やっぱりは気持ちいいね」

「そうだな」

そう言いポケットに手を入れてマトイと二人で歩道を歩く。因みにマトイは私服である。いつの間に購入したんだ…？

「もお、そうやって休みの日は室内に居ようとするのは悪い事だよ？」

そう言いニツコリと笑いながら俺の前に行く。

「そうだな、気が向けば外に行こうとするよ」

そう言うのと前で笑っていたマトイが傍に来てポケットに突っ込んだ手に抱き着く。マトイの…俺ほどでは無いが大きい胸が腕に当たる。と言うか俺の胸がデカすぎるだけだが。

「ああ…マトイ、そうやって旨を押し付けるのはどうかな、と」

少し顔を赤くしながら少しづつ小さく言う。俺はまだ女性経験が無いんだよお！

「えっ？でもユウナちゃんも女の子でしょ？」

そう言いながら純粹無垢な瞳を…紅い瞳を俺に向ける。赤目つて居たんだなあ、二次元だけじゃなかったんだ。

「まあ、ああ、うん、そうだな」

それに押されて頷く俺。

上を見上げると天井に映し出される人口の空と人口太陽がある。人口的な…作り出された物の筈なのに暑く感じた。

取り敢えず服だ、戦闘服もそうだが私服も買わなくては…俺にはセンスが無いが。

この際は仕方ない、マトイに…記憶が無くても1、2ヶ月しか女の身体に付き合っていない俺よりマトイのは方がセンスがある筈…あるに違いない。

「…ああ、マトイ、俺に服を…普通に着る服を探して来てくれないか？」

「服？なんで私に？」

「いやほら…俺センスないから…なっ？」

「うん、分かった。それじゃあ服屋に行こう！」

「うお☒」

そう言い手に抱きついていた手をそのまま握り俺を引っ張って行くマトイ。

—————

「コレとかどうかな？似合うかな？」

そう言い俺にあれよこれよと服を渡してくるマトイ。全てサイズが適切なのが恐ろしい、のか？

場所は外から変わり服屋…ブティック、って言うのか？なんかそう言うマトイみたいなの如何にもって言う女の子が服を買うような所にいる…あつ、俺も外見は女だったわ。

「いや、これは…ほぼ胸の先端しか隠れてねえじ」ないか、却下だこんなブラジャー」

第1強度的に収まらない。もっと強度があつて全体を支えられるブラを持って来い。多分そんなブラは無い…。

「あつたよーブラジャー！」

そう言い試着室のカーテンを全開に開けブラジャーを渡してくる私服姿のマトイ。無論店の中には他の曲も居てその付き添いなのか居心地の悪そうな男性も二、三人ほどこいる。

何故かは知らんが顔が真っ赤になって恥ずかしくなった。そりや

そっだ、上半身だけ裸だもん。

「ちよ、マトイ！閉めて！見え、見えてる！もろバレしてるから！」

「えっ？ああ☒ごめんね！」

マトイの手からブラジャーとセット品のパンツを受け取り着替えるー尻尾が真つ直ぐ立ってるのが感覚でわかるぜ…。

手にある水色のブラジャーとパンーツなのかティなのか分からんがそれを着るー待て？

そう言や今朝…俗に言う生理だったか？が来てたよな？と言うことはこれ着たらマズくないか…？

…今回はブラジャーを試し着だけするか。帰りに戦闘服とパンティの間に挟むあの…アレだ、アレ…えっと、ナプキンだ！それを購入しなければ…。

溜息をつき思う。

女になって楽しいけど、生理と言うボスが来るのか…軽めだと良いなあ…。

そう思いながらフックを全て外し大きな胸が露わになる。

試着室には全身を写す鏡が三箇所がありそのポリユームのある胸が三箇所写る。

持ってきたブラジャーを胸に付けてさつきまで来ていたブラジャーと同じくフックを止める。

「おおお！止まった…止まったぞ。行けるか？」

取り敢えずその場でジャンプと屈伸、軽めの体操を行うー壊れる心配無し。

「マトイ？いるか？」

「なあに？」

「これ、買おう」

「他にもピンク、黒、白とか有るけど、どうする？」

「全て2セットづつだ。水色は三セット頼む」

「はいはい！」

今まではアークス支給品の黒いアーマーみたいなブラジャーだったが…これで少しは女の子らしくなれたか？

中身は野郎だが。

因みにトータル下着とブラジャーのセットを15着買ったが…お値段が三万超えて驚いた。メセタは沢山有るから良いものを…女の買い物って高いなあ…この後戦闘服を買わなくちやいけないと言
うのに。

59 話目

「さてユウナちゃん、下着も買ったことだし…他のも買おう？」

「そう言いマトイが持ってきた服…後になってメトリー・アシンの鋼、黒色…を持ってきた。」

「それを着るために今着ている戦闘服を脱ぎ、この黒い服を…。」

「…うわあ…上キツイな…下も…」

鏡に映るのはお尻にある尻尾のお陰でお尻の方だけ丸見えのパンツ。

「因みに下着には尻尾用の穴を開けてもらった。」

「ああ、もう一つ、パンツの間に応急処置としてティッシュをぶち込んでいる。これで万が一にもまだ血が出てきた場合安心…か？と言うか今思ったがアレは本当に生理だったのだろうか…？」

「コレにも開けてもらえるだろうか…？」

「ツチ：足元すーすーすんな…これだからスカート…。」

「ユウナちゃん？着替え終わった？」

「スカートは嫌だ、そう独り言を小声で言おうとしたら、マトイの声と共に試着室のカーテンが開く。あれ？これさつきもやらなかったか？」

「ちよ…マトイ…。」

「うん！大丈夫そうだね！少し雑かもしれないけど…はい。靴」

「足元に置かれたヒールでは無い面積がぺったんこの靴。俺としちゃこつちの方が良い。」

「ありがと…変なところはないか？」

「うん！パンツが丸見えなのを除けば大事だね！」

「大きめの声で店内に暴露するマトイ。さつきまでいた人含め男が二人増えているぞ」

「マトイ…ほら、男の人も居るから…ね？」

「ああ…ごめん」

「そう言いながらカーテンを閉めて顔だけを出す。」

「分かればいいよ…見えてないでしょ？」

「う、うーん？…どうだろ…」

その後はまたまたマトイが持って来た服を何着も着て着せ替え人形状態でした。後スカートはヤダ。

「お、おい、マトイ？…本当におかしくないか？変じゃないか？」

「大丈夫だって。店員さんも言っていたじゃない」

「だがな…こう、足元がー」

服を買い服屋を出るーののだがいかんせんこの服装なので周りからの目が怖い。もつと言えばこの服装は合っているのかどうか、とか…。

「ほらー！戦闘服を買いに行くんでしょ！早く行こつ！」

俺の手を取り走り出すマトイ。今の服装は最初に買ったメトリアシンにミミの間に帽子を着ている。おかしなところないよな？と言うか20を超えてこんな服装をするとは…前の母親が見たらどう言うことだか。

性別が変わった事に最初に言うか。

それから市街地をマトイと二人でぶらぶら散歩した。本当ならば戦闘服を買わなければならぬのだが…それはもう目星が付いている。

男性用のラークバルバスー男性用の奴をゲートエリアで見た時ー体に電気が走った。決してテクニクのゾンデ系を食らったわけでは無い。

後にアフィンに聞いてその戦闘服の名がラークバルバスと聞き急いでPosで調べてー上着部分だけは購入できた。インナーはどうやら女性のフォトンと合わないらしく…。

だがそうなるとうターの下、インナー部分に何を着るか、になる。

今の戦闘服のヘレティックロードの女性版ーヘレティッククインを合わせようかと考えたが…こう言う一体型の服はそれ自体が効率良くフォトンを纏えるようになってるから、他のを合わせると

防御の面でおかしくなるらしい。

「しかし…かと言って何があるかなあ…」

「うん?どうしたの?」

「新しい戦闘服のコーデ。ほら?前に見せーてないな。まあ、新しい戦闘服に合わせるインナーをどうしようかってな」

「それなら私に任せて!」

「そう言い胸に手を当て任せろと言わんばかりにドヤ顔をするマトイ。そんな顔も出来たんだ…。」

「うーん、それじゃ任そうかな?ちなみに着る予定の服はこれ」

「そう言いマグでバルバトスを検索してマトイに見せる。」

「……?」

「マグで見せるとマトイが止まる…どうしたんだ?」

「どうした?」

「うーん…これは中々難しいよ?」

「そうなのか?」

「うん、レンジエルヴェントの同じ黒なら合う、かもだけど…」

「まあ、取り敢えず言ってみよう。考えるのは付いてからでいいや。な?」

「因みに案の定マトイに乗せられ自分の戦闘服どころか自分が着たと言う理由で色々な戦闘服も買わされました。」

「まあ、予備が増えたと思えば…でも全部露出とかスカートとかなんだよなあ…。と言うかアークスの女性陣の戦闘服の物理防御力ってなんか低そう。ビジュアル的に。なんで可愛いものに限って超露出が高いんだろう。」

「ネイバークオーツとか最早下着レベルだろ、アレ。」

「そう思いながらマトイと人口太陽の照らす市街地を歩いた。」

「……ユウナとポイント(マトイ)のマイルーム……」

「買い物から帰り、ポイントに今回の成果を見せる。」

「それで買ってきた戦闘服って言うのがその…」

「ああ、ゼルシウスって言うらしい。何でもある場所の特殊装備の簡易量産化モデルだとか」

そう言い届いたラークバルバトスとマトイと一緒に買ってきたゼルシウスを着込む。ゼルシウスは兎も角、ラークバルバトスは良い。特にこのサイドアーマー。ここに何か仕込めないだろうか？

そう一人で考えているとマトイがポイントに近付き、何があつてどうなったのかを言う。

「いやねポイントちゃん、本当はレンジエルヴェントを買わせようとしたのだけど…フォトン防御係数が予定より低くなっちゃつて…そこは防具を付けて補強しようつて言ったのだけど…」

「だつたらこれを着て防具をつけたほうがいいつてな！いやあ、最初見た時は変態用かよつて思つたけど、いざ着てみると、結構しつくり来るんだわ」

「店員さん曰く戦闘服の下にこれを着込む女性アークスも少なからず居るらしいので…あとこのゼルシウスつて殆どの戦闘服に合うように調整されているらしいですよ」

「良いことを聞いたな、他の戦闘服…つてセット品しかないや」

ヘレティックに敗れたドラグニアフラル、そして最初のうちに着ていたサウザンドリムが掛けてある。

正直ヘレティック以外はあまり着たくない。サウザンドリムは時折着るが。何気にマガジンをスカート部分に入れられたりと結構便利だつたりする。さすが女性用レンジャー推奨戦闘服。

「…ラークバルバトス、でしたっけ？それを羽織っている時は兎も角、ゼルシウス単体で歩き回らないでくださいね？」

ポイントの視線がある所に向かい目を背ける。まあ、分かんなくてもない。

「わかつてるよ。流石にそこまで痴女じゃない」

「まあ、確かにユウナちゃんの胸のサイズだと、ゼルシウスの色…黒色も相まって黒インナーだよな」

「しかも厚いから胸の先っぽも見えない厚さ！しかも蒸れない！そして！」

そう言い俺はゼルシウスの足元を指す。

「この重量感！下半身ヘビーのゼルシウスに上半身ヘビーのラークバルバトスを合わせることによりー」

「最高の戦闘服が出来上がるのだああ！」

今の俺ならダークファルスも倒せーいや無理だな。

「うん、ユウナちゃん興奮するのはわかるけどそんなに尻尾振ったら危ないよ？」

「すまんなマトイ。こればかりは自分でも抑えられん」

まあ、取り敢えずマイファッションにこのコンビを登録していつでも装備できるようにナノトランサーに入れておこう。

そう言いながら部屋着ーコレも買ってきた奴ーアークス長ジャージの黒を着る。

「ーよし、やはり部屋着はジャージに限るな」

「マトイさん、ユウナさんって服に関して女子力無いですよね」

「あははは…あまりそれは言えないかなあ…」

60 話目

「すいません！今回もよろしくお願いしますね！」

そう言うセミキャストのフリーエと前回と同じこの惑星ローリリーパの砂漠エリアに来た。

「ああ、大丈夫。それで今回は？どうするの？」

「はい、今回はリリーパを調査している人達に聞き回って謎の黒い影さんが居るであろう場所を特定してきました！」

そう言い脚と腕を機械に置き換えたセミキャストだからできるであろう片手でランチャーを持ち上げ俺に敬礼する。

「おう、頼むぜ。こちらら砂漠の日差しはキツイんだ。後敬礼は無しで。楽に行きましょうや」

「そうですね。それなら日傘でもしますか？」

「それでどうやって機甲種が出てきた時に戦うんだ？」

「片手で撃てば良いんですよ？」

「俺はキャストじゃないから片手撃ちは無理かな…」

ロマンはあるが。

そもそも今持っているこのブルパップライフルーヴィダブラスターが両手運用前提の重さである。

なんと重さは6キロオーバーである。

かの英国L85以上の重さである。その分隊支援火器verのL86が6.6キロなのを考えるといやはや、重い。

m249やm60達のような軽機関銃クラスの10.0キロオーバーよりは軽いものの、それでも重い。

最もそれ相応に3連シンダー式のグレネードランチャー。

距離、風向き、湿度、重力などを勝手に考慮して等倍から4倍まで対応した可変サイト。スポットターは要らないな。

それらを動かす為に邪魔にならない所に付けられたフォトン吸収機ーこれ自体はとても短いのだがそれらを各ランチャー、サイトに伝達するコード。

サイドにはレーザー、フラッシュライト、さつき書いた風速を得る為の短な感知器。

そしてバレルは長く、俺が最初に使っていたA・C・A・R―mk5 S・R・modより短いくらいだ。

そして凄いのがなんと中間あたりから折れて上方向のレシーバー下部に格納できるのだ―エアソフトガンかな？

バレルの強度は大丈夫なのだろうか…？フォトンがなんかこう、色々してるのだろうか？

ジグさん曰くオミットしたものを各ライフル会社―確かR・C・S・o・P・ArmsとA・C・ins. 他数十社に試作銃―これと同じ物とオミットした奴を送ったとか。

そう言やポスで見たヤスミノコフって言う何か日本人みたいなメーカーの銃…アレはなんかS・F. してなかったな。時間が有れば見に言ってみるか。

「―ユーザーユーザーナーユーザーウナさん☒」

そんな事を銃を見つめながら考えていたらフリーエさんから大声で呼ばれた。いかんいかん、自分の世界に入ってしまった。

「ああ、ごめん。でなんだっけ？」

「はい。今回はこの―マップ上のこのエリアを探索してみたいと思ってます」

そう言いフリーエさんのマグに搜索範囲を中心とした円が出る。

因みにコレらの情報はジャバスポと呼ばれる電子戦機―確か正式名称はジャバスポ J F V a / S p ー 6 8 ジェット及びフォトン複合垂直離着陸／短距離離陸電子防護機って言う超長い名称―がサーレクスから離機、周囲を定期的に搜索している。

コレは調査の終わった惑星も探索が―調査中の惑星よりは頻度が落ちるが―続けられる。

と言うか最初見たときコレのことを米国のオズプレイヤー―いや、オズプレイヤーだったか。それに見えてしまうがない。

と言うか長期間の探索と飛行ならターボプロップエンジン見たいな機体にしてプロペラ付けて―いやこれオズプレイヤーじゃないか。

…まあ、それらが定期的に中高度から探索を続けてくれている。

「どうしますか？ ツーマンセルで行きますか？ それとも別行動で？」

「ああ…どう…いや、別行動で行こう。一応此処は新しい惑星だから何があるかわからないからいつでも通信に答えられようようにしよう」

「そうですね！ それでは行きましょうか！」

フリーエがマグにマップを格納させその円の中の搜索に向かった。

「…ああ、その前に終わった後の合流地点はどうする？」

「ううん、そうですね…この円の中心部なら丁度探索も探し終わって良い頃合いだと思いますよ」

そう言いフリーエは円の中心を指す…確かにそうだな。

「そうしようか。それじゃあ、また後で」

「はい！」

「居ない、か」

フリーエと分かれて早数十分。一人で周辺を銃を構えていつでも撃てるポジションにして探索している。

「そもそも黒い影って…いやまあ見たけどさ…」

そもそもなんだあのモコモコ。一応上には上げてあるし、敵対しない限り交戦不許可もあるけど…。

正直あまり可愛いとは思わなかった。と言うか今も。

時折散発的に出て来るリリーパ機甲種…確かスパルダンAやスパルガンが二機1組で現れたりする。

そう言う場合は頭頂部の水色のカメラ的な部分を撃てば各部位にダメージが蓄積されて爆発すると言う何とも杜撰な設計である。

スパルガンの方は頭頂部の左右に銃器が付いていて真正面か真後ろしか狙えない。

まあそう言う場合は向こうが気付いてなければグレネード撃って爆発させるか、後ろか前を向くのを待って頭頂部のコアにひたすらA・P・弾を撃ち込むかのどっちかだが。

まあ、今までであった奴ばつかで対処自体は正直しやすい。さて、そろそろフリーエと合流でもー。

そこに通信が入る。多分フリーエからか？向こうも終わったのだろうか？

「はあい。こちらユウナ。終わりー」

『大変です！こ、この先であの子達がダ、ダーカーに襲われています！』
「え」

『何体かは引き離したのですが、数が多くて！』

「分かった！今から向かう！」

通信の後ろでランチャーの爆発音が連鎖している。

『はい！交流は後回しです！ダーカーを倒してあの子達の安全の確保を！』

そう言いフリーエとの通信が切れる。

ラッキーな事にフリーエとの合流地点の直ぐ近くに居た。

まあ、正直二回連続でそうそう合わんだらうとゆっくり動いていたのが吉と出た。場所はそう遠くない。
ライフルを腰に付けて走り出した。

「ユウナさん！来ましたか！」

「ああ！ーいやあ、多いな、何だこのダーカーは☒」

「はい！名称はクラーダ！小さくて数も多いです！注意を！」

フリーエがランチャーで地面ごとクラーダを耕す。

なんかこのクラーダ、バツタっぽいな。

「前腕の攻撃は鋭いです！戦闘服を着ているとは言え注意！」

「了解！」

マガジンをA・P・弾からD・A・P・弾に変更。ダーカーに有効なフォトンを詰めた徹甲弾ー徹甲榴弾なのか？ある意味これは？

それを只管クラーダに向けて撃ちまくる。

ギユイ！

ギユガア！

等鳴き声を鳴きながら倒れて消えていく。

エジエクシヨンポートが開きマガジン内と薬室内に弾が無い事が音で分かった。

リリースボタンを押しながらマガジンを抜き取り、新しいマガジンを手に取るため後ろに手を回した。

「ユウナさん！後ろ！」

フリーエの声に振り返るとクラードが上に飛んで鋭い前腕を左右に広げて上から切り裂こうと飛んで来た。

「うおおお☒」

その時周囲がゆっくりになり、フリーエ、クラードがゆっくりと動いているのが分かる。

ヴィダブラスターのリロードは間に合わない。ヴィダブラスターはストック部分が短いから殴れない。ならば！

脚を高く上げてカカト落としを決める。

「おらああ!!?」

クラードの頭にカカト落としが決まりぐちゃりと潰れる。

「しゃあ！」

そのまま腰からマガジンを取り出しライフルに入れる。

ボルトをリリース。薬室に初弾装填。

「おらああ！しねええ！」

「私も行きますよ！」

後ろでフリーエのランチャーが火を吹きクラードを粉碎する。

「よっしやああ！来いよクラード！」

3連シンダー式のグレネードに手を掛けクラードの固まっている所に3発を打ち切った。

「ーよし！殺しきれたか！」

「はい！倒し切れました！奥に進みましょう！」

周囲のクラードを全滅させ奥にいとされるリリースパのモコモコが居るエリアに向かう。

「あつ、ユウナさんッ！伏せて！」

走っていったフリーエの後を追うと伏せながら奥を見ている。

フリーエの言う通りにその場に伏せてフリーエの近くに行く。

「どうした？」

「ユウナさん、今は大きな音を立てないでくれますか？」

「ほら、あそこを見てください」

そう言い右手である場所を指差すーあれは…。

「アレが、例のモコモコ、か？」

「はい。あんなに寛いでいる姿は珍しいんですよ？何時も周囲を警戒してばつかりですから…」

「ん、アレは…機甲種？」

「んっ？不味いんじゃないか？」

そう言いライフルに手を合わせサイトを覗く。いつでも撃てるようにセーフティは解除してある。

「いえ、あの子達はここの原生種だから、機甲種が襲う理由はない筈ですが…：…なんだか、様子が…？」

そう言うのと機甲種ー多分スパルダンAが原生種に向かい脚を上げた。

「危ない！にげてえ！」

フリーエが立ち上がり大声で叫ぶ。

スパルダンをサイトに捉えてトリガーを引く。

ダダダンッ！と5発ほど撃ちスパルダンは地に伏せた。

機甲種に驚いたのか俺の射撃音に驚いたのか分からないが原生種がどつかに逃げ出したーんっ？最後の一体…俺達を見なかったか？

「すいません、驚いて逃げてしまいましたね」

「いや、仕方ないさ。それより追わなくて良いのか？」

「はい！今回はここまでで良いんです。ゆっくりと、確実に！です！」

「まあ、フリーエが良いのなら良いが…」

「ユウナさん！今回も有難うございました！帰りましょう！」

そう言いフリーエがテレポーターを設置してくれた。

「…そうだな。帰ろうか」

「はい！次回もまたよろしくお願いしますね！
れ任されて」

そう言いながら二人でテレポーター内に入った。

61 話目

「えっ？アークスの探索任務？」

マイルームでゴロゴロしつつこの世界にもあったディスクトップ型のパソコンで何時もの調べ物をしている時、ポイントがオペレーターの仕事から帰ってきて、マイルームの自動ドアが開く。入って来て俺に依頼を渡してー渡して？ー来た。

「はい、何でもリリーパの砂漠エリアにて消息を絶っているアークスがちらほら居るので、その探索依頼をと」

何でそんな依頼がルーキーの俺に…そもそも俺はレンジャーだぞ？後方ー今のライフルじゃ近中に行けなくもないが、それでも後ろから撃つのが仕事だぞ？

そもそも搜索依頼って…死んでたらどうすんだよ。

「って言ったって…通信が途絶えた場所は分かるのか？それが無いとあの砂漠エリアを全部探さなきゃならんぞ」

「それについては入手済みです。後はオーダーを受けてくれるかどうかのみです」

ああ…これもう受けるしかないのか…？嫌だな…またあの暑くて日差しが強くて、暑い惑星に行かなきゃならんのか…。

「…特に何も無いんだな？」

「ええ、今の所は」

何その今の所はって。怖いんだけど。

「…分かった。出発するからクエストカウンターにオーダーを出しといてくれ」

「もう出しておりますし、ユウナさん指名にしておりますよ」

もう既に俺が受ける前提の話でやっていたのか…はあ、嫌だなあ…。

「…ok、それじゃあ行ってくる。すぐに帰ってくるからな」

「フラグではない事を祈りますね」

「おいよせ」

「ああ、それと」

「んあ?」

「これ。ジグさんと総合技術開発本部から荷物が届いてますよ」

「なんでも直ぐに使ってほしいもの、だそうです」

「:あれ?なんでポイントが持つてるんだ?」

「いえ、どうやら宛先が私宛で中身を確認したらユウナさん宛だったのよ」

「ああ:成る程ーそれって?確認したのなら中身はなんだった?」

「ええ、確かフォースとテクターの使うタリス(導具)でした。なんでも支援特化にしたとの事が中のデータにありました」

「支援特化って:そもそも俺のクラスレンジャーだぞ?テクニクなんか使えないぞ多分」

「それも兼ねてのテスト、だそうです。取り敢えず開けてみてください
い」

「言われるがままダンボールーこっちじゃダン・ボールだった
かーを開けて中身を確認する。」

「なんだこれ」

「タリスですよ。攻撃系テクニクが使えない様にロックが掛かって
いるようです」

「支援用だな。で、これをどこにつけるんだ?両手を塞がれたらライ
フル持てないぞ」

「えつと:…利き腕じゃない方にシールド見たく着けるようです。射
出口を手の甲ーそうです。手の先にリンクする様にー」

「中に入っていたデータをポイントのマグが読み込み俺とポイント
に見せる。」

「こうか?」

「バックラーって言うんだっけか?それみたいだな。防御は絶望的
だが。」

「それで、カードを中に装填してーはい、出来ました。どうですか
?」

「……軽くね？」

何もつけてない様な感覚である。それでも腕についているし触れる。

「ーえつとセットされているテクニックがシフタ、デバンド、レスタとアンティがセットされていますね」

「…え、テクニックってカードだったの？」

「いえ、これ用に調整された物らしくて。本来なら思えば使えますよ」
「あとテクニックが使えないクラスでも使えるようにした方が良いでしょう、との事です」

「ふーん」

そう言い左手に付けられたタリス。よく見ると名前と型版が付けられている。

R. C. S. o. P 製 R. C. X. Y. Th a l y s m o d l
V i t a d i P h a s e : ヴイタディフェーズ、か？

素直に英語っぽい言語をスラスラ読めるようになるのは良いのか悪いのか…。

「…確かに受け取ったわ。それで、何をテストすれば？」

「さあ、私に聞かれても分かりませんし。このデータにも特に何も無いですし…取り敢えず実戦テストをすれば宜しいのでは？」

「そうだな、そうさせて貰うよ」

「にしてもユウナさん、嬉しそうに出て行きましたね。尻尾が左右に揺れてましたし…さて」

私の方は、そろそろマトイさんを起こしましょうか。

ーー惑星リリーパ 砂漠エリアー

はあ、また来てしまったよ。このクツソ暑い砂漠に。
ライフルを手に取り初弾をチェンバー（薬室）に送る。

そう言やこの銃コッキングレバーが無いんだよな。チャージングハンドルも無いし。

ジャムつたらどうすんだろ。これもシグさんに言っておかないと

な。

中央のバレルのシリンダーを取り出して中に a p f s d s を入れるーこれって軽いとあんまり貫通しないような気が：いやでもコイツが1番貫通ー溶ける速度が1・500から1・700くらいだっけか。

今思ったんだがこれを撃った時の反動と言うか衝撃と言うか：どんなもんなのだろうか。

そう思いながら通信が途絶したとかなんとかと言うエリアに向かうことにした。

エリアに近づくにつれダガンやクラダーなどがスパルガン、スパルダンAと交戦している場面を何度も見た。

幸いな事に気付いてないためそれらをスルーしつつエリアに近づいた。

なんかやつてる事が潜入任務じみているような気がしなくも無い。

「……ん、これは……」

エリアに近づくにつれスパルダン達の数は減り、逆にダガンなどが多く徘徊するようになっていく。

そしてそのまま進むと地面にハンター用の重兵装のソードがぶつ刺さっていた。

「……登録してあるな。だがなんで……」

武器だけがこんな所に、と言おうとしたらミミがクラダーのカサカサ言う音を捉えた。

「……奥に進むか」

そして奥に見えるのは暗い洞窟。なんでこんな所に：もしや俺とアフィンが二足歩行兵器を見つけた時みたく何かしら緊急事態に陥っている？

オペレーターに今の場所を伝え一応援軍を要請しておいた。先ほどの武器の所有者のデータはこの洞窟の奥にいるらしい。

グレネードランチャーと a p f s d s のセーフティを外し構える。ここでふとコレがゲームならセーブポイント有りそうだな、と他人

事のように思いながら。

洞窟内は暗くレーザーサイトとフラッシュライトのコンビでどうにか視界を確保している状態である。

「くそっ…洞窟内は寒いな…」

息を吐くとそれが白い蒸気として舞う。

今の周囲の温度は3度。外とはえらい違いだ。

足元と周囲を警戒しつつ奥に向かうとしようーいや、そう言え
ば。

そう言えばこのタリスのテストして無いな。えっと、シフトが火属性のテクニクだから…もしかしたら今掛けたらあったかくなるか？

(えっと…シフト！来い！)

そう思うとタリスが光り俺の周囲になんか赤い稲妻っぽい模様が出て消えた。

「…なんだコレ？あつたかくならんぞ？」

そう思いながら次にデバンドを掛けてみるも稲妻が舞うだけで特に変化は無し。

失敗作か？

まあ、動作に支障は無いし奥に進むとしよう。幸い登録者はもうそろそろで見える筈ー。

そう思っていると奥の方に光が見えた。出口、なのか？

慌てずにゆっくりと進む。

ここでふと思ったのだがこの洞窟に入ってからダーカーと一度も交戦していない。いやまあ交戦しないのは良い事だけど…。

外であんなにドンパチしていたのに中では何も無いって…なんかおかしくね？

そう疑問に思いながらもその光の方に向かうとー。

「うお、眩しッ…！ー！ーッ、なんだ、ここ…！」

ドーム状に広がった不自然な場所。奥の方にも道が有るが、そこにはなんかダーカーの変な器官って言うのか？管みたいなのが複数壁

や土から出てきて奥に続いている。

そこで悟った。これゲームのボス部屋じゃ、と。

悟のと同時にミミと耳が揺れと音を聞き取る。これは…地下、からか

その場から急いで走り出す。

直後、その場にはでつかいハサミを持ったー黒いでつかい虫がハサミを鳴らしながら、土から出てきた。

走って回避したからなのか腰を地面につけながらそののでつかいハサミを見て思う。

やっぱりボス部屋だったか、と。

急いで立ち上がりライフルを構え応戦状態に入る。

第一撃が外れたからなのか俺の方を見ながら鳴く敵。それと同時に敵の周囲に変な…ありや触手じゃないか！それを地面から出現させーいや、触手がある地面がなんか赤い。もしかしてどっかからかワープでもしてんのか？

そう推理しつつも、ああ、やっぱりフラグは立てるだけ立てておいた方が良かったな、と思う。

ハサミを鳴らしながらこちらに突っ込んでくる敵。さて、自分の家には可愛いマトイが居るんだ。意地でも終わらせて帰らせてもらおうぜーあつ、中の人は野郎なので男はお断りです。

62 話目

デカバサミが咆哮を上げると地中ーいや、多分向こうも同じワープでもしているのだろうーから太い先っぽが三叉の触手が出てきた。

本体であろうデカバサミに開幕のグレネードを3発放つ。

1発目が頭、2発目がハサミ、3発目がはずれ。

火薬で殴られ起こっているのかハサミをシャキンシャキン鳴らしながら突っ込んできた。

おいくそつ、マジかよ！

左右に良ければ良いものをそのまま後ろに走り追いつかれて吹っ飛ばされてしまう。

「んぎゃ☒」

頭から地面に付いたものも戦闘服の防御機構的な物が働いたのかそれ程痛くは無い。

「ーくっそおお…あ」

そう言やテクニクには傷を治すとかなんかそう言う技無かったか？

シフトとデバンドは試したからー確かアンティとレスタ、か？するとアンティが掛かりその次にレスタが掛かった。

これ強く思わなくても掛かるのか！

体制を立て直しランチャーの3連シリンダーに弾を込める。

そうこうしているとデカバサミが咆哮を上げ、地面に潜ったー。

「……」

なんかこういうのって動いちやだめな気がする。

銃を構えながらその場に数十秒。

突如地面が柔らかくなり、その中央にさっきのデカバサミがハサミを鳴らしながら待っていたー。

「くそがつーアリジゴク☒」

沈む足を動かしながらデカバサミに向かって撃つ。

必死に逃れようとしてもどんどん沈み終いには足元全てが埋まってしまった。

「死ねるか！こんな所で死ねるかよお……！」

そう言いながらも腰まで沈み動くのは腕と首だけになってしまった。

「このクソ野郎おおがあああ!!」

ガキンツツ！とエジエクシヨンポートが開き弾が完全に無くなったが音でわかった。

トリガーを引いても弾は出ない。

「……終わり、か……」

弾は無し、グレネードもこの距離じゃ信管が動かない。

詰み。

終わり。

死。

死。

……死。

……死、だって……？

「……そんなの、糞食らえ、だ！」

そう言い無駄ながらもタリスを上にも構えなんかこの状況を打破出来る何か出ろっ！と念じた。

するとタリスから何か光った何かが射出されて空中に浮遊した。

「……もしかして！彼処に！」

そう思うとリールで巻かれるが如くその浮遊した地点まで一瞬で飛んだ。

「うひやあああ☒」

空中に浮かぶ浮遊感と足元がフリーになった感覚。

それとお股が濡れた感覚があった。

俺が飛んだ……いや、ワープ、とでも行った方が良さのだろうか？

予想出来なかった行動にデカバサミがハサミを鳴らすのを止めた。

「よっしやああ！直上！死ぬこのF u o k i n y a r o u が！」

フリーになった事と距離が離れた事でグレネードを放つ事が出来た。それと同時にリロードを行う。

「ぎやあるがああ!!?」

まだまだ、まだ足りんぞ!

「まだまだっ!」

二つある内の片方セーフティコーレがAPFSDSのセーフティの筈を外し照準を合わせる。

「死ね!このFuokinハサミ野郎!」

撃つと数秒後に発射音が聞こえた。

弾はそのままデカバサミの頭部分を貫通。そのまま動かなくなつた。

「:死んだ:?:いや、死体撃ちだ。安全を確保しないと」

グレネードを再装填、デカバサミに向けて放つ。

それでも動かないのでタリスを使いデカバサミの少し上にワープする。

貫通した所を見ると周囲が溶けていた。熱か何かで溶解したのか?

取り敢えずマグで写真を撮ってそのまま奥に向かうことにした。

まさかと思うがもう何度も出まい:出るなよ。

フラッシュライトを付けながら赤黒い管の方に向かうとーそこには。

「くそ:やっぱりこういう事かよ:ッ」

赤い卵みみたいなものがありそこら彼処に戦闘服の残骸やソード、パルチザン、ワイヤー、ランチャーなどが壊れながら放置されていた。

更に奥に進むとー。

「うっ:おええ」

死体があつた。首の無い死体、腕や足が無い死体。それらが全て、まるで食った後のような:。

ここまで来て、吐きながらも少し寒くなってきた気がする。

今まで見ていた死体コーレ明らかに数名って感じでは無い。それに女性用の戦闘服が見当たらない。

嫌な予感しかしない。

はやる鼓動を抑えつつ更に奥に向かった。

管の中に時折赤い卵らしき物が奥に入っているのが見えた。

「頼む、頼むから外れてくれえ…」

目から涙を流しつつも奥に向かう。

奥から女性の声が聞こえてきた。良かった。無事…。

「…いや、この声…くそっ!」

ライフルを担いで更に奥に向かった。

「いやああお!だしてえええ!」

「産みたくない、うみたくないよおおお!」

「……ッ……」

急いで奥に向かうとそこには赤い大きな卵みたいな中に女性が囚われていた…しかも全裸で。股に管みたいなものを付けながら。

「くそやろうがあああ!」

卵に弾を撃つもビクともしない。

他に何かないかと周囲を探すとアークス用のソードが地面に刺さっていた。

レンジャーと言う全く違うクラスだが今回だけは使わせてもらおうぜ。頼むからうまく纏えてくれよ!

ライフルを腰につけソードを両手で持つ…軽い!行けるぞ!

ソードを持ちながら卵に近づき…。

「…ちえええすとおおお!」

思いつきり叩き込んだ。

ぶしやああ、と中の液体と女性が出て来て地面に横たわる。

急いで股の管を引き抜く。

「ひぎいいいい!!?…いだい!いだいよおお」

歪んだ顔から目を背き只管抜く事を考えた。

ぶちっ!と管が抜け、それをソードで叩き斬る。

「おい!大事か!しっかりしろ!」

痙攣しながらも脈を掴るとちやんと生きている。

足の上に頭を乗せバックパックからモノメイトを取り出す。

「おい！コレを飲めるか☒いや飲め！」

口元に強引にモノメイトを突っ込む。

「ーげほっ、おえっ！」

ゲロを吐いてしまうが、どうせこんなもの、あとで洗えば良い。

「しっかりしろー！こっちがわかるか！」

震えながらも俺の事を見る。

「これは！何か分かるか☒」

目の前で二本指を立てる。

「に、二本……」

「良し！分かるな！あと3人ほど救うから！待ってる！」

そう言いその場にモノメイトを残し残りのアークスの救出に出た。

不幸なのかどうか分からんがー彼女達には言い方が悪いが、苗床になっていたお陰か体調的にはギリギリのラインだった。コレがもう少し遅れていたら精神も壊れていただろうに…。

俺より年上の少女達が俺に抱きつき泣いていた。

少女達の体を確認して胎内にダーカーの卵が無いかどうかを確認ーは四人でやって貰おう。

後ろから喘ぎ声が聞こえるが気にしてはいけない。何せ彼女達は今までいつ死ぬか分からない状況だったのだから。

ー少しくらい見ても構わない、かな？いややめておこう。

それから数十分して排出が終わり、俺が全て銃とソードで潰しておいた。

右手でソード、左手でライフルを持ちつつ入り口まで四人の少女の護衛をしなくてはならない。

さつきとデカバサミは死んだから大事だと思うが…。

やはりというか死体と言えど少女達を苗床にした本人らしくー見えた瞬間足を震わせその場に縮こまってしまった。

大事だから！俺が殺したからと只管言いその場を後にする。

入り口まで到着してサーレックスの要請と任務完了の旨を伝えた。

「生存者は4名、中の状況から見てもっと居たかと…」

『はい、お疲れ様でした。こちらで追加のアークスを要請しておきます。今回は彼女達と帰還してください。胎内のD因子の濃度も調べなければいけないので』

「了解した。サーレックスの到着時間は？」

『はい、ETAプラス8分程です』

「了解、通信終わり」

そう言い通信を切った。

取り敢えず裸なので……裸……あ！

「やべっ！サーレックス！聞こえるか！」

『こちらサーレックス、感度良好。どうした』

「現在、裸のアークスを保護中！繰り返し！は・だ・か！の少女のアークスを四人保護中！ー俺たち以外に誰がいるか？」

『裸×待ってる！一度キャンプシップにお客さんを置いてくる！しばし待ってる！通信終わり！』

そう言いサーレックスのパイロットは通信を切った、

時間がかかるっぽいので取り敢えず洞窟内に避難することにした。

直射日光は肌に悪いからね。

サーレックスが来る20分くらい尻尾にずっと四人が抱きついていた。

そんなにビーストって珍しいのかー？

「あっ！待てー！そこダメっ！そこおおお！」

尻尾とミミ裏はダメエエエエ

63話目 カレーライス

「あああああ、づがれだあああ…」

そう言い自分のマイルームに帰ってきた俺。

惑星リリーパにて新種のダーカー——グワナーダと名付けられた——を倒し囚われていた女性アークスの4名の救出に成功。

そのまま迎えるサーレクスに乗り込みキャンプシップ経由でオラクル船団に帰艦した。

帰ってきた4名はそのままメデイカルセンター…ルームだっけか？そこに直行した。

俺はゲートのオペレーターに今回交戦したグワナーダの戦闘データ——戦闘時のマグが撮影した映像データの提供をして終わり。

——ああ、メセタもちろん貰ってな。

1日以上掛かると思っていたがそれほど掛からず直ぐに帰艦出来たのは良い事だ。

——決してサーレクスが迎えに来る間、尻尾の敏感な部分やミミを触られたり胸を触られたり吸い付かれたりなんてしてないされない。いい。

——幼児退行してないよな…？アイツら？

そんな事を思いつつベットに横になり、ファッションから今着ている戦闘服を外し下着姿になる。

ああああ、この開放感。たまらんぜ。

「ユウナちゃん、大丈夫？」

ベッドの上でゴロゴロしているとマトイが入ってきた。

「もう、またユウナちゃん下着姿になって…」

「だって楽だよ？なる？」

「誰か来たらどうするの？」

「…ああ…ほら、ファッションの登録してある奴から——」

そう言いファッション一覧を見て——ダメだ、戦闘服とメトリー・

アシンしか設定してなかった。ナノトランサーに他の戦闘服も入れてないし。

「…もう」

そう言いながら俺の部屋にある小さな二人用のソファに座るマトイ。

「ーあつ、マトイ。ジグさんに連絡をしておいてくれないか？内容はこの銃コツキングレバーとか100発位入るマガジンないかって」「こつきんぐればー？」

「そうーほら、銃の横に棒みたいなのが付いている奴有るだろ？それだ」

「うう？うん。分かった？ジグさんに連絡しておくね」

この顔、分かってないな。まあ俺もソードのパーツとか言われても分からないけど。

その時、時計が午後の四時を知らせた。

もう四時か。さて、今日は何を作ろうか。

カレンダーを見るとアークス言語でFridayー金曜日と書かれていた。

金曜日ーカレー、かな。

「ああ、そうだ」

「うん？」

ソファから立ち上がり、俺が寝ているベッドに腰掛けたマトイ。

「今日の夜ご飯、カレーにしよう」

カレールーは多分ある筈、人参や玉ねぎとジャガイモ、豚と牛はあるし…後はチーズか？

コーヒー、粉のやつはあったっけ？俺飲まないから無い気が…。

キッチンに向かいある物を探す。

人参ーある。玉ねぎーある、ジャガイモーある。牛と豚ーある。コーヒーの粉ー無い、か。仕方ない、板チョコは有ったはずだ。それを最後に入れよう。

ーあれ？確か板チョコだったよな？入れられたよね？少し心配

だから調べるか。

「マトイー！ピーマン食べれるー？」

ピーラーで人参の皮とジャガイモの皮を剥ぐ。

「うん！食べれるよー！」

テレビの前で座って居るマトイー音からして音楽番組か？

まな板に剥いたジャガイモ、人参を置き、人参は半分に切った後気持ち薄めに切っていく。ジャガイモは一口大に切るーなんか足りない気がするな。念の為にジャガイモもう二、三個擦れるようにしておくか。

玉ねぎも4個ーうち一個はみじん切りにしておくか。

ジャガイモの芽を取り皮を剥き、2個ほど用意する。

ピーマンは半分に切って、中のタネをスプーンで掬って捨てる。その後食べやすいサイズに何となくで切っておく。

鍋に少しの油を入れ熱する。

数分たち、肉の脂身を少し取り鍋の中に入れて音がしたら、さつき切ったみじん切りの玉ねぎを放り込みアメ色になるまで炒める。

炒め終わったらそのまま肉を投入、これも色が変わり赤い所がなくなつて来たのを確認したら残った玉ねぎ、人参、ピーマン、ジャガイモを入れ炒める。

少し炒めたら水を入れてカレールーーここにカレールーがある事に驚いたがーを入れる準備をする。

蓋を閉めて弱火で少しづつ煮るーいや、中火でも良いかな？

「ユウナちゃん？何か手伝う事あるかな？」

マトイから声を掛けられ隣を向くー気が付かないうちにマトイがキッチンに来ていた。

「んん…ああ…ないースプーンを持っていてっくれ」

「うん。分かった」

そう言いキッチンからスプーンを3本持っていくマトイ。

『ー番組の途中ですが、内容を少し変更してお送りします』

『惑星デサイズにてC u l t o . i . n . s , が運営中の会社が何者かに強襲されました』

『これを受けアークスの第7世代以前の戦闘員とオペレーターを1小隊1ーええ：30名から60名ほどを警備に向かわせる、との事です』

『これを受けアークス上層部は「非常にー』

キツチンでカレーを作っていると何やらテレビから不穏な番組が流れ始めた。

Cultorく、ろ、と？クロト？どっかで見たような気が……気のせいかな？

『ーである』との事でした。現在現場が混乱しており情報が入ってきていない状態です。現地にいる方は冷静に、アークスの指示に従ってください』

そう言い番組は元の音楽番組に戻った。

「ねえユウナちゃん？なにさっきの？」

火を弱火にしてカレールーをくっ付かないように散乱させて入れる。

蓋を閉めて中火寄りの弱火にしてあとは煮込むだけ。本来なら

「さあ？ペイテイでもしてんのかな？」

そう言い前世の銀行強盗ゲームを思い出す。プランBなんて無かった。今は極力プランBーーステルスだけど。

思い出しながらテレビの前のソファに座りノートパソコンを起動する。

マグだけでも調べられるのだが、なんか、ノートも使わないともつたいたい気がして……

「そっか……」

そう言い隣に座るマトイ。さて、チョコはどうかを調べないとな。

検索欄にチョコ、カレーと打ち込み1番上の検索結果を見る。

遅かったか。どうやらチョコはルーと一緒にタイミングらしい。最後に入れるのは粉コーヒーーーインスタントコーヒーだったか。買いだめしてあるオレンジジュースをテーブルに置きコップも用意する。

「マトイ、カレー見てきてくれ。後味見」

「うん！」

勢いよく立ちキッチンに向かいカレーを小皿に掬い人差し指で舐めるマトイ。

「ー少し…水っぽい？」

「そうか、ならそこにあるジャガイモを擦って入れてくれ。怪我するなよ？」

摩り下ろし機を出してカレーに擦ったジャガイモを入れる。

これでとろみが出る、筈だ。母親からそう教わった。

そう言や母親は元気だろうか？父親も。

「ユウナちゃん？どう？キッチンに行こっ！」

少し感傷に浸っているとマトイがカレーのとろみが付いたかどうかを聞くために俺の手を握ってキッチンに連れて行った。

この手の暖かさは本物、か。

そう言いながらもカレーを味見するために小皿に装り舐めた。

今思ったのだが一応俺のこのミミと尻尾は狼っぽい。

なぜ分かるか？ネットやっていた時にミスって海外のそう言う趣味のエッチなイラストサイトに飛んでしまっただな…いや、まあ、そんなことは置いておいて、玉ねぎダメなんじゃ…？

いや、七割くらいは人間なんだ、玉ねぎだっって行ける筈ー耳はとんがっているから人間ーヒューマンよりはニューマン、エルフなのだろうが。

そう言い舐めてーうん、美味しい。

「マトイ、皿を取ってくれ。ご飯をよそってくれ」

「はあい！ユウナちゃんほどの位？」

「まあ、適当で」

そう言いながらカレーを混ぜる。すると玄関が開いてもう一人が帰ってきた音がする。

「はあ、疲れましたわーあれ？この匂いは？」

「はい！ポイントさん！カレー、だそうですよ！」

「カレー、カレーですか！良いですねえ」

「そう言い管制官の服を着たまま帰ってきた彼女ーポイントが席に着く。」

「ポイント？服着替えておけ。カレーだから飛ぶぞこれ」

「はいはい。少し着替えてくるのでお待ちを」

「そう言い俺の隣の部屋に入り着替えをする。」

「こんな感じでいいかな？」

「そう言いカレーの入った鍋の隣に置かれた皿にはー並々とご飯がよそつており中央のやつは一番高くよそつてあった。」

「ーま、とい？あの、この一番でかいのは…？」

「私のだよ。これがポイントさん、これがユウナちゃん」

「あの…俺が男の時でも食べる量ではないのですがこれ…。」

「多くない？と言おうとしたらマトイが鼻歌を歌いつつテーブルの方に向かって行ってしまった。」

「取り敢えず俺のとポイントは半分に減らしておくか。多分これなら行ける筈。」

「ルーをよそいポイントとマトイのを持っていく。スプーンはマトイが配っておいてくれた様だ。」

「その後戻り自分のもよそい席に着く。」

「それじゃ、いただきます」

「頂きますー！」

「二人の声が少し遅れながらも食べ始めた。」

64 話目

「ーいんで、まだ砂漠か？」

「はい！今回も色々な方に聞いて回ったので！前回よりは小さい範囲ですよ！」

絞れてきましたっ！と言い両手を上げるフリーエ。

何もこんな朝っぱらから行かなくてもなあ…。

「…いんで、今回はどうするんだ？」

「先ほども言った通りに範囲は絞れたので今回は二人で行動しましょうーあれ？そう言えばユウナさん、その背中に背負っているそれは…？」

そう言い俺の背中に付いている武器ー確か武器名はギガツシユだったかーを指す。

「これか。少し前に砂漠を一人で行ったらね、いやお、未確認大型ダーカーと会っちゃってね？そんな時にソードを拾ったのだけど、使えちやったから買ってみた」

ほんとあの時は死ぬかと思ったわ。何人も死体はあるわ、女性アークスが…な、苗ーいや、よそう。気持ち悪くなつて来る。

「買ってみましたって…ユウナさんはレンジャーでは…？それにフォトンアーツは使えます？」

フォトンアーツ…？フォトンアーツ？…ライフルにフォトンアーツってあるのか？フルオート、セミオート、グレネードと俺のヴィダブラスタだけAPFSDSだけか？それが撃てるけど。

今思ったが只の鉄の槍がダーカーに当たってダメージ出るならフォトン要らなくね…？

いや、もしかしたらフォトンを再結晶させ、それをAPFSDSにしている可能性が…？いやでもフォトンって無味無臭じゃ…？

「…ああ!?あのスバーってやっぱりクルクル回ったりするやつ？多分できる」

「…まあ、同じレンジャーですし、いざとなったら二人でライフルとラ

ンチャーで戦いましょう！」

バックパックにギガツシユを。腰にヴィダブラスタをセットしてクエストカウンターからフリーエと二人で砂漠行きのキャンプシツプを頼んだ。

あ、左腕には勿論タリスをバックラーの如く装備しつぱなしである。なんでもジグさんがまだまだデータが足りん、との事。

フリーエ 惑星 リリーパ 砂漠エリ
フリーエ

「あぢいいいい……フリーエ、さつきといごおう。ここにいちや死んでまうとう……」

一応戦闘服には体温調整機能とかあるのだが、頭に熱が来てもう……。

「はい！今回目撃情報があったエリアはここから直ぐそこです！張り切っていきましよう！」

「おお……」

なんでこんなにフリーエはハイテンションなんだ……こんなにも暑いのに。それにこちとら精神年齢20やぞ……きつ……いつてほどではなくは無いわ。

腰にあるライフルに手を伸ばして、手に取りフリーエの隣に行く。

「今回目撃情報があった場所はここから直ぐ近く……マップ上だところの辺り、ですかね？」

フリーエのマグが映すマップに丸い円が出る。その円には未確認生物情報アリ、とアークス言語で書かれている。

「半径は……言うほど無いな」

「はい。有ってもこのエリアには機甲種の反応が見られますし……どうします？ 接敵次第撃破しますか？」

「いや……わざわざそんな道渡らなくていいでしょ。出来る限りスルーで。他のアークスがやってくれるに違いない」

フリーエと話つつライフルのチェックに入る。マガジンを入れれば勝手に薬室内に初弾を届けてくれる……コレは出来れば手動でや

りたいからジグさんにー言つてくれたーじゃない、連絡してくれ
たかな？マトイ。

中央のバレルのシリンダーにバックパックからA P F S D Sを装
填、シリンダーの位置を元に戻しロックをかける。

グレネードランチャーのシリンダーも同じく弾を3発シリンダー
に込めて戻す。

徹甲弾とD・A・P弾の混ざったマガジンが撃てるように小口径
の方だけセーフティを解除。但し指はトリガーに掛けずにその後
の部分ーグリップ部分を握る。

A P F S D Sの方は今はセーフティを掛ける。コイツは対大型用
だから小さいのに使つてられない。

後弾も高い。早く量産して安くなつて欲しいわ。

可変照準器に電気を入れ1・2倍辺りに調整する。

左手のタリスにはレフタ、アンティ、シフタ、デバンドのカードを
セット、使用可能状態に。

本来のクラスーテクターやフォースなら考えたりロッドやウオ
ンドをくるくる回したりしてテクニクを放てるけど…俺はほら、レ
ンジャーでライフルマンー？だから。

「ーよし、準備完了。フリーエさん、そっちは？」

左手をグーパーグーパーして動きに問題はないことを確認、ライフ
ル部のグレネードランチャー部分を握りフリーエに言う。

「はいーこちらも準備万端ですーいきましようー！」

今回は特に何も無いといいなあ…。

進む事数分、何人かアークスと現地で会い影に付いての場所が少し
づつ絞り込まれる。

「ああ、そうだ。今このエリアに面倒なアークスが居るから気を付け
ろ」

そう言いパルチザンを持った男が言う。隣にはソードを背負った
男性が。二人ともハンター、か？

「面倒なアークス、ですか？」

フリーエが少し疑い深そうに言う。

「ああ、ゲツテムハルトって言うんだが、アイツスペックは高い癖してプライドも高いからな。最近は柔らかくなったらしいが……」

そう言い頭を書くパルチハンター。

「そういや機甲種に八つ当たりしていたな。危ないから見に行くなよ？先輩としての注意、だな」

そう言いつた後俺たちが来た方向に去っていくハンター二人組。

ゲツテムハルトってそんなにアレだったか？

「……ユウナさん、お二人が言っていた人が居るところは……この辺りらしいですね。……なんか変な予感がします。行きませんか？」

そう言い背中ランチャーを持ち出し戦闘態勢に入るフリーエ。

「……まあ、フリーエさんがそう言うなら……」

俺もライフルを構えゲツテムハルトさんが居るエリアに二人で向かう……。

「……ああ、そう言えば私、任務記録取るの忘れてましたあ……」

……とした所、急にフリーエが止まり任務記録をつけ始めた。

「わわっ、あわわっ！えつと、ええつと……これ書いて、アレ書いて……」

フリーエがマグを呼び寄せ任務記録を書く……それってマグが録画するやつじゃダメなのか？

「ああ、時間も書かないと……ユウナさん！今って何時ですか？」

そう言い俺の方を見るフリーエ。確か今は……。

マグを呼び時刻を見る……朝の8:30を回ったところだな。

「今……8:34分ジャスト」

「そうですか……まあ、8:30でいいかなつと……よし！データ入力完了つと」

「……少し早過ぎましたかね？今8:00つて……」

「発見されてまだ1ヶ月も立ってないのに人はあまり居ませんし……こう言う早い時間からの任務って言うのもなんだか良いですね」

「にしても早い気がするんだがなあ……」

そう言いながらも二人で奥に向かう。

「…っあ！ユウナさん、彼処、彼処を見てください」

そう言いフリーエが前にある残骸に近づく。

俺はライフル脇に入れてトリガーから指を離し周囲を見渡しながらその残骸に近づく。

「これは…戦闘の残骸、ですよ？機甲種の残骸がこんな感じにボロボロに…」

そう言いフリーエはランチャーを背後に戻し何かで殴られた様に凹んだ機甲種を指差す。

「こんな闘い方をする人がアークスにいるのかと思うと…なんだか、少し怖い…ですね」

周囲に散らばる機甲種の残骸を手に取り俺に渡してくる。

「…いや、俺的には敵が減るんだから良いんじゃないか？それに流石にフリーエさんの言う、あの子達には手を出さないだろ」

殴られた装甲を見て、これを殴って凹ませるって何という腕力なのだろうか…いや、フォトンでなんかこう、やってるんだろ。多分。

「…どうでしょうか？リリーパって機甲種とダーカー以外、今の所は居ないじゃないですか」

装甲板を地面に起く。

「だから…もしこれをやった人があの子達を知らずに機甲種を作った本人だと考えて攻撃したら…私達オラクル船団が敵になってしまうかもしれないし…」

「そしたら逃げられちゃうな」

そうは言いつつも周囲を見渡すのは辞めない。

「…っとおーごめんなさいね、変に考えている場合じゃないですね」

「私達は敵じゃないんだよってあの子達に教えてあげないと。交流も何も出来ませんからね」

「折角出逢えたのに、仲良く出来ないなんて悲し過ぎますもんね…」

更に奥に向かう事にしよう。

65 話目

「ふふーん、ふーんー後はこれでーー良しっ」と

場所は変わりユウナのマイルーム。

マイルームではマトイがお風呂掃除をしている。

このお風呂は循環型でフィルタを定期的に交換しないといけな
いらしい。

「さて、フィルタはこれで終わったし：そろそろポイントさんが
帰って来る頃かな？」

あれ？そう言えばユウナちゃんは名前だけどポイントさんは名前
なのかな？後で聞いてみようかな？

そう思いながらキッチンに向かう。今日は何を作ろうかなあ。

ーー惑星 リリーパ 砂漠エリアー

そのまま奥に進むと何かを殴る打撃音が。最初はまさか機甲種を
殴ってる奴なんているのか、それこそ無いだろう、と思いつつ先に進
む。

「ーっ？…ユウナさんストップー…：何でしょう？この音は…
？」

聞き間違えだろ、と最初は思っていたものの奥に進む毎に大きくな
る音ーさっきのダブルハンターが言っていた危ない人ーゲツテ
ムハルトが居るといふ方向から聞こえてくる。

「…聞こえちまったか。…多分ゲツテムハルトさん、かも知らない」

「…この音は…：ファイターのナツクルの駆動音？ーっって言うこ
とは戦闘中？」

？ちよつと待って、フリーエってキャストー機械になってるのっ
て腕と足だけだよな？耳まで機械化してないよな

フリーエの耳を見ようとしたら走り出したので俺も追従する。

「ーああちよ、待ってー！」

結構な距離を走るとーって言うか途中からフリーエホバーして
たし：ズルくね？

それでーフリーエ曰くナツクルの駆動音が明確に聞こえる位置
に来るとー底にはゲツテムハルトとメルランディアが居た。

すぐ近くの草叢ではー確かフリーエの言う影の子が隠れている。
と言うか震えている。

「ーおらーうしーア！機械の身体はもつと頑丈なハズだろオ□つま
んねえぞオ！もつと気張れよオ！」

大破したーアレは新型か？二脚の機甲種にゲツテムハルトが、ひ
たすらナツクルで殴っている。

その隣でメルランディアが頭を抱えつつ周囲を警戒してい
るーあ、気付いた。

此方に気付きメルランディアが頭を下げる。

「ああ、これはどうも」

そう言い俺も頭を下げる。

「ーひどい」

頭を下げたら隣で酷いって言われた。多分俺のことでは無いハズ。
俺たちに気付いたのかゲツテムハルトが俺たちの方を向く。

手に嵌めていたナツクルを腰に戻す。

「なんだあ？お前達は。悪イが、此処は俺のストレス発散場だ。譲つ
てやる気はねエぞ？ーんん？」

「ちよつと待て…？セミキャストの女の方は分らんが、オマエは何
処かで…？」

「ユウナさんですよ、ゲツテムハルト様、ほら、カフェでしたっけ？彼
処でシーナ姉さんとお茶を飲んだ時にーほら、ゲツテムハルトさん
がシーナ姉さんに鳩尾をー」

「ああ□あの時の！いけねえいけねえ、将来有望な人材の名前くらい
覚えておかないとな」

「それで、オマエー」「ユウナさん、です」ーアンターー「ユ、ウ、
ナ！さん！」ーっ！メルランディア！少し喋るな！」

手でディアさんを指で刺し怒る。

「そうですね、分かりました。シーナ姉さんに言つときますね」
「つくそおー！」

そう言われるとナツクルを装備して地面や岩を殴ったり、大破した機甲種に八つ当たりするゲツテムハルト。

「…えつと…あの…」

これにはフリーエさんもびっくり。手を出そうとするものの途中で引っ込みる。

「アアア!? それで！貴女がア！来たってことはア！あの仮面野郎も来るのか？それともー」

「ー俺と楽しませて「せいっ！」ーうばあ☒」

ゲツテムハルトが何か言おうとしたら隣に居たメルランディアがいつのまにか距離を取りテクニックを放ったーと言うか始めてテクニックを見た気がする。

「ああ☒」

吹っ飛んだゲツテムハルトを見てフリーエが叫ぶ。

まあ、あんな漫画みたいな吹っ飛び方したら叫ぶわな。

「その言い方だと誤解を生む可能性があります！シーナ姉さんに言つときますね」

そう言いウオンドをクルクル回しながら背中に仕舞うメルランディア。やっぱり女は怒らせちゃ行けないって…分かったな。俺も今は女だが。

「えつと…大丈夫、ですか？」

吹っ飛んだゲツテムハルトに近づき身体を触るフリーエ。

「…アアア…くっそ、イッテエなア…少しは手加減してくれよ…」

そう言いゆっくりとフリーエの手を借りつつ立ち上がるゲツテムハルト。何故か知らんが微笑まし…い？

「えつと…この付近で大暴れしているアークスは貴方…ですよ、ね？」

そう言い確認するようにゲツテムハルトに言う。

「大暴れ…？アア、ストレス発散してる事か？いや、それ以前に大暴れ

ついでにやっている事。これがアークスとしての本文だろ」

「…ディア、なんでストレス発散してんだ？ストレスと無縁の体型してんのに」

「…まあ、それがですね…私の姉に結構こき使われていて…まあ、多分結婚するとは思うんですけど。それを円滑にするためにわざわざこう言う所に朝早く来て発散しているんです」

ああ、成る程…んっ？と言うことはメルフォンシーナにもバレている…？

「いえ、このところに関しては私は何も言ってませんよ」

「ーっっているのはそう言うことだぞ？」

ディアと話していると向こうでも話が進んでいる。

「それも有りますが！私達アークスは原生の住民との交流も含めたー」

「だアアかアアらアアよオ！それが！詭弁だっつってんだよオ！」

「…ねえディアさん、詭弁って？」

「えつとですね…意味は道理に合わない、言いくるめの議論。誤魔化しの議論…らしいです」

「要するにアークスの任務と意味が違うって事？」

「そう言う意味ですかね？」

「ーの影響を受けているかもしれねえ奴らと交流なんて出来ると思ってるのか？」

「なあ！ユウナア！オマエもそう思うだろ！」

「あ、初めて名前で呼んだ」

「そうですね。これくらい素直だと良いのですけど」

「おい！そこ！茶化すな！」

「…まあ、まあね？確かにゲツテムハルトさんの言う事にも一理はある」

「そうだろう、そうだろう！なんてったって、オマエは俺と同じ匂いがプンプンするからな」

えっ？男と同じ匂いがするって？そう思い無駄に長い髪の毛を鼻の前に持ってきて匂いをかぐ。

ダメだ、自分の鼻じゃ分からない。

「……ディアさん、ゲツテムハルトさんと同じ匂いしますか？」

「失礼しますーいえ、特には。甘い香りー柑橘系ですか？しかも結構自然的な」

「ちがう！そっちの意味じゃ無い！」

「ユウナさんはそんな人じゃ有りません！貴方とは違う、他人の痛みが分かる人です！」

そう言う話を聞き流しつつディアさんが後ろに回り髪の毛に頭を突っ込んできた。

「……んっ？」

奥を見るとフリーエの方に草叢から出てきた影の子が近づいて来た。

「フンツ！ーああ？なんだこのちっちゃなのは。じっと見てきやがって。寸胴でなんか気味悪いな」

そう言いフリーエの脚をペタペタ触り始める。感染症とか無いの？大丈夫？

「まあ良いや、どうせダーカーに影響されて俺たちを狙ってるんだろ？」

「ならココで始末しておいてやらないと後から来るアークスにも迷惑がかかっちゃうなア！」

そう言い腰に付けていたナツクルを嵌めて殴ろうとフォームを取る。

「おらあ！」

「ーだめっ！」

影の子を殴ろうと振りかぶったゲツテムハルトにフリーエが影の子の前に立ちふさがる。

かごんっ！と言う音がして俺は目を瞑ってしまった。もしかしてフリーエさんもゲツテムハルトみたく吹っ飛んだりーあれ？何も聞こえないぞ？

「ツツツてエエ！」

「あ、あれ？痛く、無い……あっ！さあ、早く今の内に！逃げて！」

そこには殴った手をもう片方の手で宥めるゲッツテムハルトの姿が。フリーエの方は後ろに居た影の子を逃している。

「ふう、やっぱりゲッツテムハルトさんのナツクルにアークスを殴れないように設定を変更しておいてよかった…」

「ツーンおい！お前！さっきのがダーカーに影響を受けていたらどうすんだ！馬鹿を通り越して言葉もねエぞ」

「言葉出してますけどね」

ディアの突っ込みに少し笑いそうになっ…らない。

「今の子達は敵じゃありません！私を助けてくれた命の恩人なんです！」

「恩人…？影の子は人…？」

「貴女…お前もそっち側…おい！メルランディアア…なんでそっちに居るんだア」

「いえ、こっちの方が面白くなるかな、と思ひまして」

「くそっ！分かっちゃいねえ！メルランディアア！こっちだよオ！」

そう言われて渋々ゲッツテムハルトの隣に行くディア。

「良いか？セミキャストの嬢ちゃん。そんな奴でもな、いずれはダーカーに侵食され狂う。だからな？そうなる前に殺してやるのが生殺与奪を振る側の優しさってモンだろうが？」

「あつ、因みにせいさつよだつの意味は生かすのも殺すも自分次第って意味ですよ」

「へえ、ありがとディアさん」

「いえ、こちらこそ」

「…：…なんか冷めちまった。帰ろうディア。シーナの見舞いにも行かねエとな」

「はい！サボテンなんてどうですか？」

「どうやって持って帰るんだよオ！それに変なウイルスとか居たら危ねえだろ！」

そう言い更に奥に向かうゲッツテムハルト。

「ふふつ、それではユウナさん、フリーエさん、失礼します」

そう言い頭を下げてゲッツテムハルトの後を追う。

「…ユウナさん、今は一体何だったのでしょうか…?」

「それより、大丈夫か?ゲガは?」

「いえ、大丈夫です。頑丈なのが取り柄ですから」

「…フリーエさん、気を悪くしないでくれ。一応彼の言っている事もー」

「ーはい、分かっています。あの人の言う事も一理あるんです。ダーカーの影響を受けて狂ってしまう。狂ってしまったら倒すしかないーそれは本当のことですから」

「私のやっている事は恩返しの名前を借りた偽善ー問題の先送りに過ぎません」

「それでも…それでも、私は信じたいんです」

ゲツテムハルトが居なくなるのを見計らって草叢からわらわらと影の子が数体出て来てフリーエと俺を囲う。

「ありがとう…心配してくれるの?うん、大丈夫、大丈夫だから。殴って吹っ飛んだのはあの人だし」

りー、りー!と言いつつフリーエの周りをぐるぐる回る影の子。

俺も影の子の手を握ってーいや、サツと交わされた。もしかしたら同じようなミミが有るし仲間かもって誤認されるーって思ったがそれは無かった。

そんな事をしてしているとまた草叢から数体の影の子がこっちに來いと下に群がる数体に手招きをしている。

「あはは…まだ怖いみたいですね。でも大丈夫。きっと大丈夫です」

「そうか?」

「はい。時間はかかりそうですけど…私は諦めませんから。それがキャストって言うんです」

「フリーエさん、キャストの意味間違えてない?」

因みに帰った後速攻二人でメデイカルルームに向かいバイタルとか色々チェックした。

66 話目

「……っ？メールか？……今度は総合技術開発本部から来てくれ……何しに？」

リリーパでの事件というか珍事と言うか……それから一週間ほどはマイルームと言うか自室というか……マイルームでパソコンでゲームをして過ごしていると俺のマグにメールが届く。

内容は機体の改修が終わったから見に来てくれ、との事だった。改修と聞き、ふと機体の形が変わっていたりしないだろうか、と考えてしまう。

あの機体……特にカメラアイの形が好きなんだよなあ……あの複眼。整備性死んでそうだけど。

まあ、鹵獲機だからどう改修するのも総合技術開発本部の自由なんだけど。

何時もの作業台の上にライフルとタリスを置き……もちろん弾は全部抜き、少し前に買ったオートローダーに入れてある……ギガツシユをその作業台の横に固定して戦闘服を着て玄関から通路に向かう。

実際はナノトランサーに入れられたり、手のひらサイズの正八面体……俗に言う菱形に圧縮変換出来たりするのだが、なんか信用出来ないので現物サイズで置いてある。やはり現物に限る。

今はマトイとポイントは二人で買い物に行っている。鍵も持っている筈だし大丈夫だろう。

戦闘服……バルバロスを着込み下にぴっちりスーツのゼルシウスを着る。体のラインが完璧に出るからあまり着たくないけど……これ以外にズボンの服が無かった。

頭にミミを保護するヘッドアクセサリーを付ける。バックパックは今回は任務に行かないし、特に良いかな、と。

クエストカウンターを経由してショップエリアに着く。

さして。

「アークス総合技術開発本部ってどう行くべきか…」

前回行った時はアフィンの運転だったし、あの周辺に列車とかモノレールとかの路線とかなさそうだし…後個人的に列車に乗れるかどうか怪しい。

「しゃーない、アフィンでも呼ぶー」

か、とマグを操作しアフィンにコールでも送ろうとした時。後ろから一週間ぶりの声が聞こえた。

「ーユウナさん？ユウナさんですか？」

「えっと…その声は…フリーエ、さんですかね？」

後ろを向くと久し振りの黄色い装甲の腕と脚のセミキャストー

フリーエが立っていた。

「お久しぶりです。一週間くらいですかね？」

「ええ、お久しぶりです」

そう言い会釈した。

「どうしたんです？今誰かに連絡を取ろうとしたのでは？」

「ああ…そのですね、フリーエさん、アークス総合技術開発本部って場所分かりますか？」

「ええ、勿論分かりますよ？どうしてです？」

「いえ、そこに少し用事があつて…」

「そうですか！ー」

そう言いフリーエさんが俺の頭のとっぺんと後ろを見て頷く。

「ーわかりました！そこまで行く手段が無いんですね！一緒に行きましようー」

そう言い手を握ってくる。機械過ぎで痛いーあつ、この形結構武器を握るのにフィットしそう。痛いけど。

「本当ですか？ありがとうーじゃなくて、どうして、その事を？」

「いえー用事があると言うのときつき誰かに連絡しようとしたので、もしかしたら、と思いましてー」

そ、そうか。良かった。ミミと尻尾でバレたりなんかしないよな。そうだよなうん。

「そうですか！良かった…別にバレていた訳じゃ無いんですね…」
「面白いホツとする俺。」

「………ですか？取り敢えずいつまでに付けば？」
「えっと……そうですね……時間指定は特に無いようなのでいつでもー」

「それなら今からいきましよう！そうしましよう！」

「ー良いい☒フリーエさん☒」

「そう言い俺の手を掴みシヨップエリアにある大型粒子駐車場に向かう。」

「フリーエさん？何に乗るんです？車？」

「いえー車じゃありませんよ！コレです！」

「そう言い粒子駐車場から現れたのはー大型バイクだった。」

「え、ば、バイ、ク？」

「はい！中々のスペックで扱いが難しいですけど、中々楽しいですよー！」

「さあ、乗りましようと言われフリーエの腰に抱きつくーー決してやましい思いは無い。それを言うなら俺の胸もフリーズさんの背中に押し付けているー胸ってこんなになるのか…。」

「そうですね…ここから総技課まで…まあ、飛ばせば行けるでしょう！行きますよっー！」

「そう言いヘルメットを俺に渡すーコレビースト用のミミ…いや、どうしろと？入らんぞ。」

「そう思いながらフリーエさんを見るとヘルメットを被りーーと言うかヘルメットと言うよりは顔全体を覆うヘッドギアみたいな物を付けている。」

「ミミを前に倒しー少し痛いけどーヘルメットを付けた。」

「付けましたね！行きますよおー！」

「ーえっ？うわああ☒」

「そう言うとき若干前輪が浮いた状態でーワイリー状態でアクセルを握るフリーエ。」

「フリーエってこんな車泥棒ゲーム的な運転すんのかよ☒」

リアタイヤが煙を上げ粒子駐車場の目の前の道路をハイスピー
ドロー抱きつきながらメーターを見るとー今80を突破☒

「ふ、フリーエさん☒速い、速いよー!」

「まだまだです!まだまだ行きますよっ!」

バイクのRPMーエンジン回転数を示すメーターが7000、
8000、9000、10000を突破、レッドゾーンに突入してエ
ンジンが唸り上がる。

ビュンビュン車を追い越し少しでも身体を出したら2度目の死ま
で頭を過る早さに。

もう粒子駐車場が遙か彼方にある気がする。

メーターをもう一度見るとー180☒

「フリーエさん!まずいって!警察とか来たらー!」

「大丈夫です!今の私なら振り切れます!」

更にアクセルを回し加速する。

「ぎやああああ!こええええ☒」

涙目になりながら必死にフリーエの腰に捕まった。捕まらないと
多分ーいや、死ぬ。

ーアークス総合技術開発本部ー

車だと結構な時間が掛かった道もフリーエの基地外加速によつて
数分で着いた。

「おええー!」

「あちや…またやっちゃいましたか…」

現在絶賛受付横のトイレにてゲロっている。

「おえ…:はあ、はあ、はあ…:ふー、りえ、さん、今度は、安全運転で
お願いしますーうっ!」

「ごめんなさい、ユウナさん…:帰るときに何か奢りますから…!」

フリーエ…:多分、食うのは無理…:。

いつかの班長と副班長が受付前で待っていてくれた。

「ええ、そうです、武器と弾薬のリバースエンジニアリングと機体構造
の把握、それとコックピットのインターフェースの変更です!」

トイレから出て班長と副班長の二人に俺とフリーエさんが付いていく。

「あんなにレバーやペダルで動かすのはー浪漫はあるがーこう、速効性って言うのかな？それが足りない」

そう副班長が班長の言葉に追加で入れていく。

「そもそもアレは人の形をしているんだ、同じ動きが出来ないわけがないーそうは思わないか？嬢ちゃん」

そう言いサングラスを掛けた班長が俺を見る。

「それを行う為に内装を出来うる限り此方の汎用性のあるパーツと交換、それと人の動きとリンクさせるシステムの構成、誤差の修正とかも行いました。いやあ、久し振りに弄り外のある機械でしたね」

「最も、その身体の動きをの読ませるにはあるスーツーと言うか今君が着ているゼルシウスを改造した奴を着てもらおうのだが…大丈夫か？」

そう言う副班長をスルーして班長が着替えてくれないかと言ってきた。

「分かりました、着替えます」

「えっと…ユウナさん？ユウナさんは何故ここに…？」

「少し前に鹵獲した人型搭乗兵器のテストなってるの。成り行きでね」

「人型搭乗兵器あ、あの！俗に言うロボットですか！」

そう言い急に人が変わったようーいや、変わってないわ。

「た、多分それだと思う」

「あ…ああ生きてるうちに本物の人型兵器に見えるなんて！しかも搭乗型！」

「お、落ち着いてー」

「落ち着いてなんていられませんよ！さあ、早く行きましよう！」

そう言い俺を担ぎブースターを起動、奥のテスト施設ーまあ、前回と同じところーの扉に向かって行った。

67 話目

その後フリーエのクレイジーバイクに乗って帰りシヨップエリアにて別れた。

もう乗りたくないです。

トイレに駆け込み下呂を吐いてスッキリ。また外に出るー？なんだ？なんか騒ぎ声が…？

声のする方向に向かっていくと結構な人だかりが。

更に行くところ中央に見知った顔がーあれは、ゼノさんとゲツテムハルトさん？二人が喧嘩ーなのか？をしている。

「どおらあー！」

「ふっ、甘いー！」

「どおわあ☒」

若干ゼノさんが負けている。

「ぜのおお！がんばってえええ！」

「良いわよ！ゲツテム！そのままやっちゃいなさい！」

「……何やってんだアイツら」

周りの声もやっちゃまえ！とかゼノ勝てよ！とか掛けメセタどうだ！等凄く盛り上がっている。

賭け事してんのかよ…。

「アレはエコーさんとシーナ姉さんがゼノさんの後輩が持って来た人数制限ありー三人までのデザート食べ放題を、どっちが食べるに相応しいかで喧嘩ーいえ、勝負しているんです」

俺の問いにふっ、と現れたメルフォンシーナの妹ーメルランディアが俺の隣に現れる。

「デザート食べ放題権？」

「はい、とても有名で凄く自然な甘さなんですよ、ソコは」

そう言い余り表情の読めないメルランディアがうっとりとした表情をしたーー気がする。

「ああ…俺は良いや、いざとなれば一人でー」

「ゼノ！いくぞお！」

「おうっ！」

二人の大声が聞こえそちらを見る——すると二人とも身を引きます。ごい速さでストレートパンチを放ち——同時に顔に当たり、同時に地面に落ちた。

「ディアさん？二人とも——あれ？いねえ」

どこに行ったのか周りを見ると倒れた二人のところに行き。

「わん！っ——すりー！ふおー！」

さつきまで俺の隣にいたディアさんがカウントを取る為に二人の脇にいた。いやアンタレフリーかい。

「おいおい！」「ゼノ！立て！立つんだ！」「ゲツテム！お前はそんな所で終わる玉かあ」 「負けるなゲツテム！俺の掛け金があああ！」

周りの野次馬もいろんな事を言っている。

「……帰るか」

「——ねえ、エコーちゃん、私とディアの二人でいかない？」

「良いわね！」

ミ耳がエコーさんとシーナさんのヒソヒソ声を聞き取った——ああ、ゼノさん、ゲツテムハルトさん。たった今貴方達の喧嘩は意味が無くなりましたよ……。

でかい胸の前で手を合わせ南無、と思いつつその場を去った。

ゲツテムとゼノの無駄の喧嘩が終わったのを確認して、周りにいた野次馬達がシヨップエリアに散っていく。

一方俺はシヨップエリアをぶらぶら歩き、そこら辺で買ったアイスを手にはベンチに座り、そのアイスを食べていた時だった。勿論ミルクアイスである。なめらかだ。

「——あ、どうし——あああ！どうしよう——！」

男なのにポニーテールって言うのか？メガネをかけた男の人が、どうしようどうしようと言いなながら向かってきて——俺の事を見た。

「あつ！そこの貴女！——そう！今周りを見渡した貴方です！」

咄嗟に周りを見たが俺の様だ。むしろ俺だという事を決定させて

しまった。

「その服装！アークスですよ？きっと僕の依頼を受けてくれたアークスですよね☒」

「依頼？」

「そもそも依頼なんて受けてないんだが。俺はフリーエのクレイジーバイクで疲れているんだ。そつとして置いてくれ。」

「申し遅れました。僕はライト、アキ博士の助手をやっています」

「アキ博士？ー助手ってそのアキ博士のアシストなんじゃ…その博士は？何処に？」

「…そう、それなんですよ！それ！」

「そう言いグイツと俺の肩を掴んでくる。」

「あ、アイス…」

ボトツと落ちたアイスに目をくれず只管自分の事を話し始めた。

「うちの先生、最近アムドウスキアの龍族にご熱心出して…」

「アークスの士官学校を出ているからって事で一人で行かれてしまったみたいなんですよ」

「ああ、心配だなあ…万が一って事があるしなあ…」

「そこで依頼の話に戻ります。先生ーアキ博士を探して来てもらえないでしょうか？」

「も、もちろん報酬は用意してあります！ー先生の研究費から」

「研究費からって…乱用じゃ無いのか？捕まらない？と言うか俺のアイス…」

「ーいえ！そこは、ほら、アレですーそうだ！アキ博士の護衛役って事でどうにか出します！後アイスくらい僕が奢りますから！」

「そうか。ならまあ…」

「もちろん！おヒマな時で構いませんから！ー成る可く急いで欲しいですけど…」

「そこまで言われたらねえ…んじゃあ行ってくるよ」

「本当ですか！ありがとうございます！ー」

ー惑星アムドウスキア 火山洞窟ー

「くそおお、あんな簡単に安請け合しなければ良かった…」
そう言いまたまたくつそ熱い火山洞窟にやって来た。

確かあのライトって人曰くこの辺りで調査しているとかなんとか…。

そう思いながらライフルを構えてー初弾装填済み、セレクターもフルに位置を弄ってある。

レーザーサイトをつけながら辺りを歩きながら調査する。

因みに今回はギガツシユは無しだ。

「無し。ここにもいないか。本当に居るのか？そのアキ博士って人は…」

そう言い次のエリアに向かって移動しようとした時だ。

後ろから女の人が声をかけて来た。急に。

「なんだい君は。会いもしない人に向かって悪口を言うなんて」

「うわあーだ、れですか？」

そう言いタリスを前に射出、前の地面に打ち込み、打ち込んだ所に高速で飛ぶ。飛んで距離を稼ぎ、声のした方にライフルを向けーあれ？女の人の？

「おおー新型兵装ーいや、まずは名乗らなければ。私はキミの言うアキだぞ。さあ、キミは？」

そう言いメガネをかけた女性ーその服装なんかアレじゃない？大丈夫？アークスの…なんか、そう言うの。

「やっと思つた…貴方の助手を名乗るライトって人に連れて帰る様に依頼を受けたアークスのユウナって言います」

そう言いライフルを下ろしながらこの女性ー探していたアキ博士に近づく。

「ー全く、君も大変だな、どうせ彼の事だ。戻ってこない、心配だな、とか言っていた所を捕まっただらろう？私が万が一などはあり得ないと言うのよ」

そうブツブツ言いながら彼女も歩きながら近く。

「まあ、仕方がない、こうして声を掛けてわざわざ捕まってしまったんだ。今回は素直に私が折れるとしよう」

「ーああ、すまない、良ければアークスカードを交換しないか？」

「え、ええ、どうぞ」

そう言いアキさんとマグに俺のアークスカードをスキャンさせる。

「ー成る程、キミは龍族より遥かに興味深い存在かもしれないねーーピーストなんて中々お目にかかれないし」

「えっ」

「いや、独り言だ忘れて構わない」

いやちよつと今怪しい言葉が聞き取れたんですが…。

「ユウナくん、キミのことは覚えておくよ。それじゃあ、彼の所に帰るとしようか。そう安安と研究費を使われてしまったら困るからね」

そう言い俺が来た道を手招きしながら戻った。

68 話目

「やあ、ユウナ君。先日は迷惑をかけたね」

その後アキ博士を連れ帰りそのまま依頼終了。その日はそれで終わり。ライトさんが結構な額のメセタをくれたから…去り際に「また何かあつたら連絡します」と言つて。

更に後日…3日後位かな？またまたシヨップエリアを散策しているとアキ博士と助手のライトさんに捕まった。

もしやまた火山に、と思つたが、話の内容は前回の謝礼？だった。謝礼で合つてる？

いつものカフェーラフリーにて話を聞いている

「全くですよ博士。お願いですから一人での無茶は避けて下さい！と言つか護衛をつけてください！」

アキ博士の隣にライトさんが。前には俺が座る。

「はいはい、分かつてるよ、いちいち五月蠅いねえキミは…すまないキミ。コーヒーを頼むよ」

店員が近くに来るとアキ博士が呼び止めた。注文するようだ。

「僕はカフェオレを…ユウナさんは？」

「じゃあ、オレンジジュースを…」

そう言い店員は店の中に戻っていく。

「…さて、話を戻して…ご覧の通りに助手が五月蠅いもので、実地の調査は、少し、控えめにしようかと思つている」

…少し、なんだ。依頼すれば良いものを…いや、まさかこの流れば…いや、あるまい。

「そこで、代わりに現地の情報収集をしてくれる人材を探しているのだが…」

先程頭を過ぎった内容がもう一度浮かぶ。おいおい、嘘だろ？と思ひライトさんの方を見と…

「……はい、つまりそういう事です」

無慈悲にもコクリと頷きそう呟いた。

「あああ：私、がですか」

溜息をつき上を見る。

「ーそう、察しが良いね。そう、キミだ。依頼は単純明快。私の代わりに龍族の調査を願いたいーああ、すまない。ありがとう」

依頼を受けていると、丁度アキ博士のコーヒー、ライトさんのカフェオレ、俺のオレンジジュースが届いた。

「調査と言っても難しいものじゃない。龍族の生態を見てきてーマダグで撮ってきて欲しいだけだ」

「幸いな事に、中から上ー一部の種族はアークスとどっちつかずな態度を取っているけど、現場レベルの末端ならばある程度は大人しい。そこを取ってきてくれー」

確かにキャタドランと交戦した時、龍族と共闘したけどさあ：もうあんなのと戦うとか嫌だわーいや、戦うって決まったわけではないし：うーん。

ライトさんは頭に手を当てて首を振っているーいや、メガネを取って目に手を当てて、か。

「ーそうだな、出来るならダーカーと交戦中ー特に中型種以上の映像とか合ったら助かるな」

そう言いコーヒーにシュガーとミルクを入れーずにブラックのまま飲んだ。俺はとてもじゃないが飲めんど、あんな物。

「ふむ、このコーヒーは苦味が強いなーそれに香りも強いー酸味も中々、かな？眠気覚ましには良いコーヒーじゃないか。そう思わないか？ライトくん」

「博士：僕はコーヒーは甘くしないと飲めないんですよ？」

「そうだったなーーきて、それじゃ、ライト君。後の事は頼んだよ。私は研究室に戻るからーああ、大丈夫だ。会計は私が払っておくよ。後は好きに頼みたまえ」

そう言いコーヒーを飲み終わると会計の方に向かっていった。

「はいー博士ーーと言う事らしいです。すみません、よろしく願います。報酬はキッチンと用意しますので」

「そう言いアキ博士が見えなくなるのを確認すると、改めてライトさんは依頼内容を言ってきた。」

「本当に迷惑をかけてすいません。本来ならばちゃんとした依頼をクエストカウンターに出すのですが…まだ研究費の予算を組み直している最中でして…」

「まあ、なんだ。貰えれば良いよ」

「そう言いオレンジジュースを一口。」

「それに博士ーん”ん” …… 『彼女はビーストだろう。それにあの耳ーニューマンビーストに違いない。数少ないニューマンのビーストだ。研究の意味でも戦闘データは必要だろう?』って言っていたので…ユウナさん以外は考えられないと」

「でも受注者オーダー出来なかつたっけ?」

「…まあ、これは僕の推測なんですけど…珍しいニューマンビーストを見る、と言う名の観察したかつたんじゃ無かつたんですかね?」

「そうか。余りに良い気分じゃないがなあ…まあ…戦闘はしなくて良いんだよね?」

「はい、龍族とダーカー種の戦闘を撮ってください。博士は中型以上って言ってましたけれど、取り敢えず何でも良いです、火山洞窟は熱さで好んで行くアークスが少なくって情報もあまり無いので…」

「分かった。取り敢えず行ってくるよ」

「お願いします」

「そう言い席を立ちシヨップエリアを経由してクエストカウンターを目指す。」

「あ、すいません、今回のレシート、領収書を貰えますか?」

「…ライトさんも頑張ってるんだなあ…」

「…惑星アムデイスキア 火山洞窟ー」

「今回はライフルに弾を装填しつつ腰にセットしてある。メインはライフルではない。」

「さて…俺にこれを使う技量はあるものか…」

「そう言いバックパックに備え付けてあるソードーギガツシュを両手に取る。」

型式名称 A・C・H・S-2 mk1 G i g a s h だつた筈。
中型重量の A・C・H・S-1 ソードと重型重力の A・C・H・
S-3 ブレイカー、軽型重量の A・C・H・S-2 ギガツシユの
三種類が駆け出しの新人ハンターに支給される。

この内1番軽くて使い易いのがギガツシユ、との事だつた。

確かに握ってみればライフルよりは重い物の両手必須つて程、極端に重いつてわけではない。

ギガツシユを片手で振る。まあ悪くない。刀を両刀にして少し太くしてみたんだ。

と言うか片手剣にしちやデカイが、ソードとして使うには軽い。

「まあ、ここの言う層もいるんだろう。今の俺みたく」

ソードをもう一度背中に戻し、奥に向かう。

「ありや……この音は接敵……いや、交戦しているな」

奥の方に龍族とダーカーが戦闘している音が聞こえる。

急いで奥に向かい戦闘しているところを撮らなければ。

「よおし……マグの設定を……録画開始、目標は前方の龍族及びダーカー」
壁に隠れて、手にマグを乗せて、正面を向けて録画を開始する。

本来なら左手のモニターで確認できるのだが、タリス……正式にも
らった……が邪魔で見れない。

ちよくちよく顔を出し、戦闘がどっち有利かを見る……この様子だと龍族の圧勝か？

『おい、そのお前、何している』

録画していると後ろから声が。そちらを見ると……四足歩行の首
あたりに一本のツノを持った龍族がいた。

「いえ、ただ録画……龍族とダーカーが戦うのを記憶しているだけで
す」

『そうか、余り余計な事はするなよ』

「……貴方は前のダーカーと戦わなくて良いんですか？」

『だーかー？ あの黒い物か、あれは私達、上のもので戦うものでは

ない 下の奴らから優先的に 戦うのだ』

「…そうですか」

要するにそれ捨て駒？こりゃ減ってくわ。

『無論無理強いはせん しかし下に行けば行くほど攻撃的な奴が多くてな 我々も 手を焼いている』

訂正、そうでもなかった。

『そうだ アークス 先程 我らと 黒い奴の 戦いを記憶すると 言ったな？』

「ええ、言いましたよ？何かまずい事が？」

「いや そうではない。アークスに 力は不要と言う証拠を見せてやろうと 思ってたな 付いて来い アークスよ』

そう言い戦闘中の横を通るツノ付き。それについていく。

「アレは…デカイ…」

『どうだ 我ら の 種族は アークスの言う だーかーとらやらも 手を出せないだろう』

そう言い連れてこられたのはある高台ーそこから下を見るとデカイ龍族が複数のダークカーを相手取り火球を吐いたり、尻尾で叩き潰したりと暴れまわっていた。

手を地面に下ろし、上に上げるとーダークカーがいた地点から炎が出てきた。俺らのテクニク的な事をやれるのか？

「取り敢えず記憶はー撮ってあるな？大丈夫だな？」

『ー終わったようだ さて アークスよ そろそろ 帰ったら どうだ』

デカイ龍族がダークカーを全滅させると頭を動かし、いない事を確認するとー地面に潜った。

「えっ☒飛ばないのかよっ！」

『一応 飛べなくはないが あの方は結構な ご老体故 余り飛ぶ事を しない』

「そ、そうなのか。まあ、ありがとう。結構データは揃ったはずだーああ、どこに手を出せば良い？」

『頭を撫でてくれ』

「こうか？」

『そうだ。こちらも話せて楽しかった』

「うん、それではまた。ダーカーに侵食されてなければ」

『それでは』

そう言い龍族と別れ、キャンプシップに戻った。

戻った後、すぐさまライトさんに録画データをコピー、渡しておいた。

69 話目

あの後ライトさんに録画データを送り、残った本家の方の録画データを、部屋にあるパソコンに入れー正確にはマグを経由してーモニターで戦闘シーンを見る。

あの大型種ー黒くてデカイドラゴンの戦闘シーンをマウスを使い2、3度程繰り返し見直す。

見直し結果、分かったと言うか見れたと言うか：攻撃パターンは火球、咆哮、尻尾打撃、炎系テクニクのようなーマグマか何かを呼び出す攻撃の4種だった。

火球や尻尾打撃は即座に当たらない中、遠距離からーあれ？これ近距離挑んじゃダメな奴じゃね？

よく見直すと小さな手を地面に付けている？テクニクらしき物を使う時。手を振りかぶったら逃げれば良いか？流星に追尾とかしないだろ：よな？いや、まてよ？

パソコンの前に胡座をかきーポイントやマトイにパンツ見えるから止めなよ、と言われるけど男の時の癖で、中々止められ無い。

左手を胸に。右手を顎に当て考える。

「と言うことは手を使う攻撃もできなくはない可能性が…？」

あの巨体で？あんなショートレンジの腕で？

まあ、食らうのは俺だし注意だけしておこう。痛いのは嫌だからな。

「ーはあ、買い物は疲れーあ、ユウナちゃん、お帰り」

「ーああ、ユウナさん。お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

などと考えているとドアから両手に色々買い物袋を持って来たマトイとポイントが帰ってきた。買い物物に行っていたのか。

モニターに移した動画をパソコン側にも保存して電源を落とすー無論シャットダウンだ。電源ユニットの方では無い。

「じゃ、ご飯にしよつか。マトイ、面倒だけど後は俺がー」
やる、と言おうとしたらマトイが一言。

「大丈夫だから。今日は私にやらせて?」

「……大丈夫か?」

「私だつてP o sで調べたんだから!」

そう言いキッチンに向かうマトイ。成る程、だから買い物を…

「ユウナさん、マトイさんは出来る方です。安心しまー」

会話を遮る様にキッチンから、がしやああん!と何か物をーこの音は鍋か?ー落とす音が聞こえる。

「ああ鍋が」

「ーせんね、少し手伝いに行きます」

「頼むわ。マトイだけなら兎も角、ポイントさんが居れば安心だな」

「…ええ、頼まれて」

そう言いすつ、と立ち上がりキッチンに向かった。

さて、俺は前に言ったジグさんへの改修依頼、送っておこうかな。作業台に座り武器ケースを出す。それにライフルをー安全装置をS、セーフティの位置に。

薬室内、3連グレネードシリンダー、APFSDSを打ち出すシリンダーを見て、中に弾が入ってないことを確認。

照準器の電源を切り、フォトン吸収器を格納する。

全て確認し終わったら武器ケースの中に入れて、ダンボールに入れてジグさん宛に送る。

改修するところを添えてー一応メールも打っておくか。

改修箇所を書いて、終わり次第取りに行くついで。

パソコンを開き業者に改修依頼を頼む。指定の時間になると車が前に止まり中に入れると勝手に配達先まで送ってくれる様だ。

背伸びをして周りを見る。キッチンからは鼻歌が聞こえ、隣ではポイントの指示する声が聞こえる。

まあ、こんな生活ーこんな美少女(巨乳)と一緒に生活ーも悪く無いかな、と思いつつ、これで生理とか軽いか来なければなあ、とも。

まあ、前回の生理で比較的軽いって事は分かったから…まあ、この船団を探せば生理を軽くする薬とかあるでしょ、多分。

もつと欲を言えばダーカーなんて居ないー前の世界でこんな美少女と暮らしたかったーあれ？今の俺は少女だから、前の世界に戻ったら…どうなるんだ？死んだままなのか？

そう考えると体が震えてきた。死んだ体に戻ったらどうなるんだ？痛覚は？聴覚は？ーむろん、全て死んでいるのだろう。

もしも今日寝て起きたら死んで、2度と目覚めなかったら？

体と手が震え始める。幸い今は重いものを持っていない。ゆっくりだ、ゆっくり座れば震えぐらい…。

こんな怖い事考えてられつかー止めだ止め。

そう考えて違うことを考えようとするも、震えは止まらずー今日寝れっかなあ…。

パソコンを見ると数十分後に配達が来るそうなので用意ーは終わってるから、後はマトイのご飯を食べるだけか。何を作っているのだろうか？マトイの作ったご飯を食べれば忘れるでしょ…忘れてくれ…。

その後案の定、夜になって怖くなり、どうしようかと悩んでいるとマトイと一緒に寝ようと提案。

それに乗じてポイントも寝ることに。流石にベット一つじゃ三人は無理なのでリビングに布団を四枚引いてそこに寝ることに。

中央に寝たけど二人の匂いが凄かった。やっぱり女の子はいい匂いなんやなって。今の俺なら死んでもそのまま逝けそう。

「…よかった、覚めれた、か…」

あの後安らかに眠り、もう2度と目覚めないかも、と思ったが…そんな事はなく普通に起きた。これから怖い時はそうしようかなあ…大の大人（精神年齢）が言うのもなんだけど。

怖いものは怖い。人間とはそう言うものだー俺はミ耳と尻尾の

生えた人——人なのか？

「…人やる」

そう言い一人起きて——いつもの様にマグとパソコンのチェックに入る。

マグとパソコンは同じIDを使っていて何処からでもメールや動画、果てには暗号化された文章まで送れる。

パジャマのままパソコン前に座り電源ボタンを押す。

一瞬でOSが立ち上がり——本当の意味での一瞬だ。1秒とかそんな感じの——依頼が来ていないかを確認する。

確認自体マグの方が簡単——依頼主との直接会話が可能とか、内容が変更されたりとかその他諸々——なのだが、地球にいた時からパソコンは触っていたから——こう、こちらの方が何となくやり易い感じがする。

ネットサー——ポスサーフィンをしながら内容を確認——えっ、またアキ博士から？連続3日目だぞ？

内容は——やっぱり直で見たいから援護頼むって…いや、まあ…：ライトさんは何も言わなかったんですかねえ…？

昨日のうちにライフルはジグさんに送り返しちまったし…：武装がギガツシユだけ、かあ…。

「ハンターにでも変えっかなあ」

そう呟きつつ依頼を受託、ショップエリアで落ち合いましたようと送り、ギガツシユを背中に背負って合流地点に向かう事に。

G・グレネードとS・グレネードは何個か掃除しておかないと。初めてのソードだし、何が起きるか分からないからな。

70 話目

「よっ、と……まあ、こんなものか？」

そう言いギガツシユを背中に背負ってー3Dホログラムで作られたダーカーの残骸を見る。

今いるところは、アークス訓練場ー少し前にマトイが爆発テロ紛いで吹っ飛ばしたアークス製武器販売店、だったか？それとは違う。クエストカウンターにて武器の試し振りーまあ練習がしたいと言えば場所を貸してくれる。

そこで自由に振るもよし、敵ー3Dホログラムだがーと戦うもよしと本当の意味で練習場である。

「まあ、このサイズだし適当に振ってれば倒せるでしょう」

そう言いギガツシユを菱形の圧縮状態に戻し、後ろのバックパツクに入れた。

「レンジだけ見れば槍ーパルチザンの方があんなだかなあ…」

そう言い備え付きの大型のデバイスを操作して、下からある物ー武器ラツクが開く。

そこから練習用のーフォトンをコーティングされていないーパルチザンを取りだす。

「そういやフォトンって無味無臭で実体が無いとかなんとか…いや、フォトンクリスタル的なものあったりしてーいや、それはゲーム、か」そんなこんなで素振りをしているとマグにメールが。

内容はライフルの小改修が完了した件と俺が凍土で見つけたクラリツサについてだった。

「えつとー持つ部分と下の部分があるから出来れば見つけて来てくれ、だって？」

他にも完成形は覚えているから、作り直しは出来なくもないがーあの後ジグさんの店に持って行くと何故かいきなり輝き出したーソレをジグさんはフォトンの輝きと言いーそれを、その輝きを出来

うる限り残したまま元の状態に戻したい、との事。

内心、ええ：と思つたけど、武器を作る際、好きなように作る、と文元とデータは撮つたので：まあ、良しとしよう。

そうかあ、前回は考え纏まらずに帰つたからなあ：何を作つてもらおうかなあ：。某地球を防衛する軍に合つたアサルトライフル型のミニガンとかないーよなあ：。

等考えていると更にメールが。

ライフル取りに來い、だそうだ。

「…んじゃ…」

そう言い出した練習用のパルチザンを元の場所に戻す。

勝手にラックが下がりつなぎ目が見えなくなる。

デバイスを操作、終了の欄を選び、クエストカウンターに帰ることに。

すぐ横に扉が出てそこに入るー。

ーーオラクル船団 ゲート及び

クエストカウンターエリアー

ゲートエリアに着いたので早速ショップエリアのジグ工房へ向かう。

大型エレベーターを下りショップエリアで止まる。

ショップエリアを前進しーペアーリへと歩く。

殆どのアークスが任務に行つているのか、店の中には数人しかいなかった。

カウンターの方にジグさんが。見ると店の中に数カ所設置してあるテレビを見ているようだった。

「おう、きたの」

俺に気付き、テレビを見るのをやめた。

「はい。ジグさん、ライフルーヴィダブラスターでしたっけ？それの小改修が終わつたとか」

そう言うのと奥に行き大きなケースを持ってきた。

「ほれ、これでどうだ？」

そう言い渡されたのが、小口径用の排莖口にコッキングレバーが付いている。

「あとこれ。一応バレルの限界が600発だから、それ以上撃ちまくりたいのなら氷系テクニク、お主ビーストである前にニューマンでも有るであろう？それでバレルを冷やすんじや」

そう言い渡されたマガジンは、普通のマガジンと変わらないサイズ、ベトナム戦争で見かけるM16の様なマガジンだった。

「……いや、ジグさん、これ……明らかに300-20も入らない様なサイズなんですけど……」

「それもそうじや。お主達レンジャーの使う火薬で爆発させ弾丸を飛ばすタイプなら入らんよ」

「……えっ、どう言うことですか？」

説明の意味が分からん。弾の種類が違うのか？

「少し前にライフルの撃針をレーザー式にしたと言ったじやろ？その時にな？弾の……いや、薬莖内の火薬の量を減らして小さくすればもつと装弾数あげれるんじやないかと思つての？」

実行してみたんじやよ、と言いつた。

「……それだと初速が得られないのでは？爆発力がないとバレル内で飛ぶ力も……」

「その点は大丈夫じや、レーザー型撃針を補助するために薬室内少し後ろに炎系テクニクの術式を埋め込んだ。万が一レーザー型撃針がおかしくなってもこれでいけるはずじや」

と言うかそれが有るならレーザー要らなくない？と言う言葉を飲み込み、取り敢えず頷く。

「……まあ、そうなら……」

と言うかこれ既存の弾薬使えんの？

「そして聞いて驚け？このマガジン。こう見えて90発入るんじやぞ！」

「…うーん、すごい様な微妙な様な…」

実際撃つてみないと分からない。本当に90発も入っているかさえ。

「まあ待て。お主はアレじゃろ？トリガーハッピーというやつじゃろ？分かっている。もつと撃てるようにどうにか考えておくから待つておれ」

その間これで我慢してくれ、と言い更に装填されたマガジンを5個くれた。

「…でもこれで450発と考えれば…うーん」

「はっはっは！まあ、そう悩むな！さて、俺はそろそろ戻ってコレの件を書いて各会社に送らねばならん。済まないが失礼するよ」

そう言い店の奥に行くジグさん。

「…うーん、今思ったけど、このオラクル船団だっけか？フォトンが無くなったらどうすんだろ？」

一応調べた結果が無くなることはない、との事だった。

フォトンとは真空、空気ーと言うかそこら辺にでもある、物、なのか、無、なのこ分からぬ何からしい。但し、使用は出来るからあるとか無いとか…うーん、分からん。

まああれか、超絶弱い電氣的なもので見えないのか？

そう言いながらも返してもらったライフルを腰に付けてシヨップエリアを抜けてクエストカウンターに向かう。

クエストカウンターにある休憩所でアキ博士とその助手のライトさんが俺の事を待っていた。

「来たね。それでは火山洞窟に向かおうか」

「ユウナさん、アキ博士を宜しくー」

「何を言っているんだいライト君。君も行くんだよ」

「えええ☒本気ですか☒ぼ、僕もですか☒」

そう言いオーバー気味に驚くライトさん。俺も驚いた。

「…ライトさんは…そのアークスなんですか？」

「そうだよ、一応ライト君もアークスに所属しているー取った時は後ろからーいや、最下位だったね」

「そうですよ…あの時僕の前にいた人が不正をやらなければ…」

そう言いながらも俺から視線を外し、メガネの位置を確認する。あれ？さつきまで普通に目を合わせながら会話していたのに…なんで急に？

「所で何をやったんですか？私、最近発見された第8世代らしくて訓練らしい訓練を受けていないんですよ」

と言うか訓練なしの第8世代と軍同然だったそれ以前の世代だと、やっぱり色々と違う。特に筋力とかこう、複数で戦闘する時とか明らかに。

「…：えっ、と…まあ、色々ですよ、色々…」

「あとユウナくん。そう言う畏まった話し方じゃなくて良いよ。君のレポート動画で普段の話し方は分かっているから」

「…あ、そうですか…わかりました。多分そうします」

「素直でよろしい。して、ユウナくん。ライト君。火山洞窟に実地調査に向かうとしよう。目標は龍族だ」

「おおお！」

「お、おお…」

内心こんなので大丈夫かなあ、と思いつつクエストカウンターから火山洞窟に跳んだ。

71 話目

——惑星 アムデイスキア 火山洞窟——

「アキ博士ええ、もう帰りましようよお…」

そう言い不安げな声を出すニューマン——ライトがアキ博士に言う。

「何を言うんだいライト君。まだ一人とも会ってない——ユウナ君、横、失礼するよ」

ただ今絶賛多数のダーカーと交戦中。

ひたすらヴィダブラスタを撃ってはいるものの、中々弱点である中央の赤い部分に当たらない。

お前脚ごと貫通しろや！ダーカーの脚の装甲は何か？空間装甲——って尚更運動エネルギーで貫通するやん。フォトオオオンツ！カモオオオン！

と言うか明らかにマガジン式だった奴より弾速が遅い気がする。

これ規定の初速と貫通力得て無いだろ☒

かと言ってポイ捨ても出来ない。まあ確かに90発も撃てるから弾幕張って動かなくさせることは出来るのだけど…。

「うわあああ☒」

ライトさんの声に驚き、前に弾を貼りながら後ろを見る——…：うわあ…アキさんの後ろでうずくまってるよ…。

「ライト君…：それにしてもダーカーがやけに多いね」

「——はい、ここに来たのは——まだ2、3回ですけど…：こんなに居るとは…」

背中に居るライト君の前に二人で立ち、向かってくるダーカーを只管倒す。

「——グレネードシエルを使う。再装填する時援護頼むよ」

そう言いアキ博士が片膝立ち——いや、しゃがみ撃ち、だっけか？

もつと別の名前があったと思うがーし、グレネードを撃つ。

緩いへの字を描いてダーカーの上で炸裂、数十グラムの炸薬が爆発した。

その間も右に左にと弾をばら撒く。

数分もすれば居なくなり、アキ博士が俺に聴く。

「ー周囲に敵はいるかい？」

「ーいえ、今の所は居ないですね。全滅、しましたか？」

カサカサ動くGの様な音も聞こえない。今の所は。

「ーふう、何度やつてもダーカー戦は嫌だね。かと言って実地調査を行いたいのも事実だ」

「……？お、終わりました、か？」

そう言いアキ博士の背後からライトさんが出てくる。

「…ライトさん…」

後ろでうずくまっていたライトさんがアキ博士の背後から出てきた。

と言うかライトさんも背後からその杖で援護してくれたら良いのに…と言うかちゃんとしたテクニクを見たい。

「…またか。いい加減戦えるようにしておかないと、色々と危ないぞ」

そう言い武器を下ろしライトさんに言う。

「は、はい…分かってます、アキ博士…ー所で…その…ユウナさんは怖く無いんですか？」

「んっ？アークス？超絶怖いよ？すぐ辞めたいぐらい」

そりやそうだろ、何でこんなGみたいな奴と戦わなけりやなはんのだ。そんなのは火星だけで十分である。ー火星つてデイソーダーとか居そう。

「なら何でアークスをやっているんです？」

「…まあ、他に何が出来るかって考えたらねえ…特になかったわけよ」

ポスで調べてみると結構酷いこと書かれている。少し書けないけど。

「……」

そう言いライトさんがミミと尻尾を見る。

「まあ、見た目がアレだからな」

「だったらウチの研究所に来るかい？」

隣で周囲を見渡しているアキ博士が放った。

「…それは人として、じゃない？」

「ははっ、まあ人道的には、ね？」

「にしても、ダーカーを倒していたら…結構いい時間になってしまったね」

モニターを空に出して今の時間を見るー12時、か。

「…まあ、昼過ぎてますからね」

「道理でお腹が空くわけだ。ーまあ、それとして、私とキミーあぁ、勿論、ライト君の奮闘もあつたけど…良く凌げたねえ、今思い返すと…特にキミ。大したもんだよ」

「ーアキ博士！お昼！食べ物食べましょう！博士が作ったお弁当も！」

「そう言いナノトランサーから各種お弁当を出す。ーえっ？誰が…？」

「これ！なんとアキ博士の手作りなんですよっ！博士って料理は科学と一緒に言ってるーもうすごいんですよ！」

「よしてくれライト君。ほら、取り敢えず塩分補給だ、いくら戦闘服が熱さを無効化に近い事をしてくれるとは言え、取っておく事が無意味になることはないー」

「そう言いお弁当を手に取り一口ー確かに美味しい。」

「ーそうだね、昼食がてら、龍族の話でもするかい？」

「…そうですね、お願いします」

「昨今敵愾心がーまあ、一部例外もいるがー強い彼らだが、昔はそうでも無かったらしい」

「まあ、今も現場レベルでは有効だが…いつまで持つかもわからないと言うのも現状だ」

「アキ博士はどの位…上の、その…」

言葉が出ない為、言い淀んでいるとライトさんが隣から助け舟を出す。

「ーアークス排除論、ですね？」

「ー…ええ、その排除論。それがーその思考が末端に来ると思いますか？」

「龍族は、元はとても好戦的な種族だ。それがアークスと遭遇し、ある程度の文化、と呼べるものを持ってから、まあその好戦的な部分を抑えられない龍族が多かったら案外すぐかも知れない。ーまあ」

「それを調べたり、龍族の造りを調べたりしたいから来たのだがね。ーさて、話を戻すよ」

「ーさっきの話の通りオラクル船団と龍族はかねてより交流を持っていたのだよ」

「言語の解析も完璧とは言えないか終わっているし、話の通じる者だって結構いる筈なんだがねーおや？」

「そんな事をお弁当を食べながら話しているとー何か歩く音が聞こえる。」

「…ほお、ビーストと言うのは音を得る時そうやって聞き取るのが。本当に……」

「待ってください？と言うことは…」

「そう言いサンドイツを口に頬張りながらライトさんが言う。」

「多分龍族かも知れないーユウナくん。食事は中止だ。どこらへんか案内してくれないか？」

「大まかですけど」

「頼む」

「それから音の発信源に向かいーいた。本当に龍族が。」

「ー御詠え向きに龍族じゃないか」

「どうします？接触しますか？」

「そう言いギガツシユの位置を確認、ライフルのセーフティを解除する。」

「いや、キミの様な実力者が接触すると襲ってくるかもしれない。…なあに、大丈夫だ、私に任せってくれたまえ」

「そう言いライフルをライトくんに預け、龍族に向かって近づくとアキ博士。無論両手を上げて。」

「なあライト君…俺の見方が変じゃなければ…あの頭のとてー」

「ええ、多分、侵食されてますねーああ胸にもコアがほらっ、あそこー」

「何で博士はそんな奴に」

「多分、龍族に会えるから思考のどっかに吹っ飛んでるんですよ」

「そんな俺たち二人の言葉を空に放り投げ、ゆっくりと近づく。」

「やあやあその龍族さん、少しお話でもー」

『ヴヴァアウウ…』

「そう畝るとーなんか頭に直接声がー声なのか？これ。」

「うん？なんだ、この頭に直接聞こえてくる様な…もしやコレが、龍族の…？」

「龍族は右手のシールドを構えた。」

「は、博士！どう考えても友好的ではありません！」

「分かってるよっ！五月蠅いね！」

「そう言いアキ博士がライトさんの方を見る。視線を変えたのを好機と見たか、龍族が飛んでージャンプ斬りをしてくる。」

「お、おい！向かってー飛んでくるぞっー」

「そう言いアキ博士が後ろに走る。」

「ー博士っ！下がって！」

「アキ博士の方に走り、ライフルを構える。」

「ブレる照準器を覗きー取り敢えず頭だ、人型に対しては頭が有効のはずだ。」

「トリガーを引き弾を撃つ。しかしシールドに阻まれて貫通せず。」

「そのまま突っ込んで俺に剣を振りかざした。とつさに銃でガードしてー超手が痛え！」

「両手で銃を持ち、それごと切ろうと力を掛ける龍族に対し、脚で押し一回転。」

「そのまま銃を左手に、右手を腰にあるギガツシュに伸ばし、遠心力」

でそのまま龍族の盾ごと横から吹っ飛ばし、空を飛ぶ。

「おりやあー！」

『グツ…オオオオ…』

そのまま地面に落ちてー死んだ、のか？

「流石だねキミは。私とライト君だったら死んでいたかもしれんな」

「ホントですよ！無茶はやめてください！」

「はあ、はあ…死んだ、か…？」

初めて人ーに似た生物を倒した。手が震えている。

「大丈夫かい？」

「は、はい…大丈夫、です」

「取り敢えずあのおかしくなった龍族の調査と行こう。ライトくん、きたまえ」

そう言うのと龍族の死体に近づきー何処からともなく、つてナノトランサーからか。そこから色々な器具を出した。

「…うーむ、ユウナくんに救って貰ってなんだが…原型を余り留めてないな」

そう言い手袋をはめて龍族の死体を解剖つて言うのか？していく。

「き、気持ち悪いいい…は、博士、良くそれを触れーうっ、おええっ…」

そこまで言うのと、後ろを向きー吐いた。

「ライトくん、助手を名乗るなら分かりたまえ。私は生きる者の研究をするのが好きなのだ」

「終わった物には興味が無い。これはただの物だ。触れない訳がない」

その話を顔を合わせず淡々と話す。

「よし、内臓は…」

「うわっ、うわわっ…うわああ…」

「ライトくん、五月蠅いよ。興味があるのか無いのか、スタンスをはっきりさせたまえ」

「…やはり、予想通り、か」

しばらくして解剖が終わるとアキ博士が考え始めた。

「あの組織の細胞の変異…あのサイズだとそれ程立っていない…しかし…だが…あれと…これで…。…と、すまないねユウナくん。一人で納得していた」

「簡易的にだが内部組織を調べた。間違いなくダーカーの侵食がある。アレは恐らく…いや、確実に体内に蓄積したものだ」

「フォトンでは無い力で強引に倒しても残りカスが…いや、この話はしたことがあるか？」

「…いえ、多分無いかと」

「…まあいいか。簡単に言えば塵も積もれば山となるって事だよ。詳しくはポストかで調べてくれ」

「まあ、幸か不幸か、組織片は回収出来た。これで研究が進む」

「だが…根本的な所は龍族…上位種と話が出来なければ…解決はしないだろうな…」

「さて。奥に進むとしよう。もっと…出来れば大きな竜族の組織片が欲しい」

「分かりました。行きましょう。…まだサンドイッチありますか？」

「…ライトくん、まだサンドイッチはあるかい」

「そ、そこの中がいい…おえええ…」

「…アキさん、辞めておきます」

「そうか。それじゃ、ライトくんが終わってから出発しようか」

因みにライトくんの吐き気が止まったのは五分後である。ライトさん、博士助手って合ってなくない？

72 話目

——惑星アムデイスキア 火山洞窟——

周辺を警戒しつつもさらに奥へ。

「…そうだ、ユウナくん。これを渡そう」

「そう言いアキ博士が渡してきたのは——モノメイトと同じ容器だ。

「何ですこれ」

「確かデイメイトだったかな？トリメイトだったかな？まあ、モノメイトの改良型だよ」

「そう言い渡された容器を見る——そこにはデイメイト、消費期限
新光歴239年4月と書かれている。」

「と言うかオラクル船団の年号、しんこうれき、で読み方あつてるのか？初めて知ったぜ。」

「……んっ？」

歩きつつデイメイト——モノメイトの味の改良型を飲む。

「それはモノメイトより細胞の再生速度が——いや、単に受けたダメージが治るっていう事かな。モノメイトより速く」

「…それって大丈夫なんですか？」

「ヒューマン、ニューマンは何も異変はなかった」

「はえ…ニューマン、ヒューマンは大丈夫——あれ、ビーストは？」

「ほら、今やつてるだろ？」

「人体実験じゃないですか！」

「科学というのは人体実験で——」

「等話しながら火山洞窟の奥に向かう。」

「奥に進むと会話のできる龍族の村らしき所を発見した。」

「見たまえライトくん。こんなに龍族がいるぞっ」

「は、博士ええ、見てくださいよお、明らかに歓迎されてませんよお…」

「ユウナくん。まだ武器に手をかけてはダメだ。我々アークスは無害
ということを——」

『なんだ また アークス か』

『あの 黒い者の 排除 に 来ている らしい』

『そう言えば あの アークス 何処かで』

等周りで言われながら奥に向かう。

すると四角の石らしきものが積まれた扉の様なもの前に四人ほどの龍族がいる。

どうやら警備しているらしい。

『そのの アークス ここから先 は 今 は 通行 出来ない 引き返せ』

そう言うのと引き返せと言われた扉らしき物の奥の方から龍族の唸り声が聞こえる。

『どうしたんだい、奥の方で唸り声が聞こえるのだが』

『今 ロガ様 は 心の居所 が 悪い アークス を 見たら 闘い を 挑んで 来るかもしれない』

『もしかして龍族どうして喧嘩でも……?』

アキ博士の後ろで小声で言う。龍族でも喧嘩するのか…。

などと思っていると扉が開いた。中からは複数の負傷した龍族が出てきた。

『どうだった ロガ様 の 様子 は』

『ダメだ こちらの話を 全く 聞きはしない』

『くそつ 幾ら 我々 龍族 の 上の連中 が 強いからって あの 黒い者 に勝てる筈が 無い』

『ああ、ロガ様 がおかしくなったのも あの黒い者と闘い 始めてから だったな』

『……待ってくれ、君達の言うロガ様、だったか?彼はもしかしたらー』

『…はい、博士。D因子に侵食されている可能性がありますね』

『…その龍族。少しロガ様を見ることはできないか?なに、遠くからでも構わない』

『どうしますか アヤル』

『どうしたものか アークスよ 確か貴殿達は 黒い物ー其方のダーカーと呼ぶ物を 倒せる の でしたか?』

「ええ、倒せますよ」

『では 一応 見てもらおう アサキ 案内 を 頼む』

『はっ では こちらへ』

そう言い目の前の龍族についていく。

高台に登り問題の龍族を見る。

『あちら に 居る 方 が ログ様 です』

そう言い奥で複数の小型龍族が困っている大型種——ヴォルドラ
ゴンをみる。

『ログ様ッ！ 静まりくださいっ！ 何故 暴れ 何故我々を攻撃す
るのですっ！ お答えください！ ログ様っ！』

「ぐっおおっ！」

そう言うところログ様と言う大型龍族——ヴォルドラゴンだったか。
それが吠えて火球——いや、アレは火炎放射か？それが周りに居る龍
族に当たる。

「ぐっおおお」

「グアア☒」

『ぐっ——ロ、ログ様……な、何故なのです……！』

ヴォルドラゴン前方で展開していたシールドと剣を持った龍族が
倒れていく。

「は、博士っ！龍族同士の喧嘩ですよっ！マズイですよっ！離れま
しょうよっ！」

「その筋も否定はしない、が声を聞く限り、そうではなさそうだよ——
さて」

そう言いアキ博士がホログラムを操作して——拡声器みたいなも
のを取り出した。

高台から一歩出て拡声器を口に近づける。

「——え、ちよ、博士っ！もしかして首を突っ込む気ですか☒」

ライトさんが手を出そうとするもそれをスルーする。

「……ん、ねえ、ライトさん。あの頭のアレって……」

そう言いライトくんの肩を叩き、ヴォルドラゴンの頭を指差す。

「…えっと、少し待ってください。なにぶんメガネをつけているので…少しピントが…」

「そう言いメガネを斜めにしてみる。」

「ライトくん。それピント合っていないでしょ」

「あれ、分かります?」

「そうやってレンズの厚さを傾斜させて見るとはつきりするやつ。俺も多用したなあ…昔は」

「昔って…ユウナさんは何歳ーあつ」

「…まあ、聞かなかつたことにしとくよ」

話しているとアキ博士の話が続く。

「説得は無駄だ! 龍族のキミ! ダーカーの侵食を受けて、正気でいられる筈が無い!」

『…アークスカ 今 貴様達 に 構っている 暇はない 去れ!』

「ーあ、ほらほらっ! 仰る通り帰りましょうって! 危ないですよっ! ほらっ!」

龍族の言う言葉に乗じてライト君が立ち上がりアキ博士の体を掴み後ろに引き込もうとする。

「五月蠅いね! ライト君! もう君は黙っていてくれたまえっ!」

それを振り切りさらに言う。

「ーさて、龍族のキミ! そうは言うが、目の前の彼をどうするつもりだい」

『ヒ族 の ログ様 は 我等が標 だが 同族 を 侵す 著しい 掟の侵犯』

『掟を破りし者 悉く カツシーナの 元 へ』

「カツシーナー龍族に伝わる神話の、地獄龍だね。成る程成る程。殺すって事か」

へえ、龍族にも宗教があるんすねえ…。響き的にインド的な?

『賢しいアークス 何を考えている』

「任せろ、と言おうと思つてね。生きている者を見捨てるなんて勿体無い事、私に出来るものか」

「そう言い拡声器から口を話し、俺の方を向く。

「いいかい、ユウナくん、あの龍族なら、フォトンで浄化ーいや、攻撃すれば間に合うかもしれない。救えるかもしれないー」

「ー確認ではない、実験になるーが、やってみるだけの価値はある」

「まじか……やるっきゃないのか」

「大丈夫だ。その分報酬はあげるから。そうだね……この位とか」

「そう言い報酬金額を見せるアキ博士。」

「ええ☒いや、確かに命張ってますけど、流石にこんなに……」

「これで龍族と関係の回復や龍族の今のデータ、更にダーカーに侵食された者を回復させる事が出来るかもしれないんだ。下手すればダーカーの脅威から守る事が出来るかもしれない」

「……ああ、もうっ！分かりましたっ、やりますよっ！」

「わかった。ありがとうーほらっ、ライトくん。君も逃げようとしてない」

「ええ☒だ、だって！あんなに大きな者と戦うんですよっ！ダーカーでもあんなに大きい居ませんって！」

「っべこべ言わず！ほらっ」

「そう言い二人揃って下に行く。

「えっ、ちよつと☒」

「ライフルを握りコツキングレバーを引く。

「初弾がチェンバーに装填され、セーフティをシングルに。

「左手に持ち替えて、右手にギガツシュを握る。

「……っし、行くかっ！」

「そのまま先に向かった二人の後を追う。」

クリスマス番外編

マイルームのコタツに入り、ふとカレンダーを見る。
今年も後10日も無い。

『ーーはい。こちら現場のーーーです！今年のクリスマスも沢山の人がーー』

テレビではいつもの様にーーまあクーナやマトイに気絶させられていたお陰でまだ2回目ぐらいだと思っていたけどーークリスマスだと騒いでいる。と言うかオラクル船団にもクリスマスってあるんだな。

「なあアフィン」

コタツから上半身を出してコタツのテーブルの上に乗っているーー地球直産のミカンを食べる。

「なんだ？」

「…何でいるの?」

そう言いながらアフィンもミカンに手を伸ばす。

「いや…予定無いし…」

そう言いながらミカンを口に運ぶ。

「…いやだからって俺の家に来る?腐っても女だぞ?」

「……え」

「は?ーーそもそもアフィンは家族居るんでしょ?ユクリータさんと家族で家で過ぐせばいいじゃん」

「いや、ちよつとな」

そう言いテレビに向き直る。

「ーーなあ相棒。何でわざわざ地球の番組を見ているんだ?」

「いや…あのゴタゴタの時にな?テレビを見ていた時に少し興味が、な」

そう言い口からみかんの皮を出してテッシュユに包み捨てる。

「…なあ相棒。ミカンって確か皮ごとーー」

「まあなんだ。俺の食べたいように、な」

「そう言い食べ終わった後コタツに入り寝そべる。」

「……あ、そうだ相棒、メル姉妹やクーナさん、ゼノさんエコーさんがフランスカフェでアークスクリスマスパーティーしようだって」

「横になり今日何すつかなあ……と考えているとアフィンからパーティーのお知らせが。なんだそのやけに長いパーティーは。」

「……何時から？」

「ええ……確か午後4時かららしいけど……相棒、今何時だ？」

←

今は午後の三時半だ

↑ Yes

／ No

今は午後の五時だ

「……今は三時半、だな」

「どうする？行くか？」

「どうするか……。ーあ、マトイからメールだ」

「そこには一緒にパーティーに行こうとの内容が。」

「……どうやらマトイも任務から帰ってくるらしい。先に行くなら今の内だぞ、アフィン」

「……そうすつか。一度ウチに帰って服を着替えてくるわ。ああ、間違っても戦闘服のまま来るなよ？」

「ええ……別に良いじゃん。尻尾の穴あけ面倒なんだよ」

「分かったから。マトイちゃんと来るようにな」

「……はあ、お前もユクリータさんを連れてこいよ」

「……どうにか、な」

「そう言うのアフィンはコタツから出てそのまま玄関に向かった。」

「はあ……面倒だなあ……」

「そもそも俺は人前が好きじゃない。今でこそ一人で深淵なる闇を倒したとか、神様に喧嘩売って勝ったとか色々と言われてるけど……」

「……そもそもなんで俺がこんなに面倒な奴と戦わなければいかんのか」

そもそも普通にアークスやって適当にメセタ稼いで暮らしたかったーいや、シオンに見つけられた時点でアウトか。

「…俺が着れる服あったっけかなあ…」

そう言いノートパソコンをコタツの上に持って来てダンスの中身を調べる。

「こいつは…」

目に止まったのはホーリーキャロルドレスとフェリシテノーチェだった。

これは少し前にマトイと二人で買い物に行つた時に買ったのを思ーい出した。

「……冬だしこれで良いか？」

それを身に付けるーふむん、以外に悪く、ない？

奇跡的にも尻尾がスカートの下に来るようになってるから…驚かない限り、見えないか？。

そんな事を思っていると玄関が開いた。

「おまたせーユウナちゃん！パーティに行こっ！」

玄関から入ってくるなり、早く行こうと言い立てる。

「だったらマトイも着替えないとーってはやっ！」

そう言うとすぐさま着替えてーあれ？

「マトイ、それは俺しか買ってないような…？」

「えへへえ…あの時にもう一着買っておいたの。こんなに早く着ることになるなんてねえ」

そう言いマトイはどちらも薄いピンクの入った服を見せる。

「…よし、そこまで言われちゃ行くしかないな」

「やったあー！」

「その前に電気を消していかない…」

ショップエリアに付属するようになっているのがココ、フランスカフェ。元はラフリのオーナーの娘さんが自分の店を持ちたいとの事でコレを経営。フランスカフェとは付いているものの事実上の二号店である。

中に入るとーそこには雪景色が広がっていた。

「ひゅ…あれ、口笛出来なかった」

「へえ、ココがフランスカフェの冬バージョンかあ…色々寒そうだねえ」

続々とカフェにアークスに所属している人が入って来ている。

「さあマトイ。俺たちもいかないとな」

「そうだね」

「あ！おーい！ガーディアンの二人が来たぞオオ！」

「来たか！アークス最高戦力！」

などと言われー顔を下に下げたくなる。

「おうルーキー。そんなんで最高戦力が務まるの思ってたのかあ？
ちゃんと上向いて歩け！」

「あ、ゲツテムハルトだ!!」

「ダークファルスから戻って来た漢…」

「ゲツテムハルトさん、身体は大事なんですか？」

「ああ、少し力が出ねえが問題ねえ。まあ問題があるとするれば…」

そう言い奥の方を見ると首を指す。そこにはー。

「ディア！ケーキを持ってきてくれる？」

「シーナ姉さん…もう4ホール食べてますよ…」

そう言いディアさんの周りにはケーキの空き皿が3枚ある。

「大丈夫よ！ほら、私達ってニューマンだから！太りにくいから！」

「ゲツテムさんが『最近太ったような気が…』って言うのを聞きました
が？」

「げっ！き、気のせいよ気のせい…」

とかディアさんも言っているが…二人揃って結構食べてない？

「すまんがああ二人を止められるか？」

「無理です」

「ご、ごめんなさい…」

「だよなあ…」

「おーい！ゲツテムハルトおおー！」

「すまん、読んでいるみたいだ。まあ、このパーティを愉しめよ」

「そう言いゲツテムハルトは俺たちから離れていった。」

「なあマトイ」

「なに？」

「ゲツテムハルトさんって…私服持っていたんだなあ」

「そりゃ、人だからねえ…」

「そのまま受付の方に向かってしていると次に会ったのは。」

「げっ、ルーサー…」

「おや、人を何かと言えば。敗者呼ばわりとは。あんな出来損ないとは一緒にして欲しくないものだがね？」

「そう言いつつも白いスーツみたいな戦闘服のまま現れた2代目ルーサー。」

「でもユウナちゃん？この人はルーサーであつて敗者びやないよ？」

「いや、まあそうだが…」

「なに。私とて愉しみたい時もあるのさ。それに今はそれ程全知に興味は無いしね」

「……」

「おやおや、そんなに見つめられたら困るじゃ無いか。まあ、敗者が君達の中のルーサー像を固めたのは困ったものだが、それでも私はルーサーなのでね。ーまあ、もしかしたら過去の僕が僕である内に作つたって事だと同じ意味になるが」

「……ルーサーさん…」

「まあ、君達も式を愉しみなよ。僕もそろそろー」

「ールーサー兄様！早くたべましょう！」

「……すまない。私の妹が読んでいるみたいなのでね。それではまた」

「そう言い奥に消えていくルーサー。」

「変わったな。ルーサーも」

「うん。全部ユウナちゃんが変えたんだよ」

ふと周りを見渡す。

見知っている顔だとサラとクラリスとルーサー曰くイリスだったかー。クラリスがどう言う食べ方で食べるかで言い合っている。

「…マトイも行ってくるか？」

「…でも」

「俺は一人でも大丈夫だ、問題ない」

そう言うマトイはクラリスとサラの元に向かう。

他にはウルクとテオドルがウルクの無茶に付き合い、ロジオとアキ博士とライトさんとその他数名の科学者がテーブルを囲い色々ツマミつつ何か難しい話をしている。

ゼノさんの周りにはエコーさんとレギアス、マリア、カスラさんの六芒のメンツが集う。

いつもの様にオレンジジュースを貰い一人外に向かう。

殆どーいや、全てと言って言い人が中ではしゃいでいるため外には誰もいない。

「ふう……」

そのまま空を見上げる。何も遮るものがないのかすごく綺麗に星が映る。

「……居ない、か……」

少し前に露わになった惑星地球。そこで色々ありそのまま技術交流することになった。幻想種も出てくる事だし。

もしかしなくても俺が生まれた星ーーと思っただが……シエラにハックしてもらいデータを抜き取って貰った。

……確かに親は居た。じいさんやばあさんも居た。

ーー但しそこに俺のデータは無かった。居なかった。

あの星では…俺は生まれてすら無かった。

「……悲しいなあ……」

ぐすんと頬を伝わる涙。

「どこまで言っても……結局は一人、か」

「いや。君は一人じゃない」

「そう言い目の前に現れたのはー!。」

「シャオ、か」

「そうだね。久し振り」

「ああ、久し振り、だな」

「…隣座つても?」

「ああ」

「ぼすつと座るシャオ。」

「……なあシャオーいや、何でもないわ」

「生きるとは何かを全知全能の弟分に聞きそうになった。」

「どうしたんだい?泣いていたようだが」

「……俺の事…シオンから聞いていたか?」

「…ごめん、聞いてない」

「そっか……」

「そう言い黙るシャオ。」

「その、僕が言うのも何だけど…何か相談が有れば行つて欲しい。シオン程じゃ無いが僕だつてアカシツクレコードへの鍵ーまあ制限はあるけど、持っているんだ」

「それにほら、周りには君の助けになる人が沢山いる。その人たちにも助けを求めたらいいんじゃないかな?」

「そうは行つてもなあ…」

「それにーあつ、次のお客さんのようだね。それじゃ僕は失礼するよ。サラの事をからかってくる」

「ふつ、と消えるシャオ。それと同時に雪を踏む音が背後から聞こえる。」

「ここに居ましたか」

「……クーナ、か」

「はい、会場内に居ないので探しに来ました」

「そうか」

「……隣、良いですか?」

「ああ」

「クーナもシャオと同様に隣に座る。」

「そのテンションだと…アサシンの方か」

「いえ、これが私の素なんです。アイドル時の方が偶像なんですよ」

「アイドルだけにか？」

「…そうですね」

そう言い2人で空を見る。

「ねえユウナさん」

「なんだ？」

「ハドレットと戦った時…あの時は本当にありがとうございました」

「…まあ死になつたな。あれは」

蘇るは虚空機関が造つた造龍のハドレット討伐。アレは本当死ぬかと思つた。

「こう見えて私はあなたに凄く感謝しているんですよ？」

「そうか」

「…ユウナさん、どうしたんです？」

「いや…なに、関係ない話さ」

「そうですね…なら、良いのですが…」

そう言い俺の膝の上に頭を乗せるクーナ。

「ユウナさん。私は…そうですね、アークス全員が敵になろうともあなたの味方ですよ」

「いつ俺はヤンデレに感謝されるような事をしたんだ？」

「ふふっ、ですが何かあったら私達に言ってください。力になりますから…あと」

「なんだ？」

「どうしたらおっぱい大きくなります？」

「サンタにでも頼め」

「…まあ、そうなりますよねっつと。皆さん待ってますから」

そう言い顔を上げて会場に戻っていくクーナ。

「…味方、ねえ…」

味方と聞くとある言葉を思い出す。俺たちには味方なんていない。そう、誰にも。

まあその後が続く言葉がアレだが。
からん、と入れてもらったオレンジジュースの中の氷が音を立てる。

まだまだクリスマスは始まったばかりだ。

「…美少女に囲まれているだけマシか。俺も女だが」

そう言いグラスを持って宙に上げる。

「…乾杯、そしてありがとうー」

「ーションさん」

73 話目 VS ヴォル・ドラゴン

——惑星 アムデイスキア 火山洞窟——

2人の後を追い、先程まで龍族の闘っていた闘技場の様な大広間に入る。

『此方も ランチャーの 扱い が 上手い 龍族 が 援護 に 入る 注意 されたし』

『お二人は 先に 入って おります ご武運 を』

『各 ランチャー 持ち は 崖上 から アークスの 援護 盾 と 剣 持ち は アークス と 共闘 し ログ様の 鎮圧 に 当たれ』

2人の後を追い大広間に入ると、左右の崖から複数の——翻訳ではランチャーと言っていたが、ありやテクニクだな。多分。氷系かな？

「さあユウナくん。あのドラゴンを倒そうじゃないか」

そう言い石の扉の前で俺に言う。

「は、博士えー！今からでも遅くありません！援軍を呼ぶべきでは☒」

「ライトくん、コレは龍族からしたら——そうだね、私達アークスが本当にダーカーに対し効力を発揮するのかを見極める戦いであると私は思っているよ」

「ダーカーなんてアークスに掛ければ簡単に滅つせるじゃないですか☒なんで今更☒」

「ほら、さつき私はカッシーナがどうたらこうたら言っていただろ？」

「…死んだらカッシーナの元に行く、でしたっけ？」

「そうだ、ユウナくん。龍族は——別に身体は無くなっても困らないんだ。また生まれ治せるから」

「だからだろう。龍族の上層部は死ねば戻る——デスルーラが効くって思うのは無理が無い」

「…博士？デスルーラって言うのは？」

「…確かゲームでクリアした後わざわざ戻るより死んで入り口とか街に戻る事でしたっけ？…と…言うかライトさん…ゲームやらないんですか？」

「と言うかこつちにもルーラみたいな魔法…いや、テクニクか？それを使うゲームがあるのか？」

「ええ、一応アキ博士の助手なので。研究一筋なんです」

「でもアークスの資格持ったんじゃ…と言おうとしたがやめておこう。アキ博士がこちらを見ている。」

「…つづきをしても？」

「ええ、お願いします」

「まあ、つまり死ねばダーカーに侵された身体は元に戻るって思っているんだろ。…実際は魂をも侵食するんだがね」

「…本当にダーカーは怖…」

「そう言う…と目の前の四角の石の扉が消える。」

『さあ アークス よ 後は頼む ダーカー と やら に 侵された ロガ様 を 倒し 救って見せてくれ』

奥に進むとヴォルドラゴンがその場で留まっている。

此方を見つけると一声鳴きゆつくりと近付いてきた。

「さあ、やるぞ。ライトくんは後ろで…バーバード系のテクニクを。」

ユウナくんは…ソードとライフルで臨機応変に」

「要するに適当にやらって事ですか」

「その方が楽だろ？」

「はあ…頼みますから援護して下さいよ」

挨拶代わりに左手でライフルを撃ちながらドラゴンに近づく。

ヴォルドラゴンは前かがみの姿勢になり…火炎放射をしてきた。

そのままライフルで撃ちつつ左側に回る。

「…左に回るか。なら右から回るよ」

「…そう言いアキ博士は距離を離し、右側に回り貫通弾や…追尾する
確かP・Aを放つ。」

「えつと…ああ☒シフタとデバンド忘れてましたあ☒」

そういながらバーダ系のテクニックを闇雲に放つ。

ライトさんの声に俺も思い出し、左手に付けているタリスのカードーシフタとデバンドのテクニックを使う。

効果は攻撃力と防御力のアップー後者は戦闘服にフォトンを纏わせるで分かるが…攻撃力アップとは…？ライフルの弾に装填されているフォトンが活性化するのか？

左回りに行くとー明らかに怪獣を狩るゲームなら壊せそうな翼に目がいく。

ライフルのレーザーサイトを翼に合わせて、左手のソードを背中に戻して狙う。

タ、タ、タ、タ、と射撃音がして数十発が命中する。

アキ博士の方を見るとリロードしているようだ。

ドラゴンは博士の方に目をくれず、そのままこちらに向かってきた。

リロードしようと思っていたけどまだ弾は入っているはず。そのまま腰に置いてソードを構える。

そのまま突っ込んできたからー

そのまま身体に飛び乗れた。

「えっ☒ユウナくん☒」

「ええ☒」

ソードをドラゴンの背中に刺して、横に広げる。

「クスリはあ!??飲むより撃つに限るってえ!??」

空いた傷にライフルのバレルを差し込んで残りの弾を全部撃つ。

『ぐお…ぐお……』

頭に刺さっていた変なのー侵食核が飛散して何も無かったかのようになる。

ソードを抜き取りーありや、フォトンで覆う部分が壊れてる…。

抜き取ったソードを背中に背負って、ライフルも抜き出す。

広げた傷はみるみる治りー、

『……ぐっ……こ、れは……』

倒したヴォルドドラゴンが喋った。致命傷じゃ無かったのか。

『ロガ様！ 正気 に 戻られ ましたか！』

遠くで見えていた杖を持っていた龍族もびっくり。俺もびっくり。

「……賭けでは有ったが、上手くいっただな。龍族の肉体が強固な事を誇りたまえ。対処が早かったのも良かったと見る」

「と言うか結構な致命傷を入れられたんですがねえ……」

背中に穴空いて、しかもそこに銃弾をしょたま食らうって言う……。

『賢い アークス 何 を した』

「簡単な話だよ、龍族。内部にいたダーカーの組織をフォトンで滅したのさ。もっともー」

「ー大半は私では無くユウナくんのお陰だけだね」

俺じゃなくて銃弾です。1発……いくらだったっけ？

「怪我は何ともし難いが、それはまあ……龍族は自己治療も速い。時間が解決してくれるだろう」

龍族の自己治療凄すぎて……もうねえ……モノメイト飲んでる暇ねえわ。

『ー アークス の カ か』

「おっと、龍族のキミ。安心するのは速い。コレは只の始まりだぞ？」
「これからも同じようになるーダーカーに侵される龍族はまだまだ増えるだろう」

『…… 我等 に 何 を 求める』

「話をさせてほしい。龍族の上層部と、アークスに必要なのは、対話だ」

現場レベルだと普通にーさつき見たく共闘するんだけどねえ……
やっぱ末端は辛いよ、

『……』

一度ヴォルドドラゴンを見る龍族。ヴォルドドラゴンの方がうなづいたように見えた。

『我が名 は ヒノエン 名を聞こう アークス』

「私の名はアキ。助手のライトにー」

「ユウナ、だ」

『ユウナ 無礼 を 詫びる そして 感謝 を』

『ロガ様 を 救いし 力 その恩 を 忘れはしない』

ここから龍族との一対一特に上層部のでっかいのと交流が進み戦わなくて済むようになると良いなあ：あんなのと戦うとか命何個あっても足りねえ。

74 話目

——惑星 リリーパ 砂漠——

「龍族との会話が始まって休めると思ったらこれかよ、くそがつー！」
龍族との和解に成功？し、やっと休めると思ったら新たな任務が。
内容が惑星リリーパにて正体不明の龍族の確認情報がアリ。至急
確認しに行ってくれとのことだった。

因みに今回は複数のアークスとの共同任務らしい。なんだろ、某
ゲーム的に騙して悪いがとか来ないよね？来るなよ？

「ソードは壊れちゃったしなあ…次の武器どうすつかなあ…」
前回のヴォルドラゴン戦時に、ソードを刺して、そこから更に横に
広げた際にソードのーギガツシユのフォント発生装置にダメージ
が入り…お釈迦になった。

ジグさんに見せたら『新調した方が速いし安いぞ』とまで言われ、テ
ンションが少し下がった。一層の事パルチザンー槍でも持つか？

なので今回の武装はライフルのみ。
そのライフルもなんだか調子がー初速が無い。まあダーカーや
機種種なら何とかかなると思いたいが。

「それにしても龍ねえ…」

戦いたく無いなあ…只でさえ今回は1人なのに。他のアークスと
合流できれば良いが。

視線を下に落とし、ライフルの安全装置の位置をフルに。コツキン
グレバーを引き初弾を薬室に入れる。

まあいざとなったら見つけた報告して帰るって手もあるし…いい
か。

そういやリリーパにサーレクスの前線基地が作り終わったんだだ
けか。

定期的にそこからジャバスプとか言う、武装したA・E・Wだっけ

か？が飛行しているらしい。と言うかジャバスプとか言いにくい。もつと言いやすい名前考えてくれ。

そう愚痴りながらも前に進む。

時折機種種と遭遇するがいつものように頭にある弱点狙いで行く。何であんなー見え見えな所に弱点を置いたんですかね…？いや、楽だけど。

なかなか合わないので先に進む。まあそんなに直ぐに会ったら怖い。

「…なんか…ううん…」

周囲には人は居ないはず。なのに何故が人の気配を感じる。なんか女になってから視線を強く感じる。特に胸辺りにーアフィン！テメエの事だよ！

いやこんなにでつかい胸を見たら流石にガン見ーいや、アウトだろ。

いや、それは置いておいて。

定期的にライフルを腰に構えつつ周囲を警戒するが…特に何もない。

「まさか…幽霊…？」

こんな超技術の船団に幽霊なんて信じる奴なんておるの？なんて思ったが…アークスは未開拓惑星に乗り込む人たち。無論戦死者も居るはずだ。

「…じょーだんじゃねえ、さつさと終わらせて帰るー」

と言っていると後ろからーさつきまで周りに誰も居ないはずなのに足音が聞こえた。この音はー機種種やダーカーじゃ無い！

「くそっ、本物の幽霊かよっ！」

そのまま前に走り、地面に手を付けそのままUターン。それと同時に勢いをつけてライフルを構える。

「…あの…」

「…あんたは…だれ、だ？」

そこにはローピッチリスーツローまあ、俺も似たようなものを着てはいるが、もつと分厚いローを着た、へんな突起物を持った女のローここに居るってことは、アークス、だよな？

「あ、一応アークスです。はい」

そう言い蒼い髪の毛の女性が言う。良かった。アークスか。友軍だ、よかった…。

「なんだ…アークスか…どうやって付いてきたのかは知らないけど、後ろついてくるのやめてくれ。心臓に悪い。」

そう言うとはつ、としつつ急に睨んできた。

「…：分かっていたのですね？」

「おいおい…：どうしたんだよ、急に？同じアークスだろ？」

「…：今は良いです。所で貴女。こちら辺でデカくて黒いローいえ、灰色に近い黒色の龍を見ませんでしたか？」

「龍？…：もしかして、あんたローいや、貴女も探しているのですか？」

「…：まあそんな所です」

「そうか。いや、俺もまだだ。見つけ次第アークス管制官に連絡を取ろうとロー」

「ロー待ってください！見つけたら私に連絡をくれませんか？」

「ええ×いやでもロー」

そもそもコレはアークスからの任務であつてロー。

「分かりました。それでは依頼でロー私から

「お願いしますね？」

「はあ…：分かりました」

その後はそのアークスと少し話しをして別れた。

因みに謎の龍とは会っていない。良かった。合わなくて。

その後旗艦して任務の報告とマグをカウンターに貸すロー因みに見返したらあのアークスと喋っていた時間が無かった。俺の位置情報もその場で止まっていたらしい。

…：なんで？もしかしてヤバイ人だった…？

思えばあの睨み…いや、本当に？

そう何度も自問しつつ何時ものマイルームに。

いつもの様にお帰りとマトイが言う。

「お帰りなさい、ユウナちゃん」

「ああ、ただいま」

最近髪の毛の色が薄くなってきたような…マトイみたくあんなに
白銀までではなくて良いかなあ…。

75話目

「ねえユウナちゃん。そろそろ髪の毛縛ったらどうかな?」

訳の分からないアークスに依頼ー謎の龍を見つけたら連絡を、と言う依頼を受けて帰還後、マイルームテレビを見ていたらでマトイに言われる。

「縛るって…いや、後ろ見えないし」

「鏡を使おうよ。それに…地面に着きそうなくらいに伸ばしているとねえ…何かあった時、自分の髪の毛踏んで転んじゃうよ?」

そう言いテレビの目の前にあるテーブルに鏡を置く。

「…ほら、俺って不器用だから」

「不器用な人がいきなり正体不明の敵を倒せる?」

いや、そりゃ謎の敵を倒さなきゃいけないんだからね?ゲームとかゲームとかで弱点になりそうな所を覚えて、ひたすら撃つしかない。

「…ほら、アークスに撤退の文字はー」

「…そんな事どこにも書かれてないよ?」

「…え、うそ?」

「本当。ほら」

そう言いマトイが出したホログラムを、隣に座り見るー本当だ、無い。そんな事どこにも書かれてない。と言うか危なくなったら撤退しろとまで書かれている。どっかの防衛軍とは違った。

「はえ…本当だ」

と言うか本当に危ない状況だと逃げ切れないと思うんだけど。

「…兎も角、私が髪の毛縛るから。ほら、後ろ向いて?」

「ああ」

ーーー アークス船団 ショップ エリアー

マトイに長かった髪の毛を結ばれてー今はショップエリアにい

る。

何でも買ってきてほしいものがあるからとか。

だったらマトイも来ればいいものを…。

などと思いつながら一人シヨップエリアをぶらつく。

買ってくるものである食材―何でもマトイが料理をもつとした
いと何とか…それで色々試したいから買ってきてくれ、だった。それ
なら尚更一緒に来ればよかつたのに…。

買い物済ませて―勿論荷物はルームの管理者の方に行くよう
になつている―シヨップエリアの中央、噴水がある場所に行く。

噴水に近づくと―急に周りにいる人が止まった。

あれ？コレ前も…と思つていたらいつかの人に声をかけられた。
当然後ろの噴水も止まつている。

「新たなマト―ボードが発生している。どちらにも揺らぐ天秤の様で
あり、揺るがぬ標の様でもある」

「…この声、シオンさん、だつ、でしたか」

そう言い噴水の前に現れた女性―眼鏡をかけた黒い髪の毛―
が言う。

「得る者がいれば、得られぬ者も居る。それは摂理である。当然であ
る」

毎回―といったつて数える程しか会つてないが、中々、話しが聞
きづらないな。

「しかし、ここにおいてそれは許されない。必然で無ければ成らぬ事
象もある」

「私と私達は求めている。貴女が探し、貴女が得る事を」

「私と私達は信じている。貴女がそれを成す事を」

「すまない。申し訳ない。貴女に十分な情報が行き渡らぬ事を。私と
私達は謝罪する」

「私は…貴女が望む形への変化を望んでいる」

「此れは…私達とは異なる。私の願いであり、望みだ。故に、今暫くの
時間を求める」

一通り会話が終わると―前の女性―シオンさんが消えた。跡

形もなく。

後ろの噴水が動き出し、周りにいるアークス達もソレを合図にして動き出す。

「…何時も訳わからない話してるなあ…」

と頭を搔いて独り言を言い、マイルームに帰ることに。買う物は買ったし…後はマトイに任せるか。

—— ユウナの マイルーム——

ルームの管理者に買ってきて送られたものをカートに入れてルームの前まで運ぶ。

「マトイいい？戻ったよ？」

「お帰りなさい！買ってきた？」

「ああ、コレと——まあ、中身を見ておいてくれ、カートを返しておくから」

カートを返却後、ダンボールに入れられた食材をマトイと確認しながら冷蔵庫に入れて行く。

『—次のニュースです。惑星リリーパの奥地にて—謎の地下坑道が発見されました。近くアークスはここの調査に入る予定です。アークス各員は準備をしておいてほしい、との事です。次のニュースです。惑星ナベリウスにて—』

「…ユウナちゃん？今テレビで…」

「ああ、地下坑道、か…」

「大丈夫？怖く無い？」

「だ、大丈夫だろ…いざとなったら逃げてくるから…」

地下坑道か…地上にいた機種種みたいなのがうじゃうじゃいそう。徹甲弾多目にマガジンに入れておくか。

「さて、マトイ？今日の晩ご飯は—ごめん、メールだ」

何作ろうか、と言おうとしたらマグにメールが。

ホログラムを起動して正面に立体化。メールの内容を見る。

「……すぐに来たか」

「……と言うと地下坑道探索任務？」

「…ああ。それとダーカー反応もあるから注意、だつてさ」
「本当に大丈夫？なんならお弁当作る？」

「いやあ…流石に戦場でお弁当は…まあ、軽い物を頼むわ」

——惑星 リリーパ 地下坑道——

一人でライフルを構えながら地下坑道を探索中に——ニューマンのアークスに出会った。

そのニューマンの男は…ボーツとしながら俺の方に歩いてきた。
「……………」

「お、おい？大丈夫か？」

返事が無い。もしや奥で何かあったのか？

「あ、す、すいません！少しボーツとしてました…」

「大丈夫か？見た所怪我とかは無いように見えるが…」

「いえ、怪我とかでは無いです…ちよつと考え事をしていただけで…」
「知り合いにアークスの仕事をサボっていたり手を抜いているのがバレてしまいました…」

「怒られるかなあつて思ったんですよ。でも彼女はなんだが妙に優しく…無理しないでって」

「ああ、許してくれた、と思つたけど…なんか、こう…その言葉が凄く…グサリと来て、です…」

「彼女は——ああ、彼女って言うのはウルクさんの事なんです…
アークスに成りたくても慣れなくて…だから僕が代わりに頑張らなくちやいけないのに…」

「なんだが、悔しいですね。僕の怠情を、彼女が彼女のせいだと感じて
いるのがとても歯痒い」

「そんな事、無いのに…悪いのは僕、なのに…」

「…まあ、なんだ。元気出せ？おにぎり、食うか？」

ナノトランサーからマトイが握ったおにぎりを出す。

「そう言う時は何かしら食べれば…こう、なんか、思いつくから。食べる。俺も食うから」

「…はい」

二人でー通路においてあるコンテナに座り食べ始める。

「…」

「…なあ、名前はなんて言うんだ？」

「僕ですか？テオドルと言います」

「テオドルか。いい名前じゃ無いか」

「…いえ、僕には勿体無いですよ。そんな言葉」

「いや、人の名前には何かしら意味があるはずだ。自分の名前を誇れ」

そう横にいるニューマンーテオドルに言つて気づく。前の人生の名前ー特に下の名前呼びが嫌だった。

とてもじゃないがこんな事人に言えないわな、と思う。

「…それで。なんだっけか？」

「はい。自分の事なのに彼女が、彼女の、自分のせいだつて考えている事です」

「ふむ…テオドル…さんはどうしたいんだ？」

「呼び捨てで構いません。そうですね…取り敢えず自分を責めないでつて思えますねえ…」

「なんだ、わかつてんなら素直に言えばいいじゃん」

「そうは言つてもですよ？彼女、僕の好きな物にすら言つてくるんですよ」

いきなり俺の方を見て語尾を強く話す。

「おお」

「例えば僕が好きな豆腐ハンバーグを…彼女は、ウルクは…ツ！」

「う、ウルクさんが…？」

「もつと肉入れないと力出ないつて言つて豆腐九割の奴に肉を八割入れたんですよ」もうこれ只のハンバーグですよ

「おお」

最早驚く事しかできない。と言うかこの話からして…もしかしてウルクつて人…テオドルの事、好きなのか？

「他にはですねー」

それから約40分ほど経つてテオドルによるウルクの凄さ自慢

が終わった。

「すいません、ユウナさん。今日はありがとうございました。お陰で少し晴れました」

「いや、まあ、うん。良かったな。ウルクさんにもよろしく頼むわ」

そう言うテレポーターを使いキャンプシップに跳ぶテオドル。

いなくなったのを確認したのち呟く。

「…テオドルもウルクさんの事好きだろアレ」

適当に散策した後、任務を切り上げ帰還した。

それにしてもあの自爆して来るやつ…前世的に嫌な予感しかないぜ。

76 話目

「…あつ、ユウナさん！…こんにちは！」

デイリーで地下坑道の探索任務が出され、多くのアークスが地下坑道に出払っている。

無論俺もその一人である。

一人で坑道を調査ー出て来る機構種の種類、弱点等をメモっている。

それにしても分離してくる奴、アレはビビった。徹甲弾撃ちまくっても腕や脚が壊れるだけで這いずり回って追ってくる。

しかも壊したら壊したでコア部分が修理すると来た。

所で壊れたパーツが一瞬で直してるけどどっから来たんですかねえ？ ナノマシンか何かか？

2度ほどソレをやられて、その修理している所をーコアを撃つたら両方ー脚部と腕部とコアが爆散した。

他にも弱点部分に爆発物を乗せて、此方を見つけると突っ込んでくる野郎が居たりとか、さつき言った分離する奴の亜種みたいなー黄色いヤツがいたり。コイツは修理するから真っ先に倒さないとまずいな。

他には…五機一組で行動する頭サイズの機構種とか。

後まだ会ってないが俺より少し大きいサイズの人型の奴も居るか。しかも両腕部にブレードを装備していると来た。近接特化は引き撃ちしましょうねえ。

まあ、持久力ないから無理だけど。

ソードか何か近接武器持ってこないと危ない気がする。

そんなこんなでライフルを腰に抱えて歩いているとT字路にてフリーエと合った。

フリーエさんも調査任務を受けていたのだろうか？

「ああ、フリーエさん。こんにちわ。そっちはどうだ？」

「こっちの進捗は…まだまだだっただけです。ほら、あそこ」

「そう言いフリーエさんが指を指す。

「んっ?」

指をさした先には――何時ものもふもふの生物がフリーエの事を
ずっと見ている。

「顔を出してくれるようにはなりませんでしたけど……この距離以上は……ま
だ近づけませんね」

「いや……俺が言っていたのはソレじゃないんだがなあ……」

まさか未だにあの生き物の事を考えていたとは……予想外だな。こ
れは。

「そうでしたか?」

「ええ、この地下坑道の調査、どのくらい進んだかって言うのを聞いた
んですけどねえ……。まあ、そっちはその黒い――いや、灰色?の生き
物を調査、頑張ってくださいいな?」

「ええー纏めて上に報告しますよ!」

自信満々に胸を叩くフリーエ。あつ、揺れた。

「所で触れるようにはなつたか?」

「そう言い視線をフリーエからあの生き物に戻す。

「いえ、それが全然……私も触りたくて近づきたいですが……逃げられそ
うで……」

「かと言って無理に近付いて怖がらせてしまうのも……嫌ですし……」

「そう言う視線でどうしようと投げかけてくる。

「いや、知らんよと。俺もそこまで知らないし。」

「……まあ、なんだ。ゆっくり行けばいいさ。その内触れるようになる
さ。きつと」

「あははは……そうだと良いですね……はあ、なんか、面目無いです。
これ以上は私から動けないんですよ……嫌われるのが、怖くて……」

「そこまで考えていたのか。ああ、嫌われちった。くらいの事かと考
えてたわ。」

「だか、なあ……。」

「そう言いフリーエの言う生き物を見る。」

「視線を外さず此方をずつと見ている。」

頭からは俺と同じくミミが飛び出っていて、尻尾は…分らないが、その生き物が此方をずっと見ている。

と言うか…なんか、うさぎに似てね？

いや、二足歩行してある時点でウサギよりは頭は良いけど…ううん…よし、悩んでいても仕方ない。近づくか。

多分前回からして多分戦う事は嫌いのはず…大丈夫のはずだ。

「…しかし…ふむ…なあ、フリーエさん。俺ってミミ付いてるし尻尾もあるし…ワンチャン行けるかもしれない」

そう言い遠くで見ていた生き物に近づく。

ライフルを腰に…いや、危機感を持たせるのはマズイな。ナノトランサーに入れちゃおう。

ライフルを菱形に圧縮して腰にあるバックパックに入れる。

「あ、あの☒ユウナさん☒」

「逃げられたらそれまでだって…ほら…怖くないからな？武器はない、ぞ…」

そう言いゆつくりと近づいて…。

「そんな近付いたら☒に、逃げ…あれ？」

前まで来たら生き物が…手を差し伸べてきた。

「お、ありがとう」

出された手を握り…フリーエの方を向く。

「に、逃げ…ないの？」

そのまま生き物を抱っこして…獣臭いな…もしや俺もこんな臭いが？

と思いつつも近づくとフリーエ。

「ほら、逃げないぞ？…こっち来いよ、フリーエさん」

ゆつくりと…何時ものブースターを使わずゆつくりと足音を立てずに近づいてくる。そっちの方が怖いわ。

「えっと、あ、頭を撫でて…？」

『りっ！』

「りっ？」

『りりっ！』

「…まあ、良いんじやね?」

俺から言われ恐る恐る手を伸ばし頭を撫でるフリーエ。

『りっりっ!』

と目を細くしながら嬉しそうに鳴く。

「わあ!凄いです!ユウナさん!何を言っているか分かるんですね!」

「いや、全然分からん」

「…ええ…ほら、ビーストさんだからこう…」

「……」

「すいません嘘ですから!そんなに落ち込まなくても…」

『りい…?』

「ほ、ほら!腕を伸ばして頭を撫でようとしてますよ!ほらっ!」

生き物が手を伸ばして頭の撫でようと必死に伸ばしていた。

「そうか、ありがとな…名も知れぬ生き物よ…」

『りーりー!』

その間もずっと頭を撫でているフリーエ。

「…あっ!今思い付きました!この生き物の名前、リリーパにしましょう!リリーパ族!」

そうは言うものの撫でる手は止めない。止まらない。

「なんでまた急に」

「ほら!りって鳴きますし、それにここ、惑星リリーパですし!」

「まあ名無しっていうのもアレだし…んじや、リリーパで」

上が正式に決めることだから俺たちはフリーエさんと会った時だけ使うとしよう。

話している最中もずっと頭を撫でているフリーエ。

「はあ……それにしても、怖がっていたのはこの子達じゃなくて…私だったんですね…」

「…私、やっと気付きました」

「んっ?何にだ?」

「…ユウナさん。ありがとうございます」

「いや、礼を言われることはやってないよ」

実際何故礼を言われるのか分からない。

「いえ、リリーパ族と触れ合えるようになったはユウナさんのお陰です」

『りっ！りっ！』

腕の中で抱っこされていたリリーパが手を使い地面を指す。

「降りたいのでしょうか？」

「かもな。よいしょつと」

片膝について安全に降ろす。

『りっ！りっ！』

手を振りながら何処かに消えていくリリーパ族。

「行っちゃいましたね…」

「ああ…」

「…」

「なあ、フリーエさん」

「なんででしょう？」

「…変な細菌とかウイルスとか大丈夫かな？」

「…一応帰ったらメデイカル行きましようか？」

「そうだな」

因みに帰ってメデイカルチェックを受けたら何も異常無し、との事だった。

後、アレー俺とフリーエさんがリリーパ族って言っていた生き物の名前が正式にリリーパ族に決まった。

早くない？と言うかそんな安価な名前で良いのだろうか？

因みにその後メールでフリーエさんから私が出した名前で決まりましたっ！

と喜びあふれるメールと通信をもらいました。

片方だけで良かったんじゃないの？

77話目

77話目

リリースパでの調査任務後、無事に帰艦してマイルームにていつもの様にヴィダブラスタを弄っているとジグさんからメールが。

内容はヤスミノコフ造兵廠から新型のライフルが出て入手したから見にこないか、だそうだ。

「はえ…ジグさん以外に武器の設計出来る人居るんだねえ…」

と思っていると追加でメールが。

内容は…：オラクル船団内でワシの次に武器設計（銃器限定）を仕事としているヤスミノコフ氏の弟子が作ったライフルの事らしい。何でもジグさんも設計に関わったらしく5挺ほど譲り受けた。1挺貰わないか？

との事。

ヤスミノコフ…なんか日本人みたいな名前だな。と言うかなんで俺に？

そんな疑問が頭を過るが、それはすぐに消える。壁に掛かっている時計を確認してー。

「…マトイ、はどうすつか…」

ーいまの時間は…遅いな、20:00を回っている。

椅子から離れてマトイの部屋に。ポイントはもう寝ている。何でも管制官の朝は早いからだ。まあ、俺も寝たほうが良いのは良いんだが…。

ドアをノックしてマトイに一言かける。

「マトイ？居るか？」

…：反応無し。ドアノブを少し回しゆっくりと開けると…。

「…：っはあ…：…何でオラクル船団の人って肌を露出させたがるんだ…マトイも」

布団を被りーだが片足がベットから落ちそうになっているマトイを見ながら言う。

まあご覧の通りに寝てるんだ、しようがない。夜は…まあ、遅いが何も起きんだろう。一人で行くか。

と思ひドアを閉めると奥から何かが落ちる音が！

「……マトイめ…落ちたか？…マトイ？大丈夫かー」

もう一度閉めたドアノブを回して中に入るとー。

そこにはーネイキッドな姿のマトイが地面に転がっていた。

「は、はだ何で」

と言うかベットから落つちたのかなぜ置きない

そんな疑問を抱きつつそのまま放置も可哀想なので、マトイをお姫様抱っこーは握力的にキツイので、上半身をベットに載せてる。

「あ、いい匂い」

いやまあ同じシャンプーなんですけどね？

そのまま下半身もベットに乗せる。

「はあ、はあ…」

女の体じゃ重いのもキツイなあ……。

マトイに布団を被せて部屋を出る。

下の方は……うん。ほら、ね？

「……ふあ…ねみい……」

目を擦りながらルームの鍵を閉めてジグさんの店であるペアーリに向かう。

暗い廊下を一人でコツコツと歩いていく。

端にあるテレポーター、と言う名のエレベーターに乗りシヨップエリアに。

そのまま目的地であるペアーリに到着。

『ジグさあん？居ますかあ？』

「おおー！主か！待っておったぞー！さあ、こっちだ」

奥からジグさんと数人の声が聞こえる。

俺以外にも貰う人いるのかな？と思ひながらもそのまま上がる。

『あらあらあら？ジグさん？もう一人って彼女の事だったんですかあ

？』

『そうじゃよ。レンジャー二人にこの武器のテストをしてもらいたくてな』

そう言い渡されたのはーいたって普通のライフルー違う点を言うならば持つて左側のサイドレールにグレネードランチャーが付いておりーもう一度言う、サイドレールにグレネードランチャーが、である。

右側にはその他光学機器が付いている。

マガジンはドラムマガジン。これまた弾込めが面倒な…。

よく見ると上部レシーバーのレールと左右下部レールの長さが俺が今まで見てきた奴とー20ミリレールと違う気がする。なんか長い、のか？

「こいつはウエポンシリーズと言つてな？アークス製のライフルに比べてパーツ数、剛性、あと量産し易さに力を入れたんだ。他にカルシ、ベリル、ステブの3種類がある」

ジグさんとリサさんの後ろから誰かが出てきたーあれは…男の人、か？

『おお。う。どうだい？二人は』

そう言う奥から出てきた男は俺とリサさんを見比べる。そして胸も。

「リサ先生は兎も角…そっちのビーストは大丈夫なんだろうな？俺は人とキャストに使つて欲しいんだが」

ギロツと睨み俺に近付いてくる。ヤバイ、何かヤバイ。何かは分からないけど、ヤバイ。逃げないと。

でも…ジグさんやリサさんが居るし…。

「ひっ」

「それに…こんな奴が俺の武器を使うだつて？冗談はよして下さいよジグさん。今からでも遅くありません、替えのー」

そこまで言い俺の首を掴む。

『お、おい』

ジグさんが慌てて手を出してこいつを止めようとする。

息が吸えない めをつぶる こわい いたい

「ー人を、そうですね。コイツは…ヴォイドにでも売りましょうか？そのですよ、人じゃ無いんですしー」

たすけ

『あらあ？ごめんなさい？指が誤作動を起こしてしまいましたあ』
めをぎゅつとつぶりー。

乾いた音が聞こえるとーいつの前にか地面に倒れていた。

「うあつ☒」

俺の首を掴んだ奴を見るとー撃たれた反動でそのまま壁にもたれ掛かる。

「ーツ」

『あれれ？おかしいですねえ？定期検査には以上が無いはずなんですがねえ？』

「げほっ、つごほっ」

『大丈夫か？』

倒れた俺の元に近づいて体を抱え上げる。

後で聞いた、ジグさんに聞いた話によると、リサさんが貰ったライフルを片手で構えてー俺の首を持つ手をー撃ち抜いたらしい。

「くそっ！どうしてです☒そんな生き物！いりませんよね☒」

撃たれた手を庇いつつリサさんに言う。

「そんな獣みたいなのを生やしやがって！消えろ！」

何処からかガンストラッシュを取り出し俺に向けて来る。

「…つあ…ごほっ、げほっ」

アーマーにの裏に隠してある予備のハンドガンー過去に使って以降整備の文字を忘れていた物を手に握る。

酸素が足りずに手が震える。

『ユウナちゃんは少し黙ってて』

リサさんが敵を見つっー口を動かさずにミミに聞こえる声で言う。
う。

『ねえ？そこの人。彼女、私の弟子なんですけどお？どおしてくれる

のかしらお?』

「…☒な、何でピーストなんてモノを弟子に☒リサさん、そんなモノの前に立たないで下さい!」

そう言うのとガンスラツシュを構えた男の間にリサさんが割って入る。

《リサ、これはアークス全体に蔓延るの。まさか彼奴の弟子が…》
《ええそうですよ、ジグさん。これを正さない限り。多分アークスどころかオラクル船団が滅ぶわ》

『それはですねえ?彼女の腕がー私に及ばずとも近いからですよ?そんな彼女を殺そうなんてー』

ライフルを置き腰のパーツが外れてーハンドガンを飛び出す。

『ーおいたが過ぎ過ぎてますよねえ?』

頭にハンドガンを突き付けるリサさん。

「くそがっ!」

形勢が悪いと見るや即座に立ち上がり逃げようと走り出す。

『…ダメな大人はーいえ、それよりも』

外に走って行く男を尻目に同じパーツから筒ーサプレツサーを取り出してハンドガンに付ける。

外に歩き出しーもう遠くにいる男に向けてハンドガンを握っている手を伸ばしてー。

ー乾いた音が1発、響く。

『私の弟子を侮辱した事…死んで後悔しないといけませんねえ?』

リサさんこわい おとこのひとこわい

もうだれともあいたくない

めをあわせるのがこわい

たすけて

だれかー。

『ほら、落ち着きなさい』

「…っ☒」

びくんと震え逃げようとするユウナ。しかし足がもつれて倒れてしまう

『ほら、大丈夫だから…ジグさん』

『ほお、久し振りにリサの地声を聞くのお』

『そんなことは良いから。ユウナちゃん。渡して』

『ほれ』

『よおしよおし、大丈夫だからねえ？怖い人は私が追い払ったからねえ』

『…そうじゃ、リサ。歌でも歌ったらどうじゃ？』

『そうね。それじゃ…』

そういうとリサさんがうたをうたいはじめた。きいていると…なにかあんしんするこえだ。

このうたをきいているとねむくなる…めが…。

こくん、こくん、とユウナの首が揺れて…次第には寝てしまった。

『…寝たよくじゃな』

『…ええ、それにしてもですねえ』

『ああ、ヤスミノコフ氏の弟子があんなのはのお…一部始終を氏には送っておくか』

『ええ、お願いします』

『…なあ、リサ』

『なんです、ジグさん』

『儂はの、もう性欲とか枯れ果ててるのだがの…』

『この子の胸…デカ過ぎないか？』

『…ジグさあん？女の子にそんな事言ってはいけませんよお？』

『はっはっはっ！それもそうじゃの』

『では、私は彼女のルームに向かうので。先に帰りますねえ？』

『…そうじゃ、リサは兎も角…ユウナの、このステブウェポンはどうする？』

『取り敢えず置いておいてください。これを見たことによってフラッシュバックするかもしれないので』

『分かった。置いておく』

『よいしよつと。それじゃあねえ?』

『おう。またの』

そう言いユウナをおんぶするとそのままブースターを作動し、せずに歩行して店から出て行った。

『…にしても彼奴…あんなキャラだったかのお…?』

そう言いながらもジグさんは六芒に連絡を取り、今回の事件の内容と射殺したりサへの対応無し等色々根回しを始めた。

『…案外、ビーストと我等の認識の差はダーカーより深いのかもしれないのお…』

『…と言うか私ユウナちゃんの事を弟子にしたけど…まあ良いかな』

そう一人言いながらもリサは思う。

ジグさんの言っていた通り胸でかい上にもちもちじゃね? 触った限り凄くすべすべなんですけどお。あれかなあ? これが若さって事なのかなあ?

考えているとちょうど肩に顔を載せているユウナちゃんの口が開く。

「ありが……り……さあ……」

『……はあ』

「此方こそ、ですよ」

発した声は、いやけに澄んで聞こえた。

78 話目

78 話目

「……………んあ？」

目を開けるとー自室の布団の上にいた。はて、ジグさんの所に向かった筈だったが…。

「……………マトイかポイントか？」

もしや遅いと思い2人が迎えに来たと考えたが…そもそもあの2人は寝てたし、ポイントに至っては次の日管制の仕事があるからほぼほぼ起きないし……………ではー。

「だれが？」

いや、待て。そもそも昨日は何をしに行った？

ー確かジグさんの所で…新型ライフルをどうたらこうたら、だったか？

「…そのライフル……………いや」

それでライフルを見せてもらってーいや、確かにサさんが居たはずだ。それとジグさんも。

んでそれで……………それで……………。

だめだ、それ以降が全然記憶にない。

部屋を見渡すと何時ものヴィダブラスタを置いてある所に見慣れぬライフルが置いてある。マガジンを抜き、ポートを解放して置いてある。

「……………いや、まさか」

ありえない、とは思いたいが…もしや、酒を飲んでえっちい事をしてしまった可能性が…？

いや、酒は飲めないーいや、それは元男の時の世界の話だ。コツチでは違う可能性もー。

いや！あり得ない、とは言い切れないし…どうしたものか…。

調べる術は……なんかあったっけ？

元男とは言えソコは気になる。と言うか正直この身体がしよー

未使用かも分からん。

……と言うかこんな事を言うのもなんだが、未使用って……物みたいでヤダな。

うーんうーんと悩んでホログラムを弄っているとマイデータ、と言う項目を見つけた。と言うかあった。

それに触り見てみるとーそこには、アークスの各々の今の状況とかどのくらい強いとかを見れるように数値化した物が書いてある。ー書いてある、のだろうか？表示の方が正しいか？

と言うかこの欄初めてさわるな。生まれてこの方ゲームと言ったらロボゲーと戦闘機ゲーしかやって来なかった

から何かこう……RPGってこう言う表示してそうだな。

決して携帯型対戦車擲弾（てきだん）発射機では無い。

そう言えば擲弾で思い出したが、この世界で擲弾、破片で敵を倒す手榴弾とか意味あるのだろうか？熱で穴開けて更にその穴に熱をぶち込むH・E・A・Tみたいな熱兵器なら……貫通、するのかなあ……。

現状手元にあるのはスタンとグラビティの二つしか無い、と言うか知らないし……いや、あるのかも知れないけど。

最も現状貫通しなかった奴ってあの砂漠の奴ーグワナーダ、だったか。それ以外は合っていないし……何とも言えない。

最も自分の中にある弾の大体のデータがゲームって事もあるし……やっぱり実際に撃たないと分からないこともあるし……。

そんな事を考え始めてしまい、今からやろうとしていたことが止まる。

……いや、そう言や俺何をしようとしたんだっけか。

一度考えるのをやめて、その場ーマイルームの椅子に背中を預け更に考える。

「……そうだ！ 処ー」

女かどうかを調べようとしたんだ！と声を続けそうになり、急いで口を閉じる。

「ーっ……」

椅子から立ち上がり隣に続く扉を少し開けてー良かった。2人

は居ない。

ほっと溜息をつき、自分のステータスを見る。

上からダーカー汚染をどのくらい耐えられるか、とか打撃や法撃、射撃にどれ位のフォトンを込められるかとか。

……込めるってどうやって？纏わせるのか？

他にも打撃、射撃、法撃を纏ったダーカーの攻撃を防御できるか、とか。

その次のページに俺の見たかったデータがある。

他人には見せられない様な物が数値化されている。

まるで……いや、辞そう。

それをスクロールしていき……良かった、何もなかった。

その欄には処女の文字がある。

今の状態すら見えるのかあ……。

「えっちなあ……」

しばらくそれをスクロールしながら見る。なんかこう、ねえ？

「良かった、他に異常はない。んじや昨日は何が……」

……いや、そもそもこんな事を調べずとも良かった様な……？

いや、そもそも手っ取り早くリサさんに聞けば良いのか。

「……あ」

そうだよ、最初からリサさんかジグさんに聞けばいいんだよ！

そうと決まればゲートエリアにいる筈、そこに行こう。

……オラクル船団 ゲート エリア……

左右の大型テレポーターからゲートエリアに向かい、そこに付属している休憩室にリサさんはいる。

と言うかこのテレポーターだかトラスンポーターだか知らないが

……これ空間を直接繋げてね？

「えっと……すみません、今大丈夫ですか？」

休憩室でホログラムを弄っていた所に呼びかけてしまった。

『やつとききましたねえ。そろそろだと思いましたがよお？』

と何時もーまあ、数回も会ってないがーの語尾が上がる独特の話を聞く。

「は、はあ」

それにしても待つていたとは？俺リサさんにメール送っただけ？カードは交換したはずだけど…。

『それでですねえ？聞きたい事、あるんじゃないですかあ？』

まるで何かしら聞きたい事を受けるために待つていたような話。もしや相当昨日やばい事を？

「も、もしかして、昨日失礼な事を☒」

『いえいえ。特にそういうものは無かったですねえ？…：…：…：そうですね、マイルームにあるステブウエポン。アレはそのまま使用して良いとの事ですので』

「…あれ、は…まあ、はい。所でおー私のヴィダライフルは…？」

『ジグが何処の機関部のパーツが汚れやすいかとかを見たいからと言って回収してましたよお？多分アレは帰ってきませんねえ』

ああ見えて武器に関しては何かしら信条を持つているみたいですし、と言う。

「そうですか。分かりました。聞きたかったことは…まあ、昨日何があったかなのですが…？」

その事を聴くとリサさんが一度長めに瞳を閉じてー。

『…：…：ユウナちゃん。貴女は、昨日の事、どこまで覚えてる？』

語尾の上がらない、普通の喋り方になった。

「えつと、リサさんとジグさんに会った所で…」

『と言うと後半丸々記憶に無し、かあ…』

「…その…もしかして、ヤスミノコフさんの方に何かマズイ事を？」

『いえ、その逆。されたーされそうになったのよ。貴女が』

「へ？」

俺が？なんで？

『考えてもみなさい。ある程度とは言え、まだこの船団にはビーストを敵としている人もいるのよー逆にビースト至上主義なんてそれはそれでー少し面倒な人達もいるけど』

「は、はあ…」

『それに。貴女は周囲に目を光らせなさすぎ。そんな巨乳で、髪の毛は伸ばして寝癖も適当で…。そんなんじゃないつか股から液体流しながら売られる事になるー』

「……股から……？ひっ☒」

『かも知れないわよ？幸運な事に貴女の周囲には相棒って言って親しんでいる人も居るみたいだし…まあ、気をつけることね』

「は、はいっ」

怖っ！オラクル船団怖い！ヤダもう家に帰ーれないんだった。

『…まあ、簡単に言うとなスミノコフから来た人がそのビースト軽蔑者の人で。ユウナちゃんが怯えちゃってね？私がマイルームまで送って行ったのよ』

「あ、ありがとうございます？…」

でも最後の最後に小さく、アレでも軽い方、って言葉を聞き、記憶に無いがヤバい人達と認識しておこう。

『まあ、この事をヤスミノコフ氏に直接言ったら謝られたけど…まあ、本人にとって事で言っておいたわ』

「…そ、あ、その、俺を軽蔑した人は？」

『…ユウナちゃん。あまり気にしてはダメよ？知らない方が良いこともあるわ』

「は、はあ…」

『さて。話は終わるかしら？それならいつもの調子に戻らせてもらわね』

「は、はい。ありがとうございます」

そう言うともう一度目を閉じてー。

『はいはいー！それではさようならあー！』

そう良い手を振るリサさん。いつも様子に戻った。アレがガチトーンなのだろうか？

アーーー

ーーーオラクル船団 ショップ エリ

それからショップエリアに向かいミルクアイスクリームチョコとイチゴ和えを購入してベンチで1人噴水を見ながら食べている。

噴水の目の前にある大きなテレビにはオラクル船団の進行方向、気温、任務の注意事項等々が流れている。

一人で黙々と食べているとーショップエリアとゲートエリアを繋ぐエレベーターから見知った顔が出て来た。

あれはー。

「ゼノさん？」

「よう、ユウナちゃん、元気ーそうだな」

エレベーターから左頬を撫でながらゼノさんが来た。

「そう言うゼノさんは無さそうで。……所でエコーさんはどうしたんです？」

「いやあ…それが…まあ、ちよつと喧嘩しちゃってな」

「ああ……お話聞きますか？」

「…そうか。それなら少し聞いてくれー」

「ーまあ、内容は何時も通りの、どうでも良い理由だよ。昔の事を何度も聞いてくるから、こう、カツとなって、怒鳴っちゃった。そしてビンタされた」

よく見ると摩っている所に薄く赤い色が。

「どおしてアイツは、終わった事を引つ張って来るのかねえ…」

「さあ、どうでしょうね？案外顔に出てるんじゃないですか？」

「そうかなあ…エコーに考えている事見透かされたりするし。いや、でもなあ…」

「大丈夫ですよ、ゼノさん。俺も顔に出やすいつて言われるんで」

「お前の場合はミミと尻尾で分かるんだよーほら、今もぴーんって立ってる」

「じよ、冗談じゃ……」

そう言いさつとミミと尻尾を触る。

ふと横を見ると少し顔が笑っているように見えるーいや、今笑った。

「はあ…俺が未だに引きずってるように見えるのかあ？過去の事をー10近く前の事を。どう思う？」

「…いや…過去の事は知らないんで…」

「…だよなあ」

そう言い上を見上げるゼノさん。それにつられて俺も上を見る。

人工の空が広がる。

「…あの時ー師匠が旅立って時にどおして無理言っても付いて行かなかったのか…」

「10年前のあの時、どうして中距離の所に布陣していたのか」

「その他諸々盛りだくさん。思い出したら止まらない。アレもコレもって思い浮かんできやがる」

「あああ…こりや俺が悪いな、俺のせいだ」

『今を見てない』って…確かに、その通り、だな」

「話だけ話してすまん、俺はちよつとアイツに謝って来るわ」

「そうですね。謝りましょう。ほら、後悔は後に立たないって言うし。人生なんて後悔だらけですよ」

「そうだな。謝ってくるわ。じゃあな、ユウナちゃん」

「ええ、それでは」

そう言い来た道に戻っていくゼノさん。

何と無くだが…肩が上がっているような気がした。

79 話目

——惑星 リリーパ 地下坑道——

現在暇なアークスはリリーパの探索任務を渡される。

探索任務といってもやる事は適当に歩いて構造をマグに記憶するだけ。後は管制官がやってくれる。

「あ、ああ……こちら……んっ、ユウナ。開始地点に到達した」

『ユウナさんでしたか。こちらデュケット、了解しました』

うっ…この声…なんかポイントに似てる気が。そういや今までポイントと管制官として会話した事ないな。

「…まさか…ポイント?」

「ええ、ユウナさんと一緒に暮らしているポイントーもといデュケットですよ?」

「でゆ、デュケット☒なんで☒なんで、ポイントなんて☒」

『いえ…アークス名を登録した時間違えて登録されてしまいました…今はデュケットという名前で管制官とアークスの方に登録してありますよ?』

「…間違えて登録って?」

『…いえ、おかしな話なんですけどね?登録するためのコンソールが一人で動いてポイントと入力してしまっただけです。その後機械をメンテしても異常無し』

「はえ…こわっ。一人で居るんだから辞めてくれよ、そんな話」

『しかもね?そのコンソール、タッチパネルなんだけど…私そのパネルに触ってないのよ。これはカメラにも取られてるわ』

「……ねえ、デュケット」

『なんですか?』

「…かえっていい?」

『ダメです』

「そんな話をしたのが悪い、帰りたい」

『ダメ』

その後もデュケットさんと会話しながら通路を進んでいく。

途中、機種種とダーカーが戦闘している所を発見、デュケットさんに報告した所、マグでその様子を撮ってくれとも事だった。

念の為、銃を肩に当て左側にあるコツキングレバーを引いて初弾を装填、その後プレスチェッカー薬室内に弾が入っているかのチェックをする。

確認後左側レールにあるグレネードランチャーに弾を込める。

幸運な事にこのライフルーヤスミノコフ造兵廠が作っている新たなパーツで上面、左右レール、下部レールに色々とパーツを付けられるそうだ。

それなんてピカティニー？

ゆくゆくは大口徑サイトを発売するとの事。立体ホログラムサイトみたいな遮る物のないサイトってない？

それから数分程ダーカーと機種種の戦闘を録画した。

勝った方がこちらに走ってきたのでそのまま射撃開始、近づかれる前に倒す事に。

セーフティをシングルに。

トリガーに指をかけ、引く。

タン、タン、タンと空薬莢がエジエクシオンポートから3発の薬莢が転がる。

「ありや、全部はずれてえら」

フルオートにモードを変更、15発程度撃つ。

肩にストックを当てて下部レシーバーを持つ。

上面のフロントとリアサイトに敵を定めてー。

タタタタン！タタタタン！

ギイ…ギイ…。

絶命するとそのまま溶けて消えていく。

周囲を見渡し、敵が居ないのを確認する。

マガジンを抜き取り弾薬確認穴を見る。60の穴に弾丸が見える

から今60発か。

マガジンを挿入する。コツキングレバーを少し引き弾が薬室に入っているのを確認。

両手で保持して周りを見渡す。

「……ダーカーって、なんだ」

『何なんでしょうね。有機物無機物を侵食し、人すら侵食するーまあ、確率は低いらしいですけど』

「……なんかそんな敵STGに居たような……」

『STG?なんですかそれ?』

「いや、何でもないさ。奥に進むわ」

『ねえねえ、ユウナちゃん』

「なんです?」

『今日の晩ご飯、カレーがいいな』

「……これ録音されてるんじゃないの?」

と云うか管制官がこんな風に喋っていいのだろうか?

『ほら、なんだかんだ言って管制官の数はアークス以上に多いからね?大丈夫でしょ?』

「え、マジで?」

『そもそも管制官ってオラクル船団の警察でもあるのよ?そもそも管制官ってアークスになれるけどフォトンを扱う力?っていうのが規定値に立ってしてない人を雇ってるし』

「……なら船団は大丈夫か」

『私だってライフルを持って戦う位は出来るよ?』

『そりゃ頼もしい。その調子でウチの料理も頼むわ』

『流石にそれは……ねえ?』

「なにがねえ?だ」

銃のレール部分の凹凸が地味に痛いなど思いつつも奥に進む。

壁に書かれている謎の言語を録画しつつ奥に進む。

「ーあつーユウナさんーこんにちはー今日は探索の途中ですか?」

それから更に進むとまたまたフリーエさんと会う。

「そうだよ、こっちはもう少しして所か。そっちはどうだ?」

フリーエさんの前には、少し前に名前が決まったりリリーパ族がいる。

「私はーまあ、こうして近寄ったり触れ合ったりは出来るぐらいにはなつたのですが…」

「りっ?りっ?」

「うん、そう。この人と私は仲間だよ?」

「りりっ?」

「うーん、分かってくれてるのかなあ」

「これは分かかってないな、間違いないー俺、仲間」

「わかる?な・か・ま。と・も・だ・ち」

「りりりりい?」

と首を傾げて此方を見続けるリリーパ族。

「……とまあ、肝心の言葉はこの通り。私の理解が追い付いてない感じですね」

「まあ、翻訳もまだ無理っぽそうだしな」

「ええ、何せこの子達同士は声で交流してる、と思うのですけど…私達と意思疎通が出来るかまでは…今は少し、分からないですし」

「りりりりい?」

俺とフリーエの会話に興味を示したのか足元から上をー俺たちの顔を見る。

「ん?私とこの人?そう。友達」

「ーっってあれ?語数が同じ?…もしかして…でも…いえ、発声器官が違う…?」

「んっ?どうしたフリーエさん」

「りりっ!」

一言声を発すると俺とフリーエさんの足元を通り抜け奥に走っていくリリーパ族。

「ああ☒ちよつとまっつてえ☒」

「ああ☒」

「すみません!私、あの子を追いかけますので!」

「ちよつと…まっつ…てなかつたか」

『リリーパ族…成る程、私も初めて見ましたけど、あんな感じなんですね』

『そうなのか？デュケットさん』

『今まで呼び捨てだったんですからデュケットで良いですよ？』

『…まあ、じゃあ…』

『それにしても…うーん、リリーパ族が地下坑道みたいな物を作れるのか、ですかねえ…』

『んっ？なんでそこからそこに☒』

『いえ、だって最初はこのリリーパ族がこのリリーパにある建築物を作った者だと思われていたのですよ？それが開けてみたら言語と叫べるか不明の物。そう思う方が自然じゃありません？』

『ん？んん？』

『…まあ、取り敢えずですね、もう少し進んだら終わりにしましょう』

『…分かった。適当に戦ったらまた録画頼むわ』

『はいはい、分かりましたよ』

と言つても中距離から狙ってトリガーを引くだけだけどね。

「ねえ、ポイントもといデュエットさん、だっけ？」

『デュケットです』

「…アレ、見えてる？」

坂を登り、高台から周りを見渡すと、降りたところに新型の機構種——砲台らしき物が付いた機体が4機いる。

『…見えています。照合開始——特定、敵機構種のデータはスパルガンです。上部の二連装砲に気を付けてください』

「情報それだけ？」

『えっと…他には撃たれたら吹っ飛んでめっちゃクラクラした、とかも有りますね』

「…交戦した方がいい？俺としちゃ任務内容は構造把握的な奴だから逃げたいんだけど」

『えっと…あ、報酬ありますねえ！8000メセタ程ですね！』

「1機？」

『4機から8機ですね』

「…グレネード撃ち込めば爆散するかな?」

『情報によれば脚はそれなりに堅いものの弱点部分のヘッド部分はハンドガンやガンスラッシュュー発で大破するようです』

「……やるか」

『あともう一つ。敵スパルガンはゾンデ系に弱いようです。まあ、機械ですからね』

「ゾンデ?」

『ええ、ライフルの弾にゾンデを組み込んでみては?』

「は?ど、どうやって?」

『確かアークス製のオブションパーツがあるはずですよ?後でリサさんに聞いてみては?』

「ああ…まあ、うん。聞いてみるわ」

『それじゃ、お願いしますね?夕飯はカレーですよ?』

「……はー」

『ーレトルトはダメだからね!』

「…はあ…」

なんかウチのポイントもといデuketトさん、公私混同だっけ?してない?オペレーターってそんなに自分と暮らしてる人のアレやこれ言っちゃって良いの?

そんな事を思いつつ通信を終えて敵を見る。

敵はスパルガン4機。内2機は後ろを向き弱点が見える。

この距離は分からないが…行けるか?

どうせなら双眼鏡にどの位離れてるとか書かれている奴を買えば良かった。今はそう思う。

「…頼むぜ、当たれよ…」

そう思いながら、高台に伏せてバンマガジンを地面に当てる。

丸っこいから中々定まらないがー。

パン!パン!パン!と連続して発砲音が響く。

耳の横でエジェクションポートが下がり葉莖を排出する。

薬莢が地面に落ちる音がまた響く。

ギューーン！

という音を出しながら残り3機のスパルガンが此方に向かってきた。

「やっぱダメか！」

モードをフルオートにしてトリガーを引きっぱなしにする。

タタタタタツ！と音が響く。

スパルガンの脚や砲台に当たる。

流石に近づかれたら痛い。ナノトランサーからデイフェーズシエルと書かれた弾をランチャーに入れる。

ぐわっ！と脚部を振り上げ俺に攻撃して来ようとするスパルガンにデイフェンダーシエルを撃ち込む。

ランチャーから発射されるフォトンで覆われた榴散弾が放たれる。複数の球がばらけてスパルガンに穴を開ける。

「よしっ、次！」

そのまま突っ込んでくるもう一体のスパルガンをフルオートで弱点部分と脚を撃つ。

モーター音を鳴らしながらもバランスを崩し弱点が露わに。

そのまま頭部分を狙い、機能停止、爆発した。

不利と見るや最後の一体は撤退を開始。

此方の武器は射撃兵装なので逃げるスパルガンに向かって残りの40発を撃ち切る。

バレルから白い煙が出る頃にはスパルガンも居なくなっている。

マガジンキャッチを押し空になったバンマガジンを手に取りナノトランサーに入れる。

残りは何時もの30連のマガジンのみ。

「後でバンマガジン買うか」

『それなら注文しておきます？』

「このデイフェンダーシエルとかも頼むわ」

『りょーかい。私の分も頼んでおくわねー後そうそう、目標達成し

ました、帰還してください。カレー、マトイさんと一緒に楽しみにしてますね?』

「……」

はあ、出来れば作っておいてほしいなあ…。

と思いつながら転送されたテレポーターを潜る。

ググった先はー。

「またオレンジジュース買うか」

サーレックスの機内だった。

『当機は間もなく、キャンプシップと合体します。少しの間揺れますがー』

さて、その前に座るとするかな。疲れたし、揺れるらしいし。

80 話目

「イーユウナ と デュケット (マトイ) のマイルームー

「ねえ? ユウナちゃん? デュケットさんもお休み貰ったらしいから明日三人で何処かに行こうよ」

「んあ?」

「リリーパの探索任務から帰還して、ルームでソファに腰掛けてゆつくりとテレビでニュースを見ていたらコレである。」

『「イーですからてん…えっ? はい、はい。ここで臨時ニュースです。オラクル船団正面に複数のイー」』

「だからね? 遊びに行こう!」

「どうやらテレビでは船団進路上に複数の大型ダーカーが居るらしく、それを排除するらしい。」

『「イーこれを受けオラクル船団及びアークス本部は防衛隊に出撃命令をイー」』

「…遊びつて…どこかに」

「マトイに聞き返しつつニュースの続きを聞く。そういや最初の時は焦ったな、このニュースを聞いて。」

「幸い、調べたら結構な頻度でくるし、万が一突破されても百隻ちよつとの戦闘艦が攻撃を仕掛けるから船団に来ることは×まず無い×らしい。」

『「イーヒュプノス第1飛行大隊、パーン第4飛行大隊、ペルセポネー第8飛行大隊の144機がイー」』

「正直フラグにならない事を祈る事だが。」

「うーん、カーティス自然公園って言うのがあるらしいの! そこに行こうよ!」

「し、然公園?なんでそんな…?」

「ほら、外を見ると建物しかなくて…私、森を見たいの。ダメかな?」

「まあ、俺は別に良いが…ポイーじゃなくて、デuketトさんがどう思うかどうか…」

「やった！私デuketトさんにも相談してくるね！」

「ああ、まだ帰ってきてないぞ！」

カウンターに向かおうとするマトイを止める。

『I-Y A S t M f 4 モルガンの先行量産型を用いて迎撃戦を行うとのことです。フマルさん、どう思いますか？』

『そうですね、フラビンさん。私が思うにー』

リモコンの電源を押してテレビを消してカウンターにマトイを追いかける。

ーショップ エリアー

「あははは…ごめんね、ユウナちゃん」

あの後マトイを追い掛けてカウンター直前のテレポーター通過後に捕まえられた。

カウンターには任務を受け付ける人しか居ないから言っても意味ないと言い、そのままショップエリアに向かう。

「頼むから最後まで聞いてくれよ…」

「ごめんって」

「はあ……」

ショップエリアのベンチに座り噴水を見る。

「……ねえ、ユウナちゃん」

「ああ？」

「ありがとうね」

「何を急に」

「ほら。私を…拾ってくれたから？そのお礼」

「…まあ、あの流れじゃ、登録されてないしねえ…」

この船団に居る人は、どんな境遇であれマグとマグに付加された認識コード的な物を持っている。

アークスだとそれに加えて現在位置、カメラによる録画。倒した数の方向等色々ある。

…認識コード的なのを知らないのは内緒。

市民も確實どんな場合でも携帯させろと言われていて、さつき言った認識コード他、ダーカーが市街地に現れて交戦状態になった場合、少なからずマグにもフォトンを纏わせた攻撃が可能な為、それで所有者が逃げる為の殿となる。

「ーまあ、大破した場合は指紋等生体データで特定出来るからまた貰うことも可能らしいが。」

「……いや、まて。マグがフォトンで攻撃できるのは……？」
「ん？どうしたの？」

確か……ダーカーに攻撃ーいや、ダメージを与えられるのはフォトンのみ。それでフォトンを扱える人が攻撃すればダメージは入るーライフルはちと違うが。

「……もしかして……」

死んだアークスの脳を……？

「ユウナちゃん」

「ひっ……ど、どうした？マトイ？」

マトイの耳元での声により驚く。

「もう、何度読んでも答ええないんだから！ミミを食べる所だったよ！」

「……ミミを……？」

食べー食べる？

「うん、フェアリアさんが『ビーストはミミや尻尾が弱点だから、そこを触れば気付くよ』って言ったの」

「……いや、それ動物やん……」

待つてくれよ……いくら外見が……これは……犬系？なのか？だからつて……それはないよ……。

『ーれですね、今飛行大隊パイロットに召集がくだって任務の説明を受けているようです。今回もー』

「……そうなの？動物って言う……あれ？」

マトイが指を指す先にはー複数のペットを散歩させている男の人を視界に入る。

「そうだな。ああいう四足歩行の生き物とか、鳥、狐……狐？それにドラゴンに……は？」

狐…は兎も角、ドラゴン？いや、小さなワイバーンか？何でそんなものが…いや、そもそもアレってデカくならないのか？

飛んできて戦うことになるとかやめてくれよ？

「へえ…ああいうのがペットって言うんだ！私も欲しい！」

それを見て欲しいと言うマトイ。

「…いや、お決まりだけどき、ちゃんと買える？第一、俺たちのマイルームってペット禁止…あ、噛まれてら」

だが…そうだな。金魚的な小さな魚なら…行けるか？

「…痛そう」

マトイの視線の先に居るペットの飼い主は…犬に噛まれ、狐に尻尾でペチペチされ…あれはじゃれているだけか？…鳥に顔を突かれ、ドラゴンに至つちや…なんか口から変な球を飛ばしてるし。

「…あれでも欲しい？」

「…痛そうだからやめて置くわ」

「…そうか」

『…た、アークス総合技術開発本部が人型兵器のコピーに成功、近々…』

「マトイ」

「んっ？なあに？」

「そろそろ帰ろっか」

「…うん」

「…そうだ。今日は三人で食べに行こうか」

「…良いの？」

「まあ、そうだな…デuketツトさんの名前が分かったから、その祝いつて事で」

「…ユウナちゃん。今まで聞かなかったの？」

「…いや…あの部屋割与えられた時に初めて顔を合わせたけど…そんな時にポイントって言ってたし…」

「…でも名前はデuketツトさんなんですよ？」

「ああ…まあ、手違いが…ってコレ言った…」

「ああああ！ユウナちゃん☒どうしよ☒私達のパンツ、服に挟んで無

「い！」

「……か？……え？」

「だから！マイルームで干してる服類の間に入れるはずだったパンツ！カゴに入れっぱなしかも☒あれ？どっちだっけ？」

「……まあ、帰ろう。取り敢えずそれからだから」

「う、うん」

そう言い俺とマトイは手を繋いで帰った。

因みにだが帰った後、デユケツトさんも帰ってきて夜は外食って言ったら思いっきり嫌な顔をしやがった。こっちだってレシピ見ながら格闘してんだよ！時には休ませてくれ。

81 話目

「……惑星 リリーパ 地下坑道……」

「…よし、任務開始」

キャンプシップのテレプールから飛び降り地下坑道入り口に到着する。

付近には他のアークスの簡易休憩所的なテントが複数貼つてある。

『はい、分かりました。コレより任務を開始。ユウナさん、無事の帰還を。……あと』

その奥には大型のリフトが置いてあり、そのリフトに乗って坑道に向かう。

「ん？」

『肉じゃが。食べたいです。マトイさんも言っていました』

「マトイは知らないだけだろ…どうせポーデuketツトさんが吹き込んだんでしょ？」

『バレました？』

そうデuketツトさんの話を聞きながら地下坑道に繋がるリフトのボタンを押して、下に向かう。

「……人参、じゃがいも、豚肉と白滝、グリーンピースを用意しておいてくれ。後はレシピ見ながら作る」

にしても…このリフトやけにデカイよな…あの人型兵器を載せていたりしたのだろうか。

『さっすが！早く帰ってきてよね！』

「…自分で作るって事は考えないのか…」

今回も同じく地下坑道の探索である。前回とは変わり少し深いところにいる。

他のアークスから来たデータによると。

「…地面から針が出てくるのが…そんなリヨナみたいなのは…」

どうやら通路に所々針が出る場所があるらしい。最もアークスの

戦闘服ならフオトンによつて貫通しない、との事だが……うーん……」

「…注意して進むしかないか…」
コツキングレバーを引き初弾装填、プレスチェックを行いちやんと薬室内に入っているかを確認。

サイドレールのランチャーにデイフェンダーシエルと名付けられた口径の大きい弾薬を入れる。

リアサイトの横についている調整器を回して、ほお付けした時に見やすい位置に回す。

ストックの長さは最短。照準器があるなら兎も角、唯のアイアンサイトなので見やすさ重点で。

モードをセーフティからフルオートに。

「どうせならサイトのところに残弾数とか書かれなかなあ…」

S・Fに良くある武器の如く、残弾カウンターがあればなあ…と愚痴る。

愚痴ったところで変わらないが。

因みにこのデイフェンダーシエル。ヤスミノコフ造兵廠が作った物くれた。1ダースを20個程。合計240発。

俺としちゃグレーネードシエルの方が良いんだがなあ…。

因みにヴィダブラスタ時代に使っていたグレーネードシエルはサイズが合わず使えませんでした。

お陰で全部デuketツトさんに放り投げだよ。

…こつちの方がサイズでかいんだなあ。

銃口を片手で上にあげて進んでいく。

…と言うか此処って地下坑道って名前つけられたけど…坑道って山の中を切り開いた道の事じゃ…?」

今回はリフトからだったけど…色んな所に入り口あるらしいからなあ…まだアークスも把握しきれてない。だから俺らが任務に行っているわけだが。

「あーユウナさん、こんにちは」

それから何回か機構種と戦闘を行い、探索を進めていくとー何時

もの様にフリーエさんと出会った。横にはリリーパ族もいる。

と言うか最近探索に出るとフリーエさんにしか会ってない気が…。

「こんにちは。そっちはどうだい。リリーパ族どのー」

「りいー」

「ーおお？会話に入り込んでくるとは…」

周囲を見渡し敵が居ないのを確認すると安全装置をかけて腰にセツトする。

「ふふっ、きつとこの子も挨拶してるんですよ」

「そうか。……ああ…なんだ、フリーエさん、触っていいか？」

片膝について目線を合わせる。

「…りりい？」

「なんだって言ってんだ？フリーエさん」

「…うーん、女の子なのかって聞いてますね、コレは」

「……」

…此処でその質問をしてくるか。…確かに身体は女の子だ。確認した。胸もでかいし、ケツも…うん。だが中身は男である。最近慣れてきたけど。

と言うかどうやってリリーパ族はーいや、なんでそんな疑問が思いが浮かんだんだ？

「…う…ユウナさん？」

また考え始めるとフリーエさんが此方を覗き込んできた。

「あっ、いや、なんでもない。ーーんで、まあ、話は変わるが、そっちの進展はあったか？」

「ええーあの後もこの子達と色々話していて、私、気付いたんです」

「完全に理解するんじゃないやなくて、感覚で分かれば良いって」

「感覚、で？」

「ええー！感覚ーもつと言うとなんとなく、で分かれば良いんです」
「そもそも発声器官も違いますしーいや、まあ…少し考えれば分かるのですが、完全理解は無理な話で…いやはや、付き合わせてしまつて申し訳ないです」

「いや、良いってことよ。メセタは貰って…んっ？」

「そう言いや俺、フリーエさんにリリーパ族を探して欲しいって言われて、報酬も出すって言っていて……あれ？俺報酬貰ったわけ？」

「りりい！」

「うん、そうだねえ、大丈夫だからねえ。気持ちでなんとなくわかり会えば大丈夫だから……」

地面に座りながら話を続けるフリーエを見ると、今更聞くのもなんか……ねえ？

「ふふ、なんだかこんな事を言うのも……少しおかしい感じですね」

「り、りりい!!」

「分かった、分かりましたって!」

「……ああ……なんて言ってるんだ?」

「それはですねー」

「りりっ!りりり!」

「……言わないでほしいとの事です」

「……言わないでって……」

「りりっ!」

「ああ☒ちよつと、どこに行くのお☒すいません、ユウナさん!それじゃあ、また今度お☒」

「りっ!」

「そう言い先に走っていくリリーパ族の後をついて行くフリーエさん。」

「……何を言っていたんだ、アレ……」

一人残された俺はそのまま奥に進む事に。なにせノルマは行っていないからな。

「と言うか強引に話を切り上げられたな。」

フリーエと一方的に別れた後、歩ける所を確認しながら奥に進む。

そろそろ疲れたのでナノトランサーに入っている飲み物を飲もうかと考えつつ、なんか敵と会わないと始めた矢先、視界に背を壁に預けた人影が見えた。

「……おあ☒おい!大丈夫か☒」

「その声は…ユウナさんですか？」

「な、なにが☒て、手当を！」

ナノトランサーからトリメイトを取り出しディアさんの口に突っ込む。

「げほっ、げほっ」

「っ、突っ込むのは不味かったか☒渡すからゆっくり飲んで、そう。ゆっくり」

確かトリメイトはフォトン含有が一番多かったはず。多少はコレで……。

「あ…きちんと挨拶出来ず…申し訳、ありません」

「そんな事はどうだって良い！何があつた☒」

「少し、怪我をしただけです。そうです。ゲガです」

「怪我って…おま、それ…」

ディアナの状況を見ると…切り傷多数、よく見りや目に血が入ってる。

「取り敢えず撤退だ。連れて行くー」

「待つてください。ゲツテムハルトさんを、待たないと」

「そんな状況じゃねえ!?!トリメイト飲んだとはいえ死ぬかもしれないだぞ☒第一！ゲツテムハルトさんは！」

「私は…ゲツテムハルトさんと確実に帰るって…シーナ姉さんと約束したんですーぐっ…」

「ほら見ろ！そんな状況じゃねえぞ！それにゲツテムハルトさんがいねえじゃないか！」

「ゲツテムハルトさんは…此处で待つてろって…」

「…移動させるのはダメか…」

背中の壁に預けているディアの隣に座り、膝の上にディアの頭を乗せる。

「…あと、ユウナ、さん」

「なんだ、痛いところがあるのか☒」

「い、え、そうでは…なくて…甘いものと、飲み物は、有りますか？」

……え、飲み物？

「…の、みもの？」

「はい…流石にここまで…血が流れると…水分が…」

「分かった、分かった。10リットルくらいオレンジジュースがある。それで良いか？」

「ありがとう…ございーげふっ！」

「なあ、やっぱり帰ー」

「よオー！ダイナ！終わったぜ！さっさと帰ってメデイカルルームにーおオ？お前はー」

嫌がるディアさんを無理やり背負って撤退しようかを考えていた矢先、心配していたゲツテムハルトさんが帰ってきた。

「えっと、こんにちは」

ナノトランサーから使い捨ての紙コップにジュースを入れてディアさんに渡す。

「…飲みます？」

「おお、俺は要らないから。ーその様子だとディアをどうすつか迷っていた見てエだな」

びくつとミミと尻尾が立ったのが分かった。と言うかゲツテムハルトさんこええー！デカイし！

「…そ、そうですよ。ゲツテムハルトさん。ゲガ人をこんな所に放置だなんてー」

恐る恐る言ってみる。いつ敵が出てくるからわからない状況で一人は少しーいや、凄くマズイと思うのだけど。

「ああ？それに関しては大丈夫だ。ここいら一体動いている奴ら片っ端から壊しまくったからな。それにー」

「おーいー！ディアちゃん！」

「ゲツテムハルトオオ！何があったああ！」

俺が来た道から男の声と女の声が。この声は…。

「ほらっ、甘々の甘ちゃん（友）がきたぜ」

「…この声は…エコーさんと…ゼノさん、か？」

「ああ。流石に俺でもディアをおぶって帰るのはー出来なくはないが、流石に、な？」

そう言い手に付けたナツクルを外すゲツテムハルトさん。

俺の膝枕の上に横になつているディアさんを抱え上げーええ
お姫様抱っこ☒確かに小さいけど☒

「おう！ゲツテムハルト！応援つて何をーうお☒」

「ちよつとちよつと！ディアちゃん怪我してるじゃない！」

「そうだ。エコー、ゼノ。四人で入り口まで帰るぞ」

「ちよつと！ゼノ☒ゲツテムハルト☒人付き合い悪すぎない☒」

エコーさん、それ人使いじゃないの？

「なんて言つてるぜエ？ゼノよオ？」

それを聞いたゲツテムハルトさんがゼノさんの方を向いてフツと
笑い言う。

「……はあ……エコー、お前、もう忘れたのか？」

「……あ」

数秒ほど間が空いてエコーさんが小さく呟いた。

「そういう事だ。コレでおあいこつて事だ。さあ、帰るぞ。ところで
ユウナちゃんは？」

「ああ……まだ任務が終わつてないので」

「そうか。分かった。気を付けるよ」

「ええ、先輩達も。幸運を。無事に帰還してくださいね」

「おう！頑張れよ！」

「それじゃあね、ユウナちゃん」

「じゃあな。また今度な」

「……ユウナさん、ありがとうございました」

そう言い四人は俺が来た道に戻つていった。

「……次からアフィンでも呼ぶか？」

と言うかマトイがアークスならなあ……訓練場で見せてくれたテク
ニククーアアレが有ればすげえ楽になるの思うんだけどなあ……

そんなこんなを思いながら先に進む。多分もうそろそろで終わる
でしょ。

「……確か……この辺に……何処だっけ……」

なんて事を思ってたから見つけてしまったよ…いつかの仮面。

仮面はソードを持ちながら日たら周囲を見ながら首を傾げている。

「…あれ、確かこの辺だった…よな？記憶違いか？」

そう言いながら仮面を外しー。

「…やっぱり、あの顔と…ミミと尻尾は…」

マグではなく古いカメラを使い仮面をズーム、シャッターを押す。

「取れたか」

カメラをナノトランサーに入れてもう一度仮面に視線を合わせる。

「…帰るか」

そう仮面は言うとなりスを上投げてー紫黒い色に包まれ消えた。

「……………」

アイツはー仮面は何かを探している？だが…何を？ここいらにいると言えば機構種だが…ダーカーに機構種を混ぜる？

『…………ユ…………デユ…………おう…………』

ダーカーの弱点であるコア部分を機構種みたいな重金属で覆われたら確かにきつい…だが、いや、だったらダーカー全軍でここを抑えればいい。そのあと施設を使って作ればいい。なのになんでしないんだ？

『…………ユウ…………さ…………ユウナ…ん！』

「んあ？デユケツトさんか？」

耳に入ったデユケツトさんの声により立っていた俺の体が動き始める。

『よかつ…なんで…通…悪い…です…が、任務は完了しましーあれ？感度が良くなっている…？』

「…………まあ、それは後で話すわ。帰還する」

『はい。テレパイプ出しますねーお帰りなさい、ユウナさん』
「まだ帰ってないけどな」

まあ、帰ったら帰ったで今度は料理ー肉じゃがらしいがな！

82 話目

——マイルーム——

「あああ……疲れたああ……」

殆どのアークスが自分のマイルームに帰り休んでいるかテレビを見ている頃。

やっと自分の仕事——晩御飯とその後片付け——が終わりやっとうっくり出来る。風呂でも入ろうか、と考え始めた時、史実の部屋の扉がノックされた。

「はあい。どっちだ？」

「私です」

「いや、どっちだよ」

「マトイです。ユウナちゃんも一緒に観見よ？」

「見よって……何を」

ベッドから降りて適当に買ったズボンと長袖を着る。

「うん。コメデイ……かな？デュケットさんが凄く笑ってるから——あ」

「ぎやはははっ！」

そう言いマトイがテレビのある方を向くと、凄い、なんか……マンガみたいな笑い声が聞こえる。

「……まあ、行くわ」

「……うん」

そう言い扉を閉めてふと思う。

デュケットさんであんな笑い方だったか？と。

——オラクル船団 ゲートエリア——

翌日。

ゲートエリアの休憩室で座って待っていると久し振りのニューマ

ン姉妹のパティとティアから連絡が来た。

マグに映像を出すように指示を出し、空中に投影される。

『ーあつーこんにちわー！みんなのアイドル、パティちゃんだよお！』
『ちよつとーパティちゃん！何そのアイドルつて☒ーこほん、ユウナさん、こんにちわ。妹の方のティアです。お久しぶりですね』

「ええ、お久しぶりです。どうしたんです？急に？」

『ええ、私達がやっている情報屋の方であるオーダーが出ましてね。その討伐依頼がーあつ、ちよつとーパティー』

『ーそう！その名は！ロックベア！私たち三種族を遥かに越す身長！それによって生み出されるパワー！さらにさらにーあ！ちよつとティアー』

『ーもう！パティちゃんは少し黙って！…えつとね？惑星ナベリウスにて多数のロックベアが出現、D因子の濃度も高いらしくて…空の討伐依頼が出てるの』

「…何体倒すんだ？」

『出来るう限り、だって。でも報酬自体一体倒せば貰えるから』

「…よし、やってみるか。人数制限とかある？」

『全くないよ。強いて言うなら死なない事かな。只でさえアークスは万年人手不足だし』

死人も多いからねえ、と横でパティさんが言う。

『まあ、任務ーークライアントオーダーって言うんだけど。それ。ユウナちゃんに送っておくから』

「…それって複数人で組んだらちゃんと他の人も貰えます？」

『うん。貰えるよ。管制官にマグを渡したら勝手に照合されるし』

「そうか。分かりました、友達呼んで行ってきますよ」

『うん。お願いね。私達も何%か貰えるから』

そう言い投影された通信を着る。成る程、オーダーって面白いものだったのか。

「…アフィンを呼ぶか」

デバイスに投影させてーマグからでも出来るが、専用のモノを用

意するか各マイルームに設置してある充電器的なモノに置かないとエネルギーが回復しないらしい。

戻ったら常時そこに置いておけるけどフリーフレンドの項目をタッチしてアフィンを呼び出す。

ホログラムメニューの上に更に投影されてアーキス言語、と言うか半ば英語で

Now Link

ー

ー

C

connecting

と表示される。

右上にはOfflineとまで出てるし。

15秒程掛けたが…出ない。

何か用事でもあったのだろうか？

「…はあ、しゃあない」

通信を切り空中に投影されたホログラムを閉じる。

と言うかコレ、ホログラムで合っているのだろうか？

マガジン取って背中に付けている白いステブウエポンがちゃんとあるのを手で確認してカウンターに向かう。

「結構いるな」

10個ほどある任務を受注するカウンターには複数のアークスがごった返している。

「…少し待つか」

まだまだ日は早い。数分すれば開くだろう、と思いつながら左右にあるATMの様な機械ーー決してAnti・Tank・Missileでは無いーーの前に行く。

が其処も人だかりが。

仕方ないマグで自分の倉庫に接続して整理でもしようかと考えた時、声をかけられた。

「おうーそののビーストちゃん！」

「は？」

投影された自分の倉庫を見ずに言われた方向を探すー後ろ？

振り向くと其処には金髪グラサン黒人という余りにもーそう、映画なら最初に死ぬか最後まで生き残るか的人が立っていた。

…と言うか戦闘服かっけえな。

念の為周囲を見渡しービーストは俺以外居ない。

「…え、俺？」

「そうだよ、そうーその様子だとアレだな？情報屋からオーダー受けたみたいだな？」

「何でそれを？」

いきなり話しかけられて、しかも受けたオーダーすら分かってたら少し警戒する。

「何でってそりや…オレも受けたからだよ。だがなあ…ロツクベアだっけ？ちつと怖ーいや、上手い人のログを調べてたら偉い上手いビーストが居てだな？それがおたくだったわけよ」

と言うかよくよく考えたら普通に会話してたらか聞こえてたかも知れんな。

って言うかそんなに俺って強いのか？ひたすら戦闘避けてるだけなんだけど。

「…いや、え？」

と考えていたらなんか凄いことを言い始めた。え？俺の戦闘ログを？こう言うのって誰でも見れるの？

「混乱してる様だが続きいいか？」

「え？うん」

「それでな？誰しも初めて戦う敵は怖いじゃん？それで手本となる物が欲しいんだよ」

「う、ん？」

確かに怖い。と言うか戦いたく無いです。

「それでおたくに頼むわけだ」

「…うん？」

「まあ、要するに。オレがおたくにオーダーを出すから戦い方を見せてくれって話だ。俺は手本を見れるし、おたくはメセタを貰える。win-winの関係だと思っぜ？」

確かにメセタを貰えるけど…うん、まあ、ただ戦闘シーン取るだけだし…良いかなあ？

「…うん…まあ、討伐行くし…受けるよ」

「そうこなくっちゃな！ーそうだ。オレの名はハンス。覚えてーんっ？」

そう名乗った黒人ことハンスさん。なんか本当にすぐ死にそうな気がしてきた。黒人って事が余計に。

「どうしました？」

「…いや、どつかで見た気がしてな？」

「…え？」

辞めてくれよ、こう見えて視線がー色んな視線が痛いんだから。

まあ、今更一人増えたって変わらないのか？

「…うん…まあ良いか！取り敢えずパートナーカード。交換しようぜ！」

「う、うん」

そうハンスさんは言うのとホログラムを投影してこっちに投げてる。

「…ん？クラスが無い…？」

ハンスとだけ書かれたカード。本来クラスが入っている所は空白だった。

「ああ、それか。いやな？どのクラスにするか迷っていてなあ？」

「ああ、それで」

それならば納得。まあ、第8世代って書かれているからどれでもできるだろうし、別に良いか。

「そう言うおたくはレンジャーか。良いねえ」

「どうも。まあ、近付かれたらおしまいですけどね」

「なあに、近付かれなければ良い事よ！ーよし。交換完了！それじゃ頼むぜ！クライアントオーダーって所にあるはずだからよ！確認してみな！」

「お、うん」

クライアントオーダーと言う項目をタッチ、数個ほど受けている依頼が表示される。

「ハンスさん、ハンスさん、ハンスさん…ああ、ありますね」

そこには森林地帯に潜む罾と言う題名でロックベアの撃破と言う内容の依頼がある。

「…結構ネーミングセンス良いっすね」

「だろ？それが出ているって事はちゃんと受け取ったみたいだな。終わったらこつちに来てくれよ。報酬を渡すからさ」

「分かりました。ーそれではまた」

チラツとカウンターを見ると空いてきた様だ。話を切り上げ向かう。

「おう！またな！」

手を振りながら言うハンスさん。

なんか凄く、ハイテンションな黒人さんだなあって思うわ。凄く話し掛けやすい。

「アフィンと違った話しやすさかな」

と言いながらカウンターに向かった。

ーー惑星 ナベリウス 森林ーー

依頼を受けてナベリウスに舞い降りる。

ステブウエポンを手に取りコツキングレバーを引く。

当然マガジンが刺さってないので、コツキングレバーが最大まで引かれた状態で固定される。

開いたエジェクションポートから1発弾を飛び出して横から入れる。

何でもこのライフル、と言うかアークスが使うライフル、大体がエアガンの如くパーツ交換でアサルトライフルにも、バトルライフルにも、スナイパーや軽機関銃にもなる様に設計されている、システムウエポンって言うのか？それらしい。

なんか米国とかでXMなんかとかかストーナー的なアレかな？

まあ、前回まで使っていたヴィダブラスタはブルップライフルだったが…今回はよく見るトリガーの前にマガジンが有るタイプだ。

こう言うのってなんて言うんだろ？

それは兎も角。後退したエジエクシヨンポートの中にある空いた薬室内に、マガジンから抜き取った弾を1発入れてみる。

「…ダメか」

入らなかった。行けると踏んだんだがな。

仕方なく弾をマガジンに入れて挿入する。

リリースボタンを押してボルトをリリース。

プレスチェツクを行い入っているのを確認。

モードをフルに切り替える。

さて、準備も終わった事だし…進むか。

何でも少し歩けば結構な数の目標に当たるらしい。

さっさと倒して帰ろう。

「……オラクル船団 パティ&ティアのマイルーム……」

「ねえ、パティちゃん。ユウナちゃん、ちゃんと他の人を誘って行ったかな？」

「流石に誘うっしょ！中型クラスとは言え、基本、一人で戦わないし！」

「だよね。一人で中型から大型とタメ張れるのは六芒均衡くらいだもんね」

「そうだよ！私の妹は心配性だね！」

「…でも。もしも…一人で行ったらどうしよう」

「…はっはっは！流石に無いでしょ！」

「パティちゃん。ユウナちゃんがビーストって覚えてる？」

「…あ」

「今から連絡すべきかなあ…私達の初めての情報を買ってくれた人だし」

「うーん…一応、カウンター行こうか？」

「…うん。そうしよう」

――惑星 ナベリウス――

いつもの様に向かってくる敵だけを倒しながら奥地に向かう。

それにしても…中々出てこないなあ…。

ライフルを片手で持ちながら、左手に付いているタリスを見る。

そう言やコレ、フォースとテクターに正式に使える様になるらしい

なあ…後ニューマンだっけ？系列が。

一応俺もニューマンらしいから使えるらしいけど。

そういやアークスからジグさんに情報が行ったのか、あの仮面が行ったタリスらしきもので空を飛んだりしたら奴、オラクル側の技術で再現してみた、って言ってたな。

タリスに装填されているタリスって言うかカードを空中に撃ち出して好きな所に止める事が出来るらしい。

パシユ、とタリスを真上に撃ち出す。オレンジ色に光っている。

んで更にタリスが止まった所に行こうとすれば――。

「――お」

――ご覧の通りタリスを固定した所に、別次元を通して跳べる、らしい。

高度約5メートル程。

「…あ」

因みにだがフォトンによってどんな高度からでも落ちててもあまり痛く無いらしい。

ー少し高さに驚いておしっこ漏れたけど。

技術の限界か仮面はD・Fの能力を併合して使い何処にでもワーブ出来るのに対して、こちらのタリスは50メートルほどが限界（更に使える距離は20メートル前後）らしい。

ストーンとゆっくり降りてー周りに敵が居ないのを確認して、戦闘服を一時的に脱いで用を足す。

「…あああ……」

尿が出る音が鳥の鳴き声に紛れ鳴る。

用を足し終わりナノトランサーから入れっぱなしよ完全自然分解のか柔らかい紙を出す。

「……」

それを優しいタッチで吹いて地面にポイする。

それが5秒後にはスツと溶けて土と帰る。

「…慣れないなあ…色々」

女の子になって良かったと思う反面、色々アレである。

マトイやデuketさんは兎も角、他のアークス女性戦闘員の目がね…こう、怖い。ビーストだからって言うのもあるかもしれないけど。

今は何も無いが…何処か相談できる人、居ないかなあ……あ。

「…リサさん？」

くらいかなあ…のつてくれるかなあ…。

そんな事を思いながら戦闘服を着なおしてもう一度探しに向かう。

83 話目

——惑星 リリーパ 地下坑道——

「はあ…捜し物——あのパーツを探せて…」

今回はいつもの任務——それに足してある事をジグさんから言われた。

創世器、クラリツサの足りないパーツの搜索及び回収。

コレを依頼された。何もこんなだだっ広い坑道をプランもなく来たわけではない。

前回遭遇した仮面。アイツも何かを捜していたような気がする。

そしてそれが合っていた場合、捜していたのはクラリツサのパーツの可能性が高い。

何せナベリウスの凍土でも交戦したからな。もう二度と戦いたくない。

いや、数的有利なら…。

などと思いつつものチェック開始、初弾装填、安全装置解除からのモードをフルに。

「よつと…：そうは言ってもよ。ココにあるって確信なんてあるのか？」

遅れて降りてきたのは——相棒ことアフィン。

一人じゃ絶対無理なので呼んできた。

レンジャー二人つて不利じゃね？近接が居ない。

「少し前に来た時に仮面がココで捜し物をしてたっぽいんだよ。それに賭けるしかない」

「俺は賭けることは嫌なんだがな。そんなん考えずに体を動かせば見つかるだろ」

「…俺は動くのが嫌なんだよ。それに俺だつて訳わかんない所で掛けたくないさ。だが賭けるとこがココしかないんでね」

いやだな、と言いつつアフィンもチェックを開始。

「まあ、適当にやって終わらそう。こっちは一個持つてるんだ、流石にオラクル船団に奇襲をかけてまでは来ないだろ」

「そうだな。さっさと終わらすか」

そう言い通路になつていゝる道を進む。

改めて見るとこの通路の下…水で一杯なんだな、貯水…にしては何かが違う。機構種を造るのに使つていゝるのだろうか？

「なあ、アフィン。この下の水つて何に使つてゐるんだろ」

「大方機構種を造る機械の冷却とか？…いや、もしかしたら水に見えるだけで他の液体の可能性が…？」

「情報は？上がつてきてないのか？」

「今調べる…」

そう言いアフィンは立ち止まりモニターを投影して検索し始めた。
「横失礼するよ」

投影されたモニターには惑星リリーパで確認されている機構種のデータ一覧と惑星の気候が載つていゝる。

「…ああ。…無いな。報告に上がつてない」

今の段階ではそれらしきものはなかった。

「…アレか？誰しもが誰か上に上げるだろうつて思つて上げてないパターン？」

「…まあ、俺が上げておくよ」

「おう頼む」

そう言いながら道を進み、十字路になつたり行き止まりになつたり…色々あつた。

更に少し経つと上に向かう坂を見つける。

「…と言つと…これ、ベルトコンベアーか何かあるか？」

「多分な。それに高台だ。周りを見渡すのも良いだろうし」

「ちゃんと周りが見えれば、だがな。…そうだ、軽食、食うか？」

「軽食？レーションか？」

「アホ、んな訳あるか。お握りだよ。ライスボール。分かるか？」
「いや、流石の俺でもその位分かるから。っていうかハンバーグ頼んだ時食べてたじゃん」

「……ああ。それもそうか」

「…相棒。忘れてたな？」

「はいはい。そんなこと言う子には上げませんよ」

そう言うときアフィンは俺の前で頭を下げて手を合わせてきた。

「ごめんって！ね？ほらっ☒」

「ええ…どんだけお前必死なんだよ」

「そりゃ好きな子から手作り食えって言われたらねえ？」

「…確かに。そりゃそうだな。……って言うかまだ諦めてないのか」

「当たり前だろ。所でランクは？」

「まだ友です」

「やっぱりかああ…何が足りないんだ…一体…」

「…好感度？」

「ゲームかよっ！」

「よっしゃ、チート使って好感度爆上げしてやる」

「まともに上げてくれ。…因みに俺が相棒の好感度を上げるには？」

「…：…そうだな、全宇宙からダーカーを消滅？」

「お前それ無理ゲーじゃねえか！」

「貴方なら出来るわ」

「何が出来るわだよっ！おだてて出来たらアークス居ないわっ！
……」

「………ぷっ」

「あはははっ！」

「あつはつはっ！ほんとっ！何が出来るわだよっ！は、腹が！」

「おまつ、今のどこに、そんなにわ、笑う場面が、くっ、ふふっ、ふふっ
！」

「あはははっ……ああ。本当、相棒と話していると、なんか楽しいや
「おまつ、急に笑うのやめっ、ごほっ、げほっ」

「おお、大丈夫か？相棒」

「げほっ、ごめん、助かったわ……」

「ほら、さっさと行こう。相棒のオニギリ食べたいしね」

そう言い俺とアフィンは高台めざし、階段の無いバリアフリーな坂道を登る。

「ほれ」

「おうーこれ中身なんだ？」

「シヤケだ、しよっぱいだろ」

ナノトランサーからおにぎりを取り出しアフィンに渡す。

「……んっ、美味しいな。久し振りに食ったな」

そう言い二口、三口と口にお握りを入れていくアフィン。

「握っただけのおにぎりが美味しいか。世も末だな。ほらっ、もう一個。ーお前の母親は？」

ナノトランサーから更にもう一個取り出しアフィンに渡す。

「…基本材料入れてボタン押せば料理は出てくるからなあ…」

「……S・FだーS・Fだったな、これ」

そうだった。俺本当にS・Fの世界にいるんだったな。そりや当然か。

「S・F？なんだそりや」

「まさしく今の俺たちの事さ」

寧ろアフィンの言う事はもつと軽い事なのだろうか？前にやってきたゲームだと食べる物が全て合成食品で、生物を口に入れるのに抵抗があるって話だった筈。それをAIに食わないと死ぬぞって言われてイヤイヤ食うのも思い出す。

「今の俺たち…？まあ、いいや。んでそれでーなんだっけ？」

「アレだ。料理についてだろ？」

「ああ、そうだった。んで各家にーマイルームにもある筈だが、そこにある機械に材料入れてくれれば、後は勝手に機械がやってくれる」「…んじや、手料理は？」

「他は知らないが、俺は誕生日だけって感じだな。小学校も中学校の時に聞いたが…他は…ねえ？」

「ねえってどう言う事だよ」

「作ってもらった事ないってさ。味は…ほら、機械だから完璧だけど…親が作った料理の方が美味かったな。味は少し変だったが」

「へえ…つう事は俺が親以外での初めてって事か」

「ああ、初めてだな」

「……」

そう言いながら俺もお握りを口に入れる。

…んっ？初めて？俺が、アフィンの？

「……なんだ？どうした？顔を赤く…そめ、て……」

待て待て待て！なんで直ぐにそっちに行く☒第1！俺は男だぞ☒アフィンは男でー！だが今の体は女の子だ。

あれ？正常？

「……」

「その様子…何か俺恥ずかしい事言ったっけ？…恥ずかしい事…：うーん…：初めてって言葉か？初めて…初めてねえ…はじーあ」

そこまで言うのアフィンは小声でいう。

「……」

「…先に進もつか」

「…うん」

「…なんか…ごめん」

「ーおい。見ろよこれ」

あの後少しアレな空気になりつつもお握りを渡したら解決した。

そんなに人が作るものは美味いか。

…：ラフリで食ったやつも既製品なのか？

「これは…：確か…アレか？」

俺が示した壁には懐かしいー死にそうな状況になりながらも脱出した砂漠での脱出劇ーの前に写真を撮った遺跡にも会った文字

だった。

「……そのアレがアレかは分からんが……ほら、ロボットに乗った時に見つけた言語。アレに似てね？」

「確かに。だが流石に俺は言語学者じゃないぞ。居るか？周りに」

「……あの人……いや、違うな、居ない」

脳裏に浮かぶはアキ博士とその助手、そしてロジオさんだった。

後者は地質学者。前者は多分生態系の学者。どちらとも違う。

取り敢えず写真に撮ってこの先どうやって探すかを考えていた時。

横から声が聞こえた。

「……あれ？そこに居るのはユウナさん？それにアフィンさんも？」

「ん、その声は」

「えつと、フリーエさんかな？」

「ええ、そうですよ。奇遇ですね、こんな所……ってユウナさんとは結構合ってますね」

そう言いながら通路奥から現れたフリーエさん。後ろにはリリーパ族が二匹いる。

「そっちは……って後ろに連れているな。成功したか？」

「ええ……あれ？その後ろの文字……この子達の描く絵に似てますね」

「りっ！」

それを見たフリーエさんとリリーパ族が声を上げる。特にリリーパ族が。

「……え……もしかして、読めるの？」

「りりっ！りりっ！」

手を使いどうにかして伝えようとするも……全くわからん。

「こっちだ、って言ってますね。何かあるのでしょうか？」

「すげえな。毎回思うが分かるもんなのか」

そう言うとりりりパ族は……小さな穴しかない壁と言うか物の残骸と言うか……それを通り抜けて反対側に向かった。

「ああ……まって！まって！私も行きますからあ……」

そう言いフリーエさんと後を追う。

「ああ……行っちゃまった……振り回されてるなああの人」

「いや、振り回されてるだろアレ」

「しかしどおするよ相棒。あの狭い所には流石に相棒のおっー」
「ずどんっ！」と言う大きな音がして取り上げず床に伏せる。むにゅっと胸が地面に着く。

「きやう☒な、なんだ☒」

「お、あい、後ろ！ーっって相棒すっげえ！」

アフィンが言いたいであろう事をスルーして後ろを見る。

「え…う、お…」

後ろを振り返るとーっそこにあったはずの残骸と言うか…まあ、道を塞いでいた物が無くなっていた。

「どんだけ炸薬使ったんだ？火器だけじゃ無くないだろうに…。」

「…ああ…フリーエさん？何やってんだよ！おい！」

「発破です！」

そう言い俺たちの方向を向き親指を立てるフリーエさん。

「そーじゃねえよ！んなの見りゃ分かるっての！」

「あれ爆破じゃないの？」

「いえいえ！ユウナさん！あんな適当に爆発させるのとー」

「俺の話聞けよ！なんでんな事してんだって聞いてんだよっ！」

「だっってこうしないと通れないじゃないですか。ほら。綺麗になったから通れますよーあ」

そこまで言っているとフリーエさんは話を中断させて奥へ。

「居ました！まつて！待つてよお！」

「…：…なんて言うか…活動的だな、ありゃ…どうする？付いて行ってみるか？俺は疲れたよ…判断は任せる…」

フリーエさんとリリーパ族の案内で更に奥に進み結構広いところに着いた。

「りりっ…りりー！」

「りっ…りりーい！」

「うん、うんうん。分かった。ユウナさん、このまま真っ直ぐでいいですよです」

二匹なのか二人なのか未だに少し悩むリリーパ族を言葉をフリーエさん経由で聞く。

「今ので…本当に話出来てるのか…？俺には全く分かんねえけど…」
それを不思議思ったアフィンがフリーエさんに聞く。

「大丈夫だ、おれもわからん」

「あははは…勿論、私も全部分かっている訳では無いですよ？」
「えっ？」

「ただ、言いたいって言うことが分かるようになった。それだけです」
「あつちかこつちか。今はそれが分かれば十分ですしね」

「さっ、行きますよ。あの子達、気まぐれですから。飽きないうちに目的地まで付かないと」

「あつ、そうだ。フリーエさんもお握り食べます？」

「本当ですか？それでは…」

「りっ！りりっ！」

「りい？」

フリーエさんにお握りを渡すとリリーパ族も首を傾げながら、本人達からしたら謎の白いナニカを見つめる。

「フリーエ。リリーパ族にも渡すか？」

まあこの様子だとあげてくささいって言うのかなと思っていたら真反対のことを言われた。

「いえ。もしかしたら食べれない可能性もありますし、もしこれを持ち帰って何かあったら大変ですから。渡すのはやめましょう」

「案外まともな返答だった。」

84 話目

——惑星リリーパ 地下坑道——

「りりっ！りりー！」

「りい？りりっ！りりー！」

ある程度リリーパ達について行くと大きな広間に出た。

その奥には——色々なハンガーが有り壊れた人型兵器の残骸で埋まっている。

周りに銃座など固定火器も置いてあり、何に対して備えてるのだろうか？此処まで侵入される前提なのだろうか、と考えながら周りを見渡す。

「あはは…嬉しそう。アレなら見て分かりますよね？この先に見せたい物があるようです。近付いて——」

そう言いフリーエさんがリリーパ達に近付こうとすると——。

「……なんだ、この音……」

ミミを立てて聴く——タイヤと地面が擦れている音……？

「んっ？どうした？相棒」

「静かに……」

「……この音は…タイヤと金属が擦れている音、ですかね？」

「そんな音聴こえるのか？一体どこから……？」

「……ユウナさん、分かりますか？」

「……えつと……後ろ、上——」

風を切る音と共に俺たちの後ろに——今まで見たことも無いサイズの大型機種種が現れた。

ギィィィ！

逆関節だか鳥足だかの装備した——あれ？コイツ——

「うお——なななっ、なんだ——」

「下がれ！下がれ！アフィン！あの時追ってきたやつだ！デカイぞ

！」

両腕部を合わせ挨拶の様に火花を散らす。

「マジかよっ！」

俺とアフィンの二人がライフルに手を伸ばしトリガーを引こうとする。

「待ってください！」

フリーエの左腕部がアフィンの前に出る。

「まだ攻撃してくる可能性は低いです！せめてこの子達を！」

「りー！」

「りりっ！りー！」

りりーパ達が俺たちの目の前に立つ機構種を指差しながらフリーエさんに近づく。

「奥？守る？機械？りー成る程、あの機構種は差し詰めガードマンって事ですか」

「どうすんだよフリーエさん！」

「りーたしかに撃っては来ていません、しかし…あの子達の言っていた捜し物が彼処にりー」

すると鳥足についているであろうタイヤを走行装置を動かし俺たちの周りをゆっくり回りながら残骸の目の前に向かい、止まる。此方向いてを静止して

「…奥に行かなければ襲ってこないかも知れないですけど…：そうもいきませんよね？」

「ユウナさんにはお世話になりましたし、微力ながら私もお手伝いしますよっ！」

背後に背負っていたランチャーを握りマガジンを装填する。

「りー危ないからちよつと隠れててね？いいって言うまで出てきちゃダメだよ？」

「りりー！」

そう言うとりりーパ達は入ってきた入り口まで戻りりー座った。

「りりっ！りー！」

「りりい？りー！」

「ふふっ、応援してくれるようですよ?」

「……あの機体が有れば倒せるんだがな」

脳裏に浮かぶは乗った機体。フリーエさんとか居るから無理だが……いずれアレも量産されるだろう。リバースエンジンアリング出来たってテレビで言ってたし。

「やるしかないでしょ?」

「そうは言ってもだな……こんな小口径弾……俺らからしたらデカイが、アイツからしたらエアガンだぞ?装甲どのくらいあることやら」「……いえ、多分あの様子だと20センチはないかと。脚部に腕部……あんなに脆い所はありますし、胴体も下半身上半身で分かれています。何とかありますよ」

そう言いフリーエさんが後ろに下がる。

「ランチャーはそんなに動けません、お二人が前に出て戦ってください」

「さあ、やろうぜ!相棒!」

そう言いフリーエのクラスター弾を合図に左右に分かれる。

敵機構種……後でトランマイザーと名付けられるのだが……の頭上で1発の弾が割れて中から小爆弾が降り注ぐ。

「撃て!アフィン!撃て!」

「分かってるよ!」

左右に分かれると取り敢えず撃てそうなところに撃つ。

アフィンはグレネードを撃ち脚を狙う。

ステブウエポンの上部レールに付いているリアサイトおフロントサイトの中心にヤツ……後に分かったがトランマイザーと言う名前らしい。ずっとタランマイザー……って思ってたぜ……を入れてトリガーを引く。

雷管が銃弾のケツを叩きやつきようの中にある火薬に引火、薬莖と弾頭が分かれ、弾頭だけがバレルを通りトランマイザー……に向かう。

エジエクシヨンポートが開き、引つ掻きが空薬莖を外に飛ばす。

この流れを俺がトリガーを引くのをやめるまで続く。

機械の駆動音がして腕部……棘の様なものの付いた奴がスライド

して地面を殴りながら向かってきた。

「やべっ！」

「相棒！逃げろ！」

「援護！早く！」

そのままライフル片手に後ろに逃げる。

ずどんっ！ずどんっ！と音を立てながら迫ってくるトランマイザー。

「ユウナさん！炸薬の入った榴弾を撃ちます！5カウントで飛んで！ー5！」

「相棒！フリーエさんの所に！」

そう言いアフィンはフリーエの方に向かいー此方を撃ってくる。

「ばっ、バカ！俺に当たる！ーうお」

ラチが明かないと奴は思ったのか地面をパンチしながらー背後から変な箱がー。

「あれランチャーかよ！」

蓋が外れ超低速のーそれでも人が走るよりは早いが一が俺を狙ってきた。

「死ぬって！アフィン！撃って！」

「言われなくても！」

そう言うのとタン、タンという音と共にミサイルが減っていく。

「4！」

流星に全ては当たらず何発かが近くに当たる。

「ひっ！」

「3！」

あとツーカウントと思った瞬間、体が前に吹っ飛んだ。

「相棒ー！」

吹っ飛んだ時、一瞬見えたのがートランマイザーの奴、ケツにある所から何かを出してブーストしたな。

そしてスパイクのついた腕の他に鋭い物がついた腕をー俺に突き刺そうとしてきている。

「きゃーうう」

そのまま吹っ飛ばされて、ああ、早くも死ぬのかなあ、と思いがから目を瞑った。

「ああ×フリーエ！早く！」

「分かってますよ！」

ぽこんつ、と言う音が聞こえーそれを合図に気を失った。

ー見たとき、最初は心が凍った。そして見ているものがすつごくゆっくりに見えた。

ユウナが機種種に吹っ飛ばされて宙を飛んでいる時、それはそれは…ゆっくりだった。

好きな人が吹っ飛ばされてフリーエさんに怒鳴ってしまった。

「ああ×フリーエ！早く！」

「分かってますよ！」

隣に居るセミキャストのフリーエさんにランチャーを撃って貰い、気を引いてもらう。

「本当はこの技使いたくないんですけどね！」

そう言うフリーエさんは脚部のフォトンブースターを起動、ブースト移動をしながらランチャーを腰だめで放つ。

「これ！やったらオーバーホール必須なんですよ！早く！アフィンさんはユウナさんの所へ！安全な所へ！早く！」

「ごめん！フリーエさん！」

そう言い俺は相棒ーユウナの所に走る。

「ユウナ×大丈夫か×しつかりしろ！」

ぺちぺち頬つぺたを叩くが、柔らかくてモチモチしてるって事以外変化は無い。

「しつかりしろ！死んでないだろう×ーくそつ、胸に触るが許せよ！」

全く起きないユウナを背負いー背中にやばいサイズのモノが当たっているが、今はそんな時ではない。

ユウナを残骸の近くに持って行きそこに立て掛ける。

「オイ！起きてくれ！早く起きないとーえつと、でああ…ほら！胸

揉むぞ！」

結構言うのは恥ずかしいが仕方ない。と言うか身体のラインがはつきり見える戦闘服を着るのが悪い。

ぴっちり戦闘服なんか着やがって……スカートよりよっぽどえっちなわい！

などと思っていると後ろから悲鳴が。

「ぎやあああ！」

振り向いた瞬間、フリーエさんがユウナの隣に吹っ飛ばされてきた。

「はあ、はあ、アフィンさん、逃げて…アレば…強い」

「そんな、無理だって！女の子を置いてくなんて！」

「逃げてアイツの情報を持ち帰って。ー私、左腕部をやられちゃった…」

そう言い見せてきたところはー火花が散っている。

「くそっ！どうにかできないのかよっ！相棒！起きてくれ！死にたくないだろ！」

「アフィンさん！もういいです！逃げて！」

「だったら！俺が！ここで！ユウナに！キスをー」

「んっ……あれ、生きてる？」

「！起きたか☒ユウナ！」

「あれ？死んだんじゃ…」

「そんな事はどうだっていい！相棒！奴を倒すぞ！」

まだ相棒が生きている、それだけで今は良いや。

ー目を開けたら、何も変わっていないなかった。と言うか状況悪化している。

くそっ、何か近接武器ないのかーーそう思いナノトランサーを弄るとーあつた！ソードだ！

ナノトランサーが背中にソードを出してー握る。

振り方は分からない、やってみるしかない。フォントで重量が無いように感じる。

「ユウナ！それ！」

「ああ！やるぞ！」

昔やっていた狩りゲームの様に身体の前にソードを両手で握る。そのままソードを右後ろに移動させーそのままトランマイザーに走る。

「うおおお！」

駆動音と共に右腕が俺に向かって切られるー。

すると以上に動きがゆっくりなりーそれを交わす様に動くーちゃんと交わせた。

そのまま横に避けて腕を力一杯叩き斬る。

金属が擦れる音と共に腕が落ちた。

「行けるぞーユウナ！」

「アフィンには裏に！ケツを撃て！」

アフィンに指示を出しケツを撃たせる。

その間も腕に付いた剣で切ってくるしパンチしてくるし。

「アフィン！関節！脆いところ！」

パンチをソードで耐えている時にアフィンに指示を出す。

「わかってるよ！」

ぽんつと弾が放たれもう片方の剣が付いた腕にあたりー地面に落ちる。

「ユウナさん！今です！ソードにフォトンを載せて！刃を！フォトンで延長させるんです！」

後ろからフリーエさんの声が聞こえる。

「よっしやああ！いつけええええ！」

一度後ろに離れソードを片手で持つ。トランマイザーに合わせソードにフォトンを纏わせ胴体にぶっさして上に切り上げる。

頭部をぶち抜いた後ー火花が散り、地面に突っ走った。

同時にソードも割れた。

「……勝った？」

「…その様、ですね…」

「ははっ、勝った、勝ったのか…おしっこ漏らしちまつてるよ…俺…」

「ユウナさん…男性がいる前で…まあ、良いです」

「やっ…勝てたのか…」

そのまんま俺とアフィンが地面にへたり込んだ。

数分後、なんとか立てるくらいには回復して辺りを見渡す。

「はあ…なんとか倒せましたね。ーあれ？あの子達は？」

「アレは…瓦礫の中を…指差しているっで良いんだよな？…つっても…隙間すらないな…」

「…さて、私の出番ですね、離れてくださいよ？」

片腕しかないフリーエさんが残骸に近づく。

投影されたディスプレイを弄りー爆発物を出す。

「いや何も言っただけでねえっ！ー待て！何でもう爆破の準備終わってるんだよ！」

「アフィンは元気だなあ…俺は疲れたよ…」

「私、さっきの戦闘では足手まといだったんです。でも今自分しか出来なさそうなので！恩を返したいんです！」

「恩を返すのはいいけど！間違っ！ー」

「ー爆破っ！」

ずどんっ！

アフィンが言い切る前に起爆、残骸は粉々に吹っ飛んでいった。

「べっ！べっ！うあ…砂が…口に…」

「ーうん。所定の位置に爆風は逃がしたし、位置も範囲内。大丈夫かな。さて、何かあるでしょうか」

吹っ飛んだ瓦礫の中から出てきたのはクラリツサのパーツが出てきた。しかも持つ部分がある。

「これが相棒の言っていた…奴だよな？…にしては掴む部分しか…」
それに近づき手に取る。

「綺麗…コレが私たち…ううん、ユウナさんが見せたかった物なの？」

ナノトランサーに保管する。

「しっかし、何でリリーパ族がこれのありかを知ってたんだ？」

「ええつと…：大事な…品？物？…を…預ける？…ううん？すいません、詳細まではちよつと…」

「まつ、そうだよなあ…寧ろ此処まで案内してくれて充分過ぎるって感じだな」

「まあ、何はともあれ見つかった事だし。終わりつて事で良いか？」

テレポーターを出して地下坑道入り口まで戻る事に。

… オラクル船団 ショップ エリア ペアーリー…

それから帰還して、ジグさんに物を渡しに行く。

「ジグさあん、いますか？」

『おう！居るぞ…その様子だと見つかった様じゃな』

「えっ☒」

『ははっ、尻尾を見ればわかるぞ』

後ろを見ると…モフモフの尻尾がわっさわっさ

嬉しそうに揺れていた。

「…これがクラリツサのパーツで良いんですね？」

ナノトランサーから持つ部分を取り出してジグさんに渡す。

これだけ見ると定期的に光るただの白い棒だ。

『おお…正しく。コレはクラリツサの一部に違いない』

ジグさんはそれを受け取るとまたテンションを上げる。

『こうしてはおれん！早速修復に入らなければ…後一つも頼むぞ！…そうだ、ヤスミノコフ造兵廠が後でお主に武器をまた渡すそうじゃ、送つといてやるよ』

「？え、ええ、お願いします」

『おう！それではの！』

そう言いジグさんは奥に消えていった。

「……帰ろ」

帰ればデユケツトさんやマトイが癒してくれる。女の子同士だから問題ない。

85 話目

「……ユウナとデュケット&マトイのマイルーム……」

「はあ……」

そう呟き……アフィンに買ってもらった服を鏡で見る。

「……これ……素直に貰って良かったものか？……いや、ダメだった、か？」

何故こうなったのか。

トランマイザー戦後、急いでテレポーターを出してフリーエさんとアフィンを連れて帰還して、メディカルセンターにフリーエさんを置いて来て……その後ジグさんに渡した後。

アフィンに今お前の格好すごいことになってるぞと言われ、視点を下ろすと……所々破れていた。

アフィンにやべっ！どうすんのこれ☒と聞くと戦闘服はフォトン何とかで放置していれば勝手に修復されるはず、との事。

そこでアフィンは少し考えて、ちよつとこの場で待つてると言われ、自販機で飲み物を買ひ、ショップエリアの噴水の見えるベンチで上を見ている事数分。

これを着ると袋を差し出され……中身を見ると……懐かしのメトリイ・アシンが入っていた。

アフィンにこれ持つてるぞと言うと、ええ、と言いながら少し青ざめていたが……。

その時はまあ、なんだ、俺が持つてるのは黒だ、着てやる。

と言ひスカート部分が蒼いメトリイを着たのだが……その時のアフィンの目線が……もろに、ねえ？

「ああ……スカート超す……すすんだけど……」

「ユウナちゃん……幾ら女の子しか居ないって言っても……スカート捲り上げたらまる見えだよ？水色の」

「マトイさん……ユウナさんに言うのは……もう遅いですよ」

「そうは言っても…デuketツトさんも言いましようよ?」

「最初の内は言ってみましたよ。でもね…」

「そう言いデuketツトさんは俺を見た後マトイの方を見て首を振った。」

「…男性を誘うような行動はやめてって言っても…『もう癖だからやめられない』って言って辞めないんですよ…」

「もう最初聞いた時コレがアレな人なのかと思って…本当はダメですけど権限使ってデータ見て処女で安心しましたよ…」

「デuketツトさん☒それダメなんじゃないの?」

「マトイさん、バレなければ問題は無いんです。報告書も書かなくて良いですね」

「そうデuketツトさんの話を聞き流しつつ鏡の前でスカートの長さを図るーもつと長いのか?」

「と言うかーいえ、話は変わりますけどー!なんなんですかその胸は!私の何倍あるとー」

「スカートが長いのか、又はスボンが欲しいなあと思っているとデuketツトさんがいきなり俺の胸を見始めて怒り出した。」

「と言うかそもそもデuketツトさんやマトイも俺に隠れているが結構ある。十分山はできているし。」

「いや、デuketツトさんも十分ありまー」

「ユウナさんに比べたら全然ですよ!何なんですか!この胸のサイズは!」

「そう言いデuketツトさんが鏡の前でアフィンが買ったメトリイを脱ごうとしている所に後ろから来てー胸を揉む。」

「ひゃっ☒ちよ☒」

「ーこのサイズーF、い、以上?」

「F…?」

「その言葉ーと言うか頭文字を聞くと戦闘機しか思い付かない。と言うかバスタのサイズがよく分からない。Fってどの位だ?ー俺の胸か。」

「そ、んな…」

「ちよ、やめて！上着脱げないじゃない！」

「そう言いデュケットさんの手を振り解き、蒼い色をした上着を脱ぐ。」

「…大き、過ぎる」

「ずっと俺の後ろから離れソファに座るデュケットさん。」

「ねえ、本当にそうだよねえ、デュケットさん」

「胸全体を覆う水色のブラジャー。このサイズだと全体を覆う奴じゃないとねえ？スポーツブラって言うんだらうか？」

「ぴったりくっついてーそれできて厚いくせに通気性は最高。」

「ほんと最高だよこいつ。」

「F以上、ある…なんて、なんて事だ…」

「まあ、私は直に見た事ないから言えないけど…ユウナちゃんサイズだと肩懲りそうだよねえ…後お風呂に浮きそう」

「そうだぞ、デュケットさん。胸が大きくて良いことなんて無い。4害合つて1理無し、だぞ。ーそれに浮くぞ」

「それにビツクリなのがこの胸、下に垂れない。なんかすげえとしか言いようがない。まあ、突き出るような形じゃなくて丸いからなあ…。」

「因みに4害あつて1理の内訳は 1. 重い 2. 肩がこる 3. 視線が直で刺さる 4. やっぱり重いーまあ、1と2と4は万能質量のフォトンで何とかなるが…3だけは無理だ。」

「1と4同じとは言わせん。」

「そうは言っても…夢なんです…」

「そう言い一度経った後、上の言葉を口にしてもう一度ソファに座るデュケットさん。」

「立ったり座ったり忙しいな。」

「うーん…デュケットさんはそんなに大きな胸が欲しいの？」

「ええ！大きければ良いのよ！」

「ならユウナちゃんの胸を揉めば自分の胸も大きくなるかもよ？」
「え？」

「はっ。」

「…え？何言ってるんこの銀髪赤目の子は…。」

まさか本当にもう一度触りに来ないよな？と思いデユケットさんの方を見るとー丁度目が合った。あの様子だと同じ事を考えたのだろうか？

「ええと…マトイさん？流石にそこまでは無いわよ？」

流石にデユケットさんもそんなことはやれない。

「…マトイ…流石にそれは…ねえ？」

「えっ？でも…」

「…どうしたの？」

デユケットさんが優しく聞く。

「うん。フィリアさんがー」

「あの人が…」

「？何かあったんですか？ユウナさん」

「いや、何でもない。何も無いさ。続けてくれ。マトイ」

「ーうん、フィリアさんが『おっぱいを大きくするには胸を揉んでもらう？揉む？が一番』って言ってたから…」

「……あの医者は…」

「…揉んで大きくなるなら大きくなってますよ…とつくに…」

二人ではあ、とため息を吐きながらー俺は鏡の前で衣装をチェンジ、メトリイの黒色を着直し、そのまま作業台に向かう。

「あつ、ユウナさん、そう言えば私ライフルからランチャーに変えました！触ってみます？アークス製ですけど」

「おお！まじで！見してくれ！」

はい、どーぞ、と言いー見た目に反して軽量化とフォトンで軽くしているらしいーランチャーが出てきた。

と言うかいきなり出し、ランチャーの名前がランチャーって…。

「ほお…確かに軽いな…これ軽機関銃より無いな、重さ」

「ええ。それは初心者用のランチャーですからね。その代わりH・E・A・D・Fしか無いですけどね」

ランチャーを作業台に乗せて下部にあるー。

「ああ、安全装置は？」

「付いてますよ。ほら、トリガーとグリップに付いているスイッチ」

ー「確かに付いているな。」

本体下部にあるマガジンを取って、隣に置く。

「これ…何ミリだ？」

「確か75ミリだったかと。それ以上も有りますが、弾代が一番安いので」

あとそうそう、ランチャーの弾はフォトンを込めるだけだから弾代は実質かからないよ、と言う言葉を聞き作業台のイスに座っていたところを勢いよく立つ。

「弾代タダなの☒」

「ええ、ライフルよりよっぽどコストパフォーマンスかからないって言う事で結構な数のレンジャーが鞍替えしているそうよ？」

「……でも取り回しがな……」

「ダーカーに取り回しなんて言ってられないわよ」

「それもそうか」

そう言いこのランチャーを見る。

ぱっと見ソレっぽいって言うのがバレる下部の出っ張り。これ撃った弾のブラストを逃す奴だったりして。これだけは……そうかなあ？

「……よし、ありがと。楽しめたわ」

「ええ☒楽しめたって数分も見てないですよ☒」

「俺は触るだけで満足するタイプなの」

ほらっ、とランチャーをデュケツトさんに渡しー気がつくとソファで寝ているマトイに俺の部屋から持ってきた薄手の毛布を掛ける。

「……それにしても…マトイさん…何者なんでしようか？」

「俺に聞くな。俺も分からん」

「アークスには登録されてない、それどころかオラクル船団にも……」

もしかして、ですけど……」

「…ダーカー、なんじゃ…」

「…いや、それは無い。マトイもフォトンを使えている。過剰気味に」

「…それなら尚更アークスに所属していないって事は…」

「分かん。取り敢えず記憶が戻るのを待つしか無い。それしか出来ないからな……」

「…所でユウナさん、話が変わりますけど…今日の晩御飯、角煮が食べたいです」

そうデュケットに言われ咄嗟に時計を見るーーまだ昼前だぞ☒

「……俺は煮物苦手なんだよ、失敗しても行けるか？」

「はいー食べてみますよー」

それより前に昼飯作らないとな、と言い簡単にーー流石に適当なもので済ませた。レーションを簡単に炒めて調理した物を。

因みにその日の夜の角煮はーーフラグ回収ならず普通に成功した。二人ともホロホロで厚くて熱くて量も合って美味しい、と漏らしていた。

二人ともこんな大食いだっけと思いつつも自分も小さな口に角煮を入れるーー母親の味には遠いな、と思いつつも箸を進めた。

86 話目

86 話目

「うーん、どうすつかなあ…」

「そこは頼みますよお！何でもしまー痛っ！」

「パティちゃん！そんな事は言っちゃダメって言ってるでしょ！」

「うう…でも、おかしいと思わないの☒人が消えたんだよ！戦闘員じゃなく学者が！」

角煮を作った翌日、ショップエリアに弾の購入と各種回復薬を買いに寄った時、ミミが久し振りに聞いたような声を捉えた。

聞こえた方向は…階段か？

声のする方に向かうとー三人のニューマンが話し合っている。うち二人はーパティさんとティアさんだった。

その二人がニューマンの男の人に話を聞いている、のか？

「ーもね？パティちゃん。惑星で人が居なくなるなんてよくある事だよ？」

「そ、そうっすよ。何でも何かの調査をしているなあって時に消えたんですから。まあ、やられてしまーでも、一瞬レーザーに味方の反応が」

「でも一瞬だけなんでしょ？案外壊れた、とか？」

「でもでも！私の勘が！この件は重要って言ってるのよ！それにマグが壊れー」

「おーい。何を話してんだ？」

何を話しているのか知らないが…まあ、久し振りに会ったんだ、挨拶くらいはしようか、と考えて声を掛ける。

「おっ！ユウナちゃんじゃん！久し振りー！」

「はい、ユウナさん。お久しぶりです」

「……あ！お前！あの時の！」

パティとティアが挨拶を仕返した時、奥にいる紫色のリーゼントを

決めた男の人が――階段に座っていたのに、俺の事視認するや否や立ち上がり指を指差した。

「え？おれ？」

「そうだよーアークス試験の時！あの時は助かった！黒人のヒューマンと組んでいたんだが……お前の援護がなきや、ダメーヅ食らったわ。ありがとなー！」

「……こちらこそ」

こうは言ったものの全く記憶に無い。と言うかアークス試験の時は把握してなかったからな……最初の方はサバゲーか何かだと思っただぜ。

すぐに違うって言うのは分かったが。

第一視点を下に下げたら……ねえ？

「ところで！ユウナちゃんもどう思う？消えた学者！」

「いや、それだけじゃ何も……」

まあ、ミミが良いから何となくは分かるが……誰か消えたんだっけ？「うん。パティちゃん曰く、その人は何かバイ情報を握ってしまったとかで消されたんじゃない？……って言ってるけど……ありえないでしょ？第1、その人地質学者でしょ？」

「ん？地質学者？」

地質学者と言う言葉に違和感が。まさかロジオさんが？

いやでも俺が知っているのがロジオさんってだけで他にも居るだろう。

「おっ！食いついたね！そうよ！おかしいと思わない？その――ロジオさんって人」

「ロジオさん、でしょ？」

「ええ×ロジオさんが×」

ええ×うそだろ×なんで×ただの学者じゃん×あの人！

「うわっ×ど、どうしたの×」

「……その様子だと何かあるのね？」

「……いや、分からないけど……その、ロジオさんが死んだ、のか？」

「……いや、死んだって訳じゃ無い。ただ地下坑道でシグナルが途絶え

ただけで…」

「…ごめん、名前は？俺はー」

そう言い目の前のリーゼント男に名前を聞く。正直少し怖い。

「いやー良いー！聞いているからな。ユウナちゃん。俺の名前はレダ。ハンターをやっている。ーそれ？」

そう言いレダさんが胸を叩きながら言う。

「ああ。その話、本当なのか？」

「…ああ、本当だ。俺が広域マップで消えたのを見たからな…」

そう言いながらレダさんはもう一度階段に座る。座った後にこの目で、と付け加えて。

「ユウナさん。守秘義務に反しなければだけど、ロジオさんから受けていたオーダーって？」

ティアさんが俺にオーダーの内容を教えてくださいませんかと言ってきました。

「惑星ナベリウスの地質調査。森林地帯と凍土の違いを調べるために土を取ってきてくれたって」

「…：うーん、何で土弄りの学者が殺されるような事に…？」

「土弄りって…：因みに何で殺されたって事に？」

「おう、一瞬だけだけど、ロジオさんのシグナルにー本当に一瞬だけ味方のシグナルが出て、それから何方とも消えたんだ」

「…ティアさんとパティさん。アークスの中で殺しって違法、ですよね？」

「ええ、勿論違法よ」

ティアさんが頷く。それにしても一瞬だけ写った、か。

誰かに襲われた？でもなんで？ううん…：分かん。

…：今日やる事ないし、地下坑道にメセタ稼ぎにでも行くか？

「…：俺ちよつと地下坑道に行つて来ます。ーそうですね、死んだらマイルームに居る女の子、ティアさんとパティさん、頼みます」

「ええ☒ちよつと☒」

「いけえー！いつてこおおいー！」

煽るな馬鹿姉！とティアさんの声とレダさんの驚く声が後ろから

聞こえるがスルーしてゲートエリアに向かう。

本当になんでロジオさんが？

『ーさて、私も彼に会いに行きますか。あの子達にも会いに行かないと、ね』

「ええ☒探索不可☒なんでえ☒」

「すいません、ユウナさん。現在地下坑道は集められたデータ再編集の為出撃が不可能になっています」

意気揚々と出たは良いもののカウンターで足止めを食らった。何故に探索不可？

「…ええ…」

「その代わり新たな任務地ー浮遊大陸にーえっ？」

どうしようかと考えようとした時、管制官が耳下にあるヘッドセットー骨伝導マイク的な奴かと思っただけど違った。其処だけは小型化しないのか？いや、一目見てあのヘッドセットをつけている人が管制官って分かるように目印的な奴か？ーに手を当てて誰かと会話し始めた。

それと同時にモニターとキーボードが投影され次々とオラクル言語だかアークス言語だかどちらか分からない言語がタイピングされていく。

「はい。はい。分かりました。ーユウナさん、貴女宛にオーダーです。浮遊大陸に向かってください。そこで現地にて合流予定のアークスと共に龍族とあつてほしいとのオーダーが入りました」

「ええ…わ、分かりました…」

話を聞きながら帰ろうかなと思っていたら俺指定である。

しよーがない、管制官から任務を受けて、一度各種メイトの残量を確認しーーそうだ、ソードも持っていくか。

ナノトランサーを見ると各種メイトが減っていた。

シヨップエリアにある各々の倉庫に繋がっている端末に触り、モノメイトを直接ナノトランサーに補充する。

「……ああ、あとソードーはいつか？…いやでも…」

立体投影された倉庫内にある武器一覧―と言っても入っているのは使わない弾薬や互換性のないグレネード用の弾薬だが―を見ては触り、触ったらナノトランサーに入れずに戻すを繰り返す。

「……うん」

やっぱり持つていくか。嵩張らないし。

そう思うとすぐさまナノトランサーに転送する。

一度圧縮された菱形に戻しても良いんだが―まあ、邪魔だし。

向こうに着いたら背中に装備しておかないとなあ……そう言やこの―ステブウエポンのマガジンも丸い奴じゃない奴ないなあ……欲を言えばボックス型の奴。

丸いと銃を地面につけて撃ちにくくてなあ……。底平らじゃないし。アイテム系を全てナノトランサーに入れて、もう一度確認―よし、忘れ物無いな。

そのままキャンプシップの発着場―と言うか空港?に向かう。いつもの様に行く惑星ごとと別れている通路を―自分が向かう惑星―惑星アムデイスキア行きのキャンプシップを探す。

「……No. 0245……これか?」

NとOが崩れたような文字で245と書かれている。

「あんたかい?今回乗せていくアークスは」

中からは―黒人のニューマンが出てきた。

「ええ、ユウナです。よろしく」

そう言い手を差し出し握手をしようとする。

「いや、良い。俺は女性と手を握らない主義なんでね」

「そ、そうですか……」

差し出した手を引っ込める。

「俺が受けているのは君を浮遊大陸のあるポイントに降ろす。これだけ。ok?」

「おっけい!」

「おっ、良いねえ。女にしちやノリって奴を分かってる」

さあ行くぞ、と言い黒人ヒューマンがキャンプシップのコックピツ

トに向かう。

俺も慌ててその後をついていく。

「へえ…コックピットってこうなってるんすねえ…」

黒人の後をついて行くとコックピットの中に入れた。

コックピット装甲で覆われて計器類は完全タッチパネルになっている。

パイロットが座ると周りに色々な計器類が立体投影されている。

「おいおいおい！此処は関係者以外立ち入り禁止だぜ！さあ、テレプールのある区画に行つた行つた！」

そう言い手でしっしつとされた。

仕方なくテレプルー地上に降りるためのワープ装置がある区画と言うかエリアと言うか…そこに向かう。

此処から直接クエストカウンターから任務を受けれる端末、メデイカルセンターから出されているドリンク（まだ飲んだことはない）を飲める端末等他にも端末が何個か置いてある。

「そう言や現地で合流するアークスって…誰だろう」

因みにだが外を見ると…全然機体が動いていない。多分管制塔と交信しているのだろう。

大体飛んでいる時間より所定の距離を取ってから作るワープゲートに入る方より離陸許可が下りるのを待つ方が時間が掛かる。

やる事が無いのでメデイカル端末に触れて食べ物を買う。

こう言うジャンクフード的な物も…栄養価を考えられて…売っているのも凄い。

そしてさり気なく…。

「はむっ…」

デカイ。コレは十中八九俺の口が小さくなったからだろう。

一口食べて一言。

「…これホットドッグの方がよかったか？」

ワンコインで買ってしまったものは仕方ない。食べさせてもらお

う。

87 話目

「お客さん、合流地点にー浮遊大陸に着いたよ。テレプールの座標を……よし、設定出来た」

フォトンチェアと言うどこでもイスに座り心を落ち着かせようとした時、パイロットから声を掛けられたー既にアムディスクア上空らしい。

「浮遊大陸のー指示された座標を打ち込み済みだ。後は降りるだけだ」

そう言いテレプールへのゲートが開く。

「これで俺は任務完了。帰りは別の奴が来るらしい。ま、任務頑張れよ」

「はい。ありがとうございます」

と言いソードを背中に、ライフルを腰に。タリスを左腕に装着してー完全装備でテレプールに落ちた。

ー惑星 アムディスクア 浮遊大陸ー

「おおっ、とお」

空間を割って作られたテレプールから地上ー浮遊大陸に降り立つ。つ。

「ここが……へえ…」

周りを見渡すとー立っている大地に端がある事に気づく。

端の方に歩いて行くとー

「…うお、う、浮いてる、じめ、んが」

下が見えるくらいになるとー足が震えてきた。おかしいな、高所恐怖症じゃ無いはず。

「こ、こえ……んだよ、ここ…帰りたい…」

四つん這いになりながら下を一通り見てー下はマグマなのか。

火山洞窟の上だったりするのだろうか。

と見ただけでクラクラするからさっさと後ろに下がろう。

と言うかこれ落ちないよな？

後ろに下がりーまずはタリスー導具だったか？にカードを入れる。

カードにはテクニクがーインストールなのか、記載なのか分からないがーセットされていて一定の距離に留まって、そこからテクニクを放てる。

テクニクを放ったカードはナノトランサーと同じく4次元に入り元に戻って来るらしいー正直21世紀の頭では理解出来ないー。

ーまあ俺は全部手元で起動できるレスタやシフタ、デバンド、アンテイしか装備してないが。

実は6枚ほどスロットがあるから6個くらい装備はできるのだがなあ…まだ本格量産されてないんだよなあ、これ。タリスのカードを流用出来ないのだろうか？

そう思いながら左腕を体の前に突き出しー撃てと念じる。

するとー俺もよく分からないが、確かポスで調べた限りだと装着者又は装備者のフォトンを認識してそれがトリガーになるとかなんとかータリスからカードが射出され数メートル程進むー。いや、ありや10メートル前後か？それを機に消えた。

腕を見るとー既に戻っている。

「…よし、次」

ライフルを腰から取り出しーこれもフォトンで装着している。最早何でもフォトン頼りだなーマガジンをセット、コッキングレバーを引く。

「あれ？引けない。何で？」

ガチャガチャガチャ弄ってーマガジンを抜いて差し込んだ後に更にマガジンを下から叩いたり、コッキングレバーを強く引いてみたーり。

んで答えは簡単。

「はあ…」

セーフティを外していなかったから。答えを分かれば呆気ない。と言うか分からなかった自分が恥ずかしい。

プレスチェックを行い薬室内に弾が入っているのを確認。これが大事。

ライフルを腰に――念の為セーフティを掛けて戻す。

次はソード。

今は握ってないから本体部分しか無いが――これを握ると。

ぶおん、と言う音ともに青い刀身部分が形成される。

まるでビームサーベルだ。

因みにこの青い部分は高濃度のフォトンらしい。フォトンって無味無臭じゃ無いのか？

「よし、全武器チェック完了、合流地点に向かうか」

――オラクル船団 市街地――

「はあああ……最近相棒から連絡が来ない……」

「何を言っているんですか、アフィンさん――あ、これとこれ、お願いします」

所代わりアムデイスキアからオラクル船団へ。

此処では――私とアフィンがファミレスで食事をしている。――

いや、食事をしているのは私だけだ。

「いや、だつてさ？あの時――地下坑道以降呼ばれてないんだよ……もしかして嫌われた？」

「それを判断するのは早いんじゃないかな。――わあ、きたきた」

『お待たせしました、クアッドパフェとタビムアイスです。それではごゆっくり』

「…フリーエさん？いくら俺が持つから相談乗ってくれて言ってもさ…値段、高く無い？」

「相談料ですよ！相談料！」

「その相談は答えになってないんだよ…」

うーん、と頭を抱え込むアフィンさん。そこまで悪い方に考えなくてもいいと思いますよ?」

最も、ユウナさんの感情は愛しているより好きって言う感じでしょうが。同性の好きって意味でしょうかね?」

まあ、そんな事は言わずにアフィンさんのメセタで食べてもらいますか!何気にキャストって機械部分の修理費とか予備パーツ費とかで結構メセタ掛かるんですよええ…変えるたびにエステに行かないと行けないし。

「…うん、一通り見たけどあそこの方が良いな」

メニューを見ていたアフィンさんが呟きメニュー表を置いた。

「あそこ?あそこって何処です?」

「ああ、俺と相棒が知っているカフェなんだが、そこの方が安くてな。地味に美味かったし。うーん?そう言や相棒が作ったって言うっておにぎりに…」

へええ、そんなカフェがあるんですか。うーんよし。

「アフィンさん!その場所!教えて下さい!」

「ええ☑別に良いけど」

そう言いアフィンさんが教えてくれた場所を確認する。

よし!今度行ってみよう!

「……あそこ、手作りなのか…?」

うーん惑星 アムデイスキア 浮遊大陸うーん

「ふう、ユウナちゃんも大丈夫か?」

「へ、平気、です」

「ちよつと?ゼノ。飛ばしすぎじゃない?」

あの後直ぐに他のアークスうーんゼノさんとエコーさんだったうーんと合流して、現地で合流予定の龍族とのランデブーポイントに向かっている。

「ほら!頑張れ!」

「ゼノ……そんな適当に…」

「ええ、大丈夫ですから…」

「うーん、やっぱり彼女を連れて来るのは早かったんじゃない？」

「いや！ユウナちゃんなら大丈夫だ！なんせビーストだからな！」

「いや、そう言う事じゃないのよ」

「ははっ……はあ…」

合流からーこの浮遊大陸はいろんな所が離れている。

因みに此処、アークスが支援するまでは住む奴は居なかったらしい。

アークス（と言うよりオラクル船団が）カタパルトを開発してそこら中に設置したお陰で住む龍族も増えたとか。

「…それよりエコーさん、今まであった龍族って…」

「…ええ、火山より敵対的ね。私たちの目的は現地にいる龍族とコンタクトを取る事なのに…」

「なあに、どうにかなるって。それに、攻撃して来た龍族の中には侵食核が付いている奴もいたからな」

「侵食核、か…」

侵食核ーダーカー系との戦闘でダメージをくらい且つそれを放っておくと誰これ構わず視界に入ったやつを攻撃すると言うある種のゾンビ的な核、らしい。これもポスで少し前に調べた。

ただしその核時点も弱点の為、そこをライフフルで二、三発撃つと倒れる。因みに全テクニクが弱点らしい。

ゾンビと違って噛まれたりダメージを食らってもフォトンを纏っている限りダメージはないって言うのが良いな。

「でもアレは種子型。アレならまだ助かるわ」

そう言うエコーさん。侵食核にも段階とか種類があるらしい。

「まっ、弱点には違いない。サッサと合流地点に向かって龍族と話すぞ」

「うん。その方が良いね」

「ええ、お願いしますー所でゼノ？さつきからユウナちゃんのー胸ばっか見てない？」

侵食核の話が終わり、さあ行こうって時にエコーさんが突っ込んできた。

「は、はあ☒見てねえし！」

「嘘おつしやい！ー！ー良い？ユウナちゃん。ゼノが胸を凝視してきたら股間を重いつきし蹴ってやりなさい」

そう言うときエコーさんが俺前に来て人差し指を立てながら話す。

「え、ええ☒」

「おい！エコー！なんてこと言ってやがる！」

「だってそうじゃない？まあ、ゼノが男なのは分かるわよ？でもね？」「カタパルトでユウナちゃんより先に行って安全確認だとか言いながら空中で揺れるおっぱい見たり着地の衝撃で揺れるおっぱいを見るのはねえ…」

「ち、ちげえし！ーユウナさん☒なんでエコーの裏に☒」

そこまで来るとゼノさんが怖くなりエコーさんの後ろに隠れる。

「先輩の事尊敬していたのに…」

「そうよユウナちゃん、言ってやりなさい」

「大丈夫！大丈夫だから！お兄さんは怖くないよお？」

「そんなこと言ったって離れた年は7、8歳でしょ？」

「俺は今24歳だ、ユウナちゃんは？」

ええと…確か相棒相棒言うアフィンが16だから…多分俺も16か？

「…ああ…1、6です」

「そっか、16か。ーエコーは？」

「私？23よ」

まあ、ニューマンだからね？と言う声が小さく聴こえたが気にしない。

「この際だ。自己紹介ーは前にやったからーやったよな？ユウナちゃんの自己紹介してくれるか？」

「そうね！お願いできる？」

「え、ええ…ユウナです。一応アークスやっています。それと…び、ビーストです」

「だよなあ！ビースト！いやあ、頭撫でたくなるぜ！」

適当な自己紹介が終わるとゼノかを頭をわしゃわしゃ撫でてきた。

「…んっ？そう言えばビーストってヒューマンかニューマンかの二択だったわよね？ユウナちゃんは？」

「えっと、ニューマンらしいです。ほら」

そう言いヘッドセットを外す。

「…へえ、ニューマンビーストかあ…俺は初めて見たなあ…」

「私達ニューマンより耳が短いわね…ヒューマンの耳よりとんがっている位かな？」

エコーさんはしきりに耳を。ゼノさんはしきりに頭を撫でてくる。

「いやあ…そうかそうか。ビーストなのは知っていたが…ニューマンベースだったとはなあ…」

「うん、ゼノと同じく私も初めて見た」

先ほどと同じくエコーさんがニューマンの卵子じゃ兆に一受精しても着床する確率はそれ以上の天文学的な筈、と小声で言うが…ゼノさんには聴こえない。

これが難聴系主人公か。

「…よし！簡易的な自己紹介も済んだし！合流地点に急ごう！」

ゼノさんが腰を伸ばして少し前に進み合流地点を指さそうと言う。

その間もエコーさんはブツブツ…ミミで聴こえてしまうが…と独り言を言う。

「は、はい！」

「…でも、そもそも…ううん…」

「ほら！エコー！置いていくぞ！早く来い！」

「ええ☒ま、まってゼノオお☒」

そう言いゼノは走り俺とエコーさんはその後をついていく。

88 話目

「ああ…確か情報だとこの辺りに…」

先導するゼノさんの後を俺とエコーさんが付いていく。

それにしてもこのカタパルト…乗ると規定のラインを沿って着陸点に向かうのだが…これが怖い。

ジェットコースターでさえ乗れないのに更に速く、しかも足も浮いていると来た。

着陸後、ゼノさんがこの辺りだとマップを立体投影させて俺とエコーさんに見せる。

「確か情報だと有効な龍族がユウナちゃんを名指しで指定してきたのよね?」

「エコー、名指しと指名は一緒だと思うぞ?…まあ、兎も角、その龍族、名前は確かー」

「ーヒノエンさん」

ゼノさんが言う前に呟いてしまった。思い出すはあの大型龍族ーヴォル・ドラゴン。いやあ、もう二度と戦いたく無いっす。

そういや防具あれから変えてないな…後でシヨップエリア見てるか。

などと話しから脱線しそうになる。その時、ゼノさんの方から疑問の声が聞こえた。

「……ん?」

歩いていた足を止めて首をかしげるゼノさん。

「…あれ?違いましたか?」

「…俺が効いたのはヒエンって聞いたぞ?」

それに更に言葉を掛けるエコーさん。

「え?ゼ、ゼノ?ヒ・エンじゃ無いの?」

「…待てエコー。そう言えばこの間のちっこい丸。なんて言うんだ?」

「知らないわよ。自分で調べなさいな」

「…はあ、調べるか。ー」

何やら気になり調べ始めたご様子。確かに俺も・の意味が気になる。いや、名前を区切る以外に意味はないのかもしれないが。

エコーさんと俺がゼノさんの後ろからその検索結果を見ようと覗き込むとー。

「…この・が捉えられずに意味の意味が表示されたんだけど」

俺とエコーさん、ゼノさん含めて三人でガツカリしたのは言うまでもない。

「…まあ、アクセントの問題だな」

それからしばらくして三人とも再起動して前に歩く。

「…まあ、ヒノエンさんで」

俺がそう言うのとゼノさんがそれに続く。その時だ。

「ああ。んで、そのヒノエンさんがーそう。ちようどこの辺りにー」

「ーゼノさん…何か…聞こえませんか？」

「えっ？いや、何も…エコーは？」

「ごめん、私にもちよつと」

その間も声がー少し聞こえる。この声は…確か…。

「ヒノエンさん、か？」

「ユウナちゃん、場所分かるの？」

「…えつと、声が小さくて…でも、多分、あつちです」

小さいながらも聞こえる声の方を指す。

「あつちか。とりあえず行ってみよう。接触しなくちや始まらないからな」

「そうね。さあ、ユウナちゃん。聞こえる方に案内をー」

「はい」

「ーあと、ゼノ？ユウナちゃんの後ろは私が歩くからね？」

「ああ、うん」

その時の顔はー少し怖かった。

それから少し歩くと――浮遊する大陸に大陸と一体化したような住処のようなものが見えてきた。

その住処らしき物にカタパルトを使いつつ接近するとそこからアリ見たく数体の――龍族が出てくる。

『ここは 我ら 龍族 の 住処 それ を 知って 入るか』

ツノが二本生えている四足歩行の竜族が一步前に出てきた。

「待て待て待て！俺たちに戦う意思はない！ここを通してくれないだろうか！」

「……この龍族は青いのか……」

ゼノさんが龍族とお話している最中、ふと喋った言葉にエコーさんが続く。

「龍族って言っても火山に居る龍族、浮遊大陸に居る龍族。――あと森林地帯にも居るそうよ？森林地帯の龍族は友好的らしいし」

「へえ……」

と言うことはある程度周囲に溶け込めるように体の色が変化するのか……カメレオンやタコか？

『それ でも 掟 は』

視線をエコーさんからゼノさんと交渉している龍族に戻すと、そのタイミングで後ろから火山でも見た杖を持った龍族が接近する。

『ミニカ さん ヒ エン さん から 伝言 です 彼ら を通せ と』

『ふうむ …… 仕方ない 通れ！ アークス ただし 監視 は 付けるぞ』

「感謝します！――さあ、行こう」

Uターンし、付いてくるように頭を動かす龍族。それに続いてゼノさん、エコーさん、俺が続ぎ、さらにその周囲を龍族が警戒しているのか距離を少し取りつつ囲む。

「…警戒されてるな、これ……」

「仕方ねえさ。ユウナちゃんがヴォルドラゴンを救って以降火山の龍族は態度が軟化しているがこっちはまだだ。仕方ねえさ」

「うーん、そうは言ってもねえ……この様子だこっちもアレでしょ？」

「ダーカー倒せるからアークス要らないって思っているわけでしょ？」
「多分な。倒しているだけでD因子は飛び散っているだけなんだよなあ……」

「…最終的にはフォトンがないとって事か……」

「そうだ、ユウナ。まあ、それが分かかっていればこうなっていないがね」

『来たか、アークス』

「…久しぶりですね、ヒノエンさん」

向こうから来たのはヴォルドラゴン戦を観戦していた杖を持った龍族ーヒノエンさんが前から歩いてきた。

周囲に複数の護衛を引き連れて。

『違うぞ、アークス。ヒエン、私の名はヒエンだ。ーそれとこれは？』

護衛を散らして周囲の警戒に入らせて話を続ける。

ヒノエン改めヒエンさんの前に出て手を差し出す。

「これ？握手だ。ーそつちには無いのか？」

『…いや、すまないな』

そう言い杖をもう片方の手に移して俺の手を握る。ゴツゴツしている。

『久しぶり、だな』

「ええ、こちららも、ね」

「ほらっ！私のアレ合ってたじゃない！」

「エコー、今は重要な時だからな？少しね？ね？」

『…後ろのアークスは置いておいて。前回のーヒロガ様の救命。ありがとうございます』

握手した方に杖を一度握り。そこから更に地面に置いて片膝立ちにして頭を下げるヒエンさん。

「よ、よしてくれ、アレは任務だったから！ほら、報酬が絡んでたから！それにほら！握手した仲だろ☒」

『それでも救ってくれた事に変わりはない』

「ヒエンさん。今回呼んだのはこんなことではないだろうか？ユウナも落ち着け。エコーはもつと周りを見る」

「ええ☒」

尻尾をバサバサ降ってどうしようかと目線を合わせたりしていた所を後ろで周囲をみわたしているゼノさんに注意される。

『そうだ、赤毛のアークス。ここらが更に西にあるお方が待っている。今回はその方とー』

『戦って貰いたい』

「……は？」

「え？」

「……えっと、そのお方、ダーカーに侵食されたりとかはー」

『ない』

「……ダーカーに攻撃を受けたとかはー」

『ない』

「……なんでたたかうの？」

『……私はあれ以降、様々な場所に向かいダーカーとはアークスと協力して叩くべきと唱えて来ていてな、この浮遊大陸を支配するお方達にも話が伝わってな』

「うん」

『そこで出た案が新しく生まれたコ・レラと模擬戦を行い勝ったらアークスと協力しようとかどうにか話を付けてな。それで』

「勝ってほしい、と」

なに？龍族上層部は戦いで確認するタイプ？滅ぼされないそれ？

『その通りだ。幸い向こうは数は言っていない。それにいくらあのお方達と言えど生まれたばかりらしい。彼等には悪いが倒して欲しい』

そんな事を部下から言われてるが別の意味で大丈夫なのだろうか？

「……まあ、確かに上の考えが変われば下も楽になるからな」

「ええ、戦うのは下の兵士だもの。やろうよ、ね？」

『と言うと受けてくれるか？アークスから見てもデメリットは無いように思えるが』

「…まあ、やりましょう」

と言うか拒否権なく無い？

『ああ、それと。私に近いーと言っててもアークスと会う前の私ですがー考えを持った龍族がいるので。うまくすれば彼も使えるかもしれない。もし会ったら存分に使ってやってください』

それでは、と言いつこの責任者らしき龍族と二、三言葉話し、周りの護衛を連れて端っこに去っていくヒエンさんとその取り巻き。

するとーなんか空飛ぶ恐竜みたいなのが飛んできてーそれみんな乗って行った。

「…：…なんだいありや」

「…飛んでいったな」

「…まあ、私達もフォトナーの遺産を解析出来ればできなくは無いらしいけど」

「えっ☒なにそれ！」

「知らないの？私達が使っているP。Aはフォトナーのマジックを再構築した物なのよ。飛ぶマジックがあってもおかしくないわ」

「そうか…飛べるのか…」

そう言い俺は空を見上げる。

「…あれ？そもそも俺フォースとテクター出来るのか？」

「出来るでしょ？第八世代なんだし」

「さて。話はそこまで。エコー、ユウナ。さっさと模擬戦してさっさと帰ろう」

ゼノさんがそう言う周囲の龍族も動き始めた。

『アークスよ 彼の 言っていた 方角は 向こうだ この テリトリー の 外れまでは 案内しよう』

「感謝します」

ヒエンさんに言われた通り西に俺たちは向かうことにする。

正直ヴォルドラゴンとは二度と戦いたくないな…。

89 話目

「西って言うってましたけど…具体的にどの辺り？」

ヒエンから分かれて、言われた通りに龍族の村的なところを突っ切って歩いている。

そもそもこの浮遊大陸は目星がない。ーいや、有るには有るが…。

そう思いエコーさんが歩いている方向を確認しつつ左上を見上げる。

そこにはまるで巨大な木ーまるで空に飛んでいきそうな木が浮いている。

まあ、浮いているから飛んでいくって言うのはあながち間違いではない。

「この方角であつてる筈…だよな？エコー？」

「多分、うん。その筈」

その声を聞き視線を前に戻す。それから数歩歩いて二人が止まりこの周辺の地図を見ている。

「今俺たちが居るのがこのXのD53c74Ac56の…」

「YのG45n84jO92かな？それで向かう場所が…右にー違う。上にズラせる？」

「こうか？」

「そうそう。ーああ…ノーデータ…」

俺も二人が見ている横に入り地図を見るとー確かにノーデータと出ている。

「こう言うのって船団の航空機が走査してるんじゃない？」

そう言い脳内に浮かぶのは小型のレドームっぽい物を付けた機体。アレ確かキャンプシップに複数搭載していたんじゃない？

「此処の龍族も一筋縄じゃないって事だろう」

「ほんと、協力してくれればいいのにね…」

「そう言い胸の下で手を組んで口に人差し指を持っていくエコーさん。」

「それを確かめる為に行くんですよね?」

「そうだ。それにまっすぐ言っただータがないのは多分此処に違いない」

「さっきのーヒエンに言われた事が?」

「ええ。向こうが用意した龍族も戦って欲しい、でしたっけ?」

「そうだ。なに、ダーカーじゃないならやれるやれる。それに色んな人の依頼を受けて解決してる新人も居るしな!」

「はっはっはっ!と言い背中を軽く叩くゼノさん。」

「:ゼノ:ユウナちゃん、悪気は無いのよ。ゼノ?こうやってアークスやってくれる人は大事ななからね?」

「分かってるよエコー。只でさえ少ない第8。それに女の子だもんな。頑張れよ」

「:え?なにコレ?どう反応すれば?」

「良いねえ、可愛いねえ。まっ、なるようになるさ!さっさと行こう。向こうを待たせるのもアレだからな」

「そう言い地図を消して俺たち三人は更に西に向かう。」

道中エコーさんが耳元で

「あんな風に先輩ヅラしてるけど、臆病なのよ?ゼノ」

「先輩が?お、あっいえ、私にはそう見えませんが:」

「やっぱりね?ゼノの言う師匠に会ってからかな。変わったの」

「その、師匠っていうのは?」

「そう聞くとエコーさんは手を挙げ分からない、と言う。」

「さあ、分からない。何せ私も会ったことないからねえ。曰く会うときは何時も一人の時だったって言ってるし。それにその時のデータを見たけれどそんな人なんか居ないし。:でも」

「でも?」

「ユウナちゃんに似てる。ーと言うか最初に会った時師匠かと思っただって言ってたっけ」

「俺が？師匠に？無いですよそれは」

「まっ、私も知らないけどさ。ああ見えて心配してるのよ。たまには私達も頼りなさい？ビーストだから色々面倒でしょうけど。その時は呼びなさいね？」

ポンと肩を叩かれて前に行くエコーさん。

「エコー。そんな事を言うなって…」

「いいじゃない。減るもんじゃないし」

「俺の威厳が減るんだよ！」

「大丈夫、大丈夫！威厳なんて私といれば無くなって行くから」

「師匠、ねえ…」

そもそも俺は師匠なんて事は一切合切し無いし、そもそもそこまで生きてるかどうかも知らない。

今となつちや平然を装って居るが今からでも帰って良いなら帰りたい。

そもそも何でライフルとソードとタリス装備してこんな戦いなんて行かなきゃならんのだ。

早くマイルームに帰って寝たい。横になりながらポテチとかゲームしたい。欲を言えばロボゲーがしたい。

そういやリリーパで拾った機体どうなったんだっけ。リバーズエンジニアリングコピーに成功したとかどうだか聞いた気が…。

「おまつ、おい！エコー！待てっ！」

そこまで考えていると後ろから肩を掴まれた。前を見るとゼノさんが走ってきている。

「おまつ！ずりいぞ！ユウナちゃんの後ろに隠れるなんて！」

「へっへっ！ほらあく来なさいよゼオノオ？来れるもんならねえ？」

そう言いゼノさんが回り込もうとすると俺と一緒に回して妨害している。

「ユウナ！良いか！絶対動くなよ！動いたらー」

「動いたらあ？」

ニユツと俺の後ろから顔を出す。

「エコー！」

「きやああ。わるーいゼノ先輩にナニかされちゃーう。逃げろー」

そう言い俺を抱きかかえながらーエコーさんが走る。

「ちよ。えい、まっつて…おい…」

数分以上エコーさんとゼノさんを抱えながら走り回ったーと言つても、ちゃんと交戦地帯と言うか決闘地点と言うか…そこに向かつて行くあたり流石なのかどうなのか…。

「ふふっ。ゼノも体力落ちたんじやない？」

「お前…テクニク使つてたろ…ず、ずりいよ…」

よいしょと言い俺を降ろすエコーさん。びっくりなのはあの速さで息切れしてないのが凄い。

などと思つていたらさつき言つたゼノさんの答えである。

と言うかテクニクで身体強化も出来るのか。

「まあ、少しは疲れたけれどね？ーさて。そろそろ見えてくるはずなんだけど…」

そう言つとエコーさんが進行方向に向いて辺りを見渡す。

「なあエコー。アレじやないか？俺から見て大体…ううん、11時の方向。ほら、あのー」

俺も言われた通りにその方向を見る。

そこには盾を装備して剣を地面に突き刺して柄頭に両手を乗せて仁王立ちしている。

『来たか アークス 特に中央 の 前に会った時とは 少し髪型が 違うな』

…あ？そもそも俺ここに来るの初めてな気が…？いつた記憶…ない、よな？

「えーい、え、そんな事はないはずですが」

「貴方がヒエンの言つていた？」

『そうだ この先に 会って欲しい 龍族 が 居る』

「合ってほしい…?」

『どうした アークス 不満か』

「いえ、何もないですよ」

「…話を折るようでごめんなさい、お名前は?」

『その 輩 二人 は 初めてか コ・リウ だ 好きなように呼
べ』

『全く かの龍達 にも 困ったものだ 幾ら ダーカーが危険と
いっても 全てを見せる訳には 並んだらうに』

「は、はあ…」

『そもそもだ 貴様達 アークス の やりたい事は分かる だが
説明不足ではなからう』

その時。後ろから違和感がした。なんの気もなく後ろを見る
とー。

コートを着て武器を持った人が俺に飛びかかってきていた。

「ひっ」

咄嗟にタリスのカードを使いー俺の目の前が半透明なシールド
が現れる。

「くっーユウナあ!」

金属が擦れる音がして後ろにー飛びかかってきた人が吹っ飛
ぶ。ーが綺麗に着地。

「なんだーおまつ、同士討ちは始末書ものだぞ!」

「ゼノさん! 奴です! 凍土のアイツです!」

「えっ」と言う彼女が

「そうだ、少数だが目撃されているD・F、仮面だ」

『おいおい…3対1は卑怯だよ? プライドつてもんが無いのかねえ
?』

「プライドなんて犬にでも食わせてろ!」

「エコー、臨戦態勢。奴はD・Fだ。気を引き閉めろよ。下手したら
死ぬ」

「分かっているって！10年前の時と一緒によ！」

そう言い先輩二人が各々ソードとロッドを取り出して応戦しようとした時。

(ここは) (私が貰おう)

二人が武器を手にした時、コリウが俺達の前に立つ。

「！コリウさん！待って！そいつはマズイ！」

(舐めるなよ) (アークス) (同族同士で磨いた) (力を見せてやる) (お前達は後ろのテレポーターを使い)

「でも！ーああ、いや、頼むぞ！俺は嫌だからな！」

「ほらっ！エコーも！さっさと行くぞ！」

「う、うん！幸運を！」

そう言い俺達はテレポーターを使い仮面とコリウとの戦いから離れた。

それから直ぐにコリウがテレポーターを剣で壊す。

(これで迎えまい)

『ふん、たかが龍族がそんな事を』

(貴様のような無法者を歓迎する程) (今のテリオトーは安定していない) (出ていけないのであればー)

『んあ？』

(ー此方にも用意がある)

そう言うはずらつとコ・リウと同じ龍族が至る所から出て来る。剣やウオンドに酷似した武器、他には四足歩行の龍族もちらほら見られる。

『どれ、楽しませてもらうおうじや無いか』

それに答えるように仮面もソードを背中から取り出す。

(さあ、来い！)

90 話目

コノリウに後を任せそのままカタパルトに乗り、合流地点に跳ぶ。

(此奴の事は任せろ)(カタパルト通りに進めば合流地点に着く)(後は任せたぞ、アークス)

「コリウか☒そっちはどうだ☒」

(数で押そうとしたが)(此奴中々)(50居た同族が、今や私含め数人よ)

「ボロ負けじゃねえか！コリウ！逃げろ！奴はダークファルスだ！侵食されるぞ！」

カタパルトで空を翔びながらコリウに聞こえているかどうかも分からない声を上げるゼノ。

(分かっている)(仲間には攻撃を食らったら散開して逃げるように指示を出してある)(元は時間稼ぎ)(アークスが合流地点に到着すればこちらの勝ちよ)

「そうか…なら良いんだ」

それに小声で聞こえていたのか、と呟いたのを俺は見逃さない。正直俺も思ったが。

「やっぱしあそこに残っていた方が良かったんじや…」

「いや、合流地点で何が起こるか分からないーまあ十中八苦戦闘だろうが、戦力を分散させるのは愚の骨頂。当たるなら持ちうる限りの火力で、だ」

「…それもそうか。さっきのコリウは逃げ切れたかしら…」

(それよりアレがダークファルスか)(私達が戦っていたのは…ただの雑魚だったか)(雑魚如きで戦死者すら出していたのに)(更に上には上が、か)(アークスよ、今回の任務)(絶対に成功させろよ)(我々の命がかかっている)

そう言いコリウからの念話は途切れる。

「この様子だと逃げ切れませんでしたね、エコーさん」

「ええ、良かったわ。味方は多い方が良いしね」

「まっ、今回は戦闘には協力しないけどな」

そう言や雑魚って言っていたが…確かこの辺りに出るダーカー種はダーカーやダガン、それにデータ上では見たミクダやダーガツシュ、ガウオンダと戦っていたのか。

ミクダが背中に弱点のコア、ダーガツシュがチョウチンアンコウで口の中がコア、ガウオンダが…シールド持ち、だったか。シールドはダーカー因子で保護されてこっちのフォトンが効きにくいんだっけ？まあ、素直にケツを狙うさ。

幸いなことにダーカーは遠距離攻撃して来るやつは少ない。

お陰で脳筋主義が多くてアークスも困ってるとかなんとか。

「ーそろそろ合流地点だ、エコー、ユウナ。武器のチェック、頼むぜ」
そんな思考に耽っているとゼノさんが大声を出し警告を出す。

「ユウナちゃん、絶対に成功させるわよ。これがある意味、シーナちゃんへの手向けの一步になるかも知れないんだから」

「は、はいー」

「あれ…？誰かが待っているって話だけど…誰も居ない…？」

ロッドを構えながら明らかに決闘する場所らしき広場を警戒しながら進む俺たち。だが、ある程度進んでも敵は出てこない。

それに疑問に思ったエコーが言う。何処だ、と。

(アークスの子)(ユウナにゼノ、エコーよ)(よく来てくれた)

その声に反するように頭に響く声ー。

「頭に直接…？と言う事は龍族か」

(私はロノカミツ)(故あって、姿を見せられず、声での対応、無礼を詫びる)

辺りを見渡しながらライフルのセーフティを解除、フルオートに固定、グレネードも装填して背中に。

「ロのカミツ…？彼女を呼んだのも…あなた？」

二人が偉い人と会話しているのを尻目に、今度は左腕に付いているタリスのチエック。

零式ナ・バータと言う名のシールド、武器のフォトン強化するシフト。

戦闘服のフォトン強化するデバンド。

身体フォトン活性化させ傷を癒すレスタ。

同じく身体中のフォトン活性化させ毒物を、消す、アンティ。

これらの動作を確認してした。

(まさしく)

(旧態依然としていた我ら龍族に…一つの楔が打ち込まれた)

(そのキツカケは、間違い無く貴方の内にある。――感謝する。ユウナよ)

次はソード、と思った時に名指しで言われて顔を上げる。そう言や俺を名指しだったな。

「楔、ねえ…まあ、龍族の雰囲気が変わったって言うのは分からなくな、い、が…」

ゼノさんも左手でアクションを取りつつソードの柄に右手手を掛けたまま、そちらの手は動かさない。

「とは言え、ただ感謝を述べる為だけに此処に呼んだってわけでは無いんでしよう？・ロのカミツさんよ」

(無論それだけでは無い)(ユウナよ、貴女に渡したい物がある。――だがその前に)

(確かめさせて欲しい)

(貴女がそれに足る力を持つのかを)

そう言うトニー。キイイインと言う音が遠くから聞こえてくる。

「この音…戦闘機…?」

「ユウナ?何を言っている?何が聞こえるのか?」

「ジェットエンジンの音が…」

「ジェット?フォトンエンジンじゃないのか?」

「いえ、この甲高い音は――」

「ゼノ！ユウナちゃん！アレ！」

そこまで言うのとエコーさんが空を指す。

そこには翼からまるでアフターバーナーやオグメンタやリヒートの様に淡い熱を出しながらゆっくりと旋回している。翼からは戦闘機の如く空気中の水分が凍りヴェイパーを出して空を裂く。

そしてそのままループし高度を上げてスプリットSを行う中盤辺りでまたリヒート。そのままこっちにつっこんできた。

ゼノさんと俺はソードを地面に刺して吹っ飛ばされない様にして、エコーさんが俺たちの前に零式ナ・バータを薄く囲う様に展開する。突っ込んだ衝撃で辺りの土が舞い上がる。

「げほっ！げほっ！んだよこれ！」

「ふう、咄嗟にツツ刺して良かったぜ。エコー、大丈夫か？」

「ええ、なんとか。ユウナちゃんは？」

「くそがっ！ーあ、えあ、だ、大丈夫、です」

「……」

「はっはっ！エコー。新人はこんくらいがちょうど良いんだよ！こう言うのが生き残るんだ」

「…う、うん。ーそれより」

「そう言いエコーは俺から視線を外し頭だけ突っ込んだー龍族をみる。

「りゅ、龍族、よね？しかも大きい…」

「はっ、力試しってか。んじゃ、それに見合う報酬を用意してくれてるんだよなあ☒」

地面からソードを抜いて構えるゼノ。それを見たエコーもロッドを構える。

（ー無礼者！）（カミツ様の声を賜る）（それこそ誉！）

（良い、コノレラ）（此にと叫びしその忠義、この決闘を持って示して見せよう）

（御意！）

「来るぞ！ユウナ！エコー！」

そう言うとなゼノはそのまま敵龍族ー後にくオーツドラゴンと命名されるがーに向かって走る。

狙うは頭。頭目掛けてゼノはソードを振る。

「ーッ！かてえな！」

(そんなもので)(コ・レラの鎧に)(傷なんて付かない！)

形成を振りと見るやコレラの頭目掛けて足の関節を上げて蹴り上げる。

それに応ずる様にエコーが光系や炎、氷系のテクニクを連発。

爆発したり、翼が凍ったりするも効果は無い。

離れた俺もソードをーアルバソードを持ってクオーツに迫る。

「ユウナ！腕をやれ！」

ゼノさんの方を見ると腕で潰そうとしている。

そこに走って駆け寄りジャンプしてーツイスターフオールを使い腕を切る。

「うえ」

「良いぞ！ユウナ！」

だが着陸と同時に尻尾が俺の横を思いつき叩き飛ばす。

「いっ」

一方のゼノはそのままソード全体を使ってガードした。

「ユウナちゃん大丈夫」

吹っ飛ばされた俺にエコーさんが駆け寄りレスタをかけてくれる。

傷は無くなるが痛いものは痛い。

これでも軽減されているのだから、ねえ。

「ユウナ！ライフルのエンドドラクトを使い！」

「え、エンドドラクト」

「貫通弾よ！チャージ式の！」

「こいつの動きは速い！確実に当ててくれ！」

そう言われるがまま片膝立ちになり一番脆そうな部分ーージェットエンジン兼翼を狙う。

「ー当たれっ！」

3秒ほどフォトンを込めると只の小口径弾が凄い光を浴びながらクオーツに向かつていく。

きーん!と言う音とともに右翼が壊れた。

(成る程、力はある様ですね。他のアークスのアシストがあるとは言え)

(カミツ様!) (私はまだ) (まだ戦えます!)

(もう良いぞコリウ。其方の忠義は見せてもらった。戦いは終了だ)

そう言いきなり力が抜けたのかスツとクオーツが下がると、今まで力んでいたゼノが、そのまま前のめりに倒れる。

「ああ☒ぜ、ゼノ☒」

急いで側に駆け寄るエコー。

(…さて、我々龍族はアークス要望通り我々の領域の侵入を許可しよう。それと。これが報酬だ)

そう言いどこからともなく現れたソレはー丸っこい何かだった。

「あの…これは?」

(あるものから言われてな。ユウナ、と言う人物が来たら渡してほしい、とな。さて。礼は果たしたぞ。これで大っぴらにアークスの番組が観れる)

(カミツ様!) (何観ます☒)

(そうだな、取り敢えず料理番具をーん?どうした?アークスよ)

「い、いや、凄く庶民的だな、と」

(そりやそうだろ。多くの龍族の前では長であるために高圧的でなければならず、こうやって楽に話せるのは一部の龍族のみ。次第にこう言うの物に興味を持つのは必然であろう?)

「…そうなの?えーこーさん」

「…ゴメン、分からないや」

「大丈夫だエコー。俺も分からん」

(取り敢えず物は返したぞ。さあ帰るぞコリウ。楽しみに待っているものは沢山居るからな)

(はーい!カミツ様!)

そう言うときクオートツが律儀に礼をしてそれなりの速さで上昇、どこかに飛んで行った。

「…ねえゼノ。なんか今回…閉まらなかったね」

「…まあ、誰も死なずに済んだってことで」

そういながらエコーさんはアンティとレスタを撒く。

「まあ、これで終わりってことで。ゼノ？ キャンプシップに通信を…ってどうしたの？」

「いや、なんか…繋がらないんだ。おかしいな、端末の調子もおかしい」

そう言われて俺も管制官に繋ごうとする…がノイズばかりで何も聞こえない。

「…ねえゼノさん、俺嫌な気がするんだけど…」

「奇遇だなユウナ。俺もだ」

「えっ、ちよつと！ どう言うことよ」

「多分この感じだと…」

『見つけたぞ。ユウナああ』

先ほどまでクオートツがいた所に…仮面が立っていた。

『ユウナ。それを寄越せ。寄越したら楽に殺す』

「そう言われて渡すアホがいるかよ」

そう言いアルバソードを取り出して構える。

『やる気か？』

「当たり前だよな？ そろそろ教えてくれても良いんじゃない？」

「ユウナ！ 援護する…」

『黙れ。足踏みしていた雑魚は引っ込んでろ』

「…ッ！」

「おいおい、先輩になんて事言ってるんだよ。ゼノさん！ 一緒に…」

視線を一瞬外してゼノさんを見ると…二人とも倒れていた。

「…ッ！ おまつ！ 何をした！」

『少し眠ってもらっただけさ』

「結局コレかよ！」

『そうだ、やるかやられるかの二択さ！』

「そう言いソードを持つて突っ込んでくる仮面。

俺もソード片手に突っ込む。

二つのー水色のフォトンを守ったソードと紫色のD因子を纏ったソードがぶつかり合う。

「なぜ俺を狙う！」

『答えは簡単！お前が死ねば宇宙は救われるんだよ！』

「何のことをー！」

ソードを切り上げ、仮面目かけて突く。

『甘い！』

そのまま後ろに下がり、ツインマシンガンで引き撃ちを始める。

左腕に付いているタリスの零式を使い全ての弾が体に当たる前に浄化され消える。

『ナバータか』

「そうだよ！TMGなんか捨ててかかって来い！」

『そうだなー！』

腰にTMGをセットして再びソードで殴り合う俺と仮面。

ノヴァストライクで打ち上げてもそのままソードで突き殺そうとしてくるし、ソードとソードで膠着に入るしー。

ソードを払いのけ距離を取る。

仮面はまだやる気らしい。

「…俺は死にたく無い、まだ死にたく無いんでえー！」

ギルティブレイクを使い仮面に接近して頭の仮面を破る。

「っ！まずったかー！」

「かったぞおー！」

そのまま仮面にソードを突きさしーペルソナの仮面に当たる。

「ふっ。だからあまいんだよ、お前は」
だか。

だか、その後に来るものはー

ー激痛。ただ、それだけだった。

91 話目

「私の勝ちだ、ユウナ」

「こっちもだよっ！」

ソードとソードがお互いの顔に当たり、距離を取る。

戦闘服を着ていると顔含め全体を守ろうとするのだろうが、流石にソードは無理みたいだった。

左目の視界が無い。

だが痛みが無い。服の、確か前にアフィンから聞いた何か働いているのだろう。

「ーっだあ☒」

更に痛みが強くなり声を上げる。

「…くっ！」

立つのがやったの俺とーっ生きている右目で見ると顔を抑えて居る仮面。

どうやらヤツも無事ではないらしい。

二人とも更に離れ距離を取る。

「はあ、はあ…仮面ヨオ、なんで、なんで俺を殺そうとする！」

「お前を、殺せばなあ、マトイが。死ぬからだよ！」

「マトイが？」

ソードを地面に突き刺し左手で左目を抑える。さつきより更に痛みが増す。超痛い。

「そうだ！貴様も思わなかったのか？なんであんなフォトンを抱える少女がアークスにーっひいてはオラクル船団にデータがないのかと！」

「しる、かよー！」

「答えはなあ、彼女が、ダーー」

ソードを俺に向けて言おうとした時。後ろから呻き声が聞こえる。

「んっ…あれ？なんで私…」

「―D a r m, i t! 潮時か!」

「おい! 待て! まだ―」

左手を伸ばし何かを問おうと叫ぶ。

「流石次元の私だ。ここまでダメージを食らうんだからね…」

そう言い仮面は紫色の中に―俺が当てた傷を手で多いながら撤退した。

「いつ、たい、どう言う―」

そこまで言いその場に倒れる。

ああ、最初は服が何とかしてくれているかもって思ったけど―。

スツゲエ痛いや。死にそうなくらい。

しかも良く良く倒れた地面見たら超血溜まってんじゃん。

そう言い俺は―前の人生含め―始めて気を失った、と思う。何せ何も動かない、暗かったのだから。

と言うかこれ、死んだなあ…。

「うう…ええ☒ユウナちゃん☒しっかり! ゼノっ! ユウナちゃんが☒」

うつすらと見える―この声はエコーさんか?

「んあ…? なんだ? ―エコー、俺はディメイトをぶっかける。エコーはレスタを。早く!」

ゼノさんか何かを俺にかけている…でも…なんか…。

「う、うん!」

「おい! ユウナ☒寝るな! 起きてろ! 管制塔! 緊急事態だ! コードE. R! なに☒緊急救助だよ!」

「ユウナちゃん…お願い、生きて…っ! まだお姉さんユウナちゃんの尻尾とミミと頭ナデナデ出来てないんだからっ!」

エコー、さん…今の内に、して…くれ…。

「ーッッ」

それからフツと目が開くようになり、体を起こすとーッ体全体を覆う服を着ていた。

左右の手でジャンケンをしてーッどちらも動くことを確認すると、この一体化した服を見る。

なんか胸がチクチクする。

「…下着ないのか…」

服の間に手を入れて確認したらーッブラジャーをしてなかった。だが下着は着ている。だったら下着もくれよ…。

ピツと言う起動音と共に何かが浮遊ーッマグだ、マグが音も無く浮遊して定置ーッ左後ろに付く。

左側を見ようとしたら何か違和感が。

なんだこの違和感は、と考えること数秒。

ああ、そうだ。仮面とやりあって左目に怪我…したんだっけか。

今の状態を知る為に顔に触る。

左目に何か付いている。これはーッ。

「…眼帯ーッ違和感はコレか…」

良く生きてたな、と呟き眼帯を触っていた手を片手を腰に。もう片手を頭にやる。

尻尾とミミはある。耳の方も確認した。

目以外は無事か。

尻尾を確認していた腕を頭に戻し、もう一度横になる。

ここはどこだ？メデイカルルームか？いや何時ぞや見た時より部屋が広い。マトイを呼びに言った時の部屋はもつと小さかったはず。

そもそもあの後どうなった？先輩2人は起きたのだろうか？

そんなことを考え始めたら扉が開く音がした。

入ってきた人はーッこれは医者か？側に看護婦も居る。

「やっと起きましたか。ユウナさん」

「……ここは？」

「ここはフェオ首都にあるアークス直下の病院です。ここに運ばれた理由は分かりますか？」

「ああ…確かダー…敵と戦闘して相打ち？になったから？」

「そうです。ユウナさんからの体内から大量のD因子が見つかり高濃度フォトンカプセルにて治療を続けてました。何か違和感とかは？」

「いえ、今のところは。…いえ、左目が少し」

「左目は今は治療中ですので、眼帯は外さないように。もう二、三日安静にしておきましょう。マイルームにいる方に連絡を」

「はい…メールは送っておきました。ドクター」

「よし。それではユウナさん、お大事に」

「そう言い医者と看護師は出て行く。」

…ダークファルスの事は言った方が良かったのだろうか？

いやだが…うーん。

取り敢えず、お腹すいた。

それから数時間ほどマグのポスを起動してテレビを見る。

そう言えばこつちに来てゲームって無かったな、と思います。何せ惑星に行つて調査調査の連続+仮面野郎と戦ったりしたからな(2回目)。

そんなやつてる暇…はあるけどなあ…。

内心思いながらposで調べる。テレビを投影しているホログラムとは別のホログラムを作りロボゲーを検索…結果は。

数十件ヒット。

一番上のサイトに飛び…あれ？これって。

「リリーパで鹵獲した奴？…これのゲーム出るの☒」

そう独り言を言い、そのサイトに入ろうとした時。

「ユウナちゃああん！」

勢い良くドアが開きマトイが出て来た。その後にデuketとアフィンも居る。

あれ？そのドア自動じゃ…？

デuketとアフィンが開いたドアを見てどうしようかと言っているのが聞こえる。

「ユウナちゃああん！大丈夫☒変なところとか無い☒」

一応病人なんですけど俺。と思いつながら俺にダイブして来たマトイを撫でる。

「大丈夫、大丈夫だから」

「まあ、その様子だと大丈夫みたいですね」

「良かった…相棒に何かあったと聞いて急いで飛んで来たぜ」

「…そうだ。デuket。俺と同行していた二人は？どうなった？」

「お二人ーゼノさんとエコーさんに担がれて帰って来たんですよ？

外見上の怪我は…まあ酷くなかったと聞いたのですが…D因子が…」

「そうか…龍族の方は？」

「今現在はアークスと協力方針を採っているようです。お陰でD因子に侵食された龍族の討伐依頼がひっきりなしで…」

「そうか。一応、成功したんだな」

「ええ。所でユウナさん。もしかしてですけどー」

「ーまたD・Fと会いましたか？」

「…ああ、アイツ殺す気できてた」

「ダークファルスって…☒あの凍土の☒」

「ああ、名指しで次は殺す、だど。ロボアニメなら生存フラグなんだがな」

「ロボ…？それにしても…やはりユウナさんを狙っている？ーああとそれと。ユウナさんが回収したパーツ。ー確かくらりつさ？でしたっけ？それはジグさんに輸送してあります」

「そうか…俺はちと疲れたし、腹も減った。ドクターにはナイショで何か買って来てくれ」

そう言いメセタを出そうとするとアフィンが止める。

「良いって！何か買ってくるものあるか？」

「肉。肉が食いたい」

「…一応ドクターに聞いてみましょうか。とりあえず買いに行きますか。アフィンさん、マトイさんも」

医者に言ったらダメですって言われるから内緒って言ったのに。ええ、と言いまう少し居ると駄々をこねるマトイをデュケツトさんが引つ張って行き、それに追従してアフィンも部屋を出てー静かになった。

ベットから降りて窓を開ける。

窓の外には複数の飛行：艇なのか？それと高速道路に屋根をつけたような道路が町の間を縫っている。それをみてもう一度俺は理解する。

ああ、本当にS・Fなんだ、と。

「失礼ですが同室の方ですか？」

デュケツト達三人が部屋から出ると医者から呼び止められる。

「はい。そうですか：？」

「立ち話もアレですのでこちらへ。少しお話があります」

それから2・30秒ほど歩き誰も使っていない部屋に私達は入った。

「因みにそのニューマンの方はどう言う関係で？」

「えっと、ユウナとバディー二人組を組んで任務に当たっています」

「成る程：一つだけお話があります」

「なんででしょうか？」

「ユウナさんの左目ですが：今のままですと治らない可能性が高いです」

「は☒おま、それどう言う☒」

「落ち着いて！アフィンさん。ドクター：それはどう言う？」

「ダーカーと交戦した時にダメージを食らったのでしよう。D因子が左目に入ってしまった光子を受け付けられないのです」

「うそ：」

そう言いマトイは手を胸の前で握る。

「私達もどうにかしたいのですが：D因子に侵食された細胞をフォト

ンで滅して新たに細胞を入れるらと言うことも考えたのですが…彼女がビースト。一人一人違う遺伝子色素を持つとも言われている種族に同じ細胞は…」

「も、もう片方から取ってみては？」

「それも考えたのですが…左目の侵食が右にも映る可能性があると考えると…」

「…そんな…」

「一応ですが血液チップ出来ますか？それとDNAの採取を。時間は取らせません。機械に入れば5秒ほどで結果が出ますから」

「…はい、各種採取ありがとうございます。すぐに結果が…」

ピーと言う機械音。検索結果だろうか。それを覗き込む医者。

「…なんと…このデータは…マトイ、さん？」

「はい？」

「マトイさん！貴女ならユウナさんを救えるかもしれません！」

「えつと…どう言うこと？」

「貴女の生体データがユウナさんと…姉妹レベルで一致しました！凄くないですか…方やビースト。方やヒューマンですよ…シャレにならない天文学的確率ですよっ！」

そう言い興奮気味に話すドクター。

「どうしますか？マトイさんの生体データが有れば直せる可能性が上がりますが…」

「えつと…一体何を…？」

「ええ、まずはマトイさんの女性器内にある卵巣から卵子を一個取り出し、そこから細胞を培養。それらをフォトンカプセル内にフォトンと培養したものを満たしてその中にユウナさんと入れます。そうすれば治る筈、です」

「…じよ、女性…」

「えつと…それをやればユウナちゃんを救えるんだよね？」

「ええ。それどころかマトイさんご自身に何かあった場合でもこれが

有ればなんとかなります」

「…やりますー!」

「えっ、本当にいい!」

「うんアフィン。私に出来ることは…こんな事ぐらいだから」

「いいの? いっちゃん悪いけどー。あ、アフィンさんは一度外に行つてくれる?」

「あああ! 勿論!」

「そう言い部屋から出て行くアフィン。」

「…良い? マトイさん。私達が作れる卵子の数には限りがあるのよ? …ニューマンやユウナちゃんみたいなニユースベースのビーストは違いうらしいけど…」

「うん。何でか知らないけど…ユウナちゃんのマイルームにおいて貰っている以上、このくらいは、ね? それにー」

「それに?」

「ー何でか知らないけど…私、ユウナちゃんに凄く大きな恩がある気がするの。この位じゃ返せないくらいの恩が」

「そっか。マトイさんがそうなら私は何も言わないわ。ーそうね」

「ユウナちゃんを元気にしてまた三人で暮らしましょう?」

「うん!」

病院特有の10点満点中5点(量には目を瞑る)くらいの料理を食べさせてどうしようかと悩んでいた時。

マグに反応がらある。

「マグを呼び寄せチエツクーマトイから?」

「…私が救うから。って?」

「何を? 俺を?」

「などと考えながら返信。」

「ありがとう。一言だけ送る。」

「そういえばふと思ひ出したことがある。」

「俺たちアークスはマグがデバイス代わりだけど…一般の船員は違いうらしくて、なんでもフォトンバッテリーを使った画面形成型端末が

あるらしい。

それを後で買いに行こうか、と頭の中でメモする。

それにしても病院は本当に何もすることがない。

さつきと寝るべきか？

：そもそも一人の今考えてみるとこの身体になって一人で慰めたことないな。

でもそこは病院だし：監視カメラの一つくらいは設置してあるだろうしなあ…。

「：トイレ、行くか」

まだ片目の慣れていない視点に戸惑いつつ付属のトイレに入る。

この身体になって分かったことがある。それはトイレに行く時は早めに行く事、だ。

実はこの世界にーーと言うかこの身体になってから何回も漏らした事がある。

理由は簡単。野郎にあつた延長ケーブルが無いから持たないのである。

トイレに座りちよろろろ、と言うお尻の方におしっこが垂れる感触になれーーる訳ないーーながら用を足す。

ペーパーを取って優しく拭いてトイレにポイ。これで終わり。

しゃああ、と少ない水で流れていくものを確認してまたベッドに戻る。

ベッドに戻りマグを確認するとーー今の時刻は午後7：25分ーー寝るにはだいぶ早い。

テレビを付けて色々なチャンネルに変えていく。

『ーーつまり、こう言うことか？お前はーー』

『ーーで、あるからして反ビースト組織であるーー』

『ーーはい、今入った情報によりますとビーストであるノルバーさんが反ビースト組織でーー』

そこに映し出されたのはー頭やミミ、尻尾などおおよ人が持つていない部分を切断された映像だった。

お腹に大きな穴が開き内臓が露出している。

尻尾が立ったのが嫌でもわかった。

『ーの所属している彼らは頑なにビーストを種族と認めず、またそれがオラクル船団に根強くー』

『ーである我々の要求は一つ。ビーストからの人権削除。それと同時に家畜化である。ビーストの栄養価は我々の船団が作っている食物より遥かに高く、それ一つで百人以上のニューマン、ヒューマン、キヤストが10日生きれる栄養価がー』

どこもかしこもニュースだらけだ。しかも最後の俺たちが食べるって？ジヨークだろ？

『ーはい、このところかの組織との緊張度も高くアークスを投下すべき、との噂もポスで上がっています』

『ですがアークスにもビーストはいるでしょうに。いたずらに刺激ー』

この船団も闇抱えてるなあ、怖いなあ、と思いつながら目を閉じる。

…まさか起きたら…いや、やめよう。

やっぱり怖いからアフィンでも呼んだおこごう。そうしよう。

92 話目

あの後寝てしまい気が付いたら左目の眼帯が取れていた。

それで上半身だけ起こすとベッドに倒れるように寝ているマトイ、椅子で簡単なベッドを作り手を下に垂れながら寝ているアフィンが居た。

「……ふみゆ……うにゆ？ーユウナちゃん☒起きた☒大丈夫☒」

その声に驚いたのか椅子のベッドで寝ていたアフィンががしやん！と言う音と共に地面に落ちる。

「ああ、大丈夫、の筈ー！そういや眼帯取れたな」

目を辺りをもう一度触りー！眼帯が無いことを確認。と言うか左右どっちも見えるから取れた、と言うことなんだろう。

「目痛く無い？変な感じとかしない？」

「いや、今のところは……うん、無い」

目を上下左右に動かして痛みがないのを確認。その後マトイを見る。

「良かった……本当に、良かった……」

そう言い目元に涙を溜めながらー！溜まったソレを手で拭いてニコツと笑うマトイ。

「……そうだな。良かったよー」

「相棒☒起きたのか☒大丈夫か☒目の痛みとかは☒」

「いや。特に無いが…どうしてそんなに…目が気になるんだ？」

「それは…」

「アフィンさん！…あはは…何にも無いよ？」

「…どう言うことだ？そんなあからさまに…」

「マトイ、言ったほうがいいんじゃない？」

「でも…」

「大丈夫、相棒ならそんな事で軽蔑しないって。…多分」

「…そっか。あのね？実は…」

「…そういうマトイは椅子に座りなおして喋り出す。」

「…D因子で左目が失明する可能性大、それで奇跡的に適合したマトイの…アレだ、細胞を使って治した、と」

「うん…」

「…そういう顔を下に向けながら指を動かす。」

「…マトイ？少し来てくれ」

「？うん…」

「…そういう椅子をズラしてこっちに来るマトイ。頭を差し出しながら項垂れるマトイに…」

「ぎゅっと抱きしめた。」

「ええ☒ユウナ、ちゃん？」

「ありがとうな、マトイ。お陰で助かったよ」

「…そう…良かった…本当に、良かった…」

そう言いマトイも抱きしめて来る。

「…あつ、そうだ。ー」

「ん？」

「ーユウナちゃん。お帰り」

「はあ、卑怯だな、マトイは。ただいま。マトイ」

側から見ているアフィンが鼻を伸ばしつつ目に涙を溜めて居たのを俺は見逃さない。

そこからマトイがもう少しこのままで居たいと言ったが流石にこの体勢はキツイ、と言い後で膝枕するからと言いその場はそれで終わりにする。

「…因みにどうやって？しゅぢゅつしたのか？」

「…ああ、俺は突っ込まないが…そんな程度は酷いがそこまでー手術するほどでは無い、との事だった」

「んん？それじゃあアフィン、どうやって治療したんだ？これ？」

「ああ…まあ、気にしない方がー」

そう言いアフィンが視線を外す。

「えつとね？変なカプセルに入れられて、そこに私の細胞から培養された細胞とフォトン液でユウナちゃんを浸した？って言うのかな？」

「…ええ…」

マトイの何だかよく分からない説明を元になると…カプセルに入られて治療液とマトイの…アレに浸された、と。

「ああ、あの時は内心これで本当に治るのかとドキドキしてたぜ」

「…ん？待て…マトイ、その時の服装って…？」

「もちろん裸だよ？」

「そのカプセルって…見えてる？」

「うん。見えないと中がどうなってるか分からないからねえ…」

そこまで来てアフィンがさつき視線を外した理由が何となく分かった。

「…マトイ、アフィンは…見たのか？」

「うん！なんかアフィン曰く、好きな人の裸を見るのは普通、って…ユウナちゃん☒何を☒」

手元にある未開封のモノメイト（オレンジ味）をアフィンに投げるべく手を動かす。

「なにつて！ヤロウ人の裸見やがって！…あほお！」

細い女の腕から投げ出されたモノメイトは…見事にターゲットに命中せず空を舞う。

「ユウナちゃん！それモノメイト！投げたら危ないよ！」

因みにアークスや…と言うかオラクル船団てを使われているこのメイト系の飲み物…まあ、塗り薬タイプとかもあるのだが…超頑丈で踏まれても壊れない所か、原生生物に噛まれても破れない程度の強靭さを誇る。

あつ、これ当たったら痛くね？

「ごめんって！だって本当に心配しててー」

そう言い止まったアフィンに向けて今度はデイメイトを投げる。ー優しく、投げる。

「だったら外で祈ってろ！」

ポイツと言う効果音がしそうな遅さのデイメイトがゆっくりとアフィンの顔、というより髪の毛に当たる。

「ああ☒デイメイトがアフィンの顔に☒」

その後看護婦がやって来て三人揃って怒られました。

人の裸を見た此奴が悪い。

その後は管制官の仕事終わりにデュケットや何時ものゼノとエコー――ここ2人は偉い怒ってた。奴と戦う時は俺たちも起こせて。いや、寝てたじゃないですか。

そんなことを言っているとー久しぶりに見た顔にタトウーの入った厳ついでかい人ーゲツテムハルトと後ろにメルフォンシーナとメルランディアを連れてやってきた。

なんでも最近やっと入院じゃなくて通院にシフトしたらしく、しかもその通院しているのがこの…なんて名前だっけか？まあ、この病院に通院しているらしい。

先輩方5人が揃い何時ものゼノとゲツテムハルトの口喧嘩からの喧嘩コースかと思っただらそこは大人。病院だからって事で収まった。

俺を除く女性陣がコレが外でも出来ればねえ、と言っていたのは多

分本人には聞こえていないはず。

そんなこんなでまた看護師が来て、俺たちも邪魔になりそうだから帰る、とゼノゲツテムが言い看護師と入れ違いで帰った。

その看護師によると明日、明後日頃にはこの様子だと退院できるらしい。

やったぜ、と思うと同時にマイルームに各種ご飯の材料あるだろうか？と考えてしまう辺りもう女の子なんあと思う。ーいやコレは前の時から何作ろうかと考えるの楽しいだけだし！ちげえし！

看護師に量多く出来ないって聞いたなら、ここアークス直轄だから：まあ、無理かなあ。って言われました。

翌日になり又看護師とデユケットが来て明日退院と言うことになっただけらしい。

デユケットに、「本当に大丈夫みたいですね…いやあ、良かった良かった」と言われた時は…まあ、俺も良かったよ、と言い返した。

「…あ、そうだ。イチゴ食べます？ s h i p 6 9 産の甘いイチゴですよ？」

「そうか。食べる」

「はい。洗って来ますね」

そう言いバツクを持って部屋から出て行くデユケット。

ベッドに横になりふと考える。

仮面が言っていた俺を殺す訳。確か俺が死ねばマトイが死ぬと。

あの言い分だと最終目的は多分マトイの……撃破。だけどそれが出来ないから俺を狙う。んで俺を狙えば……何でマトイが死ぬんだ？ 訳がわからん。そんな依存してる訳……訳、無い、よな？

それゼノとエコーが起きる前に言っていた言葉、彼女がダー、で終わった言葉。

そして仮面の仮面を外した時の姿が俺の今の身体と瓜二つ、そして最初に会った時にメルランディアが言っていた俺のデータと一緒。

これはつまり双子の可能性が……？そして今回の件のマトイと俺の種族は違えどDNAその他の一致。

……まさか、ダーク、ファルス……？

そういう流れになると俺も、となる。

「辞めてくれよ、人と違うのはミミと尻尾だけで良いんだよ……」

そんな事を頭を片手で抱えながら無い知識で必死に考えているとデュケットがバーン！と扉を破って入ってきた。

それに驚きミミと尻尾がびーん！と立つ。

「でゆ、デュケット、さん？」

バックを持ちながらつかつかと歩いてきてー昨日俺がマトイにやったように俺に抱きついてきた。

「ユウナさんはユウナさんです。ビーストがなんだっていうんですか。誰もそんな事を思って無いですよ」

多分勘違いしていると思うが……なんだか心地が良い。

俺も抱きしめ返す。

「…ありがとう。デュケツト」

「ええ。こちらこそ。それにー」

「ユウナさんのおっぱい、想像以上に大きくて感触が気持ちいいです」

ああ…君、そんなに無いからねえ…アークスで見たらあるけど周囲にいるのが俺とマトイだからなあ…。

敢えて口には出さずぎゅっと抱きしめ返す。そう言えば女の子に抱きしめられたり、したりするのはマトイに次いで2回目だな、と思いながら。

その後イチゴを食べ終わり、帰り際にデュケツトが。

「マトイさんと2人で待ってますからね。絶対に帰ってきてね」

と言い帰って行った。俺そこまで重症じゃ無いんだが。

退院するのは明日かあ、と考えていると又々扉が開く。

やけに今日はお客が多いなあ、と思っているとそこにはー。

「…えっと、どちら様ですか？」

「酷くない？私だよ！ほら！」

えっ？マジで知らないんだけど☒これナースコール押した方がいいのか？

と考えていると笑いながら椅子に座る。

「ごめんごめん。テオドールが言っていたビーストかあ。ーああ、

私の名前はね？」

「ウルクって言うんだ。宜しくね！」

ああ、リリーパの地下坑道で出会ったニューマンの彼女仮か。成る程、超絶活発的だな。

「ああ、テオドールさんの言っていたのは…」

「何☒テオドールまた私の事言ってたの☒」

そこでふと思う。ここでテオドールが君のこと好きっぽいと言う事を言うのは如何なのだろうか？と。

「…いやあ、まあ、凄かったよ。ウルクさんの話に1時間弱付き合わせてねえ」

「ウルクで良いわよ。それにしても私の話で、ねえ…申し訳ない程度でいいから教えてくれない？」

「ええ、まずはですね、テオドールさんの好物である豆腐ハンバーグの具の量がー」

あの時話していた内容を簡単に掻い摘んで話す。終いには彼女ーウルクも話に乗ってしまい、逆にテオドールのココがダメだけどそれが良い自慢が始まる。

あれ？これ前にもー。

「ーそれでね☒テオドール、ああ見えてイヤイヤ物事に取り掛かるんだけどー」

「…あのお…所で…どうしてここに？」

「ああ、そうだ。いけないいけない。テオドールの件に関してお礼が言いたくつてき。あの後少しづつだけどお話できるようになって。話を聞いたら任務中に会ったビーストの女の人に話を聞いてもらって、それで少し自信が付いてって事で。んでユウナさんって名前のビーストを探していたら金髪のニューマンの男の人に相棒ならフェオの直轄病院に入院しているよ、って言われてお礼きたのよ」

あのアホアフィン！なんて事しやがる！一応他人だぞ☒その日に入院している病院と番号まで教えるか☒

「そ、そうか…」

「…それにね？ああやってテオドールがちゃんと任務に集中することによって…やつと私も前を向けるんだ」

「ん？どう言う事だ？ウルク」

「…私少し前にね。アークスに応募して落ちちゃったのよ。それで二軍の管制官にも落ちて…それでどうしよつかって時にニューマンの水色の髪の毛をした人に会ってね？事の話をついたらね？なんと！入れてくれたのよ！管制官に！」

「うわ、すげっ！超運あるじゃん！」

「うん！その事をこの後テオドールにも言うつもり。だからね」

「私達2人の間を紡いでくれた事に感謝するよ。本当にありがとう」
「…まっ、なんだ。2人揃って頑張れよ！俺は応援しかできないがね」

「うん！ユウナも怪我治して任務受けてよね！」

「高額依頼くれたらな！」

「それじゃね！」

「おう！テオドルさんに宜しく頼んどけよ！」

そう言いニューマンの女の子のウルクは病室を出て行く。

取り敢えずだ。

「アフィンは後ろから1、2メートル横に弾撃ってやる」

ーーーーアフィンの ホームーーーー

「はつくしゅ！」

「うわっ！汚いよ！お兄ちゃん！」

「ごめんごめん！誰かが噂してたみたい」

ーーーー オラクル船団 フェオ直轄 病院ーーーー

「…これでくしゃみしたに違いない。後で人の裸を見た言い訳を書いてやろう、してやろう」

そう言い俺はもう一度横になる。時間的にそろそろ昼飯かな？

93話目

EP1.7

——オラクル船団 フェオ首都——

あの後医者に適応しているが念の為通院を勧められそのまま退院。

迎えに来ていたデュケットとマトイ。それとアフィンの乗る車に乗りそのままマイルームに帰宅。

俺が居ない間、もしかしたらキッチンがひでえ事になってるかもと思っていたが：そうでもなかった。

何でもマトイが料理と掃除をし始めたらしい。

……これもしかして女の子が作った料理を食べられるチャンス？

かと思ったが俺の料理が食べたらしい。俺ポスで料理調べて作るだけだから誰でも作れる——つと思ったが：そうか。

自動調理器があるから少しでも味の違いがあるとアレなのか。新鮮で美味しいからか？——そもそもマトイが来てから食べてる料理：全部俺の手料理じゃないか！

そんな事を考えていると俺のマイルームに着く。

アフィンがお邪魔します、と言う中。俺はそのままキッチンに向かい、ナノトランサーの技術を応用して作ったとされる冷蔵庫の中身を見る。

一瞬、前見たく出前を頼もうかと思ったが：マトイとデュケットのなんか凄い視線を感じてやめた。そこで冷蔵庫を閉じて。——所でアフィン。何でいる？

「いやあ：色々手伝ったし：ねえ？」

「ねえ？で女しかいない空間に居れるのかアフィンは」

「：ま、まあユウナちゃん。アフィンも心配していたわけだし：ねっ

？」

「何がねえ？なんですかね？マトイさん…」

そう言いながらもテーブル拭いたりコップを準備したりするデユケツト。

うーん、と腕を組んで悩む俺。何を作ろうか。うーうどん？

サンドイッチ？うー俺の腹が膨れないからなあ……。

そんなこんなで冷蔵庫の中身を見ながら何を作るべきか考える。

うーうーオラクル船団 居住区うーうー

相棒が退院すると聞き、相棒のパートナーと合流する為に車を出す。

「あつ！兄ちゃんどこ行くの☒」

「んっ？病院だよ？」

行く為に駐車場に車を出（出現）そうしていると家から弟が出てきた。

車が出てくるから下がってって言い下がらせる。

「びよういん☒なんで？兄ちゃんどっか悪いの？」

「ううん、違うよ。相棒を迎えに行くんだ」

「あつ！兄ちゃんの好きな人☒」

そう言う弟うーまで、どこでそれを☒

「ちよ☒ち、ちげえし！何言ってるんだよ！」

「すきなひと迎えに行くんだ！」

手をバタつかせながら家に戻っていく弟。

それと入れ替わりに母が出てくる。

「アフィンちゃん…まだあの娘と付き合ってるの？」

「母さん…ちがうよ、付き合ってた訳じゃ」

「アフィンちゃんはニューマンなんだから、引く手は一杯あるでしょ？何でビーストの娘と…」

「言いこれだからアークスには出たく無かった、と言い放つ母さん。」

「…はあ…まあ、ちよつと出掛けてくるよ」

「任務ならその都度連絡してね？」

「ん、うん。分かった」

「そう言い車に乗りローフトン駆動複合エンジンに火を入れる。ローいや、この場合は雷か。」

エンジンの回転数が上がりロー500くらいまで下がったらパーキングを解除、サイドブレーキを話してニュートラルから1速目に入れようとしてロー。

「…いや、今回はオートマで行こう」

モードをマニュアルからオートマに変えてアクセルを踏む。

最初はユウナのマイルームに行かないと。

車を止めてユウナのマイルームに向かう。毎回思うのだが、何でマイルーム行くのにゲートエリア経由しなくちゃいけないんだろうか？

普通にショップエリアとか居住区に直通のテレポーター作れば良いものを。

そんなことを思いながらもインターホンを押して中に居る二人を呼ぶ。

「マトイ？デuketツトさん？居るか？」

中からはあい。今から行くから待つてえ。と声が聞こえる。

取り敢えず外で用意が終わるのを待つか。

数分してヒューマンのマトイと同じくヒューマンのデユケットが出てきた。

「ごめんなさい、アフィンさん。待ちました？」

「そう言い何時もの管制官用の服装ではない姿で出て来たデユケットさん。マトイもその後ろに居る。」

「いえ、そんなには。車は出てすぐ近くに止めてあります」

「迎えに行きましょう、と言い二人を車に乗せアクセルを踏み込む。」

病院に到着して受付に相棒の名前をデユケットさんが伝えている。

「…なあ、マトイ。そう言えば何だが…」

「うん？何？」

「相棒ーユウナちゃんに恩があるって言ってたけど…何か、機構に残ってるような…こう、分かるか？」

「うん。記憶を取り戻すための何か無いかなって事だよな？ーそれならノー、かなあ…」

「そうか」

「うん。なんか、こう…死ぬ覚悟でてくにつく？を使った時に助けられた様な気がしてね。確証は…ない、かなあ…」

「死ぬ覚悟のテクニック、ねえ…」

一応俺も使えなくは無。クラス的に使えないだけであって。そう言や相棒が前に、マトイにテクニク使わせたらヤベエ事になったって言っていた気がする。

もしかしてマトイって…テクニク系なのだろうか？フォースやテクターとか。

「他にはー何かないか？」

そこまで思い、何か他にないかと聞く。

「ううん、何にも」

何も無い、だけど相棒ーユウナの事は信頼している、と。

「そうか」

そこまで聞いて受付に行っていたデュケットさんが帰ってきた。看護師が案内してくれるらしい。

相棒の荷物を持って車に入れて相棒のマイルームに向かう。

面と向かってありがと、と言われた時は少し嬉しかった。

数分走り、ショップエリア経由でマイルームに着く。

そのまま流れでユウナのマイルームに入ったが…案外普通だった。ーいや、リビングの影になるところに作業台と変な機械が置いてある。

「あいぼー？何これ？」

「それか？見ての通り作業台と武器のオートローダーだよ。ーデユケット。皿を」

「はい、どうぞーあちっ」

「ああデユケットさん水」

キッチンの方にチラッと目線をやるとー相棒がフライパンだったか？それを使って料理しているのは分かる。相棒がフライパンの中身をデユケットさんが持っているお皿に移そうとした時ー多分

ありやフライパンに触ったのか？マトイが水を……デユケツトさんの腕全体に欠けている。

何作ってるんだろうか？と思いつながらも作業台を見る。

上にはプラモデルの作り掛けが置いてあったり、無造作に空のマガジンが置いてあったり……下の収納スペースには各種武器のマニキュアルが丁寧に仕舞ってある。

作業台の隣を見ると……ウェポンラックが置いてある。でも其処には何も置いてなかった。

「次は何を作るの？」

「肉が食いたいから……豚肉と玉ねぎと生姜を焼いて醤油で炒めたものだよ？」

「うわあ……すっごくいけそう」

「でしょ？ご飯は……これ何合？」

「えつと……900gくらい？」

「えつと……150だから……6合くらいか？まあ、1.8キロも有ればアフィンが居るとはいえ、足りるだろ」

そう言い肉と玉ねぎを炒めている匂いがしてきた。

今回ここに来て正解だったかもしれない。俺の母親もあれから自動調理器を使わずに作る様にはなったが……あまり美味しいとはいえない。弟は美味いと言っているが……。あれか。俺は自動調理器の完璧過ぎる味に慣れてしまったのか。

……なんかアフィンがずっとこっちを見ている気がするが……そんなに食いたいのか。

そんな視線を他所に作った豚肉と玉ねぎの適当炒めを皿に乗せるーこれ昼の食事では無いな。

「デュケット。アフィンのも。マトイはーコップは行ってるか？」

「向こうに？あるよ」

「よし、炊飯器を持って行くからーさっさと食べよ？」

病院食で量が足りなかったんだ、食べさせてもらうぜ。

「ーあ、そうだ。アフィン、買い物に付き合え」

「また？今度は何をーマトイ、もうちよつとこのナスの…ポン酢和え？こつちにーそう。で何を？」

ナスのポン酢炒めを自分の方に少しだけ寄せて白米の上に乗せて元の位置に戻してーアフィンが聞き返す。

「買い物だよ、ソードが壊れた。軽い武器が欲しいから観に行こうぜって」

「まあ、良いが…どこのを買う気だ？」

「まあ、取り敢えずエーシーインスの所を見に行こうかと」

「A.C. ins?まあ、扱いやすさでいったらねえ…」

「アフィンとユウナちゃんどこか行くの？」

「ああ、アフィンが無理って言えば1人で行くが」

「うーん、行きたいのは山々なんだが…こつちにも予定があつてな」

「そつか…」

「なら私が行く？またロットドで撃ちたいし」

そう言うマトイ。頭によぎるは演習場的な場所の爆発事件。

「ま、まあ…うん。任務が終わったら行こうか」

「うん！」

「ユウナさん、その豚肉と玉ねぎ炒めこつちにー」

「ああ、はいはい」

黙々と食べていたデuketツトがここに来て初めて口を開くー開いた言葉は肉炒め来れ、だが。

ー惑星アムデイスキア 浮遊大陸ー

日付は変わり今は浮遊大陸の調査に来ている。

「ああ…涼しいなあ…」

ナノトランサーから買い置きしてある賞味期限が5年先のオレンジジュースを飲む。謳い文句はフォトンとナノマシンで完全密閉、爽やかフルーティ、だそうだ。

セールで安かったから買って見たが…まあ、さほど美味しく無い。その代わりカロリーが少し高く、本当の意味で非常用の飲み物みたいだ。

余計喉が乾く気がするが気にしてはならない。

行き掛けにミートレーションがショップに売っていたので、それを5個購入して今食べようとしている。

地面に座り膝の上にミートレーション、トマトソースとハンバーグ、パンが圧縮された物を見る。

過去に軍に入った友からレーションを何回も分けてもらったことが有るが…アレは袋の中にハンバーグとトマトソース、米とスープ、それを入れる受け皿が有ったなあ。

そんな事を思い出しながらパン、固形のトマトソースとハンバーグ、パンの詰まったレーションに付属のスプーンを指して口に入れてー。

「…やっぱりしょっぱいなあ…」

確かにハンバーグの厚さは良い。味の濃さはまあ、何とかなる。でもな。

この濃さだと米が欲しいなあ…。

そう思ってしまうのは前の前世が前世だったからだろうか。多分そうだ。

ミートレーションを食べ終えて、そのまま浮遊大陸の奥に進む。

とちゆうクルクル回つて突っ込んでくるデカイ亀、シールドを持ってフォトンを担う攻撃を全て無効化する巨人が何も無い空間から現れーこれはオラクル船団のテレポーターみたいなので、直接この場所に現れたりするのだろうか、と思いつながら、分かり易すぎる赤いコア部分を撃つて倒しながら奥に進む。

にしてもあのシールド…。

「アレは使い道十分ありそうだな」

そう呟きながらステブウエポンのコッキングレバーを引いてー途中で固まった。

「ん？あれ？……っ！」

引けないのを確認して咄嗟に強く引くがー薬室内の弾は出てこない。

おつかしいな…そんなに精度悪い弾を使ってるわけじゃ無いし…。マガジンキャッチを押してマガジンを外す。マガジンの挿入口から指を突っ込んで取れたりしないかやるが、長さが足りない。

「……あれ？貴女は…地下坑道であつたユウナさん、でしたか？」

「んあ？」

それから数分ほどコッキングレバーを引こうとして、ストックを地面に埋めて足で押し込んだり、氷系テクニックを何となく使い、棒を作って押し込んだりしてみてもダメで…。

どうしよつかと悩んでいたら後ろから声をかけられた。
長い帽子と左肩を出し、ロングドレスの様な男性用戦闘服を着た男性。

「…テオドール、さんでしたか?」

つい癖で呼び捨てしようとしたところをどうにか次の言葉を出してさん付けする。

「テオドールで良いですよ。ー所で、その、…一体何を?」

そう言いテオドールがストックが埋もれた銃の隣に氷系テクニツクの氷柱的なものが置いてあるところを指差す。

「いやはや…ちよつとジャムりました。ーまあ、銃が壊れた、と言うか…」

ジャムと言い、ふとそれがレンジジャーじゃ無いクラスの人に分かるのかと思い、壊れた、と言うことにしておく。

にしてもこれアレか?撃った薬莢を外に出す…確かリム?だかなんだかが悪さしているのか?これでもバレルとか機関部は結構な頻度で分解して綺麗にしているんだがなあ…。

「ああ…そうですか。…そうだ。どうです?帰るまでパーティを組むって言うのは」

僕1人じゃ心弱いんで、と言う。ふとウルクと言う彼女(仮)が居るのに俺みたいなのの子とパーティ組んで良いのかと思っただが…それは後で良いか。

「ああ…良いね。そうしよう。ー所で」

良いと肯定してそのあと言うのは一つ。

「何です?」

「武器つて有りますか？」

メインウエポンが壊れた現状、テオドールに武器を借りるしか無い。後ろに装備しているロッドから見て多分テクターかフォースなのだろう。予備のガンスラッシュもあるに決まっている。

正直地球の科学で止まっているため、この船団の科学力で作った、地球の比では無いガンスラッシュを見ても、先入観と言うか何というか。とても常時使いたいとは思えない。

それと同時に、帰ったら予備の武器を購入しようと決心した時である。

そもそもメイン、サブ、サブ2号機位は購入しておくべきか。

94 話目

「えつと、ユウナさん…テクニックの使い方、分かる？」

「そう言いテオドールがロッドとウォンドを渡してくる。

「そうだな。」

「ごうーいけえっ！ってやればー」

テオドールから手渡されたロッドをクルクル回しながら前に突き出し、上の言葉を言うとロッドの先端から光の渦が散らばり、空中に飛散する。

「……………」

「……………」

「啞然とするテオドールと撃ったロッドを両手で持って、それとテオドールを交互に見る俺。」

「…ユウナさんって…僕と同じ第八世代だよな？なんでクラスチェンジしなくてもこんな十分な威力を…？」

「そもそもユウナさんってレンジャーだよな？つと付け加えて。」

「…ま、まあ、そう言うこともあるよ。それにー」

「ほら、と言いミミと耳、尻尾を指差して言う。」

「ビーストだけ一応ニューマンベースだからじゃない？多分、ただね」

「そっか。ビーストは前見た時分かったけど…その、すごく長い髪の毛でわからなかったよ」

「分からないのは当然だよ。ーさして、武器は入手、と言うか借りれた

し…」

それで思ったが、テオドル曰くテクニックが強い訳。ニューマンベースって言うのもあるかもしれないが、もしかしたらマトイから受けた目の細胞が起因している、のかも知れない。

ーそもそも目からどうしてそんなテクニックが強くなるって事になるのかは分からないが。

「パーティ組むのは良いてして。どっちが前衛付きます?」

「僕は元からフォースなのでちよつと…」

「ロッドって敵を殴れるよね?なら俺が前に行くわ」

「お願いしますね。女性の方を前にするのはアレですけど」

「その言葉はウルクにかけてやってくれ」

「そうですね。戻ったらそうしますね」

取り敢えず俺が前つてことになったので。ロッドを振り回して空気を切る音を聞く。

両手で持って思いつきり殴った方が良いかな?

「多分雑に扱つても壊れないとは思うので。存分に殴ってくださいね」

「おう。借りといてなんだが、ありがとね」

左腕のタリスにレスタ、シフタ、デバンドが装備されているのを確認。

「奥の方に行きますか?」

「そうしましよ、それで任務を終わらせないとね」

「そうですね。僕もウルクに会いに行かないと」

そう言いながら内心、ホントウルクのこと好きだな、と思いながら気になっていたことを聞く。

「ーそうだ、アレからウルクとはどうだ？」

「ええ。ー実はと言うと、僕、アークスに入ってからドジばかりで。それで知り合いーウルクに怒られてばっかだったんです」

「おう、いきなりかーそれ？」

右手でロッドを持ちながらもテオドール話を聞くために横に並び歩く。

正直ここって俺らを敵としているのはダーカーとそれらに侵食された龍族だけだから、基本的には戦闘は発生しない。基本的には。

「僕は怒られながらウルク話を聞いていてーウルクに答えられない自分が申し訳なくって、答えを出せない自分の能力が嫌で…」

そんなことを思いながらもテオドールの言葉は続く。

「そんな僕を見てか、ウルクも笑わなかったんですけど…最近笑うようになりました」

その話を聞き、多分アークスに受かったからだろうなあ、と思う。と言うかウルクも運良いよな。お願いしていたら偶然偉い人の目に止まって受かるなんて。

「随分遠回りしたけどやっと追いつけた、部署は違うけどね、とウルクが言っていました。今思い返すと色々からかわれたりしましたし」

「その時のウルクの顔を見て…ちよつと、ホツとした、というか…小っちゃい頃の感じがしましてね。ウルクも僕の為にあんなに苦しんで

いたのに……」

「そうか？ 案外、ウルクもアークスになったらちゃんどやって欲しいな、程度かもしれないぞ？ そもそもウルクって苦しんでいたか？ 案外、そう言うことを思う時って自分の方が無理している可能性があるぞ？」

「……そうかも知れませんね。アークスになれないウルクの為に、僕が頑張らないと、って気を張ってたのかも知れませんね」

「気を張ることは良いが、張りまくっていると緊張しすぎて動けなくなるぞ？ その場に合わせて適当に行こうや？」

「そうですね。適当にか。……ウルクの言っていた、無理をするな——今やつと分かった気がするよ」

「まっ、ウルクを悲しませるなよ。多分ウルクもテオドールの事悲しませようとしねえからな。——多分」

「多分って……僕もそんな馬鹿な真似はしませんよ」

「なんか嫌な事があつたらウルクにでも言え。吐ける人が居るだけでもだいぶ違うからな……」

そう言いジエットの音みたいな甲高い音が聞こえる。

俺とテオドールが空を見上げてその正体を見る。

「ユウナさん、アレが——」

「そうだ。クオーツドラゴンだったか。一応このエリアのトップだ

と。――俺たちの偵察機とかにぶつからなきゃ良いが……」

翼の先からヴェイパーを出しながら空気を裂く姿はまさしく戦闘機だ。

そう言やクオーツってどうやって機首上げ下げやってるんだろうか。直接エンジン部分を動かす推力偏向ノズル的な事で動かしているのだろうか。

それだと自分の体重エンジン出力で支えきれらるって事になるのか？

「龍族に航宙法――いや、航空法って有るんですかね？」

「さあ、案外俺たちよりガッチガチかもよ？」

もともと、俺もその航宙法と航空法なんて知らないがね。

因みにその後もオラクル船団のゲートエリアに着くまでウルクの話は散発的に続いた。

因みにこちらを見て攻撃して来る龍族には、テオドールから教えてもらった闇系テクニクを放つ事でご退場願った。

――惑星 アムディスクア ??? エリア――

(カミツ様!) (ただ今) (戻りました!)

(コノレラよ、また許可を得ずに飛び回ったな?)

(ですが!) (飛び回らないと) (腕が鈍ってしまいます!)

(それも一理ある。だかな? 我々龍族にも――飛ぶ者にもルールがある。掟がある。それは分かるな?)

(ですが!)

(コノレラよ。ルールー掟を破った罰として飛ばずにアークスとの模擬戦に勝って貰おう)

(そんな☒)

ーーオラクル船団 フェオ ゲートエリアー

その後パーティとティアにメールを送り龍族のデータを渡す。正直闇系テクニック撃ちまくっただけだから余り見て欲しくないんだかな。

そう言や借りたロッド。キャンプシップ内で返そうとしたら拒否られた。なんでもウルクとの仲を取り繕ってくれたお礼らしい。：こうはなんだが、お礼品を自分の中古で渡すのか：借りたのは俺だけど。

カウンターで調査結果をマグを通じて送って、さあ帰ってマトイとデuketツトに会って癒されようとした時、知らない人に声をかけられた。

「君がビーストのユウナか？」

後ろを見るとソードを背負った…ヒューマンか?この人は?

「ええ、そうですけど…」

「伝言だ。修理屋のジグが君を呼んでいる。ーーそれじゃ、要件は伝えただけからな」

そう言いトコトコと何処かに行くヒューマン。去り際になんでジグさんはあんな獣を、と言っていたのは聞こえないことにする。

はあ、と溜息をつき、そのままショップエリアに向かう。

と言うかペアーリって書いてあるけど…あれ修理のリペアだよな。

「おうーきたか！」

そう言いジグさんに会いに行くトリーリサさんもいた。

2人で何かを話していたらしい。フルキャストには半径数十から数百メートル届く個人用通信があるらしく、流石にそれは聞くことはできなかった。

「でわでわ私はお邪魔のようなのでえ？帰りますねえ。ーそれではまた」

そう言い帰り間に頭を下げて出て行くリサさん。

「…ジグさん。リサさんっていつもあんな感じなんですかね？」

「さあ。わしが言えるのは外見、言動が全てじゃないってことじゃーそれだな？」

「ええ。なんです？」

「君が回収したクラリッサ。アレをどうにか修復出来てな？それをー11番艦の方に置いてあるんじゃない？」

「えっ？…ここにあった方が良いのでは？すごい武器なんですよ？それ」

「そうなんじゃが…これを使おうとすると身体中のフォトンが吸われるくらい燃費が悪くてな？使わせられんのよ」

下手したらそれでフォトン低下で死んでしまう可能性もあるしな、
と言ひ席に座る。

「そうなんですか…」

「そもそもわしはびっくりしたぞ？第8世代とはいえ良くアレを持てたな、と」

「そんな事を言ったらアフィー…ここに持ってきた人だつてー」

「あの時は既に圧縮状態ー使えないんだよ」

「…えっ？何？なんか怖い」

「大丈夫じゃろ。寧ろ今のアークスにはお主の様な人物が必要じゃ」

そう言い硬い機械の腕で頭を撫でるジグさん。痛い。

「痛いですよ…」

「おお、すまん。それでしゃ。お礼をしたいのじゃが…結局、前のと合わさり、決まったかの？」

「…実はまだ…」

「…うーん、困ったのお…お主、確かレンジャーだったよな？」

「ええ、そうですが…？」

「お主…近距離戦と中距離戦、遠距離戦ならどれを取る？」

「……で、出来れば全部を…」

「全部か…因みに理由を聞いても？」

「…その…自分これなんで…組めるて人が1人しかいなくて…しかも彼もレンジャーでして。極端な話全部1人でやらないといけないので」

「…このところで先程テオドールにやったようにミミと尻尾を見せる。と言うかそもそもケモミミと尻尾が付いたら可愛いに決まってるんだろ！このセンスはおかしいのか☒」

「…そうか…分かった。少し考えておくよ」

「有難うございます」

「…そう言い頭を下げる。やっと専用武器か。出来れば汎用品で作って貰って弾代とか下げて欲しいなあ…。」

「…と言うかステブウエポンどうしよう。」

「席を立つと後ろから久しぶりに武器作るのお、とか、最近修理しかやってないからなあ、とか、クラリツサ持てたくらいだし、フォトン弾で良いかのお、とか聞こえたが、帰りたいので帰ることにする。」

「ロッドを圧縮してナノトランサーに入れる。ナノトランサーに今入っている武器はリーステブにロッド。だけか。後はメイト系が30個程とステブウエポン用の特化品のバンマガジンが2個、汎用マガジンが10個以上ある。」

画面を消して帰路につく。数十分ほどの任務だったか：楽に終わったな。ダーカー数十体を倒していたらしいが、只管光テクニク撃つてれば終わるしな。

そう良い帰路に着きながら、ふと思い出す。そうだ。ステブウエポン、デuketツトに渡せば良いんじゃないかね？デuketツトさんも確かレンジャーの筈だし。ジグさんの言う武器が完成すれば、だけど。

そんなこんなでマイルームと言うか家に着き扉を開ける。

「ーあつ！お帰りなさい！」

プシュ、とドアが開いて中に入るとー一中からマトイが俺に抱き付いてきた。今思ったんだけどなんでこんなにこの子の好感度高いんだ？

「ーおつーああ、ただいま」

そんなことを聞けるわけがなく。

そう言い戦闘服から一般的な服装ー私服が少ないとデuketツトが勝手に注文して購入したズボンと長袖のシャツに着替える。ー胸が窮屈なんですけどこれ。ーに着替える。

服装も予めセットしておけばほぼほぼスグに着替えられるから楽では有る。

10個までしか対応していないから戦闘服とプラスアルファしか無いが。

「ねっ？ユウナちゃん。私またテクニク撃ちたいなあ」

そのままリビングに抱きつかれながら移動してソファに座る。

「テクニックを？別に良いけどさ…」

「？」

「前回見たくフルパワーで撃たないでくれよ。あの時弁償しなくちゃってマジで思ったんだから」

そんない頭に思い浮かぶはシヨップエリアにある訓練所爆発事件。

「わかってるよ！たいじょーぶ！今度は武器が壊れるくらいに弱くするから」

「それでも壊れるのか…」

「そういやあの時武器壊れてたっけ？そう思いながらリモコンを操作してテレビのリモコンを変える。」

『ー次のニュースでー』

『ーいけっ！フォトン・ニックス！相手のー』

「ニュースは飛ばし、アニメはーなんだこりゃ？変な動物が戦ってんぞ？前世のゲームとかアニメのあったアレか？」

『ーまた、アークスは被害を抑える為、1人運用可能なホバーバイクの本格量産を開始、これによりー』

「その次はホバーバイクの紹介か。確かにコレは使えそうだな。乗る機会が合ったら乗ってみるか。」

『ー所でトロットさん、アークスが鹵獲、それらのデータを元に開発した人型兵器についてですが』

『ええ、あるアークスが惑星リリーパから鹵獲、又は奪取したとされる人型兵器ーーそうです、これですね。この総合技術開発本部とは名ばかりの所に運ばれた本機はーー』

「…あれ？コレユウナちゃんが乗っていた奴じゃ？」

「そうだな。コピーが量産され始めたって聞いたが…」

そう言いテレビにはあの人型兵器のテスト運用動画が流れる。

あれ？アレそもそも俺じゃなきゃ動かなかった気が…

そんな俺の思いを勝手にとテレビは進む。

『ーええ、機体の動作プログラムはある程度、もとい完璧なまでに完成しているとのことです。オラクル船団に居るフルキャストからモーションパターンを貰い解析、最適化すれば良いだけですからね』

『と言うとコレは今後アークスの決戦兵器に？』

『それが何とも…主機ーああ、エンジンにですね、小型フォトンリアクターを2機装備させて並列安定化させて運用しているとのことなんです…些かコレでもダーカーからの侵食に耐えられるとは言い難い』

『フォトンリアクターを2機積んでもですか？』

『なんか難しい事言ってるね』

「…まあ、アレだ、兵器は難しいねって事だよ」

そう言いリモコンをテーブルに置いて、俺はソファから立ち上がる。

「どこ行くの?」

「ん?トイレさ」

そう言いトイレの場所に行こうとするとマトイに呼び止められる。

「ユウナちゃん。お手洗いはそっちじゃ無いよ?」

「え。だってここにー」

と言いトイレがあつた所に行くとー風呂が広くなっていた。

「ユウナちゃんが入院している最中、ここの施設長?なのかな?がきて女性しか住んでいない所のトイレを修繕していったの。それで場所がお風呂の中じゃなくてーあそこ」

そう言いマトイが指す場所はー。

「いや、場所ほぼほ同じじゃん。と言うか風呂の隣じゃん
今気がついた。隣に扉がある。」

それを開けると洋式トイレがポンと置いてある。

「うん?でも一応場所変わったよって伝えたかったの」

「うーん…そうか。ありがとう」

「うん。あとユウナちゃん」

「ん?」

「トイレじゃなくて、お手洗い、だよ?」

「でも」

「ユウナちゃんは女の子なんだからね？本当はその口調もアレだけど…」

そう言うマトイをスルーして女になったお陰で近くなったトイレ小をする。

トイレに入り鍵を閉めて下半身のズボンを脱ぐ。
その次に下着であるシマシマ青白パンツを脱いでトイレに座る。

しよろろろろ…と言う音ともにお尻の方におしっこが伝わる感触が。男の時だとそのまま出るからな…違和感半端ない。

出し切ったらトイレトペーパーで優しくお尻を拭いてパンツとズボンを…胸が邪魔で見えねえ…。

「うーん…」

見えない下を手の感触だけでパンツとズボンを上げる。

「ふう…よし」

トイレから出てマトイに言う。そろそろショップエリアに行こうか、と。

95話目

「ほらっ！見て見て！」

そう言い仮想ターゲットを凍らして、更に炎、風、最後に光を叩き込むマトイ。

「うわあ……なんちゅうダメージ……」

上の方に付いているカウンターの数字がどんどん上がっていく。

「ねっ？凄いでしょ？」

「凄いつて言うか……エグい」

ダメージの下にどの箇所がどの位のダメージを受けたかと言うとシミュレートデータが出るが……原型が無い。

「みてー！ほらっ！もつと撃てるよ！」

そう言い追尾する光テクニクニクニ後で調べたら俺がテオドールから借りたロッドで使った光テクニク、イル・グランツを連発する。

すると6発目辺りで急に撃てなくなった。

「あれ？ユウナちゃん。なんかこれ……撃てなくなっちゃった？」

そう言いロッドを両手で持ち、色んな角度から見始める。

借りるよ、と言いつの撃てなくなったロッドを見るとー。

「うーん……分からない」

武器の圧縮も出来なくなっている。ーそもそも貸出品だから圧

縮出来ないようになってるのか？

「あれ？おかしいなあ…使い過ぎた？」

武器データを見ると…40年前の旧式？そりゃ壊れるわな。

「マトイが凄い量のフォトンで打ったからじゃね？なに、壊れても大丈夫でしょ？それにほら。ここに旧式って書いてあるし」

「安全面はどうなんだろうねえ？」

因みにその時は下まで読まなかったから分からなかったが、当時はフォトンをぶつける勢いで戦っていたらしく、そもそもこれらの武器は生半可な扱いでは壊れない、らしい。

壊れたと受付に戻したらマトイを調査したいとか言い出したから、この後用事があるって言って速攻此処を出た。

ブラックリストに入っていないよな？と言うかまた扱えるよな☒

「ふう…っ！スッキリしたっ！ねっ、ユウナちゃん。次はどこに行く？」

「そうだなあ…何時ものラフリに行って何か食べる？」

「うん。そうしよう。何を食べようかなあ…」

そう言いショップエリア下層に向かい居住区に入る。

「それでね？エコーさんとメルランディアさんがね？」

マトイの話の中でサクツというメルランディアに、君まだ通院

段階だからそんな無理しちゃダメじゃ、と思っているとオラクル船団各所に設置されているモニターが赤くなる。

〈緊急事態発生！オラクル船団内に多数のダーカー反応の上昇を確認。全アークスはカウンターから担当地域を貫きダーカーを撃退せよ。繰り返す、オラクル船団内にー〉

そう言うのと周りの市民が何処かに走り出す。

「マトイ！シエルターにーくそつ、場所どこだ☒」

そもそも居住区なんて数える程しか降りたことないから分からない。

「ねえ？大丈夫？ーじゃないよね…」

マトイが心配そうに言うが…分からない。

「ー取り敢えず、カウンターに向かおう。あそこならアークスも居るし、いざとなればフェリアさんを頼ってくれ。ーいくぞ？」

「うん」

〈ー事態発生、オラクル船団N027から29の船団内に多数のダーカー反応検出。全アークスはカウンターからー〉

シヨップエリアから下に向かったただけであつた為戻る事は容易だった。

〈ー緊急指令が発布されています。繰り返します、緊急指令です〉

〈全アークスは逐次ーえっ？カウンターを無視しても☒〉

へそうだ。自体は一刻を争う。全アークスは逐次出撃。攻め込まれたアークスシップの救援に迎え」

へー速報！アークスシップ28番艦テミスにダーカー反応急上昇！侵入されました！」

へ緊急指令が発布されています！繰り返します！アークス各員はクエストカウンターから逐次ー」

オペレーターの方も混乱しているらしい。ある程度年の行った人が指示を出し始めているよつだ。

「付いた！」

マトイの手を握り走ってゲートエリアに入る。周りにはアークスやここに逃げ込んできた市民、その他多数が居る。

「ーいたつ！あそこつ！フェリアさん！」

複数の看護師がライフルを背中に背負いながら治療をしている。名前を呼んでこつちに気付かせる。

「貴女達ーと言うかマトイさんまで」

「フェリアさん、マトイさんを頼む！」

「ちよつと待って！私も治療しなくちゃいけないのよ」

「周りにいる人もしかして…全員…？」

そう言い周りを見渡すマトイ。くそつ、やっぱり此処はダメか？

「そうよマトイちゃん。ここに居させることは緊急時だから出来るけど…」

そこでふとさっきのロッド壊した時と過去に爆発させた時を思い出す。あの時はどちらも攻撃系テクニクだった筈だ。なら回復系―フォトンの力で自然治療能力を大幅に上げるレスタなら？

「…あ、マトイ、レスタ使えるよな？」

「う、うん。出来るけど…」

そう心配そうに言うマトイの赤い目を見る。

「ちよっと☒アークス所属以外の武器所持は―」

「緊急なんです！マトイ、こいつを使ってレスタ、使えるか？」

「う、うん。やってみる」

「そもそも此処は武器使用禁止エリア！使えるはずが―」

マトイがロッドを掲げると―ゲートエリア全体に緑色の薄い煙が出る。

「―で、出来た☒なんでえ☒」

「よしっ、行けるな☒フェリアさん、負傷者の様子は？」

「まってよ！―嘘っ☒全快してる☒マトイちゃん、貴女―いえ、今はそれどころじゃないわ」

「フェリア部長！これは☒」

他の看護師がフェリアさんに聞きに来た―と言うか部長☒トツブなの☒

「このマトイちゃんがやったことよ。ーマトイちゃん。負傷者ー
怪我人がある程度集まったらレスタ撒いてくれる?」

「はい!」

「よしっ! ユウナさん、ありがとうね。なんとか打破できそうよ此処は」

「フェリアさん、ありがとうございます。おー私はこれでクエストの方に行ってきますね」

「ユウナさん。死なないでよね。貴女が死んだらマトイちゃんも後を追うわよ!」

「嘘を言わないでくださいよ。ーそれでは」

「頑張つてね。ユウナちゃん!」

そう言うマトイに後ろ向きで手を振って、カウンターの方に行く。複数の人がカウンターに座って居て人ごとに任務を受ける場所を言っている。

「次っ! 貴女は28番艦、テミスに向かつて!」

俺の番が来た瞬間すぐに言われた……ええ…。

ーーオラクル船団 アークスシップ 28番艦 テミスー

乗っていたキャンプシップからテミス市街にテレプールを通じて降りる。

「うわあ…ひでえなこりゃ…」

至る所で上がる対空砲火、大型ダーカーによる建築物の破壊、爆発

音や悲鳴が響く。

「ー！ー！繰り返します！ダーカーは27番艦ヨルダ、28番艦テミス市街地に出現、侵入しています！ー」

「全アークスは各自の判断でダーカーの殲滅、逃げ遅れた市民と市街地の安全を確保して下さい！ー！繰り返します！ー」

通信機から鳴り止まないオペレーターの逼迫した声。それと爆発音、対空砲の音を聞きながらナノトランサーからステブウェポンを取り出し握る。

マガジンは既に装着済み。コツキングレバーを引いて初弾装填、レバーを少し引き薬室内にちゃんと入っているかを確認する。

安全装置を解除、モードを三点バーストにする。

ショットシエルーアークスの言うデュフェーズシエルを装填する。ランチャーの安全装置も解除した。

本来ならキャンプシップ内でチェックしたかったが…緊急だったからやれなかった。

「と言うかメンテしてないんだよなあ…壊れたりしない、よな？」

「よし。行くか」

「そう言い前に一足進めると後ろから声が。」

「ー！あ、ユウナさんも同じエリアですか」

「その声は…メルランディアさん？」

後ろを見るとー！タリスを装備したメルランディアが出てきた。

「ええ、緊急指令ですから。私もアークスなので」

「そう言われ、そうか。アークスじゃ無いのは姉のメルフォンシーナの方が、と思い出す。」

「俺とメルランディアが話している間も上空では飛行型のダーカーと少し前にプラモデルを作った機体がドックファイトを繰り返している。」

「…そうですね、ユウナさんが良ければ途中までで良いのでパーティー組みませんか？タリス1人だとキツイので」

「それにゲツテムハルトさんも今は居ませんし、付け加えて。」

「良いですよ。俺もライフルだけじゃキツイと感じたので」

「ええ、それでは行きましようか」

「…ええ、後ろはお願いしますね」

上空では背後に突かれた戦闘機がフレアとチャフ、対ミサイル用ミサイルを放っている。シザーズをしながらフレアとチャフ、ミサイルを散布するがミサイル以外効果が無いみたいだ。

「ユウナさん、上ばかり見ていると搦われますよ。前を見ましようね？」

「あ、う、はい。行きましよう」

ボコボコにされた車道を2人で周辺を警戒しながら進む。

すると目の前の地面から四つ足の黒と赤い何かーダーカーが出てきた。

「目の前、ダーカー六匹。ユウナさん、フリーで！」

そう言うとメルランディアさんは右手に持っている何かーアレ
はカードか？それをダーカーに向かつて投げる。

俺はそのままその場で三点バーストでダーカーの天辺にある頭か
その下にあり、隠れているコアを狙う。

「メルランディアさん！」

「ディアで良いですよっ！ーそれっ！」

炎系のテクニッカーーこれはシフタか？確かフォトンを一時的に
活性化させるとかなんとか。

「はい！その次っ！」

光系テクニックを放ち、それはダーカーを襲う。

その間も俺はダーカーが動かない様にと脚を当たらなくて良いか
らひたすら撃つ。

光の群れがダーカーに接触ぶっ飛んでコアが見える様になる。

「ユウナさん！狙って下さい！」

「はいっ！」

コアに銃口を向けてトリガーを引く。薬室内で薬莖が蹴られエ
ジエクシオンポートから外に出される。分かれま弾頭がパウダーの
爆発エネルギーを受けてバレルを通り、コアを貫通、内部で弾頭内に
ある少量のフォトンが流れ込みダーカー因子と対消滅、ダーカーが消
える。

「その調子ー他もお願いしますー！」

脚などを撃つてもダーカーは倒せる。最も、当たりの大きい胴体、
と呼んで良いのだろうか？そこを狙ったほうが早い。

二体、三体と行くと起き上がり接近してくるダークカーもいる。

「ユウナさん！右後ろ！」

「えっ？…キーきやあ☒」

右後ろからダークカーの前脚を振り下ろされたが…痛いだけで何も無い。

「…ほらっ！…ユウナさん！大丈夫？」

「えっ、うん、…多分」

「…レスタとアンティ、掛けますね」

そう言いメルランディアがレスタを掛ける。マトイがやった様に広範囲では無いが。

「…うん、大丈夫、かな？ありがとう」

「いえいえ…」

そう言い立ち上がるメルランディア。

「…どうしました？メルランディアさん」

「いえ…その…姉のことを考えてまして」

「メルランディアさんの事？」

「ええ、ちゃんと避難してるか、とか、この混乱に乗じてガンストラッ

シユを持って戦いに行つてないか、とか…」

「シーナさん、見た目によらず凄く行動早いな」

「元々そんなところ有りましたし。じゃ無いとーあつ、これ私が言っていたって言わないでくださいね?」

「しーですよ、と言うディナにこくこくとうなづき、

「言わない言わない」

と言った。

「…その…脳筋じゃ無いとーゲツテムハルトさんと付き合う事ないじゃ無いですか」

「ああ…」

そこでふと2人ともファイターだったなと思ひ出す。片方は元だが。

「でしょ?ーいやね?ゲツテムハルトさんも良い人なのは分かりますよ、あの顔で。ー知ってますか?ゲツテムハルトさん、最近近くの家に住んでいる子供達にお菓子あげているんですよ☒」

そう言うディアの話の聞いてくるとー顔にタトウーを入れて会えばゼノさんと戦っているゲツテムハルトさんの印象が壊れていく。

「最初に会った時みたく新人アークスにお小遣いあげたり…いやね?姉とゲツテムハルトさんに合った事を考えれば、それがアークスの力になるって言うのは…少し分かります、けど!」

「違う方法…合ったんじゃないんですかねえ…そう思いませんか?」

「…それは…その…うん、まあ、ゲツテムハルトさんのやりたい様にやれば良いんじゃない?」

「…そう言われればそうなんですけど…なんか最近ゼノさんと戦うのも良いがもつと強い奴と闘いたいとかなんとか言ってる…」

うわあ、戦闘狂怖い。

「ユウナさんも気を付けて下さいね？何かあれば私とシーナ姉えが行くので」

「あははは…」

苦笑いしながら本日株を爆下げしたゲツテムハルトさんを警戒しようとして今更になって薄々考える。

そもそもお前強くなるからいつか決闘しような！とか言われてるけどな！

そんな話を聞きながらさらに奥へ向かう。ーあつ、ドックファイトしていた機体が落とされた。あれパイロットは生きているのだろうか？

そんなことを考えながらまた出てきたダーカーに照準を合わせてトリガーを引いた。

96 話目

「……ユウナさん！前のカルターゴ！コアは頭の後ろ！」

ある程度進むと複数のカルターゴが仮シエルターにレーザーで攻撃している場面に遭遇。

シエルター付近にある無人砲台……セントリーガンは既に沈黙して大穴空いている状態だ。

ステブのモードをフルオートにしてスタン。G……中に少量のフォトンスファイアが入っていて、それをダーカーに投げると一時的に動かなくなる……ソレを投げる。……が失敗して手前に落ちる。

「ユウナさん……っただけ生きているセントリーガンが有ります！それを再起動させるので……少し頑張ってください！」

スタン。Gが手前に落ちるのと同時にメルランディアがそう言い放つ。

はい！と言いながらも心の中では頑張れと言われても、と思いなながらライフルをダーカーに撃ちまくる。

バシユン、と言う音と共にスタン。Gが爆発したが遠い為カルターゴは動かなくなることは無い。

あのスタンが当たればもっと楽だったのにな。そんな思いを頭の隅に追いやり、狙いを付けずにトリガーを引いた。

薬莖が飛び散り、弾頭がカルターゴに当たる。

……が、しかし、貫通しているようだ。コアには当たって居ない。

途中で止まっているのだろうか？仕方なく脆いと思われる脚を狙う。

シエルターを狙って居たカルターゴの内の数体が体を回して俺の方を見る。数体はそのまま全身、頭部の上に赤黒い円ができる。

「ユウナさん！レーザーです！注意ー！こっちにも☒」

手持ちの弾じゃカルターゴの頭を覆う黒い羽らしき物を貫通出来ない。

かと言って回り込もうにも周りに4体ほど集まって居て回り込めないし、多分回り込もうにも向こうのほうが多脚だから旋回早いに決まっている。

仕方が無い。

戦闘服に付いているグレネード、残り4個しか無いスタン・Gを手につ。

幸いピンが抜けて自爆したところで人には何も害は無い。そう意味では安全では有る。

ピンを左手で抜きそれをダーカー――カルターゴが居るところに投げる。

手前に転がりそこで煙が上がる。

「ミスったな、もう一個！」

もう一個を戦闘服から外して同じくピンを抜き投げる。

今度こそフォトンスモークがカルターゴを包み一時的に動かなく

なる。

その隙に走って近付きカルターゴの背後——脚部に乗る。

頭の後ろに有る赤い弱点で有るコアに銃身で狙いをつけて——トリガーを引く。

エジエクシヨンポルトが後ろに後退して空薬莖を外に弾き出し、薬莖から分離した弾頭が銃身——バレルを通り外に出る。

マズルから飛び出てコアに着弾——コアに穴が開く。

コア内に入った弾丸が自壊、弾頭内に入っている少量のフォトンが飛散し、ダーカー因子を中和する。

中和されダーカー因子が無くなったカルターゴはその場で倒れ消える。

他に居る四体も混乱と言うか、まあ、動かなくなったカルターゴに對し同じくコアを撃ち抜く。

「よし——ディアさんは☒」

「終わりましたよ」

「え」

そう言う声が帰ってきたので急いで振り返ると——メイトを飲んでいるメルランディアが。

余りの余裕っぷりに援護入れても良いんじゃないかと考えてしま
う。

「…その、助けてくれても…」

そしてその考えが声に出ってしまった。

「いえ。実は再起動させるのに手間取ってしまいました。こう言うのってボタンを押せば再起動するんじゃない？」

そう言いメルランディアは無人銃座を叩く。

プシュー、と言う音と共にバチバチツと音がして完全に沈黙した。

「…あれ？おかしいですね？」

そう言い再度軽く叩くがー反応なし。

「どうしよう、こう言うのってアークスが払うんだよね？私じゃ無いよね☒」

そう言い動かないターレットを見渡すメルランディア。と言うかテンパるの始めて見たな。

「…その、何かあったら証言するよ」

ありがとお、と言い抱きついてくるメルランディア。この人ってこんな人懐っこかったっけ？

—————

私が船から降りると目の前にビーストーユウナさんが立っていた。

どうやらライフルを弄っているらしい。

そもそも私一人ではーフォース一人ではとてもじゃないがやっていけない。ユウナさんに声をかけてみようかしら。

そう思い私はユウナさんに声をかける。

「えと…あのお…んっ、ユウナさんも同じエリアですか？」

「その声は、メルランディアさんか？」

そう言い振り向く彼女ーゲツテムハルトさんに認められそうな彼女。シーナ姉えに、まさか彼女と戦う気？と何度か言われて目線を逸らしているのを何度も見ている。そんな彼女。

確かに、私達と同じくーいえ、少し違うかな？

耳は申し訳程度に尖っているし、それはヒューマンには無い。他にも頭の上に付いているミミヤ腰、と言うか位置的にはお尻の上かな？そこから生えている尻尾。

確かに見れば見るほどビーストね、と再確認する。

それと同時にビーストはその特性上近接職に多くいる、と言うか近接職が殆どらしいが、なんで彼女はレンジャーなんかを？と疑問に思った。

「ええ、緊急指令ですから。私もアークスなので」

そんな事を考えて居たお陰で変な言葉が出てしまう。

ふとユウナさんの後ろを見るとー尻尾を振っている。ユウナさんも一人じゃ怖い、と言うか落ち着かなかったのだろうか？

そう言えばレンジャーにも近距離、中距離、遠距離用の武器があると聞く。この様子だとユウナさんは遠距離なのだろうか。詰められたらダメージを食らう、という意味で。

「ーそうですね、ユウナさんが良ければ途中までで良いのでパーティー組みませんか？タリス1人だとキツイので」

「ーそれにゲツテムハルトさんも今は居ませんし」

「ここで今は一人、と言うこととパーティーを組みたい事を言う。」

…タリス云々は要らなかつたかしら。

「良いですよ。俺もライフルだけじゃキツイと感じたので」

「そう言い二つ返事で了承する彼女。やはり遠距離二人は不味いかな？」

「ええ、それでは行きましようか」

「…ええ、後ろはお願いしますね」

「そう言うとユウナさんが上を見始めた。私も同じように上を見るとー上空で飛行機が戦っている。」

「ユウナさん、上ばかり見ていると拗れますよ。前を見ましようね？」

「ユウナさんに注意をして前に進みましよう？」と言う。

「あ、う、はい。行きましよう」

「ー」

「なんかさつきから見られているような気が…え？そんな俺おかしい？やっぱり男の服は駄目なのか？」

「そんな事を思いながらも攻撃を受けていたシエルターをメルランディアさんが開ける。」

「…おかしいですね…何故か知りませんが開きませんね」

因みにセントリーは完全に沈黙、重力に従い下に銃身を下ろしている。

動かないと言われ、メルランディアが動かしている端末を覗き込むと其処には『Low Power』と出ている。

「電力が無いんでしょうか？」

「電力、ですか…ゾンデ系テクニク使ってみます？」

そう言いメルランディアがタリスを取り出す。此処でそんな物使って俺たちも感電しない☒

「いや、そもそもゾンデ系を使った所でどうやってこれに電力が…？」
周囲に避雷針的なものも無いし。

「…そうでしたね。…どうしましょう？」

さて、どうしようか。

そんな事を体感2分くらい考えているとシエルターの扉が開く。

「ーおお☒アークスの人達か☒助かった！」

「アークスか！よかった…」

出て来たのは沢山のヒューマンー中には子供もいる。

それを見たメルランディアが咄嗟に俺の前に出て話を始める。

「皆さん何処もおかしい所ないですね？ーはい、皆さんこのテレパイクをくぐって下さい。直属の避難施設に繋がってますから」

中に居た避難民を少し見ると、すぐにテレパイプを起動。避難民を其処には向かわせる。

「見て見ておかーさん！ミミがあるよー！」

何人かがテレパイプに入り、テレパイプに入って行く避難民を見つ、ライフルを上に向けて周囲を警戒しながら見ていると、列を離れ子供が走って来た。

「ごらっ！そんなー指を刺さない！しませんね」

「ほらほら！しっぱもふもふ！」

そんな母親らしき人の話を聞かずに、今度は俺の尻尾を触っている。

「ああ×おい！」

正直変な感じがするからやめて欲しいものだ、と触られながら考えていたら咄嗟に声が出してしまった。

「ごらっ！しません、しません！」

列から離れて子供達を捕まえてひたすら俺に謝る母親。そんな事はいいいから早くテレパイプを潜って安全な所に避難してくれと言った。

「ー凄まじいダーカーの数ですね…私もこれまで生きてきましたが、見た事ない量です」

全員がテレパイプを潜り、二人で空になったシエルターを確認してそのまま奥に進んで行く。

因みに何故あんなにタイミングよく開いた原因が複数のカメラに

よる中からの開放だった。俺とメルランディアを中の避難民が確認して、かつ周囲の敵が消えたのを見計らって開けたらしい。

更に奥に進み、今度はダーカーとカルターゴの他にチョウチンアンコウみたいな奴と空に飛んでいるダーカーが集まっているところに会ってしまった。

視認できる距離まで近づき、また直ぐにでも撤退出来るように物陰に隠れながら前のダーカー群を見る。

それを見たメルランディアが話した。

「こんな数、見たことない、と。」

「一体何処からこれ程の数が湧いてくるのか…正直分かりません」

「そもそもこんな数俺とメルランディアで捌ききれぬのか、と思う。」

「それこそ無から現れているんでしょ？現に此処に侵入されているし」

「そもそもダーカーってどこから来るのよ？えっ？無から？」

「ええ。にしてもこの数は異常です。それにオラクル船団の被害も甚大…アークシップをたかが三隻とは言え…復元も大変でしょう」

「そんなノリで適当に言ったら肯定された。えっ本当？」

「確か30隻くらい居るんだっけか？」

「いえ、48隻です。その内の3隻とは言え…死んでしまった命を戻すのにどれ程かかる事やら」

「そこでメルランディアは言葉を詰まらせ考えているように見えた。」

と言うか多分考えている。

「…ユウナさん、私は時折ーいえ、ダーカーと戦い終わった後分からなくなるんです。ダーカーを追い詰めているのか、私達オラクル船団が追い詰められているのか」

「…メルランディアさん、人っていうのは同じ敵と戦っているとそれが良いことなのか悪いことなのか分からなくなる。そういう時こそ最初の目的を思い出すチャンスでは？」

「…と言うと？」

「えつと…メルランディアさんのー」

「ディアで良いですって」

何度言つてもディアで呼んでくれないんですか？て言われ、すいません、と答える。

「ーディアさんの夢と言うか、目的と言うか…それは何です？」

「…そうですね、今の所はシーナ姉えとゲツテムハルトさんが仲良く暮らしていければいいかな、と」

それを聞いてそれ自分の夢じゃなくね？て言いたくなつたがそれを飲み込む。

「だったらダーカーなんて自分とゲツテムハルトさんが死なないように適当にやって生き残れば良いんですよ。正直な話、俺たちが考えたところで何も変わりはありませんからね」

「…確かにそうかもしれない。ですけど、根を断たなければ負けてしまう。もし、もしも。負けてしまったら…私達は一体どうなるのでしょうか？」

流石にそれ以上は言えなかった。

「…その時は両目を瞑りましょうや」

「そんな無責任な」

「そんな事言ったらまだ負けてないのに負けたって事で話を進めるのは？」

「……」

「生き残れば勝ちなんだよ。多分」

結局、生き残れば勝ちってゲームでも言うしね？

「おお、ちょうど良いところに」

あの後ひたすらダーカーのコアを見つけてはそこに弾を撃って、ダーカーから攻撃食らって痛い思いついて、コアを狙ってーそれらを数十回程やったらダーカーが消えていた。

メルランディアがレスタとシフタ、デバインドを掛けてくれて地味に助かった。

と言うかあんなに攻撃食らったのにこの戦闘服破れてすらしない。過去の戦闘服は何だったのだろうか。

そんな事を考えながら先に進んでいると背後から声を掛けられた。

「其処の二人、アークスであろう？少し手伝って貰えるか？」

後ろを振り向くとー白い身体フルキャストがホバー移動で接近しながら話を掛けて来た。

誰だこのお爺さんみたいな喋り方のフルキャストは、と考えていたら隣のメルランディアが驚いたような口ぶりで話す。

「――その純白のポディは――六芒均衡の一、レギアスさん」
六芒均衡？なんか偉い人なのだろうか？いや、肩書き的に偉い人なのだろう。…そっぴやどつかで聞いたような聞いてない様な…。

多分聞いてないな。

と言うか純白って…フルキャストは純白禁止かって言うの。――そもそもフルキャスト見るのこれで三人目なんだが。あれ？意外と多い？

「如何にも。私を知っているなら話は速いな」

すいません、俺は知らないです。なんて言える筈も無く。言うタイミングでも無いが。

「ナベリウスに行っているの聞いていたのですが…どうしてこのような場所に？」

兎も角、なんでそんな偉い人がこんな所に、と独りでに考えていたら二人で会話が進んでいたらしい。

と言うかメルランディアさんそんな事まで掴んでいたんですね。と言うか最初に聞くのそれ？

「ははっ、よく知っているな。だが私もアークス。本拠の危機と有れば馳せ参じるのは同然であろう？」

「――とは言え。優秀なアークス諸君の活躍によって逃げ遅れた一般市民の救出には成功。ダーカーも駆逐されつつある。――完全に出遅れてしまったよ」

「ー分かりました。それで手伝って欲しい事とは？」
えっ？何？やる気なの？俺もう帰りたいんだけど。」

「うむ、何のことはない。一般市民の避難経路の確保をして欲しいのだ」

「自分の工房から離れたくないと言うキャストも居るものでな。手を焼いているのだ」

「そう言い頭に手を当てる目の前のフルキャストもといレギアスさん、だったか。」

「何、二人共とは言わん。どちらか一人手を貸して欲しい」

「…それでしたら私が手伝います。実力的にも妥当でしょう」

「そこまで聞いてそんな後方任務ほど俺みたいな初心者向けなんじゃ、と喉まで出た言葉を飲み込む。何？もしかしてメルランディアも楽しみたいの？俺もしたいんだけど。」

「ユウナさんはこのまま前進してダーカーの撃退をお願いします」

「…という事、だそうだ。最近の女性アークスは決断が早いな」

「…さあ、急ぎましょう。手分けをすれば早く終わる筈です！」

「やれやれ、女性に先導されるとは…私もいよいよ年を実感するな…フルメンテナンスはしたものだ…それでは失礼する」

「そういうと目の前のフルキャストとメルランディアが、二人で進んできた道を引き返していった。」

「…俺一度も声出さなかつたよ…」

二人の姿が消えるのを確認した後に呟く。完全に空気じゃないか、

と。

そう言えばさつき言っていた工房から離れたくないフルキャストが居るって話。

もしかしてジグさんかもな。

はっはっはっ、と内心笑ながらも一人になった事で怖くなりながら先に進むことにする。

さつきまで隣にいたメルランディアが既にもう懐かしい。

…やっぱ一人は怖いわ。ソロはダメだな。

かと言ってパーティ組んでくれる人なんて…アフィンくらいしか居ないや。メニューを開きアフィンを調べると…こんな事になっているのにリリーパにいやがる。

やだなあ、怖いなあ、ダーカーの攻撃受けたく無いなあ、と思いなからライフルを構えながら更に奥に進むことにした。

97 話目

「ああ” ああ！づがれだああ」

そう言いマイルームに戻りベッドに倒れる。あの後複数のドライバーと交戦、レーザーで焼かれて変な塊を食らって全部倒した後ゲロ吐いたりしたけど元気です。多分。

リビングにある作業台にステブウエポンをマガジンを取ってコックングレバーを引いて初弾を抜く。抜いた後それらを作業台に置いて自室のベッドに向かう。

因みにテーブルにはフェリアさんの所に行つて来ます、と手紙が置いてあった。

「疲れた…もう寝たいー」

下着姿になりベッドに横になり寝ようでした時。インターホンが鳴る。

「…はあい、どちら様ですかあ？」

『こちらH&T運送会社ですがユウナさん宛にお荷物が有ります』

「荷物？どちらから？」

『えつと…ジグさん、からですね。ご確認をお願いします』

「ええ、少し待って」

そう言い急いで服をーさつきまで来ていた戦闘服ーはダメだ。

今洗ってるし。

仕方なくアークスの研修服を着て扉を開ける。

「はい。こちらが物になりますね」

「ええーえつと…」

「ああ、ココですよ。ココ」

そう言われて配達員は紙の一部を示すがー書けない。

そもそもアークス言語書けない。確か英語を崩した外見だったよな？

取り敢えず超適当にソレ風に書こうかと考えていたら配達員が口を開く。

「あれ？おかしいですね、ボールペンが使えないです」

まだ中身は入っているはずなんですけどねえ、と言いボールペンを振る。

チャンスと思い俺はすかさず言った。

「ああ☒なら私の部屋から持って来ますよ。少し待っていて下さい」

そう言い、部屋の中に急いで戻りポスを使い自分の名前の大まかな形を暗記、暗記した後にはボールペンを持っていく。

「待たせましたーこんな感じですか？」

「はい。それではこちらが荷物です」

「あ、どうも」

そう言い渡して帰っていく配達員。

寝るはずが完全に目が覚めて起きてしまい、また端末からファッションの項目を選び、ホルタートップパンツと言う服を着る。そもそもスカートが嫌だ。足がすうすうして違和感がヤバイ。そんなんだつたら下着に近いけどまだパンツのコレにするわ。

そう言い洗っている戦闘服を調べる。

俺が来ている戦闘服は、ある機関が開発した戦闘服、の更に上に男用の戦闘服を煽っている。

だがこの戦闘服を着ているとなんか周囲から見られている気がしてならない。

なんでも大気、と言うか何処にでもあるフォトンを吸収しやすくする為にアークスの女性陣は露出が多いらしいが…あいにく俺は…中身は男だ。露出は避けたい。

と言うか女の子がこんな戦闘服を着ちゃいけないのかよ？

そんな事を考えながら戦闘服の情報を消して、端末を閉じて、荷物をリビングのテーブルに置きナイフで開ける。

「さて…中身は一体なんだか…」

十中八九少し前に言っていたライフルだと思いが…果たして。

ナイフでダンボールを破り中身を取り出す。中には梱包材に包まれたジェラルミンケースと…それを覆うように複数の小さなダンボールが入っている。

ナイフで中身を開けると…中にはマガジンが入っている。

なんだこれは？明らかに俺が今使っている武器より装弾数ないぞ

? と思いながらも残りのダンボールを開けてマガジン数を確認する。

「ー30個。何発入るか知らないが、まあ、300発くらいは撃てる
だろ」

そう言いテーブルにマガジンを並べてジェラルミンケースをダン
ボールから取り出す。ーその下にもまたダンボールが。

今度はなんだ? と思いながらそれを開けるとー。

「なんだこのー弾頭が薬莖の中に入っているのか?」

そのダンボールの中からはー沢山と弾薬が出て来た。しかもデ
カイ。

よく見ると紙もある。それを拾い読んでみるとー。

「ジグさんの特製ーてれ、てれす…テレスコープ? 弾、だって?」

紙にはそう書いてある。口径は12.7ミリと20ミリ。どちら
も撃てるらしい。

それちやんと雷管叩けるのか、とかちやんと薬莖外に排出できるの
か、とか撃った反動デカくない? とか弾速ちやんと出るのだろうか?
とか色々浮かんだが…。

紙の続きには試供品と言うか試作品として定期的に弾は送るから、
との事。それと口径が口径な為オートローダーは使えないとの事。

そこまで読んで紙をマガジンの下に挟み、本体であるジェラルミン
ケースを開ける。

中には白と青の色を施した――最初の頃に使っていたライフルに近い武器が出てきた――あれ？

「……これトリガーガード無いんだけど」

不良品じゃなからうか？と言いながらソレを取り出す。

よく見ると上にスコープも付いているのか。

そう言いながらそのライフルを取り出し手に持つ。

「……ストックもうちよい短ければな……」

そう呟きスコープを除く。

スコープに風速、距離などが出てきた。正直俺はそんな物より近距離用のサイトが欲しい。

見たところレールらしきものも無いし……どうなんだろうか？拡張性。

ジェラルミンケースの下の方に明らかに手作り感のある取説が。作製及び製造者、ジグって書いてあるし。

中身は次世代用のライフルのプロトタイプの試作らしい。試作と打つてあるが性能は充分実戦使用可能との事。

試験にて30メートル先のミクダに撃ったら穴を開けて過貫通したとの事。

因みに射手はリサさんとの事。――リサさんだから射抜けたんじゃない無いですかねこれ？

対ダーカー用に弾頭内に小口径弾では充填出来なかった量のフォトン詰め込んだ代物の為、弾自体の威力のお陰との事。

これに銃の外装、バレル、雷管等にフォトン等複数の素材で製造すればまだ性能は上がる、とまだ改造の余地があるとの事。

ジグさん曰くプロトレイ、と呼称しているらしい。今のアークスの戦力を鑑みて次世代用の武器の製造を考えている、と言うことも。

これに踏み切れたのもユウナがクラリツサを持ってきてくれたおかげだ、と書いてある。

取説を読み終えてテレビを付けて空のマガジンを全てテーブルに置く。

ソファの横に弾の入っている箱を置いてソファに座り、テーブルに置いてあるリモコンを使いテレビを付ける。

『ーであるからして、最近のアークスの損耗率がー』

手作業でマガジンに弾を込めていく。オートローダーは使えないし、手動の奴もそもそもこんな大口径ー歩兵が持つ武器で、と言う意味でだがーに対応したものが無い。と言うか俺が初めて触る訳だからそんな物あっても困る。ーどうせならジグさんに付けて欲しかった。

そう言いガシャ、ガシャつと弾を込めていく。

……おかしい。もう30発入れている筈。なんでまだ入る？

そう思いながらマガジンを見る。何の変哲のない只のマガジンだ。横は透明な素材が使われていて中の残弾が分かるようになってる。これ多分プラ？でも撃った時のガスが来るかもしれないし…なんだろう？

そんな事を考えながらガシャガシャ入れているとまたしてもブザーが。

「はあい、いまでまあす」

そう言いドアを開けるとーそこにはジグさんが。

『お主に渡すものを忘れてーなんじゃその服装は？』

「えっ？」

そう言われて自分の服装を見るとーそうだ、ホルターパンツのまんまじゃ無いか。

『いくらマイルームとは言え服は着とかんとな』

「……はい」

『お主、女性なのだからそこはきやー！とか言わんのか？』

「騒いでも見られた事は変わりませんし」

『そうじゃが…そうじゃった。コレを渡しにきたんじゃよ』

そう言いジグさんが四角い箱をナノトランサーから出した。

『わしがプロトレイ用に作ったオートローダーじゃ。上の空いているスペースに弾を入れて下に空のマガジンをセットすれば後は勝手に入れてくれるぞ』

「…ジグさん、ジグさんの腕を見誤る訳じゃ無いんですけど…アレ本当に大丈夫なんですか？ライフルクラスに20ミリですよ？」

『大丈夫じゃよ。安心せい。弾の反作用を無くす、と迄は行かないが軽減する方法をテクニクと技術を合わせて出来たのでな。ソレを

組み込んである。7ミリクラスの反動までには抑えたぞ』

「それが本当なら凄いですけど…」

『因みにあの20ミリ。弾頭の中身がフォトンで作ってあるから生き物、ダーカーの両方にも効くぞ』

それは貴方が書いた取説にも載ってましたよ、と言おうとしたがその次の言葉で言うのをやめる。

『それとな。マガジンには100発入るようになってるから。弾込めるのも大変じゃろ。そこでさっきのリローダーじゃ』

と親指を立てながら言う。

「ひゃ、100×そんなにつ×」

『おう。一タリロードするのも大変じゃろ。フォトナーの技術を再構成して作った空間圧縮装置じゃ。まだ甘くてナノトランサークラスに到底及ばんがな。それにブレットーいや、弾頭じゃな。それを撃つ為の火薬も新しいのに変えてある。存分に扱ってくれ』

そう言いジグさんは帰って行った。

「100って…分隊支援火器かなにか？」

そう言いもう一度ライフフループロトレイを見る。

はあ、銃を撃ちたいとは前のー男の時から思っていたけどさあ。

そろそろ肩が痛くなってきたよ。

そう思いながらジグさんから渡された箱を開けて中身を作業台の上に置く。

上の部分に弾をばら撒いて下に込めている途中のマガジンをセツト。

すると勝手にマガジンの挿入口に弾が入っていく。

こりや楽だな、と言いつのままキッチンに。

「マトイい？居るかあ？」

そう言いマトイの部屋をノックするが…応答なし。入るぞ、と言いつ中に入るとー居なかった。

デュケットに場所を聞こうにもそもそもあの襲撃事件の後だ。管制官はやる事が多いのだろう。

となるとどうするか、と悩んでいるとアフィンからメールが。

内容は…えっ？マトイがメディカルルームで負傷者の手当てをしていただつて？

そもそも医療免許が無い人が治療をして良いのだろうか？

疑問に思った俺はアフィンに連絡、即出た。

「アフィン、どう言う事だ？」

『おお、相棒、俺が聞きたいよ。記憶が無いとかでメディカルルームにかかっていたはずじゃなかったのかよ☒』

「…はっ、もしや襲撃事件の時にマトイが船団内でレスタばら撒いたから?」

『は?だって船団内はリミッター掛かっているはずじゃ…一部の所以外』

「そんな事言われてもーあ、メールーフェリアさんから☒」

『まじっ☒』

メールを開き中の内容を確認する。

「内容はーマトイさんをメディカルルームにて検査しています…?あれ?」

『えっ?』

「アフィン、どう言う事だ?こっちには検査って書いてあるぞ」

『…もしかしたら…見間違え、かも…でもなあ…』

「おま、ええ…」

『しょうがないじゃん!マトイがナース服着てたんだし!ほらっ』

そう言い即座に送られてくる写真ーマトイがナース服を着ている。

「…きっちり体のライン出てるな」

心は男なのでその写真を保存しておこう。

『それは相棒の服もそうでは?』

「んじゃ男用の戦闘服寄せや」

『だから作ってる会社が女嫌いデーえ? 買い物☒ごめん相棒、買い物に行ってくるわ』

その声と同時に弟さんの声と母親の声が聞こえてくる。変な所で集音機能優秀だな。

「分かった。行ってらっしゃい」

それじゃあ、と言い通信を切る。リローダーの方を見ると装填が終わったらしい。

下部に空のマガジンをセットして弾を追加。また機械が弾を込めていく。

「……ん?」

よく見るとリローダーの入っていた箱の下に何かが入っている。

その何かを手に取り目の前に持ってくるトー。

「…ハイダー? でもこの穴…マズルブレーキ?」

なんでライフルなんかに? と一瞬間に思ったが、同時に視界に入ったリローダーを見て答えが出る。

そりやそうだよな。フルオート可能なライフルで口径20ミリだもんな、と。

そのマズルブレーキをライフルに装着。空のマガジンをセットし

てグリップの下部分を持つ。そう言やトリガーガード無いぞって言うの忘れたなあ…。

そう思いながら構える。

うーん、やっぱり固定ストックは嫌だな、と言うか嫌いだな。と。

そもそもなんで固定ストックじゃなくて、四段階から五段階位に稼働するストックークレーンストックだったか？アレみたいな奴じゃダメか？と思つたが、クレーンストックだと反動受けきれないのかな、とも。

もつとも試作段階の物だから何とも言えないが。後でジグさんに言ってみるか。

そう考えながらソファに座りテレビのリモコンを弄り始めた。

リローダーが静かに弾込めしている。この静かさなら寝ている時にでもやって貰つても良いかな？

リモコンのボタンをぽちぽち押すがーニュースしかやっていない。

やっているニュースはーアークスの損耗率、食料自給率ーは三倍から四倍半らしい。他にはアークスはの入隊キャンペーンとか、メイト系を作っている会社の募集とか、アークスの戦闘艦の人員募集とか。

後はゲーム系のコマースャルか。

そう言やりバースエンジニアリングに成功したあの機体ー量産どうたらってどうなったのだろうか？後で見に行くーって一般のアークスが行っても門前払いされるだけか。

そう思いリモコンで更に変える。

『ーええ、反ビースト組織であるB・A・V・E・L・S、バベルズがダーカー襲撃に便乗し、複数のアークスに所属しているビーストに被害を加えているとの情報が入りました』

リモコンを操作していたら何時ものニュース番組ーニュースオラクルに止まった。

『またですか。それで被害の程は？』

『ええフマルさん。攻撃ーと言っても明確なライフルやソードでの攻撃では有りませんが、どうやら助けに入った民間人から攻撃を受けたそうです』

『受けたって…ビースト側に何か有ったわけでは無くて？』

『ええ、そのビーストに付いていた女性ヒューマンとセミキャストの証言、マグのデータからも常軌を逸した行為は何も無かったとの事』

『またバベルズが先制ですか…このダーカー襲撃で忙しい時に一体何を』

『フラビンさんは何故この組織が生まれたをー』

そのニュースを聞いていたらインターホンが鳴る。

はい、と言おうとした時、テレビの方に目が行く。もしこれがバベルズの連中だったら？

新品のプロトレイに100発入ったマガジンを装填、ボルトキヤッチボタンを押して初弾を装填する。

扉に付いている普段は使わないモニターを付けて玄関前を確認ー。

『あれ？ユウナさんまだ帰ってきてないのかな？』

帽子を被りメガネを掛けたデュケットだった。なんだビックリした、と眩き扉を開ける。

「ただいーユウナさん☒なんでライフルなんか☒」

「お帰り。いや、その…今ニュースでバベルズの特集があつて…」

そう言いリビングまで歩きライフルを作業台の上に置く。コツキングレバーは畳まれてあるからそれを引いて初弾を抜く。

あつ、マガジン抜かないと意味ないや。

マガジンを抜いてもう一度引く。弾頭と薬莖が一体となった弾をもう一度マガジンに込める。どうせ2発だけだからね。

「ああ、バベルズですか…ユウナさんも気を付けてくださいね。ーここだけの話、女性のビーストには結構エグい事やってる、との事までアークスは掴んでいるので」

デュケットがソファに座り俺もその横ーーつ開けて横に座る。

「ひっ☒や、やめてくれよお、そんなジョーダン」

そんな危ねえ組織なのか☒カルテルかよ☒ま、ビーストでも女だけーあつ、今の俺女の上にビーストだったわ。余りの身近にある怖さに一瞬忘れてたわ。

「冗談だったら良かったんですがねえ…余りにもアレなんでバベルズに対しては鎮圧モードでは無く排除方針まで上に上がっている位ですからね」

「…やだなあ…」

「まつ、ユウナさんなら大丈夫ですよ。ー多分、いやでもダメかなあ」

おい！声聞こえてるから！ミミと耳が拾ってるから！

「…そんな小声で言われても聞こえてるんだよ…」

「あつ、ごめんなさい！大丈夫よ！大丈夫！ねっ？」

そんな今更取り繕ったように言われても余計に怖いんだよなあ…。

「大丈夫よ。只でさえ少ないって言われているニューマン女性より少ない女の子のビーストなんだから上が守ってくれるに決まってるよ」

バベルズは結構アークスにも食い込んでいるらしいんですがそれは。

98 話目

「…あちい…」

そう言い借りたホバーバイクのエアブレーキ兼ランディングアームを下ろし地上に降りる。

ライダーペダルから足を離して地上に足を付けてライフルを右手に持つ。

『そう言わないでくださいよ。私も暑くなつてしまいますから』

それにしてもほんつと、暑そうですねえそっち。あつ、ユウナさんの尻尾も全然振つてない。と通信越しに言うデュケット。手には勿論冷たい飲み物が。

「デュケットは空調の効いた場所からの通信だろうに…ッ」

『そんな事言うとな来の業務ロー管制室に戻りますよ？無理言つて今日の管制官ラミアさんに代わってもらったんですからね』

それにそのホバーバイク、貸してあげたんですからね、と言う。

「ごめんって。ローったく、なんで俺がこんな事を…」

そう言い額に汗が垂れた。それを銃を持っていない手で拭い、カラツと晴れている空を見る。今いる場所は灼熱のクソあちい惑星、リリーパ。ローの砂漠地帯と地下坑道の境目。そう、今俺はリリーパにいる。

何故こんなクソあちい惑星にいるのか。

その理由は俺が今ナノトランサーから出したこの紙ー手紙が原因である。取り敢えず手紙を持った手を上に上げて、一体何処の大馬鹿野郎だ俺をこんな所に呼び出したのは、と思いながらナノトランサーに再度入れてこのライフループロトレイを両手でしつかりと保持してー手紙に付いていた座標点を確認しながら、デュケットから借りたバイクに何も無いかを確認する。

今から2日前。マイルームにてマトイとデュケット。それと俺の3人で料理をしていた時のことだ。

突然ブザーと言うかインターホンと言うか。それが鳴り、少し前にデュケットにやったようにライフル構え外を見る為のモニターを見る。

モニターに映ったモノは何もなくただ廊下を映す。

イタズラか?と思いつながら玄関に向かうと玄関のポストに紙が入っていた。それを手に取りリビングに向かい、デュケットとマトイが見守る中ソレを開ける。

そこには2日後、惑星リリーパのエリアJ0245、xG056で待つ、とだけ書かれていた。

二日間の間が届いたテレスコープ弾を全てマガジンに詰め込みマガジン用のナノトランサーに放り込む。

その間デュケットは嫌な予感がします、と言いつつ先程言っていた通りに管制官を代わってもらい、それと場所が場所なので、と言いつつバイクを圧縮状態で借りた。

その時これ、テレビでやっていたホバーバイクかよ☒と興奮したが、どうやらコレは結構前のモデルらしく、圧縮状態には対応しているものの、その他の性能は最新型には遥かに劣るそうだ。

それでも徒歩で歩くよりはよっぽど良い、という事で有り難く拝借した。

一方マトイは3日おきにフェリアさんの所に行っているらしい。ある意味変わってないな。と言うかマトイだけ関係無いな。そもそもアークスですら無いし。

そう言い、周辺に何も無いことを確認するとライフルをシートに置いて背後のナノトランサーからサンドイッチーマトイがこれ、現地で食べてね、と渡してきた保存用の紙で巻かれた冷たいサンドイッチを手に取る。

中身はベーコン、ハム、レタスにトマト、マヨネーズと普遍的だが…。

『マトイさん、いくらなんでも作りすぎですよ。流石にこの量ー半分サンドイッチを15個は…あつ、シート汚さないでよね?』

そう、15個ー上下パン合わせて30枚である。パーティーでも開くつもりなのだろうか?

「はむっ…分かってるよ。まあ作ってくれたから有り難く食べるけど…なあ?」

『そう言うウウナさんも食べますけどね。それでも食べれて4個から6個くらいですか?』

その栄養は全部胸に行ってるのでしょうか。羨ましい。と聞こえたが、まあ、聞こえなかったことにする。

この体になって最初の内は胸柔らか見え、となったものの次第になんか、こう…変な気持ちになり辞めた。因みにブラジャーは厚いので

先っぽが擦れて、そう言う気分になるような事はないので、心配する必要など無い。

「まっ、ナノトランサーの中に放り込んでおけば消費期限を気にしないって言うのは良いよな」

『事実上、ですけどね。それ』

「まっ、前の冷蔵庫よりは性能は段違いさ」

冷蔵庫とあるがこれもある種のナノトランサーらしく、俺たちアークスが使う奴より性能が落とされているらしい。そうしないと物が売れなくて市場が回らないと言うのと、冷凍冷蔵等冷蔵庫に必要なソリースを付けたらナノトランサー自体の性能が落ちたとの事。

『…はあ…取り敢えずマトイさんは食べ物に関しては自分を基準で作らないようにって言わないと…』

「マトイ曰く『食べなくちゃ生きていけないよっ!』だからな」

『ほっぺにケチャップやマヨネーズ、玉ねぎとか付けながら言われると、妙に説得力ありますもんねえ…』

「…えっ? つまみ食いしてたの? だって出掛ける時5個食べてたぞ」
「そう言い出掛ける時にコレを渡され、これ持って行って食べてね、と言いながら開いた手にサンドイッチを2つ持っていた記憶が出てくる。」

『えっ❑』

「……なあ、デユケット。今度3人で買い物に行かないか?」

『…もしかしてマトイさんの食べる量がおかしいって事を分からせる為?』

「出来れば、だが」

『…まあ、それ失敗しませんかそれ』

「…うん…ま、マトイの食べるなくちや生きていけないって言うのも分かるが」

そもそも食べなくちや人は生きていけないしな。料理も好きと言えは好きだし。

ユウナさんの場合はただ美味しいもの食べたいだけでしょ?と言われバレちゃあしようがねえな。と言り返す。

『まっ、無事に帰って来てくださいね。私とマトイさんは待ってますから』

「…まてまてまて。まだ所定の場所には遠いから。もう少し掛かるから!」

『ふふっ、冗談ですよ。あっ、でも私とマトイさんって言うのは本心ですからね』

「はあ、なんでこんな心配されるんだか」

『ユウナさんはマトイさんに救われてるんだから、命を大事にしないとね?』

はいはい、と言いナノトランサーからオレンジジュースを取り出しサンドイッチと共に食べる。

「ふう…(づ)ちそうさま。んじやまた行くわ」

『はいはい。W・Pは任せてね。地形データから大まかなW・Pを割り出して道案内するから』

「頼むよ」

そう言い保存用の紙をホバーバイクに付いている小型ゴミ箱に吸わせて跨がる。

ハンドルの左手側のグリップを奥に握る。

するとゆっくりとホバーバイクが上昇してランディングアームとそれを兼用するエアブレーキが格納される。

両足のラダーを動かして背部に付いているパドルの動きを見る。オーケー。

次にハンドルを左右に動かし、さつきより激しく動くのとパカ、パカと外装の一部が飛び出てくる。

「…これよく見たらスポイラーって奴か？」

ふと頭の中でエレボンと言うのも浮かんだがどっちが合っているか分からないので今はスポイラーにしておこうと思う。

それを隅に置いてもう一度スポイラーを見るとオービスポイラー上の方が大きく出ている。上の方を大きくして空力ブレーキとしてパドルと併合して曲がるのだろうか？

そんな事を思いながらも操縦に集中する為それを四隅に追いやる。右側のグリップをゆっくりと奥に握り速度を出す。

正面計器に速度と地形データが表示される。

『…えっと、ユウナさん、此処から6km行った先を方位31610を基点として、このまま方位01410の方向のまま進んで2時方向に曲がってくださいね』

「おーけーおーけー、その時になったらまた教えてくれ」

『りょーかい！分かってますよ。ーーそう言えばリリーパの砂漠地帯に野生のマンゴーが生えているらしいですよ？』

「取って来いつてか？変な病原菌が居たらどうする？」

『その時は没収して運がなかったって事で』

「無駄足じゃないか」

そう言い何も無い砂漠を結構な速度で走る。

『…あれ？この反応…アークスですかね？』

結構な距離を走りウェイポイントを5箇所くらいパスした時。デuketツトさんがそう通信で話す。

『でもこの人数おかしくない…？普通アークスって2人から4人でパーティ組むんじゃない？』

そう言いデuketツトの隣に座っているマトイーマンゴーの話の後数分にメデイカルルームから戻って来たらしい。

「まあ、俺みたいにソロの人も居るがな」

『…ちよつと待つてくださいね。パーティ照会します。ーあれ？船団を出た時は4人つてなってますね。少し接触してみませんか？』

「…時間の余裕はあるし…行くか。デuketツトさん、修正を」

『はい。割り込ませますねー方位2ー8ー5、9時と8時の間！』

「りよーかい。そつちに向かう」

『私の方からも呼び掛けます。ーこほん、此方アークス専属管制官、デuketツト。そちらのパーティーにー』

そう言いデuketツトからの通信が切れる。

『ーえつと…こほん。えつとデuketツトさんが相手している間私がオペレーターするね。そのまま真つ直ぐだよ』

通信が変わりマトイがオペレーターに。何で咳を？

『と言うかこの機械おつきいね。オペレーターさんはこんな大きな物でやってるのかな？』

『ー違うよマトイちゃん。本来だったら立体端末で充分なんだけど…今回はちよつと危ないって事で色々誤魔化してオペレーターしてるの』

『へえー。そんなに危ないんですか？』

『だって明らかにおかしいじゃ無い。今時紙でのやり取りなんて…』

そう言いパーティーの少ないアークスが居るといふ場所に向かう。

99 話目

「……見つけた。ー戦ってるな」

『此方もマグからの映像を受信しました。あれはー』

『なにあれ…おつきな機械だねえ』

『ー「トランマイザー」です！』

『ユウナさん、あの人数、基パーティでは不利です。迎撃又は撃退を！』

「俺1人行ったところで変わらんやろっ！」

そう言いホバーバイクから降りて圧縮状態にし、ナノトランサーに格納する。

100発入る20ミリライフルことプロトレイを手に取り畳まれているコッキングレバーを引いて、マガジンをセットしてボルトキヤッチボタンをリリース。エジエクシヨンポートが前にスライドしてチェンバーに初弾を入れる。

下部のランチヤーに互換性のある40ミリHE弾をセット。装甲を施されているトランマイザーには効果は薄いと思うが…仕方がない。これで効果が無かったらショットシエルーこつちじやデユフエンダーシエルだったか。それを使うしかない。

そう言い左手に付いているタリスもチェッカー問題無い。と言うか弄ってないから当然と言えば当然だが。

デバンドを掛けて次にシフタ、その後はナバータをセットしておく。

走って近付いて、ある程度近付いたらフルオートからセミオートに切り替えてスコープを覗く。

スコープに距離が表示される。距離が勝手に上がり、写っている距離の所で止まる。

これ勝手に距離を測って調整してくれるのか？

そう思いトリガーを引く。

ズドンっ、と言う音と共に反動がー来ない。

あれ？全然来ないぞ？

そう思ったらトランマイザーに弾着。顔らしきパーツがこつちを見る。

「援軍☒」

「リーダーが呼んで来たの☒」

「でもリーダーは居ないっばいよ☒」

「どうでも良い！さっき入った管制官の専属のアークスだろ！そのアークス！援護を！」

「は、はいー！」

そう言いライフルを両手に持って3人の近くに走っていく。

「ミサイル！」

「リックは回避！イザベルも同じく！」

そう言いトランマイザーに突っ込むハンター。手にはパルチザンが握られている。

サイトを覗きこみミサイルの撃ち落としを試す。ミサイルをサイト内に収めると倍率が下がり等倍程に。その代わりミサイルの進行方向が表示され、弾の速度から割り当てられた場所にリードマークが付く。

そこに向かってフルオートにして撃ち込む。

ズドドドドツ、と言う連続音と共に弾が撃たれてミサイルに命中。撃ち落とす。

「おお☒」

「流石！ビーストはちげえな！」

そう言いハンターはトランマイザーに変な技——フォトンアーツを使い攻撃し始める。

「あのトランマイザー、硬いよ！ゾンデ系が効かない☒」

「リック！未だ他にもテクニックはあるわ！」

「う、うん！イザベルさん！」

そう言い2人がテクニックを乱雑に放つ。

「そのビースト！名前は！」

トランマイザー から離れ俺の名前を聞きに来るヒューマンハンター。

「ゆ、ユウナです！」

「そうか。ユウナ。専属付きつて事は…まあ、任務でそれなりの点を得たって事だが…気にするな。ー俺が囷になる。その好きにリックとイザベルと協力して奴のコアーケツを叩け！」

そう言うが否や未だトランマイザー に突撃を敢行するハンター。

「ユウナさん、援護しますよ！」

「私も。ーこうして見ると本当に動物見たいね。その尻尾とミミ」

そう言いリックとイザベルが話し掛けてくる。

「えっと、話は後で！あのハンターを援護しましよ！」

「ねえリック？リーダーは何処に行ったと思う？」

「分からないよ。ボクも今を生きるので精一杯ー」

「ミサイル行ったぞ！回避！」

「ーきやあああ☒」

「ーッ！2人はハンターの援護を！一人で行きます！」

「あ、危ないよ！」

「そもそも私はそっちのパーティーに入っていないので！好きにやらせてもらいます！」

そう言い二人を一人でランマイザーの攻撃に耐えているハンターに付かせ一人でケツを取る動きに入る。

量腕部のナツクルで地面を耕しハンターに迫るランマイザー。

その隙に後ろに回り込みフルオートにして腰に抱えて撃つ。

キン、キン、キン、キンと2センチ代の穴が複数開く。

流石20ミリ。小口径とは格が違う。

そう言い弾の説明をする為にジグさんがくれたメールを思い出す。

弾の弾頭部分を長くする為に弾頭自体を薬莖内に入れて、かつそれで不足する火薬のパワーを特殊な火薬で従来以上のエネルギーを得て、それで発射する、とか。

お陰で弾自体は俺の今の手のサイズに収まるクラスである。

そう言い片手にライフルを持ちランマイザーに向かって走りスライディングを構えます。

そのままランマイザーの股下に滑りそこからライフルをフルオートで撃ちまくる。

元来から機会というか装甲持ちはああ言う攻撃を意図していない所は薄いことが多い。

打ち終わったらそのままスライディングを継続、ハンターの所へ向かう。

「やるなあ！よくもまあ、そんなよく訳のわからない敵の懐に潜れるな！」

股下から撃った弾が主要ブロックに当たったのかそのまま崩れて各部からオイルが流れ出る。

「…やった…？」

「待て！リック！ユウナさん、念の為撃ってもらっても？リックとイザベルはゾンデを！」

「了解！リックはゾンディールを。私はゾンデを放つわ」

そう言い二人が攻撃し始めるのと同時に俺もライフルのトリガーを引いた。

「いやあ…助かりました。あつ、自分ハンターのカナンって言います」
それからすぐして男ハンターが言う。後ろでは漏れたオイルから引火して爆発しているトランマイザーが。

「もう…カナンは只管前に行くんだから…そのくせ直そうよ…」

「リックに言われてもなあ…」

「そうだよカナン。私もそう思うわ。ー所でリーダーは？」

そう言やリーダーって言って居たが…男ハンターがリーダーじゃないのか？

『皆さん無事の様子ですね。カナンさんにリックさん、イザベルさん達のリーダーは無事発着場に撤退しました。増援を要請しているとのことですが…どうしますか?』

そんな事を思ったら良いタイミングでデュケットから通信が。内容はリーダーは既に発着場に撤退しているとの事。

「うーん、どうにか敵は倒せたし…俺たちも発着場に戻ろう。ユウナさん、テレプールあるか?」

「いや、無いな」

「そうか。濟まないな、無理言つて。2人は?」

「私無いなあ…」

そう言いイザベルがナノトランサーの内容物のリストを見るが…無いらしい。

「僕も…あつ!合った!」

リックの方も同じかと思つたが合つたようだ。

「よし。コレで帰れるな。俺たちは一度発着場に戻る。君も死ぬなよ」

そう言いリックがテレプールを使い3人ともその中に消えて行く。

俺もその場でナノトランサーからバイクを出して圧縮状態を解除。地下坑道へと急ぐ為にスロットルを閉めた。

「ー到着、と」

そう言えば何故キャンプシップやジャバスプー―Sp―68で行かないのか。理由は簡単である。

デuketトが本来の任務ではなく別の任務で向かう様にオーダーしたからである。だから本来は地下坑道の任務を受けて坑道前に出るはずで合ったが、砂漠地帯に到着、熱い砂漠地帯をホバーバイクで爆走して地下坑道を目指している訳である。

『W. P11を通過。もう少しで見える筈だよ』

「…そうは言ってもなあ…高度上げるか？」

『いや、危ないからやめておいたほうがいいよーなに？』

『いえ、デuketトさんは何か食べます？』

『うーん、それじゃあー』

「ー見えた、地下坑道入り口」

『ーそれなら手紙の地点に向かえるようにW. P最新しますね。あと2W. Pーそれとマトイさん、私紅茶が飲みたいな』

『分かりました。取ってきますね』

了解、と2人の会話を聞きながら計器に表示された場所にパドルを切る。

ー惑星 リリーパ 地下坑道ー

地下坑道入り口でバイクを圧縮状態にしてナノトランサーに放り

込み、ココからは徒歩で、というデュケットの言葉に従い、ライフルを脇に抱え前に進む。

出てくる機構種はライフル1、2発で壊れるので最初よりは遥かに楽になったと思う。

視線の右上に固定されているマップにはココのマップデータが本来なら出て来るが…今は無い。単にデータが集め終わってないのだろう。

左腕にあるタリスにもレスタを選択済みであり、いつでも敵と一戦交えられる状態である。

「……ユウナさん、お待ちしてましたよ」

いきなり声を掛けられてその方向に銃口を向けようとした所でふと気づく。この声どつかで聞いたぞ、と。

「……っ☒……フリーエさん☒」

其処にはランチャーを背負ってこちらを見てくるセミキャスト……フリーエさんが居た。

「……目的は分かっています。こっちにどうぞ」

「本来ならメールや通信で連絡を入れたかったのですが……上にバレると危ないって事で止められてしまっ……」

「そもそもなんでこんなところに？」

「それも全ては彼に会ったら、ですよ。私がココにいる訳もね。それはですね……」

そう言いどンドン歩いて行きーある扉の前で止まるフリーエさん。よく見ると扉の横にあるロック機構の電源が生きている？

「私です。フリーエです。彼女をーユウナさんを連れて来ましたよ。

そう言うのと同時に扉が開きー。

「ーロジオさん」

中から消えたときれて居たロジオさんが現れた。

「ユウナさん！良かった！またお会いーっ！」

そう言い腕を抱えるロジオ。

「ああ×ダメですよ！まだ治って無いんですから！」

それに対して側にフリーエが向かう。

「痛たたっ…でも良かった。ユウナさんが無事で…」

「俺が無事って？」

「正直貴女も狙われていると思いましたがよ。ですが、その様子だと大丈夫みたいですわね」

「…ロジオ。確かなベリウスで調査しに行つて居なくなつたんだよな？何が合つたんだ？」

「…ええ、率直に言います。アークスは惑星ナベリウスに何かを隠しています」

「私はそれを――地質から微小なD因子が混じっているのを調査していたら殺されかけて…それがココにいる理由です」

「ただ、どうやって助けてもらったとかは全然覚えてなくて…」

「…少し前に一人でリリーパでリリーパ族と遊んでいた時に、傷だらけのこの人を担いだアークスがやって来たんです」

「その小さな女の子は『この人を匿ってくれ』と言って居なくなっていました」

「正直何が起こっているのか、私には分かりませんが…ロジオさんの話の通りだととても危ない感じがします」

それと同時にこの部屋を使える様にして良かった、とも。

「…しかし、秘密裏に殺そうとするほど危険な何かを隠しているのも――多分事実でしょうし」

「とは言え、私はもう目をつけられてしまいましたし、多分そつちでは死亡扱いになっているでしょう。表立っての行動は最早出来ません。――でも、」

そう言い視線を上げて俺を見る。

「でも、貴女なら。貴女なら私なんかより上手く立ち回れる筈」

「…嘘だろ？相手は殺すって言う手段を選んでくるんだぞ？」

「お願いです！ナベリウスの秘密を探って貰えませんか！」

「出来うる限りで構いません！どうか、お願いです…」

「…私からもお願いします。ロジオさんの言っていることに嘘は無いと断言出来ますし。それにー」

そう言い何処からかりー！と言う鳴き声と共にリリーパ族が現れる。後ろに装備している雑多入れに食べ物らしき物を入れて。

「リリーパ族がロジオさんの事を警戒も無しに懐いてしまつて。それを見て多分、ロジオさんの行っている事は本当なんだろうな、と」

「だからユウナさん。私からもお願いします。いざとなれば私も手伝います。だからロジオさんをお願い、引き受けてみませんか？」

『…成る程、ねえ…』

そう言い経緯を通信機越しにデュケットに話す。

『ナベリウス奥地ー！所謂遺跡跡地にて地質調査をして居たら狙われた、そしてその土から微小なD因子の反応があつた、と』

「…そもそもダーカーが出るんだ。土とかにそう言うのが付くつてい
うのは？」

『…多分それは無いね。D因子は確か無機物、有機物どっちにも付く
が土とかに付いたつて言う話は聞いたことが無いわ。ー！今の所は
ね。私の知り合いに学者が居るから後で聞いてみるわ』

「…遺跡地帯つて俺たち入れるのか？」

『入れなくは無、けど…よし、それは私がどうにかして入れる様に
しておくから。発着場に帰還してくれ。テレパイプは持ってないん』

でしょ?』

「…無いな。分かった。帰還するわ」

『ユウナさんもいい加減テレパイプ持ったらどうだい?ーああ、それと。あのホバーバイク、あげるよ。ユウナさんに。幸い気が付いたらメセタも溜まって新型買えるくらいに余裕はあるし』

「ありがとう」

『良いの良いの。それじゃ通信終わり。無事に帰ってきてね』

そう言い通信が切れる。

ナノトランサーからホバーバイクを圧縮解除。それに跨り発着場に向かう事にした。

ホバーバイクで帰還中にレーダーに反応がある事に気付く。デユケット達に聞こうかとしたが二人とも離席しているらしい。

キャンプシップ発着場まで時間はあるし…念の為確認しに行くか。

そう言いラダーパドルを右に切りその反応に向かう。

「……無いなあ…んっ?」

一人で砂漠地帯にー俺の感で向かって探しては居るが…中々見つかるものではない。そもそも居なくなっただのはオラクル船団内のアークスシップ内だけだ。

それがリリーパに居る、と言う感もおかしいが…。

そろそろ切り上げ帰還する為にテレパイプを準備しようかと悩んでいた時。レーダーに何かを捉えた。ーこの反応はアークス？こつちに向かつて来ている？

レーダーで包囲を確認してその方向を見るとーなんだあのホバーバイクは。やけに古いな。

そしてフロントから見えるミミを見てー。

「ーえっ☒ユウナ☒」

「っしょ、と。なんだ。アフィンか」

目の前にランディングアームを下ろし着陸するユウナの乗ったホバーバイク。

「相棒、一体どうしたんだよ。このホバーバイク」

「ああ、これ？一緒に住んでいる管制官ーデュケットさんからさつき貰った」

「貰った☒うっそだろ☒だってこれー」

「新光歴175年モデルの限定生産モデルじゃん！」

「…あ、コレにもそういう限定モデルとかあるのか…」

「有るのかなんてレベルじゃ無いよ☒このモデル余りの高さに売れな

くても船団内でも数百アレばいい方って言う奴なのに…さ、さわっても
☒

「壊さなければな。と言うかそこまでだと保守パーツどうすっかなあ
…」

「中身自体は汎用品だからどうにかなるしーそれにこれ！アトア
マーによって自己修復するんだよ！後にも先にも採用されたのはこ
の175モデルだけ！」

アフィンの前に降りたら限定品のエアガンとかプラモを見たとき
の俺みたいな反応になって困った。

話を聞くとこのホバーバイク、シャレにならないレベルの限定品ら
しい。

しかもボデイも自己修復すると来た。デユケットは何でぶつける
などか言って来たんですかね…？

「…あ、そうだ。アフィンはテレパイプ持ってるか？さつきと帰ら
いんだ」

「それなら俺もさつき帰ろうとしていたんだ。待っていてくれ。今投
げる」

そう言い空中に投げる。するとそこには発着場の景色が。

「よし、さつきと帰ろうぜ」

「あ、ああ」

そう言い潜るアフィン。俺はその後ろから潜り、テレパイプはこう
いう風にショートカットみたいになるんだなあ、と記憶しつつ、後で
買っておこうとも考えた。

100 話目

——惑星 ナベリウス 遺跡地帯——

「って言われて来てみたけどよ…何で丁度のタイミングで遺跡地帯の調査が…」

「そう言い内心変な力でも働いたか？などと思いつながら片手で持つライフルを構えて進む。」

『そんな権力私には無いですよ。——それよりここ。確かに他に比べてD因子の濃度が高いですね…』

「…ヤケにダーカーを見ると思ったら、そういうことか」

『ええ。お陰である程度のダーカーとの戦闘経験のあるアークスしか行けないんですね』

「……んじや、俺は？」

『…まあ、龍族と和解させた本人って事で』

「ダーカー関係ないんだよなあ。——いや、あつたか」

「そう言い更に奥に進む。すると少し開けた所に変な——剣の刀身部分みたいなたんがった物が現れた。」

「デュケット。あれは？」

『えっと…有りました。複数のアークスから報告されているあの小さなシンボル。一定時間でダーカーに有利なフィールドを作ると』

か。――まるで地中からD因子でも吸っているのでしょうか?』

「さあ、そこら辺は頭が良い人に聞いてくれ」

『それこそローゴほん!かの人に聞いてみますね』

「…何で言い直した?」

『えっと、その…つまりこう言う事ですよ』

そう言いアークスから支給されている端末ではなく、別の端末にメールが。流れるにデケットだろう。

内容は正しく思っていた通りのローゴオさんに聞いた方が良く、一応会話のログも残るので。――と書いてある。

明らかな咳とかそう言うのはどう処理されるのだろうか?

「……つまりって、まあ、うん、信用出来ないって事か」

『ユウナさん!今は仕事中なので』

「あ、ごめん」

『…こほん。では、そのまま奥へどうぞ。データを逐一確認するので』

それと同時に複数のフォトネットワークをバイパス、各ユニットを踏み台にしてロジオのデバイスに送るらしい。

変な所で優秀なんだがなあ…。

そんな事を思いつつ奥に進むと出るわ出るわダーカーの数。

浮遊するアンコウにはシングルで撃ち込み、ダーカーには脚ごと抉

る事が出来るのでフルオートで動けなくする。縦に100cm有ろうが近づかれなければ意味は無い。

最初ーアフィンと最初の訓練を受けた時は驚いたなあ…周りの目も痛かったけど。

そもそもアークスの戦闘服のー特に女性陣の露出の多さにモノ言いたい。

いや、最初に来ていたレンジャー用の戦闘服ーサウザンドリムは、比較的、露出は無いけれどもーそれでも元男になんて物を着せているんだ、と。

「…まあ、目を引いたのはそれだけでは無いんだがな。ーんっ」

そう眩き崩れた建物らしき物の間を通ろうとしてー胸が引つかかる。何度も行こうとするが…無理だなこれ。

『…ゆうなさーん？今私すっんっごくイラってくる映像を見ているんですけどお…？』

「し、仕方ないでしょ☒そもそも！デuketトだつて有るし！」

『マトイさんやユウナさんに比べれば全然ですけどね！』

そう言い通信のモニターに映る自分の胸を両手で触るデuketトの画面が映る。

「…んっ…ん…ん…はあ…無理だなこりや。これ以上やると胸が痛くなるわ。ー迂回路探す」

もしかしたら胸を手で少し抑えれば行けるか、と思ったがデuket

トの顔が少しづつ悪くなって来たので早々に諦めた。

「…デuketツト。アレは？」

迂回路を通りデuketツトと話しながら目的地まで歩いていると力
二のようなダーカーに出会う。

咄嗟に建物の陰に隠れて敵を見る。

『…クラブバーダですね。弱点で有るコアは…今見えました？』

そう言いクラブバーダがこちらを向いた時…丁度真正面を向いた
時にダーカーの弱点と言うか侵食核と言うかコアと言うか。その赤
い所が見えた。

「見えた。…アレ手で隠されたり？」

『しますね。データによると防御態勢に入るとフォトンを使った攻撃
が効きにくくなるのか』

「ライフフルだと？」

「A.C. i n c. 製だとキツイってデータが来ていますが…ここま
で来る人は何かしら別の会社の武器を使っていますし。アークス貸し
出し武器では無いので苦戦はしない、かも知れません』

「まあ、小口径だもんな。初期武器」

『そんなゲームみたいなの…。まあ、ユウナさんのソレは20ミリらし
いのですし？中のフォトン含量も小口径に比べたら桁違いでしょうし。
何とかなるんじゃないやありません？』

「……言う時はね」

地面に伏せてモードをシングルに。胸が邪魔だか仕方がない。スコープを覗き距離、風速、弾道落下迄を視野に入れたデータが出て来る。正直弾道落下は無いに等しいし、弾速もレールガン並の即弾着だから意味ない気がするが。

敵はクルクル回っているだけなのでコアが見えそうになつたらトリガーを引く。

ダンツ、と発砲音が聞こえ弾丸はそのまま敵のクラバーダに吸い込まれるようにしてコアに――当たらなかつた。

「あ」

『……ユウナさん?』

即座に立ち上がりフルオートに。肩にストックを押し当て照準器の倍率を等倍にしてクラバーダを滅多撃ちにする。

攻撃を察知したクラバーダは身体を横にして――外見の通りに蟹歩きでこちらに向かって来る。

後ろを振り向き退路を念の為確認しながらも、少しづつ後ろに後退。それでも攻撃は辞めない。

「ミスった。変な所に当たっちゃった」

『……まあ、ユウナさんですし? 何とかなるでしょう。まだ死んで貰って欲しくないしね』

「……」

そう言うデuketトの話聞きつつクラブーダは再度防御態勢に入る。

『防御態勢に入ると一定時間そのままのようです。近付いて倒しましょう！』

「なんか遠距離攻撃とかは？」

『無いです。完全に近距離用のーあハサミ。アレが攻撃手段らしいですよ』

「近距離しか無いなら話は別だ」

そう言い近付いてひたすらトリガーを引いて20ミリを撃つ。

この距離ならば流石に外さないし、変な方向に飛んで外れても当たる。

そう言い5秒ほど近距離で撃っていると、クラブーダごイキナリ消え始めた。

『倒したようですね。ーどうでした？』

「いや。特には。強いて言うならあのハサミーアレが硬かったかな。それにお腹減ったし帰ってご飯食べたい」

『そうですか。なら私はユウナさんが作った料理が食べたいです』

「そんな結婚した人みたいな…それに今は女だぞ」

そもそも言っちゃ悪いがデuketはー男の時の俺には合わない。何せ太ってたからな。

そんな太ってる奴の隣に超絶美少女ー！そもそもアークス、もといオラクル船団で微妙な女性に会ったことがないがー！が居てみる。変な噂立てられるに決まってる。

『えっ？！出来ますよ？！女の子同士で』

「……は？」

そんな事を思っていたらデュケットが変な発言をした。えっ？！女の子でも出来る？！

『いや、だから女の子同士でけっー！』

「ー！よせっー！やめっー！やめー！この話はなしー！」

『ま、まあユウナさんがそう言うなら。ー！もう少し奥に進むと採取ポイントですよ。ポイントに着き次第採掘機を転送しますからね』

「……はい……」

因みにその後聞きたくなかったが聞かされた。何でもオラクル船団には一応種族の保存もあるらしく、それで万が一男陣が全滅した場合でも子供を作れるようになっていいるらしい。

その言葉の通り逆の意味でも可能、らしいが。

因みにナノトランサーの中身を探していたらレーションが見つかり、早速フォイエで温めてました。1分くらいで出来て、すっごく味が濃かったです。

ー！ー！ オラクル船団 マイルーム

ー！ー！

「えっ？マトイを外に？」

採掘機で掘った石をアークスとフリーエに渡して次の日の事。マイルームでなにか暇を潰せる物は無いかとパソコンをいじっているとデュケットがマトイを外に出して欲しい、と言ってきた

「ええ。マトイさんもそろそろココとメデイカルルームも飽きてきていると思うので。気分転換って事で」

「デュケットは？」

「私も行きたいのですが、届いたホバーバイクの調整に苦労しているので…それが直り次第合流しようかな、と」

「と言ってもなあ…どこに行けど？しよーじき俺はそう言う連れ出して遊ぶって言うのはなあ…特にホラ。俺コレだし」

そう言い何時もの如くミミと尻尾を指差す。正直俺も変な目で見られるから外に出たくは無いです。

「分かってますって。無難に映画なんてどうです？私としてはこの12人の特殊部隊って言う映画なんかオススメですよ」

そう言い俺に画面を投げつけてきたデュケット。それを見るとー。

「…筋肉やばいな」

内容は複数の特務部隊が手を組み乗っ取られた架空の星、架空の国の大統領の家族、国の政治中枢部にて人質となっている大統領を奪還する話らしい。

「でしょ☒絶対楽しめますよ！」

「…俺は武器とか兵器とかを見るが…マトイは？」

「あつ…」

「そうやってマトイを筋肉マッチョマンに連れ込むな。ーと言うかこれ、コマンー」

と言いかけるとインターホンが鳴る。それを聞いたデュケットが歩きながら玄関に向かう。

「ーあ、はーい？どちら様ー？」

『マトイです。メデイカルチェック終わったよ？』

「はーい。今開けるわね」

因みに本来だどこまで自動で開くのだが…例の反ビーストの件も有ってここだけ手動に変えてある。

因みに寮長と言うか責任者と言うか。その人には提出済みである。

「…これストレートにマトイに聞けばいいんじゃないかね？」

「ユウナ？どうしたの？」

口に手を当てて考えているとマトイが部屋に入って来た。

「……」

「…うん？」

「…マトイはどっか行きたい所あるか？」

「えっ？うーん……」

「ほら、マトイさん、最近メデイカルチェックとユウナの部屋しか行き来してないって言っていたじゃ無い」

「あ、あれは……その……」

「ほら。この際だからいっちゃいませよ？温泉に行きたーい、とか」

「それはデuketツトさんの本心じゃ……？」

「……あ」

そう言うデuketツトの言葉を聞いて思う。確かに温泉なら休まるかも知れないし、一泊くらいなら泊まれるかも知れない。外を見るってこともできるし。

「ん？どうしました？」

「デuketツト、そのホバーバイクの調整はどのくらいかかる？」

「えっと……リアクターの換装したりしますから……二、三時間くらい？」

そこまで聞いて時計を見る。今はAM11:18分。

そして今フリーエさんが石を届けているし、ロジオさんがそれを解析するのにも時間がかかるはず。それに解析する機械もフリーエさんが用意するのもかもしれない。もしかしたらもつと伸びる可能性も。

そう思い、部屋に備え付けられているアークス用の機械……まあ、選ぶはメセタの残高だが……を見る。

まだ、と言うかマトイやデケットしか使っていない為全然ある。

「あの…ユウナ、ちゃん？」

機械から離れパソコンにて検索。――内容はそうだな。

「人数3人、女、宿、温泉付き」

「え☒温泉？」

「え☒本当に☒確かに私も3日間はお休みもらいましたが…」

「どうせ3日間もらってもバイク弄って終わりでしょ？だったら行くこ
うぜー」

「温泉が湧く宿によ。――温泉が湧く？」

そこまで言っつて、ふとココ宇宙船の中なのに温泉が湧くってどう言
う事なんだ、と疑問が出る。

「見てください、マトイさん！ここ、料理美味しそうですよ！」

「本当！量も多いし。ユウナ、ね？ここに行く？」

「待て待て、言ったのは俺だがそんな簡単に取れる訳――」

「ユウナさん、予約取れました！」

「デケットちゃん、さすが！」

「……」

そう言い手を繋ぐ二人をよそに値段とかを見るが：言うほど高くなかった。と言うか安い。しかも2泊3日でこの値段：アレ？想像以上に安いぞ？

そう言い怖くなって調べてみるが：特に事故があったとかは無いらしい。

「デュケツトちゃん！今すぐ用意しないと！」

「はい！何だか楽しくなってきました！頑張りますよー！」

そう言い必要な物をどんどん民間用に調整したバック型ナノトランサーに放り込む2人。

「…2泊で20万行かない…？でも特に怪しいところはヒットしないし…うーん…」

「ほら！ユウナさんも！着るもの全て入れちゃいませよー！」

「ユウナちゃん！こんなのどうかかな？似合うかな？」

そう言う二人を見つつ宿泊する宿を調べるとーあ。

「…あ」

「…？どうしました？」

「ああ…まあ…ここ、ビースト…ダメっぽい」

そう言い画面を指差す俺。それにつられて二人が画面を見る。

そこにはビースト禁、と出ている。

「…仕方ない。マトイとデュケットの二人で行ってきな。俺は……まあ、家でのんびりしているよ」

ビーストがダメなら仕方ない。そう言い頭の中では何しようか、と考えはじめた矢先、二人が声を揃って言う。

「ダメです！ユウナさんも行かないと！」

「そうだよ！私もユウナと一緒にいきたい！」

「…そうは行ってもだな……うわ、見ろよこれ。殆どビービースト禁止じゃないのを見つける方がキツイぜ」

そう言いサイトの宿泊先を見せる。

「ほ、他の船は？ここ見たらシップナンバー1から10までしかチェック入ってないよ？」

「あれ？本当だ。んじゃ、ナンバー48まで……あ」

「ほらっ！ほらっ！出てきた！」

「シップナンバー18ですか。確かここはバベルズが少なかつた気がしますよ」

「そうなの？ーあ、マトイ☒」

「えへへへ、予約取っちゃいました！」

「まあ、そんだけ楽しみって事で」

「そう言うデュケツトも仕度また再開してんじゃん」

「ユウナさんこそ。尻尾、動き隠せてませんよ？」

「☒」

「これで3人で泊まれるわけだし。何しよつか？」

「マトイさん、そう言うのは無事に着いて泊まれたらりですよ」

「ふふっ、分かりました！」

そう言い仕度を再開する二人。その二人を尻目に俺は画面を見る。

「ここ、どんだけビースト嫌われているんだよ、と。バベルズがビースト殺したって言うし…。」

「これ俺の種族だけ地味にハードじゃね？」

「ユウナ！ユウナも一緒に準備しよっ！ほらっ！」

そう言い考えていたら腕をマトイに引っ張られる。

「あ、ああ。うん」

そう領いたものは良いものの、着る服自体そんなに持ってないぞ。と思いつながらマトイに腕を引っ張られ一緒に準備する事になる。

101 話目

——オラクル船団 S. No. 18——

「…到着、と」

「わたし飛行機なんて初めて乗ったよ」

「私とユウナさんはなんだかんだで任務とかで乗りますからね」

「まあ、民間用に安全を取った大型機らしいがね」

そう言い宙港から離陸していく機体を見送る。数機が壊れても良いようにと複数のエンジユニットが纏められた機体が機体各部に付いているスラスターを点火しながら離れていく。

「場所は…マトイさん、分かる?」

「えつと…この辺りじゃないの?」

そう言い二人はモニターに周囲のマップを表示して目的地までのルートを探していく。

「…あ、飛行艇使えない?」

「うーん。バスよりかは速いけど…目的地から少し離れた所に止まらない?」

「そうなのかなあ…ルートを調べてみるね」

「お願い。——ユウナさん、そっちは電話出来ました?」

「は？ーいや、まだだ。今しようとしていた所だ」

「はい。ーにしても本当に即日で泊まれるとはね…」

「うん。旅館って書いてあってダメ元で予約したら泊まれるなんてね」

「…それって予約なのか…？」

そんな事を言いながら今回泊まる旅館電話を入れる。

「ーはい。今日そちらに宿泊予定の者なのですが。ーはい、はい。ユウナです。ーはい。はい」

「…あーデuketトさん！ここー！ここのお店美味しいって書いてありますよーしかも手作りって！」

「本当かしらねえ…最近手作りっていうのも偽装が多いって聞きますしねえ…」

「その点ユウナは手作りだから安心だね」

「安心度合いで言えば自動調理器の方が安心なんだけどね…」

「ーはい。はいーええ☒三部屋も☒マジで☒ーああ、ごめんなさい。それで…三部屋もですか？」

二人の会話を聞きつつ旅館の話聞いたら、なんと三部屋も開けてくれているらしい。

「はい、はい。ああ…オフシーズンなんですか。それで…」

旅館の人曰くオフシーズンな上にバベルズが各シップで暴れているらしく、中々お客さんも来ない、との事。

「…やっぱり飛行艇で行こうよ?」

「…そうですね。それで近場の発着場で降りてバスで向かいましょう」

「…えっと…到着予定時間は…デユケット?ここどこだっけ?」

「宙港ですよ」

「…宙港に着いて、えっと…ロビー?ですね」

そこから飛行艇に乗り数十分、その近場に送迎用のバスを向かわせるとの事。

「…だつてさ」

「飛行艇とバスですか」

「やった!私飛行艇に乗ってみたかったの!」

そう言い飛行艇の発着場を指差す。宙港の目の前に何機か止まっている。

大型のものから小型のものまで。二種類ある。

「ねっ?アレに乗ろう!早く!」

「マトイさん急かさない。ーさ、ユウナさんも」

二人に急かされるまま飛行艇に乗り込む。ーその前に。

「離陸時間は…10分程度あるのか」

飛行艇の時刻表を見るとー全部暗記したわけじゃ無いが、宙港に発着する機体の時間とほぼほぼ同じの様な気がする。連動しているのか？

そう思いながらタラップを登り飛行艇の客室の中に。

中は列車の様になっており、2つの座席が向かい合う様になっている。

「…飛行艇ってこうなっているのか」

「座席はどうなってるの？自由席？」

そう言うマトイと一緒にデュケットを見る。

「えっと、自由席、の筈ですよ。確か」

「なら彼処に座ろー！」

指差しながら席に座るマトイ。さりげなく窓側を取る。

「まあ、私はどこでも良いんですけどね」

そう言うデュケットも同じくマトイの前の窓側を。

「……」

とりあえずマトイの隣に座る。

「……まだかなあ……」

「マトイさん、まだ乗ったばかりですよ。後……9分くらいかな？」

まだかなあ、と言うマトイとそれに対してまだですよ、と言うデュケット。二人とも暇だろうし何か買ってこようかな、と思い客室内を見渡す。……あった。自動販売機。

席を立ちそれに向かう。モニターには簡易的な食事、飲み物、その他が書かれている。

「マトイ？ デュケット？ 何か飲む？」

「ううん。炭酸じゃなければなんでも良いよお」

「私は……ユウナと同じもので」

……なら三つともオレンジで良いか。

そう言いオレンジジュース三つとお菓子を何個か買う。

「ほら。お菓子も何個買ったぞ」

そう言いテーブルに置く。全部甘いお菓子だが……まあ、なんとかなるだろ。

「なら私チョコ貰いますね」

「なら私はこの棒のお菓子を」

そう言い二人は食べ始める。デユケットの横に座り俺もオレンジジュースに口を付けた。

「ーー確かココだよね？降りるところ」

テーブルに映る現在位置と止まる場所と端末の迎えが来る場所の名前がーー一致する。

「ーーそうだな。ココだな」

「10分止まりますし、ゴミ箱に入れて出ますか」

テーブル下のゴミ箱にゴミを入れて、止まるのを待ち、止まったのを確認したら出口に向かって歩く。

「それにしてもここ綺麗だねえ…景色」

「ええ。私たちが住む1番艦と違って都市開発もあまり進んでないみたいですし」

そう言い飛行艇から降りるデユケット。

「へえ。そうなんだ。あれ？でもこんなに開発進んでないとかえってダーカーの襲撃が来たりしないの？」

「ダーカーって人が多い所を集中的に狙うらしいんです。おかげ、と言うわけかは不明ですけど襲われないうって訳です」

それでも一般人が逃げれる程度の人は居ますけどね、と言いデュケットがある所ー山になっている所を見る。

俺もそれにつられて山を見るとー頂上にレーダーサイトらしき物が。こんな所になんでレーダーサイトっぽいのが？

「デュケットさん、あれは？」

「あれは空気中のD因子の監視と気象をコントロールルームと申し訳程度のアークスが居る場所の筈ね。詳しくは知ら無いけど」

何せ入った事ないし、そもそも私はデスクワークしかやらないからね、と付け加えて。

「コントロールルーム、ねえ…あんなの、あつたっけ？」

そう言うマトイの後を付いて行き飛行艇から降りる。ーあんなの？

「…マトイ？あんなのって一体ー」

「ほら、ユウナさんも。10分待つてくれるとは言え待たせては悪いですからね」

「ーああ、分かってるよ」

飛行艇から降りると、目の前のバス停のような所に一台のバスが止まっている。

後ろの席にはーあれはー。

「…アレ…ビースト？」

「みたいです。ーあ、ユウナさんもしかして？」

「ああ…うん。俺以外のビースト初めて見たわ」

「まあ、ここー19番艦はビーストが多いって事で一部の人間に人気が船ですからね」

「たぶん、私見ですけど、オラクル船団の殆どのビーストはここにいらんじや無いんですかね？」と言いながらバスに近づく。

「…と言うかアレが俺たちが乗るバスだよな？」

「みたいです。ほら。ドアに書いてあるじや無いですか」

「そう言うデuketトの通りにバスのドアに書いては有る。ーあるのだが。」

「……そうだな」

例に習ってアークス言語。マトイやデuketトのように元から住んでいるなら兎も角、俺は部外者ー無論中身が、だが。ーなので読めなくは無いが、読もうとは思えない。

マトイは本当にオラクル船団の人なのかまだ怪しいが。

「すいません。私達予約した者なんですけど」

「はい。三名で宿泊予定のユウナ様ですね。こちらへ」

「そう言いバスに案内する女性の人。」

それに従い俺たち3人はバスの中に入って行った。

その後旅館に到着、受付にて予約ー最も、当日予約という物だがーで寝室が防音の個室になっている部屋の鍵を貰い、その部屋に向かう。

「鍵って聞いて持っている物に付加型のキーとか、宿泊者の身体データの複合キーだと思ってたけど…」

「本当に鍵なんですね」

初めて見ましたよ、言い鍵を見るマトイ。デュケットはマトイが持っている鍵を見る。

「パーツ付加型、か…」

そう呟き右手に持っているー前の世界でも毎日のように見ている鍵を見る。

「付加型は身体のどこかに触れさせておかないとダメなんですよね」

「ネックレスとかそういうのとかは？」

「マトイさん、ネックレスとか持ってないでしょ？」

「ああ…そうでした」

そう言いながら旅館の人は俺たちが泊まる部屋まで案内してくれた。

「こちらが宿泊するお部屋になっています。ごゆっくりどうぞ」

と言いつい旅館の人はそのまま戻っていく。

「はやく。開けましょ？」

「ユウナさん、マトイも言っている事ですし…」

急かす二人に急がされ、部屋の鍵穴に鍵を入れて回す。

ガチャ、と言うロックが外れた音がして、鍵穴を元に戻し、鍵を抜き取る。

「…先に入ってくれ」

「うん。ーわあ！」

「それじゃあ、甘えて…へえ…」

そう言い二人は靴を脱ぎー景色の良い居間へと進む。

二人が脱いだ靴を前に正して俺もその横に靴を脱ぐ。

玄関から登り俺も二人に合流しようとした時、閉じた玄関がノックされた。

「はい？」

『お客様、少し中に入ってもよろしいでしょうか？』

どうぞ、と言うデュケットとマトイが俺に顔を合わせてくる。

失礼します、と一言いい中に入ってきた旅館の人はー靴を見て説

明は大丈夫のようですね、と言う。

「説明って?」

「ええ、この旅館はー靴を脱いで裸足になって歩いてもらう部屋が多いですから…その、お客様の中にはそのまま上がってしまう方も多くて…」

ですがお客様はご存知の様でしたので安心しました、それでは失礼します、と言い扉を閉めて出て行った。

「…そういや俺の部屋の中じゃ靴脱いでいたが…いやでもアフィンとかゼノさんやエコーさんが来た時は普通に脱いでたよな?」

「ゲツテムハルトさんやメル姉妹も、ですよ。ー多分親戚にそういう作法に詳しい人が居たのでは?」

「そう言うデユケットは?」

「ほら。そこはこうー流れで」

「ええ……」

そんな方に今までやっていたのは流れで、と言われ困惑していると突然。パァン!と言う音が響き、音の方を見るとーマトイがベランダに出ていた。

「すごいー山だ!山があるよ!目の前に!」

「…まあ、1番艦は開発進みまくって、こう言う森林とか山とかないらしいからねえ…」

「へえ…」

「その分住むには楽だけど」

すごい、きれい、と少し幼くなつた様な言葉を使うマトイを少し心配しつつ、テーブルの角にセットしてある座布団に座る。

スツと座りテレビの電源をリモコンで押して局を変えていく。

「ーわあ、これが…えっと、確かキモノって言うやつですか」

「えっ？キモノ？」

「そう。なんか古来からあるって言う服らしいわよ。着方は…まあ、デバイスに登録してーほら」

テレビから視線を外しデュケットとマトイの方を見るとーデュケットは濃い青色のー。

「…浴衣じゃね？」

「…あーそうですーユカタですー」

なんか引つかかりがあると思つたら…コレが浴衣ですか、と言い用意してあつた浴衣を着ている。

マトイもそれを着るものー胸がこう…ねえ。

それをデュケットがじつと見て、そこから更に自分の胸ー前々から言うがペツタンではなく、充分ある！ー旨を触る。

「…こうなったら……。ユウナさん！ユウナさんも着ましょ！ユカタ！」

そう言い座っている俺の手を引つ張り立たせた後、下着姿にして同じ色の浴衣を着せる。

「コレで3人お揃いだね」

「まあ、うん。そうだな」

「…やつぱり…大きい…」

小さな声で言うが残念な事にミミで充分聞こえているんだよ。

それにしても、と言い自分のお尻ー尻尾が生えている所を触る。完全に穴が開いている。しかも少し大きめの。

「…ユウナ？どうしたの？」

「…いや、ちゃんと尻尾用の穴が開いているなって」

「ここはビーストが多い船ですからね。そう言う所もちゃんと用意できているんでしょう」

そうなんだあ、と言い尻尾を上げて確認してくるマトイ。

「んっ、マトイー少しやめてくれ、尻尾触るの」

「…えっ？あ、ごめんね？本当に開いているかどうか気になって…」

「開いてなかったら今頃下着見えていますよ」

「機にする所そこか？」

デュケットが私なりに気を使ったんですよ、と言うがそれは気の使い方を間違っている。

喉が渴いたのでお茶でも作ろうかと簡易キッチンに向かうとーなんと場違いなドリリンクサーバーが合った。

サーバーにはフリードリリンクと書かれている。

少しの間ー10秒から20秒ほど怪しんだ後、取り敢えず飲んでみるか、とコップに入れて持っていくとーマトイとデュケットが何処から持ってきたのかけん玉で遊んでいた。

しかも玉を乗せる遊びではなく、玉を振り回しなんか：メイスみたいな戦いごっこをしていた。

「……な、なあ、二人とも…何を？」

「何って？」

「うん、剣玉だよ？」

俺の問いにデュケットは何を変な事を言っているんですか、と言わんばかりの顔をし、マトイは首を傾げつつ言う。

と言うか初めてかもしれない。首を傾げる動作を見たの。

「…けん玉の使い方…違うくない？」

「剣玉ってこの先の玉で相手を叩く遊びじゃないの？」

柔らかいし、と言い指で丸い玉を突くデュケット。

「けん玉ってその…いや、デュケット。貸してくれ」

説明するより実際に試した方が早いか。そう思いデュケットからけん玉を借りて実践する。

「ーそもそもけん玉って言うのはーっ！ーっ！ーよしっ！」

玉を空中に落とし、それを腕の動きだけで、刺さっていた剣に玉を刺す。

「ほっ、それっ、ーっほらっ！こうゆう風にやるーっいてっ！」

調子に乗ってグルリと玉を回し一周させてから載せようとしたら、そのまま頭に当たり、手で押さえる。

「大丈夫？」

「つつつつーやめやめ！やってられっか！」

そう言いけん玉をテーブルに置いて持ってきたジュースを飲む俺。

一方二人は俺のやり方で何となく分かったのか、俺より上手くけん玉出ている。

アレがセンスって奴か。

そんなけん玉に少し熱中している二人を見つつ更にジュースを飲んでいた。

102話目 Ep1. 8 AM11:00辺り

——惑星ナベリウス 遺跡地域——

「いつも通りダーカー殺せって…はあ…」

『仕方ないじゃないですか。あの人——ラヴェールさんにオーダーを貰っちゃった訳ですし』

「俺はてきとーに調査して帰るつもりだったのによお…何でダーカーを倒さなきやらならんのよ」

『そりやダーカーは宇宙を——と言うかモノとか空間を蝕む、敵ですからね。その為の私達アークス、ですよ』

「そうは言ってもね…」

ライフルを脇に抱え草で覆われている道を歩く。

『それよりどうです？その眼鏡型フォトンレーダーは』

「まあ、いちいちデューケットにコンタクトを入れてもらう寄りには遥かに気が楽だが…」

そう言い視線の右上を見る。眼鏡のレンズに表示されている50メートル程に複数のD反応があるからなのか点が複数出る。

『私は似合ってると思いますよ？ユウナさんの眼鏡姿』

「…眼鏡していると耳の上が痛くなってなあ…」

『大丈夫です！眼鏡の引つかかる部分はなんか肌触りの良いモノを使っているらしいです』

「ええ…」

そう言いながら目の前からくるダーカーを只管撃つ。

20ミリのサイズがあればダーカーくらいは一撃、とまではいかな
いが数発で倒せる。

そのくせコイツ反動が無いから鬼の様に固定して撃てる。まるで
エアガンの様だ。ブローバックしない電動の。

フルオートで敵を倒して一息つくくと、改めてこのライフループロ
トレイを見る。特にセーフティを。

一般的にはセーフティ、シングル、バースト、フルオートの四つが
ある。コイツもこの四つだ。

『そういえばユウナさんってP・Aのワンポイントって使いませんよ
ね？なんでです？』

グレネードシエルやデュフェーズシエルは使うのに、と付け加え
る。

「…ワンポイントって何発撃つ？」

『確か…12発でしたっけ？』

「バースト4回分だな。それならフルオートで撃った方が早く無いか
？」

『そうでしょうか？それにさつき上げた奴以外も使いませんか？サテライトカノンとか』

「あれは…そもそも使いやすい以前に俺に使えるかどうかの方が…」

『試しにやってみます？ほら、ライフルを媒体にして特大のレーザーを照射してみましよう！あのダーカーに！』

言うや否や一体だけいるダーカーにマーカーが付く。

頭を掻きながらマーカーのついた敵にサテライトカノンを使う。

マーカー付きダーカーの周囲に魔法陣みたいなものが浮かび上がり、数秒すると30センチ位の太い光がダーカーを焼き、更に爆発した。

爆発が終わり、撃ち終わると何もなかった。

『…あれ？サテライトカノンって支援攻撃を要求するP・Aの筈じゃない？』

『ーと言うかアレ、ナ・メギドじゃないですか☒』

ユウナさん、ライフルでテクニク使えるんですか☒と驚愕されたが使えてしまったもんは仕方ない。

「…そもそもナ・メギドってどう言うやつよ」

『えっと…上級の闇系テクニクでエネミーの周りに特殊な領域を作って、その中で闇と光を当てて、その二つが臨界点を突破した爆発エネルギーで敵を消すテクニク、の筈です』

「……やっぱそんなテクニックより銃弾だよなあ……」

『ユウナさん☒これ凄いことですよ☒』

自分で自作テクニック作るなんて初めてですよ！と言われたが……そもそも俺が使っていたのってグレラン、フルオート、ショットシエル、の3つ位である。

それを今更テクニックだ？

「……まあ、偶然出来たんでしよう。そうに違いない、絶対そうだ」

『これは一応上に報告しておかなくては……』

「これのおかげでレンジャーから強制的にフォースやテクターにクラスチェンジとか無いよな？なあ☒」

『証拠動画も添えて……よしつと』

「聞ってる☒デuketツト☒俺やだよテクニックとか言う変なの使うの……！」

『……一応……ユウナさんの親がニューマンだから適正自体はある、とは思うのですが……』

「それでも俺は銃が良いの！……はあ……所で討伐数は……：終わり、か……？」

『……まだですね。規定ラインを超えてませんし』

「……そうだな、帰還……ん？」

まだですよ！と言うデュケットを無視して帰ろうかと思っていた時。

メールの欄が光った。何かしらメールが来たらしい。

『聞いてます☒ー…？…どうしました？』

「…ジグさんからメールが…はあ☒クラリツサが無くなった☒」

『…？』

「あんなにくろーしてパーツ集めたのに…もつと嚴重に保管しとけよ！創世機なんだろアレ！」

『…えっ？創世機☒』

「…くそっ、俺がしたくろーは何だったんだよ…あ、いや、何でもない」

『いや！大問題じゃないですか！』

「…メールにも『此方で探すから、パーツを集めて貰ったと主には悪いな。後で何か埋め合わせする』って書いてあるし」

『アークスの武器に関するトップがそんなんで良いの…？』

「…良いんじゃない？」

そもそもそんなだから俺にコレが回って来たんでしょ？と言いつプロトレイの事を言うとデュケットはうーん、と言いつ静かになった。

『…おや、この様な所に来訪者とは。――余り歓迎しないが、よく来たな』

それから規定ラインを越えるためにひたすらダーカーを撃つていると、何処からともなく鈍い音が聞こえ、デュケットに確認すると付近でアークスが戦っているとのこと。

念の為確認してほしい、と言われて、反応のする方に向かうと、白色のフルキャストに会った。

『――ん？ああ。君はダーカー襲撃時に居たアークスだな？仕事熱心な事はいい事だ』

そう言われて思い出すは――。

「――レギアス、さん？」

『いかにも。私の名前を覚えてくれて嬉しいよ。――だがそれはそれ。コレはコレ、だ。この付近は少し――いや、我らアークスにとつては勝手が異なるぞ。用がない場合は早々に帰還を進める』

そう言い手に持っていた鞘のついた剣を背中に背負うと俺に言った。

『滞在理由があるにしても、急いで終わらして帰るべきだ。私なら兎も角、もつと面倒なのに目を付けられると厄介だぞ』

「面倒なのって言うのは…？」

『ああ、それは…いや、ここに長時間居なければ良い話だ』

『…：…ううむ…それにしても前に会った時も思ったが…いやだが…

ビーストと言うのは少ないから私のメモリーにも…』

そう言い顎部分のパーツに手を乗せて考え始めるレギアスさん。

『…いや、失礼した。私の気のせいだろう』

そう言い、考えて出なければ気のせいに違いない、と言って。

『良いフォトンを放っているな。焦らずゆつくり鍛えれば…私たちの仲間にもなれる程の実力を持つだろう』

『…だからこそ。あまり急ぐなよ。若きアークス』

『大局を見失えば、いずれ取り返しがつかなくなるからな』

『…ふつ、いかな。歳をとりすぎると説教が長くなる。まあ、それなりに心に留めておいてくれ』

それではな、若きアークス。

そう言い目の前の…レギアスさんは俺の後ろに歩いて行き…。

『そうそう。最後の助言だ。小さくて煩いには気を付けたまえよ』

そう言い片手を上げて去って行った。

「…あれ？貴女、ここで何ているの？」

そう改めて俺に聞く銀髪ポニーの少女…サラが俺に聞く。

「…ま、依頼だよ」

レギアスさんと別れた後。

もう少しで規定ラインを越すつて時にデュケットが連絡をして来た。

何でも未登録の人物反応があるらしく、その保護を頼む、との事だった。

何で俺が救助なんか、と思いながらその反応のあった場所に向かう。

だがそこには何もなかった。

「…おい、デュケット？何もないぞ？」

デュケットに通信するが何も無し。アレコレまさか…？

デバイスを起動して各種データを確認し始める。

脳裏によぎる仮面との戦闘、前の異変。アレは確か通信がジャミングされて聞こえなくなつたはず。

各種データには異常無し。だが仮面が手を変えてきた可能性もあるかもしれない。

急いでライフフルストックを肩に当てて周囲を搜索。

搜索している最中、草が僅かに動きそちらに銃口を向けた。

「誰だ！」

その草の奥から帰ってきた答え。

「――私はアークスよ」

その声は女のものだった。

「…姿を見せてくれ」

はいはい、少し待ってね、と言い数秒待つとリースカートの様な服を着た――明らかに俺たちの着ている戦闘服では無いモノを着た少女が出て来た。

「…何者だ、アンタ」

「言ったじゃない。アークスだって」

「…にしてはその服…船団内の居住エリアでも着れそうな服装だな？」

因みにだが居住エリア、工業エリア、他の食料生産プラント船に乗る時は、警備を除いて基本私服か正装である、らしい。

「ああ…まあ、アークスよ。コレでも」

「…人型のダークファルスと交戦した事が何度もある。…どっちだ？」

「私は人よ？少なからず、ね」

「…アークスではないんだな」

「一応保護者はアークスだけどね」

そう言うのと相手も手に装備していたワイヤーを外して背中に背負う。

「……」

貴女も下ろさないの、と言う視線を感じた為、ライフルを下ろす。

「…所で貴女。こんな所で何をやってるの？一般のアークスは入れない筈よ？」

「一般のアークスがダメならアンタはもっとダメだろ」

それもそうね、と言いつつ辺りを見渡す少女。

「ーはあ…手厳しいわね。…サラよ」

「…ユウナだ」

「…うん。そうね。もう少し日当たりのいい場所に行かない？」

ここじや草もデカイし、痛いしね。

そう言うのとサラは手招きしてついてきなさい、と言った。

「調査依頼？ーあのロジオから？」

それから数分後。誤解も解けて今は普通に話をしている。

「ああ。――まで、クライアントは言っていないぞ?」

「ああ、彼を救ってあのセミキャストに渡したの。アレ私なの」

「ああ……本当か?」

「ま、信じてもらわなきゃ意味は無いけどね。それにしても――」

そう言い俺と同じ様な髪色をしているサラは岩に座りながらため息をついた。

「――呆れた。あんだけの目に遭ったのに懲りないって……最早才能ね」

そう言いながらナノトランサーから栄養バーを出して食べ始めるサラ。

一本食べる?と言う問いに、俺はいらないと答えた。

「危ない目って言うのは?」

「彼、殺されそうになったのよ。それを助けたのが私。ま、もしバレたら処罰は受けるでしょうけど、まあ、私はアークスじゃないですし?」

「寧ろその危ない依頼を受ける貴女の方が危ないわよ。そんな暗殺依頼が来ている人の依頼を受けるなんて自殺行為過ぎるけど……ま、私にはかんけー無いし」

「……はあ……」

その時、辺りが少し暗くなる。

「…またか」

「ええ。…全く。ほんとおつ、ここはフツーじゃ無いわね…。異常よ、異常」

「そう言い周囲を見渡すサラ。変なでつかい花は咲いているし、変なの飛ばしているし、確かに変ではある。なんか知らない残骸もあるし。」

「原因は何だろうな…異常にダーカー湧くし」

「ダーカーしか湧かない、の間違いでしょ?…原因ねえ。原因は私には分からないわ。ウチの猪突猛進お馬鹿さんはフォトンがおかしいって言っていたけど」

「猪突猛進…?」

「なんだそりゃ?と言うと実際そうなんだもの、そう言うしかない、と返される。」

「ー繰り返すけど私にはわからない。詳しい事は自称保護者を見つけて聞いてね」

「…じゃあない。んじや原因をその人に聞くか。ーんで、その、猪突猛進で自称保護者は何処にいるんだ?」

「何処にいいのかって?さあ?そんなの、私が聞きたいくらいよ」
「そう言い手を上げて、岩から降りて周囲を見渡すサラ。」

「…はあ…完全に迷子だわ…ねえ、ユウナ。貴女ビーストでしょ?匂

いとかで分からない？」

「…頑張つてね」

そう振られ、何を失礼な、と思い俺は即座に迷っているサラの横を通り抜け更に奥に向かった。

「……デュケツト？」

『…あ、ああ☒やつと通じました…ユウナさん、急に通信が出来なくなつて…ほんともう心配したんですよ？』

「……付近に仮面の反応は？」

『……無いですね。と言うかダーカー反応が邪魔して正確な情報は無理ですね』

一種のジャミングですよこれ、と言う。

『さつきは何があつたんですか？』

「ああ…いや、なんでもないさ」

『…そう、ですか』

「…ああ。取り敢えず小型種は規定ラインを越した、と思う」

『……はい、後は中型種ですね。カルターゴにキユクロダ、サイクローダ位ですね』

「…カルターゴは回り込んで、キュクロードとサイクロードは目を狙えば良いんだな？」

『他のデータですと、暴れ出すとか。股間部にある弱点を隠す場所を壊すと其処も弱点になるらしいです。そっちの方が安全かと』

「…マスブレードにハンマー…こんなのに近接挑むとか頭おかしいわ…」

『?何か言いました?』

「いや、なんでもない。もう少し奥に進んでそれらを倒したら帰ろう」

『了解しました。ーん?』

「どうした?」

『…ああ…緊急ってほどでもないですが…以来ですな』

「ん?なんだ?」

『ナベルダケという名のキノコを有れば取ってきてほしい、との事』

なんでも今からだと船団の各種生態に影響があるかも知れなくて育てられないのだとか。それで自然品で確保する必要があると。

「…分かった、見つかったらな」

『お願いしますね』

103 話目

手でG・グレネードのピンを抜いてダーカーに向けて投げる。数秒立つとD因子を持つダーカーだけを集める重力力場が発生。ダーカーを一箇所に集める。

そこにサテライトカノンを照射。ダーカーをまとめて光のレーザーで焼く。

サテライトカノンを使用后、モードをフルオートに変えて残ったダーカーをまとめて倒す。

20ミリの対ダーカー用にフォトンが詰まった物で作られた徹甲弾や榴弾をダーカーに撃ち込む。

数十秒も撃ちまくれば当たりはダーカーの死骸――は消えるから、辺りは来る前となにも変わらなくなっている。

『…ほんと、銃って良いですよねえ…』

「んあ？どうした急に」

『いえ。――辺りに元ハンターのオペレーターとか結構いるんで、小聲になるんですけど…よくあんな奴らに近接挑めるなあって思いまして』

「…まあ、確かにな。やっぱ銃が1番だよな。近接とか絶対脳筋だろ。そもそも近付きたくない」

『脳筋率は確かに高いですけど。まあ、私はフォースやテクターの適

性が低くてです。まあ、オペレーターやってる訳ですから全体的に低いんですけど』

『その中でも唯一…レンジャーだけが適正比較的高くてです。あ、勿論私の…当社比って奴で、ですよ』

レンジャーだけ他の人達並みに高かったら私もオペレーターじゃなくてレンジャーやってますよ、と加える。

『…最も一番簡単に慣れて、一番慣れが必要なのもレンジャーらしいんですけどね』

「まあ、後退撃ちとかコケそうで怖いもんな」

『それもありますけど…船団内で警備とかに駆られると、どうしても対人って事が稀によく有りまして…』

「治安いいんだから悪いんだか…」

『まあ、殆どはバベルズですが』

「バベルズの本部に乗り込めば良いものを。それか空爆とか？」

『船団内でそんな事やったら戦争になりますよ。それに周囲の非難勧告はどうするんです？』

そもそも船団内で爆発物使ったら…まあ、余程の炸薬量じゃなければ、てすけど壁に穴が開きますよ。と続ける。

「はあ、ほんとクソゲー」

『だからユウナさんも気をつけて下さいね。って再三言ってますけど』

あまり船団内ではビーストの人権は危ういんですから、と言う。

「…そうだな。そうならナベリウスにでも住むか？森に凍土。海もあるしな」

『今いる遺跡地帯は少し変ですけどね。なんか別の文明の跡地、みたいな？』

「さあ、どーだか。ーデケット。ライン越した？」

『えっと…もう少し、ですね。にしても色々な人から言われてるんですけど…』

「ん？」

『ラヴィールさんのオーダー…新人にやらせるには危険すぎるんですよね』

「そうなのか？」

『はい。そもそもユウナさんが撃ちまくって倒しているダーカー…あれ一体でもフォトン許容量が小さいと倒すのに時間が掛かるんですよ？』

「…いや、そもそもフォトンが充填された徹甲弾や榴弾で普通に倒せるだろ？更に口径のデカイランチャーなら尚更」

『そうは行かないですよ…。そもそもフォトンアーツを使う為の』

「フォトン……これって人によって貯蔵出来る量が違うんですよ」

「うん？……うん」

『…理解してませんね、その顔は』

「そもそもレンジャー……もといライフルやランチャーは実体弾じゃない。そのどこに外部の……使う人のフォトンを使う力が必要になるんだよ？」

『…あれ？コレは最初に教えられると思っていたのですが……。因みにですけど、ユウナさん。本当に……今使っているライフルは兎も角、あんな小口径弾でダーカーを倒せる程のフォトンをぶつけられると思ってます？…』

「…ほら、そこは数撃てばコアに当たるの理論で」

『相手の体力が数千有るのに2桁のダメージを与えた所でどうなるんです？…それにダーカーが複数いたら？…』

「そんなの、逃げるに決まってるでしょ」

『その低いダメージを上げる為に外部のフォトン……使う人のフォトンが必要になるんです。……実際はもっと複雑の筈ですけど、まあ、こんな感じの筈』

「こんな感じって…」

『それにほら、ユウナさんの理論だと近接職はどうなるんですって……』

そこまでデュケットが言い話が止まる。

『はいーええ、そうですが……いえ！そんなことはないです！はい！神に誓って！』

『ーだがー君のボディを組んでいる彼女がー』

『いえ！それはダークファルスによる可能性が高いかと』

『ーかしーールスにジャミーーあるー』

『すいません、一度オペレートを終了します。終わり次第またやりま
すので』

「ああ、デュケーー切りやがった…何があったんだ？上司か？」

オフラインと表示される立体情報端末のウィンドウを手で消し去り、左手で保持していたライフルを右手に構え直し進む。

「67！」

規定のラインまであと少し。

ダーカーが前脚で引つ掻いてくるが痛みは比較的少ない。

後ろを見つつ、前に向けてライフルを撃ちまくる。

ポートが解放されて薬莢が地面に転がる。数秒するとその薬莢も土に帰る。

「74！もう良いだろこれ！マグ！ダーカーの討伐数は☒」

マグも単発のフォイエを放ちつつウィンドウを表示。ラヴィールからのキル数カウンターをチラツと見る。ローチラツとじゃ分からない。

トリガーを指で引き続け、ダーカーが一点からしか来ないのを確認して改めてウィンドウを見る。

「ローんなつ！70じゃねえか！」

オーダーには76/70とカウントされている。

「ふざけローつ！」

んな、帰るぞ。と言おうとしたら3メートルはあるダーカー——メガネにはエル・アーダと出ているローが突っ込んできて吹っ飛ばされた。

「っ！」

壁に吹っ飛ばされ、背中を打つものの、凄く痛いはまだどうにかなる痛さである。

しっかりと掴んでいるライフルを構えてエル・アーダにマズルを合わせフルオートで撃ち込む。

「ローその貴様！P. Aのホーミングエミッションを使うのだ！」

何処からともなく聞こえてきた声。

「ホーミングエミッション？んだよそれ！」

「複数のターゲットをロックして弾に誘導性を持たせるP. Aだ！早く使うのだ！」

そう言う声だが使った事はない。取り敢えず視線に入っている6体にミサイルみたいに……いけっ！

銃口から飛び出た弾は光子により誘導性を与えられ6体いる内の4体に当たる。

「その調子だ！待ってろ！今すぐフォイエ系テクニクで焼き払ってやる！」

エミツションを食らって地面に落ちていたエルアーダを含めた6体が急に爆発して消える。

「……」

「危なかった貴様。貴様大丈夫か？怪我とかないか？」

なんならシフタをかけてやるぞ、と言う……目の前に現れた赤と白の帽子を被った少女……女の子？

「いや、こう言う時は黙って掛けるのがポイント高いんだよな！それっ！」

そう言い周りに緑色のフィールドが発生して、痛みが消えた。

「あ、ありがと……」

「うむ。怪我のない事はいい事だ。……あ。そうだ。貴様、名をなんと言う？」

「貴様って……ユウナです。アークスをやっています」

「ユウナ……成る程、たしかにアークスだな」

俺の名を探し当ててすぐさまウィンドウを消し去った。

「ーなに？私のこと？よもや私の事を知らないのか、貴様☒まった
く、私もまだまだなのだな」

そう言いー最後は小声で言っ、顔を上げる目の前の少女。

「私の名はクラリスクレイス！六芒の五をー痛っ！ー司る者だ
！」

手に持つロッドをくるくる回しー途中で頭に当たりロッドを落
とすものの、それを急いで拾い上げ自己紹介を続ける。

「ほおらどおした貴様あ☒なんと言っても私は六芒均衝だぞ！」

「…いや、その…」

「…ふん。どうやら雲の上の存在過ぎて私の寛大さがわからないよう
だな。まあ、いい。寛大な心で許そう」

全く、ヒューイの奴め、こんな面倒な名乗り上げなんてしなくても
普通にすれば良いものを…と言っていたのもスルーする。ついでに
痛かったと頭を摩るのも。

「ーそれより貴様、ココでなにをしている？この場は危険区域に指
定されている。そうやすやすと踏み入っ、いい場所ではないぞ」

スツと顔を上げて、それはそれ、これはこれ、と言うように話を交
えてくる偉い人。

「オーダーを受けまして。ダーカーを倒してこいと」

「依頼？依頼だと貴様？すまんが少し見せてもらっても？ーふむ、
確かにダーカー殲滅任務の依頼だな。…まあ、私が言えた事ではない
が、余り余計な事に深入りするなよ。この地域は危ないからな」

「私の力はダーカーを倒すためにある。あまり人相手に使いたくないからな。ーいや、そもそも使いたくないしな。忘れるなよ、貴様」

そう言いーきつき見たような光景が目広がる。確かサラだったか。サラのように前に行き辺りを見渡す。

「まったく…アノ人はどこに行ってしまったんだ…？」

「ええと…あれ？こつちに一度来たような…」

二人とも同じ事を言っているし…。クラリスクレイスは兎も角、サラは会えたのだろうか？

クラリスクレイスと別れて、モノメイトを片手に持ちストローを吸っているとなんかひらけた場所に付いた。それに変な塔みたいなものがある。

ーラツキーな事に塔のところに階段があるではないか。

階段に座りライフルを右側に置いて、少し早いお昼を取ることにする。

「…いや、その前…」

ライフルを膝の上に乗せてリリースボタンを押してマガジンを取る。マガジン内にはまだ弾が入っているようだが、念の為交換しておこう。

左右についているポケットからマガジンを抜き取る。今回は左側か。左側のマガジンを抜き取ると、スツとまたマガジンが姿を合わし

た。

弾の入っているマガジンをライフルに差し込み、残弾の無いはずのマガジンをナノトランサーに放り込む。本来ならマガジン用のナノトランサーに入れるべきだが：まあ、後々帰ったら弾を抜き取ってローダーで入れるし、どっちに入れても変わらないだろう。

コッキングレバーを少し引いて初弾が入っているのを確認。安全装置を掛けて横に置く。

立体情報端末のナノトランサーの欄を開き、マトイが作ったお弁当を取り出す。

それを押すと中に浮かんだ状態で出て来た。それを手に取る。

フタを開けると――卵にウィンナー、野菜など結構な量が入っている。

二段目を開けると――俺の家では主食となっている米が入っていた。

ついでに頑張ってたね、と言う紙も入っていた。

『ほうほう……これまた熱いじゃないか』

その紙を読んでいた時。急に後ろから声を掛けられた。

急いで振り返ると――ジグさん、ビィンズさん、リサさんに次いで四人めのフルキャストに会った。

『そんな驚く事はないよ。なあに、私も偶然ココに来ただけだからね』

「はあ…」

「そう言い隣いいか？と許可を取りつつも座ってくる黄色いフルキャスト。」

『ーああ。私の名はマリアと言うんだ。覚えておいてくれ』

「はあ…その、食べても？」

『ああ。食べてくれて構わないよ』

「そう言い隣のフルキャストーマリアさんも何かを飲み始めた。」

『これかい？コレはフルキャスト専用の…まあ、食事だよ』

「少しの間見ていたら言われてしまった。」

『ほら。アタシ達フルキャストって言うのはセミキャストー一概に、とは言えないが殆どが生身じゃない。機械の体を動かし続けるためにオイルやら潤滑油、その他色々混じった物を取らなくちゃならんのだよ』

『味は設定したものに出来るが…その味も正しいかどうか分からないきや意味が無いね』

「そう言いながら飲み物を飲み続けた。」

『ー所で食べている最中に悪いが…アークスでもそれなりの地位に居るもんでね。ちよっとばかり質問させてもらうよ』

話を聞き終わりマトイが作ったお弁当を左側に置き、甘い卵焼きを口に入れて、ご飯を口に運ぶと隣の飲み終わったマリアさんが言う。

『…アンタは此処にー何をしに来たんだい？』

「…ダーカーの討伐任務を受けましてー」

『ーそれも分かった上で、だ。本来のー本当の意味でのクライアントオーダーは』

「……」

その言い草に右横に置いてあるライフルに手を合わせる。

この人、ロジオの事を知っている…？

『なあに、そこまで警戒心出さなくても良いだろう。ほら。ライフルを置きな。そっちの事情も知ってるしな』

『アンタ達が隠している学者の事も、ね』

その言葉を聞きライフルを手に取り構えつつ離れる。

「ーどっち、なんですか？」

『おやおや。そんなに警戒されてるとは思ってなかった。こちとら少しお話しできればって思っていたんだがね』

「…彼は調査中殺されかけたと言います。付近に居たアクセスによるとその反応は同じアクセスの反応が一瞬写ったそうです」

『それとアタシが同じ組織だとも？』

「…1番面倒なのが面倒な時に限って起こる。それが現実に高確率で起きるのでね」

『なあに、そう警戒するなって言うのは無理な訳だよな。ほら。アタシも武器を外すからこつちに来てくれ』

そう言い右手に出したパルチザンを圧縮、俺の手前に投げってくる。

ライフルを相手の足元に合わせたまま圧縮された武器を拾う。

「……」

『にしてもアンタ。さっきアタシがアークスでもそれなりの地位にいるって言ったのに、よくもまあ武器を向けられたもんだ。感心したよ』

『ーさて。そんな肝の座っているアンタに質問だ。此処にーこの遺跡地帯と言われるエリアに、何をしに来たんだい？』

「……このー此処が何なのかの調査、です」

『ふうん…此処が何なのかの調査、か。成る程。ー優秀じゃないか。その学者も、ここまで突破してくるアンタも』

伊達にアタシに向けてくる度胸があるねえ、と言う。

『さて。世の中には優しい嘘と言うのがある。ー皆んなの為になる、嘘って奴だ』

『真実がいつも正解って訳じゃない。黙って蓋をして行くのは割と多いのさ。世の中にはね』

『まあ、違和感に気付いたのはお見事。でもまだ遠いな、真実に
は。ー言いふらされても困るしね』

そこまで聞きまたライフルを構えてー本格的に攻撃来るか？と
思いセーフティを外す。

『ーだから教えよう。一つの真実を』

「…は？」

『ん？どおしたんだい？そんな変な声を出して』

「…いえ、なんでもありません」

セーフティを付け直し腰に武器を付ける。

『よつと。なに、そんな余計なこと知ったから消すなんて事はしない
さ。特にアタシはそう言うの嫌いでね』

そう言い階段上にある塔を見上げるマリア。

『此処は、40年前に行われたひとつの大きな戦いの跡さ』

「40年前の…？」

そう言えばそんな話を誰かに聞いた気がする。

『ーそう考えてーなさそうだが、それらしい違和感はあるただろ
う？文明的な跡地とか至る所にある小さなオブジェ。アレは此処に
落ちた戦闘艦に過去の戦いを癒すための装置さ。何十万と言うアー
クスも死んだ。大戦跡地なのさ、ここは』

『私達の所属するアークスにとって一つの節目となった大きな戦いの

跡だよ』

『そう言われて今一度塔を見上げる。よく見ると変な模様が描かれている。』

『――何故アークスが、オラクル船団が、アークス上層部が嘘をついているのか。その理由を考えるのはアンタ達だ』

『私は無意味に嘘をつかないし、黙っている義務も無い。何かしら嘘を付く理由があるのさ』

「――はあ、はあ、はあ……い、いたあ……それにい、さつきぶりねえ……」

声が聞こえて後ろを振り返ると――階段を上がって来たサラが居た。両足に手を付け息を整えている。

「おいこらあ！はあ、はあ……バカマリアあ！あたしを……はあ……置いて勝手にい……行くなあ！」

『ふん、バカとは大層なご挨拶だね、馬鹿娘。追いつけない方が悪いの。未熟なの』

「はあ、はあ……んっ、はあ……あたし、が、まだ未熟……？」

『未熟さ。まだまだだね。馬鹿娘は今日までだね。今日から未熟娘さ』

「うるさい、馬鹿マリア」

『さて。サラも追いついて来たしおしゃべりは此処までだね』

『アタシ達はまだやる事があるけど、調べるような物は何も無いよ。さっ、帰った帰った！』

『そう言いサラを連れて戻って行くサラとマリア。』

『アーアークスは嘘を付いていたけど、アタシの言った事は嘘じゃ無いよ。よーく、考えてみるんだね』

マリアさんが此処には何もない、と言っていたが…念の為調べておくか。後ロジオさんに届けるために写真データを取っておこう。

数分ほど塔の周りを探ったが…本当に何も無かった。

塔の四方八方を写真で撮りデータをフーリエに転送、あの子どもやら機械に強いらしく色々と言おうものを持っているらしい。あの子経由でロジオさんの所に今回のデータが行くはず。

104話

マリアさん曰く封印する為の塔の調査も終わり、何も無い事が判明したのもう少ししたら帰ろうかな、なんて考えていたら前から足音が聞こえる。

「…」

腰に付けていたプロトレイに手を回し、両手で保持した後、セーフティを外し、後ろから来るのか何かに向ける。

「おいおい、よおおがあるから来てみればア…俺だ俺。ゲツテムハルトだよオ」

「…ゲツテムハルトさんですか…はあ…」

ライフルを上に向けてセーフティを付け直し、塔の調査に戻る。

「俺が言うのもなんだがア…おまえ、こんな所で何をやってんだア?」
「そう言い手に装備していたナツクルを外して腰に付ける。」

「何って…任務ついでに変な塔があったから調査してるだけですよ」

「…調査、ねえ…ある意味、導かれたって訳だなア」

「導かれた?…何に?」

「分からないって顔してんなア?気付かないのか?この場に漂う、どす黒い感覚に」

「…どす黒いと言えば変なのが舞ってはいるが…その事ですか？」

「…インや、場の空気がつて事さ。ーーそうか。オマエも見えるのか」
そう言い塔の前に向かい立つゲツテムハルト。

「…それもだが見ろよコレを。すつげえきれえだと思わねえか？ーー
タマラねえよ」

そう言い、話題を逸らしたゲツテムハルトの言動に先ほどマリアから言われた言葉ーー戦没者の塔、と言うのを思い出す。

「…まちどおしいなあ！ーーやつとだア、これでシーナの仇をーー彼
奴の代わりにッ！」

「仇、だって☒」

「ーーそうだ。オレが今からやるーーいや、今からじゃねえがーーエ
ゴだ、オレが今存在する意味の、な。ーーあとオマエの望む様な物は
ココにはねえよ。サア、帰った帰った！」

そう言うゲツテムハルトが手をシツシツとやるのを見たので後ろ
を向いてテレポーターを起動。サーレクスに帰ることに。

「ーーここに、ダークファルスがーー」

「ーーダーク☒」

そう呟くゲツテムの声をミミが捉えたが残念なと事にテレポ
ーターを潜った後だった。

——オラクル船団 ゲートエリア——

「——はい、コレが今回のデータ。全て揃っているはず」

結局俺はダークと呟いたゲツテムハルトの事を管制官には言わなかった。そもそも言わなくてもマグの解析で分かるだろうし。

場所を移してショップエリアを抜けた先にある居住区のいつもの店——ラフリに來ている。

既に渡す相手のフリーエさんは席に着きサンドイッチを口にしていた。対面席には既にオレンジジュースが置いてある。

ふとフリーエさんの腕を見ると見慣れない物が付いて——いや、この場合は手袋、と言うのだろうか？手袋の様なものが手の部分に着ていた。

「——はい。貰いました。——所でユウナさん、こんな話聞きましたか？」

「話？」

サンドイッチを口にしながら続けて言う。

「ええ。——何でもアークスが一人行方不明だとか」

飲み込んで空いた手に形状記憶小型大容量情報記憶装置を手に取り後ろのナノトランサーに放り込む。

「…行方不明なんて多い言っただけ」

そう言い思い返すはラジオが消えた時の話。

「…その行方不明の人がーゲツテムハルトさんらしいです」

「…え」

いや、ゲツテムハルトならついさつきナベリウスで、と言いかけ、その言葉を飲み込む。

「今から少し前にあつたダーカー襲撃から確認が取れないらしくて。メル姉妹に事情を聞きに言っているらしいんですが…」

「…ねえ、フリーエさん」

「…?どうしました?」

「…確かメルフォンシーナさんって10年前の戦いで負傷したんだよね?」

「ええ。その筈です。それが一体?」

「いや。何でもないさ、確認しただけ。うん」

そう言ったフリーエの言葉に考える。マリアさんの言葉ー戦没者の塔ともう一つの役目のある塔。その塔に来たゲツテムハルト。彼は10年前のダークファルス襲撃でー死んで無いとは言えーメルフォンシーナに怪我をさせている。

もし…あの塔に居るのがメルフォンシーナの仇、で合っているか分からないがーであるダークファルスが…いや、でもさつき帰る間際ダークファルスって…。

そこで悩みに悩んだ俺は一度帰ることにした。悩んだって始まらない。第一。どうせ明日も行くことになるんだ。その準備もしいとな。

「…フリーエ。すまん、今日は帰るわ。明日も任務あるし」

「ーあー！何処に行くんです☒まだ話はーもうっ！報酬は振り込んでおきますからねっ！」

テーブルから去りショップエリアに向かう。

後ろからフリーエさんが色々言っているが本当に何か言いたかったらメールでもよこすだろう。ー多分。

「ーメール？フリーエからか？ー総技部から？」

ショップエリアでグレネードの弾や各種手榴弾、ジグさんの所で20ミ리를貰いつつ帰路に着く頃。総合技術開発本部からメールが届いた。

内容は君が奪取した機体の改装が終わった。テストをしたいから来てくれないか。

中身を掻い摘むとこんな内容だった。

来る時間は施設が開いていれば何時でも構わない、とも。

ホバーバイクをナノトランサーから取り出し道路に置く。圧縮状態の六角形から二人乗れるホバーバイクが形を作る。

それに跨り目的地をセット。総技部に向かった。

「ーっすいません、呼ばれたユウナなんですが…」
受付に向かうと女性の方が座って待っていた。

「はい、ユウナさんですね。技術長がお呼びですので、こちらで案内しますね。ーっはい。ユウナさんが来られました。はい。はい？はい。わかりました」

電話を使い技術長と話をし、どうやら彼が来るらしい。

「ユウナさんに迎えを迎えに来るとの事ですので、彼方の席で少々お待ちください」

それから数分して技術長とその仲間が来て機体の改修が終わったから見てくれ、と言われてその後を歩いていく。

「ユウナさんか。やっと出来たよ」

「出来たってこれ…」

そう言い指差す技術長。そこにはトランスポーターに寝せられて横たわっている機体を指差す。地上には一つの武器が置かれている。置かれた武器の周りに作業員が複数囲み、弾の装填や掃除などを行っている。

「何か変わった…所ありますか？」

機体自体には前から見た限り特に変わった所はなく技術長に聞いてしまうくらいだ。

「ああ。大いにあるぞ。前からは分かんがね。ーっ取り敢えず乗ってみれば分かるはずだ。ーっあと、その戦闘服、ナノトランサーは付

「いているよな？」

「え？…ええ」

「よし。後は乗ってみてくれ。そうすれば分かる」

「コーコックピットに入りましたけど…コックピットのインターフェース全く違うじゃないですか!？」

最初に乗った時のように頭部を上げて胴体に収まる。シートに座ると前までであった複数のステイックやペダルが無くなっている。

『そりゃこっちの規格に合うように全面改修したからな。アーマーもアークスが使うアトテクノロジーを発展させた自己修復型ヨクトアーマーに変更した。お陰で頭部ユニット以外はほぼ新造だ』

「そんなに☒」

『いかんせん何時代の代物かも分からないからな。リバーズエンジンアリングは終わったし、こいつを元に新型機を開発計画を組み立て中だ』

「…あれ？でも開発終わったって俺見ましたよ？」

『あれは多分コイツのデータを取っているところを見られたんだろう。計画が練られて設計図が出だした辺りだ。試作機の2パターンビッグフット計画とフラット計画に基づいた設計図が上がっている』

「ビッグフットとフラット？」

『ああ。フラットはそのままコイツのコンセプト見たく機動性と装甲をそれなりに確保。無理な場合は追加パッケージで確保だな。もう一つの計画は…まあ、なんだ』

「もう一つの計画?」

『…真逆の重装甲高火力の案だ。脚部を大型化させてシユミレートさせてはいるもの…設計図を何十回破棄しているか分からない』

『俺でしちやビッグフットの方が好きなんだが…ロマンでアークス死なせる訳にはいかんしな』

「まあ、俺もそれは分かりますけど…」

『だろ?高火力高防御!ロマンが滾るっ!』

「相手にそれ以上の火力、それ以上の機動力、それ以上の火力が現れたら死ぬんですけどね…」

『…そうなるとフォトンを使用した武装でも作る?』

「いや、武器に関しては実用性を取りましようよ、なんせ未知数の兵器カテゴリーだし。最初は実弾だけでも良いのでは?」

『そうだろうと思って演習用の武器も持ってきたぜ。ほら。あそこを見ろ。ーいまだ、機体の横に上げろっ!ーえっ☒違う!演習弾じゃないっ!ーすまんユウナさん。俺が出ないとダメみたいだ。少し離れるから待っていてくれ。ーおいそこっ!セーフティピンを装着前に抜くなっ!』

機体の周りに置いてある物が次々と繋がり一つの武器となる。

『……長！……試作個体重力慣性制御システムと試作対ダーカー因子フォトン転換装甲はどうしますか！』

『あたりめえだ！さっさと入れろ！実戦形式だ！弾もいれろっ！』

『了解！聞いたなお前ら！上げろおおっ！』

そう言いライフルを装着した車両がライフルを上上げる。

「……え？今回動かすだけじゃ？と言うか試作の奴って……」

『大丈夫だ。問題は無い。それ自体の理論は他の分野でも十分に発揮されて、実機も作られている。問題が有るとすれば動くかどうかだ。……そうだ。ナノトランサーを接続、と言うか後ろに背中を合わせてみる』

シートの背もたれ部分を見るとナノトランサーと同じような物が付いている。それに合うように座ると……。

「はい。……おお」

『どうだ？そのH・M・D。ユウナさんの顔の視線の通りに機体の頭部ユニットも動くぜ？』

ナノトランサーを接続すると上から降りてきたバイザーらしきH・M・Dがブラックアウト。そこにPrototype O.P Mod. 0と表示される。

複数のバーが機体データの横に表示。その横に人の身体……この場合は多分俺か。それが表示される。

バーが上がっている横ではジェネレーター出力が上昇。それと同時に補助電源ユニットからジェネレーターに初期動力が渡されて

いく。

ジェネレーター出力が一定ラインを越すと今度はA・P・Uに少しづつキャップされて行く。

バーが最後まで上がり、ジェネレーターの出力が上がりきるとH・M・DにStart・Upと表示。視界がクリーンになる。

「おぉおぉ!」

自分の首を横に振るとH・M・Dに表示される画像も横を向く。

H・M・Dの奥にある大型ディスプレイには期待を前から見た映像が表示されている。

『…大丈夫かい? さつきから驚いた声しか…』

「…こ、これ。もう動きますか? 動く?」

『A・P・Uは常時稼働。フオートンバッテリーで動いているから。まあ立ち上がってみろ。バーお前ら! 離れろ! 動くぞっ!』

「立ち上がるって…ペダルもないのにのどうやって?」

『今の状態は寝ている状態だ。人は寝ているとどうやって起きる?』

「そりゃ手足を動かしてバー」

そう言い途中まで言うとH・M・Dに映る景色が変わる。具体的には起き上がったようなバー起き上がる?。

『そうだ。アークスの戦闘服を通して身体の電気信号を頭部ユニットとコアのS・C・S。バー中枢制御システムが解析と機体に合うようにパイロットの動作を最適化。それらを各A・C・S。バーアークチュエータ制御システムが実質ゼロタイムでやってのける。バー最

も、人の体じや0.2秒ほどと時間が掛かるらしいがね』

機体を立たせ、腕部を見る。機体も考えた動作をトレースする。右手首を回転させようとすると、その考えに倣い手首が回る。

『ー説明を続けるぞ』

そう言う技術長に向けて左手の親指を立てる。

『良し。使い方は分かってきたみたいだな。ブースターユニットは足の裏に小型化した物を2基、脚部に4基、背部に2基の8基だ。その他制御バーニアを持っているが…まあ、これは置いておく。スラスター出力はマージンを取ってある程度の安全をとっては有る』

そもそもそんな出力出すにはこの船は狭すぎるからな、と付け加える。

『…さて。ユウナさん。武器の使い方は分かるかな？』

機体の横に上げられたライフルを手に握る。握ったライフルの上に装弾数がオーバーレイされ、表示される。

「二応レンジャーなんで。ーこのライフルのテストですか？」

既にマガジンは装填されているので大型のコッキングレバーを引いて初弾を装薬室に入れる。

『そうだ。試作ソリッドライフルだ。人の武器をそのまま大きくしたただけだかね。使用弾薬はH.E.D.E.F.。対ダークファルス用の重榴弾だ。炸薬の力でフォトンを撒き散らすぞ。これを食らえばダーカーなんてイチコロよ』

『本当は初速と貫通力を得る為に電磁機構とレーザーユニットを使っ

た複合ユニットを用いたガトリングを作りたかつたんだが…こいつは試作機だ、実験はある程度量産してからにしてくれって頼まれてな』

「なんですその訳わかんないユニットは…」

『まあ作れるかどうかは謎だがな。所詮は武器の真似事よ。本腰入れるにはR.C.S.o.P, Armsやヤスミノコフ造兵廠とかA.C.insとかに各社に協力を求めないと行けないからな。現状は俺たち総技部の作った実弾のソリッドライフルだけだな。装備は』
ライフルを装備して大型格納庫の外に出る。

ガシヤン、ガシヤンと音が響く。

『レーザーライフルも大型化すれば余剰出力を使って放てるんだがなあ…』

『技術長！ユウナさん外に出ましたよ！』

『…！そうか。俺たちも外に出るぞ。お前らっ！ユウナさんの機体の周囲に近づくなよ！踏まれても知らんぞ！』

H.M.D.に投影される人口太陽の光が眩しく手を顔に翳そうとすると機体の手が頭部の前に動く。

「…技術長さん。どこに向かえば？」

『…えつとだな。目の前に仮設の射撃場が有るだろう。そこに向かってくれ』

歩こうとすると機体も歩く。走ろうとすればそのまま走る。

そう言えばこいつ…ちゃんと走っている時空中に居るが、ちゃんと姿勢制御出来てるな。俺の居た前の世界じゃその空中の制御が難

しくて早歩きが限界とまで言われてたが。

『技術長。エネミーは固定型にしますか？動く奴にしますか？』

『ーーそうだな、腕部の反応スペックを調べたい。出来るか？』

『高性能3Dスキャナーがあります。それだけでも充分解析出来るかと』

『分かった。それを今試作の設計段階のフラットとビッグフットにも出来るか検討しておこう』

「射撃場に着きました。指示を」

『了解した。先ずは右腕部に持っているライフルを試してくれ。的の厚さは…いや、今は良い。取り敢えず当ててみてくれ。ターゲットを見れば勝手にターゲットマークをリアルタイムで出してくれる』

右腕に保持するライフルを両手で持つ。よく見ればこの武器スナイパーライフルみたいに長いな。

『試しに撃ってみてくれ。弾薬はーー確か150発程度は言っているはずだ』

ライフルを除く動作をしようとするとH・M・Dにオーバーレイ、真上に表示される。

トリガーを引く動作をするとロボットの指も動きソリッドライフルのトリガーを引く。

バスン、と言う重い音が三回連続で響き、その音と共に即弾着。 3

点バーストで12発ほど撃つ。

「うわぁお…」

『命中したな。どうだ?』

煙が上がっているが頭部ユニットがそれらを透過。ターゲットとされる的は消し飛んでいた。

離れた所で固まって色々データを見ている人達の方を探すために顔を動かそうとする。

機体の中枢制御システム等がそれを検知。機体の頭部を俺の動かしたい方に動かす。

左右を見てー複数のモニターを持ってきて外でリアルタイムで受理しているか場所を発見。

『ー炸薬量が多すぎましたね。見てください。ホログラムのバレル部分ー銃身に大きな歪みがあります』

『この場合は銃身が歪んでと当てたれたユウナさんを褒めるべきか、それとも歪みを感じして修正をしたS.C.S.を褒めるべきか…さて。銃身寿命を考えると炸薬量を少なくしても良いか?』

『いえ。ダーカーは確実に倒せなくては行けないので。ーやはり各社に応援を求めないとダメですね』

『そうだな。餅は餅屋ってやつだな。ユウナさん。もう少しー後一時間くらい実験に付き合ってくれ』

「了解。ーライフルはどうしますか?」

『一度トラックを回す。その上に置いてくれ』

ライフルを上にあげて機体を左右に振りトリックがどこから来るのかを探す。

技術者なのか整備士なのか分からないが一人が戻り、先ほどいた格納庫から大型トラックを持ち出してこちらに向かつてきた。

俺の機体の真横に止まると通信が入る。

『…トランスポーターを持ってきたのか。まあいい。その上に乗せてくれ。次はローどうする?』

『飛行テストをしましょうか? キャスト達のデータを使っているとは言えあのサイズは未知数ですから』

『そうだな。ローユウナさん。次は飛行テストだ。飛ぶように…なんて言えばいいんだ?』

『…ロボゲーみたく飛んで見てくれ、としか』

『おいおい。ユウナさんは女の子だぞ? 無いだろ?』

そう言う通信している奥から聞こえる。分かっている。飛んで見ればいいんだろ?

思い出すは数多のロボゲーの飛ぶ動作。

まずは背部のスラスターを点火。

ヒューーン。と言う少し弱気な音と共に期待が浮く。

少しづつ出力を上げつつ片脚を少し曲げてそっちのスラスターも点火。残った脚の方も火を入れる。

少しつづつ上昇し始めH・M・Dの横にA・L・Tと角度数が表示される。

『おおっ！良いぞっ！飛んだなっ！』

『データ受信感度は良好！良いデータですよ！これ！』

『人型があんなに安定して飛びのか…よく飛べるなあ…』

『よく見ろ。補助バーニアを定期的に噴射して姿勢を制御している。ロボゲートのパイロットみたいだな』

『女の子でビーストで巨乳でロボットの才能あるって…何処の同人ゲーだよ』

『おまえらっ！通信は入ったままだぞ！自粛せい！』

機体を飛ばしながらもー例えば脚を前に出してオーバーシユートさせる機動をしたり、補助バーニアを使ってその場で180度回転したりしてふと気付く。Gー重力加速度が、無い？

「…あれ？Gがない？」

『そりゃ重力制御しているからね。それに今の出力じゃ高くても…30Gくらいだろ』

「ええ…」

『正式採用されれば出力を上げて100Gを越す制御も可能なんだが…データが取れるのがこの1機だけとなると、どおしても慎重になら

ざる得ない』

『さっきのライフルを置いたのも暴発したらマズイからな』

「…ん？なんだ？」

しばらく飛んでいると奥のモニターに映るレーダーに反応が出た。

『どうした？何かトラブルか？』

「いえ…今一瞬レーダーに何か映ったような…？」

『捜査線の誤認じゃないのか？』

「…きのせい、かな。それにしてもレーダーにすら町のデータ入れているとか…用意凄いですね」

『いや。多分それやったのはその機体だ。レーダー波を出して帰ってくる物を元にマッピングでもしたんじゃないか？勝手に』

「…と言うと地図データ無い所でも地図が作れるんですね」

『まあ、機体内で完結可能な支援システムを組み込んであるからな。量産化でどうなるかは分からないが』

十中八九付けっ放しになるだろうけど、と言いながらも他に何か異常は無いかと聞いてくる。

「…特には無いですね」

『よし。飛行試験は取り敢えず終了。今度は地上でホバーでの移動を

してくれ。頼むぞ?』

「了解」

そう言い空中でホバリングしている機体をローメインのスラスターの出力を落としてさつきまで居た場所に帰る。

105 話目

「ダーカーでけえんだよっ！さっさと死ねっ！」

腰に抱えたライフルを撃ちまくり、下部に付いているランチャーのトリガーも引く。

ランチャーの反動で銃身が上に上がるものの、そのまま下に下ろしマガジンを地面に落とす。

それと共に左手にナノトランサーから出したレーザー弾頭が丸い弾丸の装填されたマガジンをライフルにセット、チャーキングハンドルを引き初弾を薬室内に装填する。

空の薬莖がエジエクシオンポートから飛ばされて空を舞う。

銃口を再度ダーカーレーザー俺の腰よりデカイダーカーに向けてトリガーを引く。

プライマーをファイヤリングピンが叩き中の装薬が爆発。弾頭が銃身に沿うように真っ直ぐ進む。

銃身を出るとダーカーの前で弾頭が割れてレーザー中から複数の細かい弾が出てきた。

それが近距离に居たダーカーに当たりレーザーダーカーの中心部に複数の穴が開く。

「レーザーショットシェル使えるぞ！」

ショットシェルを真正面から食い霧となるダーカー。これを作っ

たジグさん曰く『フォトンアーツのデифエーズシエルを小型化、プロトレイ用に試しに作ってみた』との事。その代わりこのマガジンを装填していると殆どのライフル用フォトンアーツが使えないと言っていたが：まあ、そもそもフルオートとセミオート位しか使われないから意味が無い。

迫り来るダーカーの大群をショットシエルで霧とかしながら撃ちまくって数十秒後。

辺りにはチリ1つ無いー！そもそもダーカーは死んだら消えるのだがー！場所で佇む。

ライフルを左手に持ち替えてウィンドウを表示。ナノトランサーからモノメイトを取り出す。

キャップ部分を開けるとにゅ、とストローが飛び出す。それを口に入れてー！。

「ー！おえ。ぺっ！んだよこれ、オレンジじゃねえじゃん」

そう言い手に握るモノメイトの背面ー！色々と情報が載っているところを見てうわっ、と言う。

これメロン味な上に更に炭酸じゃないか、と。

周辺に敵がない事をデユケツトに確認して貰いナノトランサーに入っているモノの一覧を見る。

ズラツと表示されてその中から飲食物をリストに残す。

モノメイト8、デイメイト2。それがナノトランサーに入っている残数だった。

仕方なくこのメロン味のモノメイトをー！ストローを格納すると

連動してキャップが閉まる。ローナノトランサーに入れて前に歩く。

『…あーユウナさん！付近にアークスの反応があります！』

急に通信機。ロー本来なら耳元に付いているナノ通信装置が支給されているのだが、耳に直接入れると言う前世のイヤホンの比ではない深さに入れる、と言う仕様には驚き旧型の通信機。ローヘッドセット型を貫った。ローに声が響く。

「うわあ☒びつくりした…」

『すいません、つい大声で…じゃなくて！アークスの反応が2つ有ります。その周辺には多数のダーカーの反応と動音を探知！』

そう言い周囲のマップを出す。

「また救援か？他のアークスは？」

『そもそも遺跡エリアまで探索許可が下りている方が少ないので…』

「…メセタは弾ませてくれよ、デuketツト」

『それを決めるのは上なので。さあ、決まったのならアークスの救援に向かいましょう』

「そもそも援護の必要性があるかどうかも謎だがな」

ライフル片手に走り、デuketツトの言う通りに二人で孤立しているアークスの方に向かった。

『ロー反応少なくなっています。孤立している二人が倒しているので

「しょうか？」

「わからない。もしかしたら同士討ちとか？」

『ダーカーは基本的には同士討ちはしません。そもそも報告も上がってきてませんし、実例も……ええ。今調べましたが無いみたいですね』

「…そうなのか。ーーよし、高台に着いた、孤立している二人はーー」

『ユウナさんから見て方位3ー3ー5。11時方向ですね』

「…黒煙を確認した。ーーうわあ…超居んじゃん」

視線の先にはーー鬼のような数のダーカーが地中や空から出現している。

その中心に居るものの巨大なソードを片手で振りつつ、空いた片手でガンスラッシュの銃モードで遠距離の敵を撃って居る音が聞こえる。

エコーさんの方はフォイエを複数の敵に放ちつつ近付いてくる敵に対してロッドでガシガシと突いている。

『…照合確認。ゼノさんとエコーさんですね、そちらからも見えますね？ーーどうします？…このお二人なら十二分にこの数を倒せますね？』

「…一応会うだけ向かおう。1人で戦うよりよっぽど楽だ」

『分かりました。お二人の方にも通信をしておきます。ーーこちら管制官のデュケットーー』

「いやあ、助かったわ！流石に俺たちでもあの量はキツかったわ…な？エコー」

「ええ。ここの調査を始めてからだけど…ここ異常なまでにダーカー係数高いわあ…お陰でダーカーも強いしデカイし…踏んだり蹴ったりよお…」

「そうなんですか…」

確かに気持ち大きかったような気がしないでも無い。そもそも近寄られる前に弾幕張れば良いだけだが。

「ま、レンジャーのユウナの言いたいこともわからなくも無い。アレだろ？頭撃てばトブのになんで？って奴だろ？」

「えっと…はい…」

「そうなんだよ、レンジャーは近付かれなければ対ダーカー戦に置いて強いんだよ」

ソードを地面に刺して胡座をかくゼノさん。その隣でロッドを両手で持ちながら周りを警戒するエコーさん。

「そもそも射撃、法撃系のクラスが近接に比べて死ぬ可能性が低い上に近接がエネミーのヘイトを取ってくれるから死にくいつて言うのもあるけどね」

「…まあ、エコーが言った通りだ。だがな、俺はふと思っちゃったんだ。そんなレンジャーが詰められたらどうするのか」

「それでソードを持てるようにしたって言うのだからほんっと、ゼノって脳筋よねえ」

「うるせえ、これでも独学で頑張ったんだぞ?」

「それで独学なのが心配なのよ…」

「本当は刀身がソード並みにあるガンスラッシュが有れば良いんだが…中々合致する武器を出す会社が無いんだわ」

「そもそもガンスラッシュ自体意味不明の武器な気が…」

「まあ、ライフルとしちや弾数不足、近接武器としちやレンジ不足だもんなあ…何とかならねえかなあ…」

「フォースやテクターみたくフォトン飛ばせば良いのよ」

「そうは言うけどよエコー。そう言うライフル型の奴は…ん?どうした?」

「…俺、実弾火器しか触ってませんよ?そんなエネルギー火器なんてあるんですか?」

「ああ…あるにはある、んだが…」

「だが?」

「…さっき私がフォトン飛ばすって言ったじゃ無い?」

「ええ」

「実弾は誰でも扱えるからレンジャーの主力になっているのよ。それで私が言ったフォトン弾のライフルは…安定的にフォトンを供給できるアークスじゃ無いと扱えないわけ」

「因みに俺も試しにと向かったら落ちたぞ。俺のフォトン容量じゃキツかったみたいだわ」

「とまあこんな感じで。色々技術者達もあの手この手で上ージグさんに言ってみるもんだけど中々成功は今の所無し」

「そうなのか？俺はアークスに外部装甲を付けてフォトン容量を上げる実験をして成功したって聞いたぞ？」

「え？そうなの？…私も年かしら」

「エコー…ニューマンでそれを言うって…まだそんな年じゃ無いだろう？」

「まあ、そうね。…ゼノ候補生☒」

「あつー！おまつー！エコーー！」

そう言いロッドを片手に走るエコーさん。エコーさんが言った言葉に切れたのかゼノさんがエコーさんの事を追いかけている。

その様子を見ながら俺はふとんでもないカップルのノロケ話的なのを聞かされたのだろうか？と思っただものの四隅に追いやりゼノさんが使っているソードを抜き取り2人の後を追った。

『…ニューマンって時間の流れが遅いってよく聞きますけど…と言うとゼノさんとエコーさんの関係は一体…？』

「デユケット、そんなのは後だ。2人の後を追うぞ」

『了解、不肖デユケット。ナビゲートしますよ』

「いつもしてるでしょ?」

そう言いウィンドウの中で笑うデユケット。そもそもなんでデユケットは俺のオペレーターをやっているんだろうか?

「なあデユケット」

『なんです?』

「そーいやなんで俺のオペレーターをやっているんだ?」

『何です急に?…まあ、普通に上司からの命令ですよ。成績が良いのか悪いのかよく分からない新人アークスの管制官をやる奴はいるか、ってね』

「…ん?居るか?」

『そう。複数の管制官がーメセタに眩んで行ったんですけどね…全員落ちましたよ』

「なんで?」

『さあ?上司も上司からの命令だからって。んで管制官全員に召集がかかって…』

「んでデユケットが受かったと」

『ええ。まさか私が受かるとは思いませんでしたので急いで引き継ぎをやって…お陰で今は数少ないビーストの中でも更に少ないニユーマンベースのビーストと任務に当たってますよ』

「そうなのか…ん？通信？」

『あ？終わりですか？…えっとこれはゼノさんですね』

「出るわー」

『ユウナ☒今どこにいる☒』

「ひっ☒デュケット☒今ここどこだ？」

『U g 5 4 k L 1 2 ですね』

『デュケットさんか！g55のL11まで来てくれ！マズイことになった！』

『ちよつとゼノ！早く撃ちなさい！』

ゼノさんが後ろを向くとエコーさんがテクニクラー多分フオイエ系だろう、それをひたすら撃っていた。

『おい！ゼノ！お前も早くやれ！ダーカー供を殲滅しなくちゃならんからなあ！…おらっ！』

更にモニターがブレて…エコーさんが撃って居る横に…行方不明になっているゲツテムハルトも居た。

『分かってる！あと絶対にソード持って来てくれ！』

そう言い通信が切れた。

「…しようがない。非常時だ、アレを使おう」

『あれ?…アレってまさか?』

「そうだ、ホバーバイクだ」

『…言いくいんですけどリリーパみたいなD係数が低い惑星なら兎も角、このエリアじゃあフォトンエンジンがダーカーの発するノイズに掻き乱されてー』

デケットが何か言っているがそれをスルーしていつもの様にナノトランサーからホバーバイクを出して目の前に展開する。

展開が完了したホバーバイクに跨り、これまたキーを差し込んで回す。

甲高い呼吸系の音が響き、各種データがホログラムで表示される。

「…よし、掛かったぞ」

『嘘でしょ?』

「掛かった。ほら、マグ越しに見れるだろ?」

マグの方を見るとーマグもしっかりバイクを写している。

『…うそ、フォトンエンジンはダーカーが発する…ノイズって言うか、なんか、こう、すつごいので動かなくなるのが定説なのに…』

「驚いているところ悪いがウェイポイント頼むわ」

『ーもしやあのモデルがD因子キャンセラーを…？いやそんな情報無いし、そもそもそんな物が合ったら大革命必至だし…それに燃料も一般的な物の筈…ううん、分からないわ…』

「デユケツトつ！」

『ああ☒ごめんなさい！私の世界に入ってたわ…』

「…W・Pたのむよ」

『はい、分かりましたよ』

高度を少し上げてスロットルを少し開ける。20キロ程をキープしつつデユケツトの設定したW・Pを進む。

106 話目

「おいつ！こつちにシフタだ！」

「エコー！デバンドも！」

「2人とも五月蠅い！こつちだつて手一杯なのよ！そもそもアンタ行方不明で搜索願出てるのよっ！」

「エコー！そんな事は後だ！周りの奴ら全部倒すぞ！」

「はっ！言うねえ。ーゼノ！勝負と行こうじゃないか！」

「はあ☒ゲツテムハルト、何をいきなり言ってるんだよ！」

「聞こえなかったのかあ☒キル数勝負と行こうじゃないかっ！」

「おまつ！エコーのはどおすんだよ！」

「んなのっ！カウント外だっ！」

「はっ！勝ったら何くれんだよっ！おらっ！」

「そう、だなお！ーオレが何でここにいるか、とかか？」

「そうかい！なら全力で勝たせに行かせてもらおうぜっ！」

「へっ！甘ちゃんが！」

「エコー！下がつてろ！こつからは男だけの勝負だっ！」

そう言いゼノは背中にガンスラッシュを置いてナノトランサーから急いで短いソードを取り出す。

「…ゼノ、てめえ…それを出すとは…本気らしいな」

「そりやそうだ。友が道を外そうとしているのに黙って見てられるかよ」

ただ、普遍的なソードとは違いーそれには鞘が付いていた。ゼノはそれを背中に背負う。

「でもーそれゼノ使えないんじゃない」

「それでもだ。ー師匠が言っていたんだ、コレを使う時は絶対に止めたい相手がいる時だ、ってな」

「おもしれえー！さあ！いくぞっ！」

ゲツテムハルトはナックルを鳴らし、ゼノは背中からソードをーカタナを抜き取る。

「おうー！」

「ああ☒ちよつと、2人とも！」

そんな2人のテンションについて行けなかったエコーは2人から逸れ、後に来るユウナと合流する事になった。

「……」

ホバーバイクを使いデュケットから伝えられたW・P通りに進ん

でいく。

60キロ前後で左右のペダル、ハンドルのスロットルなどを使い進む。

『ユーウナさん、ここから直ぐにエコーさんの反応が有ります』

「分かった、そっちに行こう」

左にハンドルを切り角度を30度ほど傾けて左ペダルを踏み込む。バイクが左にバンクして機首が少しづつ下がりはじめた。

右ペダルを押し込み機首の沈み込みを水平に保ちつつもハンドルを手前に少し引く。

グツと機体上がりー左にバイクが曲がっていたから上に上がりつつ曲がる。

『方位的にはそちらで合っています。ー役160メートル、下方、ですね』

「それ直ぐじゃねえーか！」

曲がり終わると同時に左右のペダルを押し込みハンドルを目一杯手前に引く。

バイクのサイドボディからエアブレーキが迫り出す。それと同時に機首をあげた事により大幅に速度が消える。

「…あ！ユーウナちゃああん！こつちいい！」

『エコーさんは11時の方向ですね』

「分かってる！」

速度がゼロに近くなると推力が下部に噴射され始める。エコーさんに離れるように言って、離れたのを確認してから高度を下げる。

「ユウナちゃん！追いついたのね」

「ええ。所でゼノさんと…声的にゲツテムハルトさんですよね？お二人はどちらに…？」

ホバーバイクを圧縮、六角形の圧縮状態に戻して手に取りナノトランサーに放り込む。

「…2人でテンション上げちゃって奥に行ってしまったの。私1人だとキツイからユウナちゃんも一緒に行かない？」

ロッドを握りながら言うエコーさん。俺は二つ返事で引き受ける。

「分かりました。ゼノさんとゲツテムハルトさんはどちらに？」

「あっちね、2人で奥の方に向かって行っちゃった」

ロッドで2人の去った方を示して俺の方に顔を向ける。

「分かりました。行きましょう」

「……」

「……えっと、ねえ、ユウナちゃん？」

「はい、何ですか？」

「前も言ったような気がするのだけど…砕けた口調で良いわよ？」

「…そう、か。わかった」

「ええ。私としてもそっちの方が話しやすいしね」

「…そうですか。ーあ、そろそろ人工的な足場になるな」

「ええ。この惑星に私達の船団が不時着したって話は聞いた事ないんだけど…何なんでしょうねえ…」

「さあ？分からない事は分からないんで。未知の宇宙人って事で」

「この惑星の原生生物からしたら私達が宇宙人よ」

「そうですねえ…あ、あの変なのーモノリスでしたっけ？そこにダーカーが」

「あの地中のD因子を大気に放出させている奴ね。どう取り巻きを倒す？」

「…エコーさんは何かありますか？」

「…ほら、私って基本的にゼノとコンビ組んでるじゃん？そのお陰でゼノの指示とゼノに危害を加えそうな奴を優先的に倒すようにしているのよ」

「ええ、それで？」

「今までゼノの指示通りに動いていた訳。そんな私が作戦を？」

「…そうですね…こう、テクニックでばーん、って殲滅できません？」

「できなくは無いけど…ユウナちゃんもニューマンの血が混じっているなら出来るはずよ。ほらっ」

「ええ☒俺レンジャーですよっ☒」

「第8世代は武器を握れば使えるの！ーそのクラスを使っている人に比べればアレだけど」

「エコーさん、最後の聞こえていますよ」

「…兎に角。ユウナちゃんも使ってみると良いのよ。そうすればロツドの良さに気付くから」

「俺はテクニックよりライフルの方が良いなあ…」

「そう言わずに。ーさて。私は反対側の残骸の上に登るわ。ユウナちゃんも同じく見晴らしの良いところに。通信リンクは確立している筈だから大丈夫よね？」

「ええ」

「よしっ。さくつと彼処にいるダーカーを倒しましょうね」

—————

「エコーよ。場所に着いたわ」

ユウナちゃんと別れて数分。見晴らしの良い残骸に登り下に居るダーカーを見る。

相変わらずカサカサと首を傾げながら動いている。

『ーはいつ、もう、すこしで…っ。っふっ、ふんっ。ーはあ、はあ…』

「大丈夫？無理なら私が倒しちゃうよ？」

『はあ、いえ、俺も借りた手前使ってみたいんで…ああ…こっちからは無理か…』

そう言う通信が終わり少し経つとー残骸の上にユウナちゃんが歩いて来るのが遠目に分かった。

「…ユウナちゃん？こっちからそっちが見えるわ。ーそこ登れそう？」

『そうですねえ…まあ、登ってみますよ』

そう言い登り始めるユウナちゃん。それを遠目に見つつ上の方に手を掛けたのを見て考え出す。

何でゲツテムハルトはこんな所に居るのだろうか？そもそも此処の再調査が始まったのは10年前から。その前の時は…：確か50年ぐらいだったかな？あの時は討伐したが後が怖いって事で調査出来なくなっていたけど…：何で急に…。いや、そもそもゲツテムハルトはアークスから逃げてまで一体何をしようかと？

『イーエコーさん！こっちも到着しました。イーエコーさん？』

「そこまで考えて通信に驚きこっちに戻る。」

「…ああ、ごめんごめん。少し考え事をね。さて。ユウナちゃん、ロッドは持った？テクニックの使い方分かるよね？」

『バアン！ってやればいける筈です。イーよね？』

「ま、まあうん。そんな感じ。イーさて、やるわよ！」

『りよーかい。イー所でエコーさん』

「そう言い2人でダーカーの居る中央にテクニックを放つ。」

「2人でテクニックを撃っている最中、ユウナちゃんがふと私の名前を呼んだ。」

「なあに？」

「その声に応えつつもロッドを両手で持ちながら先端からギ・ゾンデを放つ。」

「雷が走りダーカーに当たり感電した様に倒れたり仰向けになる個体もいる、」

『ダーカーって…何が効くんです？』

「今聞くのお☒イーきやつ☒」

「その発言と共に大きな火球が降って来てダーカーが消し飛んだ。」

「—————」

「イーはいつ、という事でテクニックの話始めるよ」

「ほんとすいません。ええ…その…お願いします」

炎は汎用性高いから火の玉作って放り込めば一撃つしよ、て思い
フオイエを使ってみたら、いつかのマトイのような火球が上から降っ
て来た。

その爆風に煽られエコーさんが少し飛んだのを覚えている。

因みに今話しているエコーさんの後ろにはー半径2メートルか
ら3メートル位の穴が開き、そこに水が少しづつ流れ込んでいる。

「まず使い勝手の良いフオイエ系のテクニック。コレは炎を扱うテク
ニックね」

そう言い穴が開き水が流れ込んで進行形で池となっている場所に
エコーさんがフオイエを放つ。

「炎かあ…キャンプとか火起こし楽になりそうだなあ…」

そう言い俺は開いた池から目を逸らし空を見る。

「いやいや。テクニックの通りに使わないと火力が出なかつたりそも
そも不発だつたりで使い勝手が微妙に悪いのよ。ーまあ、ユウナ
ちゃんのアレは少しーいえ、全然分らないけどね」

そう言いエコーさんも後ろを見る。

「ーそもそも。キャンプ用の各種装備品は貰ったり買えるはずよ
？」

「…そうなんですか？……あ、ナノトランサーに入っているわ」

「でしょ。さて、続けるわね。次はバータ系ね。そうね…それっ」

エコーさんがロッドを振り上げるとエコーさんの正面に氷の塊が出来上がり、真っ直ぐ地上を走っていき、暫く…多分20から30前後進んで消えた。

「へえ、すごい」

「でしょ？他にはね？」

その他にもギ・バータ、ラ・バータ、サ・バータを見せてもらった。エコーさんのオススメはサ・バータらしい。

「さて。こんな感じかな。ーあ、ユウナちゃん、どの位だった？」

「…えっと、10分くらいですかね？」

「やばっ！追いかけないと！ユウナちゃん！行くわよ！」

「ええ☒あの、雷系のテクニクは☒」

「戻ったら教えるから！さあ、早く！」

「ええ…嘘でしょ、ったく」

そう言い走り出すエコーさんの後を追いかける。ロッドは取り敢えずエコーさんと同じ様に背中にセットした。

「……くそっ！」

エコーさんの後を追っていると小さな声でゼノさんの様な声をミミが拾う。

「エコーさん！ゼノさんの声です！ー多分こっちです！」

「うそっ☒私には何もービーストだからね！案内お願いよ！」

「はいっ！」

「ゼノさん☒一体その怪我は☒」

「ユウナちゃん、デイメイト、モノメイト、その他個人回復キット持っていない？」

「いえ、そんな物は……その個人回復キットって言うのは無いみたいです」

「…仕方ないか。ー」

「ああ、やられたよ…まさかあのヤロー本当に殴って来るとは…」

「ーほら、しっかりしなさい。デイメイトよ。飲める？」

「大丈夫だ、エコー。子供扱いすんな」

「ふふっ、そんなこと言っちゃって。私の中のゼノは何時迄も子供よ」

そう言いなんかピンク色の空間になりそうになるが、此処は遺跡跡地。周りは木々や草、それにデカイ花で覆われている。そんな所でピンク色になられても俺が困る。

「…その、お二人の時間中に失礼ですが…」

「…ああ、すまん。んで、なんだっけか」

「…その傷は？」

「ゲツテムハルトにやられた。ー多分本気の時用に扱える様にしたコレを使って無かったらゲガじゃすまなかつたかも知れねえな…」

そう言いゼノさんは横に置いてあつた武器ー刀を見せる。

「刀☒なんで？」

「ほお、コイツを知ってるのか。ますます師匠みたいだな」

「ちよつとゼノ。ユウナちゃんはビーストよ？ゼノの話だとニューマンなんでしょ？」

「でもなあ…超髪の毛長くて今のユウナみたいな髪の毛の色で、目は…どうだったかなあ…」

「ミミはあ…有るわけないよね…」

「…いやでも胸はエコーよりあつ、ふがっ☒」

「ゲガ人はさつさとモノメイト飲んでゲガを治しましょうねえ？」

そう言い怪我人のゼノにエコーさんがメイトを喉奥まで押し込む。

「ちよ、それは…」

「ーっはあ！おまつ、殺す気か☒」

「ほら、元気になったでしょ？」

「…そうっすね」

「ちよ、ユウナ…」

「さて。ゼノも元気になった事だし。ゲツテムハルトはどつちに逃げた？」

「ああ、向こうだ。確実に。それとな、ユウナに一言言ってたよ」

「ああ？なんです？」

「2人を頼んだってな」

「…俺女なんですけど、メル姉妹の事を頼まれてもねえ…」

「だろうな。だからさっさとあのバカを止めるぞ。エコー、ユウナ。行けるよな？」

「ええ、もちろん」

「多分ね。ーっあ、ゼノさん。これ」

「ああ。ソードか。わりいな。…んじや俺からも」

「そう言いソードを渡すと、ゼノの隣に置いてある刀を俺に渡ししてきた。」

「は？いや、なんで此処でゼノさんの師匠の刀を俺に☒大切な物なんでしょ☒」

「なあに、師匠に似てるからに決まってんだろ？ー」と言うか師匠の子供だったりしてな、はっ、はっ、はっ！」

「そう言い、ほら、貰つとけ、と言い手に握らされる。」

「ええ…刀貰つてもなあ…剣道したこのないし…」

「なんだそのケンドーって言うのは」

「まあ刀の練習する…うん？まあ、練習する訓練ですよ。…うん？」

「そうかあ、訓練かあ。俺もそのケンドーって奴やればカタナ使えっかな？…」

「どうでしょうねえ？正直俺も怪しい、いや、使えないかもしれないし」

「そんな時は銃つかえ、銃。それにいざとなったな2人でお前の事を逃すや」

「ちよつと！私も逃すって言いなさいな！」

「はっ、はっ、はっ！何を言うエコー。後輩を逃すのは先輩の役割、だろ？」

「…全く。ユウナちゃん、こう見えてテクニクも凄かったんだか

らね。いざとなれば2人でゼノの事を援護するわよ」

「そうかそうか！良いねえ。アークスの未来は明るいねえ」

「そんなおじさんみたいな事言わないの。ーさて、ユウナちゃん。準備は良い？」

「はい、行きますよ」

「よし。じゃあ俺の友達を止めに行くか！」

そうゼノは言い渡したソードを背中に装備し、エコーはロッドを片手で持ちながらあたりを見ながらゼノの隣に向かい、俺はライフルを腰に、貰った刀をソードの様に背中に刺して後を追う。

107 話目

「ーそのアークス達。それ以上進むのは余りよろしくないですよ？」

ゲツテムハルトが通ったと思われる場所をデュケットに教えてもらい、その道を三人で進んで行く去何処からか声を掛けられた。

「…アンタは…」

破損したと思われる何かの残骸の上に座っていた男性がこっちに降りて来た。

見た目は薄緑色の髪の変な帽子にグラサンをかけた…変な人だ。

何なんだ、あの帽子は。

「ええ。カスラ、と言う者です。見たところアークスの様ですが…こちらで一体何を？」

そう言う目の前の男ーカスラは言う。

「ああ、ちよつと友達が奥にね」

そう言いゼノさんは普通に対応したが、もう一方のエコーさんは顎に手を当てて数秒考えて小声であ、と言う。

「…あ☒か、カスラさんってもしかして☒ろ、六芒の…☒」

なんかよく六芒って聞くがイマイチよく分からん。まあ、なんか強い人達なんだろう。

「いえ、そんな驚かれる程では。私なんて周りに居るアークスより少し情報戦が得意なだけの取り柄のないーアークスですよ。ーおや、

そちらのビーストは…」

そう言いカスラさんがこちらを向く。

「は？ーいいえ、私は貴方と会った事はその…無いような気がします
が…？」

そう言い記憶のーこつちに来てからの記憶を探したがー会ったことのある人でそもそも緑髪の人は居ないはず。

ーショップエリアにいた様な…？居たっけか？

「いえ。此方でも色々聞いてますよ。複数のオーダーを受けた
りー終いにはアムデイスキア、リリーパ、ナベリウスの現地の草や
花を持ってきては欲しいと言う本当の意味での依頼を管制官を通さ
ずに受けていたとか」

「げっ、バレテラ」

そう言い頭に手を当てながら言うカスラさん。実際ポスで探すと
色々と出て来る。

ーそもそもそう言う事が書かれているサイトを規制しない方が
悪い。実際メセタの量も結構貰えたし。

そんな事を考えていると、エコーさんがえっ？そんな事をしていた
の？と言っていたが仕方ない。地味に報酬高いんだもの。

「…まあ、そこは動植物防疫エリアに預けて欲しい所ですね」

「そうよ、ユウナちゃん。船団じゃ未知の病原体で全滅、なんて事もあ
るんだからね？」

「ああ。過去にアークスシップが消えたんだっけか」

「ええ。ー最も今ではキャンシップ自体に防疫センサーが搭載さ
れているのでそこに反応しなければ大丈夫ですが。ーふむ。脱線
しましたね」

「なあ、六芒の偉い人なのは分かる。だが俺にも止めなくちやいけない奴が居るんです。どうか見逃して貰いませんか？」

「……ふむ。ならば私もそちらに同行しましょう。それならば問題有りませんかよね？」

「まあ、アイツを止めるための戦力が増えるのなら助かる。良いよね？エコー。ユウナ？」

「勿論」

「こつちも」

「だ、そうだ。頼むぜ、カスラさん」

「ええ。此方こそ」

そう言いゼノさんは手を出して握手のサインを出す。カスラさんと言ったニューマンの男性はーー少し困りながらもーーそれに応じた。

「ーーところでカスラはどんな用事でここに？」

「ゼノ！さん付けしないと！」

「いえ。先程も言った通りに六芒と言っても一般アークスより少し強いくらいですから。敬語なんて要りませんよ」

「だつてさ。んで話に戻るが、なんでこんな所に？」

「…3人はここがどのような場所なのか知っていますか？」

「いんや。知ってるか？エコーにユウナ」

「…50年前のー」

「ダークファルス エルダーを倒した場所、よね」

「おや。そちらのニューマンはーエコーさんと言いましたか」

「ええ。伊達にアークスで50ーゴホンツ！ー伊達に勉強してないわ」

「…エコー…そんなくらいで俺は何とも思わないぞ」

「ゼノ…」

「…まあ、お二人の関係はこの際置いておきまして。そちらのーゼノさん、でしたか。は知らないようでしたがここはD・Fエルダーを倒した場所。ーとなったっている場所です」

「は…」

「え…」

「…」

そもそも俺はそのダークファルスとか言うのを知らないんだが。なんか超強いダーカーなのだろうか？

「ええ。貴方達の反応も分かります。ー真実を聞きたくないですか？」

――

50年前の先の大戦――作戦名、巨人落としをアークス及びオラクル船団は実行。

当時2億居たアークスと六芒均衡の内、数名の犠牲と1億2000万人の犠牲により勝った、とされる大戦がされた場所です。

――ええ。エコーさんやゼノさん。貴方達の言いたいことも分かります。

ダークファルス、エルダーは倒したじゃないか、と。

オラクルに存在するありとあらゆるデータ、書物にはそう書かれています。

ですが――本当は、巨人を墜とせなかつたんです。

当時の技術、兵装、武器。そしてフォトン適性の低い当時のアークスでは封印が限界でした。

知ってますか？当時の六芒と今の第4世代ではフォトン適性では第4世代の方が遥かに上なんです。

今より遥かにお粗末な武装でエルダーに挑め、と言った方が分かりやすいかと。

ええ。先程言った通り、此処はD・F エルダーを鎮めた場所。しかし幾ら封印したとは言えエルダーから溢れ出るD因子の濃度は濃くそのままではいずれ復活してしまう。

そこで上層部はあらゆる所にモノリスを置いて、ユウナさんの指したあの物体がそれです。

そのモノリスで地中のD因子を浄化しているのです。他にも特例でこのエリアは原則進入禁止。普通のアークスや一般人が入ったらD因子に汚染されて私達のことを襲ってきますからね。

…それでなんでしたっけ。――ああ、そうです。モノリスでしたね。

それでモノリスを設置した物は良いものの、エルダーのD因子の濃度が予想以上であり、ダーカーが増えてきたのです。

今のままですと惑星ナベリウスをアークス訓練用地から別の惑星――ロノウエやフォルネウス辺りに変えなくてははいけません。

上層部はモノリスを改修する事にしたのですが…ここ最近そのモノリスが破壊されると言う事件がありました。

ええ。そうです。ゼノさん。そのままかです。ある情報を私は入手しましてね。

――

「――あるアークスがかの敵――エルダーを復活させようとしている、と言う情報を入手しまして」

…あ、そう言えばあの仮面って奴もダークファルスって言ってたっけか。そういう意味ではダークファルスと交戦してんのか、俺。

「…話を聞く限りその入手したデータがデマって可能性は？」

などと思っていたらなんか会話が進んでいたらしい。

「こう見えて情報戦は得意なんです。出どころから調べた結果――確率は高い、と出ました」

「…エルダー…もしかして」

「ええ。貴方達の追う友。それが復活させようとしているのかもしれませんが。それとモノリス破壊の可能性も考えられています」

「さて！ゲツテムハルトはそんな奴じゃー」

「ええ。分かっています。ー彼は素業こそ悪いものの他のアークスからは彼を空いている六芒に、とまで推薦される程の人気者です。此方とて調べてはいます。調べた上で分かったからこそ止めに向かうのです。我々4人で」

要約するとあの厳ついゲツテムハルトさんがそのダークファルス：何とかって奴を復活させるかも知れないからそれを阻止しに行くって事か。

「…ヤバイ、少しお腹が…」

そう言い俺の隣にいたエコーさんが腹を抱え始める。…あれ？これ不味くねえ？

「エコー。乗っちゃまった船だ、今更降りることはできねえよ。ーいざとなったら」

「分かっています。女性陣を逃す、ですね？」

「さすが、六芒さんだ。分かっているじゃないか」

「六芒均衡としてアークスを守るのも任務、と言うより使命ですから」

「…と言うことだ。さて、ユウナ。準備はいいよな？」

「…俺はまだ死にたくないんだがなあ…」

そう言い俺は空を見上げる。定期的に飛ぶ原生生物が居るがその

後ろをエル・アーダが追いかけて回っていた。

出来るのならは今すぐ帰りたい。

「なあに、ユウナの適性なら生き残れるって。なあエコー」

「ちよつとー私も心配してよー！ーごめん、今の無しで」

そう言いすつとすぐ静かになるがーエコーさんの手が震えている。

「ーさて。彼が目指している墓標ーエルダーを封印した場所まで移動する間に、今現在起こり得る最悪を想定してエルダーの事を話します」

「エルダーってアレよね…あのすつごく大きかった奴。私もあの大战に参加していたけど…後方の後方だったから映像越しだけ」

「それが今確認できる姿のD・F エルダーですね。ーですが、もし万が一復活していたとしてもあのサイズではないかと」

「カスラさん、もしあのサイズだったら？」

「…今頃私達は生きてないですよ。ーエルダーについて話しますね」

—————

一つ目はD・F エルダー。巨人落としては封印が限界だった小惑星サイズのエネミーです。基本的な弱点はダーカーと同じく赤色のコアですが当たり前の様にカードしてきます。ーこれと戦うのは今は無理ですね。いくらフォトン適性が上がったところで扱う人の練度が低い今では余計に。

2つ目はファルス・ヒューナルと言う人型形態です。サイズは約3メートルから5メートル。攻撃手段は基本的に格闘戦を好むとの事。これも食らったらまず吹っ飛ぶ威力です。

基本的には距離をとって光系のテクニクって感じですかね。

—————

「ーとまあこんな感じで言いましたが…」

「…カスラさん、光系のテクニクって言ってますけど…」

「分かってますよ。今のアークスでも数発が限度って事も」

「え」

そういうカスラさんの言葉に小さく呟く。あれ？確かマトイと…あの武器のテスト上で遊んだ時、マトイがスツゲエ…グランツを撃っていた気が…あれ、アレはフォイエだったか？

「エコー、そんなテクニクってムズイのか？」

「いえ、グランツやメギド系がキツイのよ。他のテクニクなら何とでもなるわ」

「ですよね…となるとゼノさんと私でー」

「でもユウナちゃんならいっぱい撃てそう。さっきのフォイエを見ると」

「…はっ」

そんな事を考えていると、エコーさんが俺の名前を呼び、その後数発しか撃てないグランツをめっちゃ撃てそうとハードルを上げて

きた。

「見たところその腰に装備している武器はライフルで…背中に小型のソードらしき武器にロッド…すいません、ユウナさん、貴女のクラスは？」

「…ロッドとテクニック使えるけどカッターソードは握れるだけなのでレンジャーです」

「…私の知っているレンジャーはライフルとランチャーを使用するのですが…まあ、この際は良いでしょう。使える武器があるのならそれだけエルダーと戦う時に取れる選択肢が増えるはずです」

「はえー、カスラさんってタリスを使えるんですね」

「ええ。任務が任務なので本来なら創世器を持って来たかったです
が…少々持ち出しに苦労しますので」

「と言うとカスラさん、テクター？」

「ええ」

「…ニューマンの男でテクターか。珍しいな」

「創世器に認められてしまいましたからね。使わない訳にはいかない
でしょうと。ー最も、今は持ってきていませんが」

「…まあ、近接俺の支援が2人、遠中近どれでも入れるのが1人。ー
案外行けるんじゃない？」

「慢心はダメです。そもそも今回の任務はかの人の説得及びエルダー
の復活阻止なので。それが無理と私が判断した場合即座に撤退して

もらいます。それ用の機体も私用ですが準備してありますので」

「ひゅー。六芒になると自前の機体まであるのか」

「ええ。ですが使用は緊急時のみです。ゲツテムハルトの説得に成功した場合、貴方達にはこのエリアから撤退して貰いますよ?」

「勿論だ」

「さて。話しながら進みましたが…そろそろ見える筈です」

そう言い俺たち4人は少し見えて来た目覚えのある塔―少し前に階段で弁当を食べた塔の先っぽが見えて来る。

「…ねえ、カスラさん、目的地ってどこら辺?」

「そうですね…此処から後10kmって所ですね」

「ななあ☒…ちよつと遠すぎるよお…」

「まあ、そう言うなって」

そう言う三人の後について行くと…何か金属同士が擦れ合う甲高い音をミミが拾う。

「…ん?何だこの音?」

「どうしましたか?」

「いえ、何か…金属音が…あの、方向…☒」

よくミミを澄まし、その音の方―塔の方に指を指す。

「…まさか☒」

「…戦っている？誰かが？」

「ゼノさん、エコーさん、ユウナさん！緊急事態の可能性がありません！三人は可及的速やかに撤退を！」

「どう言う事だよ☒」

「…エルダーが復活した可能性が高いと見ました。今この地点に機体をおかわせています。三人は此処で待機して撤退をお願いします。ユウナさん、聞こえますか？緊急事態です。…ええ、コードズール、最悪の事態です」

「ちよつとゼノ！どうする☒ダークファルスが復活つて☒」

「…エコー、ユウナは此処に残れ。俺はあのバカに会いに行く」

「ゼノっ！」

「止めるな、エコー。ユウナ、エコーを頼む」

「…いえ、俺も行きます。カスラさん、機体の到着時刻は何時頃ですか？」

「…ええ、ナベリウスに居る全アークスにコードズールの発動要請を管制官に。ユウナさん？機体の到着時間ですか？E.T.A. 30分と出てますね」

「はあ、5分くらいは戦えるから。どうせ撤退するんだ、少しはゲツテムハルトの顔を見て行こうや」

「ユウナ、お前…」

「まつ、ゼノさんには何だかんだで恩を貰いましたし？少しは援護しますよ」

「ーっ！もうっ！後輩にそんな事を言われたら私も行くしかないじゃない！ゼノ！絶対に生き残るわよ！」

「エコー…」

「ーはい、現地にて調査中のアークス三名と合流し、かの者かどうかの確認を。はい…はい、分かりました。では。ー三人とも。宜しいのですか？」

「俺はあのバカをぶっ飛ばす。それだけだ」

「わ、私はゼノについて行くわ…」

「乗っちゃまった船だから仕方ない。ー本当にいざとなったら機体に乗せてもらいますよ」

「分かっています。それでは付いてきてください。走りますよ」

そう言い走り出すカスラ。俺たち三人もー地獄であろう先に走り出した。

108話目 VS 巨躯

「くそっ！なかなか強えじゃねえか！」

『さあ、始めるぞ！果て無き闘争をなっ！』

走るカスラさんに付いていき、塔ーエルダーを封印したと言う塔が見えるところまで走るとー。

「…最悪の事態です」

「…ゼノ、アレが…」

「ダークファルス」

「エルダー…」

目の前ではゲツテムハルトが手に装備したナツクルで突っ込んでくるエルダーにカウンターでナツクルを食らわせるものの吹き飛ばされー上記の言葉を言う。

『むっ、このフォトンには…アークスか！』

「…へっ、その様子だと充分やられたようじゃねえか。ゲツテムハルト」

「うるせえ！」

「ゲツテムハルトさん。貴方にはエルダーを復活させた疑いーまあ、目の前にいるので確証ですが。ーが有ります」

「ああ、分かってるよ」

「…さて、皆さん。アレをーエルダーを今のうちに削りますよ！」

そう言うとかスラさんはタリスを投げてエルダーに攻撃しつつ氷や炎、風などのテクニックを。ゼノさんはソードを握りながらゲツテムハルトの元へ。エコーさんはロッドを構え、カスラさんと同じようにテクニックを放つ。

俺も腰にあるライフルに手を伸ばしー。

『それは止めた方が良い。奴にはそのー刀が効く』

「はっ。」

ライフルに手が触れた瞬間ー自分の声の様な、だが明らかに言っていない言葉が聞こえた。

「どうしたのユウナちゃん！来るわよ！」

「…近接はイヤなんだよっ！」

どうせ何かの縁だ、この際刀を使ってやる。

ライフルから手を離し背中にある刀に手を掛けー抜きとる。
片手で空を切りーエルダーに向かい刀を向けて走る。

『良いぞ！アークス達よ！我をー数十年振りに愉しませよ！』

「もう千年寝てくれっ！」

エルダーがこちらを向き腕を回しながら跳ぶ。

「ユウナさん！危険です！」

そうカスラが言うも、間に合わず刀を頭の前にやり、エルダーの攻撃を防ぐ。

「んのっ…っ！っだあ！」

力を込めて振り払いエルダーが後ろに飛んだ。

「…おあ…なんで、刀を、俺が使えてる？」

「ユウナちゃん！下がって！」

そう言いエコーさんとカスラさんが俺の左右から出てきてテクニックを放つ。

「…つたく、やはりお前は俺…いや、俺たちのライバルになる奴だよ、全くなあ」

「うるせえ、ゲツテムハルト。まずは礼を言え。…お前、結構限界だったろ」

「うるせえ、ゼノ」

「…なあ、なんでアイツを…エルダーを復活させたんだ？」

「…笑うなよ？」

「そうだな、盛大に笑ってやるよ。…生き残れたらな」

「…俺は…シーナを、シーナの仇を取りたかった、ただそれだけだ」

「…ええ☒ちよつとゲツテムハルト！そんな訳で復活させたの☒」

「そうだよ、わりいかよ」

「悪いもなにも！シーナちゃん、とつくにそんな事忘れてアンタの隣で戦うって言って頑張ってるのよ！」

「は？」

「シーナちゃんはーアンタと歩く未来を見てんのに！なんでアンタは過去をーききゃあ☒」

「エコー！」

「…ゼノっ！離せ！俺もやるぞ！」

「だけどっ…！」

「ほら、お前は彼女ーエコーの所に行つてやれ」

「…っ！ゲツテムハルトお！戻ったら奢れ！良いな！」

「おう！」

俺がエルダーに近づいてひたすら刀で切っている間、何回後ろの方で友情が熱くなってるようなんだが…。

「おい！そんな事やってないでっ！援護をーうお☒」

後ろを一瞬向いた瞬間、目の前に闇波が飛んできてー咄嗟に刀でガードする。

「っー！」

『はっはっはっ！まだだ！まだ私の闘争は終わらんぞ！』

「ゲッツテムハルトさんとゼノさんはユウナさんの援護を。私とエコーさんで三人を援護します。ーエコーさんはテクニックをフォトンを使い過ぎて死なない程度に撃ちまくってください」

『丸聞こえだぞっ！アークスウウウ！』

「来ます！」

「行くぞユウナ！」

「行けるな！ユウナ！」

カスラさんとエコーさんが後ろに下がり、その変えで左右にソードを持ったゼノ、ナツクルを手に嵌めるゲッツテムハルトの2人が陣取る。

エルダー本体と周りが爆炎や落雷、氷を発生させてそれを風系のテクニックで飛ばしたりと色々と攻撃する。

『さあ！来い！』

—————

「全アークスにコード Z 発令」

「ナベリウスに向かうシップに着陸禁止令をだせ。全回線でだ！」

「撤退用のシップのみ発艦令を！」

「キャンプシップナンバー52350、現在惑星ナベリウスには着陸

「禁止令がー」

（ーユウナさん…）

「デuketトちゃん！手が止まつてる！」

「は、はい！ーキャンシップナンバー51987、着陸許可を出します！」

「非番のパイロットを呼び戻せ！スクランブルを掛けろ！」

「戦闘艦、空母共に火器管制装置の一斉安全装置の解除を知らせ！」

「キャンシップナンバー52000以降の機体は惑星ナベリウスに急行、残されたアークスの救助に迎え」

「CAP中の機体にも防空識別範囲に穴が開かない様に入れ替えて帰艦させろ！相手はダークファルスだぞ！」

「第023飛行小隊、056飛行小隊の離艦を確認」

「出せるものはなんでも出せ！50年前の再現と行こうぜ！」

「シップソンから第159小隊、及び178、179飛行小隊の離艦を確認」

「シップユルとニイドから2個飛行隊の離艦を確認」

「総合技術開発部に連絡を入れろ！動かせる物は何でも出せ！」

「緊急事態発令！オラクル船団の保有する惑星、ナベリウスにてコー

ドZ、ズールが発令！ナベリウスにて任務中のアークスは速やかにー」

ー

「うわあ☒」

『ふんっ！』

「ユウナ！大丈夫か☒」

「ゼノっ！横に飛べっ！」

俺が吹っ飛んで、エルダーが飛びゼノが間に入ろうとして更にゲツテムハルトに吹っ飛ばされる。

「おいっ！ばか！いてえだろお☒」

「お前のソードじゃコイツの攻撃を防ぎきれないだろっ…っ！おらあ！」

「ゲツテムハルトさん！避けて！」

「っ☒」

吹っ飛ばされた反動で木に寄りかかりながらライフルに装備されているグレネードランチャーに弾ーH・Eを装填、トリガー引く。避けてと言う声と共にゲツテムハルトが横に避けてー吹っ飛ばして立ち上がるようにしているゼノの上に飛んで倒れる。

「ーいっったっ！おまつ！ばかっ！どけて！」

「うるせえ！今から立つからー」

「ゼノ！ゲツテムハルト！」

「エコーさん！グランツを！」

そう言うカスラさんがエコーさんに言い、エルダーの上からー光の矢？が数個降って来るが：エルダーにはダメージを与え切れていないみたいだ。

『そんなものか！アークスは！』

「うるせー！さっさともう数千年寝てろ！寝ろっ！」

『はっはっはっ！そっちの小娘は威勢のいい様だな！』

H. Eー榴弾がエルダーの腹部に着弾、爆発するもー爆炎から出て来たのは傷がほぼないエルダーだった。

「まじかよっ！」

両手で持っていたライフルを片手ー左手に持ち、右手に刀を持って回りながらエルダーに向かってライフルを撃つ。

無反動ゆえのバレルの先に確実に当たる20ミリのテレスコープ弾がエルダーの表面でチカチカと光る。

貫通はしているし、表面で炸裂しているが意味が無いらしい。これ
ダークファルス用の榴弾じゃねえのかよ！

『はっ、はっ、はっ！中々痛いでは無いか！久しいぞーこの感覚ウー！』

「なんだよ、アイツ！痛みすら意味ないのか！」

「つまり、ドMって事☒」

「ちげえだろエコー」

「ゲツテムハルトさん、こちらへ。ユウナさんが囹のうちにレスタを掛けますので」

「おう、あのバカ2人にも頼む」

そんな俺を他所に三人は回復し始めている始末。なんで一番新人の俺が殿やつてんのお☒

『さあ！行くぞっ！』

「ーッ！」

そう言い背中中の武器を手に持ち突っ込んでくるエルダー。ライフを手放しーーナノトランサーに戻しーー刀を両手で持ち突っ込んでくるエルダーの武器にどうにかして当てる。

金属同士が擦れ合う音が鳴りエルダーの武器ーソードと俺の刀が火花を上げる。

「っ！」

『ほお！我の一撃を堪えるとは！アークスも強くなったな！』

先程エコーさんたちの撃っていたテクニクっぽい物をエルダーに当てようとする。

そんなあやふやな物でもテクニックが発動してエルダーに複数の矢が刺さる。

「ねえ！ユウナちゃんのアレ！」

「ほお、あのグランツ系をあれほど…」

「ほお、やるじゃねえか」

「おう！ゲツテムハルト！俺たちも行くぞ！」

「…あの量のグランツを…どうやって」

「もしかしてあの時の…ユウナちゃんが片目失った時のあれかな？」

「あれとは？エコーさん」

「ユウナちゃん、少し前に怪我をしちゃって。片目を失ったの。それを治すために…確かマトイちゃんよね？に遺伝子を貰ったとか…」

「…マトイ、さんですか」

「ええ。ユウナちゃんみたいって訳じゃないけど何か姉妹みたいな感じよ」

「そうですか」

そんな4人を傍目に後ろに逃げてソードを持っていない片手を地面に叩きつけて赤黒い焔が出来上がり俺の方に向かって来る。

嘘だろと思いつつ刀片手にその焰の柱の間を走り抜けて刀を突き刺す。

『はっはっはっ！まだまだ遊びは終わらんぞ！』

突き刺す寸前で空いたソードで防御される。そのまま回し蹴りを食らい横に飛ぶがー空中で空を切り地面に刀を差して止まる。

『はっ、はっ、はっ！よもや終わりではあるまい！小娘よ！』

「ーはっ！終わるならさっさと終わらせて帰らせてえぜ」

「ユウナあ！大丈夫か！」

「おいおい！そんなんでへばつちまったら今後が心配だゼエ？」

「ゼノ、ゲツテムハルト…」

『ほお。こちらに来たか。我もそろそろ楽しめたしー終わりで行こうか』

そう言うのとエルダーのソードが赤黒く光りだす。

「ーまずいっ！三人とも避けて！」

『オオオオオツ！！答えよ深淵！我が力にいい！』

赤黒く帯びたソードが縦に伸びてーそのまま俺たちのいるところに降って来る。

俺が左に、2人が右に避ける。

その後エルダーが体の後ろにー薙ぎ払いをするかの様にソードを持ち直しー横にソードが振ってくる。2人は空に飛ぶが、俺はそのまま地上でガード、フォントとか言うなんだかよく訳の分からないものをー兎に角願い、刀に纏わせてガードする。

『はっはっはっ！これも防ぐか！やるなあ ア！小娘エ！』

そう言い空に飛んで、刀を上から降り下げようとするエルダー。ガードを解除し、上から降ってくるエルダーの胴体ーその中心部に赤いコアが見えた。

そのコア目掛けてー刀を突き刺す。

『くふっ！くふふっー我もまだ未熟、と言う訳か』

頭の下あたりに刀が刺さりコアが消える。

「やったか☒」

「はあ、はあ、おま、ぜの、それは…」

開いた手で俺を持ち上げ刺さった刀ごと抜き取り少し離れた所にスツと地面に降ろすエルダー。

『…だが今の我は本調子では無い。此処は一度引こう。ーそこの小娘』

「…はあ、はあ、んぐっ…んだよ」

『良き闘争だったぞ！』

そう言い少し離れ後ろに飛びーいつかの仮面の様に消えるエルダー。

「おま、ふざけー」

そう言い手に持った刀を地面に刺して立とうとしてーそのまま刀を手に持ったまま倒れた。

ーーーーーーーーーーーー

「……」

すつと次に眼が覚めるとーいつかの部屋、多分メデイカルルームなのだろうと判断する。

白い布団を蹴りベッドから降りてー何か違和感を覚える。

視線を下に、と言うより服を見るとー肩丸出しの長いスカートの様なものを着ていた。

服の上部分を手で開きーなんかやたらめっちゃ小ちゃい…この、胸の先端くらいしか保護出来ていない物を見てええ…と声を上げる。

まさかと思ひ下も確認するとーなんか変なーとてもパンツ、とは言えない下着になっていた。

冗談だろ、と言いなながら本当にー局部だけなのかと手で自分の尻や胸を触るがー何か見えない力で保護されている、とかは無く素肌に手が触る感触を感じた。

そう思ひこの服ー後にエグザムリーシュと言う病院服と分かつ

たがーのデザインについてふとおかしくないか、と更に重ねる。

窓際に行き外を眺めながら思う。あの後どうなったのだろうか、と。

—————

「撤退☒」

この状況で☒と続けながらテクニクを放つエコーとカスラ。

「そうです、エコーさん。今ーエルダーが撤退した今、私達が5人で撤退出来る可能性が高い場面は今です」

「とは言ってもな…」

そう言い周りを見渡すゼノ。周りには数え切れない量のダーカーが5人を囲っておりカスラの機体が置いてある場所まで移動出来な
いでいた。

「…」

「ゲツテムハルト、ユウナちゃんの調子はどう？」

ナツクルを外しユウナを肩に背負っているゲツテムハルト。

その後ろからエコーが話しかけた。

「まだ覚めねえ。まあエルダーと実質一騎打ちだったんだ、D因子で
やられている可能性もある」

「なら早くメデイカルルームに行かないとー」

「行きたくても突破出来ねえんだよっ！」

そう言いーゲツテムハルトからでは無くゼノから声が出てくる。

「ゼノさん。そこまで。――仕方ありません、彼女に頼みますか」

「彼女？」

「ええ。――マリアさん、聞こえますか？」

『おうよ！』

そう言い――空からキャストが降ってくる。そのままパルチザンをダーカーに突き刺し別のダーカーに投げ飛ばす。

「マリアのヤツ…早いんだからっ！」

そう言いもう一人――白髪のポニーテールの子がワイヤードランスを振り回してダーカーを切る。

『ほらっ！こっちだ！来な！』

「皆さん。彼女の後に付いて行きましょう」

「おう。エコー、ゲツテムハルト、離れんなよ！」

「分かってる！」

「あっ！こらっ！私を抱えるなあ！」

何を思ったのかゲツテムハルトがエコーを開いた手で抱え込み――2人を背負ってカスラさんの後について行く。

「はっははっ！そりゃ丁度いい！カスラさんも」

「ええ」

そう言い5人プラス2人の計7名はダーカーの包囲網を突破。

カスラの所有する機体にてナベリウスから撤退。オラクル船団へと帰艦した。

—————

複数の車や飛行艇、ホバーバイクが道路や空を飛んでいる、と何度確認したか分からないこの船——船団の技術を思う。

——最もその内の一つのホバーバイクを貫って使ってるんですけどね。

そう思いながら外をボーツとみていると——不意に空に黒い靄が見えた。

「んあ?」

そう変な声を上げると同時にデバイスから音になる。

『緊急事態発生。オラクル船団内部にてダーカーおよびダークファールの発生を確認!全アークスはこれの討伐及び一般市民の救助に迎え。繰り返します。緊急事態——』

テーブルの上に転がっていたデバイスを手に取る。そのタイミングで病室の窓が開き看護師が緊急事態ですので避難を、と勧告してきた。

分かったと言い少ししたどたどしい歩きで看護師の後を追った。

ふと此処で自分はアークスです、と言った方が良いのだろうか？と思っただがそもそも多分あのーでつかいダークファルスと戦った後に倒れて病院に運ばれたって事だから多分、今はアークスではない、そう、療養中なんだと言い聞かせて看護師の後を追う。

本心はもうあんな化け物と戦いたくない、って所だけど。

109 話目

「さあーこつちです！早くバスに！」

病院内に残っていた人を乗せてバスが動く。どうやら俺達が最後だったらしい。

良くもあんな速さで…敵らしき機影を見たのは数分前だぞ？

バスに乗せられシエルターに向かっているらしい。その間も街中で複数の光弾ー多分対空戦車か何かだろう。他にも敵がいるエリアに向かう装甲車も見れた。

「くそつ、少し前に緊急事態って出たと思えば市街地へのダーカーのワープだって?!」

「大丈夫よね☒私達死なないわよね☒」

「そこはアークスを信じるしかないわ…」

「大丈夫だからね？」

慣れない足取りでー多分この様子だと結構な時間を寝ていたのだろうか？ーロードライバーの方に向かい座る。バスには既に数十人中には子供も数人ほど居る。

「どうせならもつと寝させて欲しいがねえ。ロードライバーさん、あとのくらいでシエルターに着く？」

道中には複数のアークスがライフルやソード、ウオンドにロッド等多彩な武器を持ちつつ市街地各地に向かっているのが見えた。

「さあな、生まれてこのかなオートで俺は座ってるだけだったからな。正直今でもおっかなびつくりだよ」

「ちよつとーちゃんと前見てーほらっ！」

そう言い目の前に赤黒い塊が落ちてきてー道路が溶けた。

「うおつとー！」

そう言いドライバーがブレーキを踏み、プシューと言う音が聞こえ止まる。

「ーありやエルアーダだったか」

窓の外から何処から放たれたのかを探しーバスの前を12時として3と4時の間にそれらしき機影が見えた。

「知ってるのかい、お嬢さん」

「おじよーいや、今はそんな事はどうだって良い。ーアイツはエルアーダだ、確かさっきの塊を放ってくるしーほら、あの下の赤いコア。あそこからレーザーも撃ってきたはず」

何回か交戦したことがあるが：毎度毎度フォトンが守ってくれるとか戦闘服のアトなんとかが防御してくれるとか言うが、それでも当たるもんは怖いし痛い。

「冗談じゃねえ。さっさとずらかるぞ」

そう言い十字路をバックして左側の道路に入るバス。

「ったく、さっきの対空戦車は何をしてんだ？」

「さあな、そこはアークスに聞いてくれや」

そう最後に言いドライバーは黙る。

アークスに言え、か。

そもそもこんな中身が一般人より遥かに低い俺が良くもまあここまで生きてこれたなど。

この身体になってアークスをどうにかやって来たが：戦う時は帰ることを第一に考えて帰るようにするが：ダーカーや原生生物と交戦した日にはもう布団、いや、ベッドか。そこでガクブルする日々。

親は多分居ない、頼れるの人は居ない。同居人は居るがそれは所詮他人。

自分の秘密である中身は男、と言う事を心に閉じ込めて生きて行く。

ジョーダンじゃない。人って言うのは人に言えない事ほど他人に行って同意か慰めて欲しいものだ。

ーだがこれは違う。いくらこんな科学力が発達した人種：人種か？いや、まあ船団でいい。船団でさえ魂や精神のみが他の場所からワープしてきて別の性別の人に入りました、なんて聞いたら頭のおかしい人だと思う。俺も外面だけは同意しつつも内心じゃええ：となるに違いない。

はあ、同居人のマトイやデケット：は管制官だから仕事に出ているとしてマトイの方は無事に逃げられただろうか？と窓の外を見ながら思う。

「：そもそもユウナって誰だよ、俺の名前はー」

そんなー！本当に誰にも聞かせる気の無い小声はバスの走行音と自走対空砲にかき消させた。

数分ほどして避難場所らしき所にバスが着く。そこには複数の市民の車、それに列が並んでいる。

「さあー着きました！皆さん降りてください！」

そう言うドライバーや看護師の後を着いてバスを降りる。周りには軽い荷物を持った人が沢山いてー。

そこまで見回しふと見た事のある大型のトラックが見えた。

「ユウナさん。お身体に支障は？」

「…ああ、いえ。すいませんが少しーあこトラックの方に行きたいのですが…」

「あのトラックに？ええ、分かりました」

そう言い離れてー！少し、いや10秒ちよつと経つと戻ってきた。

「取り敢えずチクカさんにはいったので。あのトラックで間違い無いんですね？」

「ええ」

うなづき肩を貸してもらいそのトラックに近付いた。

「ーダメですねえ。何度やっても起動しない」

「分かってる」

「各動力部、ジェネレーター、各種ユニットのチェックはグリーンを出しています。ー外部からのチェックですが」

「…はあ、やっぱりユウナさんを呼ばねえとだめかねえ」

「今からですかい副班長？あのお嬢ちゃんアークスですよ？防衛に出ているに決まってますわ」

「そうは言ってもだなあ…このデカブツを動かせるのはあの子しか居ないんだぞ？」

「そう言つて副班長、珍しいビースト見たいだけじゃねえの？」

「う、うるさい！さっさと仕上げないと班長にドヤされー」

「…やっぱり副班長さんですか☒」

「ぎよえええ！す、すいませーん！はんちよ…あれ？ユウナさん？」

「あれ？ユウナさんじゃないですか？どうしてここに？」

「いえ、まあ…少し怪我…怪我？をしまして。それで入院していたらこの事態に」

「と言うことは副班長！」

「ああ！入院中の所悪いんだがコイツに乗ってくれねえか？」

「…確かに俺は動かしましたけど…他のアークスは？」

「全員、とまではいきませんが防衛に駆り出されてしまいました」

「そうなんだ、今この場に居る中で一番戦える可能性が高いのがユウナさんなんだ。――最もアークスだし当然と言えば当然だが」

「ええ☒貴女アークスだったんですか☒」

「…いや、病院ならカルテが何かで分かるでしょうに…」

「すまん！頼む！もう班長にドヤされるのはごめんなんだ！」

「ふ、副班長!?!?」

「…わかった、分かりましたっ！乗りますよ！」

「おお！よっしゃ！お前らっ！各種手順は飛ばせ！ユウナさんを出すぞ！」

「おう！」

看護師にコックピットまで付いてきてもらおう、と言おうとした時、副班長から一言言われる。

「ああ、ユウナさん。その服――多分ナノトランサー付いてないから他の服に着替えてきてくれる？」

「え」

「いや、だって少し前に乗った時に言ったじゃん。OSとIUを変えたから乗るにはアークスが使う戦闘服に付いているナノトランサー

が必要だって」

「…マニユアルとか」

「ない！そもそも考えてみる？あのサイズーまあアレでも小さい方だが、アレを完全マニユアルで動かすのに何年かかると思ってたんだ？」

「…う」

「そんなアホな事をやっているんだったら戦闘服に付いている神経パルスや自然に体を動かそうとする動作をナノトランサーを通じて機体のSCSにブチ込める」

「…負傷したアークスとか居ない？」

「…ええ、少し聞いてきますね」

「頼む。ーはあ…」

そう言い輸送車の横にある簡易的な椅子に座り空を見上げる。

音が遠いつて事は少なからず戦地からは遠いはず。少しは休めるだろう、なんて思ってたらまさかの逆戻り。

「俺は楽に生きたいだけなんだがねえ…」

そう言いそう言やこれに乗って防衛戦に出たら金ーメセタつて出るのかなあ、と思いつながら看護師とそれに付いていったメカニツクマンを目の端に止めながら思った。

数分だか10分程度だか分からないが、少なからず5分は経ってい

たはず。

4人程人が来てー中央の頭に包帯を巻いている人が俺にアイテムー圧縮状態のモノを渡して来た。

「これは？」

「戦闘服よ。ナノトランサーも付いているし、中身のアイテムは全部私の倉庫に送ってある」

そう言われて展開するとーえ、これは…。

「どう？初期戦闘服をどうしようもなくって捨てられなかったのだけど…どうせ私は着ないしアークスを辞めて数年経つんだわ、貴女にあげる」

そうした方がこの服も喜ぶでしょ、と言い俺に押し付けて頭に包帯を巻いた人は帰っていった。

手元には初期服ー後にネイバークオーツと分かったがーを着て引く。

「ええ…これ…服う？」

そう言いデバイスを弄り、空中に浮かぶウィンドウに今の俺の姿が映る。

「うっはあああ！服眼ですなあ☒」

「おい！副班長を止めろお！」

「煩いっ！そもそもビーストが居ないのがいかなのだあ☒」

そんな暴走する人を尻目にこのー痴女の様な服…服？を着る、と言うより付ける。

着終わった後に言いたい事は…何この服、もう2度と着たくない、だった。

大きく開いた胸元。お臍や太もも部分に布が無い。背中に手を回せばお尻や背中半分素肌である。

そんな事を思いながらふと、明らかに俺より重症なのにあの人は大丈夫なのだろうか？と言うかあの人こんな服を着て生き残っていたのか…何気にベテランだったのだろうか？

「乗りました。ー後後は？」

コックピットに座り込みナノトランサーの接続を確認した後、頭の前に何か降りてきて、頭を固定した。

「え何これっ俺知らないんだけど」

『身体を固定するための固定器具だ。試しに目を瞑ってみろ』

言われるがままに目を瞑る。ーすると瞼を閉じているはずなのに外の景色が映る。ーん？

「なんか…高くない？」

『そりやそうだ。君のしている視界はその機体の頭部から得られたデータを元に構成されているからな』

「…え？それじゃあ…」

『…そうだな、フォトンを扱える適性が少しでも有ればコイツは手足の様に動かせる』

そう言う副班長の言葉を聞きつつ腕を上げる。機体の頭部から得

られる視界も当然腕を上げる。

そのまま人ではできない挙動、プラモデルなどで見る手だけを回す動作を思い浮かべると当然の如く機体の手が回る。

「うお…すげつなあ…」

『少し前に乗った時は最適化があまり進んでなかったからなあ…今回は行けると思う。という事で立ってみてくれ』

「立つって、どうやって?」

『普通に立つ動作を思えば出来る』

そう言われてついに足を上に伸ばし勢いを付けて地面に叩きつけて上半身を起こす方法をやろうとして、目の前に警告を意味する Warningと言うアークス文字が出て来た。

『こつちでも確認した。きみい、変な方法で起きようとしなかったか?』

「…いえ、そんなことは…流石に足の反動を利用した起き方はダメか」

『そんな起き方したら脚が壊れるでしょうに。仕方ない。ブースターを使つて起きてくれ』

そう言いわれてもブースターを使った起き方って…脚部がキャストの人やフルキャストの奴らじゃねえとわからねえだろう、と思いつながら某ロボットアニメの様に横になっている機体の横に手を置き、片足を地面に付けて少し起き上がる。

その後地面に着いた手に力を入れて上半身を起こし、半分程起き上

がったら腕の関節部分を地面に付けて更に起き上がる。

完全に起き上がった後にピーン！とでも頭部のカメラ部分を光らせたかったが…そもそもコイツ複眼だから意味ねえや、と思い直し、周囲を見渡す。

『よし、動いた上にちゃんと立てたな。おい！コイツ用のライフルとソード持ってこい！』

そう言うのと脇に止まっていた車の荷台部分が開き、中からライフルとソードが出て来た。

「あれ？コイツが持っていたガトリングとかは？」

『あれな？想像以上に劣化が激しくてな…データと3Dデータと弾のサイズだけ取って廃棄したわ』

「ええ☒」

『大丈夫だ、コイツのO・Sはコッチ仕様に変えてある。バグやO・Sに前のデータが残留してない限り問題ないさ』

「ほんとに？」

『ああ、それと。近接用にソードを出したが、そいつの腕部に高出力のレーザーブレードの発振装置が付いてるからもしソードが壊れたらそいつを使ってくれ。覆ってあったぶんライフルやガトリングよりは劣化は無いはずだ』

そう言われ左腕を前に出してローボゲーの様に刀身を想像するとロー腕部の装甲がスライドしてプラズマが発生。数秒ほど刀身を

形成した。

『見たところ結構な出力アップを果たしたな。これもフォトン動力炉に変えたお陰かあ?』

『でしような。ーえええええは、班長』

『おう。あの機体、動いているって事はユウナさんが乗ってるんだろ? さつさとライフルとソードを使って市街地内にいるダーカーを倒してくれ。今回のこの戦闘で実地試験と行こう』

『ええええだっってアレはまだダーカー汚染にどのくらい耐えられるかー』

『分かっている。その為にコックピットブロックだけ別系統にしたんだ。ユウナさん。危なくなったらバイルアウトしてくれ。私達はその後此処にいる民間人をゲートエリアとショップエリアに連れて行き保護する』

『確かにあそこなら嚴重ですしシエルターよりよっぽど安全かもしれないねえ』

そう言い空いている整備士や看護師、取り敢えず動ける人がコイツが載っていた車に乗せるだけ載せている。

その様子を頭部ユニットを通して見ているとこの痴女服を渡してくれた人と視線が合う。

親指を立てながら車に乗っていくのを見送るがーもつとマシな服は無いのだろうか?

足元に警告表示が出て何事かと覗くとー複数の子供が群がって

いた。

「あ、ああ…その君達。その、あれだ、もう少しで動くから危ないぞ？」

そう、優しく語りかけると喋ったとか動くのとか色々言ってきた。

「そうだぞ？動くと言いつつ踏み潰されちゃうから早くあのーそう、あの車に乗りな？」

そう言い車を指差す。が、全然乗ってくれない。

「…副班長さん？足元の子供をどかしてくれないか？」

『分かった。もう少し待ってくれ。ーん？なんだこの音…？』

「音？…レーダーに点？敵？」

『くそつ、ついに此処まで来たか！班長！』

そこまで言うと言通信が切れる。レーダーからの情報を頼りにライフルを構える。

方位は2・5・6から3機。地面から離れて高度が50と出ているから飛行型の筈。なに、こっちは大口径ライフルに物理ブレードとプラズマブレードがあるんだ。何とでもなる。

そう自分に言い聞かせて動こうとした時。もう一度警告音が。

「ーえ…まだ居るの？」

足元にまだ居る子供達。これじゃ動けない。

「おいっ！足元にいる子供！今からダーカーが来るから！早く中に！」

そう言うのと泣き出す始末。つい班長と副班長の2人を呼ぶがー
反応なし。

「ああっ、くそっ！おい！耳塞いでくれよっ！デツケエ音なるからなっ！」

そう言いさらに接近してくるダーカーに対しトリガーを引く。

甲高いあの音共に弾丸が発射されー
視界にはエルアーダとブリアーダとネームが付いている。

その場で動けないから固定砲台とかしひたすら連射して攻撃の際を与えないようにする。

重臣から曳光弾がダーカーに対し伸びていき、撃ちながら弾道修正をかけて漸く当たり始める。

外れまくった曳光弾は数キロ進むと自壊するようになってい
るらしい。遠くで連続した爆発音が聞こえる。

「はんちよおお☒まだああ☒」

『ー、ー』

「応答無しかよっ！くそがっ！」

ダーゲットに俺がなったのかブリアーダが後ろに下がり車の方に向かっている。エルアーダの方は機体の周りを周回して腕らしき物で攻撃してくる。が幸いな事に下の子供には手を出していない。

ブリアーダを右手で狙いつつ左手のブレードを使いエルアーダを追い払おうとする。がいかせん動けないのが辛い。

『ユーウナさん！ミサイルを！ミサイルを使い！ーうおー』

急に聞こえたかと思えばま出して不通になる通信機。ミサイルだあーんなもん何処にあるってんだよ！

そんな俺の思考を読み取ったのかライフル下部のリボルビング機構が動き始めー機体の周りをウザったく飛ぶエルアーダにロックの文字が。

その状態でトリガーを引くとポポポシユ、と言う音と止めにミサイルが発射。それを感知したエルアーダ二機が速度と高度を上げて回避しようとするくる回る回りするがー見たところコイツのミサイルの燃料、途切れないっぽい。

推力を失わないミサイルはエルアーダに当たりー爆散した。

エルアーダが片付いた事でもう一体の方ーブリアーダの方にライフルを向けるとー高度を上げてどっかに去っていった。

「はっ、はっ…はあ…」

ライフルを下ろし周囲を見る。下から子供達の声が聞こえるから多分無事なんだろう。

輸送車の方に目を向けると所々黒くなっているが問題はないみた

いだ。少なからず外見上は。

その後班長に子供達を預け輸送車は中心地に向かう。護衛と言うことで俺もそのの援護に付いた。

道中複数の襲撃があったが――自由に動けるっていいなって言うことが分かった。やっぱり固定砲台はダメだ。

110 話目

110 話目

『方位0ー2ー2、高度500からエルアーダ接近!』

『方位2ー5ー5からダーカー接近!』

そう報告が次々に飛んで来てはレーダーが更新され敵の種類、数、高度が表示される。

機体後ろの試作のレーダーユニットが逐一更新して行くがー対処が間に合っていない。そもそもライフルとミサイルランチャーだけじゃ色々とーマンパワーが足りない。

「無理ゲーすぎる!他のアークスは☒といひかなんでこつちが分かるより先に分かるんのか☒」

『ー付近にアークスの反応はないわ:多分後方だから来ないと思っ
ていたようね:』

『こつちはアークスのレーダーデータとリンクしているんだ。本来ならそいつもリンクさせる予定だったんだが:』

『ええ。エルダーが復活しちまった現状、アークスが使えろモノはなんでも使えつて方針になつちまつて:』

『仕方なく本来載っていたレーダーにダーカーのD因子を感知、見分けられるようにレベルを設定、までは良かったが:』

『少し探知距離が短いんすよね:2キロくらい?』

『そこはこつちの技術でどうにかするしかない。ー最も生き残ればの話だな』

「…最悪だよっ！ほんつと。ーあ、あの時見た対空戦車は☒呼べない☒」

『どの時の事を言っているかわからないけど、多分大破しているか汚染されているかで戦力にはーきやつ！』

黒い爆発と共に前から3両目が赤く燃えた。近くにブーストを使って駆け寄るがー特に支障は無いつぽい。

『3号車に被弾！援護機は何をやっている！』

「ふっぎけんなっ！こっちは一機なんだぞっ！」

すぐさま前に出て探知する敵にライフルを撃つがーとてもじゃないが1人じゃ無理である。

『ー此方4号車！予備のライフルも使ってくれ！』

さつき被弾した3号車の後ろの4号車か通信が入り、荷台が開く。

「なんだこれっ！ミサイルランチャーじゃ無いのか☒」

中にはライフルの下部に比較的大きめのランチャーが付いている武器が出て来た。

『フォトンブラスターを付けている！チャージは必要だが高熱量のエネルギーギー攻撃が出来る！フォトンを指向させる兵器だからダーカーもー』

通信を聞きながらも多数湧いてきたり飛んで来たりするダーカーを迎撃する。

各車両に1門だけ付いている機銃が曳光弾を空や地上に弧を描くがーフォトンを使わない旧型の火器の為か有効弾にはなり得ない。『くそっ！こんなから上に掛け合って武装更新用のメセタ貰わねえとダメだなっ！』

『撃て撃て撃て！弾幕はって近寄らせるな！』

『そもそもアークスシップに直接強襲とか何年ー』

『4号車大破！ードライバー席はどうなっている☒』

『援護機！こっちは5号車！これから4号車の救助に入る！援護を！』

『方位0ー4ー5からーなんなの、この反応…：新手のダーカー？気を付けて！』

『方位1ー6ー7、距離14キロから友軍反応！通信繋がります！』

『こちら第63対空部隊。そちらの救援信号を受信した。そちらの状況は？』

『こちらアークス統合技術開発部本部所属のニッケル！現在シエルトーから逃げた民間人を乗せてシヨップエリアに向かっています！援護を！』

『了解した。今から撤退しようかと考えていたが対空戦車と歩兵戦闘車を向かわせる。民間人の規模は？数名か？』

『副班長！民間人の人数は☒』

『俺に聞かれても分かるかよお☒班長！』

『654名だ』

『分かりました、ろっぴやく…：は？』

『シエルター前にエネミーが出てきちゃったんだ、仕方ねえだろ』

『……分かりました。此方の戦力をそちらに回します。――お前ら！撤収準備が終わったら民間人の撤退支援に行くぞ！返事は！』

『E・T・A表示されました。――約五分です』

『友軍が来るとはいえ結局は彼女一人か……』

『先行量産型の内何機かをこっちに回せないか？』

『無理だな、他のシップの総技部に回しちゃったし、そもそも完全に稼働して戦闘行動が出来るのがアイツだけだ。――出力が少し安定しないが』

『そう思うとアイツの放置してあった場所に行ってみたいですねえ：鬼の様に未知の技術がありそうで。予備パーツがあるのと無いのでは選択肢が違う』

『…上に掛け合ってみよう。最も生き残ればだがな』

『班長…それさっきも聞きましたよ…つつー事で！ユウナちゃん！頼むよお！』

『んなこと言っただって――うお☒』

『ろ、6号車被弾！か、各種システムは無事です！』

両手に持つライフルを空と地上に向かって撃つが――距離が遠くて偏差が効かない。

曳光弾を見つつ少しづつ前にズラし、飛ぶダーカーとの偏差を取つ

ていく。

地上は地上で湧いたり空中から現れたり出てくるデカイダーカーに向かつてひたすらトリガーを引いて弾を送り続ける。

「誰でもいいから援護！援護くれっ！」

そう通信機に怒鳴り込むも聞こえて来るのは各車両は自前に近づかせないだけで精一杯。終いには俺を罵倒する声も。

「うるせーっ！こちとら必死に撃ってんだよ！文句があるなら救援を寄越さねえ上にー」

警告、フォトンリアクターの出力低下。

「ー文句をーは？」

両手で空と地上の二方向をいまだに撃ちつつ輸送車と同じスピードで歩いていると突如警告音と共に出力低下の声が。

「ちよ、は、班長☒なんか今出力低下って☒」

『…想像以上に早くガタが来ていたか』

『旧型艦の小型リアクターを入れてみたんですが…やはり其れ相応のジエネレーターを新規に作らなくちゃいけないみたいですね』

『対空隊から通信！もう直ぐ合流地点に到着するとの事！合流地点は8ブロック先の中心街に進むルート2番入り口にて待機していると』

『ー仕方ない。ユウナさん、3号車の荷台にそいつを載せてく

れ。――通常動作は兎も角戦闘中はどこに負荷が掛かるかわからな
いか』

『そうつすね。これからフィードバックして新型とコイツの改良を行
いましょう』

『武装もな。よく見ろ。所々から撃った排煙が漏れている。精度が足
りてないな』

『対ダーカー戦となると近接戦闘も視野に入れなくちやなりませんね
…こちらも各総技部に案をまとめて貰いましょう』

『エネルギーブレードは近接には場所を取らないし良いが…消費出力
がな』

『チャージ式とかどうです？幸い高容量バッテリーならあのサイズに
するのにもさして苦労は――』

『チャージするのになん分掛かるんだか分からんものを載せるな』

『…フォトンを直接使えないと効率が落ちるなあ…』

『ユウナさん、機体を3号車の荷台にロックを。下半身を固定して固
定砲として使います』

脚部をロックして出力の低下したエネルギーを稼働する上半身に
繋げる。

再度動くようになった両手を上にあげて空からくる敵に向かって
曳光弾と徹甲弾の混じった弾を放った。

先ほどの通信を盗み聞きしていた通りにハイウェイの入り口付近にて複数の対空戦車、歩兵戦闘車の姿が見えた。IFVが地上に向けて掃射し、対空戦車が名の通り大型のダーカーに対し発砲を続けている。

輸送車を守るように陣形を組み直している最中、総技部から逃げてきた人達総出で今乗っている機体の修復に掛かる。

『脚部ユニットのユニットNo. 94の消耗が激しい。こっちの汎用品で誤魔化せるか?』

脚部の装甲を外し中身をチェックしている人の方にズームをかける。

『脚部ユニットにそんなパーツ使えるか!そこら辺にある大破した車両から使えそうなパーツを取って来い!』

ズームして暫くすると二人組が接近。中身を見ていた人がパーツをどっかから調達して来いと無茶振りをして2人が離れていく。

『大破した車両からの方がーまずー』

『そもそも人型兵器なのに車両からーってー』

離れていき音が拾えないものの言いたい事は分かる。んな車両から取った汎用品でコレが動くのかよ、と。

『班長!どうやら先程のパワーダウンは出力配分をこっちで弄った際下半身に重視し過ぎてのエネルギーが逆流、ジェネレーターのコントロールユニットがセーフティを発動して出力が低下した、と私はみえています』

少し離れた所で大型の車両内にある端末を弄っている人――その隣には班長がいる。

『やはり人型は難しいな…激しく動くのなら脚部に余剰出力を渡すのは当然と思っていたが』

『キツキツかと思いましたが余剰出力自体はだいぶ余裕がありますね。廃棄されたの小型戦闘艦とは言えフォトンリアクターの出力を舐めてはいけませんでした。――最も最適化させないとダメですが』

『出来るか?』

『先程の稼働データがあるのでそれを元にやってみます』

『頼む』

2人の話の最中、1人の――アレは脚と腕が機械になっている――セミキャストがホバー移動しながら班長達の居る端末室に入っていた。

『班長! 装備していたライフルの修理は終わりました!』

『改良は無理か?』

『ええ、本格的に改良、と言うよりあれを元に新規で作った方が早いかと』

そう言われて視線を走ってきた場所を辿ると――其処にはライフルに応急処置を施している複数のセミキャストと技師が居る。

1号車と4号車の荷台で修復作業に入っている技術者たちから目をそらし――機体の複眼がその動作通りに目を細める動作をして――その反対に居る人達――対空隊の指揮官と思われる人にズ――

ムを掛ける。

『ー隊長、地下からも避難民がアークスのシエルターを目指しているとの報告が』

『地下からもか』

『はい。ダーカーによる直接ワープによって地下すら危うい、ということに気付いたのでしょう』

『地下までとなると…アークスと我々総出でもカバーできるか…』

『噂ですがバークス(B r k s)の人達にも戦闘準備が行われているとか』

『おいおい、バークスに所属している連中はフォトン適性が低い管制官の奴らだろ？ーいや、それでも適性のないフォトン弾に頼っているオレ達よりはマシか』

『我々第63対空隊の他に65、67、42から45隊が対空戦をしつつ中心地の守りを固めています』

『アークス本部は敵中心地にF波とD波の乱れ、それとフォトン因子の乱れとD因子の増幅を確認。その地点に高濃度のD因子を持つ敵ーD・F エルダーが居ると見えています』

『上は？』

『アークス本部は全アークスとバークス、及び通常戦力を一度ゲートエリア含む中心街に集中。その後エルダーの居ると思われるエリアに一点突破を仕掛ける、との事』

『それで上は動かせるものは全てってか？』

『ええ。全チャンネルで今回のミッションの説明をしています。――それと至急移動出来る部隊は民間人を集いゲートエリアに来いと』

『それでコイツも――鹵獲機もって訳か』

『ええ。――その、本調子ではなさそうですが』

『――それを直すのが俺たち技師の務めつてもんよ。――出力配分は？』

『再設定は終わっています。――中のパーツは？』

『チェックオーケーです』

『よし。ユウナさん、ジェネレーター再始動を』

「…はいよつ。…再始動ってどうやるんだ？」

眩きながらコックピット内を探すが――そもそもそれに準ずるようなものがない。

『脚に力を入れようとするれば勝手に起動するわ。――脚部のロックを解除！』

『りよーかい！ロック解除！』

そう言うと一緒に立っていることが不安定になり――カバーしようとする動作を機体に伝え再度立てるように。

『よしっ。立ったな』

『オーケー。これで戦力は元どおりだ』

《ユウナさんはこのまま我が隊、63対空隊と共に技術者と民間人を乗せた輸送車を護衛。アークスシップ中心地のゲートエリアに集合中のアークスと合流する。それまで我が隊含め援護を頼む》

「…了解した。出来る限りやってみます」

『頼むぞ。総勢1000人近くの命がかかっている。ーーあ、おい
☒ーー』

『ーーユウナちゃん、そう力を込めないで。大丈夫よ。必ず生き残れるから。ーーほら、子供達も』

そう言うとマイクが画面外から聞こえる声をーー子供特有の少し高い声を拾う。

「…はあ、まあ、やってみます」

『ええ。お願いね』

『…よしっ！全車前進！ハイウェイをまつすぐ進み中心地に向かうぞ！』

隊長と呼ばれていた人の一声で全車が進む。輸送車にて応急処置を受けていたライフルを手に取り初弾をオートで装填する。

『対空車は上空警戒！装甲車は輸送車の前後左右に展開！意地でも守れ！』

『ユウナさんは前方の装甲車の援護を。いくら武装しているとはいえ

打撃力はその機体には及ばない』

ガシヤンガシヤンと音を立てながら前に向かい、一定の速度になるとブーストを起動、そのまま前方にいる装甲車を追い抜く。

『方位1ー2ー5から飛行ダーカー、ダガツシヤとダーガツシユの反応複数！』

『こちら1号車！前方に動作音！ダーカーの接近の可能性あり！ユウナさん！』

『空は任せろ！地上を頼む！』

そう言う隊長の声を聞き、ブーツを起動、両手に持つライフルを構えて前方に、ワープしてきたダーカーに向けて弾丸を撃つ。

生身で交戦するよりよっぽど楽で良い。

そう思いながらトリガーを引き、機体の中枢ユニットが勝手に補正して反動を感じさせずに寸分の狂いもなく、ダーカーに吸い込まれる弾を見ながら思った。

1111 話目

あの後中心街に到着し其処でアフィンとー非常時にロッド握って暫定的にアークスに所属したマトイと合流。其処で俺の本来着ていた服であるラীগバルバトスとゼルシウスを着てやっと本来の服装に戻る。

「やっぱコレだよなあ。あんな痴女みたいな服をきれるかってえの！」

機体を総合技術部の人達に返し上層部からの指示の元、俺たち3人は規定のラインを進む。

まだ新人の上に武装しているとはいえ民間人であるマトイもいる、と言うこともあり担当エリアは殆ど掃射が終わり残党が居ないかの確認をするだけとなった哨戒エリアである。

本来ならば新人はこう言う時は避難民の救助や手当てなど比較的に敵と交戦しない裏の方に回されるはずがああ機体に乗ってほぼ欠ける事もなくシップの中心街から一番遠いシエルターから撤退して来たと言う訳の分からない評価を受けた事で裏の避難民の支援ではなく残党狩りに駆り出されることに。

「でも相棒、フォトンは肌面積が増えれば増えるほど効率が良くなるんだよ？」

「はっ！その理論なら最強は裸になっちゃうぞ！」

そう言いながら鞘を持ち、刀本体を右手に持ちながら両手を上に少しあげお手上げのポーズをする。

マトイが圧縮状態で保管していた事もあり俺のー元はゼノさんの武器であるがー刀と服を取り戻せた。

「ほら、必要な装備を持たなくちゃいけないから裸にはならないと思うよ?」

ロッドを持ちながら俺とアフィンの間で喋るマトイ。一応マトイはーあのシヨップエリアで爆発騒ぎをした程のフォトン適性があるとは言えー民間人なので俺とアフィンで守る事に。

「…そうは言ってもだな、マトイ。あの服装はどう見ても痴女じゃないか」

そう言いふとマトイをナベリウスで救出した時を思い出す。マトイがあの時着ていた服も中々ーエツチ良かったなど。

あの時は民間人が倒れているってことで慌てていたけど。

と言うかーいや、俺の偏見だと思いたいが…。

「…そもそもパンツ見える戦闘服多すぎね?」

「ば、パンツ何を言ってるんだ相棒」

「ユウナちゃん? やっぱりもう一度病院に…?」

「は、いやなアークスの戦闘服にパンツ見える奴多すぎね? つて思ってる…その、声出ちゃった…ごめん」

「…確かにそうだけど、フォトン吸収率が上がればよりダーカーを倒しやすくなるし。因みにだがあの戦闘服、ニューマンの女ハンターに渡される、俗に言う初期服らしいぞ」

「ええ…レンジャーで良かったわ俺」

「レンジャーの服——確か部屋にあった奴だよな？」

因みにマトイはこれまた俺と同じように男性と女性も着れる両用のセレニアコートは今を着ている。民間人とは言え戦闘服を着ないとD因子にやられてしまう可能性が高いからだ。

「そうだよマトイ。ユウナー——相棒は足がスースーするから無理って言って早々にヘレティッククロードの女性版のヘレティッククイーンを購入して着ていたけどね」

「アレも中々良い服だったが……ズポンのあの突起だけはよく分からなかった……」

ポーズをした後テキトーに刀を振りながら——マトイに危ないよと言われ直ぐに刀を鞘に入れて背中に。腰に装備している——アークス製のライフルを手に持ち、居ないと思うが周辺を警戒しながら前に進む。

「いやあ……にしてもエルダーかあ……誰か倒してくんねえかなあ」

「大丈夫だって！俺らみたいなやつよりよっぽど強い奴が居るんだから——にしても」

—————

「ん？どうしたの？アフィン？」

「そう言う俺にマトイが首を傾げた。」

「いやな？巨躯って確か撃破されたって研修生時代に書かれていたよ
うな……？」

「そう——そう習っているんだ。研修生時代に。最も形だけとはい

え今現在確認されているダーカーの種類や弱点等を教えるだけだが。正直数少ない俺が座学で覚えられた事だと思う。もう怪しいが。

「…研修…？…あ、ああ☒アレなアレ！確かにそうだよなあ…」

そんなことを思っているとーライフルを肩に置きながら明らかに挙動不審になる相棒ーユウナを見る。

「なあに、そのアレって？」

相棒のアレ発言にマトイがアレとは何かと相棒に聞くが…顎に手を置きながら視線を外して答えを見つけようとしている。

「ああ、その…アフィン！あとは頼む！」

終いには俺にパスする始末。もしかして相棒はー。

「…もしかして相棒、研修中寝てたなんて言わないよなあ？」

「…いやあ、あんなのくっそ長くて良い睡眠音楽にしかないって」
言うほど話長かったか？…いや、そもそも研修生時代はまだお互い知らないし、もしかしたら相棒の方の講師は話を長くするタイプの人だったのかもしれない。

そう思いきってマトイに話にアレー50年前だか100年前だか忘れたがー巨躯撃破作戦、巨人落とし作戦の内容を大まかに思い出そうとする。がー。

「って言ってもなあ。俺も座学は苦手だったし…確か50年だか100年だか忘れたけどそんなくらい前に巨躯をナベリウスにて撃破したって話だったような…」

そもそも研修生時代の俺はー消えた姉をこれで探し回れる、と内心テンションが上がりっぱなしで座学など聞いている暇はなかった。

そもそもフォトン適性で規定値を越えればアークスに入れたも同然。その後の話はオマケである。

「…」

そんな事を思っているとふと相棒が静かになっただけなのに気づく。

「…どうしたんだ？相棒？」

「…いや。何でもないさ。ーその、言いにくいんだが…」

そう言い言いにくそうに言葉を淀む相棒。

「どうした？」

「その…トイレ…行ってきていいか？」

「…ああ…トイレね」

「ユウナちゃん、そう言う時は…」

「いや、今戦場だし、そんな回りくどい事言えないし」

「前線から離れているらしいけどね」

「…という事でちよつとトイレ行ってくる」

そう言いそそくさと前に進む相棒。

「トイレねえ…なあマトイ、相棒の事が心配だから見にー」

「アフィンくん私のイル・グランツ食らってみる？」

「…なんでもないです、はい」

そう言いながら2人で周辺を警戒しているとヒルダ管制官から通信が入りここいらの安全が確保されたとの通信がはいる。

2人して応答し、W・Pの変更を言い渡された。相棒の方にもルート上で合流するように言い渡されているようで合流地点を目指して2人で進むことに。

—————

あの変な帽子を被ったニューマンーカスラさんだったか。に聞いたエルダー戦。はえーって感じで聞き流していたが正直もう2度と戦いたくない。周りのーエコーさんにゼノさん、ゲツテムハルトさんにカスラさんは手を出してこなかったお陰で俺1人でー死ぬ気で戦ったし：もう2度と戦いたくない。

そんな事を思いながら男の時と違い全く持つてくれない尿意と戦いつつトイレを探しているとふと、あれ？ここどこだ？と辺りを見渡す。

トイレに行きたすぎて歩いて：いや、走ったか？しまっていたら余りにもトイレを探す事に集中し過ぎて訳もわからず来てしまったらしい。

公園を見つけてー周辺に血などが散乱しているのを見てうわあ、やべっ。どーしよ、と呟き、心の中でヤダヤダヤダと思いつながらライフルを両手で持ち直しコッキングレバーを少し引き初弾が薬室内に入っているかを確認する動作ープレスチェックを行い、自分の目でちゃんと入っている事を確認する。

案の定マガジンを指してそのままだったのでそのままコッキング

レバーを引き切り初段を薬室内に送り込みリリースボタンを押して装填の確認をする。

セーフティを外しシングルに変えてー取り敢えずどこでも良いのでフロントサイトをリアサイト越しに覗き込み、トリガーを引く。右手でライフルを持ち左手で扉をホールド、一瞬で開けて中を確認する。

「ーぎゃあ」

中からダーカーが出てきて俺の上に飛びかかってきた。

そのまま後ろに倒されて体の上で変な音を出しながらダーカーが脚で斬りつけてる。

「アアアアアっ」

大声で叫びながら弱点であるコアー赤い部分を必死に左手で殴りーダーカーが上に吹っ飛んでいく。

「はあ、はあ、はあ…じゅ、じゅうを…」吹っ飛んでいったダーカーが地面に落ちてーひっくり返りながら脚を動かしているがパパパツと言う乾いた音と共に腰に抱えてダーカーを撃ち殺す。

はあ、とそのまま座り込んでーライフルを構え直し、もう嫌だと言いなが立ち上がり再度トイレに向かった。

ー因みに漏れていた。

結構な距離を歩いた気がするが…多分そんなに距離は稼いで居な

い。こっちは病院上がりなんだ、何かないかねえ…。

そう思いながら道路脇にあるベンチに座り、手に持っていたライフルを上置きナノトランサーに入っているモノのチェックに入る。

入っているモノは…ジュースにメイト系、今は使えない20ミリのテレスコープマガジン―薬莢内に完全に弾が入っている―と…。

「…あ☒バイクあんじゃん！」

そう言いアイテム一覧に移るホバーバイクの文字。

圧縮状態で外に出し展開、そのままバイクに跨る。ライフルを腰、ではなく刀と同じように背中に斜めに装着する。

スロットルを少しづつ開けて数十センチ浮上、そのまま道なりに進む事に。

取り敢えずW・P通りにあの―スタジアムに行こう。あそこに行けばさすがにトイレの1つくらいはあるはずだろう。

そう祈りながらスタジアムに向けて道路を飛んで行った。

『―こえー』

「…うん？」

『きこえーユウー』

「んだこれ…どっからだ？」

『―棒！スタジーー』

「…アフィンとマトイか。…もう最終地点に着いたのか？やけに早いなあ…」

あの2人も何か乗り物使ったのか？それとも俺がトイレに行きたいが為に逆方向に行っていたのか。

デバイスを操作して付近のマップを呼び出し、確かに真逆の方に進んでいたわ。

マップを見ている間もホバーバイクは安全速度で飛行していく。

スタジアムってどこらへんだったっけなあ、と思いながらデバイスのコース通りに向かい、2人の通信の発信源であると思うスタジアムに向かった。

デバイスに表示されるルートによるともう少しで着くらしい。

「スタジアムかあ…どうやって入るんだ？」

前の11男の時はインドア派だった為そういう所に行った経験がない。

何か案内板があればいいと思うが…。

そう思いながら通信を112人に向けて通信を行う。

11が帰ってきたのはノイズのみ。

それを疑問に思いデュケットに通信を掛けてみるが11此方もノイズでかき消される。

一瞬向こうも混んでいるのだろうかと思っただが…管制官まで出したら末期戦のような気がするのでそれはないと思いたい。

「……え、これもしかしてダークファルス…居る？」

ノイズを走らせている通信機を切りーペルソナと戦ったときを思い出す。あの時も通信機がイカれたような挙動をしていた。

…エルダーは知らない。

そこでふとデuketツトが言っていた事を思い出す。

オラクル船団の重要な設備やアークスの使う装置はフォトンを使う物が多く、D因子はこれらの波長を邪魔するとかなんとからで、小型のものほど影響を受けやすいとかのんとか。

なんでもその辺は研究が進んでいなく何となくー人より小さいのは使えなくなる、くらいのことらしい。

それで尚更ダークファルスが居るなら2人がして帰還しないと、と思えばスロットルを開けてスタジアムに急ぐ事に。

112話目 前半 VS 巨躯 ラウンド2 後半
アフィンの成就

ランディングギアを出して地表に着陸、デバイスを使い周辺に有る自分の物―アイテムを圧縮状態に。

圧縮までの時間は基本的には乗り物なら全員が降りたら起動するようになっている。

圧縮状態になったホバーバイクをナノトランサーに放り込み―後ろのスタジアムに体を向ける。

通信を―途切れ途切れだったもの―整理するとアフィンとマトイの2人が俺がトイレでダーカーと格闘中に先に進み―俺に知らされていない別のスタジアムに着いて中に入るとダークファルス、エルダーとそれと戦う少女がいて―2人がエルダーと戦い始めた所でD因子濃度が濃くなったのか通信が出来なくなった。

刀の収まった鞘を左手に持ちスタジアムの中に向かった。

「アフィン―これ強いよ―」

「分かってる―相棒が来るまで待て―」

受付口に鞘が引っかかったり物音にビビりながら進み―ライフの着弾音やテクニクの―表現し難い音。それに刃物の音まで聞こえる。

この様子だと2人の他にもう1人いる…？

歩きから走り出して入り口に近くなる。

よくアニメや映画とかで入り口が白い光で一杯なのはあるが……残念な事にここは現実。そんな光が溢れるほどの光源なんて無いし。

お陰で近くなれば近くなるほど中の様子……1人でどうにか……いや、1人は1人だが実際はエコーさん、カスラさん、ゼノさんにゲツテムハルトさんが居たが……戦っていたあのエルダーと……マトイとアフィン、そして俺と同じ様な戦闘服を着た少女が見えた。

「おい！ 救援に来たぞ！」

「アフィン！ ユウナちゃんが！」

「分かっている！ そのアークスさん！ アンタも撤退を！ れ

「無理ですね。今かの敵……巨躯は私達を狙っています」

「くそっ！ 耐えるしか無いのか！」

会話している3人に混じり刀を抜いて走り間に入る。

アフィンと少女の隣に立ち……ふと前に会ったことのある様な気がし始める。

「……戦場で言う事じゃないかもしれないが……もしかして一度会っていません？」

「……今は後です。目の前の巨躯を撃退しなければこのダーカー襲撃は終わりません」

「マトイ！耐えるだけでいい！離れていた相棒が来たってことは通信もー」

そうは言っただって！と言うマトイの声が聞こえるが残念ながら多分通信は不通のままである。

「いえっ！ふっ！ー依然D濃度は高いはずです。多分ですが本部も気付いていないでしょう」

そう言いながら少女は両手に持つ小さな刃物ーダガーでエルダーの攻撃を往なす。

「そ、そんなあ…」

そう言う少女の答えにアフィンが目に見えてシヨボくれるもの直ぐにライフルを構え直し横向きに走りながらフォトンで弾の挙動をアシストして命中弾を叩き込んでいく。

「アフィンとマトイは離れて射撃とテクニク！マトイは光系を！俺と彼女で止める」

そう言いエルダーと闘っている少女に合わせーられないから適当にテクニクでデバンド、シフタを掛けて突撃する。

刀を突き刺しそのままテクニクのサ・フォイエを使い突撃。エルダーに向かい刀を突き刺す。

キインツ！と言う明らかに生物の皮膚の音ではない音が響きエルダーの目がこちらを捉える。

『ーッ×貴様はあの時の！』

「覚えてんのかよっ！」

「ー貴女巨躯の交戦経験が×」

『はっはっひっ！ここで会ったが数年目！我を愉しませろ！小娘エ

！』

「ああっ！もう2度とごめんだって思っていたがねっ！」

そう言いエルダーの話を無視して、力を込めてフォトンを刀身に集中させるとザクツと刀が突き刺さる。突き刺した後、そのまま横に引き抜きエルダーの脇腹に切れ端が出来るが：少し時間が経つとそれも塞がる。引き裂いた刀のエネルギーをそのままにエルダーの頭を狙うべく見上げるがー改めて格闘戦を仕掛けるとデカイ。

『ふん！効かんわっ！』

「ーッー！」

頭を持たれたがいつも同じ場所に装備しているー何時ぞやに使って以降全然使っていないハンドガンを抜き取り自分の体より上で保持するエルダーに向けて手の間から見える視界を元にハンドガンで頭をー出来る限り目を狙う。

チュン！チュン！と言う音がし、エルダーの頭に当たってはいるがー効果は無い。フォトンと言う訳の分からない力を体に纏わせているためかエルダーに握られては居るものの痛くは無い。

「っしやあー！」

俺を持っているエルダーに向かい少女ーと言ったって俺達と同じような身長だがーがダガーをエルダーの腕に突き刺し吹っ飛ばす。

『ぐおっ！ーイイぞっ！これだっ！これこそがっ！闘争だっ！』

切られた衝撃で俺を話しそのまま後ろに下がる。スライドオープンしたハンドガンのマガジンを抜き取りナノトランサーに。予備マガジンをホルスターから抜き取りガイドラインに沿うように装填、スライドストンプを押して初弾を薬室内に放り込む。

少女も後ろに下がりーそれを合図に少し離れた位置にいるマトイとアフィンがA・Pと光系テクニックをしこたま撃ち込む。

『はははっ！イイぞっ！イイぞアークスうう！』

撃たれながら俺に向かって突進ーそのまま殴り掛かろうとしてくる。

咄嗟に怖くなって目を瞑りながら刀でガードしーキーン！と言う音が響き、目を開けるとエルダーが体勢を崩していた。

『ぬおっ×』

そのまま仰け反るエルダー相手に刀で更に斬りつける。腕、脚、肩、手が届く範囲をひたすら斬る。

後ろーアフィンとマトイの援護もあつて俺と少女はひたすらエルダーに斬りかかる。

上、横、脚、腕、胴体と見える場所をひたすらフォトンを纏わせた刀で切りまくった。

「もうっ！さっさと倒れろ！死ねっ！」

「ーっふっ！」

『我はまだ堕ちん！まだだっ！我に！真なる深き闘争を見せよっ！』

エルダーが両手を合わせ地面を叩くとー紅黒い焰が円を抱いエルダーの周囲を回る。

俺は手を合わせ地面を叩いた衝撃で吹っ飛ばされるも空中で、何故か出来る、姿勢制御し、地面に刀を突き刺し止まる。吹っ飛ばされたお陰で距離が離れたのでモノメイトを飲み込む。それを見ていた

かのように少女がダガーを目に見えない速さでエルダーを斬りつけ始めた。

「な、なんだありや…」

「P. Aだ、相棒」

「P. A?…ああ、フォトンアーツだったか」

モノメイトを飲み切り空中に捨て…それが飛散するともう一度刀を抜き…エルダーに突撃を仕掛けた。

—————

数分…闘っていた俺からすれば数十分の気がしたが…すると突如エルダーが

『…ッ！我は、我は満足したぞ、アークスよ！また次なる闘争で会おう！』

そう言うとエルダーは後ろに飛び撤退。それを合図に通信がクリアになる。これ以上闘っていたら途中でダウンしたマトイとアフィンをカバーしつつは無理、と思った矢先であった。

突如として通信機が息を吹き返しデュケットから今までどこに行っていたのかと大声で怒られる。

そこで俺はスタジアムにてまたエルダーと交戦、撃退した事を告げる。

デュケットにまさか1人で☒と驚かれたものの即座に4人、て言うてした時。

目の前にいる少女が口に手を当ててシッーと言うジェスチャーをし、更に開いた手で4人の次にバツをつけ3人と訂正する。

「…ああ…三人…マトイと俺、アフィンの3人だ。…それと2人ともダメージが凄い。メデイカルセンターの準備を」

通信にそう言いましたエルダーを撃退したのですか☒と驚く言葉とメデイカルセンターは今現在パンク気味で病院の方に回す、との答えも。それを聞き分かったと言い、一度休憩してそつちに戻る、と言いつ通信を切る。

切った後に電源を落とし少女に近づき一言。

「…なんで3人なんだ？」

「私は…その、ここに居ただけに過ぎないので」

その言葉にマトイとアフィンが頭の上に？マークを付けているが俺はそれを無視し次の質問に。

「…1度俺と会ってないか？確か龍を探していると」

「…ええ。私はある龍の搜索願を受けています。その時にお会いしたのでしょうか」

「…すまないが名前は？」

「…クーナ」

「クーナさん？オーケー。取り敢えず今回は助かった。クーナさんが居て助かったよ」

「いえ。私も貴方達が居て助かりました。流石に私一人ではどうにもなり得ませんでしたので」

そう言い踵を返し何処かに行こうとする少女ローもといクーナ。

「おい、そっちには何も無いはずだぞ」

「いえ。そもそも私と会う事自体不味い事ですので。ローそれでは」

そう言うや否やスツと俺たち3人の前から消え去るクーナ。

その後周囲を見渡しその場にぺたりと女の子座りをしてしまう。

「…はっはっ、今頃になって来やがった…」

そう言い震える両手を見ながら震える足に力を入れて倒れている2人の近くに行き、立てるかと聞く。

エルダーとの戦いで負傷して喋れないマトイとアフィンを1人ずつ抱えてバイクの両脇にカゴを装備させその中に2人を座らせる。

2人を乗せた後俺も跨りオートドライブに設定、行き先をシヨップエリアに。

ホバー特有の音を立てて高度を上げてシヨップエリアに帰還する事に。

ローローローロー

後日俺は自分のマイルームにてパソコンを弄りローそこに提出用の文章を書いては消してを繰り返していた。

あの後、不自然な事にマグの提出要請も来ずそのまま話のみでのお終い。トイレ行ったら2人と離れてさらに周囲を探しても中々無いからスタジアムに向かったら2人の声が通信機から聞こえ中に入ったら2人がエルダーと交戦していた、と手短に言ったらシップ内の事故処理は2人ローアフィン君とユウナ君にはパスさせるからデータを後で提出するように、と言う言語がまだ読めない俺にとっては地獄の様なオーダーが入ってきた。

「そもそも詳細つたつて…」

お陰で全くもって進んでいない。正直必至に刀を振り回し、光波を出したりして必至に闘っていた事以外なんとも書けない。

しよーがねえからデuketでも読んで手伝ってもらうか。

そう言い少し前に旅館で行った時にボロった話をなんか変な風に解釈してアークス言語を読めない、って言う事を知っているデuketト辺りに手伝ってもらおう。

そう思いパソコンの前から立ち上がりそのままキッチンに。

冷蔵庫の中から冷やしてあるオレンジジュースをタンブラーに注ぎペランダに持っていく。

アークスに所属する者はアークスシップ中央から出来る限り近い所に住むように言われている。

アークスが全力で中央部分は守ったお陰で近くは比較的無事だが…少し遠くや地下部分は結構なダメージを受けているらしい。

正直建物より死傷者の方が船団的には痛いらしいが。民間人、アークス含め結構な数がやられたらしい。他にオラクル船団付近の宙域にて多数のダーカー反応があり宇宙戦闘機が何個飛行小隊も出撃したとかなんとか。もはや飛行隊では。

と言うのも報告では気持ちダーカーがデカくなっている、と言う報告がチラホラネットーポスで調べたら出て来た。曰くエルダーが出現したからD因子の濃度が上昇、それによって大きくなったとか何とか。ーー後で調べたら宙域にて交戦したダーカーも大型サイズになっっていたとのこと。但しその分脆いとも。

遠くの方では未だに救助活動が続いているのか何時ぞやに乗ったあの飛行艇ーーあれを使い遠方からの救助者を輸送している。

こう言う時こそテレプールだか何だかんだを使えよと思う反面何かしらデメリットでもあるのだろうか、と言うことも過ぎる。ー因みに使わない理由は何処にでもワープと言うかシヨートカットが出る奴は民間に渡ると洒落にならない事が起きるから嚴重に管理しているだとかデuketツトが言っていた。

ーーーーーーーーーーーー

「はあああ…ほんつと報告書を作んのヤダ」

提出する戦闘結果もデuketツトとマトイのお陰で終わり今は2人ー俺とアフィンの2人ーで何時ものラフリに来ている。

「そうは言ってもあのぐらいならすぐ終わっただろう?」

「俺は文系は苦手なんだよっ!」

そもそもアークス言語分かんねえし。

そう悪態付きオレンジジュースの入ったコップに口を付ける。

「ーーんで。俺を読んだ訳は何だ?まさか奢らせるため?」

「…んな訳。ーアフィンはあの子ークーナって言っていた子を見たよな?」

「あの子クーナって言うのか。そもそも名前は初めて聞いたが見たも何もふつーに戦ってたし。それが?」

「…いや、なんかおかしく無い?普通アークスって報告書はマグの録画を参照にしているだろ?ふつーならそれをーマガを提出して終わりだろ?」

「それが今回はなんで報告書かって？多分アレだ、今ゴタゴタで忙しいから後で提出みたいなの？」

「いやいやいや！録画データは一定周期で消えるんじゃないのか？」

そう反論すればアフィンは黙りうーんと悩み。その結果。

「…そう考えると彼女が？」

「ああ。もしかしたらめっちゃ偉い人ー」

そこまで言っつてふと窓の外から視線を感じその方向に顔を向けるがー何も無い。

「…どーした？相棒？」

何も無い。何も無いのだが…何かがいる。それもこの匂いは…確証はないがクーナさん、か？

「…ステルス迷彩ってか？まるで蛇だな」

異常に視線を感じる場所を睨みー一言呟く。

「ステルス？透明？それに蛇がなんだって？」

「…いや、なんでも無い」

そう言う匂いと視線の主であるクーナさん（仮）は道路に沿って人混みの中に消えていった。ー正直匂いで何となく追跡できなくはないが…今はよそう。

「…おいおいおい！辞めてくれよ、ホラーはよ！俺は苦手なんだ」

何を勘違いしたのか俺の視線をアフィンは死者か何かと勘違いしたらしい。

「…とまあそんな話は置いておいて。相棒、目の方は大丈夫か？」

と急に真面目トーンになったアフィンに少し困惑しつつそれに答える。

「目?……ああ、マトイのアレか。大丈夫だ、今の所はな」

そう言いマトイから貰った――遺伝子的な意味で――の方を触る。

「…相棒…逆だ逆、右目じゃない、左目だ。――どっちが貰った奴だか分からない様子だと大丈夫みたいだな。安心したよ」

こつちだったか、と言いながら左目の覆う。

「…そうだな、強いて言うなら――」

「…言うなら?」

「――気持ちテクニクが使いやすくなった気がする」

シーンとなるアフィンを見て、内容ミスったか?と余ったが数秒して言葉を返す。

「…なあ、相棒って俺と同じレンジャーだよな?」

「…言うて同じ…確か第8世代だからアフィンも使えるだろ?」

「俺はテクニク系は全然でね…初期テクニクが使えるかどうかって所だな」

一応ニューマンなんだけどなあ、て腕を首の後ろで組みながら言う。

そう言うとき窓の外からゴゴツ、と言う音をミ耳が拾い外を見る。

「どうした?また見えちゃいけないやつ?」

「……いや…多分アークスの車輛だろう」

「…ま、相棒が言うならそうなんだろう。なんだかんだで相棒のミミには救われて来たし」

「…なあ、そう言や戦場跡地になった市街地に向かうトラックの音を聞いて思い出したんだが…アフィンはある時何をやってたんだ？俺と合流する前」

「ああ、あの時？あの時は他の同期と臨時パーティー組んで市街地内の救助活動とダーカーの撃退をやっていたよ。確かその時に装甲車部隊とも協同で戦ったな」

「へえ…んだよ、その様子だと俺の見舞いには来なかったのかよ」

その言葉にアフィンは？何言ってるんだ相棒、と言いたげな表情をする。

「は？相棒の見舞いは4連続で行ったぞ？」

「…は？4連続？」

そう言うアフィンの言葉に言葉を一瞬失う。4連続？俺は4日間も寝ていたのかと。

「確かその内2回程はそのまま相棒の病室で寝落ちしていたからー」

「待て待て待て！は☒俺何日寝てた☒」

追い討ちをかけるようにさらに投下される言葉。待て待て待て！俺は一体何日寝てたんだ☒

つい立ち上がり、最早準常連と言ってもいい俺達の行動にマスターは一瞬こっちを見るもののいつもの事かと直ぐに自分の仕事ー愛用らしき道具の整備に戻る。因みに彼は客が1組前後の時ではない

と自分の道具の整備はしない。何回か来てそれは分かった。

「と、10日だけど…」

「と、おか……10日も、か?」

「あ、ああ……ビビったよ、任務から帰ったらエコーさんとゼノさんから鬼の様に連絡が来て出たら相棒……ユウナが倒れたって聞いてメデイカルセンターに向かったんだ。んでゼノさんとゲツテムハルトさんに話を聞いて……俺はその時ゲツテムハルトさんに悪い事しちまったけど……つい……」

そう言い下を向くアフィン。気持ち声のトーンも下に下がっている気がする。

「……なんだ?…ついつて」

先が気になりアフィンにその後を促すと普段は温厚なアフィンの口から信じられない言葉が。

「ゲツテムハルトさんのこと……思いつきり殴っちまって……ゲツテムハルトさんもずっと俺に殴られていたよ。……なんか、アレだな、恥ずかしいな」

そう言いながら、あの時任務帰りでライフルも装備したまま来たから、ゼノさんが居なかったら撃ち殺していたかもしれない、と言い内心怖っと思いつつそこまで俺を思っているのか?と言う男として……外見は女だが……とても複雑な心情が芽生える。……いや、正直アフィンを女の子としてみればまあ……。

「……そっか。……ありがとな、アフィン」

「……ユウナ……」

「まあ、その、なんだ、ゲツテムハルトさんも悪気……はマシマシだけど本人なりの目的があったから、まあね?」

その悪気で……アークスの敵であるエルダーを復活させ、更にそれ

によって死にかけたらか許し難いが。そもそも負傷して後ろに下がったメルフォンシーナの仇を取りたいなら持つところ…別な方法をだな。

と言うかあの時なんで誰も援護してくれなかったの？少し前に闘ったエルダー戦ラウンド2時のクーナさん、アフィンとマトイの方が援護の層厚かったよ？

「で、でもその行動でユウナが死んじゃったたら…俺は…」

そんな事を考えたらアフィンの目元に粒…涙が出ていた。

「…え？おいおい、嘘だろ？泣くなよ。男だろ？それに姉ちゃん探すんだろ？」

「…っ」

な？な？と言うもアフィンの涙は止まらず、しよすがねえな、と言いつつ立ち上がりそのままアフィンの隣の席に座り…ぎゅつと抱き締める。

後ろからおお、と言う声がしてミ耳がぴんつ、と立ったが俺は気にしない。なんせこんな心配してくれたんだ、これぐらいはね？

一方声を上げた主であるマスター、と、その娘であるフランカはその様子を見て方や腕を組み首を上下に動かし、青春だなあとでも言いたそうに。方や興奮しながら彼女愛用のフライパンを持っていない方の手をグーにしながらイけ！イけ！つとビーストのユウナにも聞こえない程小さな声で応援していた。

そんな後ろ事のお知らせに泣いているアフィンの背中をポンポンと軽く叩きながら耳元で「俺は此処にいるから…ね？」と泣き止むのを待つ間、これじゃどっちが女だか分かんねえな、アフィン女顔だし、と思いつつアフィンが泣き止むのを待つのであった。

数分するとアフィンが真っ赤になった顔を上げて一言「ごめんと
う。」

「なあに、俺の胸なんぞいつでも貸してやるわ。ーあ、今エロいこと
考えたろ?」

「は、はあ☒そんな事考えてねえし!」

そう言いながらもテツシユを渡し鼻をかむアフィン。

「ま、なんだ。友から今は親友だな」

びいー!と言う鼻をかむ音が店内に響くがー誰も止めない。
なんせ俺とアフィンの2人しかいないからな。

そう思いつつさつき言った言葉ー親友という言葉。男友達なら
そこでお終いである。ホモではないからな、それ以上は無い。

だが今の俺は女ーそれも16歳と言うスツゲエ若い女の子であ
る。そんな事をこれまた俺の外見年齢と同じアフィンに言わせれ
ばーそうだな。

「さあアフィン!次で彼氏だ、頑張れよ!」

「…え?ええええ☒マジで☒本当に彼女になってくれるの☒」

はっ、はっ、はっ!と笑いながら会計を済ませてアフィンも早く、と
笑いながら言う。

「そうだなあ、俺のガードは固いぜ?それに親友から彼氏へのランク
アップは鬼の様にポイント必要だぞ?」

お、おう!やってやるよ!と言いながらアフィンもお金を払い俺と
2人はそのまま外に出て行った。

「…んっ」

入り口でアフィンを待ちやってくるとスツと手を出す。

「…え☒マジ☒」

「なんだ？繋がないのか？」

「繋がります繋がりますっ！ーあれ？案外チヨロくね？」

「…はっ、はっ、はっ！手伝ってくれるお礼だよ、相棒」

「い、今、相棒って…」

「こう見えて何回かアフィンの事を相棒って読んだことあった気がするが…平時では初めてかな？」

「さあ、さっさと帰って寝るぞー。俺はこう見えて病院上がりなんですね」

「…全く…ほんつと。男っばいねえ…相棒は。ーそこも好きだけど」

「聞こえてるぞ、アフィン」

そう言い2人して手を繋ぎ店をーラフリ出た。

113話目 龍祭壇へ

113話目 龍祭壇へ

「……は？デuketツト、もう一度言ってくれ」

「はい。ユウナ、アフィンの兩名は複数の惑星にて出現する未確認生物の確認、可能ならその撃破任務がありました。10日以内に正式な任務として出されるようです。それと本任務には詳細の内容は現地にてーえつと、とある人物と行動を共にせよ、との注意事項も」

あの後アフィンと…その…て、手を繋ごうと自分で言っておきながら、俺とアフィンは顔を真つ赤にして帰りアフィンの部屋の前で別れ自分も帰宅。その後冷静になりベッドに頭から入り、変な奇声を上げマトイとデuketツトに不思議そうに見られながら数分間あげた後、ぐちやぐちやになったベッドから離れ冷静になる為にリビングの端にある作業台の前の椅子に座る。

ナノトランサーを弄って中に入っているライフルー戻ってきたプロトレイの整備とエルダー戦でひっさしぶりに使ったハンドガンの整備をしているとデuketツトから声を掛けられた。

「…注意事項アリの任務なんて初めてだな」

「……所でその…さっきの奇声は？マトイちゃんも心配してましたよ？アンテイかける？つて？」

そこまで言う2人に俺は簡易分解をしてバレル内の掃除ー長い棒の先に布と油を浸した奴でグリグリ掃除しているーを一度やめ2人の前に椅子ごと身体を向けて言う。

「…人ってその場の勢いで言うて恥ずかしいんだな…」

デユケツトの後ろソーソファに座りお菓子を食べながら聞いていたマトイは頭の上にはてなマークを乗せながらどう言う事って言う風にデユケツトに視線を送る。

デユケツトは俺の言った事を一瞬考え即座に答えを見出した。

「…ああ、アフィンさんの事ですね？」

「……………」

「無言は肯定と同意義ですよ？」

「え？ユウナちゃん、アフィンの事すー」

「…そうだ、その場のノリだ！そうだ、それで押せば良い。彼氏になるにはポイントを高くーいや、点を確保するごとに上限を上げれば良い！」

「…………デユケツトさん、やっぱりアンティをかけた方が…」

「ええ、そうした方が良い気がしますね、あの様子だと…」

そう言いアフィンが俺を呼びに来るまで俺の混乱は止まる事はなかった。ーもつともこの後もその感情で混乱することになるのだが。

—————

あのまま自室にしていると2人に無い事ある事言われ、終いにはメデイ

カルルームに連れて行かれそうになったのでライフルとハンドガンは作業台の上に置いて来て自室を出てショップエリアに足を向けて向かう。

訳はのちに考えるとして：いや、いつそ銃の消耗品を買いに行つた、とでも言い訳すれば2人にも分かつてくれる筈だろう。何せオーダーを受けたんだ、それで躲せるだろう。

そう自分に言い聞かせメイト系のアイテムを買っていると不意に声が脳内に聞こえる。

その声を聞き瞬きをすると――店員の手が止まる。まさかと思いい周囲を見渡すと周りにいる、と言うか大型モニターの時間や中央モニュメントの噴水の水さえ止まっている。

「事象は大いなる変化を見せた。それこそが貴女が成し遂げた一つの成就のカタチだ」

「例え――それが望まぬ形であつたとしても」

「私と：私達は謝罪する。識りながら変える事のできない身である事を」

「かの事実（ダークファルスの封印失敗の事実）は根幹（アークスの根幹）を揺るがすモノ、張陵する者達（アークスのトップ）は拡散を望まず内に秘めようと暗躍するだろう」

「故に貴女の役目こそが重大。全てを見て、識つた貴女こそが鍵になる」

「貴女が抱く経験で世界は成る。――それは修正ではなく累積に基づ

き数多の知己と敵を生むだろう」

「――それでも。貴女は己の意思が赴くままに進んで欲しい。誰も見
出せなかった道へと」

「…私と、私達はその道を見、識る為にココに居る」

そう言い終わると視界がブレて彼女――シオンは消え去る。それ
と同時に周りも動き始め――先程まで自分が居た店の店員が俺を呼
んでいた。

あ、ああ、と生半可ね返事をして代金を渡す。店員は急に消えて怪
しんでいたがそれ以上は何も言っては来なかった。他にも色々と回
らなくちやいけないのに…急に来やがって。

はあ、と溜息をつき――今度はジグさんの店に向かった。行く内容
は勿論――背中に背負うこの刀について鑑定してもらおうである。

――

「煉獄刀・焰嗟って…何だこの名前…怖すぎだろう…」

そう呟きながら手に持つ刀――焰嗟を見直す。ジグさん曰く我々
の、オラクルの技術体系では無い別の何かで作られている、と言うこ
とは分かったらしい。但し何故かフォトンに反応する、と言う事も。

ジグさんにも解析するからちよつとの間貸してくれ、とまで言われ
たのでそれじゃこれに似たような刀――ソードを作ってください、と
言ったら静かになった。それと同時に同じような物を作れば貸して
くれるのじゃな?と言い、そうです。…え?作れます?と言えば分
かったと言いまから作るから今日は帰ってくれ、とまで。

そこまでしてこの刀を見たいのだろうか?

そんなことを思いながらショップエリアの上ー今では誰もいないショップエリアどころかアークスシップ全部を見渡せる屋上にある大型公園にきている。椅子に座り道中で買ったオレンジジュースを飲みながら買った物リストを見直しつつふとー先程のシオンさんとの会話を振り返る。

冷静にー基本あの人難しい言葉しか使わないけどーなって考えてみるとあの人ー。

「にしても、あれ…日本語、だよなああれ」

そう、彼女のしゃべる言葉が完全に日本語なのである。

何故オラクル船団の人が日本語を使えるのか？

その事に対する理由付けを考えていたら何処からともなく歌が聞こえてきた。

ミ耳を立てて微かに聞こえる音の飛んでくる方向を特定。その方向へ飲み物片手に向かう。

近づけば近づくほど何処かで聞いたようなメロディと声がする。それと同時にコレはアークス言語…いや、オラクル言語だよなあ、と。オラクル言語やアークス言語と呼ばれる言葉を聞けば聞くほどシオンの日本語の謎が深まる。

その方向に更に近づくとーなんとアイドルとアフィンの言っていたクーナが歌っているではないか。俺も時折テレビやポスで見かけたりするが…確かにアレは見た奴と同じだ。

おお…と感嘆の声を上げて、シオンの日本語の件は棚に上げて、

ジューズを片手にずっと見ていると向こうと視線が合う。

「あ」

と言う2人の声がハモリークーナさんの歌が止み、周りに俺しかいないため静かになった。

するとクーナさんが周りを見渡し周囲に誰もいないことを確認したような素振りを見せると、その場から横に動きー俺もその動きに視線と体を合わせる。

そのーまるで俺が本当に見ていかどうかを確認するかのような動作はもう少しだけ続いた。

「……貴女……私の事……見えてる、の……？」

そう言い俺の事をわなわなと震える指で指差すクーナさん。

「え、あの、その……見えてるって言うのは？」

「やっぱ見えてるんじゃないっ！どうして☒マイは使えてる筈なのに……ッ」

そう言いながら頭を抱え後ろを向くクーナさん。

「もしかしてオフでした？それでしたら自分も帰りー」

そう言い後ろを向き見なかった事にして帰ろうとした時、後ろからさつきとは違う……視線というか気を感じ取る。

再度後ろを向くとーそこには先程まで普遍的な服を着ていたアイドルのクーナでは無くー何度か会っている戦闘服を着たクーナさんが居た。

「え、あれ?…クーナさんは?」

「…貴女…何者なんです? 前もー上から監視を命じられたてカフェに居た貴女を見ていた時も私の事を認識していましたよね? ー勿論その前もです」

「そう言い腕に装着されているダガーの刀身が青く光り、フォトンが刃を形成する。」

「さてさて…ここアークスシップ! 室内戦はダメの筈じゃ!」

「私の問いに答えなさい。アークスに登録されている貴女ーユウナさんは一体何者なんです?」

「そう言いゆつくりと近付いてくるクーナさん。何回か会った上に前回のエルダー戦で味方だった為に背中に背負う刀に手を掛けるもそこから抜けない。」

「…俺は俺、と言う確証以外に何が必要、なんですか? クーナさん?」

「そう言いにじり寄るクーナさんに対し後ろに引きつつもいざとなつた抜く気の無い刀の柄に手を添える。」

「まさかこの世界に来て対人戦をやる事になるなんて、なんて内心悪態をつきながら背中にある刀の柄を添えていた右手で掴みー。」

「…:…はあ、今は止しましょう。任務も降りてませんしね」

「向こうから武器を解除してきた。フツと両腕に付いている刃が飛

散して少しづつ離れていく。

「……」

到底向こうから戦闘態勢に入って来たんだ、幾ら人とは言え流石に手を離せない。

「私も解除したんです。貴女もしたらどうですか？」

「そつちから戦闘モード入って解除されてもそう易々と解除は出来ないねえ。こつちはしたいけど」

「…はあ、分かりました。それでは私は去ります。ーあと」

「…？ーはあ☒」

「ー貴女が今日ここで見た事は他言無用って事で！」

そう言うクーナさんに首を傾げた瞬間ー目の前のクーナさんが先程までいたアイドルのクーナさんの服装になりー見た事は誰にも言うなと言いきって消えた。

「……あ」

アークス消える奴多すぎるやろ…。

と言う眩きは本人に聞こえていたかどうかは定かではない。ーと言うかアレ、アイドルのクーナさんはアークス(暫定)のクーナさんと同一人物…？

――

「……」

キヤンプシツプルーサーレクスmk9とも呼ばれる機体ルーの椅子に座りライフルとハンドガンの掃除、煉獄刀・焰嗟と言う洒落にならない名前の付いていた刀を台の上に置き整備していると向かい側にアフィンが座ってきた。

「…なあ、相棒」

そう言われて頭をあげるが、あの事ルー吹っ切れてアフィンの手を握った事があった為にアフィンを直視しづらい。と言うかあの事があつてからかアフィンの事をルー外見が女っぽい為か女の子と認識してしまいそうでヤバイ。

「……な、なんだ、アフィン」

そう言い淀みながらライフルのマガジンに弾をガシャガシャ入れていく。

マガジン下部の横に空いた小さな穴から弾が見えるまで装填していく。

「……その、前に言っていた彼氏にするって言うやつ事なんだけどや」

その言葉にピタリと止まりー。

「……ああ、その事なんだがー」

「ーその…へタレって思うかもしれないけど…いや、そもそも本人に言う事じゃないけど…俺は相棒と友で居たい」

「…え？」

「…いや、正直俺は相棒の事好きだよ？だけど…俺はまだ相棒の隣に入れるほど強くない。現にあの時…巨躯の時だっけそうさ。相棒…奴と一対一でやり合っただら？…ダークファルスと」

「…ま、まあ…あの時は先輩達が居たけど…先輩達援護くれなかったなあ…あん時は死ぬかと思った」

「それについてゼノさんエコーさん。それと今は謹慎に入っているゲツテムハルトさんから言葉を貰ってるよ。3人の話を纏めると巨躯とユウナの闘いが凄すぎて間には入れなかったって」

「…凄すぎてって…俺はひたすらガードしたりぶっ刺したりしただけだぞ」

「そもそもなんであの時使い慣れていない刀なんぞ使ってしまったのだろうか？…あれ？…そういやエコーさんからロッドを借りたままだったような気がする。…後で、アフィンの話が終わったら確認しておくか。」

「それが凄いなって。そもそもユウナは知ってるのか？ダークファルスと交戦する時は急激なD因子の上昇によって自我を失う事が多々あるんだぜ？先輩達が無事なのは10年前に別のダークファルスと交戦した経験があるからで…先輩達もユウナさん担いで直ぐにメデイカルルームに向かっていたけど」

「…確かにあん時は必死だったけど…」

「それにさっきも言ったけど経験のある先輩達が入れない程の闘い方をする相棒…ユウナの隣には今の俺じゃ力不足なんだ」

「……」

そう言い切るアフィンに俺は「そんな戦い方してなくね？元はニートも同然だったんだぞ、と出て来たがそれを喋ったらダメな気がするので出かかった言葉を飲み込む。」

「相棒はさも当然のように探索任務でダーカーを斬りつけて倒しているけど…普通俺みたいにアークスに入って数ヶ月も経ってない新人がやれる事じゃない」

それは突発的に奇襲してくるダーカーに寄生された原生生物や機械類に言ってくれ。

「と言うかそもそもなんだよアレ、途中からその細いソードにテクニックを纏わせたりしてさ。相棒さ、異常過ぎるよ」

「…アフィン、お前…」

流石にそこまで「目の前で言われると傷付く。コレはアレか？親友と思っていたのは俺だけパターンか？」

「…だから。俺は…俺は、今は相棒の彼氏にはなれない。俺が相棒の彼氏になれると思った時。その時に俺はもう一度相棒「ユウナに告白する。だから」」

「それまでは友達でいようよ。な？」

そんな事はなかったことに安心しつつ、それと同時に彼氏問題をアフィンの方から先送りして来てラッキーと思う俺だった。

「…お前そこまで俺を…ああ、分かった。だが俺は「いや、よそ」う。それはその時に話すさ」

—————

「…さて。お二人ともお話は終わりましたか？」

そう言う声が聞こえ俺はーアフィンは真後ろにいる少女に気が付いた。

「うおおあーあの時の？」

そこに居たのはあの突発的な巨躯戦と一緒に戦っていた少女だった。相棒を見ると俺の声に驚いたのか平然を保ちつつー尻尾と耳がぴーん、と立っている。それも直ぐしたらゆらりゆらりと左右に振れるが。

「…クーナさんか。どうしてここに？」

そう言い切る相棒の目が一瞬だけ目の色が青から赤に変わった様に見えたがー今はそんな事はいい。今相棒はクーナって言わなかったか？

「…今回貴方達と行動を共にするクーナです。以後お見知り置きを」
そう言い相棒の隣に座った少女ークーナさんは相棒と同じような戦闘服で隣に座る。

なんか、と言うか相棒のサイズがおかしいだけだけど…なんか、小さく感じてしまうなあ…。

そんなことを思いつつクーナさんの名前を口に出すと、

「く、クーナさんって言うのかあ…ん？」

「どうしたアフィン？」

「…いや、なんか…アイドルのクーナさんに似てるような気が…でも

髪の毛の色違うし関係ないか」

案の定と言うべきか：俺の方からアイドルのクーナさんとの関係性があるのかを気になって言ってしまう。

「：アフィンさんでしたか。クーナさんの歌がお好きなんですか？」

そう言われてガタツと椅子から立ち上がり目の前のクーナさんと同名の少女に言い切る。ら

「ええ！それは勿論！なんならファンクラブに入ろうと思っていたこともありましたし」

「思った？」

思った、と言う言葉に少し悲しそうな顔をするが直ぐに訂正をする。なんかクーナさんーアイドルの方を悲しませたような気がしてならない。

「ええ、その時にアークスに受かってしまいました。そのまま入れずに」

「そうなんですね：ユウナさんは？」

そう言いクーナさんは相棒に話を振るが

「俺？歌とかはあまり聴かないな：」

と素っ気なく話を切る。

「そう。彼女の歌はいい歌ですよ、今度聴くのをお勧めします」
確かに良い曲なのは全肯定する。

そう思いながらクーナさんの言葉にウンウンと頷いているとふと頭の中に今回の任務の事で聞きたいことがあるのを思い出す。

「：あつーそうだ、いきなり話をぶった切る感じで悪いんだけど今回の任務は一体なんなんだ？俺ある生物の確認って事しか管制官から言われてなくて：」

「：クーナさんがいるってことはもしかして？」

「ええ、前にーユウナさんに言っていた龍ー造龍の討伐が今回のオーダーです。多分ですが私と会ったことがある為に上から指名されたのでしよう」

「造龍？なんなんですかそれは？」

「造龍とは読んで字の如し人工的に作られた龍族。惑星アムデイスキアの複数の一族から生体データを貰い受けアークスから対オーダー用の龍族を造ろうとして…失敗、封印された計画の副産物です」

「なんでそんなものが外に？」

「…理由は分かりませんが施設内にて凍結保存されていた一番強い造龍の1人がオーダーに似た転移方法でワープ、複数の惑星にてアークスに攻撃を仕掛けているとのことで…討伐任務が降った、という事です」

「へえ…という事は討伐もするのか？3人で？」

「いえ。できるならという事ですが…無理ならば増援を呼びに戻ることも可能ですし、なんなら見つからない場合は搜索を切り上げ撤退も許可されています」

「…で？クーナさん、最初はどの惑星に行くつもりで？」

「ここまで黙ってマガジンに弾を入れていた相棒が話を切り出す。

「…先ずは龍祭壇に向かおうと思います」

「…そう言うクーナさんの言葉にー後で相棒も言っていたが、何故かとても悲しそうな感じがした。」

114 話目 顔合わせ

「……居ないらしいですね」

そう言うアフィンの言葉にクーナはウィンドウで何かを弄っている。

「…確かにそう見たいですね。このエリアに拠点を構えている龍族曰く、そう言う者は見てないと」

そう言いながら龍族から貰った謎の食べ物をスキャンする。

謎の食べ物の上にウィンドウがオーバーレイ、火山パイナップルと言うアムデイスキアの火山付近にしか生えていない種でオラクルで栽培されているやつの大元はこれをモデルとしたらしい、と書かれている。ついでに凄く甘いとも。

「……所でユウナさん。あなたは一体何を…?」

「いや、なんかくれたから食べてみよう」と

「…これは…火山パイナップルですか」

「…おお、天然のパイナップルかあ！相棒！いいか！」

「ああ、ほら、クーナさんも」

そう言いナノトランサーから野外用の調理一覧セットからまな板を選び石のテーブルに置いて、ハンドガンホルスター脇に装着してあるナイフを抜き取り大雑把に切って2人に渡す。

「…どうだ？」

「甘いねえ！」

「うんっ、これは中々…美味しいですね」

「まあ切っただけだけどな。ある意味じゃ本物の天然モノか」

何個か食った後にベロが痛くなったため、後は自分で切れとアフィンにナイフと場を渡し、椅子に座っていつもの様にジュースを口に付ける。

「そう言えばクーナさんはなぜ龍祭壇を？他にも火山洞窟とか浮遊大陸とかあったでしょう？」

「龍祭壇は一番龍族が多く情報が見込めると思っていたので。…実際はゼロですが」

「…ま、まあ此処は古いとは言え宇宙港に近い、その、一番奥にある安全なエリアだから龍族も戦闘に加わって無いんだろう」

「…そうだと良いですが…」

「…んで。次のアテはあるの？」

「…そうですね、アフィンさんの言う通り少しづつ外周に向かいましょう。ダーカーが出てきたらその都度交戦って事で」

「ダーカーに侵食された龍族の場合は？」

「時に寄りますね。今は比較的關係が良好とは言え同族を殺されるのを黙って見るのは嫌でしょう。極力避けつつ、万が一侵食された龍族と龍族が交戦していたら援護に入る形で」

「了解した、アフィンは？…アフィン？」

アフィンに有無を聞こうと顔を向けたらーパイナツプルの酸っぱさに顔をしかめている。

「……あの、彼は…？」

「…大丈夫だろ、腐ってもエルダーとやり合って生き残ったし」

「それは貴女もですけどね」

「俺は二度と会いたく無いがな」

そう話を切り捨てアフィンの頭を軽く叩き行くぞと腕を入りに向けて動かす。

それを見たアフィンがまだ残っているパイナツプルを全部口に入れ立ち上がり、既に入り口の方に向かって歩き出しているクーナと俺の後を追い始めた。

—————

「クーナさん、5時の方向にディーカーダ！三体！相棒の後ろにーうわっ！」

俺とクーナをいつでも援護と二人のどっちかがアフィンの援護に行ける距離を維持しつつアフィンからの指示に従いダーカーと戦う。

「っ！おらあ！」

人に近い体型をしたダーカーに対し丸見えの胴体中央にある赤いコアに向けて刀を突き刺す。ぎい…と言う鳴き声と共に飛散するダイカーダ。そのまま周りに居る同種に出せるようになった衝撃波を当てて、倒れた所と同じ様にコアに突き刺す。

クーナの方を見るとあちらも終わったっぽい。ダガーの刃を飛散させている。

終わったし俺も刀仕舞うか。

そう思い背中に忍者刀の様に背中にある鞘を左腰に持ってきて鞘に収めようとした時。

「ーあっ！相棒の6時方向！見た事ないぞ！」

そうアフィンに言われ半分程鞘に納めていた刀を抜き取り後ろに向けるとーそこには先ほどのダイカーダと似た、だが腕部に刃らしきモノが付いているのがみえる。

刀を右手で持ち新種のダーカー種ー後にプレダイカーダと名称される敵ーに近く。

碗部下部に格納されていた鎌が展開、鎌のついた武器腕となった敵が俺に向かってー。

フツと消える。

「消えたー。ッ☒」

ミ耳が何かを感じて後ろに刀を向けるとーキーン！と言う弾く

音が響く。

そのまま後ろに引きながら刀で守った衝撃を受け流し、再度両手で持ち直す。

敵を見るとどうやらワープしてきたらしい。

右手で敵の下から斜め左上に切り上げて、敵の頭を思いっきり斬りはらう。

頭を吹っ飛ばして尚動くためにそのまま首から真下に向けて刀を振り落としー真つ二つにした。

二つに割れた直後、空に飛散して何もなかったかのようになった。

「…はあ、はあ…あ、ありやなんだ？」

その場にペタンとー体が勝手に女の子座りの様な風に座り込みー二人が駆け寄ってくる。

「…分かりません。新種の様ですが…今上にデータを送ります」

「ディカードみたいだったけど…腕に武器なんか付いてなかったよな？…今までの」

そうアフィンとクーナが周辺を警戒しつつ背中を俺に向けて近くに来た。

「あ、ああ…まるで対人特化だな。にしてもワープまでしてくるとは…懲り懲りだぜ、ほんともう」

そう言い俺は刀を地面に突き刺して刀を杖代わりにして立とうとした。

「…相棒、立てるか？」

それを見ていたアフィンが俺に手を差し出して来る。

「ああ、あたりめえよ、つて言いたいのが…手え貸してくれ」

「ほらっ」

その手を握り立ち上がり…地面に刺した刀を誰もいない方向に振り払い鞘に収める。

「ありがと、アフィン」

「…出ました。先ほどのエネミーはプレディカーダと呼称するとの事です。アークスのエネミーデータに保管されるとも」

「…速えな。そんなすぐデータ挙げられるならカウンターにマグを預けなくても…」

「すいません、私の上司は秘密主義者なので。あまり中間を挟みたくないのでしょう」

「…まあ、他にも色々と預ける方が都合が良いんだろう、分かっているさ。…さて。検問所までもう少しかかりそうか？」

「そうですね。このままマップ通りに向かえば龍祭壇を抜けられそうです」

そう言い立ち止まりマップを俺たちに見せてくるクーナ。マップ上の2-3-0、南西の方向にコレまた龍族の居るエリアがあるらしい。そこが龍祭壇と浮遊大陸の境目だとか。

「浮遊大陸を移動するには私の機体を使いましょう。あの機体なら小さいですし、宇宙港に着陸しなくても良いですし」

そう言いクーナがマップ上に着陸エリアを指定する。他にも俺たちが見られるまで上空待機とも追加でオーダーを出す。

「えつと…今いるエリアが…マップのココだろ？」

そう言い横からアフィンがマップを指差す。龍祭壇の端っこにある検問所みたいな所から約2kmの所にマークカーが付く。

「ええ、約3キロですね。歩いて…まあ、40分も有れば到着するでしょう」

「ここいらに着陸するって言うのは？」

「やっとの事で龍族と関係の修復が出来つつあるのに、飛行禁止エリアまで来て着陸するのはどうかと。彼らにとつて龍祭壇は神聖な場所です。本来なら私達が居られるのもおかしいですよ。ーもつとも、貴女は違う様ですがね」

「…まあ、成り行きだよ、アレは」

そう言いながら此処にくる原因となった2人ーライトとアキさんを思い出す。そう言やあの二人はアークスシッブ強襲時は大丈夫だったのだろうか？

「と言うか冷静に考えたらライトさんの髪形めっちゃヒヤッハーみたかったなあ…」

「…?どうしました?」

「…いや、アイツもヒヤツハーな髪形していたなど」

「ひゃつはあ?なんです、それ」

「クーナさん、相棒時折そう言う変な事を言うから気にしない方が良
いよ。ーー最も俺も気になるけど」

「そうだな、ヒヤツハーって言うのはだな…」

そう言い俺は二人に世紀末の様な髪形を話し始める。アークス、と
言うよりオラクル船団はロボ系は疎いものものそう言う世紀末に似た
様なアニメがあるのかアフィンの方はすんなりわかったらしい。

「ーー要するにモヒカンって事か?」

「いや、まあ、そうだけど…なんか、違うんだよな…」

「…お二人とも、私がついていけないのですが…」

「ああ、ごめん、クーナさん。世紀末って言うのはーー」

アフィンが説明をしようとした時。俺たちが目指している龍祭壇
と浮遊大陸の境い目だと思うエリアの方で何か慌ただしい音をミミ
が拾う。

それから少ししてクーナさんも何か気づいたようだ。

「ーーで、胸に七つの傷を持つ男が…あれ?どうした?相棒?...それ
にクーナさんも」

俺とクーナさんの異変に気付いたのかアフィンが話をぶった切り、

聞いてくる。

「…アフィン…俺たちが向かっている方向から何か聞こえる。…多分、戦ってる」

「…龍族とダーカーでしょうか。なら救援に向かいましょう。アークスの印象を良くしておかないと」

「俺もクーナの意見に賛成だ。アフィンは？」

「俺は二人に従うよ。もつとも、救える命は救わないとな！それがアークスってもんよ！」

そう言い俺はナノトランサーからホバーバイクを出して後ろに二人を乗せる。

スロットルをゆっくり広げ高度を上げてラダー、エルロン、エレベーターの動作をアフィンに見てもらい確認してもらい高度を1メートル前後あげて速度を上げる。

コイツの出力ならもつと上がる上に速度も出るらしいのだが今回は2人も乗っているため速度を出せない。

それでも歩く、走るよりは遥かに速い速度で検問所に向かった。

—————

「撃て撃て撃て！アフィン！ーぐあー！」

そう声をー右手に持っている焰嗟を握りつつ左手でアフィンに敵を指差しー上げて指示を出す。

その間もさつき見た新種ロープレディカードはワープして俺の後ろに跳んで来る。

後ろから吹っ飛ばされるて地面に転がるがー痛みを耐えーられないので刀を地面に刺して立ち上がり、イテエ！と叫びながら、俺を吹っ飛ばしたカード相手に右下から左上に斬りあげる。

その後首を水平に斬ってー最後にコアに突き刺す。

コアから刀を抜き取り、一度刀を鞘に納めて、右手をライフルグリップを握る形にする。

するとライフルが右手に現れていつもの動作を行い、ライフルを左手でグリップを持ち、空いた右手で刀を握る。

ライフルを脇腹に挟んで出来る限り固定してダーカーに向かつて片手で撃つ。

「相棒っ！そんなんで当たるのかよっ！」

「龍族が襲われてんだ！助けない意味はないでしょ☒」

「そうは言ってもこの数はー」

『アークス 救援 感謝する しかし この数 無理がある』

「おいっ！そこの剣持ち！大型の龍族とか呼ばないのか☒」

『ハ・ニガ様 や タ・ユギ様 は 現在 テリオトー 深部に居る
救援は 期待 出来ない』

『手の空いている者は 備え付け の ランチャー を使え 我ら

で 此処 を 守り抜け』

『ダーカー とやらは まだ 来るはず 今の内に より 強固に 守りを固めろ』

「アフィンは高台からー高台に陣取っている龍族と一緒に撃ち下ろしてくれ。クーナと俺で前に出る」

「了解、他の龍族にも指示は？」

「アフィンの指示に従ってくれるやつだけでもいい。クーナさん、行けるよね？」

そう聞き終わるとアフィンは高台の上に向かって走っていく。

「もちろん。ー私がこのくらいでバテるとでも？」

「…まあ、そうは思っていないよ」

「それよりユウナさんの方こそ大丈夫ですか？そんなおつきな胸をぶら下げて」

「大きなお世話だ、それにこちとらスポーツブラやぞ。そう簡単に痛くはならない」

「…私の精一杯の場の上げ方をスルーですか…」

「それ人によつちや煽りにしかならんからな」

『アークスよ 我ら も 準備が 整った』

「おーけー、それじゃ、突撃かますか」

「ユウナさん、作戦とかは？」

「んなもん、会って数分の奴らに聞かせられるか。それに彼らも俺らが立てるより各々の判断の方が良いだろうよ」

『分かった 突撃 次第 各々の判断で 攻撃 で 宜しいか？』

「そうだ。それじゃ、頼むぜ」

『よし 今ここに いる 龍族よ レヤ・ハサマ の名に おいて 突撃を掛ける！』

そう言う龍族を横に俺とクーナは走り出しダーカーに突撃を掛ける。

それから数歩して後ろに控える龍族も突撃を掛けた。

「ーー状況は☒勝ってる☒」

『現在 は 我等 が 優勢』

「今は勝ってるってさ！このままなら無事にーー」

「ーーアフィン！5時の方向！」

「おりやあ！」

「ー勝って指定エリアに行けそうだな」

「…お、うん」

『アークス よ 此度 の 救援 感謝 する』

シールドや剣、ロッドらしき武器を持った龍族が次々に前に出て俺とクーナは国境検問所の方に下がる。

刀を鞘に収め背中に戻し、ライフルを単発モードにして龍族に当たらないように単発で撃つ。

高台から降りてきたアフィンもそれに釣られて俺が撃っている方向にライフルを向けーー向けただけで終わる。

「…龍族のD許容値範囲は…：まだ…大丈夫みたいですね。ユウナさんはアンティを使えますか？」

そう言われてクーナの方を見るとー複数のウインドウを起動して周囲にいる龍族のD因子許容値を目で流している。

「あ、ああ。確かナノトランサーに先輩だか同期だか忘れたが借りパクしちまったロッドがあったはずだから使える筈」

そう言い自分のデータ一覧を見て習得済みのフォトンアーツの欄で光系テクニクの一覧とエコーさんかテオドルかはたまた他の誰かからか借りたロッドのあるのを見てー一通り習っていた事をクーナに伝える。

「分かりました。戦闘が終了次第ユウナさんと私、アフィンさんの手

でソルアトマイザーを投げましょう。ユウナさんは先程言ったとおりアンティをお願いします」

「了解した」

「…ソルアトマイザーなんて俺持っていたっけな…：あつたわ」

そう言うアフィンを横にマガジンを抜き取り数発だけ撃ったマガジンにバラで持っている弾を装填しようと検問所の中に入ろうとした時。

ミミがなんだか良くない…言葉で表現出来ない変な何かを察知する。

「…ん？どうした、相棒。ミミをそんなに立てて。…それに尻尾も相棒、触って良い？」

「…アフィン、今はそんな時じゃねえ。と言うか…何か、変な感じとかしないか？」

「変な感じ？…いやあ…無いわ」

「…クーナさんは？」

「いえ。今のところは」

「相棒、気の詰めすぎなんじゃ無いのか？今度…そうだな、クーナさんやマトイさんの3人で遊びにでもー」

そこまでアフィンが喋るとー少し離れたところに空間の切れ目と言うか仮面がワープしてくる時と似た様なモノー黒い円が少し

時間を置いて出来上がりー中から。

「…アレは…っ！ハサマさん！至急前方の龍族に撤退命令を！」

中から出てきたソレに直ぐに反応し隣に居る龍族に撤退命令を出せと言ってくるが、ソレの口が開きー黒いビームを発射。龍族ダーカーを巻き込み、更に検問所の端つこを貫通して空に一筋の黒い光が散る。

「あ、あれってヤベエ奴…？」

ソレを見たアフィンが小さく言うが俺も背中の刀に手を伸ばしー。

「…多分超ヤベエ奴。んでアレがー」

「ハドレット…!!？」

クーナがそう言うとして一人でハドレットと呼ばれるソレーアークスの暗部が造ったとされる人造龍ーと交戦に入る。

「もくー言われちゃったよ…」

一人でハドレットに向かっていくクーナに対し俺とアフィンも方やライフルを、もう片方も刀を手に握りクーナの後を追う。

『我が 同胞 が … 一瞬で』

身体が白く大型の肉食恐竜の様に歩き目の前の龍族とダーカーに向かい攻撃を開始した。

「龍族はA・S・A・Pで退避！アレは私が殺りますっ！」

先に走るクーナが大声で龍族達に言うとしてー大きくジャンプしてハドレットの頭にダガーを刺した。

「アフィンはケツを！どんな生き物でも6時方向は弱いはず！俺と

クーナで前から狙う！」

「了解！」

そう言いアフィンは大きく円を描きハドレットのケツ方向へ。

俺はそのままクーナと同じように頭方向に向かいー俺から見て右前脚に刀を突き刺し引き抜く。

「ユウナさん、アフィンさん！これが目標のーハドレットです！」

そのまま一回転し地面に着陸、俺も引き抜いてクーナの横に並ぶ。クーナを見たハドレットはー一際大きな声で鳴きーどこかに去っていった。

去っていくハドレットを見ながらクーナはその後を追いー「なんで逃げたの？」と言うとても小さな言葉を発しーハドレットもソレを聞いたのか、ワープホールを作りその中に消えていった。消えた場所を見ながらその場で座りーハドレット、と消えた奴に掛ける。

「…あ、相棒…アレって…」

「…言うな。ああ言うのは詮索しちゃいけない奴なんだ。聞きたくてもな」

そう言い後ろにいる龍族に声を掛けられ本来の任務に戻るよう指示。俺とアフィンはクーナの横に向かいこの後も任務を続けるかを聞きに向かった。

115話目 一時帰還

「…で、今回交戦、したつて言えるかどうかは別として。アレが今回の任務の目的の人造龍ハドレット、で良いんだよね？」

あの後一度検問所の龍族にも警戒態勢を引いてもらいさつき見た龍ーハドレットを見た場合は至急アークスに連絡をするようにと言いつつそのまま前進。

既に着陸していた機体に3人とも乗り込みその中でこの後も任務を続けるかどうかを会議。結果今回のデータを確実に持ち帰る事を選択しそのまま離脱、オラクル船団に帰還した。

クーナは情報を上に確実に届けるために分かれる必要があるため集合場所ーラフリに終わり次第来てくれと言いつつ、さも当然の様に目の前で消えた。

もつともアフィンは「…本当に消えた」と言っていたがなんでか知らんが俺はどこに向かって歩いてるとか何となくで分かる。これも多分ミミのせいだろう、そうに違いない。

それでその後こちらからもマグを提出し、データを上に報告、一足先に俺とアフィンでラフリで一服している。

しばらくするとー私服を着たクーナが来たのでアフィンが手を振りもう既に居ることを気付かせる。

その後各々ー俺とアフィンは飲み物だけは注文してあるのでメインである食い物ー俺はホットドッグを。アフィンはいつもの様

にステーキを。一方クーナさんはケーキセットを頼む。

それで来る間にー冒頭の言葉が出たわけだ。

「はい。彼ークローム・ドラゴンのハドレットの説得、それができない場合は…倒す任務ですね、今回の任務は」

「説得できそうな、と言うかそもそも話は通じるのか？見た感じ直ぐに襲ってきたけど…」

「…言語は理解できているはずですが。もともと発声は出来なかったはずですが」

そう言い切りーなんて逃走なんてしたんだ、と小さな声がクーナの口から続けて聞こえる。

「…取り敢えず、会敵したら戦うしかないか…他に何か情報は？」

「龍祭壇でも見た通り彼はダーカーどころかその星の原生生物、それどころか私達オラクル船団の人まで食べる事がある、とか…」

「割と重要じゃねえか！それ！」

「…え、俺もしかしてヤベエ任務を相棒と一緒に渡されたパターン？」

「…取り敢えずサイズは分かった。…仕方ないからあの人達に力を借りるか」

「あの人達、ですか？」

「た、多分ですが…」

「……はあ……一層の事ゲームに習って落とし穴でも作って麻醉ポールでも投げるか?」

そう呟きオレは外を見る。

「相棒…そんな簡単に行くならオレ達にお呼びがかからないよ…」

外には大型のモニターにニュースやオラクル船団や各惑星の天気変動情報などが出ている。

「…ダメだ、全然案が出ない」

オレはジュースに入っていふストローを口に入れ口を動かし上げ下げする。

「…私もです。上の方にもつと情報を開示出来るかどうかを聞いてきます」

まだオレ達に言えない情報があんのか、と内心想いっつも頼むと言おうとした時。

「ーーお待ちせしました、こちらホットドッグセットとステーキセットのaランチ、こちらがケーキセットのeセットになります。ごゆっくりいー」

そう言いアフィンは早速きた肉にナイフを入れて直ぐ様にそれを口に放り込んでいる。

熱くて口を開けているアフィンを尻目にクーナさんの方を見て肯定の意味を込めて一言。

「頼むわ。……んじゃこれ食い終わった後どうするよ?」

「…そうですね。割りかし今回の任務で割と自由な権限を貰ったので

そこら辺をぶらぶらしようかと」

「…んっ…はあ…ならオレ達と一緒に買い物に行かないか？なあ、相棒。良いだろ？」

いや、確かに買い物にでも行けば何か案が出るかもしれないけど…だけどさ。

「良いけどさ…俺たちレンジャーだよ？近接のクーナさんが見て回っても面白いとは…」

それにあの時…公園みたいなエリアでの件があった為にイマイチ信用が出来ない。

「…いえ。暇なのでお二人について行きます」

「だってさ」

「…まあ、うん。はい」

女になった所で女の子に对面で言うのはやっぱり無理だったわ。

—————

「…なんだこりゃ？」

「ガンスラッシュですよ。使った事は？」

「全然」

「相棒、何買えば良い？」

「アフィンはフォトンの比率が高い爆薬だな。間違っても通常の爆薬は買っらんじゃねえぞ?…:そう言やターゲットの状態って?」

「:正直あの状態だとある程度ダメージを与えないと正気には戻らないような気がします」

「:まるで捕獲作戦だな。何か使えそうな物って無かったっけ?」

「アークスがダーカーを研究目的で捕獲する装置があった筈です。その使用許可も貰ってきます」

「:あれ?その装置って転送装置だった気がするんだけど?違ったっけ?」

「:俺は使った事ないわ。と言うか見たこともないわ、その転送装置だか捕獲装置って奴」

「ユウナさんに説明するとですねー」

クーナ曰くー探索任務にて中型ダーカー及び大型ダーカーと交戦した場合、撃破か捕獲の2つに分かれるらしい。

ある程度になると1人から使える装備を使い捕獲できるのだが初心者ー入りたてや捕獲をしたことの無いアークスに限り管制官が大型捕獲装置を転送、中心にフォトンで作られた擬似ヒューマンやニューマンを表示、エネミーの攻撃がそっちに移っている間に起動する、と言う感じらしい。

「ーって言う装備があります。今回はユウナさん以外使い方知つてますし、初心者用の大型装置じゃ無い方で行きますか?」

「…今思っただけだけどプランBは捕獲の流れ見たいじゃん？」

「え？ええ」

「今回の任務って可能なら説得して回収。無理なら撃破だよな？…あの様子だと無理じゃね？」

「ならロボットによる強襲をプランA、捕獲作戦はプランB、ロボットの使用不可、捕獲作戦も無理って場合のプランCを考えましょう」

「…また更にプラン重ねるのかよ…」

「プランAが可能ならそれに越したことはないんですがねえ…」

「…所でクーナさん。さっきロボットって言ってましたけど…あの時って何処かで会いました？」

「いえ。知っている訳を知りたいならーほら」

「そう言いウィンドウを表示。こっちにといい俺とアフィンがクーナの横に向かう。」

そこには『遂に実用化☑アークスの新戦力！』という見出しと共に整備士と大きく引いたアングルで撮ったと思われる写真が。…ご丁寧に俺の姿を消して。

「…この記事を書いたのはバベル派の奴だな、間違いない」

「そう言い俺の横で見ているアフィンが決めつける。」

「にしたってコレは露骨過ぎますからね。だからと言って上も止める訳でもなく…十中八九他の種族に置き換えて出るタイプですかね」

「ひでえな本当。相棒もそう思うだろ？」

「…まあ、いざとなったらアレに乗って暴れてやるわ」

「…私の所に来ない様をお願いしますね」

「……」

「…え？どういう事です？クーナさん」

「……私なりのジョークよ、気にしないで」

その出で立ち且つステルス持ちがそんな事言ったらジョークに聞こえないんだよなあ。

そんな事を思いつつ再度バラけてー店内を物色する。

今俺たちがいるショップーヤスミノコフ系列の店らしいが…なんか、前世で見知った様な形の物が多い。

特にこのヤスミノコフ2000Hなんて…。

「45口径じゃないか。…かの有名な」

そう言い店内に飾ってあるソレーム1911を手取る。

グリップ横のマグキャッチボタンを押して中身を下に落とし、手の中に。

マガジン内部には実弾を催しつつーけつ部分に撃針が当たった様な凹みがある。

店主に聞くと小声で「なんか臭うと思ったらビーストかよ、獣臭え」と言われたもののそのビーストたる由縁のミミがバツチリその声を捉えてしまう。

言った事を聞こえないフリをしつつ、これは試し撃ちできるのかを聞いたら中に入っているのは弾を催した物らしい。本物を撃ちたきやアークスカードを見せろとも。

初手侮辱したこの野郎に身体が震えつつ足についているハンドガンで撃ち殺したろかと思いつつ渋々自分のを見せる。

「……確認した。コレがヤスミノコフ2000Hだ。後ろの射撃スペースで撃ってみてくれ。ー弾は払えよ?」

そう言いハンドガン用のケースを何処から取り出す。

んだよ、弾代は自前かよ。

そう思いつつ合う弾を見繕ってもらい、後ろの射撃スペースへ。

ふと二人ーアフィンとクーナはどこに?と思いい周りを見渡すがー居ない。

クーナは兎も角アフィンはちゃんと爆薬を買ったんだろうか?

と頭の中で思いながら射撃スペースに向かうとー。

「もうちよい上…そこです」

バシユ、バシユ、と両手で保持するランチャーを撃つアフィン。その隣でアフィンに指示を出すクーナ。

ランチャーのマガジンには青文字でH・Eと言う文字が逆さで書かれている。

「…ちよい下…ちよい左…そこです」

「……だあああ！ダメだ、俺にはランチャーは無理だコレ…」

そう言い両手で持っていたランチャーをテーブルの上に置くアフィン。

「まあ、フォトンが補助してくれるとはいえ射撃は射手の技量によりますからね」

「弾道が読めなくてキツイわ…ソレに腰だめって言うのもなあ…」

そう言いつつアフィンはランチャー本体から大型のマガジンを外し横に置く。

「…ユウナさんも試し撃ちですか？」

「んあ？ああ。コレをね」

そう言いアフィンとクーナの居る場所の隣に席を取りガンケースを開ける。

2つ付いている蓋を外し…中身を開ける。

中にはー前世と呼んでいいのかわからないがーにて結構頻度で触ったことのあるガバメントに似た銃が入っている。

触った通りにマガジンキャッチボタンも同じだしぱつと見同じに見える。

マガジンキャッチボタンを押しマガジンを排出。その状態でサムセーフティを下にして解除。スライドを引き切り、スライドストップが上部スライドの切り欠きに引っかかるのも確認する。

その状態でわざわざ試射用に購入したマガジン2つを装填してスライドストップを下にして解除する。

スライドが前進してマガジン内のバネにより上にテンションが掛かっている弾をスライド後部が薬室内に押し込むのと同時にエキストラクターが弾の後部の凹んでいる所に噛み込む。

両手で持ってダーカーを催したホログラムに向かってトリガーを引く。

ファイアリングピンー撃針が弾のケツを叩きカートリッジ中で爆発、先端部分だけがバレル内部に沿って真っ直ぐ進んでいく。

爆発の反動でスライドとエキストラクターにケツを噛まれた薬莖が後退してはエジエクシオンポーター排莖孔横にあるエジエクターが噛まれた薬莖をエジエクシオンポーターから外に放り出す。

バレル内から飛び出た弾頭は風の影響の無い室内の為真っ直ぐ進みーダーカーの頭に当たる。

「……減音機が欲しいな……」

そう呟き自分のミ耳を触る。いかんせんコレは便利であるがでかい音は苦手である。

そう言う意味では減音機——サイレンサーだかサプレッサーも候補には入る。

一時期付けていたヘッドアクセ：付けるの面倒だったけどつけ直すべきだろうか？

そう思いつつもハンドガンの練習がてら撃ち尽くした。

—————

「……これ、返すわ」

そう言い店主にテキストにケース内に放り込んだガバメント入りガンケースを返す。

「……そうかい。ほかに用は？」

そう言う店主。何か無いかと店内を見渡すと——店主の裏のラックにあるものが見えた。

「……んじゃアレは試せる？」

そう言い視線と人差し指の先にあるハンドガン、ではなくリボルバーらしき銃を見る。

「……ほら。試してみな。——ああ、コイツはマガジン入らない。コイツはフォトン弾を使う」

弾は？と言おうとしたら先に店主に言われる。なんだ、そのフォトン弾って？

「フォトン弾？なんだいそりゃ？」

「コイツは適正がちと合ってたな。一定のフォトンを使える能力が無い

と完全に、とはいかないが使いにくいらしい。――最もあんたは第8世代だ、関係ないだろうがね」

「…フォトン弾って？」

「ダーカーが嫌がる弾のことだよ、お勉強しなかったのか？ さあ、いった、いった！ービーストとお話するほど暇じゃねえんだ」

そう言いガンケースに入ったソレを受け取りもう一度射撃スペースに。

あんのクソ店主め、俺が俺じゃなかったら撃たれてたぞくそがつ。

と今日何度目から分からない悪態をつきつつガンケース片手に射撃スペースに向かう。

一方の2人はーアフォンはマガジンを選んでいる。まあアークスの支給品は使いやすいけど痛いところに手が届かないからなあ…だから俺もジグさんのプロトレイを使っているわけだし。

ちなみにクーナさんは飽きたのか休憩エリアでお菓子を食っていた。

もう少し時間が掛かると言う旨を伝えると、「私もこう言う事は初めてで楽しいので。時間をかけても大丈夫ですよ」と言われた。

こう言う事ってどう言う事だ？ と思いつつクーナの横を通り

射撃スペースの扉を開ける。

…そう言やアフィンはフォトン爆薬買ったのだろうか？

そんな事を縁で考えつつ、取り敢えず撃ってみてからで良いや、とリボルバーのH10ミズーリ・Sが入っているガンケースを開けた。

116 話目

それからと言うもの3人で行動しつつアムドウスキアを回るもの…遭遇はするものの少し交戦すると去っていくハドレット。

これにアフィンが業をなし一度クーナを機体に置いて上空待機させ、出現率の高いエリアを俺とアフィンの2人で重点的に探した。

だがその場合は会うことすら出来ずー。

「ロープランAとCはムリ!と言うかそもそも会えねえし交戦したら逃げやがるっ!んだあの龍!」

そう俺はテーブルに突っ伏し、「うあああ、もうやだなあ。このオーダー抜きたい」と続ける。

最も前金は貰ってしまった上に追加報酬も有りときた。これで任務先に行ったらアフィンとクーナでも攻撃(騙し悪いが)されたら俺はブチ切れていたかもしれない。…だってまだ数ヶ月程度しかいないからな、ここに。

「…取り敢えずあのハドレットがクーナさんを好きなのは分かった。……それこそクーナさんが居ないと出てこないレベルに」

そう言いオーダー前に2人ローマトイとデュケットに言った「こんなオーダーはすぐ終わるから」と言う言葉を思い出す。今思えば十分に死亡フラグだったなど。

そう思い返しながら手に持つアイスをそのまま口に持って行きー口、いや、三口ほど頬張る。

「…そもそもユウナさん、プランAは兎も角、Cの方は捕獲装置の使用許可の認証がありませんでしたので…その、はい、うん」

「…そう言い下を向くクーナ。あの時のアレが無ければなあと心の中で思うわ。お陰で警戒心が未だにマックスだよ。解けないよ。」

「…そう思いながらも…次のプランを考える。地道に搜索するプランAはクーナが居ないと見つからないし、そもそも見つけても逃げられる。Cはそもそも使用許可が降りない。となると…」

「…もうダメだ、あの機体を使うしかねえ」

「使うって言ったって…修理は済んだのか？」

「メールが届いて機体の修復は完了、武装の方もテストする為に追加されたみたいだ、暇な時に寄れだつてさ。…何ならこの後3人で行く？」

「…そう言いクーナの方を見る。」

「…え、でも総技部って確か機密性が高くて…その、私のセキュリティクリアランスでも中々行けない場所何ですが…大丈夫なのですが？私がついていっても？」

「…セキュリティクリアランスってなんだ？」

「やべえ情報を扱う資格の筈。…相棒、アークスってそんなにセキュリティガチガチだったか？」

「…表しか見てないけどそんなガチガチって事は…」

「…え？…そもそも私以外のアークスに会うのも許可が必要って私は…上の方から聞いたのですが…」

「…なんで他の人と会うのに許可が必要なんだ？」

「…私の性質上他人に会うのは良い事ではないらしいので」

「でも今俺達と会ってんじやん」

「それは任務でー」

「デブリーフィングだから今日の任務は終わり。つまり今は自由時間だから任務は関係ないよ」

「…そうでしょうか？」

「そうですね。…なあ、アフィン」

「ああ、そうだ。関係無いな。なんなら相棒が責任を取ってくれるよ」

「おまつ、お前も責任取るんだよ！…いや、違うからな？決して変な意味じゃ…」

俺の言葉にアフィンが反応し、んじや責任とるわ！と言いながらケラケラ笑う。それを見たクーナもクスツと声が漏れたのをミミが拾う。

「…まあ、兎も角アレだ。許可が必要ならテキトーにでっち上げて…あの機体の実地試験って事で」

「…それだとハドレットと戦う意味がないのでは？それにアレはユウナさん達が奪取したものだから戦闘にも耐えるので実地試験の意味も無いのでは？」

「違う違う。…そうだな、これでハドレットとの戦闘で捕獲できたら軍も使う程器用という事でオラクル船団内の重労働にも使えるって事になるだろう。それに改めて戦闘に耐えるほど使えるなら重工業や特殊車両の代わりになるかもしれないし」

軍と言う発言にアフィンが首を傾げているがそれをスルーしてクーナに話を向ける。

「…相棒、本当は？」

首を傾げつつアフィンが口を開く。

「人と同時に働く大型ロボットが見たい」

「…フルキャストじゃダメなんですか？」

クーナに言われ頭に浮かぶはジグさんにリサさん。珍しいと言えば珍しいがないと言うわけではない。珍しいうって意味では俺の種族の方が余程珍しい。

「…違うんだ、違うんだよ。ロボットとフルキャストは。そもそもキャストは人じゃない」

「いや、一緒じゃん。ロボットも人っていう生き物が載っていて、キャストは人の身体に機械のパーツか機械の体に生体パーツ、かの違いだろ？」

「違うんだ…ッ、違うんだよ…ッ」

そう言い握り拳を作りながら、ある意味アフィンの言う事も一理あると言う考えが頭に残る。

「…ユウナさんとアフィンさん。その…そろそろ行きませんか？」

だが、だが、違うんだ。と言おうとした時。クーナさんが俺とアフィンの話に飽きたのか総技部に向かおうと迫る。

「…別に良いけど…言っついてなんだけど、移動手段ってある？」

「…車、アフィン持ってなかったっけ？」

「ああ、言ってもお古だけど」

「それで良いです。早く行きましょう。時間は早い方がいいです
から」

「俺も久しぶりに見たいし…行くか、アフィンの運転で」

「運転って言ったって…殆どオートだぞ」

「そうは言っても運転席に座るのはアフィンだ、頼むぞ」

「…はいはい、分かりましたよ…」

—————

運転席に座り目的地をオートドライバーに入力し、動き出して早数分…後ろの方で丁寧な時間を掛けて尻尾の位置を調整した結果…腕を胸の下で組みながらすすうと息を立てて寝ている相棒をバックミラー越しに見ながら前を見る。

フロントガラスに表示されるデジタルメーターとフォトン燃料のゲージ、車の角度、包囲、タイヤの向き、道路の進行角度などが視界を邪魔しない程度に雑多に表示されている。最も俺自身が運転しない為無意味に等しいが。

「…アフィンさんはユウナさんの事をどう思っているんですか？」

前見ながらぼーっとしているとユウナの隣に座ったクーナさんに

声を投げかけられる。

「どうって…そりゃ、相棒ですよ、そう呼んでますし」

「…そう」

そう言いシーンとー対向車や追い抜く車のエンジン音、ユウナの寝息以外が聞こえなくなる。

「…」

「…クーナさん」

「はい？なんででしょうか？」

「…クーナさんはアークス所属なんですよね？」

「……………ええ、一応は。アークス内の別の組織に所属しています」

「別だつて？」

「すいません、これ以上は…」

そう言い話を切り上げるクーナさん。多分だが本人也の優しかったつて言うやつなんだろう。

そう思い込みー椅子を再度前に向けた。

—————

「ーぼー！ほらっ！ーめだ、クーナさん、頼めます？」

「ほら。ユウナさん？着きましたよ。目を開けてください」

「…んあ…着いたあ…？…着いたの、かあ…」

案の定と言うかなんと言うか。言うほど離れていたわけでは無い筈なのにいつのまにか寝てしまっていたらしい。

「起きましたね？アフィンさん。ユウナさんが起きましたよ？」

「相棒、総技部に着いたぞ。早く降りて使用許可を貰ってこようぜ」

そう2人に言われ車を降りて受付を済ませるためにメインホールをくぐった。

—————

「これが例の…」

「そうだよ、クーナさん。相棒と俺で搔つ攫ってきたロボットだ！」

そう言い2人が機体を見上げているが——外見が色々と変わっている事にぱつと見で気が付いた。

まず肩が首を覆う用に大型化。それに伴ってかウエポンラックと言うべきかハードポイントと言うべきか…それが大型化した両肩に2基ずつ計4基が付いている。

腕の方もよく見たら俺から見て右手側に何か変な——武装か何か分からないがエネルギータンクらしき物も見える。その先には大型の銃口も。

技師の間を縫って側面に回るとー他にも違いがあった。背部に
なんかよく分からない大型のユニットが付いている。もしかしてア
レはー。

「コックピットなのか？」

仮のコックピット部から伸びるブースターユニットらしき物もある。

一目でわかったのはそのくらいだろうか？

「相棒！なんか色々と変わってんな！」

「ええ。アフィンさんの言う通りです。データベースで見た機体と
少々…その、違う様な気がしますが」

「いや、クーナさん、よく見てくれ。機体の頭部は同じだろう？」

「そうですか？ここからでは…ううん？」

唸るクーナを見てみると技師達が何かと忙しくなり始めた。それ
から少し経つと強襲時によく聞いた声をミミが捉える。

「あらーユウナさんじゃないの！よく来たねえ！」

上から聞こえてきてその方向に向くとー三階の手すり部分、そこ
に副班長が居るのが見える。序でに彼等にメットを渡せとも。

「ええっと、班長さんは？」

「班長？班長ならもうそろそろ来たら来ると思うよ？ーそれよりも見てくれ！お連れさんも！」

そう言い3つ持ったメットを俺たちに渡しーミミの有る俺はどう付けろと視線を送るもスルーされ、手に持つスパナらしき物を機体に向けてどうだい！と言い放つ。

「人型兵器を戦力化する為の予算が本格的に降りた！これもユウナさんがあの時避難民を護衛してくれたおかげだ！」

「…いえ、そのお…お、私も乗れて楽しかったですし…その、メットを被ー」

「ー予算がちよー降りたおかげでコイツを基にアークスが狩る専用兵器を作ることができる。んが、しかしー」

被れない、と言いたかったが被せられてしまった。被せるのはメットだけにしてくれ、そう思いながらミミを手で畳んで被ろうとした時、他の技師がやけに縦に長いメットを渡してきた。

「何もーからは無理って事でえ！コイツを実験機に使うことにしましたあ！ーあ、実験機と言っても使われる武装は全て実戦を想定した物が多いからそこは心配しないでくれたまえよ」

副班長が話を続けるが、俺はこの縦に長いメットを見て…おお、ミミを立てたまま入る、と言うことに感動しつつ、これ何かしら当たって中で反響したらヤバくね？とも。

「は、はあ…」

「いやあ！ユウナさん達はいい物を取ってきてくれたよ。上は戦術上コイツと同じ10メートル、又は8メートル程まで出来ればダウンサ

イジメしてくれつつ来たが…まあ、今の設計図だと十二分に行ける筈だ。――戦闘時間が犠牲になるが」

いま何か明らかに聞き捨てならない言葉が聞こえんだが。2人を見るとえっという顔をしているし。

「…えっとその…」副班長と呼んでくれ。その方がここに居る奴等も分かりやすいからな」…はい。では副班長さん、戦闘時間が犠牲になるとは一体？」

そんなことを思っていたらクーナさんが突っ込んで言った。

「そのことかい。簡単なことさ。ダーカー因子は万物――有機類無機類関係無く侵食する。これは3人ともアークスだから分かっているよな？」

うんと頷く2人に遅れ俺も急いで頭を上下に振る。そんな事より幾ら新機軸の機体だからって戦闘可能時間が数分もないのはNGで。探すだけで終わるわ。

「…1人怪しいのがいるが…んでそのダーカー因子を浄化出来るのがフォトン、普遍的に――それこそ宇宙が出来た時からあるモノだ。このフォトンによってダーカー因子は浄化出来る。がしかし――」

「――フォトンを扱えるのは決まって我らヒューマン、ニューマン、ビーストの三種族だけ。――キャストはそもそも元は人だから数えないぞ？んでダーカー因子はさつき言った様に有機類、無機類を侵食する。がフォトンが少しでもあれば侵食速度は遅くなり、一定以上あれば抗体となる。――ここまででは良いか？」

俺が頷くより先に2人が首を縦に振り話を先に続ける。

「――よし。じゃあ質問だ。俺たち総技部も色々と頑張ってはいるが流石に無機物にフォトンを受けるのは無理だ。さて…オラクル船団

の至る所にあるガンターレットやフォトンサークル…アレらがダーカー因子に侵食されたら？」

「…ダーカー因子を振り撒くダーカー側の兵器になる、でしたよね？」
俺が答えないでいるとクーナさんが答えを出す。さっきの話だと無機類にはフォトンを授けられないらしいが…それじゃフォトンサークルって何なんだよ。

「そうだ。そこの青髪の娘さんのいう通りだ。んで今こう思ったろ？
何でフォトンを使う兵器なのに侵食されるのかって？」

「答えは簡単だ。私達ヒューマンとその他の種族の使うフォトンと無機物を介して使うフォトンは別物だって事がな。1番良い例がアレーガトリングトーチだ。適性のない人が乗ると只の銃座だが適性があるやつが乗るとあら不思議。ダーカーをミンチよりヒデエ状態に持っていけるんだ」

「つまり…私達フォトン適性のある者が乗らないと侵食を…ゆっくりと受けてしまうって事ですな？」

「正解だ。んで戦闘時間の減少の話に戻るが…流石にあのサイズになると受ける量も半端ではない。それを打開するためにあの機体には新型の小型高出力の試作型のフォトニック複合リアクターが安全マージン高めに取って3基装備してある。これは本来なら2基か更に高性能なりアクターなら1基なんだか…1基だけだと戦闘用出力まで回すと結構ギリギリでな…」

「…ダーカー因子の危険性が籠棒に高い戦場だと…多分持って6分くらいだな」

「ろっ…っ ☒実質マトモに戦えない様なもんじゃ無いですか ☒」

「まてまて。さっき言ったろ？リアクターが1基だと戦闘出力で6分だ。だがそれが2基なら？倍にはならないが…そうだな、10分位は持つ筈だ」

「…つまりあの実験機は3基のリアクターを載せているから…10分以上は戦えるって事ですな？」

「そうだ。最も更に高出力のリアクターの開発が終われば戦闘時間も伸びるが…今のリアクターだとこれが限界って所だな」

「…って言うのと20分ちよつとしか動かせないってことか？」

「いんや、そのニューマンの言っている事は合っていて合っていない。その時間は戦闘出力だ。武装にエネルギーを供給しない通常モードならそれそこ木っ端微塵にならない限り半永久的に持つ。――1基のモデルでもな」

「それじゃその通常モードで戦えば――」

「そんな質問も来るだろうと思っていたよ。良いか？装甲に関しちや問題は無い。アークスが乗った時点でフォトンで守られているも同然だからな。問題は武装にエネルギーが向かわないようにしているんだ。なんでかって？簡単な事さ、今現在作っている試作のS・マシンガンは弾丸を自己生産するシステムを組み込んでいてな？其奴を動かすの莫大なエネルギーが必要なんだ、それで撃たないんだ」

「他にも試作のレンジャーのフォトンスフィアに似た武装を作ろうとしているんだけど…武装の方が持たなくてな…」

「本来ならここから更に搭乗者のフォトン適性率で性能が変動する様になって案もあるには有るが…性能差が出る兵器をアークスは採用したがらなくなつてね。仕方なく最低ラインに合わせる設計で現在は試作機を製造中だ。――我々としては双発にして安全性を高めたいがね」

そう言い機体を見る副班長。それを聞いた2人も同じ様に機体を見る。一方の俺は実体剣でも待たせれば良いのについて思っていた。

「…さて。お話はこのくらいにして。ユウナさん、何個かの武装は更に改造を重ねたし…いっちょ乗ってく？ついでに問題点も洗ってほしい」

そう言い副班長は機体を親指で指して――俺に聞いてくる。

117 話目

「おい見ろよ相棒！クーナさんだぞ！クーナさん！」

「…いやあ…見ろって言われてもなあ…」

そう言いシヨップエリアの大型モニターにクーナのMVが流れるが…どうしてもあの日見たアイドルクーナが変身したアサシンクーナ…いや、逆かもしれないが、それのお陰でアイドルとして見られない。そもそも任務中の言動からは考えられないアイドル時を見てー内心彼女は二重人格なんじゃないかと疑い始めている。

「…っ…」

そんな事を思っていたらブルって来た。トイレだこれ。

辺りを見渡し周辺にトイレがないかを確認する為にマップを開く。

「ん？どうした相棒？」

「…すまん、ちよつとトイレに」

「…分かった。トイレは…まあ、一緒に着いて行くよ」

「いや、お前は此処でクーナのMV見てなくて良いのか？ーああ、いや、なんでもない。漏れそうだからさっさと行くぞ、男と違って延長ケーブルがこちとらねえんだ」

「ちよ、相棒！何を言ってるんだよ！ー因みに後で買うから何度でも見れるし」

そう言うも小声で「どうせなら出来る限り相棒と一緒に居たいし」というのも聞き取る。

「んで。トイレは何処だ？あっちか？」

そう言いながら。そういやアフィンは俺の事が好きだったんだなあ、と今更思い出す。

「…ほら。さっさとトイレに行くぞ。ー違うそっちじゃない、あつちだ、あつちー！ーあーもう、相棒！付いて来い！」
そう言い俺の手を握られー。

「あ、ああ…」

そう言い俺の手を握ったアフィンはショップエリアの少し離れたトイレに向かった。

どうあがいても常識的に考えて入れないからとアフィンをトイレ前で待機させて俺は奥まった場所にある女性用トイレに入る。未だにならないトイレにビクつきつつ、只の大だ、と自分に言い聞かせ個室に入り鍵を閉める。

前の世界で見知っている普通のー細部を見れば違うかもしれないがー洋式トイレに座る。

戦闘用の服装であるラীগバルバトスでは無く私服ー長めのスカートの下にズボンーを下におろしシマシマのパンツも下ろし、便座に座りトレットペーパーの台の上に手の踵を置き顎に手を当てる。

(…デュケット…俺に他のパンツも買えっていうが…あんな所余り入りたくねえよなあ…未だ慣れてねえし…そもそも高いし。幾らアークスが高給取りって言ったってあんなの買ってたら無くなっちゃうよなあ…カネが)

幸いなことにあの機体を持ってきた事で上から降りたお金は未だある。十二分にあるが…今はジグさんの弾とアークスの共通弾を使っているから良いものを弾丸まで手を出しだら間違はなく逆鞘に

なる。

(…今の弾丸でもどうにかなってるから…今のところは大丈夫か…)

ちよろろろ…と便座の水面の手前部分に尿が流れ水溜りに流れていく。

ペーパーを多めに取って優しく拭き取りズボンとスカートを上げてトイレ出ると入り口付近にいた筈のアフィンが居ない。さてどこに言ったのかと周りを見渡したら…珍しい事にリサさんとアフィンが少し離れた椅子に座って話をしていた。

ミミを清ますと…あの子を守ってやりなさい、だの、あの子を落とすのは難しいですよ、等話し合っているのが分かる。

あの子って…まあ、俺の事…だよなあ…。

なんて事を思っていたらリサさんと特徴的な目と言うカメラアイと言うか…兎に角赤い目がこつちを凝視、すると「でわでわあ！私は邪魔者なので何処かにさりますねえく？」と言い放ちゲートエリアに向かう転送装置に向かって行った。

リサさんの突然の反応に困りつつ、直ぐに俺を見つけこつちに駆け寄ってくるアフィン。

「アフィンがリサさんと話すなんて…俺あ驚いたわ」

「いやいや、リサさんはレンジャーとガンナーの創設者みたいな人だよ？色々教わったりするから割りかし皆んな話すと思うよ？でもー」

まあ確かに銃器に関して言えばリサさんの話とかは分かりやすい、

フルキャスト特有なのかリサさんが時折居る射撃場ではレンジャーの人達がこぞって話を聞きに言ったり講義会みたいなのをやっていたりするのを見るし。

「ー初見の人がちよつと特殊な人って印象を付けるけど」

「ま、まあそうだな、確かにその…少しーいや、だいぶアレな人だけど」

でも各企業からの新製品のトライアルを任されていたりで其処はレンジャーを代表する人だなども。前にこのライフルをーあれ、なんか其処で怖い目にあつたような…？

「でも射撃の腕は頭おかしレベルだぜ？見たか？リサさんのマンターゲットヒット。全て頭と胴体にツータップだぜ？アレで冗談なのか人を撃ちたい、なんて言われたら俺でも怖がるよ。ーあれ？聞いている？」

考え始めようでした時、アフィンからの声で意識がこつちに戻る。

「…あ、まあそりやそうだ、俺だつて怖いし。ー所でアフィン、なんでリサさんと話を？」

「あ☒い、いやあ…まあ、レンジャーとして？少し技術を教わろうかと…」

そう言い視線を目ではなく額の方に感じる。まさか…？

「嘘、か？」

「えっ☒い、いや、ホントだよ、ホントー！」

「…じゃあなんでフルキャストのリサさんがトイレ近くに？必要ないでしょ？…多分」

因みに今はこう言ってるが後で調べたらトイレも出来るらしい。

機械だけど機械じゃないのか。

「……じ、じつは……」

相棒がトイレに行ったから：トイレから離れたところにベンチがあつただろう？ 其処に座って待ってようかと思つて座つてたんだよ。そしたらその：俺より少し年上の先輩アークス達が来て私達と任務に行かないかつて誘われて：んで、先約があるし相棒を待ってるからごめんなさい、つて言つたら…。

「やめときなさいよ、そんなケモノ臭いメスイヌ。私達ニューマンと一緒に行きましょ？」

「そうよ、そうよ！ 君みたいなニューマンはあんなケモノと合わないんだって！ あのケモノも内心思ってるかもよ？ 『私には合わないから』つて」

つて言われて：俺、その：すつごく悔しくて：ぶん殴ろうかと思つたけど、とてもじゃないけど敵わないから：でも本当に悔しくて…。「…いえ。それでも僕は彼女とバディ組んでいるんで。もう少したつたら任務も入るので、誘つてくれたのは感謝しますが今は結構です」

「ダメよダメー！ さつきも言つたけど貴方はニューマンなのよ？ せめてあのケモノ以外の種族にしなさいな。ーいや、種族なんてコトバ、ビーストには過ぎたコトバね」

そう相棒の事を言われ頭にきて、握った手で目の前のアークスを殴ろうかと思つた時に銃声がして先輩達の足元に6発の弾痕ができたんだ。

それに驚いて先輩アークス達が下がつたらすつごい遠くから俺の通信機に『あらあら、面白いことになってますねえ？』つて言う独

特の声が聴こえてー」。

「…んでリサさんが登場したと」

「あ、ああ…その通りだ。お、俺それにビビってさ…その場に尻餅ついちまったぜ」

シヨップエリアの中央にある噴水の見える位置にある椅子に座りアフィンの話を聞く。ブチ切れて殴ろうとした癖に目の前に弾痕出来たら知り待ちするのか…俺なら漏らすかもしれない。今さつきトイレに行つてきたけど。

「…まあ、切れて殴ろうとしたのは置いておいて。そりや目の前に弾痕できりやそうなるわ。しかも船団の中で。オラクルの中じやフォトン系列の武器は基本使えない筈じゃねえのかよ…んで、その後は？」

「先輩達、バベルに所属しているらしくてずっとリサさんが来てからもビーストの事罵つてたよ…余り言いたくない言葉で」

「……」

「…ち、因みにだけど…き、聞く？」

なんでんな事俺に聞かせんだよ、なんて思ったが一瞬アフィンのズボンを見てなんとなく理解する。ああ、またこれか、と。

「…余り女が聞くべき話では無い様な気がするが…内容はどんなのだ？」

「ビーストは家畜だのペットだのまあ普遍的なバベルの奴らと一緒にだな。他には…その…」

「んだよ、言えよ」

「…耳ちよつと良い?」

そう言われたので顔を近付ける。するとアフィンはどつちに話すの考えて耳の方に近づけてその先を言う。

「……………」

「…は?なえ…は?」

「…その、ビーストってフォトン適性で言えばニューマンやヒューマンのいいところ取りをした上位互換なんだよ、ヒューマンやニューマンの適性に足してビーストが追加されるかり以上にフォトンを扱えるから先輩達曰く『オスは滅ぼしてメスだけを…その…な?』」

「…もうヤダこの船、理論的に蛮族じゃん、中世じゃん、ヤダこの船団降りたい」

申し訳無いがそういうのはそういうゲームで頼むわ。

「ち、中世…?…まあ、相棒が船を降りるなら俺も…」

そもそも降りてどこに行くんだよと。言ったことのある星なんてナベリウスにアムデイスキア、リリーパしかねえぞ?

「アフィンには弟がいるんじゃない?…?と言うか降りたらもう1人付いてくるぞ?」

一瞬デュケットの事が気になったが…まあ、彼女にも家族がいるだろうし、まあ、付いてこないわなど。

「マトイさんか?俺は別に良いぞ?それに俺の弟は俺以上に優秀なんだ、きつとどうにかするさ」

「…まあ、とりあえずアフィンが俺のことを酷く言われてキレたのは分かった。…前も言ったがそんな好きか?」

ベンチから立ち上がり噴水の方へ。アフィンも同じくベンチから離れる。

「おう、俺からしたらニューマンには美少女が多いがその全ては相棒以下だからな」

そんなにアフィンからのストレートな物言いにーアフィンの：本人には言えないが女みたいな童顔も相まって少しだけードキツとした。

「…ツ…そうだなあ、アイドルのクーナさんでも？」

これでも俺は男なんだ、その思いを捨てない為に急いでー考えるふりをしつつ後ろを向き、アフィンの好きなアイドルのクーナの話にすり替える。

「…ツ、そ、それはツ…んん」っ！…ち、違う、じゃん？」

「お前…アイドルのクーナさんは揺らぐ材料になるのか…」

そうアフィンに言いながらシヨップエリアの銃器専門店に入っ
て行く。

「……相棒、耳ミと尻尾に感情出ているよ」

…バレてたか。

—————

「…はあ…」

そう小声で呟き目の前のーエコーさんから目を離し、エコーさんの隣にいる人物ーマールーさんにエコーさんを止めてくれと目で合図するが見てないのか、テーブルのデザートの手を出している。

「それでさあ、ゼノつたら今の實力じゃアイツ等に勝てねえって言うて私に修行に行つてくるって言うてどっかに行つちやつたのよ
☒ーまあ、確かにそうだけど…」

そう言いながらコーヒーカップを手にとり口に持つていくエコーさん。

その隣で話を聞いている少女ーマールーさんは野菜合わせを食べている。さらにその隣のメル姉妹はデツケエパフエを2人で突いているし…。

(こんなんなら任務が入つて行けませんって断れーないよなあ…)

なんでこんなことになったのか？それは今から約5分程前から始まる。

久し振りにお茶会をしようとメールがエコーさんから飛んできて、何を着ていくかを10分程度悩んだ後、どうせ任務に行くから戦闘服で良いやといつももの服装を着てラフリに向かったらーもう既に始まつていた。

呼ばれたのは俺と主催者のエコーさん、メル姉妹と見たことのない…その、オラクル船団でもあまり見たことない薄い紫色のシヨートヘアの少女がエコーさんの隣に座っている。

「…どうも」

「…あ、こ、此方こそ…」

そう言い互いに会釈をしてーエコーさんも俺が来た事に気がつく。

「ユウナちゃん！ やつと来たのね！ もう始めてるわよ！」

「えっと…その、隣の方は…？」

「マールーよ、フォースをやってるわ。…宜しく」

「ユウナです。一応レンジャーをやっています」

「ーーさて！ 全員来たことだし？ 今日もやるわよお〜！」

それから5分後がこれで有る。誰一人としてエコーさんの話を聞いていない。

そう思いながら届いたオレンジジュースを飲んでみると、ふとゲツテムハルトさんってどうなったのだろうか？ と言うのが頭によぎる。

一応死に損なつたとは言えーメセタを援助してくれたりした人で有る。気にならないわけがない。

かといって…本人達に聞こうにもなあ…姉の方は恋人っぽい挙動していたし。

そう思いながら2人を見るとー身長の小さい方のメルランディアが口を開いた。

「…ゲツテムハルトさんの事が気になりますか？」

「え☒い、いやあ…その…」

「…ゲツテムハルトの事はご免なさいね。あの人のお陰で貴女にだい

ぶ迷惑が入ったみたいで」

正直迷惑どころではないし、お陰でエルダーに狙われている（ような）ですけどね。…たまったもんじやない。

「ゲツテムハルトさんは現在アークスの留置所にて留置されています」

「…私の為に行動してくれた事は嬉しかったけど…やり過ぎなのよ」

「…最悪は処刑、らしいのですが…」

「ですが？」

「…新人アークスから処刑を止めるよう要請が上がっているらしく、もしかしたら再度アークスになれる、と言う話もあります」

「あのバカ…自分のメセタを節約して私達の他に新人達に独自の教えをしていたらしいわ…ほんと、バカよね…ゲツテムハルト…」

「…姉さん…」

そう言いディアがシーナさんに手を寄せる。少し前までパフェを食っていたとは思えないな。

…この空気を作ったのは俺だけだ。

「…確かに巨躯を復活させたのは余りにもアホな行為よ。それで処刑って言うのも領ける」

「…ちよっと、マールー！」

気付いたらエコーさんも話を聞いていたらしく、配慮のないマールーさんの話をぶった切って止めようとする。

「エコーは少し黙って。貴女だって分かるでしょ？ダークファルスの脅威は。その脅威を測った上で処刑は領けるわ。ーでもゲツテムハルトさんが独自の生存方法を布教し始めてから教えを請いて貰った新人の死者が減ったのも事実。最もこの情報を元に選ぶのは上だし、私達には変えられないわ。ーまあ、私個人としてはファイターとかハンターは前に出てこないで欲しいわね。テクニツクの邪魔になるもの」

そう言い切り野菜をぽりぽりと口に運ぶマールーさん。

メル姉妹のさつきまでの姉妹愛は何処へやら。マールーさんの物言いに姉が妹を抑えようとしている。曰く「同じフォースならもつとこう…ねえ？シーナ姉え？」と言われてあははは…と苦笑いをしつつパフェを口に運ぶ。

因みに後で何であの時笑ってたんだ？と聞いたら「マールーさん、ヤケにファイターやハンターの事目の敵にしていたじゃない？あれを聞いて昔を思い出しちゃって」と言っていた。

さて。話を戻して…まあ、ゲツテムハトさんがワンちゃん戻って来るなら良しとして。

「エコーさん、ゼノさんについてなんですが」

「え？いや。心配はするけど大丈夫よ。なんせ私のゼノだからね！ーーと言うか冷静に考えたらゼノが強くなったら私頼られなくなっちゃうわねえ…一層の事ゼノと同じハンターでもやってみようかしら？」

そう言うとハンターと言う単語にマールーさんが反応し2人で口論を始めたのだが…メルフォンシーナさん曰く「いつもの事だからも

う大丈夫よ、このメセタは…そうね、私が払っておくわ、一応先輩だもの」と言い切りお札を言つて先にラフリを出て行った。

俺が店の出口を潜るまで後ろの方で言い争っていたが…まあ、寿命の長いニューマンなんだし1つや2つ嫌な事を言い合っているんだろう。

そう決めつけ俺は店を出た。

—————

AP 238 / 4月

「…本当にここで目撃証言なんてあつたんですか？」

そう言いコックピットに座るクーナに問いかける。

「はい。此処——浮遊大陸のエリアD g327-45にて目撃情報が上がってます」

そう言いクーナは機体角度を水平に、ランディングアームが接地しているのを確認してリアクターの出力を下げ始めエンジンの出力をカットする。

ドアのロックを解除し、機体から降りて久しぶりの浮遊大陸だなあと思ひながら空気を吸う。

「…エリアD g327-45って結構広いけど…」

そう言いマップをクーナにも見せる。

「…不運ですがこのエリアにはダーカー警報が出ています。貴女の実力を侮る訳ではないですが…気を付けて行きましょう」

「りよーかい、クーナさんも頼みますよ」

そう言い腰にあるライフルにマガジンを装填、セーフティを外しコッキングレバーを引いて初弾を薬室内に入れる。

「…準備は出来ましたか？」

「こっちは出来た。そっちは？」

「私の武器は元々このマイだけです、手に持てば直ぐにですよ。ーほら」

そう言いダガーを展開したら消したりする。

「今回はアフィンさんは居ない任務となります。まあ、お話をしながらハドレットを探しましょう」

そう言いクーナさんは先に進んだ。俺も一人じやマズイので付いていく。

「因みにですが…今の私の状態。ユウナさんにはどう映っていますか？」

「映っているも何も…普通に見えますよ？」

「…実はこれー今マイの能力を使っているんですよ。なのでハタから見たらユウナさんは何も無い空間に喋っている可哀想な子になります」

「☒」

「なんてね…冗談ですよ。さあ、ジョークでほぐれたでしょうし？ハドレットを見つけてみましょう」

そう言い歩き出しーほら、ユウナさんも速くと言われ俺も後を追う。ークーナさんってこんな事言う人だっけ？

そう思いつつー浮遊大陸でのハドレット探しが始まった。

「……本当に目撃情報があったんですが？」

「そう言い龍族のテリトリー内にて聞き込みを始めるクーナ。一応を俺も聞き込みをするも…目撃証言は無い。それっぽい情報と言え
ばー。」

「ここ最近何個かの龍族のテリトリーが龍族のみ消え去っている、と言う話を聞きました。もしかするとハドレットが食べているのかも
しれません」

「やめてくれよ、俺はまだ生きていたいんだぜ、龍に吞まれて終わりつ
て…」

「そう言いてを上に上げてお手上げのポーズをしながら、横に置いて
あるジューズに手を動かす。」

「…そう言えばユウナさん。その左手についているそれは…？タリス
のようですが」

「ああ、これ？事前にセットしているテクニクラー今だとレスタと
アンテイ、それとデバンドとシフタか。それらを非テクニク系クラ
スでも使えるようにしたタリスらしい。ただしテクターやフォース
の奴に比べれば半分位の上にロッドやウオンド、本職のタリス使いは
全部のテクニクを使えるけど…コイツはーほら」

「そう言い太めのカードが入った部分をクーナに見せる。」

「コイツを変えないと他のテクニクを使えないんだ。もつとも今は
さっきの4種類しか無いけど」

「そうなんですか。中々便利そうですね」

「そつ、実際便利よこれ。怪我したらレスタで治療出来るし。ーんなら使ってみます?」

「いえ。私はマイを使っているの。こう見えてフオトン容量も結構カツカツなんですよ」

「そうなんですか?」

「ええ。もつともコレを使えると言う事だけが私の存在する意味なので…使えなかったら今頃どうなっていたか分かりませんが」

「……」

「さて。お話はこのくらいにして。そろそろ行きましようか?」

「りょーかい、まずは何処へ?」

「…龍族の言っていた壊滅したテリトリー…近いのはこことここ、どちらもエリアD g327ーa C45内ですし歩けば数十分程度ですね」

「おーけ。クーナさんの機体で行こう」

「…ユウナさん、ここから先のエリアだと着陸するのに機体が大き過ぎます。よって徒歩です」

「まじかよ……」

「マジです。ユウナさんには悪いですが…まあ、貴女も色々と聞きたいことがあるでしょうっ。」

「…」

「……………」

「…はい。少し前から偽装データを流しました。今なら何を聞いても大丈夫です」

聞きたいことがあるだろう、そう言われて早10分。クーナの口から出た言葉は上の言葉どおりだ。

「…なあ、クーナさん。あんたは一体何者なんだ？アークス、なのかな？」

「…ええ。一応アークス所属になっています。最も元は虚空機関所属ですが。私はその虚空機関の実験体。その17番目です」

「は？ヴォイド？実験体？んだそりや？」

「虚空機関の実験により生まれたイキモノーそれが私です」

「実験☒なんでそんな物を☒ダーカーを殺す為にか☒」

「…それもあってしようが一番はコレー」

「数多ある創世器を扱う為だけに造られた存在ーそれが私達です。…私はどうにか透刃マイを扱うことができましたが…他の兄弟姉妹達は…その…」

「…なんでその…うあ、ヴォイド、だったか？その組織はなんで創世器を使ったがるんだ？」

「創世器の性能はアークスの使う武装に比べて途轍もなく性能が高いです。例えばアークス総司令のレギアスの使うソードの世果。あれ実はソードじゃ無いって知ってますか？」

「い、いや…知らないが」

「あれは本来は刀で、世ノ果の鞘から刀身を抜く時はオラクル船団の危機の時にしか抜けない、と当人が言っておき実際に過去のダークファルス戦においてレギアスが世ノ果から刀身を抜き取り戦っている場面があります。性能も凄まじく、前代のダークファルス、巨躯の眷属、エルダーアームを一撃で叩き割ったデータがあります」

ああ、これがその時の映像です。そう言い俺にウィンドウを見せてくれた。

そこにはマスターな腕の様な形の敵が複数出現している。アークスがライフルやソード、テクニクを使うがあまり効果がない様に見える。しばらくすると白色のフルキャストが現れーマツチポンプかよ？と疑うしかない様な挙動でアームを潰していく。

その動画を見ながらふとあることに気づく。あの刀…長くね？

「…刀って…これくらいの長さだよな？」

そう言い背中から刀を抜き取り、クーナに見せる。

「…おかしいですね…？私が見たデータだと刀身が3メートル以上あったような気がします…コレは精々1メートルも無いように見

えませんが」

「…まあ、長すぎたら重くて持てないからな。いくらフォトンで手にかかる質量は無くせると言っても」

「そうですね。…とにかく、コレで創世器の凄さは分かってくれたと思います。因みにですがアークスには先程のレギアス、マリア、カスラ、クラリスクレイスの4名が創世器を使うことが出来る筈です」

「…マリアさんにカスラさん、レギアスさんにクラリスクレイス…？俺全員と会ってね？」

「…流石に任務をする場合はアークスと同じ武装をする筈ですが…レギアスはアークスの総司令であるのと同時にオラクル船団の総艦長ですよ？そうそう会うことにはないと思いますが」

「…レギアスさんって白色でツノがあって黄色い目のフルキヤストだよな…？それなら一回会ってるぞ、俺」

確かあれはメルランディアと一緒に船団内に湧いたダーカーを倒す任務を受けた際に確か会った様な…？

「…因みにですがその時彼は何を装備していたか覚えてますか？」

「いやあ…あん時は敵を倒すことで精一杯だったから…全然覚えてないわ」

「そうですか。…とりあえず創世器の性能の凄さは分かってくれたと思います。…コレが空虚機関の目的です」

「…所で何でそんな情報を俺に？言っちゃ悪いがそんな情報をタダの

「アークスに伝える意味なんてーまさか俺を☒」

「殺す気か☒そう思い急いで離れライフルを向けー」。

「いえ。…ただ…その。何故か似てる様な気がして」

「…似ている、だって?」

「ええ。もつとも何でそんな気がするか、なんて事は分かりませんけれども」

「気がする、で重要目標を話しちやうのか…向いてないんじゃない? この仕事」

「…辞めたくても辞めれませんよ」

「…そうだったな。ならさっさと終わらせてメシでも食いに行こうや。どうせ今回も現れないだろうし」

「…そうですね」

「そうクーナは言いー先に進む事にする。これ以上話していたら任務が中々進まないからだ。」

「—————」

「…やっぱりいねえし、気配も感じねえ…しやーなし」

「クーナと別れて約数十分。元々今回の任務にやる気が起きなかつた為にテキトーに切り上げてクーナとの合流地点に向かい始める。」

最初に――先輩達と来た時には見れなかった蟹もどきや最近見かけるようになったチヨウチンアンコウもどき、それに鈍器を腕にくっつけた武器腕持ちまで出るように。

一応視線を合わせればどこが弱点かわかるが…ライフルだけじゃきつい。特に不意の遭遇戦は。

本来ならそういう時時ように背中に刀があるんだが…人はやつぱり楽に、そして安全に戦いたい。

地味にキツイ後ろに下がりながらライフルを撃つという前世の兵士も余りやらないやり方で倒しながら合流地点に。

ウインドウでマップを出しながらW・Pをマップ上に作り、それ通りに向かう。

約2キロを切ったか、と思った時。何処からか歌が聞こえ始める。

新たにウインドウを表示しつつ周辺のアークスを表示―クーナ以外無し。

「……………と言うと…これが」

合流地点に近付くにつれその声も大きくなる。それを聞きながらふと、クーナの歌って初めてマトモに聞いたなと考える。大体は隣にアフィンが居たからなあ…。

クーナの声だと確実に分かる程度まで近付くと向こうも此方に気付いた。

「……………あ……」

「…あ、いや、えつとですね、これは…ツ！そのっ！違いますからね！決してアイドル時の歌を口ずさんでなんてー」

そう言い両手を左右に振り違うと言うが、残念な事にM・Vをアフィンと一緒に聞いた声とモロに同じなんだよなあ、と。

「…そんなんで本当にそのクールな見た目守れるの？」

「違いますって！私は、アイドル、のクーナでは無くアークスのーえ？」

「てっ!??避けろっ！」

そう言い突如後ろに現れた鈍器付きを撃つためトリガーを引いてー奴が飛んだ。

「きやあっ！」

重力によって地面に叩きつける質量の増した鈍器がクーナを吹っ飛ばす。

吹っ飛ばされたクーナの近くにより敵目掛けフルオートで撃つが、両手で弱点部分を保護しやがって中々当たらない。

「うっ!??下がれ！聞こえねえのか！」

撃ちながら片手で倒れたクーナを揺さぶるが反応が無い。

一方のダーカーも片手で撃っている為弾がバラける。最も当たった所で意味は無いが。

そのままダーカーは走り出しー俺を鈍器の右払いで吹っ飛ばした。

「きやあ☒」

と女の子らしい悲鳴が俺の口から飛び出た後に数メートルは吹っ飛んでーそのまま地面を転がるも反動を生かしてどうにか立ち上がる。

ダーカーの方を見ると倒れているクーナに鈍器を振り下ろそうとしてー。

「ああっ！くそっ！」

ライフルを腰に装着して背中 knife を抜きとる。右側に刀を下ろしそのまま奴の方に走りー振り下ろされる鈍器の下に、クーナの間に割り込む。

「くそっがああ！おい！起きろっ！寝てんな！おいっ！」

そう言い足でクーナを蹴るがー反応無し。

「くっ！」

タリスのシフタとデバンドを発動、俺の周囲に赤と水色のフォトンによる攻撃と防御の活性フィールドが展開される。

「おらっ！死ねっ！」

鈍器をシフタで強化された力で切り上げ、そこから更に奴の目に刀を突き刺す。

「ーしゃーーあ、クーナさん！聞こえるか☒」

奴ーのちにキュクローダと分かったがーが死んだかどうかは

どうでも良いとして刀をクーナのすぐそばの地面に突き刺してクーナの身体を揺さぶる。

「えっと、確かこう言う時はー」

頭を上げて少し体を冷やすんだっけか。

サ・バータを近くに落とし氷を手持てるように壊しソレをクーナの頭に乗せる。それと同時にレスタをー緑色の光がクーナを包む。

「…んう…んん…ここは？」

「起きたか☒痛むところはないか☒」

「い、いえ…確か…先程のダーカーは…？」

「あ、ああ、倒したよ…いやあ…死ぬかと思ったぜ」

「そうですか…命を救われましたね、感謝します」

「…良いって…まあ…無事ならいいや。もう今回は切り上げよう」

そう言い刀を鞘に戻しクーナに肩を貸して開いた手にライフルを握り帰ろうとした時。

複数の歪みが現れー複数のダーカーが現れた。

「…は？」

「そんな…っ！」

ダーカーの数は尚も増加。片手でキユクロードにライフルを向け

トリガーを引くもー奴ら弱点の腰部分の前に鈍器を置いてガードしやがる。

「クーナさん、機体をココに呼んでくれ。…そこまでどうにかして持たせる」

そう言いライフルのマガジンを抜き取り、新たなマガジンを装填する。

「…いえ。それには及びません、私も一緒に戦いますよ」

「でも今の怪我でー」

「…そんなの、死ぬよりはマシですよ。座して死ぬか、賭けに出るか。ーそんなの決まってるじゃないですか。それに、怪我の度合いで言ったらあいこですよ」

「…それもそうか…はあ、ほんとはもっと楽な任務だと思っただけどなあ…あとクーナさん、こんな場面だから言うけど…俺の事、追跡してない？」

「何を言ってるんです。私の秘密を知ったからには意地でも追い続けますよ」

おお、怖い怖い、と言いながら左手で刀を抜き取り、俺とクーナにシフトとデバンドを掛ける。

ズリズリと迫ってくるダーカーに対し、クーナが飛び掛かろうとした時。

ダーカーのいる部分に更なる歪みが発生する。

「おい、そつ！増援が☒」

「…いえ、あれ…あれはっ！」

そうクーナが言うのと歪みの中から――中々会えない任務の目標であるハドレットが登場、そのままダーカーに突っ込んで倒し始めた。

「おいおいおい！ハドレットだぞアレ！クーナ！」

「…今回は共闘します。…良いですね？」

「おーけー！クーナの判断に従うわ！」

そう言いハドレットが二体目のキュクローダを口に啣え始める。それを合図に残りのキュクローダに攻撃を仕掛けた。

――

目に刀を差したり、開いた手でライフルの銃身をぶっ刺し撃つたりを繰り返してどうにかダーカーを殲滅して。

「ハドレットッ！」

そうクーナが言い戦闘が終わり去ろうとするハドレットをクーナが止める。

「…なんで、なんで今なのよっ！私達が危ない時に！狙ったかの様に！――まるで恩でも売り付けるようなタイピングでえッ！」

そう泣きながら言うところハドレットもクーナの方を見ずにその場に留まる。

「遅いのよ、このバカっ！助けるならもつと早く助けなさいよっ！それにつ！なんで…なんで…ッ！」

「…貴方は…裏切り者なのよ…ハドレット…っ！貴方の姿が見えなければ、アークスに見つからず、誰も居ない所で生きていてくれればっ！私だっ…！」

「…ハドレット！貴方に聞いわ！なんで、私を、私達を――虚空機関を裏切ったの！なんで、なんで貴方が…！」

聞かれたくない話を聞こうとした為か。それとも別の理由でもあるのか。その話を聞いた瞬間歩み始めるハドレット。

「ま、待ちなさい！ハドレット、ハドレットオ！」

クーナの制止も止めずダークファルスのような歪みを作り何処かに消える。

「…なんで…なんで逃げるのよお…私と…私と――」

戦ってよお！

そのクーナの声は浮遊大陸の晴天の空に空虚に響く。

1119 話目

1119 話目

「…ユウナさん。これを」

そう言い帰りの機体内で渡してきた紙切れ。ぐしゃぐしゃになっている。

「…私個人用のメールです。何かあった場合はこちらにメールを」

そう言い切りゲートエリアで紙切れを開き中身を見る。そこにはきれいに畳まれたキレイな紙があり、それを破けないように丁寧に開くと中にはオラクル語と数字が混ざった文字列が書かれていた。これ本当にヴォイドとか言う奴らに気づかれないのか？と聞こうとしたらもう目の前に居なかった。

少し離れた場所でクーナの気配が離れていつているのが分かる。

「…つたく、いくらなんでも任務が終わり次第すぐ帰るって…わからなくも無いけどよお…」

そう言いながら帰ってきたマイルーム。キッチンで料理しているマトイにおかえりなさいと言われああ、ただいまと言いつ返しリビングの作業台に座ってライフループプロトレイを分解する。

ハドレット本人とは戦っていないもののその道中のダーカーに対してはバンバン撃っているため帰ってくる時は基本簡単なメンテをしている。

メンテと言ってもピンを数本外しトリガーユニットがある部分、ストック部分、上部レシーバー権スコープ部分の3部位に分けてオイルを塗ったりバレルの掃除くらいだが。

そこから更に上部レシーバーとハンドガードと一体化しているグレネードランチャーを取り払い、軽くする

その後バレルを長い布で中の汚れを拭いたり、機関部に油を塗布する。

オイルを馴染ませつつまだ任務は続くんだろなあ、とため息が出てくる。

「…まあ、あの任務は続くんだろなあ…だろ？デュケツト」

「…バレてましたか」

そう言い後ろを向くとー！忍び足で俺の後ろに回り込もうとしているデュケツトが。

「ああ。そもそもこちらミミで聞こえてんだよ」

「あはは…流石ビーストですね」

「ーみんなー！ご飯できたよ？ーあれ？デュケツトさん帰ってきていたんですか？」

「ええ。先程ね。…私マトイさんにも声掛けしましたよ？ね？」

「いや、ね？…って…」

そう私言ったの聞こえてましたよね？…って顔をされても…。

「あれ？だつてさっきミミで分かるって」

そう言いながらデュケツトはソファに座りテレビを点ける。

「デュケツトって分かったからコレに集中していたの」

「そう言いマガジンに弾頭の見えない弾丸をマガジンに押し込めていく。」

前にアフィンから「相棒もマガジン店で購入すれば？」って言われたがそもそもコイツは試作のやつの上に弾丸も違うから無理って言ったが…。

「それの他にもう一つ自前で作っている意味がある。それがコレーテレスコープ弾のケース部分の上半身に赤い線が塗られている。」

赤い線の入った弾は曳光弾、弾頭のケツ部分に使い捨ての発光体が入っている弾のことでコレで弾が何処に向かったとか、着弾点を撃ちながら修正出来る優れものである。」

「弾速は全て同じ速さになっていて極論曳光弾さえ当てられるなら無くても当てられる。」

「一部の人は購入品もわざわざ弾丸を全てマガジンから取り出して曳光弾を抜いたりする人も居るのだとか。」

「俺は逆に多め入れている。大体3発に1発程度の割合で。他にも何を思ったのか曳光弾だけのそれはそれは眩しいマガジンも有ったりする。」

「…あははは…ごめん、料理に夢中になって…」

「そんなことを思いながら二人の話を聞いていると最終的には料理で聞こえなかったって言うオチになった。」

「…ビーカーで料理、ねえ…」

「そう言いデュケットが俺の位置からは壁で見えないキッチンを見る。デュケットのビーカーという言葉から科学者みたいな実験を想

像したが… いくらなんでもそれはないだろう。

「あ、後でちゃんと片付けるから！ね？今はとりあえず食べよ？」

まあ、初めての女の人が作った料理なんだ、有り難く食べさせてもらう事にしよう。

—————

「ねえ、ユウナちゃん」

「んん？何だ？」

そう言い食後の任務後は暇な時はやるようにしている尻尾のブラッシングをソファでしている最中。デュケットの援護もあり比較的に早くキッチンの後片付けが終わったらしく俺の隣に座って話しかけてきた。

因みに料理は美味しかったです。…コレで初めてとは…。やはり紛い物では本物には勝てないってことか…。

「…その、私に浮遊大陸のお話聞かせてくれない？」

「…何で急に？」

コップを3つ持って隣に座るマトイ。中にはオレンジジュースが入っていた。

「…いや、ほら。なんか聞いたら記憶が戻るかなって」

「それもありそうですけど、本心は暇でしようがないんでしょ？」

マトイが持ってきたコップの一つをデュケットが手に取りソファの空いた場所に座る。

「そ、それもそうだけど…」

「まあ、アークスシッパってちよーデカイ上に分かりにくいからな…特に下層のエリアとか」

「う、うん。フェリアさんにも一人で遊びに行くのはやめときなさいって言われてから怖くて…」

「…って言ったってな…こう言うこと、話していいの？」

「まあ、正直な話アークスにおいて任務に関する守秘義務はほぼ無い感じですからね。そもそも話せない任務の場合は私から他言無用の言葉が出ますよ」

「そうか。そう言うもんか…って言っても俺が言った所なんてナベリウス、リリーパ、アムドウスキアの三惑星だけだぞ？それこそデユケットに聞いた方が良いんじゃないか？」

「二応私も任務でロノウエとフォルネウスには管制の任務で少しだけ滞在したことがあります…あまり変わりませんよ？ナベリウスと」

「えっと…じゃあ、リリーパについて何か凄かったこと教えて？」

「リリーパだって？…そりゃあのロボットしかないよな？」

「うん。それでも良いよ？」

「そうだなあ…あれはアフィンと遺跡調査の任務だったかー」

それから30分ほど俺とアフィンの脱出劇を簡単に話す。

「んで、どうにかトランマイザー だっけか。そいつを倒して帰還したって事さ」

「うん。…凄い話だねえ。改めて聞くと」

「俺は懲り懲りなんだがなあ…」

「…そう言えばユウナ、最近任務に掛かりっぱなしだけど…一体どんな任務なの？」

「え？…デuketツト、話していいのこれ？」

「うーん…別に重要任務と書かれていますけど極秘とは書かれてないんで」

「ええ…まあ、デuketツトがそう言うなら…」

「そう言い俺は今やっている任務ー造龍の撃破任務の事を簡単に話す。」

「ーって所。いやあ、毎回毎回逃げられてなあ…」

「でも龍族でしょ？アムドウスキアの龍族と同じじゃないの？どうやって逃げていくのかな…？走って逃げているのかな…？」

「いや、あのやろーダーカーやペルソナみたく空間が歪んで消えやがるんだ…お陰で毎度毎度攻撃すら当てられねえ」

「空間を歪ませて…？龍族ってそんなことも出来るんだ…」

「いや、ハドレットだけだと思うぞ？」

「…つて事はアークシップ内にも出てこれるんだねえ。凄いなえ…」

そうマトイに言われ俺も気づく。少し前に来たエルダー巨の軀のようにワープして強襲してくる可能性があるのか？

「…そう言われれば確かに…これ割と上に上げなきや行けない情報じゃね？」

「いえ。これも確証が得られないので…まあ、私が上に上げておきます」

「頼むわ、デuketト…頼つてばかりだな」

「いいんですよ、管制官は頼られてナンボって言いますから」

ナンボという言葉がデuketトの口から出てきたことに驚きつつマトイの話の続きを聞く。

「…空間を歪ませて何処にでも行けるなら…なんでわざわざアークスが居る惑星に現れるんだろう？…誰もいない惑星に逃げれば良いのにね」

「…確かになあ…それはクーナも言っていたけど」

そう言い——泣きながらワープして消える直前に言っていた言葉を思い出す。——誰もいない場所に逃げてくれば。クーナの小さな声で脳裏に思い出させられる。

「…あつ！ユウナ！もしかしてそのハドレットつて龍族にはやり残した事があるんじゃないかな！」

「や、やり残した事…？」

「うん！…まあ確証はないけどね…」

「…一応コレも…」

「上げてあります。不確定でも、もしかしたらあるので」

—————

マトイとデュケットにリリーパとアムドウスキアの土産話が終わり、食事も終わった頃。デュケットがテレビを付けてクーナのアイドル番組を見ながら「なんでこの子私より無いのにアイドルに受かったんだろう？」と本人が聞いたらキレるかも知れない言葉を小声で言うのを聞いた時。メールボックスに新たなメールが入っている事に気づく。

中身はクーナからで一瞬辺りを見渡すも…気配は感じない。流石に偶然か、と片付けて中身を見る。内容は私と会ったあの場所で明日の14:00時頃、待っています。との事だった。

そして翌日の午後2時。最初に会ったショップエリアの更に上層部の公園。

全長5000kmの長さを誇る船の端まで見える公園のベンチに座る。

周囲にも子供連れの人が居て各々遊んでいる。

道中で6個程買ってきたホットドックに手を付け、女の小さな口で一個めを食べ終えた頃。

何人かの子供が俺の揺れる尻尾やミミを見つけ触ろうと近寄ってくる。

別に引っ張ったりしなれば良いかと無視していたらなんとと言う事でしょう。

ベンチの上に立ちミミと耳をペチペチ触ったり、伊達に長い髪の毛を使って隠れようとしたりー。

ミミやしっぱの付け根辺りを触るならブチ切れるがそんな事はなく…ふさふさの部分だけを的確に触っていく。

そろそろ注意でもすつかないかな、と思った時。自前のミミがクーナの足音を捉える、のと同時にミミが立つ。その足音も俺の近くに、と言うより隣に座りー。

「…一体どうなっているんです？」

ベンチを占領する子供達のお陰で座れないから俺の目の前に立つ。

「食うか？」

そう言い左においてあるホツドックの入った袋から一個を取り出しクーナに渡す。

「ええ、まあ」

2個めを袋から取り出し、ついでに飲み物を渡す。

周囲にいる子供に「俺は今からこのお姉ちゃんとお話するんだ、みんなは別の場所で遊びな」と言い子供達を散開させる。

わー！と言いなながら散つていきー残るは俺とクーナだけ。

「……よく俺が分かったな。結構広いだろ、この公園」

ベンチを手で払って隣に座るクーナ。

「周囲にビーストはユウナさんを除いて居ませんでしたからね。そういう意味では見つけるのはラクですよ。目印もありますからね」

「そう言いクーナの視線がミミと尻尾に移る。

「そうか。…ビーストはもつと居るらしいんだがなあ…」

「バベルが最近事件を起こしましたからね。アークスや一部の仕事を
している方を除いて閉じ籠って居るのでしょう」

「ほら、これを見てくださいと言い俺にウィンドウを見せてくる。中
身は『B・A・V・E・L・S、ビースト経営のホテルを襲撃、
アークスも一部参加か』と言う見出しだった。

「ヤだねえ…ほんと」

「ええ。私達にはダーカーとダークファルスって言う必ず滅ぼさな
きゃならない存在が居るのに…」

「まあ、人類なんてそんなモンよ。過去を見れば分かるさ」

「じんるい…？なんです？じんるいつて？」

「…ああ、いや、何でもない。それで？俺を呼んだ理由って？」

「はい。ハドレットが次に出るであろう場所です」

クーナはウィンドウを俺の見やすい位置に移動させる。

「…強襲をかける可能性あり、だって?!」

昨日デュケットやマトイと話していた事がすぐ起きる事になった。

—————

排莢口から薬莢が飛び出て地面に落ちる。フォトンが込められた弾頭はダーカーの身体を撃ち抜き地面に伏す。

伏すのを確認する前に次から次へと迫ってるダーカーを撃ち抜く。このプロトレイヤー30ミリのテレスコープ弾を使っている癖に反動が殆ど無い。オラクル驚異のメカニズムなのか、フォトンによる恩恵なのか分からないが…。

そう思いながら空になったマガジンを抜き取ってリーナノトランサーを弄って虎の子のボックスマガジンを取り出してライフルのマガジンの入り口に入れる。

マガジンキャッチボタンがボックスマガジンの凹みを噛んで外れなくなる。一気に重量感が増すがそれと同時に安心感も増す。

反動が無いライフルのトリガーを引きつばなしにしてダーカーに對し弾丸を当てていく。

グレネードランチャーのトリガーを引きリー敵の手前にロックオンマーカーが6個付きトリガーを話すとリーグレネードランチャーからエネルギー弾が発射、少し進むと6個に分かれて敵に突っ込んでいく。

エネルギー弾が着弾した瞬間、小規模の爆発が起きて6匹のダーカー種が消し飛び空気に飛散する。

ランチャーのロックを外しカラになったエネルギーシエルを抜き取る。

「リーつえなあ！このホーミングシエルは！」

そう眩きホーミングシエル、もといP・Aホーミングエミッションをもう1発装填する。

『ユーウナさん、そちらはどうですか?』

「ーああ!レンジャー1人じゃ死んじまうせ、なんて思ってたけどーおお☒」

クーナと話をしている最中。ミミが何かの振動音を聞き取る。

『どうしました?』

「なにか…でっかい物が歩く音が…なんだコレ。クーナさん、なんかでっかいダーカーが出てきたとかそう云うデータ来てます?」

『いえ…今の所は』

「分かった、少し偵察してくる」

『…わかりました、無理はしないでくださいね』

「わかってる、引くときは弁えるや」

そう言い歩道に出て音のする方に向かう。

暫くダーカーと交戦しつつ先に進んで行くトー。

「何だあのクモ☒目の前の道路を…この方向は…どこだ☒」

『クモ…?まさか!ダーク・ラグネですか☒速やかに隠れてください!そいつは危険です!』

「やっべっ！気づかれたか☒一回切るわ！」

『ちよつと！ユウナさん☒どこかに隠れてくださいね！私も向かいー』

クーナが話している途中にウィンドウを消してすぐさま建物の陰に隠れる。

片目だけ影から出してゆつくりと…立体高速道路順に進んでいるところが見える。

ライフルのマグキャッチを押ししてマガジンをリリース、残り弾数を確認しつつ過ぎ去るのを待つ。

数秒か数分か。俺のミミが多脚の足音が消え去るのを確認してー恐る恐る影から片目を出す。ー何も居ない。

「……っ…クーナ、聞こえるか？」

『ーはい。聞こえます。私に通信を入れられるって事はー』

「ああ。どうにかやり過ごせた…あ。あと今クーナ識別範囲に入ったぞ。…そこから…2キロ前後の地点に居るぞ、俺は」

『分かりました。そこを動かないでくださいね』

それから数分してクーナと合流。今回の任務について再度確認する。

今回の任務はアークシップ内に発生した中規模ターカー襲撃の際に造龍の出る確率がとても高いことが分かった。ユウナ、クーナの

両名はこの任務を重要任務とし、確実に成功させよ。尚今回の任務に
関してはアークスの任務より上位である事を忘れるな。

と言うオーダーを見直す。

「…で、エネミーのダーク・ラグネはどちらに向かいましたか？」

「そうだな…あの立体高速道路を歩いていたから…」

「…そういうマップと睨めっこして…やべえ、俺まだオラクル言語完
璧じゃなかったんだ。」

「…ここは…会場ですね、私も何度か来たことがあります」

「か、会場か…取り敢えず行ってみる？ハドレットはダークカーを食う
んでしょ？」

「そうですね。エネミーと同じ道順で行けば確実に着くでしょうし」

「…そういう俺とクーナは高速道路入り口に向かった。」

「道中複数のダークカーと交戦するも…1人でないため楽に終わる。」

「…そしてー。」

「…無理だなこりゃ…」

目の前にある破壊された高速道路入り口。ライフルのスコープの
倍率をいじりよく見ると…断面が赤黒く溶けている。

「…なんだいありゃ…赤黒く溶けているな…」

「見てください。……多分あれはブリアーダかカルターゴの毒弾かレーザーですね、あの様子だと」

見てくださいと言うのでライフルを渡し見せるとそう分析するクーナ。

「…にしてもどうするよ？結構先でしょ？あれ」

「そうですね。迂回するしかありません。…こっちから行きましよう」

そう言い指差した先は地下。

「何箇所か迂回すれば会場近くに出るはずですよ」

「了解。土地勘ないからクーナ、頼むわ」

「はい。しっかりついてきてくださいね」

――

120 話目

「…ひでえな…この辺りは」

「ええ。このエリア一帯はダーカー因子の濃度が高いです。フォトンを扱える私達なら動けますが…あれを見てください」

そうクリーナが示す場所には…サークルレーザーシステムが赤黒い触手に侵食されている。

「ダーカーに侵食されてダーカー因子を撒き散らしていますね。速やかに再起動しないと」

「再起動って一般人でも出来るだろ？」

「定期的にダーカー因子に汚染されて反転したダーカー波が出てくるのにはですか？私達アークスが再起動時に触れる事によってダーカー因子を浄化するんです。…試しにやってみます？」

そうクリーナに言われ…赤いレーザーを放つS・L・Sの上に乗り侵食されたシステムを再起動する為、マグを経由してS・L・Sの制御ユニットにクラッキング。汚染されている部分の特定とその部位をマグに表示してもらう。

4から5箇所ほど汚染されたパーツがあるのでその部位を触ると…フォトンが移りダーカー因子を浄化。システムが勝手に再起動の手順を踏む。

最後にウィンドウが表示され…デカデカと再起動の文字が。

そう言い周辺を見渡すカスラさん。

「…クーナはカスラさんと知り合いなのか？」

「警戒は必要ありませんよ。私は六芒均衡と言う役職上色々な件で何度か顔を合わせることがありましたから」

「…それより。貴女達もあの造龍を仕留める為にここに来たのでしよう？」

「市街地中心部の大型会場の中心部にて造龍と思われる個体ナンバーの反応が確認されています」

「…ユウナさん。やはり…」

「…クーナの歌かそれ関係に誘われている…？」

「ええ…不思議ですよ」

「…あそこは今。かのアイドルさんの次のコンサート場所として選定されているだけですしね」

「ダーカーが群れている場所ではなく、意味も無くそんな場所に出現。…正直、意図は全く読めませんね」

「…ユウナさん、やっぱりコレって…？」

「…歌を聴くみたいだな。まるでファンだな」

「そうかも知れません。以前会った時は歌を。それ以外の時は…」

そう言いアフィンと3人で任務を受けていた時を思い出す。あの時は高確率、と言うか確実に逃げられていたがクーナが歌を歌ってダーカーに襲われた時――あの時はすぐに逃げずにいた。「会場に歌を流しておけば…留めておく事が出来るかも」

「う、歌ですか?…なんともまあ詩的な話でもありますが…あのエルダーとサシで生き残ったアークスであるユウナさんからの提案ですし…」

「…そうですね、どうか都合は付けましょう。やってみる価値はありそうですし」

「お願いします、六芒均衡カスラ」

「いえいえ。クーナさんには恩を売っておいた方が何かと楽ですからね。――お二人は会場の方へ。私も準備が出来次第歌を流し始めますので」

「…クーナ、俺達も会場に急ごう。――カスラさん、ありがとうございます」

「いえいえ。先ほども言ったように恩を売る為ですから。…それとユウナさん。あまり虚空機関と関わらない方がいいかもしれませんよ」

「え?」

「いえ。こちらの独り言です。――急いでくださいね。私も運営の方に説明して許可を貰ってから遠隔操作で歌を流さなくてはなりませんので。お二人が遅れたら意味がありませんから」

そう言いカスラさんは会場とは別方向に向かって走っていった。

「ヴオイドとはあまり関わらない方がいい」そうは言っても今回ののは任務としてきているんだ、やるしかないさ。

そうカスラさんが言った事を今はスルーして先に少し進んで俺を待っているクーナの後に続く。

—————

「おおいつーですねっ！」

「ほんとっ！一般人にやらせる仕事じゃねえな！」

そう言い刀でブリアーダを水平に斬り真つ二つにした後、片手でライフルを構えてブリアーダの産んだ卵を撃ち抜く。

フルオートで撃ちながら修正射をしつつダーカーやクラダーを撃ち抜いていく。

クーナが狙いにくいと思われるダガツチャやダーガツシユを手に持つライフルで優先的に墜としていく。

「ーユウナさん！プレティガーダです！ワープに気を付けて！」

そうクーナがキククローダの目にダガーを突き刺しながら注意してきた。

防衛システムの隔壁が一部解除され隔壁が下に下がっていくとーそれを待っていたかのようにプレティガーダが五体出て来た。

摺り足で進んで来てー一定の距離が此方を視認するような動作を行うと消える。

そして五体が消えるとー何故だか知らないが敵が現れる場所がわかる。

ライフルを腰に戻し鞘に納刀している刀を左手で持ち、柄を握りー「ーそこお！」と言い後ろに振り向き刀を抜いて横に斬りはらう。

プレディガーダが真つ二つに分かれーその後ろからもう一体が片手を下から上に上げて切り上げてくる。

右側に切り払った刀を今度は斜め左上に切り上げてプレティガーダの向かって右肩を腕ごと切り落とす。

「ギイギツ」

と言う声を発したがー切り上げた後にそのまま水平に斬りつけー同じく真つ二つに。

そのまま両手に持ち奥にいるディガーダに同じ様に切り上げる。

すると真つ二つになったディガーダの上半身がー別れたまま俺に腕を突っ込んできた。

「ー」

思いつきり腹に食らうものの戦闘服によりある程度中和される。

そのまま吹っ飛ばされ地面に叩きつけられるがーさほど痛くない。

『……お二人さん、聞こえますか？』

「……」

「……こちらユウナ。どうぞ」

『……聞こえているようですね。先ほどの内容ですが、お二人の内容通り造龍は会場内に留まっています』

『いつまで効果があるかは分かりませんが……』

「……大丈夫です。歌が聞こえている限り彼は……あいつは動かない筈です」

『それともう一つ。当事者のお二人には伝えておきたいことがあります』

『ハドレットを皮切りに、他の造龍が暴走した原因について』

「は？そんな話聞いてねえぞ☒」

『はい。ユウナさんに与えられた任務は造龍ハドレットの捕獲又は撃破任務。追加情報は虚空機関からの妨害で中々おりませんからね。ユウナさんのほか数十人にも同様のオーダーが出ていますが……中々強い龍です。流石に虚空機関が造るだけはありません。兎も角、お二人に原因を……』

「……いえ。説明は不要です。六芒均衡カスラ」

「…私が何の策もなく上に従っていただけだとしても？」

「…」

「あの手この手でー上層部に入り浸りデータをー頭の中に無理やり記憶しました。ええ、憎いですとも。ですがー」

「…こんな私のためにあの子がーハドレットが身代わりになって今に至るって？…冗談じゃない！ーユウナさん、援護を頼みます」

『…そうですか。お二人のー特にクーナさんの奮闘に期待しますよ』

「…カスラさん、総技部と繋がりとかあったりします？」

『は？…え、ええ。何度か伺ってあそこの班長とは無理難題を付き合ってもらう仲ではありませんが…何故に？』

「念の為にね。ある事を要請して欲しいんだ」

「……………」

「ーくそっ！鍵がかかっています！」

「下がって！グレネードを使う！ーほら！早く！」

そう言い二人して壁に隠れ、壁から銃のサイトを覗きランチャーのトリガーを引く。

無反動で真っ直ぐグレネードが飛んでいき先端部分が扉に着弾、

ヒューズがグレネード中心部にある圧縮技術により圧縮された炸薬を起爆、爆発する。

扉が吹っ飛び辺り一面に煙が舞い上がる。その中を1人先にクーナが走って行く。

「おまつー！1人で先行はマズイって！俺が！」

そう言い突っ込むクーナの後を追う。

「…ハドレット…」

その声が聞こえ走りながら会場に入るとー座っているハドレットに対しクーナが語りかけていた。

よく聞くとグルルルツ…と小さく唸っている。

「苦しそうな声を…ツー…ハドレットツ！私に教えて！一体あの研究施設で何が行われたのかを！」

クーナが語りかけるのを聞き俺は銃身を上に向けて、戦闘は今はないと言うポーズをハドレットに見せる。

「…始末者として向いていないこの私に…一体何の任務がおりる予定だったのかを！」

「…ううん。違うよね…そんな時はアンタが陰ながらアシストしてくれる筈だからこんな怒るわけがない…」

「…ハドレット…あたしは、あたしは何をされそうだったの☒」

そこまで言うとハドレットは咆哮を上げる。咄嗟にライフルを構

えハドレットに向けるーがクーナの手がそれを遮る。

「おいクーナ！ 奴さんガチだぞ☒」

そう言い無駄に両方についているコツキングレバーを引いてチェンバーの中の弾を飛ばして構え直す。

「…ほんと。あんたは…全部自分の内で抱え込んで、身勝手に…バカなんだから。ーわかっているわよ。ユウナさん、援護をお願いね。ここで彼ーいえ。ハドレットを倒します」

「…お話しして和解なら良かったんだが…ダメか。迎撃ーいや、当方に迎撃の用意アリってね」

『ーユウナさんのマグをお借りして機体内に接続、そちらに向かわせていますが…発進場所が場所の為時間がかかります。お二人とも、ご無事をとクーナさんに言っておいて下さい』

つい先程カスラと話した内容を思い出す。今回限りだがあのロボットの戦闘許可をカスラさん経由で強引に割り込ませて提出させて貰った。

正直確実に無理だろうと思いつたらーあの変な帽子を被っている姿から想像出来ないほど出来る人らしく、全部を言い切る前に把握からの総技部や各オペレーターに連絡。許可を付けてしまった。

「ーなんですか？ トーホーニゲイゲキノヨーイアリって？」

「インターセプトだ。さあ、逃げられないように立ち回るぞ」

そう言い刀を抜居てそのままハドレットの前脚に突っ込む。

前脚に刀を突っ込ませーその後すぐに刀を引いて横に振りかぶる。

「ーッ！かてえ!?？」

そのまま後ろに飛んで距離を取る。

「それはそうでしょう。なんせ私の弟ですからーきゃ！」

そういい空中を蹴ってハドレットの前腕に回転しながら斬りつけーそのまま手で握られ会場の壁に投げられる。

「クーナ☒ー☒」

それに気を取られ前を見るとー目の前にとんがった赤黒い槍が突っ込んでくる。

手に持つ刀を両手で持ち刀でガードを行う。刀がソードとしてアークスに登録されているためかフォトンで出来た八角の半透明なシールドが刀の前に現れ槍を消し去る。

離れつつクーナの方に近付くとー目を閉じていた。

「おいっ！起きろって！俺一人じゃ流石に無理だから！おいっ☒」

そう言いハドレットの方を見つつ足で揺さぶるものの一々全く反応がない。

仕方なく刀を鞘に入れてクーナを背負い、ライフルでハドレットに射撃を加えつつ、会場の入り口の横にクーナを座らせる。

座らせた時に脈はあったからまだ生きてはいるはず。こっちの言動に少なからず「うーん…」と言っているのが聞こえる。

ハドレットもハドレットで俺がクーナを肩に背負って居る間は攻撃をしてこない。それを見てるとクーナを盾にしながら攻撃すればなんとかなるんじゃないかと思ったが…ハドレットの逆鱗に触れそうなので止めておく。

会場中心部で佇むハドレットに対し、再度刀を抜いて、もう片方にライフルを握る。

それを見たハドレットが咆哮を上げ此方に赤黒い結晶を投げて来る。それを外周を走って躲しながらひたすらライフルを撃ちまくりクーナから一番離れたところでライフルをナノトランサーに格納、刀を持って胴体の青い部分を斬りつけた。

刀身から赤黒い血が流れるがクーナ傷は浅いようだ。

その場で顔めがけてジャンプして刀で回転攻撃を行いながら地面に着地、そのまま後ろに下がる。

んがそこをハドレットに掴まれクーナ口を大きく開けた。

「ーっ！いいいいッッ」

片手だけ拘束から取り出してクーナ足に付けているハンドガンをどうにか抜き出し、開いた口目掛けスライドがストップするまで撃ちまくる。

ぎゃうっッと言う声が響き拘束が解けクーナ地面に落とされる俺。

「ーっ！イッテェ…」

そう言いながら刀を鞘に収めライフルを取り出しクーナ距離を取りながらハドレットに向かって30ミリを撃ちまくる。

アークスが採用している12ミリクラスよりフォトン含量が多い弾は的確にハドレットを削っていきー終いには弾が当たっている場所を守ろうと手でガードし始めた。

そしてー。

「ーーーッ！」

「…は☒ダーカー☒なんでえ☒」

声に表せない方向をあげると周囲にダーカーが出現。咆哮により起きたクーナが俺に近づいてきた。

「ユウナさん、状況は最悪です。どうします？」

「…くそっ…どうするって…まだ任務は終わっちゃいねえぞ」

「…正直この数は…私でも想定外です。…ざっと40から50位ですかね」

「…あの機体はいつ来るんだ…ッ」

『ーお二人共。聞こえますか☒』

「その声は…カスラさんか？」

『はい。ユウナさん。あなたの機体がそちらの空域に入りました。後10秒ちよつとでー』

そう言い切る前にある地点にいたダーカーが一瞬で消え去る。

数秒後にはフォトン特有の音を立てながら――複眼の機体がゆつくりと降り立つ。

降り立つと片膝を立てつつ左右の腕は周囲のダーカーに向けて発砲を再度開始。

それと同時に頭部部分が上に上がり切る。それと同時にメールが。機体が到着したことにより少し安心してそのメールを見ると――宛先はあの機体からだった。

t r y s t a n d b y

〈E n

アークス言語で書かれていたが内容はなんとなく分かる。

「クーナ！あの機体に乗らなむぞ！急げっ！」

「ええ☒だってあれは単座だって情報がー」

「いいから！ほら！」

そう言いハドレットに吹っ飛ばされて万全では無いクーナの手を引っ張りあの機体に近づく。

近づくとも機体は片方のライフルを地面に置いて俺のクーナを優しく握り頭部横に降ろす。

そのままコックピットに座りーその上からクーナも座る。すると前もってカスラさんに渡していたマグがメインモニターにある言葉を出す。

〈Y o

u h a v e c o n t r o l

その問いを受け「アイハブ！」と声を上げる。

「ど、どうしたんですか☒ユウナさん☒」

「なあに、通過儀礼つてヤツよ。さて、クーナさん。これがあればハドレットとサシで行ける。説得はどうする?」

「:辞めです。ユウナさん、私の弟を:コテンパンにして下さい」

「ああ。やってみるさ」

そう言い片足をつけた状態から立ち上がりライフルをハドレットに向ける。

「さあ、再度任務開始だ:」

そう言い脚部にあるスラスターにホバーする程度の推力を発生させハドレットにソリッドライフルを向け突撃した。120話目

121 話目

「…逃げられたようだね?」

あの会場での戦闘後。すぐさま俺とクーナは偉い人に呼び出されて――簡単な報告をしている。

マグを提出して終わりのはずなんだが…何故か上がそれを許してくれないとクーナが言っていたのを思い出す。

「はい。ですが少なからずのダメージは与えたかと」

「…分かった。引き続きこの任務を2人で当たってほしい。場合によつては他のアークスを引き抜いても構わない」

「はっ。それでは失礼します」

そう言い短く敬礼するクーナ。それに続いて見様見真似でそれを真似する俺。

そう言いクーナの敬礼が終わると身体を出口に向け歩き出す。俺もそれを見て――少し挙動不審になりつつ早く出たいが為に早足で出て行く。

ガチャリと扉が閉まり数秒立つと一言。

「彼女が、ねえ…」

そう言いテーブルの上で手を組みその上に顎を乗せるニューマン。後ろからは人工太陽の作る光が射し込みニューマンの表情は誰にも分からなかった。――握りを除いて。

――

「――ああ！ダメだねこれは！完全に各ユニットにガタが来ている！」

『ダメですか…？』

「…そうだね…俗に言う新造した方が早いって感じだなこれは」

そう言い彼は――班長は己の部下達に指示を飛ばしハンガーにかけられている外部装甲を外された状態の機体を見る。

「――お嬢さん2人の乗っていたコックピットブロックは兎も角、他の損傷が酷すぎる。なんせD因子の極太レーザーを喰らった様だからな。2人のフォトンで中身はどうにかって所だが外部は駄目だ。…幸いな事に装甲系はこっちでどうにかなるからいいものの…中の駆動系――特に足と腕の可動部が不味いな」

『…直りますか？』

「…そうだなあ…――から新造と変わらないが出来なくはない。どうせだ。こっちで好き勝手やらせてもらうぜ。予算は此方でどうにか引き出す」

『お願いします』

そう言い通信相手のユウナは通信を切る。

「…つたく。あの嬢ちゃんもあのろくぼーの奴も人使いが荒すぎるっていうんですよ。班長もそう思いますよね☒」

「煩いぞ。だがあの嬢ちゃんがこいつを持ってきたお陰で俺たちや日向を大手を振って歩けるんだ。ハルもそう思うだろ？」

「ですかねえ…まあ、コレが来る前の此処での仕事と云ったら量産する気の無い軍用車の設計、実験、試作くらいしか有りませんでしたか

らね。子供には「ぱぱは何の仕事をしているの？」って聞かれた日にゃ…」

そう言いぶつぶつと独り言を喋る副班長であるハルを横目に班長は先ほどの言葉を頭で思い出す。

(好き勝手やって良い…技術屋の俺には余りにも悪魔的提案だな)

そう言い班長は隣でいまだに喋り続けるハルを置いていき、解析が完了した機体の3Dモデルを見に設計室に向かう。班長の頭の中には既に複数のプランが出来上がっていた。問題は予算を上からどうやって取るかである。

「ーそれで終いには嫁さんに逃げられるかーあれ？班長？班長どこに☒はんちよおう☒」

それから約2分。やっと班長のいなくなった事に気付いたハルであったが部下達からの救援要請があり機体の整備の指示出しに入った。

「……………」

「…ん？」

総技部と電話が終わり街中をフラフラしているとふと視線に古びたジャンク屋が目に入る。

「…………開いてんのか……………」

そう眩き店に入る。中にはいろんなパーツや基盤。謎の部品まで様々であった。

「…………うわあ…pcパーツみたいだ…」

そう言いさらに奥に進むと店主らしき人がカウンターで新聞を読

んで座っている。

俺に気付き「……………いらっしやい」と一言言うと再度新聞を読み始める。

そう言い店主の前にある棚を見ていると——っただけメガネが置いてあった。

なんでメガネが？と思ひながらそれを手に取る。

懐かしいな、前は眼鏡をかけていたっけ。とレンズをふつと息を吹きかけ埃を飛ばしメガネをかける。

幸いな事に度数が入っていない。なんだ、伊達眼鏡か。そう思ひながら周囲を見渡す。

「…ん？……んんっ」

本棚にある本の——あの英語を難解にした文字あるオラクル言語で書かれた——タイトルが読める。

「……………」

身に付けた眼鏡を外して店主の方に向かう。

「これっ—これいくら」

「…6万メセタ」

「ろっ…いや、高めの眼鏡と考えれば……………」

そう言いに取り取りながらうーんと暫く悩み。

「ありがとうございます」

そう言う店主を横に眼鏡を付ける。

「…おお…」

読める。今まで全く読めなかったオラクルの言葉が読めるぞ。

本棚には光歴やフォトナー等なんだか俺には分からないと言う古本類が並んでいる。

読めることを確認してウキウキしながらジャンク屋から出て行った。

—————

「……プラント船の警備？」

そう言い俺は貯まっている洗濯物をマイルームのベランダに干すために物干し竿の家具を備え付きの大型デバイスを弄り探す。

「ええ。アフィンさんとユウナさん、その他のアークスでプラント船の定期警備に当たって欲しいとのオーダーです。ーあとユウナさん。竿はそこじゃなくてあっちに入ってます」

そうデケットに言われもう片方のーホログラムが緑色のデバイスに触り起動する。

「…何から警備するの？」

有ったと自分のナノトランサーに入れてそのままベランダに。

ナノトランサーのホログラムを弄り指定の場所に置く。

「なんでもハベルが犯行予告を行いまして。一応目標船の大まかな絞り込みは出来たのですが時間的に完全に絞り込めない状況でして。私たちバークスも駆り出される予定なのですが…それでも足りないと言う事でアークスの方からも駆り出される予定らしいです」

「うわ…めんどくさそう。却下とか出来ない?」

「無理やりマトイさんをここに同居させるのに結構手間が掛かったんですよ?時には私を昇進させると思っ受けて下さいよ」

「…:はあ、頼むから危険の無さそうな船に派遣してくれよ。ほんと頼むから」

「まあ、あれの後ですからね。そこくらいはこっちでなんとかしますよ」

「はあ…面倒だなあ…アークスって」

「…まあ、そう言わずに。どうせハベルの奴らは襲って来ませんよ」

「どーだか。…所でマトイは?」

「ええ。彼女ならエコーさんと何処かに出かけましたよ」

「…まあ。エコーさんなら一緒にいても大丈夫だろ」

「ええ。ああ見えてエコーさん。子供好きですからね。ゼノさんのように子守は適任でしょうし」

「エコーさんがそんな歳くつたみたいな風に言うなよ」

と言うかそもそもゼノさん20は確実に越しているだろうに。

そうデユケットの話を聞きながら洗濯物を竿に――ハンガーに掛けて棒に掛ける。

「え？だってエコーさん確か3――まあ、その。ニューマンですから」

「…まあエルフみたいなものだよな」

「える…？まあ、そうなんじゃないですか？…所でユウナさん？」

「ん？」

「その眼鏡は一体…？イメチェンって言う奴ですか？」

「いや…まあ…そう」

そう言いながら洗濯物を干し切り――よしと呟く。

「…ふあ……んで。その任務いつからよ」

「2日後の13：00時からです」

「……」

「そんな嫌な顔をしなくても直ぐに終わりますよ。大丈夫です。私も行きますから」

「デユケットが☒戦えるのか☒」

「私も一応ボックス、B・r・k・sですよ？ランチャーで支援くらいは出来ますって！」

「そう言い、という事で作業台借りますね。と言い部屋に入って作業台に座るデュケット。しばらくすると大型のローキヤストが使うようなランチャーが音を立てて現れてかちやかちやと弄り始める。」

それを見ながら俺は「ロケランは肩に乗せて撃つものだろ…」と言いながら残った洗濯物を竿に干す。今日の予報だと雨は降らないはずだ。このまま干しっぱなしでも良いだろう。

それから数分してすべてが干し終わり――俺も家の中に入った。

――

「確かにさあ！ああ入ったけどよお！――デュケット！ロケラン！早く！」

「分かってますって！アフィンさん！援護を！」

「やってるって！相棒！継続射撃☒」

「作戦もクソもあるか！他のアークスに合わせて撃って撃って撃ちまくれ！」

「そう言い壁に隠れながら弾の切れたマガジンをナノトランサーに入れて新たなマガジンを差し込む。」

敵は…ダーカーだ。

遡ること今から――そうだ、2時間くらい前だ。俺、アフィン、デュケットの3人は護衛予定のプラント船に到着。そこで各々の死守ポイントを言い渡されたものの今回の隊長枠の人に「何のことはない、どうせバベルの奴らは来まい」と宣言されてしまい、各々死守ポイントには居るものの本当に居るだけだった。

戦況が動いたのはそれから50分後。全域のチャンネルで一部のアークスから連絡が途絶えたとの報告が隊長梓の人に入る。

隊長が6名程のアークスを抜き取りそのまま仮部隊を組んでそれらの捜索に向かう事に。

それから5分後には通信が入りー「ダーカーにやられている」

その通信の後隊長から帰還命令が下り死体をどうにか持つてきて任務をまだ続けるかどうかを判断するのに10分。

プラント船の乗組員その他を脱出させる為に艦橋に向かい状況説明するのに20分。

その間にも乗組員42名がダーカーにやられてしまう。因みにこの時俺も護衛する為に前に出ていたがー後ろを見たら真つ二つになったヒューマンとその切れ目から内臓ー小腸、大腸、半分に分れた胃とかを見たら大声上げて乱射してしまつたよ。

その時にアフィンに言われた「…死んだ人には申し訳ないけど…諦めるしかないんだ」

そう言い真つ二つに分かれた上半身の見開かれた目をー手で閉じるアフィン。

それからすぐに退艦命令が出てー。

ソードやダガー、ワイヤードランス等近接職が乗組員が乗り込む時間を稼ぎ、ある程度乗つたら近接職が下がる。

それと同時にライフルやランチャー、ウオンドやロッド、タリス持ちの遠距離が下がる近接職を援護しつつ更に下がる。それを繰り返して少しづつ撤退。これを繰り返すことで新たに死者を出さずにいる。

そして今。最後の乗組員を乗せた輸送機が離艦、ワープに入る。

へよし。最後の乗組員の離脱を視認した。残存アークスは速やかに輸送機に撤退、現宙域から離脱する

そう言われてそろそろと後ろに下がっていく俺たちアークス。守っていたエリアが中央だった為必然的に一番最後尾に就くことになった俺。

もう少しで輸送機に着く、そう思っていた矢先に今俺が居る場所が揺らぎ――真下に落ちる浮遊感が。

(…あ、俺死んだわ)

上の方で2人が叫ぶ声が聞こえたが――何か頭にあたり意識を失った。

「……………うう……………どこ何処だ？」

通路の崩壊に巻き込まれた迄は記憶がある。上を向くとマグがクルクルと俺の上を回っている。マグのさらに奥を見ると――結構な長さの穴が空いていた。

痛む身体をどうにか動かして――手元に何もない事に気がつく。直ぐに周りを見渡して持っていたライフルを探すも――周りには無い。

幸い足に装備していたレッグホルスターにナイフとハンドガンがまだ付いていたのでそれを引き抜く。

ハンドガンを引き抜きマガジンキャッチを押しして一度マガジンを

抜いた後、スライドを引いて弾を抜く。

長い事マガジンを入れっぱなしだったから中のバネが弱っていたりしないかと心配になり、スライドストップがかかった所に初弾を入れようとしてリーリサさんに言われた事を思い出す。

『ー拾ったマガジンや長年使っていない銃器の最初の1発は動作不良ー装填時のジャムや排莖時のジャムは基本的に銃本体のメンテをしていないから発生しますが、絶対に銃が悪いとも言いませんからねえ？ダーカーを前にしてストープパイプやダブルフィード等々弾詰まりを起こしたら大変ですからねえ？レンジャーの皆さんはちやーんと日頃から整備メンテナンスを日頃から行いましょうねえ？』

「…やつときゃ良かったな…」

1人取り残されたことで震える手で排莖した10ミリ用の弾丸をナノトランサーに放り込む。

「…この10ミリハンドガン、新人が撃ちやすく、ダーカーに効きやすいつて言うから採用されているらしいけど…ライフルの弾丸と比べるのは酷って言う奴か」

そこまで言つて俺はふと気付く。そもそも一般レンジャーの初期ライフルの口径がおかしいんじゃないかと。

今回はどうせ来ないからと初期ライフルー確かA・C・A・Rーmk・5をデュケットから借りて来たんだっけか。…それもどっかに行っちゃったが。十中八九、落ちて来る間に手から離れんだろう。

「…後で謝らんなあ…」

アークスから渡されるライフルは兎も角、大体のレンジャーは口径化に流れるらしい。曰く「小口径が撃ちやすいのは分かるが10ミリ以下じゃ弾丸のフォトン含量が少な過ぎてエネミーを倒すのに時間が掛かる」とか「フォトン弾を撃つライフルの方が（適正のあるなしにせよ）エネミーに対しては有効だ」という事で初期ライフルは売り払われるかロックを掛けて倉庫に放り込まれるかの二択だった。

一応アークスでは大口徑のライフルは反動がどうこうで進めたくないらしいが…今の技術だとほぼほぼ無反動に出来るのを未だに上は知らないのだろうか？

そう思いつつストップの掛かった開いたスライドに2発めの弾を放り込みスライドストップを下に下げる。

マガジンを挿入しようとして、ふとこのままコックファイヤだか忘れたがそんなずっと撃ててしまう現象もあつたなと思ひ返す。

これはオートマチックとは言えトリガーを引かなきゃ次は撃てないハンドガンだ、それは無いだろうと思いつつ――安全性を取り一度抜く。

やっと準備が終わりそこら辺の瓦礫に――勿論距離を取って――撃ってみる。

パンツ、と乾いた音と共にスライドが動き空薬莖をエキストラクターが噛み後ろに引つ張る。エキストラクターの反対側にあるエジクターが噛んだ反対側の端に当たり、エジクションポートから排出。マガジンが刺さってない為スライドストップかスライドに噛み合わず止まらない。それと同時に非常に軽い反動が腕に掛かってきた。

「…」

よし、撃てる。そう確信しスライドをオープン状態にしてハンドガンにマガジンを挿入しスライドストップを下ろす。

ガシヤ、と言う金属音が響きマガジン内の弾をチェンバー内に送り、撃つ準備が終わる。

辺りを調べる。幸いな事に眼鏡をつけているお陰でオラクル言語はどうにかなる。

メガネが無かったら死んでたなこれ。と思いながら付近に艦内案内板はないかと探す。

取り敢えず脱出する為に救助艇、あのカタパルト辺りまで向かわなくちやならない。

付近を探すもそれらしきものは無し。多分だがまつすぐ上に進めば着くはず。今はそれだけを考えよう。

そう思っていると俺が落ちた穴から何かが落ちて来る音をミミが拾う。物陰に隠れセーフティの確認、トリガーに指を掛けサイトを覗く。

「ーアアアあああ!!ーいであ!!」

上から落ちていた物。それはー。

「…あ、アフィン☒なんで☒」

金髪ニューマンの相棒ことアフィンだった。

「いつてええ…あ、相棒を…一人にしておけ…くうう…」

「おまつ、確かに嬉しいけど…大丈夫か？」

「…なに、こんな痛み大丈夫だから。ー後伝言。ユウナさん、絶対に

帰ってきてくださいね、だつてさ」

「そういうアフィンを見て内心……とても安心した、とは言えなかった。」

「……1人よりよっぽど楽さ」

「そうだな、相棒。んじゃどーするよ?」

「上だ、上。ダーカーに制圧されつつある船に居たくはないんでね」

「それもそうだな。と言い俺とアフィンは前に進み始めた。」

—————

「……アレは……武器庫……?」

「そう言いハンドガンの残マガジンが少なくなってきたと思つていた時。武器庫と言う壊れた案内板を発見。アフィンに前を任せつつその通りに武器庫を発見してその中に入る。そこで見知った形のライフルを見つける。」

「……Mk. 4つて奴だな……俺も初めて見るよ」

「この体になった時に握っていたライフルだけっけか。チャージングハンドルを引いて初弾を吐き出す。幸いな事にボツクスマガジンが複数置いてあった。」

「ハンドガンをいつでも手に取れる位置に置き弾を入れていく。」

「相棒! 見ろよこれ!」

そうアフィンが言い Emergency と表示される扉を開け切る。

そこにはランチャーの形をしたガトリングガンが合った。

「…携帯式のガトリングガンだ…こんな旧式武器、俺初めて見たよ」

「旧式…？アフィン、これ持てるか？」

「俺こう見えて力はあるんだぜ？見てろ？…ふんっ！ふんっ！ふんっ！！」

そう言いアフィンがガトリングに近付きそれを持つとうするが…上がらない。

「…ふうんんっ！！ふんっ！…はあ…んっあ…だめだ…動かねえ」

そう言いその場に座り込むアフィン。

俺は固定されているガトリングガンの周囲を見て、それを手で触ったり動かそうと揺らしたりした。

特に変わりはない。となると…

「…これか？」

そう言い Emergency と表示されるウィンドウに触る。文字が変わり レベル3カードをスキャンせよ。と言う文字に変わる。

「レベル3カード？…アークスカードじゃダメか？」

「いや、普通に考えてダメだろ。…これあれか？ドアとかロックされているパターン？」

「そんなゲームみたいだな…仕方ない。アフィン、この場は武器だけ持って先に進もう」

「分かった。リーカードがあったら？」

「そんなときや戻ってくるさ。さあ。早く行くぞ」

そう言い俺はMk. 4ライフルを持って部屋から出ようとした。扉をくぐるとライフルだけが置いていかれる。

そしてウインドウが表示されー。

「…アフィン。ライフルは置いていこう。…いざとなったらアフィン。頼む」

どうやら持ち出すにもカードが必要なようだった。

122話目 帰艦

「…L3カードなんて何処にあるんだよ…そっちはあつたか？」

『…そう言うなって。相棒は何処らへんを探している？』

「ああ…同じエリアの…研究室か？ここ。…なんでプラント船に研究室なんか？」

『一応各種食料の種の改良の名目で作られているらしい。やるかやらないかは各プラント船の船長の判断だが』

「…こう、プラント船つてでつかい農場が複数階あるって思っていたけど…全部野菜なんだな」

『ああ。一応小規模ならあるけど、それはどっちかっていうと種として残す為の保護区とか動物園とかそういうのかな？それに生きている生き物を殺してまで肉を食べたいか、と言うと…』

「合成肉を食べたらなあ…正直なところあそこまで肉と一緒に感触、味だったとは…もつとも、今は肉はいらねえな…」

『…そう言いナノトランサーに突っ込んであつたライトで照らしながらカードらしき物を探す。』

『肉の話をしてきたからなのか余計に触りたくない遺体や断裂部、着ている服や机の引き出し等々探すも…中々見つからない。有つてもレベル2カードだった。』

『…そもそも思ってたんだが…戦死した乗組員と違ってそんな高レベル？のカード持っていたのか？』

「…持つてなかったら…：そうだな、アフィンのライフルにグレネード付いてなかったっけ？」

『グレネードシエルの事か？付いているけど』

「それで扉吹っ飛ばすしか無いな。できるか？」

『…周りの被害を考えたらなあ…危ないでしょ？』

「最終手段か…あ、こつちにパソコンあったわ。なんかそれっぽい検査用のシステムないか調べてみる？」

『調べてみてくれ。ーいやべつ、ダーカードだ。一度切る』

「大丈夫か？そつちに行くか？」

そう言いマップシステムを起動、ウィンドウに俺の現在位置とアフィンの位置が現れる。

『そんな10mmオートで来られても困るからな。そつちはカードを探してくれ』

「…いや、確かにそうだけどよお…」

切れた通信に呟く。左手にライト、右手にー女性でも握り易いようにとシングルカラムのマガジンを収めるグリップを握りパソコンの前に立つ。

左手のライトはパソコンの上に置き、なんら変わりの無いオラクル製のオラクル文字の印刷された英キーボードを叩く為に手を置く。ーがしかし。

「…やべえ…俺英語出来ねえじゃん」

そう。オラクル言語のベースは多分英語。所々日本語に近いニュアンスは有るが、それでも基本は英語である。そして手元には日本語を英語にするスマートフォンや端末は無い。なんせここの使用言語は英語をベースとしたオラクル言語一択で有る。

「…アフィンと合流しよう」

そう言いパソコンは付けっ放しにしてライトを持ってアフィンの現在位置に向かう。

—————

「なあアフィン」

「ん？何だ」

パソコンを弄り使えるシステムがないか調べるアフィンに暇なもので話しかける。

「…あん時あのまま逃げれば良かったのに…何で追って来たんだ？」

「そりやお前…好きな奴置いて逃げる男が居るかよ」

そう言いモニターを見ながら何当然の事を、とでも言うように顔を向けず話すアフィン。

…やはり他人から好き、と面を向けて言われるのは心にキツイ。俺はまだ男だろうと。

そう思い…口籠もりながら言い返す。

「せ、盛大に尻餅ついてたけどな」

「そりやあんな高さから落ちれば誰だって尻餅くらいつく。戦闘服のお陰で逆に尻餅で済むと思えば軽いもんだろ」

「…ったく。ほんと何でアフィンは俺の事が好きなんだか。前にも言ったが俺はけもービーリストだぞ？バベルに嫌われている」

そう言いネットローではなくポスニユースで出てくるビーリストに対する事件を思い出す。軽いのは強姦や誘拐、酷いのは殺害や闇市場での違法取引。オラクルに住む人にはIDが発行されているらしいが、それを踏まえた上で取引されているって事はそれらを管理する所に入れる奴がいるって事ってデuketツトが言っていたのを思い出す。

そして貴女は珍しい純粋な灰色の毛を持つ人なんですから…余計に心配なんです。とも言われた。

今回もアークスの実質の負けで終わる。ロー最もプラント船に来たのはバベルではなくダーカーだった訳だが。

そしてバベルの奴がもつとヤバい理由は…ビーリストを好きになった人にまで危害が加わる事。

「それがどうしたって言うんだ？好きな人に好きと言っちゃいけないのか？」

「いや、そうとは言っていないが…」

そんな俺の思いを知らずか好きを好きとさえず、なんて事を言い出す始末。

「んじや言わせて貰うけど…ユウナ、好きです。ロー彼女になって下さい」

そう言い今度はロー顔を此方に向けてロー告白してくる。

「…誰も見てないからアレだけど恥ずかしいからやめろ。俺まで恥ずかしくなる。ローくそつ、尻尾が☒」

「ははっ。やっぱりそうですよねえ…。まあ、そこを含めて俺は好き

だけどなあ。――良し、合ったぞL3カードの場所！」

「マジで！でかした！」

そう言いアフィンの肩に手をかけモニターを見る。

「ただまあ…ダーカー反応もあるけど」

「え？」

――

ヴォルガーダ戦

大きな研究用の多目的スペース。まるでゲームならボスでも居そうなエリアに二人揃って向かっている。

「…ぜってえボス部屋だよこれ」

「…でもなあ…アレにはD因子反応 中って表示されていたし」

「俺からしたら俺よりデカイ奴は全部ボスだ。――所でアフィン。ライフルのマガジンは後何個くらい？」

「俺は常時使っているからまだまだ大量に有るぞ。相棒は？」

「残り20個だから後120発。――アフィン、ハンドガン持ってなかったか？」

「有るけど…両手で使うのか？」

「アキンボって奴だ。どうせあまり使わないんだ、在庫処分と行こうぜ」

「弾代は後で返してくれよ」

そう言いアフィンはナノトランサーからこれまたレンジャーやガンナーの支給品である10mmオートと同じくマガジン20個を渡してくる。俺と違い受領したらナノトランサーに放り込んでいたお陰なのか汚れ等の無い新品だった。

「相棒はなんでナノトランサーに入れてなかったんだ？」

「…そうだな…もし何かに掴まれた時、足とか胴体とかにハンドガンやナイフが有れば応戦できるじゃん？」

「何処情報だよそれ」

「映画やゲームでよく聞き手の反対の胸部分にナイフをしまっていたり足にハンドガンを付けている軍人沢山居るじゃん」

「ゲームに映画がソースって…どうよ？」

「ああ。それにー」

「それに？」

「ーかつこよくない？レッグホルスター」

そう言い受け取ったハンドガンを利き手に持ち、いつもの動作ープレスチェックやマガジンの確認、薬室に俺のハンドガンと同じく装填して1発多めに入れたり色々行う。

一通り両方のチェックが終わるとーアフィンは先に向かい扉のスイッチの手前に立つ。

「カバーはする？」

「念の為。ダーカーが居るのは確定だからな」

「…って言うのと開けるタイミングは俺か。練習するぞ？スリー、ツー、ワン、で開けるからな？」

「そう言いアフィンがドアのタッチパネルに拾ったアークスカードを当ててー首をかしげる。」

「ゼロは無しか？」

「…無しだ。ワンで行こう」

「そう言いアフィンの反対側に立ちアフィンの指示を待つ。」

「カードを仕舞いピツと音がした。見るとこの船のカードを当てている。」

「…よし。カウントダウン、いくぞ？。ースリー、ツー…ワン」

「ビーと言うと音が響き扉が開く。俺が少し顔を出しー開いた多目的スペースを確認してーどこにもいない事に気がつく。」

「…おかしいな。D因子の反応が無いぞ」

「そう言い中に入る俺とアフィン。周りにはコンテナが沢山置いてある。中にはハッチが開いている物も。」

「カードの居場所はここなんだろ？」

「ああ。さっきまではD因子汚染の可能性大としてアークスカードでしか開かないはなの…此処のカードで開いたからな」

「…敵の反応…もねえし…」

「でもカードの反応は此処からだぞ」

「こう言うのって大体中央まで行くと何かあるはずだ」

「そうだな。ゲームなら出現位置は中央だもんな」

そう言い合い2人して構えながら中央に進む。

「…来ねえな」

「…確かに」

「なに？此処もしかしてバイオに良くあるセーフテイル」

ム、まで言おうとしたらダーカーが出現する前兆の赤黒いワープホールが出来上がり…中から5メートルぐらいの人型のダーカーが出て来た。

「んだあいつ☒」

「相棒！散開！左右に別れる！」

そうアフィンの声に言われる通りダーカーから見て左側に回り込む。

アフィンは右側に逃げて…ライフフルを撃ちながら引き撃ちをし始めた。グレネードシェルやフルオート（ワンポイント）徹甲弾（ピアッシングシェル）を撃つ。

その猛攻にキレたのか大型ダーカーはアフィンの方を向き…横綱の張り手の様に両手を押し出ししながら向かって行った。

その間も俺は…装弾数がリボルバーと同じ6発しか入らないハンドガンを撃ちまくり、少しでもダーカーを振り向かせようとする

がー！全く振り向かない。

何か振り向かせる方法ー！具体的には爆発物ー！を探すために撃ちながら部屋を見渡す。

が、辺りにそんな危険物は置いていない。当然だろう、なんせ此処は研究室の多目的ルーム。そんな物があっちゃいけない。

他に手元にあるものといえばーG・グレネードとフラッシュグレネード（スタングレネード）が各2つ。何方も小型のダーカーには効果があるが…あの大型のダーカーには効果は無いだらう。サイズ的に。

「ー！くそっ！アフィン！俺もそっちに行く！こっからじゃ当てても意味が無い！」

スライドストップが掛かり撃針が顔を見せる。ハンドガンを2つとも左右に振りカラになったマガジンを飛ばす。飛んで行った空のマガジンは空中で消え、ナノトランサーへと転送される。

左脇にハンドガンを抱えそこにマガジンを入れる。同じ様にもう1つのハンドガンにも入れ、両手に持ちスライドストップを下に下げる。

スライドが前に動き再び撃てるように。

「よせっ！来るな！」

「そんなこと言ったってよ！どーしろって言うんだ！」

「何か使えそうな物探せ！早く！」

そう言い更に後ろに距離を取りながらライフルを撃つアフィン。

そう言われてー！探せる物と言ったらコンテナしかない、と決めて溜まっているコンテナの中身を探す。

「…これはー違う。ーこつちも違う。…ゲームならボス用に武器を置いておけよー」

そう言い手で開けられるコンテナは粗方開き終わりー成果は何もなかった。

となるとー。

「…つて言つたつて…横に書いてある文字…あれ総技部だよな…」

コンテナの側面には総技部の文字が入っていた。扉のすぐ横には指紋認証する為の装置が付いている。

もしかしてと思い手のひらを当ててー不許可の文字が出てくる。

ダメかと思い別の物を探そうと踵を返した時ーマグが認証装置に近づいた。

ん?と思い見ているとーマグがシステムに侵入し始めたではないか。驚いているとあれよあれよと気が付けばロック解除の文字。

ライトで照らしながら中を覗くとー底には複数のマガジンと少し前に見たガトリングガンが鎮座していた。

「…コンバットガトリング…ガン?」

勝てる、そう確信しそれを持ち上げる。明らかにそれだけで30kgありそうな物ではあるがそこはオラクル驚異の科学力。曰く俺たちの着ているこの戦闘服自体にパワーアシスト機能があるらしくー。

「…よしっ!」

大型のボックスマガジンを入れてランチャーのグリップの様に横についている部分を左手で握り、トリガー付きのグリップを右手で握

る。

その状態で走ってローコンテナから飛び出す。

「アフィン！こっちだ！」

そう言いレーザーサイトを付けて大型ダーカーに向けて構える。赤いドットがダーカーの背後につく。

トリガーを押して直ぐにバレルからエネルギー弾が発射。アークスが普段使う弾丸より小口径エネルギーの為、アークスのライフルには単発だと叶わないが、それはレートでどうにでもなる。

連続する発砲音とダーカーに着弾する音。バレルから伸びる青色のエネルギー弾がダーカーに向かって突っ込んでいく。

「何だこの…っーガトリングう☒」

「最高にハイってヤツだあああ！」

ダーカーに向けて飛ぶエネルギー弾。弾が地味に痛いのか顔を向け当たっている部位を手で守りながらこっちに向かってくるダーカー。

「おい！アフィン！けつを撃て！早く！」

そう言い撃ちながら後ろに下がる俺。アフィンに怒鳴り攻撃を待つもー全く飛んでこない。

「…相棒の胸が…すっげえ…」

ミミを澄ますとこんな事を言ってライフルを握る手を下ろしていた。

「…アフィン！おい！変態エルフ！変態ニューマン！何言ってるんだ！

さっさと奴の背後を撃てえ！」

その言葉に気を取り戻したアフィンが背後からグレネードシエルを放つ。まっすぐ飛びそれは奴の足に着弾した。

アフィンの方に奴が向かない様にと奴の腕や足、取り敢えず狙えれる場所を動かしながら狙う。そこで前から見てふと思う。あいつの顔…ダーカーのコアみたいなの赤いのあるじゃん、と。

そこに向けてドットを向けて…弾の嵐が奴を襲う。弱点がバレたのが分かったのか今度は両手でそれを覆いながら前進して来た。

すると奴の背後にいるアフィンが…走り出し地面をスライディングしながら奴の股を潜り抜け何発か股間に当てて俺の横に来た。

「…来たな、変態エルフ」

「んだよ変態エルフって…まあ兎も角。奴はどうするよ？」

「あいつの顔にダーカーみたいなコアがあった。アフィンは狙ったか？」

「いいや。ご覧の通り狙って撃つとガードしちまう。ピアッシングシエルなら貫通こそするが…有効打にはならないな」

「…俺が囷になる。その間に奴の弱点を突いてくれ」

「はあ…相棒が囷になるなら俺がつ！」

「俺のおっ…胸に見ほれて撃つの止めたらシャレになんねえからな。ほら！早く行け！」

そう言いガトリングから左手を離しアフィンを押す。

「早く！引きながら撃つのも難しいんだよ！」

「ー分かった」

そう言いアフィンは奴のコアを狙える位置に向かいーピアツシ
ングシエルを放つ。

下部のグレネードランチャーから放たれる貫通弾は手で守られて
いない部分を通りー奴のコアに当たる。

ライフルの通常弾に比べてフォトン粒子の量が多いためかー直
ぐに浄化。そのまま倒れる。

「…やった…？」

「…待て！…こういうのはまた動くかもしれない。もつと撃つておこ
う」

「何処情報だよそれ」

「…映画だ」

そう言い俺はトリガーを引きーその後直ぐに奴の死体が飛散す
るまで撃ちまくった。

—————

「げほっ、げほっ…ごめんな…アフィン…」

「あ、ああ…大丈夫…大丈夫だ…」

そう言い俺は相棒に肩を貸し――機だけ動かせる状態の期待に向かう。

現在位置は下部格納庫。あの人形ダーカーを倒しL3カードを入手、そのまま脱出迄は良かったんだが…上の格納庫に通じる通路が全部壊れて嫌がる。他の脱出ルートを探そうにも増えていくダーカー。俺と相棒は上部格納庫に行く事を諦め下部格納庫――戦闘機がある格納庫に向かう事にした。

格納庫前までは比較的すんなり向かい――いざカードを使い開けてみたら…中に今までの比では無いくらいのD反応が出現。

出てきたのはダーク・ラグネ。複数のアークスがチームを組んで戦う筈の相手だった。

流石の俺も驚くのと同時に怖くなって――震え始めた時に相棒に言われた言葉で気を戻す。

「…大丈夫だ、俺たちならやれる。…だろ？」

そう言い相棒は弾の切れたガトリングを仕舞いロッドを手に持ちフォイエやバータなどを使い攻撃していくが――あまり効果が無い。

そこで相棒は――六芒や一部のアークスが使用するグランツ―光系のテクニックを乱射し始めた。特に――過去のとあるアークスが好んで使ったと本に書かれていたイル・グランツの連射。

光の――フォトン其の物と言っていいミサイルがラグネに着弾、爆発を起こしながら体力を奪っていき――最後には飛散して行った。

隣ですげえ、とその様子を見ていたらあ、はあ、はあ、と息を絶え絶えにする声。背後を見ると同時にその場に倒れこむユウナ。それと同時に持っていたロッドの先端部分が壊れた。

どうにか身体を支え――出てきた言葉が咳をしながらの謝罪だった。

ロッドが異常なフォトン励起により爆発して吹っ飛んだユウナに駆け寄り――なにも持っていない手に気が付いたら握られていた弾の切れたハンドガンに俺のナノトランサーから取ったマガジンを入

れる。

「げほっ、だ、だめだあ…アフィン…今の俺じゃ…握る事すら…」

そう言ってきたので一度ハンドガンからマガジンを抜き取り、スライドを引いて中の弾を引き抜く。それを再度マガジンに込める。スライドを元に戻しマニュアルセーフティを掛けねマガジンを入れて相棒のホルスターに戻す。

「…よし。大丈夫だ。何が何でも俺が…ぜってえに生き残らせてやるから」

そう俺の口から出たコトバ。

「…ふふっ…たのむぜえ…相棒」

そのコトバに少し安心したのか少し笑顔になるユウナ。

「おうよ、任されて」

そう言いダーカー反応の無くなった格納庫でゆっくりと相棒と二人三脚で機体…確かアークスがモルガンと同時に作られていたウンディーナという機体だったか。…に乗り込む。ユウナを直ぐそばに座らせて機体に登る。

「確かマニュアルだと…キャノピー横の…イジェクション…合った、これか」

小さな扉を開き装甲が施されたキャノピーを開く。二分割のキャノピーが割れた。

そのままコックピットシートに座り…内装はモルガンと一緒にらしい。

「…よし。動くか…？」

補助動力には灯が入っている。と言うことはリアクターに灯が点っているって事と同意義か。誰かが乗ろうとしていたのか、その夕

イミングで俺たちが来て脱出出来たのか、それは分からない。

警報システム、火災警報システム、機体防衛システムのチェック、それと同時に再度APUが立ち上がっているのを確認。各種データが中央の大型MFDに投影されていき一定値になると完了と表示され脇にズレる。

IDの提示を示されー俺は自前のアークスIDを打ち込んだ。パイロットデータ認証、とだけ表示数秒後、それは消える。

「フォデイナシステムは…アクティブ、第1エンジンは…これか？」
MFDを弄り他の第2、第3エンジンを始動する。高い周波数が俺の耳をつん裂く。

コックピットシートから降りて、2つに分かれて開く後部座席のキャノピーを同じ手順で開く。

「F.Oの席は…確かこれを下げれば…」

そう言い俺は斜めになっている席を戻しーフライトオフィサーの乗る席を確保する。

「よし…相棒！乗れるか！」

「…手を貸してくれえ…ひ、1人で立てそうに…」

そう言い下で座っている相棒に肩を貸すために再度コックピットシートから降りてー相棒に手を差し出す。

「ほら。こんなところ、さっさと抜け出そうぜ」

「ああ」

相棒を後部座席に寄せ終えると俺は前の席に着く。

「…よし。聞こえるか？」

『ああ…これ何か弄るのか？』

「いや。弄るのはこっちでやる。相棒はそのままだ」

『良かった…今の状態じゃ手を動かすのもキツイからな…』

「…モノメイト飲んでおけよ」

分かってら、という声を聞きつつ此方も弄る。

エンジンの出力が既定値の65%で安定。スロットルレバーの位置がアイドル位置にある事を確認する。

第1エンジンに続き第2、第3エンジンも65%で安定する。ラダーペダルを踏み込みながら少しだけスロットルを押し込むと…出力が70%になる。

エンジンが安定してから数秒後、中央のパネルに自己診断プログラム起動の文字が。

それを目で追って確認するとキャノピーを閉めて…キャノピーに機体外の景色が表示される。

すると自己診断プログラムが走り…突然各種警告音がキャノピー内に響く。

『おああ☒何だこれ☒…いや…テスト…？』

「そうらしい。…そっちのMFDには何も出ていないか？」

『ああ…射撃管制装置の…あ、ア、Activeか？』

「武器関係のテストか？そっちはテキストにやっておいてくれ。音声認識だから手は使わない筈だ。こっちは飛行制御装置のテストに入

る」

『んなテキトーにつて…まあ、良いや。ー火器管制装置のテスト続行…30mmL.V.Mk.0のテスト…スピニアップの確認。えつと次は…ミサイルのテスト…オーケー。…こんな技術の塊でも武装はミサイルか』

「ん？どうした相棒？」

『いや。何でもない』

そう言いユウナは後ろで色々と声に出しながら声に出しながら読み上げていく。

「…宙域角度と高度装置と座標の初期化完了…高度と角度と座標のデータは…オラクル標準データを入れて…よしっ」

『…どうにか…腕の震えは止まりそうだ』

「…アテンションプリーズ。当機は離陸準備が整いました。本気はこれよりカタパルトに接続。離艦を開始します」

『…は？』

「相棒のナチュラルなは？が怖い」

『…ねえ、これ本当に帰れるの？』

「大丈夫だ、シミュレーションで何度か使ったことがあるし一応訓練は受けた」

『…この搭乗ライセンスは？』

そう通信機越しに痛い所を突いてきたユウナ。

大丈夫だ、安心しろよ。なんては言えない。何せ初の実機…しかも正式には量産されていない機体での起動だからな。

「…よし、離艦するぞ」

そう言い機体随所に付いているスラスタ―推力を上げ下から離れる。ギアを上げメインの3つのスラスタ―の出力上げる。それに対しノズルは絞む。第2ノズルが90度下を向き他のスラスタ―も起動、少し浮かびランディングアームを格納し上昇、1と3番だけ推力を上げて機体を少しづつカタパルトに向かわせる。

「…よし…システムクリア、各システムノーマル、武器関連は…相棒！」

『…ノーマルだ』

そう言いカタパルト前に飛ぶが…扉が開かない。

マグが調べると…オーダーカーがこの船の制御システムを乗っ取っている可能性があると言われる。

それと同時に速やかに脱出せよ、とも。

『…ミサイルか何か使うしか無いな』

「…オーケー、何使う？」

『ミサイルしかねえだろこれ』

そう言い主翼上下についているランチャーにぶら下がるミサイル

ポッドの発射口から複数のミサイルが発射、扉に向かって行く。

酸素があるためか煙を描きながら扉に命中。爆発が起こる。

爆炎と煙が消えると…綺麗に消えていた。

『…思っただけこれ格納庫の酸素が外に吸い出されるんじや…』

「それは大丈夫だ。この船自体にシールドが張られているから酸素は逃げないし、この船自体に供給装置があるから関係ないぞ」

『…んじやあの扉は何のために…？』

「機体が出すブラストから格納庫を守るブラストディフレクターだな。アレがないと機体のエンジンから出る火が格納庫に入っちゃうからな」

『アレが…もつと先進的な…未来的な物かと思っただよ』

「…まあ、過去には半透明の…いま船を覆っているシールドみたいな機構を試したらしいが…こっちの方が動いている事が一目で分かるって事で。それに耐えられなかったらもつと厚さを増やせば良いだけだし」

『…まあそのブラストディフレクターだっけか。…吹っ飛んで行ったけど』

「…格納庫に誰も居ないから問題なし。さあ行くぞ相棒」

『…よし…おーけー』

そう聞くや否やスロットルをMaximumスラスターのノズルが絞り炎が出てくるとノズルが緩み一気に加速する。

『うう…おお…』

「…っーよし！発艦した！」

そう言いプラント船の重力圏内から離脱すると機体に内蔵されている重力制御装置が起動。Gから解放される。

『…つぶはあ…はあ、はあ…こんなGが掛かるのか…』

「…コンパスオープン、オラクル船団領域…A. W. Pは…こっちか」

M. F. Dをタッチしてフォダイナシテムの最終チェックに入る。離陸前にチェックしていたが念のためにもう一度。

問題なし。

表示される文字に俺は安心しーフォダイナを起動する。

「…アテンションー」

『聞きあきたぞ』

「はえーなおい。…今からオラクル船団の近くにワープするから注意しろよ？」

『おーけーおーけー。人生初の宇宙がすぐに終わるのか…』

「…なあに、アークスなら船外任務もある時はあるからそんな時に嫌って言うほど見れるぜ」

『…そうだな』

「……」

発艦してプラント船の周囲を旋回していた時。宇宙やコックピットの内装を見ていた時。ふと視界の端に砲塔らしき物がこちらを向くのを見た。

「……ん？アフィン、なんか砲塔こっちに……？」

『H. W. Rに反応☒あの船はもう無人の筈じゃ……☒』

「は？……ブレイク！ブレイク！」

そう言いアフィンが機体を右90度に向け加速。その後首を後ろに向けると……そのエリアが歪んでいた。

「んだよアレ☒」

『対隕石やダーカー用の高出力レーザー砲塔だ、コイツは3発機分のリアクターが有るからシールドで十分に防げ……』

そこまで言ったら……機体を衝撃が覆う。

「うおおおお☒」

『……機体各部ノーマル！まだ行ける！』

〈警告 D反応 確認 9時方向。後方の鑑から敵意有り 以降
α1とデータをアップデート〉

その電子音声と共にM. F. Dにデータがアップデート。プラント船の3Dモデルが表示される。

『……あのサイズの船がD因子に侵されたらマズイ！撃破するぞ！』

そう言うアフィンだが……俺には全く不味い意味が分からん。無理ならさっさと帰るべきでは？第一。

「コイツのミサイル対艦用じゃないだろおお☒」

M・F・Dに表示される武器……DIFM-20-8と書かれたダーカー迎撃用フォトンミサイル、威力こそあの扉を壊した時を鑑みれば十分にあるものの……些か全長キロ単位の船を攻撃するには力不足の気がする。

『うるせえ……ちっこくても当たるとしかねえんだよ！』

ミサイル発射口から複数のミサイルが発射。一定の距離を進むとミサイルが割れ多弾頭化。以降ランダムな軌道を描きながら艦の砲塔めがけ突っ込んで行く。それを感じたのか船の甲板に現れたカルターゴがレーザーで迎撃しながら砲塔に向かっていく。

「アフィン！カルターゴが！」

『分かってる！』

機体が機敏に動きレーザーバルカンを斉射。甲板を焦がしながらカルターゴに当たり首を後ろに向けて見ると……無傷である。

「た、倒せてねえぞ！」

『じゃねーだろ！俺たちみたいに直接フォトンをつつけられねえんだ！』

そんな事を言っている間に何発かが弾着、爆発。砲塔が上に吹っ飛んで……。

「な、中から…：ダーカーが…」

砲塔のあった部分からウネウネと…赤黒いダーカーの触手の様なモノが現れる。

アフィンがそれを見て機体を姿勢制御用のスラスタを用いた直角機動を行いレーザーレールキャノンで近接攻撃を掛ける。

…が効果は薄い。当たってはいるものの有効打とはなっていない様子。

『…ダメだ。今回は逃げよう』

「残当、見ろよ奴の3Dデータ。D因子濃度がアフターバーナーしてるぜ」

そう言い前席にデータを投げる。

『…何だダーカー因子の濃度…俺ら1機でどうにかなる問題じゃない』

「オラクルのモルガンだっけか？そいつを…何機か呼んでこないと無理だろ？」

機体が180度回転。その後すぐに加速。機体の前にワープホールが形成されその中に入っていく。

「うお…おまつ、ACMと言うか変な機動する時は一言声を…まあ良い、アフィン」

『なんだ、相棒？』

ワープ空間を飛んでいる最中。ふと気がついたことをアフィンに聞く。

「…デuketから借りていたライフル…どうしよ」

『…謝るしかないでしょ』

ワープ空間を抜けるとーこっちのM・F・Dのレーダー画面に反応あり。ーしばらくするとオラクル船団の文字が。

『よーし。着いたな。ーさて。相棒』

「何だよ急に？」

『フライトプランも出さずに急に戦闘機が現れた場合ーどうなると思っ？』

「…まさー」

『ー警告する！エリア23にワープアウトした不明機！フライトプランは提出されていない！そちらの意思は何か！』

『…こう言うとき。相棒は少し静かにね…こちらアークスナンバーー』

そう言いアフィンは管制官とコンタクトを始める。周りには任務に向かうキャンシップや船と船の間を行き交う交流船、哨戒任務中の戦闘機の編隊などが飛び交う。

それから少し経つと機体のすぐ横に前進翼の機体が2機近付いてくる。1機は真横に、もう1機は真後ろについた。

『ーであったために任務の続行は困難と判断。こちらにワープアウトしました』

『分かりました。ではそのままシップ1への着艦を許可。その後の判断はゲートエリアにて通告します。ー以上』

『了解しました。ーーさて、相棒。愛しの我が家に帰還だ』

「あ、ああ…」

アフィンがそう言うのと同時についてきた2機はブレイク。どこかに飛んでいく。

はあ、と溜息をついて、やっと帰れると思いき力が抜けた。

123 話目

123 話目

帰艦後機体から降りれず他の人の手を借りてメディカルセンターに入れられてーそこで看護師ー此方もなんとビーストの方ーの世話になる事に。

戦闘服を脱がされオラクルの病院服ーエグザムリーシュに着替えてくれと言われ個室に入れられる。

曰く「ユウナさんの放つフォトンの過剰放出に武器が付いて行けず爆発、フォトンを伴う爆風が指向性をユウナさんに向けて何故か放った様ですね。今日は此方で安静にしていして下さい」と言われ早数分。最早何もすることがない。

エコーさんと確かテオドール、デュケットさんと呼んで貰いベッドの上で待つ事約2時間。エコーさんが先に来てくれた。勿論土産付きで。

「…その…エコーさんから借りたロッツドを…その…」

「良いつて別に。それにあの任務の後じゃ疲れているでしょ？ゆっくり休みなさいな」

「は、うん、そうします…」

「そうそう。若いうちは寝て育ってね。それにほら。見てよこれ」

そう言い取り出したのはーオラクルでは珍しい白黒の写真。

「ゼノの奴…マリアさんと一緒に特訓してシゴかれているみたい。それに…お話も出来たし」

「…そうですね。…その、ゼノさんとエコーさんって…？」

「ええ。ゼノの方はそう思っているわよ。…私は…ほら、ニューマンだから…ね？」

「ね？と言われても…」

「あら？知らないの？ならお姉さんが教えよっかなあ？…まあ、ユウナちゃんもベースはニューマンっぽいから聞いておいて損は無いわよ？」

「はあ…それなら」

「うん。それはね？」

…そう言いエコーさんは語る。今までのニューマンの同期達を。

「…つまりニューマンは容姿そのまま長生きするが為に性に大らかになつてる上に子供が出来にくいから…その…」

「うん、その通りよ。私は今まで…本当の意味で処女を守つて来たけど皆んな大体ユウナちゃんくらいの年で初めてを失うわ。…再生するけど」

「…聞きたくなかった…この世界のエルフがエロに耐性あり過ぎて一周回って来てんのか…」

「える…まあ、そんな感じで私としては…ゼノにはニューマンの同じ

女性に付き合っただけで欲しいのよ」

「…その、エコーさんは…？」

「ええ。勿論ゼノの事は好きよ。loveの方で。…でも…ね？内心はどんな人にも股を開く種族とか思ってるんじゃないかと怖くてね。…告白するのが」

「いいじゃないんですか？どうせダメならダメ元でいきましょうよ？」

「そう俺が言うとはエコーさんは手を左右に振りながら」

「今は良いのよ別に。一時的とは言え会えなくなるし」と言い放つ。

「会えなくー」

「まあいいじゃない。一時の迷いって奴よ」

「そう言うとはエコーさんのマグが俺のいる病室をスキャンし始めーすぐに終わる。」

「ートラップは無しと。ーいいユウナちゃん？」

突然のことに戸惑っている俺を無視しつつ話を続けるエコーさん。

「ーゼノは少し前のダーカー襲来で戦死扱いになっているわ。ー勿論生きてるわよ」

「そう言われー」「は？」と声を上げた俺は悪くない。

「六芒均衡の2のマリアさんがゼノに特訓をさせているわ」

「そう言い遺跡で出会ったフルキャストのーあまり女性とは言えないゴツい装備をしていた人を…キャストを思い出す。」

「マリアさんって…あの黄色のフルキャスト？」

「ええ。上の方に偽装も掛けるから私は大慌てよ。ゼノの物を処分するって名目で外に運び出したり家族に説明しなきゃでー」

『警告。偽装網の稼働限界』

「ーここまでのおようね。取り敢えず言いたいことは言えたわ」

「エコーさん」

「…なに？ユウナちゃん」

「私が言うのもなんですが…後悔するより当たって砕けた方が楽ですよ」

「…わかってているのよ。ー心の中ではね」

「…そう言い病室から出ていくエコーさん。去り際に

「…でも再確認だけさせてくれてありがとうね」

「…と言いつつ出ていった。」

「……………」

エコーさんが帰って入れ替わる様にテオドールが入って来た。ーシヤレにならないくらいに表情を暗くして。

「…ど、どうしたんだ☒テオドール☒」

「ユウナさん…僕…結局向かい合って話せず…うう…」

「一体どうしたんだ…話を聞かせてくれ」

「はい…」

それから椅子を出しポツリポツリと話し始めたテオドール。内容は…。

「…は？ウルクさんが、死んだ？嘘だろ？」

「…本当なんです…前にあったヨルダとテミスへの強襲がありましたよね…あの時に…」

「…すまん…多分俺もテミスでダーカー掃討戦に出てから…」

「良いんです…ユウナさんは悪くないですよ…僕があの時もつと…いえ、真面目にアークスとして仕事をしていれば…」

「テオドール…?」

「…すいません。独りでにちよっと考えてしまいました。…その、僕を呼んだ理由は?」

「ああ…確かテオドールからロッドを借りていたろ?それを返そうとして呼んだんだ」

「…おかしいですね。僕はテクターなのでウオンドの筈ですが…?」

「あれ…じゃあこれは誰のだ…?」

一応壊れたロッドをナノトランサーから取り出しテオドールに渡す。

渡されたロッドをまじまじと360度の角度から観察し始めた。

「…僕のではないので…まあ、破損しているみたいなので返さなくても良いのでは?…にしても破損するんですね。ロッドって」

コトリとテーブルの上に置かれる地味にデカイロッド。

「そうなのか?医者の話じゃ珍しくないらしい雰囲気だったが」

「いえ。武器の不調で壊れるって言うのは割と聞きます。ですが…ほら、見てください。このフォトン結晶。耐えられなくなっただけです。ユウナさん、フォトン結晶を壊すなんてどんな力でテクニクを放ったんです?」

「いや…イル・グランツを放った、としか…」

「ええ☒イル・グランツを☒ユウナさん!少しお話を聞いても?」

「ええ?…ま、まあ面白くなんてないよ?」

「お願いします!彼女…ウルクの為にもダーカーを殺すためにテクニクを学びたいんです!」

そう言うテオドルに対し「俺も感覚だからごめんね？」と一言いい今まで撃つてきたテクニツクの感覚を教える。

「……………」

「…はあ…」

『いや！はあってそれはねえだろ☒』

「…確かに軍、じゃなくてアークスの新型に乗れたのはラッキーだったけどよ…こちとらそれどころじゃねーんだわ」

『そう言えば今病院なんだっけ？大変だなあ…』

「てめえ…人ごとのような口をしやがって…ツ。あの時俺が居なかったらどうなっていたことやら」

『ダーク・ラグネだろ？いやあ、流石にアレには俺もビビったよ。まさかあんな所に居るなんて』

「だれだあんな所で虫を飼っていたら奴は、と言うアフィン。」

「俺はへんなPAブツパしてたらぶつ倒れたけどな」

『覚えてねえのか？』

「いや…なんかマトイが使っていたイル・グランツだっけか？それを使った、って言うのは何となく分かるが…正直あまり」

『…え？マトイってグランツ系使えるの？』

「そもそもグランツって何だ？」

『…フォースやテクターが使う光系テクニツク。最もアークスの殆ど

はグランツやレスタ、アンテイ、ギ・グランツ、ラ・グランツの5種類しか使えない奴が多いけど』

そう言い動画データが添付されていてーそれを見るとフォースの女性が各種グランツを放っている動画が開く。

『他にも毒を与えるメギド系は…その、有るにはあるけど…メギド系はフォトンの特徴がダークファルスに近いらくって…使える奴は軒並み死んでいるわ』

「なにその魔の技使いたくねえんだけど」

『なあに、武器に宿すには安全らしいからメギド系の属性の武器を使えって事だ』

ちなみにこれがそれらの動画な？と言い飛んでくる各種P・Aの動画。

その中にはアフィンの言ったメギド系がありーマトイがこれと同じようなP・Aを使っていた気がするが気の所為だ、そうに違いない。

「ほお…マトイの奴より威力と言うか光の大きさと言うか…なんかちつちえな」

何だったら俺が放ったテクニックの方が強い気もする。

『んでこれより更に上のナ・グランツ、さっきのイル・グランツが有るんだけど…ここいらはフォースやテクターのエースでしか使えないらしい』

「なんでよ？」

『なんでも威力は凄まじいんだけど…その、グランツ系のP・Aは使用者のフォトンをそのままぶつけるような感じらしくてな？使用者が耐えられないって話だ。ほら。相棒も倒れただろ？』

「…いや、アレは武器が爆発したからって話でーあつ、やべっ！」

『は？武器が爆発？爆発音なんて俺聞いてしてなーあれ相棒…そのベッドの穴は…？』

「…イル・グランツを普通に入院している状況でーなんなら素手で使えんだけど」

『…レンジャー辞めてフォースかテクターになれば？ーじゃなくて！オラクルの中じゃ基本的にP・Aは使えないはずだぞ☒』

「どうしようこれ…確実に怒られるーいつそバベルの奴らが狙撃してきたとか」

『ねえわ。第1その穴のサイズじゃ銃弾って言うのは無理だろ…大人しく看護婦に怒られる』

「おいおい、俺の事好きなら助けろや」
「ついでに暇だから来いや、と言えばアフィンは」

『生憎告つても友達からとか言われるんでね。それに俺今オラクルに居ないし』

「…は？」

『リリーパに居るんだよ。前に言っただろ？姉を探しているって』
「そう言いウインドウが動きー背景に砂漠が一面に広がる。」

「ああ…確かそんな事を言っていた気が…」

『気づって…兎に角、俺のカンがここに居るって騒ぐんだよ』

「カンねえ…ま、姉が見つかるのを願ってるよ」

正しく砂漠で一粒のダイヤを探すつてか。

『おう。…あれ？またここか。何度来ても大規模採掘基地に戻って来るんだよなあ…』

そう言い映る大型の塔。塔のてっぺんからは赤黒い煙が吹き上がる。

「カンは頼りにならなさそうですねコレは」

『…仕方ない、てきとーに機甲種壊して帰るわ。それじゃ』

おう、と言いアフィンからの通信が切れる。

因みにその後来た看護師にその事をいろいろ聞かれたがーやる事がなくて持ち物整理をしていたらサバイバル用のコンロが落ちて少し焼けた、と無理のある言い訳をしたが看護師が納得したのでお咎めは無しだった。

—————

あれから退院後、いつもの様にショップエリア上層部の公園に来ている。マトイやデュケットが凄く心配してくれたのは嬉しいが…どうしても気になる事が有って1人で考えたいから、と2人に言いここに来ている。

現在時刻は夜9：36分。

まあ本当はクーナと話し合うのが理由だがーそれでも会うまでには14分くらい時間がある。

自動販売機で買ったコーンポタージュを手を持ちつつーアフィンやエコーさんから言われた事を思い出す。ーなんてユウナはレンジャーなのにテクニックが使えるのか、と。

クラスカウンターのの人にそれとなく聞いてみたが…分からないの一言だった。

そもそもテクニクと言われているこのP・A。元はと言えば今の年号の新光歴より遙か昔。テクニクの本元であるマジック使いの人の魔法を技術を使い再現したのがテクニクらしい。んがテクニクとフォトンアーツが干渉し合うためか。現状では本来の威力を保持したままの両立が出来ないらしい。一応一定のレベルまで使える様になればフォトンアーツとテクニクを両立出来るらしいが。とても威力は目に当てられないらしい。

六芒のあるフォースが嫌々やってみたらしいが。そこら辺の新人フォースやテクターの方が威力のあるテクニクを放てる、との事だった。

んで何故俺がレンジャーなのに撃てるか、と言うと。謎である。

マトイの掛かりつけの医者であるフェリアさんに聞いてみても謎であった。曰く

「…もしもだけど。ユウナさんの左目。マトイさんの遺伝子から培養したものですよね？もしかしたら。ほら、此方にもある通りマトイさんの遺伝子が入った事によってテクニクを使用可能になったとか。そう言うのとかどうです？他の案だと。一度見たテクニクやP・Aを練習無しで。フォトンアーツは元からそうであるべきですけれど。使えるのなら説明が付きます」

との事だった。確かに俺が放てるテクニクはあの時。マトイと一緒に練習場に居た時に見たテクニクばかりだし、なんならその他のテクニクも動画等で見ている。

そう思うとチートだなあと思いつつそれでもマトイクラスの量と威力は出ない事にふと思う。

「…そんな威力を出せるマトイは…」

「――マトイさんがどうしたって言うんです?」

「うああ☒――く、クーナか…」

「ええ。そうですが。――兎に角本題を言いましょう。ハドレットが見つかりました。浮遊大陸の一部を使い回復行為に入っているようです」

そう言い俺にウインドウを投げってきてそれを見る。現地の龍族がこちらの装置を使い送ってきたものらしい。

奥には円形の…何か石の様なブロックで構成されたドームができている。

「虚空機関はアークスに戦闘機の要請をして二機ほど借りれたそうです。私達の任務はその二機が来るまでの時間稼ぎ。――最もハドレットがそれで死ぬとは思っていませんが」

「いや、空爆だぞ? 何を使うか分からないが…炸薬とフォトンの量でどうにかなるだろう?」

「オラクルの多くのパイロットはフォトン適性が一定値以下なので。お陰で炸薬の中にあるフォトンが活性化しない為に威力自体は薄いかと思えます」

「…因みに放つ爆弾は?」

「対ダークファルス用に造られたミサイルです。理論上は50年前の躯体になら極小ですがダメージは通るはず。――今回の躯体には通りませんでした」

そう言いウインドウに画像が出てきて――使うらしいアニメや漫画でしか見た事のない機体より大型のミサイルの3Dモデルが現れ

る。

「アークスの戦闘機がこれを8発放つそうです」

「…これを8発?」

「アークスも虚空機関もD因子の厄介さは分かっている筈ですが…ハドレットの行動を抑制出来ると思わないとやってられませんよ」

俺はこんな大型ミサイルを8発もか、という意味で言ったのだが、クーナにはたった8発しか撃たない、という意味に聞こえたのだろう。

「俺たちはミサイルが降ってくる場所で戦うのか」

「その前に倒せば帰還するはずですよ。ーー来たところで撃ち落とされそうですが」

「…いやだねえ…つたく、辞めたいよこの仕事」

「仕方ないですよ、ユウナさん。それにビーストだと色々と面倒ですからね。…兎も角明日はお願いしますよ? 集合場所は…シヨツプエリアのアークスの武器屋の前で」

そう言いふつと透明になって消えるクーナ。…最も普通に透明なもの輪郭は分かる上にミミや鼻で匂いや足音が分かるから関係ないが。

側から見たら独りでにドアが開き下に向かっていくエレベーター。

クーナの気配が範囲外になったのを確認すると一言呟く。「ステルス迷彩だなあ」と。輪郭が分かるあたり更に更にある。

ーーーーーーーーーーーー

「ぎゃあー!」

悲鳴を上げながらクーナが吹っ飛んでいく。ミニガンを撃ちなが

らクーナの近くに行こうとしーハドレットの視線が俺に来たことに目線で気がつく。撃ちながらクーナの吹っ飛んだ反対側に向かいー途中で弾が切れる。

750発と言うナノトランサーの様な圧縮技術の使われていない旧来のー前世の様なベルトリングで繋がれた弾丸ー装弾数では撃ち切るのに10秒も掛からない。

くそつ、発射速度調整出来ねえのかよーそう言いながらリロードしようとしてマガジンを放り投げーハドレットが突っ込んできて宙を舞う。

クルクル空中で回りながら地面に倒れー立ち上がり痛みがない事を確認する。

吹っ飛んだ際に手から離れたのか握っていたミニガンは腰に装着されている。

くそつ。ハドレットが目の前にいる今はリロードが出来ない。それが殊更に面倒なミニガンは特に。機関部にマガジンから弾薬を取り出して中に放り込まなきゃならない。突っ込んだら勝手に吸い上げてくれないだろうか。

弾の切れたミニガンを放り投げー空中で消失、ナノトランサーに転送される。ー俺の意思を汲み取ったのか刀が手に現れる。近接武器はコレしかない。だがー。

「…てきとーに振るしかねえ…ッ！」

鞘から刀を抜き取り鞘を背中に、刀に左手をかざしゲームの様にダーカーに特効の力がある光系テクニックのグラントを付与、煉獄刀の紅い刀身が光り輝く。

「はいやあああー！」

ハドレットに向かい走り出す。ハドレットは手を地面につけー俺の走る進路上に紫色の紋章が展開。紫色の氷の刃が地面から生えてくる。

「ぎやあああー！っしねええ！」

進路上の紋章から紫色の刃が俺を貫きー真上に吹っ飛ばす。

くるくる回りながらもー俺もどうやってやったか知らないが見えるフォトンを手足から放出、姿勢制御を行いーそのままハドレットに突っ込む。

ガギインッ！とまるで金属を金属で削った様な音。んなあ☒と驚いてハドレットから距離を取る。

空いている左手で空虚を掴みーそこにライフルが現れる。

ハドレットから見て左側に回りながらライフルを片手で撃ちー倒れたままのクーナに近づく。

30mmのCTA弾がハドレット目掛け飛翔していくーが所詮人から放たれる30mm。FAPの貫通力はあっても3cmは行かないだろう。しかし30mmのフォトン徹甲弾の中身ー粉末化されているフォトンは確実にハドレットを弱らせていく。

キンキンキンと放たれる30mm×50mmCTAのFAPやFHEF、それらに混じるフォトンの入っていない曳光弾が飛んでいく。

人と同じ様な紅い血を出しながらもー其れでもなおハドレットは立っている。

「ーくそっ！おい！クーナ！起きろ！お前一人で寝んなー！レンジャーを一人で戦わせんなよ！」

そう言い足で蹴るがー反応が無い。

背中に刀を仕舞いライフルをマガジンを交換、クーナのうなじ部分を両手で引っ張りこのハドレットが作ったフィールドの端に引っ張る。

幸いな事にクーナを引っ張っている間はハドレットは攻撃を仕掛けてこない。やはり弟としてまだ意識があるのだろうか？

それと同時に俺たちが来る前に攻撃を開始してサツサとケツを捲って帰った戦闘機隊に文句でも言いたい、と思いつながらクーナを一番端に寄せ終わる。

ライフルを再度左手に、右手に刀を持ちクー自身に言い聞かせるように、又はハドレットに声をかける。

「クーさあ、ここまできたらやるしかない」と。

それと同時に終わったらメセタたんまり貰って休暇を思いっきり取ってやる、と決心しながら俺はハドレットに突っ込んだ。

124 話目

「ーそれですとは…呆れるな」

クーナが気絶して早数分。刀やライフルでハドレットを迎え撃つもー中々有効打が打ち出せない。

こっちは新人に対して向こうはーヴォイド機関とか言うなんか特殊な所から脱走したヤベエ奴。強いのは明白だった。

ダガンやその上位のエル・ダガン。最近遺跡以外にも現れる事とが多くなった二足歩行型ダーカーのディカードとプレディカード。それに任務で出たガメーゼツシユレイダにダーク・ラグネ。

あの手この手で倒してきたがーコイツは別格だ。

吹っ飛ばされて刀を地面に刺してブレーキとしつつ。態勢を立て直しモノメイトを飲む。

背中に刀を仕舞い久しぶりに使うフラツシユバンを手取る。

俺たちフォトンを使う種族には効果は無いがダーカー因子のあるモノに使うと一時的に因子が枯渇し一定時間ー大体5から6秒ほど動かなくなる。

その間にライフルに変えてリロードをしている最中。毎度毎度聞く声が聞こえた。

「ーくそっ！ペルソナかつ！今はそれどころじゃねえんだ！」

「そのようだな。それにだいぶ苦戦しているようだな？ーそれにアレはココまで強くなかったはず」

「はあ何言ってるんだおまえ！」

そう怒鳴りながら下部レシーバーに付くグレネードランチャーのバレルのロックを解除。ホーミングエミッション用の弾頭を入れる。

「…援護する。もしかしたらオマエならー」

ランチャーをハドレットに向けてトリガーを引く。バレルから弾頭が飛び出て10センチほど進むと弾頭が割れて中から誘導するレーザーが現れる。

6つのレーザーがハドレットに群がる光景を見ながら、この弾結構高いんだよなあ。と思いながらも銃身をハドレットからペルソナに向ける。

「マトイは殺させねえって言ってんだろ、彼女は記憶がねえんだぞ！」

「今は良い。私に銃を向けるな。奴を、ハドレットを狙え」

そう言い再度ソードを片手に振るペルソナ。お前も近接でやるのかよと思いつつながら俺もそれに釣られ、ライフルを消して背中に付く刀を抜く。

「…私 はそうでなくては」

そう小さく呟くペルソナの言葉は当然のように俺のミミが拾う。

—————

ペルソナがコートエッジでハドレットの攻撃を防ぐ中、その脇を走り去り振りかざされるもう片方の手を刀で切り上げる。

ペルソナがそれを見るや左手から赤黒いエネルギー弾を放ちながら後ろに下がる。

「ユウナ、前を頼む。私は後ろからMGで援護する」

「てめえ！ごついソード持ってんだろ！前に出ろよ、前に！ー
きやあー！」

そうペルソナの方を見たらー目の前にデカイ氷柱が突っ込んで
きてーまたもや結構な距離を吹っ飛びペルソナにキャッチされる。

「んあ？」

「大丈夫か？」

「あ、ああ…いや、そうじゃなくってー」

「にしても今回のハドレットはやけに…レベルが高いな」

そう言いながら俺を地面におろしハドレットを見るペルソナ。降
ろされた俺は刀を鞘にしまいライフルを取り出す。

「レベルだつて？ゲームじゃねえんだしよ…くそツ、強いなあ…」

特に俺の目の前と横のやつが、と心の中で呟きながらマガジン
キャッチを押してマガジンを地面に落とす。

落ちたマガジンが光に消えてナノトランサーに格納される。

「それにしても…当時の私はカタナなんぞ使ったことは無いぞ」

「…はあ？」

「それにこの当時にブレイバーは無かったはず…いや、だがギリアム
がもしかして早急に普及を…？」

「ブレイバー？何を言ってる…？」

「兎に角。さっさとクーナが目覚める前にカタをつけるぞ。良いな

「なんだ？アークスに来るってか？」

「…貴女…何者だ？私、はそんな男の様な言動をしていなかった筈だが」

「…何が言いたい？」

「私はこれまでありとあらゆる世界線の、私達、や私がマトイを殺したり殺すのを見てきた。ーだがこの世界線の、私、はそのどれとも違う。ーもう一度聞こう、貴様は…何者だ？」

「せ、世界線だって…？あんだ、何をー」

「ー言うぞ、この世界線のユウナ。私は何であろうとマトイを殺す。それが世界のー強いては彼女の救済になるからだ」

「はあ☒おまつ…ツ☒何を☒」

「…だが…貴様が今までの、私、と違うならば…もしかしたらがあるかもしれないな。ーッ！」

「ー☒」

そう俺が聞くとーペルソナの足が銃を握る手を蹴り上げ空中にハンドガンが吹っ飛ぶ。

そのまま蹴り飛ばされてー地面に体を擦りながらも立ち上がり刀を抜きとり構える。

そのままペルソナはソードを握りながらこちらに来てー罅迫り合いに発展する。

「お前のようなーカタナを使うレンジャーが居るか？」

そう言いながら今の俺と同じ顔を傾げつつ笑うペルソナ。

「それに私に銃を突きつけた時。結構震えていたぞ？まだ人に向けて銃を向けるのは怖いか？」

「うるせえ！それでも俺は…ッ！アークスでっ！レンジャーなんだよっ！」

「そう言い女になってからか、はたまたこの体の元の持ち主は毎日鍛錬を欠かさなかったのか。しなやかに曲がる脚を使い脇にさっきの仕返しとばかりに蹴りを入れて肩肘を付くペルソナ。」

地面に刺したコートエツジを反対方向に思いつきり吹っ飛ばし一言。

「…これで近接武器は無くなったなあ!？」

「そう言いペルソナを見たら…TMGを両手で握り俺の持つ刀を狙って撃ってきた。」

「キンツ！と甲高い音が鳴り響き刀も同じ様に吹き飛ぶ。」

「お前が出来るっていう事は私も出来るんだよ。…同じだからな」

「そう言われてライフルを握りペルソナのいた場所を再度狙おうとしたら…スタスタとソードに向かって歩いていくペルソナ。」

「お、おい！待てよ！…さっきの事を含めてちゃんと説明をしろ！」

「…それは全て引つ括めてシオンにでも聞いておけ」

「シオンにとって…お前、一体何を…」

「じゃあな、この世界線の純粹な、ワタシ、。…また会おう」

そう言いソードを抜き取ったペルソナは会う度に見るダークファルス特有の赤黒い何かを纏いながら消えていく。

「…一体なんだって言うんだ…」

1人取り残された俺はー蹴り飛ばされて地面に落ちたハンドガンとライフルを手に取り地面にクーナの元へ向かう。

内心はー撃たなくて良かった。と思いつながら。

壊れてないかの確認の為にマガジンキャッチボタンを押して抜いた後にスライドを引く。

地面に落ちたMk. 40用の弾丸を拾い上げ息を吹きかけ付いたゴミを飛ばしマガジンに再度入れる。

スライドを少しだけ引き初弾が入ってないのを確認して一度トリガーを引いて内部のハンマーを倒して元の位置ーコッキングをして弾を薬室に入れないと撃てない状態に戻す。

念の為誰も居ない位置に向けてトリガーを引きハンマーの動く音がしない事を確認し、セーフティを掛けてホルスターに入れる。

入れ終わった後に自分の顔を触りー特に傷とかがない事に安心する。基本的に食らったダメージは全部戦闘服が吸ってくれたから傷は多分ない。まあ逆を言えば戦闘服であるバルバトスとゼルシウスはボロボロの訳だが。

ナノトランサーからデイメイトを取り出して飲み込む。トリメイトにはモノメイトの比ではないアトマシンが入っているらしく比較的大きな傷でも次の朝には治っているとか。

因みに過度に摂取しても問題は無いらしい。アトマシン様様である。

因みに最上位のデイメイトにはヨクトマシンにフォトン素子を入れてるらしい。

…フォトンってなんだ？ポスに接続するデバイスやパソコンの性能表を見ている時に大体フォトン素子を用いたと書かれているが…。

「…クーナ？起きてるか？」

腰に付いたライフルを左手に持ちクーナを揺らしながらふと、ハドレットから攻撃受けて一撃ダウンでよく暗殺者？なんて稼業やつていけるなあ。と思いながら更に声をかける。

「うう…ユウナ、さん…？あ！ハドレットは☒」

「ほら、どうにか2人がかりで倒せたよ」

そう言い俺の後ろに倒れるハドレットに左手で指を指す。

「…2人…？でも私は…」

「良いんだ。話すとき長くなる。兎も角ハドレットの近くへ。彼が何か言っている」

そう言いクーナに肩を貸し…そのままハドレットの元へ向かう。

—————

個室の部屋内にシャワーの音が響く。今俺はクーナの部屋に入つてシャワーを借りている。最初は初の女性の部屋という事で緊張したが…部屋の中は言うほど女性らしくは無く必要最低限の物しかないように見えた。

ちらつと置いてある物に値札か何か付いたらこの部屋も偽物

かもーと昔に遊んだ事のあるゲームのある内容をふと思い出した。その内容は海外から来た主人公が仲の良くなった女性に家に来ないかと誘われて中に入ってみたら値札の付いたものだらけの部屋だった、と言う内容だった。

そのゲームを進めると女性は警察機関の人で監視を命じられていたとか何とか。

とまあ、そんな事を思い出したが、彼女がークーナがそんな事をするか？とも同時に思う。

スパイとしては常套手段かもしれないが。

『ユウナさん？着替えは此処に置いておきますね』

そう風呂の扉の向こうから声をかけてくるクーナ。

ハドレットと戦い無事に撃破ーと言うか消滅。聞くとダーカー因子を過剰に摂取していたハドレットの身体はもうダーカーと変わらなかつたらしい。それでも最後に話せたのは流石私の弟、とはクーナの話。

無事に任務を終了し、今はクーナの部屋でシャワーに入っている。何故直接マイルームに帰らなかったのか。答えは簡単である。

そう言いドアを挟んだ部屋にある再生中の戦闘服ー細切れ一歩手前の服が置いてある。

どうやら戦闘中にハドレットやら俺、と言うかこの身体と言うか。同じ顔、同じ身体のダークファルスの仮面から結構なダメージを食らっていたらしく腹や腕、しまいには胸の一部部分が破れていたらしい。

それを見たクーナが「巨乳め…」と言ったかはさておき、このまま

だと不味いとクーナのマイルームに直接ワープさせてもらう事に。

本当ならクーナの着ている本来の性能のゼルシウスを着てみたかったが…その、胸が入らず断念した。

因みにクーナはその様子を冷めた目で見ていたのを覚えている。

とまあ、そんな痴女姿で帰るのはくっそ恥ずかしいのでクーナ自家用機で直接マイルームに向かい、更に風呂に入っているわけだ。

一通り洗い終わりバスルームのドアを開けると…そこには俺が着ていた黒に赤いラインの入ったゼルシウスが置いてあった。

「…あ？」

おかしいと思えば破れたゼルシウスのレプリカの方を見ると…やはり置いてある。

「驚きました？それアークス用に下ろすためのプロトタイプらしいです」

そう言いドアの奥からクーナの声が飛んできた。

「プロトタイプ？」

「ええ。私のゼルシウスからP・M型光熱網学迷彩機能を取り除いて一般的なアークスでも使用可能なゼルシウスの前実験段階の服です。通常のーユウナさんが着ていたレプリカよりD因子耐性が大幅に上がった代物ですよ」

そう言うクーナの話の聞きながら身体を拭いてスポーツブラとパ

ンツを履き、足から先に入れる。

そのまま上半身に持つてきて首まで持つて来るとー着ている人のフォトンを感じしてキュツと締め身に纏う。

「…おお…実に馴染む。ーのような気が」

それに良く見れば俺が着ていたゼルシウスの様に尻尾部分にあるテール部分が丸っ切り無くなってそこから尻尾を出せる様になっている。

「着ている人のフォトン効率良く防御に回すために少し分厚くなっているのが分かります?」

「…おお」

「本来フォトンは肌を露出すれば効率が上がるのですが…その分素肌の防御分消費も早くなるので、ならばと服がフォトン効率良く吸収して防御に回し、服のフォトンと本人のフォトンの二重でエネミーの攻撃を耐える、と言うコンセプトで作られたそうですよ」

「…」

そう言い分厚くなったかを確認するためにー自前のデカイ胸を触る。前のゼルシウスだと先っぽがバレちまうんじゃないかと思いつながら着ていたが…その点このモデルは大丈夫そうだった。それに胸を触っても変な感じはしないし。

「…分厚くなったかを確認するのに胸を触るんですね…まあ、分からなくもないですが」

「…いや…なあ、クーナ。この服尻尾部分が元から出せる様になっているが…これって元はなにか付いていたのか?」

「単にこの服がビースト用に一番簡単に再設計し易かったのと撮影で使った奴のお古っていう事も有りますけど。丁度お尻のところにてールを付ける部分も有りますし。因みにこれは…ほら」

「そう言い尻尾部分のてールを稼働する範囲内で独りでに振り回すクーナ。」

「…なにこれ」

「なんでも一部のビーストの持つ尻尾を第3の腕の様に使う為の物だとか。私は面倒な上に武器がダガーなので使いませんが」

「そう言いながらてール部分の先端が3つに分かー水用中のMSの様な3本の爪の様な形に分かれる。」

「こうすれば銃を握らせたりできるのですが…ほら。私の創世器って完全ステルスじゃないですか？だからほらー」

「そう言いクーナは手に俺のハンドガンを持ち、マガジンを抜いて1発だけ薬室に入れててールに持たせ、自室の簡易的なターゲットに向かってトリガーを引いてー音が出ないがターゲットには弾痕がある。」

「どう言う事だ？と頭がこんがらがってクーナを見るとーちゃん」とハンドガンがスライドストップしているし、なんなら床に薬莖が転がっている。

「…とまあ、こんな感じで。マイを身体のどこかにつけている状態だと音と体が消えるんですね。他のビーストも何かあるっていうのは分かるらしいですが。ー最もユウナさんには完全に見えていないみたいですが」

「…サイレンサー要らずか。めっちゃくちや良いな」

「ビーストはミミが良いらしい人が多いですらね。ユウナさんみたいな…その犬？ガルフ？系のビーストでレンジャーは発砲音が煩そうですし」

確かに今まで見たビーストは猫ミミ、犬ミミの二つくらいしか知らない。多分ガルフも犬の方に区別されているんだろう。

「減音効果と防御を期待してヘッドアクセサリーを付けているけど…完全に音を消すサイレンサーとか無いかねえ…」

「確か申請すれば使えたはずですよ。そのかわりサイレンサーの保管場所を逐一報告しなくちゃなりません」

「…パスだ、パス。そんな猟銃を管理する為に逐一警察に連絡するよな事面倒っぽいからな」

そう言いその上からバルバトスを着ようとして…これもダメージが酷かったのを思い出す。

「…なあクーナ？この上から来れる服…無いか？」

「生憎私はこれが戦闘服なので…それに私が言うのも何ですが…これに合う様な服はなかなか無いですよ」

「だよなあ…これ単体で外を歩くのはなあ…」

「…まあ、わからなくは無いです…一層の事オペレーターに迎えに来て貰えばよろしいのでは？」

「…ああ、確かに。そうするか」

そう言いマグを動かし2人に連絡を入れようとするとクーナが口

を割ってくる。

「…となると私のこの姿はマズイのでー」

「ーどーお？こんな感じで！」

「…は？」

そう言いゼルシウスから普遍的なオラクルの服装に戻る。ー最も髪型は青色からオレンジベースになったが。

「やだなあ！私だよ私！クーナだよ！」

「…こんなにテンション高いのか…アイドル時は」

「…そうでもしないとやっていけませんよ。アークスの偶像なんて」

「うわっ、急に戻るなよ」

「と、兎に角！オペレーターさんと合うときはこの姿で、ね！」

「あ、ああ…その、電話するから…良い？」

「勿論！」

そう満面の笑みで言うクーナを視界の端に追いやりつつデュケツトに連絡を掛ける。

『ーあつ、マトイさん！ユウナからです！』

『ほんと！』

「…ああ…取り敢えず連絡が遅れたわ。済まんが今ある方に世話に

なっていてな…ちと迎えに来て欲しいんだわ」

『お世話☒ゆ、ユウナ！何かあったの☒』

「ああ…まあ…ちと戦闘服が結構ひどい破け方してな…ある人にーっっておい！クーナさあーん☒」

「はあい！ユウナさんのオペレーターさん！」

『うえ☒クーナさん☒うそっ!?!なんでえ!?!』

「私がアムデイスキアで訪問ライブから帰っている途中ね？それはそれは大きな丸い建物を見つけたの。興味が湧いてそれに入ったら、おっきな龍族とユウナさんが闘っていてね？危ないから、その決着がつくまで待っていたら2人同時に倒れちゃったの。ユウナさんに応急処置をしながら倒れた龍族にお別れの歌を歌っていたらユウナさんがそのまま倒れてね？そのまま私のマイルームに連れてきたの」

「以上！ユウナさんを連れてきたお話終わりっ！」

『そんな事が…っって言うとな今回の虚空機関の任務は結構きつかったみたいですね…取り敢えず無事でよかったです』

『そうだよ！ユウナが居なくなったら私…』

「…ともかくそんな感じでな。奇跡的にもクーナさんが俺の着ていたゼルシウスと同型を持っていたから服は何とかなるんだが…上が無くてな。この格好じゃ外は歩けないから迎えに来てくれないか？」

『分かりました。住所は…はい。1ー2ーA23ですね？』

「あ。オペレーターさんと其方のお名前はなんで言うんですか？」

『私はデュケット。こっちはマトイさんです』

「お二人さん。私がここに住んでいるって事はトップシークレットつて事で！」

『はい！…あの、サインを貰っても？』

「勿論！色紙を持ってきたらサインするよ！」

『！ちよ、ちよつとユウナさん。少し、いえ、結構遅れるかも知れませんが。えつとーと、取り敢えず今から向かいますので』

「あ、ああ」

「安全運転でね！」

『はい！マトイさん、行きましょう！』

『う、うん』

それを最後に切れる通信。それと同時にクーナのアイドルモードが切れていつもの口調に戻る。

「…大変だな」

「…ええ、いつもの事なので慣れていきます。ところで、

その…ユウナさん」

「なんだ？」

「…ハドレットは…無事に生まれ変わってくれるでしょうか？」

「…急に真面目な話になるなよ…龍族に詳しい人に前に聞いたんだが、龍族は独自の理論？を持っていて、それ曰く全ての龍族は死ぬのと同時に身体が無くなるが、魂は新しい体に宿る。って感じのことを言っていたはず」

「それならハドレットもーっ！」

「…だがハドレットはーっと言うか造龍はオラクルが弄った存在だ。クーナには悪いが…神さんが転生させてくれるかはそれこそ神様しか知らん」

「…」

「…まあ、カツシーナだったか。その神様に祈ってみるのも良いんじゃないかねえか？」

「カツシーナ？」

「詳しくは…いや、龍族に詳しいアキって言う人が居るだが…俺の方からアキさんにアポイント取れるかどうか聞いてみるか？」

「…いえ。結構です。ーっハドレットが生まれ変われる可能性があるなら…私はそれで良いです」

そう言いテーブルの上に置いてあるハドレットも巻いていた布を左手に巻くクーナ。

「…ハドレット…お姉ちゃんはハドレットの分まで生きるから…」

そんな言葉をミミすればそうしてくださいとはその場の雰囲気では言えるわけもなく。

ただただ俺は厚めのゼルシウスを着てその場でいつ来るかわからない2人の救援を待つしかなかった。

俺もアイドルのクーナには詳しくはないが…あの時詩っていた歌。あれを聴いていればハドレットも転生出来なくても成仏は出来るだろう。

「まあ、あの詩を聴きながら死んだんだ。その…万が一転生出来なくとも成仏してくれるさ」

「…どうでしょうか…私を怨んでいたりとか」

「無いだろう。有ったらあんな執拗に俺を狙わんさ」

そもそも恨んでいたら気絶した後には追撃を咬ますだろうし、俺がクーナを端に移動させていた時なんて十分なんて時間じゃない程隙があった。そんな状態で攻撃をしてこなかったって事は…。

「…怨んでなんてないさ。じゃなかったら俺がこんな苦労した意味が無い」

「それもそうで…すいません。通信が…出ても？」

「どうぞ」

そう言いクーナの表情が柔らかくなりそこから辺にある椅子にどっしりと座る。先程撃った窓からSFチックな高層ビルやドーム、飛行

船、見ると安心感のある地上を走る車や、デュケットから貰ったホバーバイクの様な空を飛ぶ車等この高層ビルから見る景色は壮大だった。

クーナに聞いて何か飲み物でもないか、それを聞こうとさつき座つた腰を上げて身体を向けた時。クーナの声が変わる。

「…は？ハドレット傘下の他の造龍が逃げ出した…？え、しよ、所長？何を仰っているのか…はい、ハドレットは…確かに私達で殺しました。…ですがハドレットクラスだと…え？ダーカー因子の適合率が高いのは…はい。…はい、分かりました」

そう言い通信を切るクーナ。先程から口に出ていた内容からあまり聴きたくないのだが此方を見て口を開く。

「…ユウナさん。先程通信で複数の造龍が脱走したとの事です」

「…やだ。俺はもう行かんぞ」

「…虚空機関で成功したと言えるのはハドレットだけです。他の造龍はその…」

「…なんだよ」

「…ダーカー因子を与えた事により弱体化したので他のアークスに緊急依頼（エマージェンシーオーダー）として接敵した場合倒してもらうとの事です」

「…ハドレットより弱いと言われてもな…それってどのくらいなんだ？」

「…ユウナさんは遺跡エリアのヴォルガーダと戦ったことは？」

「遺跡じゃないが別の場所で一度だけ」

「…ああ、報告に合った B a v e i s の拠点強襲時にですが。あれほどではありませんが…まあ、あれより弱いと考えてくれれば」

「アレよりさらに弱い？あの大きさで？…自然界で生き残れるのか？」

「強化に使ったD因子がばら撒かれるだけなので…現地にダメージはでもアークスが直ぐに向かえば済むことかと」

「現地にダメージがある時点でダメだろ…てかなんでアークスの船になんでダーカーが？」

「研究用の個体だそうで。私も何度か経験がありますがダーカーの捕獲を頼まれる事があるので、それらの何れかが逃げ出したのかと」

「研究用の個体が嚴重なエリアにいるんじゃないやなくて格納庫なんか…」

「さあ？混乱に乗じて逃げ出したのでは？…兎も角、他の造龍はヴォルガーダクラスという事なので」

「…クーナは良いのか？腐ってもハドレットの配下だろ？」

「…私にとって弟はハドレットだけです。それが私達と同じ龍族だとしても」

私達、という言葉に一瞬謎が行くが話の流れ的に切り返せないし、俺はさっさと帰りたい。

「…兎も角。これで依頼は終わりかな？」

「そうですね。ハドレットは倒しましたし。私の方から報告とレポートを済ましておくのでユウナさんは振り込まれるのを確認してから連絡を下さい。ーあ、そうでした」

そう言い、はいつと渡されたカード状のデバイス。

「これ。私のアークスとしてのカードです。私の機密上ユウナさんが一人の時しか向かえませんが…」

ユウナさんが狙われてもシャレにならないので、と小さな声で付け加える。

「…ただでさえバベルやら何やらに狙われてる可能性があるのに…」

「大丈夫ですよ。いざとなれば私がマイで…」

「…そうならないように願うわ」

「ええ。ハドレットには一足先に取られましたか…対人戦では私それなりに強いんですよ?」

「そりゃ…まあ透明になって後ろからやればそれは…」

「兎も角。そのカード経由でこちらから依頼があった場合は直接依頼を投げるのでー来ましたか?」

そうクーナが途中まで言うといんターホンが鳴る。それに近づくにつれクーナの暗めの青い髪の毛がオレンジ色に変化して声の高さも変わる。

「…はい。ええ！私のお客よ。そのまま中に入ってもらって？」

そう言いクーナは部屋のドアの鍵を開けて――一階のエレポーターから飛んできた二人が入ってくる。

クーナの姿を見た二人のうち一人はそれはそれはテンションが上がっていたそうで。

そんなテンションを上げている一人をよそにマットイはこっちにきて――手に持っていたバックから上着を取り出す。取り出した上着は――俺が着ていたラージバルバトスと同じ物だった。

助かったよ。そう言いその服に手を入れて――いつもの服装に戻る。

それから少しの間――特にデュケットがクーナのサインやらグッズやらの話を本人に話し――俺とマットイはその様子を20から30分くらいずっと見ていて――余りにも長いのでそろそろデュケットに帰ろうかと言おうかと思った時。

俺の隣に座るマットイが俺の膝に手を置く。

「…ねえ、ユウナ。もう少し待ってあげようよ」

「でもなあ…もう30分だぞ？デュケットの持ってきたグッズ類にはサインが終わってるし…やることはないだろ？」

そう言いクーナに一言いい冷蔵庫から飲み物を――一通り取り出して蓋をあける。

――

「何で俺ここにいるんだ…？」

そう呟く俺に機体内に備え付けられたモニターが答えるように続く。

『ーして！我々アークスはあの巨躯に勝った証として！全アークスによる戦技大会をここ！ナベリウスで開く！』

『勿論！何かしら事情がない限りアークスは基本参加だ！』

『そうだぞ！クラリスクレイス。ルールは簡単！各々ツーマンセルを組んでー』

「なんで俺…ここに居るんだ…？」

「相棒…何度目だよそれ…」

そう良い隣に座る何時もの金髪エルフ野郎ことアフィンが答える。

「いや。分かってる。クーナと一緒にーいや、クーナに助けられて無事に帰っていざ一週間は休むぞと意気込んでたらこれだぞ。ー頭おかしいんじゃないか、このトップ」

「クーナおまつ、クーナさんと会ったのか」

「…まあ。会うには会った」

「どーして俺に何も言ってくれなかったんださ、サインとかは」
そう良い椅子のロックを外し俺の肩を揺らすアフィン。

それを見る他のアークスが変な目で見ているがそのうちの何名かが話を聞いてウンウンと首を上下に振っているのがちらつと見えた。

「ねえな」

「…くそっ!」

「…あ、いや確かデュケットが何枚か貰っていたような…」

「期待して良いのか? 良いんだよな☒」

「デュケットに頼め。俺にはそれしか言えない」

「ああ、くそっ。…てかなんでクーナさんと?」

「…ちと上から俺指名で任務があつてな。その任務をクリアした際にガバって倒れちゃって。そんな時に来たのがクーナさんってわけ」

「…そーいやアムデイスキアでM・Vを撮るから護衛がほしいってオーダーあつたな。…落ちたが」

「まあ、そんなこんなで知り合つたんだ。ああ」

「…良いなあ…クーナさんを至近距離で見れたなんて…ん? そーいやその服…前のと違うね?」

「ああ…まあ、さつき言った通り戦闘服もボロボロでな。クーナさんが前に戦闘服のメーカーとコラボした際に使ったビースト用の服を貰った」

「…ええええ☒あのProvidence of the beastsのM・Vの時に来てた…☒確かにそう言えばその中身の服装…」

「なん…プロビデンス? ガンダー」

「Providence of the beastsだ。クーナさんが相棒の着ている服と獣耳と尻尾を付けたM・Vなんだ。…一部を除いて不評なんだがな」

「…もしかして?」

「ああ。Babeilsだ。奴らあろうことかクーナさんに殺害予告まで出しやがって。…その後に死んで見つかったが…噂じゃクーナさんを護衛する為のチームが居て其奴らが排除したとか言われてたなあ…」

そう言いながらアイドルになんて事を…、と続けるがクーナの本職を知っている手間、自前で排除したんじゃないの?なんて言えない。そもクーナがヴォイドの暗殺者?って言うのも秘密事項らしいし。

「とまあ、その服。俺みたいな一部のヤベー奴からしたら殺してでも奪い取るになっちゃうかもしれない。この事は俺たちの秘密って事で」

そう言い口の下で人差し指を立てるアフィン。秘密も何も最初の驚き声でこの機体内にファンがちらほらいることが明らかになっている以上、それは無理なんでは…?

そんな疑問を頭に浮かべていると「まあ、なんだ。何かあったら俺が守ってやるよ」とひじょーにクサイ台詞を言いー等の本人はフンストゥ!と満面の笑みで決まった、と勘違いしてそうな顔をしている。

隣で「どうだ?」と言いたげな顔をするアフィンから目をそらしーーと言うか目を閉じる。

E・T・Aは25分後。本来ならオラクル周辺中域を離れ次第跳ぶのだが：それこそ数多のアークスを乗せた機体がナベリウスに飛ぶので時間をずらしながら向かうらしい。

はあ：戦技大会とか絶対クソじゃん。これが終わったらぜってー1週間休んでやる。

そう俺は決心しーアフィンに着いたら起こしてくれと言い目を閉じた。

125話目

ー刀の刀身が目の前のデイカードを水平に切り裂く。真つ二つに割れたデイガードの奥から10を越す数のエル・ダーカーが見えーそのまま刀を消してA・I・T・Ddから許可を貰い俺の物になったフルキャスト用に開発されて没になったガトリングガンをランチャーの様に両手で保持。

メインの30mmと同じ弾を使うように薬室やバレル、給弾システム周りを改造してもらった。：総合技術開発本部の開発部副班長と呼ばれているハルさんにメセタを取られたが：性能には充分だ。

バレルを回すための左右に別れて付いているフォトン供給装置とそれで駆動する出力ユニット。

そしてそれらの下部にあるランサーを兼ねた部分に入っているクリーニングキットと万が一のフォトン供給装置が壊れた時用のー前世で馴染みのある電動ガンの様なフォトンバッテリー。

後方に付いているタンクにはマシンオイルが満タンに入っておりーこれ一個で理論上は20000発程度は撃てるらしい。レートを下げれば更に撃てるらしいが、900以下にするとそれは最早ガトリングではない、という事でそれ以下には下げない方針である。

『ーおっとおお☒ここで新人二人組がトップ10に割り込んできたぞお☒』

『うん？アレは：ヒューイ！私あの2人のうちの片方に会ったことがあるぞー！』

そんな声が通信機越しに響く。ふとアフィンを見ると俺と同じようにアークス製のライフルを腰だめで撃ちながらー俺の元に後退してくる。

「相棒！この凍土エリア中々多いぞ☒俺たちだけじゃどうにもならな

いぞ☒」

「だがここでのキル数のおかげで報酬がっぼだぜえ！もう少し粘ー」

「でも時間がっ！」

「ええ☒なんてえ☒」

「時間だよ、時間っ！規定数は倒したし、さっさとここを突破して遺跡に到達しないと！」

最後のダーカーが爆散し、カラカラと虚しくバレルが回るガトリングからマガジンを抜き取り、ベルトリングを中に入れてようとしてー立ちながらだと中々中に入らず弾の残ったガトリングごとナノトランソーに放り込んで何時もの様にライフルを担ぐ。

「……ああ！もう！行くぞアフィン！」

「りよーかい！」

そう言い前を先行するアフィンについていきー凍土エリアから周りを凍土で覆われた遺跡へと向かうテレポーターのある場所に向かった。

—————

「ところでや」

「ん？」

そう言いガトリングを一度アフィンに持ってもらい、マガジンから

垂れるベルトリングを中に入れていた最中、ふと思い出した事を聞く。

「アークスって定期的にこんな事やってんの？」

「…どうだろうなあ…一応5年くらい前にあつたって言うのは記憶にはあるにはあるけど…まあ、ある種の賭け事みたいなものだよ。開始前にパーティを作るだろ？2人から4人の。それらがリアルタイムでオラクルに中継が飛んで、んでそこで誰が一位になるか賭けられるんだ」

「賭けられるって…。」

「んでそこから倍率が勝手に計算されてー相棒、あそこの裏——草むらの中にスイッチがある」

「どつちが押す？俺か？」

「相棒、カタナ持っていたよな？」

「いやまあ…持つてるけどさあ」

ライフルを手放し忍者刀形式で背中に付いている刀を抜く。

「…そのカタナってさ。P・A使えるの？」

「…刀身がソードに比べて短くてなあ…一部なら適応されるかもしれないけど…」

そう言いオーバーエンドを振るために横に刀を振ってースカル。もしかしたらと思いきのままモーションを振り続けるもー虚し

く降ってきた雪を切るだけだった。——いや、切るというより積もった、と言った方があっている。

「…使えねえや」

「…冷静に考えたら俺たちレンジャーじゃん？確かにプリセットである程度のP・Aは渡されてセットも終わっているけどさ」

「でもそれ用のクラスに変えないと使えないんだろ？」

「そりゃライフルとソードじゃフォトンの纏わせ方、武器と体に纏わせるバランスとか全然違うし」

そう言いアフィンは持っていたガトリングを地面に起き——自前のライフルの残弾数を確認する動作に入る。

「…なら——光波っ！」

そう言いテキトーに俺は刀を振り——右上から左下に振りかざすと——青白い光の刃が飛んで行った。

「こんなことよりさっさと先に進まないとなあ」とマガジンを見ていたアフィンは本当に出た光波に二度見をして驚く。

「…うお☒出たあ☒…けどこれどっかで…」

「すげえ！光波だ光波！ほんとに出やがった！体力5000くらい飛ばしそう！」

素晴らしいながら草むら目掛け刀から光波を飛ばす。

「体力5000…？いや、そうじゃなくて。ゆ、相棒。それさ」

「あ？」

「パルチザンのスピードレインだ、それに似てるぞ」

「スピードレイン？なんだそれ？てかパルチ？」

「ああ。先輩のオーザさんって人がハンターを進めてきたことがあつてな？その時に一通りP・Aを貰って使ってみたんだ。その時に使ったパルチザンのスピードレインに似ているって話だ」

「ハンターねえ…トロイ俺には近接は無理だな」

刀を仕舞い地面に立てかけられたガトリングを手に取る。

「カタナで近接戦闘やスピードレインみたいな事をしたり、タリスを使うレンジャーが何処にいるんだよ？」

「まあ、本当は刀より銃を撃つ方が好きだがな。あんな運動量のある動き。osがアシストしてくれるって言ったって無理があるってえ言うの」

「…俺は見る分には好きだがなあ…」

そう言いアフィンの目線が顔から下ー胸辺りで止まる。

「おめえは俺の胸をガン見してえだけだろ？ーあ！これはポイントマイナスですねえ？」

「そんな事言っていると…無理矢理にでもヤつちやうかもよ？」

そう言い手をワキワキと動かす。

「大丈夫だ、アフィンがそんな事をする訳ねえ。んだつたらそもそも近づけねえよ、俺が」

「ああ…？あつ…」

「少し前から異常に年上の男が怖くてな…俺も元…で大丈夫な筈なんだが…んだけどアフィンは大丈夫なんだわ。…なあ、なんで俺男性不信？になっただか分かるか？」

「さ、さあ…」

「おま、露骨に目をそらすなよ。まあ、なんか…アフィンは…友と言うべきか…その…まあ、うん」

そう言うのアフィンがまだアレを克服していねえのか、と云っていたのでアレって？と聞いてみたものはぐらかされた。

「……ううん…」

そう言い俺はアフィンをジロジロと見て…ふと言いつつ。

「女の子みたい、だからかなあ…」

「女の子みたい、かあ…」

—————

「女の子みたい、かあ…」

そう言う目の前の少女…と言っても俺と同年代だが…の発言を反復する。

女の子。…それは俺が小さい頃から言われた言葉だ。俺の母親は居るものの父親は分からない。何も母親が強姦にあつたとかそういうわけでは無い。

オラクルはここ200年、旧暦の旧暦である今は殆どが情報が開示されていないフオトナーの黄金時代を含めたら3000年以上の間をダーカーと戦っている。

今はこうして当時を考えれば化け物スペックの戦闘服のお陰で俺たちの様な新米でも戦地から帰ったり輸送機やジャバスプ等に乗ってすぐさま帰艦出来るが、ー當時はそれが出来なかった。

お陰でアークスの戦死率はとても高く、ー当時の任務の生還率は14.5%と2割を切っていた。

そんな事をかれこれ有史以来最低でも3000年以上続けていれば必然的に男性は少なくなり、ークロン技術を用いた妊娠法なども行われたが、妊娠できてもそれはほとんどの確率で女の子だった。

それはそうである。この船じゃ女性と女性は男性の人数が半分を切ってから少しづつだが当たり前前になって来た。

そして完璧なクロン、とまでいかなくとも女性同士の卵子から掛け合わせて作られた精子も作れるようになり、ーソレが一般に回るのもさして掛からず。

そんな事になれば、ーフオトンで力の差は補えるからか、ー少しづつ減っていった男性はさらに減っていく。

俺と同じニューマンでも時折男の子も生まれてくるもの、ー成長すれば胸の無い女の子と股間を確認しなければ分からない程度に遺伝子データが壊れており、ーその2人が妊娠しても出てくる子供は同じような子供だった。

最もヒューマンの方はそれから復活も時間が掛かったとはいえ男性らしい男の人も生まれてきた事もあり、ー今は6割くらいのオラクルの男性はヒューマンである。

一方のニューマンの方は、ーヒューマンより寿命が長く、かつ性行為が出来る時間が長い為か。今でこそ少なく無い数の男性がいるが、殆どが今の俺の様に女の子の様な、ーヒューマンに言わせると男

の娘だ。――因みに後程この事を相棒に言ったら「股間認証システム：実在していたのか？」なんて驚いていた。考えることは皆同じなんだな。

おかげでなのか知らないがニューマンで男らしい男として生まれるとそれはそれは：俺たちニューマンの男からも別の意味でモテる奴で。

とまあ、そんな外見を俺はとても嫌っていた。アークスに入ったのも姉を探すと言う目的があるが――もう一つは体を鍛え――オラクルで成功しながらもその身一つでアークスに入ったクロトさんの様なカッコいい男になる為だった。

そんなコンプレックスを好きな人である相棒――ユウナに褒められてしまったらなあ…。

「俺は好きだぞ？アフィンの事。――あ、コレはアレだからな？ラブじゃなくてライクの方な？」

「今俺のこと好きって☒」

「だから、ライクだって言ってるんだろ？」

「でも口走ったって事は俺もついに☒」

「だからあー！ライクだって言ってるだろ☒それに俺は――」

『おおっとお☒ここでトップ10に入っている新人二人がストオオツプウウ！内容を聞くに痴女喧嘩かあ☒』

『ビューイ？ちじよけんかって何だ？喧嘩となにが違うんだ？』

『ええつとだな、クラリスクレイス……え？どうしたカスラ？実況しろ？』

『実況だなっ！今はーあっ！女の方ー確かユウナって言う方が男の方にストレートパンチをしたぞ！続いてローキック！』

『おおっと☒此れにはあのニューマンもタジタジだあ！どうする☒カウンターをー返されたあ☒』

『ーお二人さん。そんなルーキーの痴女喧嘩なんて実況せず他の方に合わせて下さい。ほら。ドローンパイロットのみなさんも各員、ブレイク』

『ああ☒カスラあ☒もう少し痴女喧嘩を見たかったのにい』

『クラリスクレイス。若い君にはまだ早い。ーそれにヒューイ。貴方も止めるー』

『ーああ☒もしかして今の全部撮られてる☒』

「あ、ああ……だから言ったら、船の方で色々やってるって……てか、相棒……ローキックはイカンよ」

そんな痛くないけど、と言おうとしたがユウナがビーストである事を思い出し言うのを飲み込む。

任務中に数百メートル離れた場所でビースト好きの友達とビースト、と言うかユウナがどれほど愛らしいかを語っていたらユウナがぶっ飛んできて小言を言われたからなあ……あん時は俺たちニューマンでも聞き取りづらい小声だったんだが……まあ、友は「アフィンにはビーストの恋人がいていいなあ……俺の周囲にビーストなんて居ないし、ビーストの多いシップに行こうとしたら親に止められちゃった。

なんでこんな権力あんだよ俺の親」と愚痴っていたのを思い出す。

因みに気が引けるが友曰くユウナは中々見られないビーストであることも気付いている。

因みにコレは最初の告白後、あのカフェでデレた時ではない、に気が付いたのだがユウナの耳がヒューマン系の耳ではなく、ニューマン寄りの少し尖った耳なのも告った後に気付いた。

んで調べたらニューマンビーストは数が少なく、このオラクルを見ても数百居ないとも言われている。

なのでプロテクト何重にも掛けてposのビースト友達に上げた。是非とも目線消すから画像くれ、とも。

因みに本人に聞こうと思っただが…中々聞けずに居る。

幾ら男っぽい言動をしてもそこは女の子である。

と言うか目に線入れたらもうそれエロ画像じゃん。

「ーはあ…先行こ先。どうせposの管理局に連絡入れればよっぽどのがない限りposには残らんだろうし」

そう言いながら立てかけてあるガトリングの空になったマガジンを拾い相棒のナノトランサーに放り込む。

キル数はトップ10に入っているものの同点多数が数多に居る。

このままじゃ落ちるな。そう確信しつつ走破記念を貰うべくー俺自身は一位を取る気で居るがーそのまま奥のテレポーターに乗り、最近解放された遺跡エリアに向かった。

—————

「ーおかしい」

「え?」

「少し前まで喧しかった通信が聞こえない」

最終地点の遺跡エリア入って数分した時。俺はアフィンに話しかける。

「確かに。俺たちの前にも複数のチームが先に入って居るはずなのにー」

そう言うとユウナが左手を上げグーのまま俺に見せる。

そのまま片膝立ちになりユウナの後ろ側を警戒する。

「…銃声や法撃…斬撃音すら無い…?」

ぴこぴこ動くユウナのミミを見ながら呟くアフィン。

「…辞めてくれよ、マジで。嫌な予感がする。アフィン。こいつを付ける」

そう言いナノトランサーからサプレッサーを取り出す。

「…これって」

「ああ、俺特製の超大型サプレッサーだ。中身は空洞の極太サプレッサー」

「でもサイレンサーは持つのに許可がー」

「…なに、手違いで超太くなったバレルと言えればいい。正直減音効果はあまり無いが無いより役に立つ」

そう言いアフィンのライフルにくっ付けてーサイドレールに固

定する。

そのまま俺もライフルに固定しようとしてーあ。

「アファインのライフル…確かフォトン弾式だよな？」

「そうだけど…あ、まさか？」

「俺のライフルじゃねえと互換性ねえわ」

「って事はー撃つたら中で？」

「ああ、フォトン弾がサブレッサー内で駆け巡って破裂するかも知れない。ーあつぶねえ、気づけてよかったわあ…」

「そう言い俺の持つライフルのセーフティを掛けて、マガジンを取ってアファインに渡す。」

「相棒のライフル使いにくくてなあ…何でコッキングレバーを一々撃ち切ったら引かなきゃならんのよ」

「そう言いながらマガジンを指してコッキングレバーを必死に引こうとするアファイン。」

「EN弾のフォトン弾と違ってこっちは勝手に薬室に入ってるの。俺からしたらフォトン弾の方が使いにくそうで嫌だわ」

「そう言いながらアファインに近付きセーフティを解除、コッキングレバーを引いた。」

「…んで弾が切れた状態でコッキングレバーを引くもよし、ボルトリリースを押すもよし…で良いんだよな？」

「そうだ。ローグレネードの使い方は？」

「支給品はセーフティ、フォトン弾と兼用だからなあ…二つもトリガーがあるなんて面倒だなあ…」

「…トリガー一つの方が問題だろ」

「いや、TOSの方がオートで選択してくれるし」

「それでも怖いもんは怖いんだよ」

「そんなランチチャーみたいな武器を持ちながら言われてもねえ…」

「…さあ、さっさと行くぞ。ゴール地点に向かえば何か分かるかもしれない」

126 話目

「…なあ、なんかレーダーに反応ない？」

そうアフィンに言われコンソールを開きレーダーを見ると…灰色の点が複数あった。

「先に進んでいた友軍？でも動いてない？」

「やられてはないはず。そしたら転送されて…あ」

「どうした？アフィー」

「も、もしかしてだけど…ダーカーのP. J. A (光子妨害攻撃)かマズイぞそれは」

「パジャア？なんだそりゃ？」

「ダーカーからの電子戦だ！通信妨害ももしかして…？」

「電子戦…E. Wウ…ジャミングって事か…でもフォトンは電子の中に含まれないんじや…」

「…いや、光に当たる物、と言うより光に触れる物は全て等しくフォトンに…って違う！今はそれどころじゃねえ！くそっ！ダーカーも進化するって事か。やべえぞ、相棒。これで船団の方に偽の映像データが送られていたら…」

「情報戦で負けたらボロ負け確定えよしてくれよ、話の出来る相手なら兎も角ダーカーだぞ…エロゲーみたいに苗床とかになりたくねえぞ俺え！」

「エロゲーに苗床ってお前、なんでそんな単語が…兎も角、先に進むぞ！――遺跡エリアに入るまでは通信は聞こえていたし、リーダーも正常だった筈だ」

「と言うことは先行組は致命的なダメージを受けて、撤退する事が出来ない☒」

「テレパイプの短距離ワープを使おう、アレなら凍土とギリ森林エリアが射程内な筈。――何個持つてる?」

「定数の10個。アフィンは?」

「同じく。何回も使えるとは言え…俺たちより前にいるチームの数とか…分かる?」

「さあ…最低でも20人以上かなあ…」

「そう言いながら2人揃って方やライフル、方やガトリングを構えながら前に進む。」

「――」

「――よし。これで8人目。アフィン、そっちは?」

『こっちはひでえや…12人の内半数がその…』

「何だよ、言えよ」

『下半身とか腕がねえ。服のお陰で止血と痛覚カットが済んでいるのが幸いか』

「腕に下半身が…?」

『ああ、俺が先に行っているからアレだが生存者曰く「ダークファルスが出た」って…』

「…合流ポイントはどうする？何ならこのまま異変を察した上の援軍を待つか？」

『…相棒、前に俺のカンって当たるって言っていたよな？』

「ああ、それが何か？」

『そのカンが今…遺跡の中心部、ゴール地点を示してる』

「はあ？お前、こんな状況で…」

『そしてダークファルスは中心に向かっていったとも』

「尚更じゃねえか！撤退だ！凍土エリアまで…」

『…俺は行く』

「…お前…何言ってるか分かってるのか？」

『相棒はそのまま負傷者の救援と援軍が来るまで他のアークスを援護してやってくれ』

「お前…」

『そうだな。…相棒風に言うならダークファルスが…そうだな…南下してくる可能性が高いから俺が殿を務め救援が来るまで凌ぐ、って所か』

「…死ぬ気なのか？」

『まさか？俺には弟も母親も居る。――だからこそ』

『男にはやらなきゃいけない事があるんだ』

「…成る程。何となくわからなくもないが…それで死んじまったら意味がねえ。つうーことでコツチも救難信号出し終わり次第動ける奴を率いてそつちに向かう」

『…分かった。――相棒』

「なんだよ」

『すーー「アホオ！そういう事は今言うな！フラグって言うんだよっ！無事に帰ってから言え！」――分かった』

「それに！」

「俺は絶対にうん、とは言わん。何せ全然カンストまで行ってねえからな」

『あい、ぼう…』

「だからだ。俺たちが行くまで逃げ回れよ。――本当はアレでも入れてお守りにでもしてやりたかったが…生えてなかったしな」

『アレ…？…ええ☒アレってアレ?!』

「まあ、なんだ。俺の相棒なんだ。死んでくれるなよ」

『まったく！生えてないってそれくわー！』

「…つと。回収していくか…」

そう良い通信を終わらせ、アフィンの寄越した回収地点に負傷者を放り込んでいく。

ある時は足を。ある時は服の首元を引っ張っていく。

「…おうおうおう…まじかあ…」

奥の方の最後の4名はー片手や下半身が無い、アフィンの言っていた状態となっていた。

この状態になると欠損部分に防護膜を形成しーオラクルに戻るまで保護してくれるようになっていた。

一定人数を吐き気としかめっ面になりながら集めているとーも少しつとところでテレポーターが墜ちた。

墜ちたと言うより壊れた、が正しいか。

再度展開しようにもD因子の濃度が上がっているらしく、それによってテレポーターの距離も短くなってしまったらしい。

どうしたものか、と考えているとー何処からともなくジェットーいや、フォトンエンジンのそれに似た音をミミが捕まえた。ー近くに来るごとに音が小さくなっているつとということも。

高度約100mを切った辺でギアダウン、エンジンノズルが次第に下を向きー強引に接地、数十mもすれば完全に止まる。

『ーああっ！くそっ！エンジンの回転数がっ！』

暫くして完全にエンジンが止まりー中から再始動させようと努力した結果の音が響く。それから側面のハッチが開き、中から人がー黒人のニューマンが降りてくる。

「俺も落ちたとはいえそれなりに適正はあるんだぞっ！ーくそがつ！ーいつ!!」

機体を思いっきり蹴っ飛ばしー足を抱えながらジャンプするニューマン。

「救援か？ーじゃないよな…その様子だと」

「ああ？戦技大会に参加したアー！ーええ?!なんだその後ろの！」

「テレポーターの使い過ぎで壊れちゃってな…後ろの奴らの輸送をしてほしいんだ」

「だが…だって…戦技大会でこれは…」

「奥にダークフアルスらしきものも居るかもしれない。だからー」

「分かったけどよ…機体のエンジンの調子が…全く、最初のチェッカーフラッグを見るのは俺だと思っていたが…調子が悪いのはダークフアルスのせいか…」

そう言いながら仮死状態のアークスを機体の後ろに詰め込む。

「さっきも言ったがD因子濃度が高くて俺の適正じゃ、今の状態じゃ動かせない」

「動かせない？機内バッテリーやA・P・Uでも壊れたのか？」

「いや、機内バッテリーは動くしA・P・Uも動く。ーがエンジンがな…」

「エンジンが？」

「ああ。この機体――オービタル含め俺達みたいな2軍――Brks（バークス）でも比較手にフォトン適性が高い奴に優先的に渡される航宙機なんだが…D因子のせいで起動が阻害されていてな…Arks（アークス）なら動かせる、かもしれないんだが…」

「俺に動かせと?!ライセンスどころか触ったこともないのに?!」

「しようがないだろう。本来なら宙域内にある無尽蔵のフォトンでエンジン内を加速、圧縮された圧縮フォトンをもそのまま後方に放つんだが、今このエリア一帯に超高密度のD粒子がばら撒かれているんだ。足りないフォトンパイロットから得なくちゃ起動しない仕様なんだ」

「他が壊れているとかは?」

「機内外S・CもS・S・Cも一致して原因はD粒子の高さが原因と判断してる。それにほら。エンジンユニットをマグでスキャンしてみろ」

そう言われ機体上部に登り、マグをエンジン部に近づける。

2秒程でスキャンが終わり詳細なデータをホログラムとして表示してくれる。

「ええつと……すまない、俺が見ても…ちよつと解んないわ」

「まあ、ノーマル表示されているから異常はないんだ。つことでだ。さっさと乗ってくれ。後ろのアークスたちも連れてな」

――

「いいか?俺が後ろから指示を出す。――因みに何だがシミュレーターをつかったことは?」

「……無い」

高度を上げAGL5にてギアアップ、15度で上昇中にパイロットに話しかけられた。

「オーケー。Angel 15、対地高度15000ftまで上昇、その後Bulls eye 1-5-0に向かつていけばいい。45nm後、テレポーター付近に着陸しアークスを回収、その後、機首を上に向けスロツトルを前に固定しろ。そうすりゃ宇宙に出れる。ーいいか？間違っても3-3-0には向かうなよ？そっちにはダークファルスが居るからな」

「…外から見たときにミサイルらしき物が付いていたけど…あれは？」

「もしものときの自衛用だ。他にもーTSDからEquiptment欄を開いてみる」

「…AMM-16P-5が…24発?!ひゅ…ヒュプリスが180発?!ーいや、これはロケット…?」

「40年以上前の旧式とは言え対ダーカー用全領域対応高機動長距離ミサイルが24発、中距離宙域両用ミサイルが両ハードポイントに30連3連装2基で180発の軽装備だ。いいか？絶対ダークファルスには向かうなよ？中型クラスなら兎も角、大型や奴らとは戦える武装じゃない」

「そもそもとしてコイツはー」

その時。TSDに自機に目掛け赤いラインが表示される。

「くそっ！ダーカーの脅威度係数に捕まったか！ーいいか?!全力で回避しろ！でもロードアウトの投棄はするなよ！そいつらは旧式のクセに高めえんだ！」

そう言われサイドステイックを右へ倒しスラストステイックについているボタンを押し込む。

『chaff/flair.chaff/flair』

と電子音声で鳴り響き、エンジン下部後方及び上部からフォトンクォーツと発煙体が撒かれる。

「うおっ!!俺もいるんだぞ!!もつとゆっくりーうわあ?!ーギギやああ!」

シートに手を掛けながら俺に指示を出していたパイロットの人が回避行動を取ったお陰で後ろに転がっていきー多分、載せてきた他のアークスに当たったな。

サイドステイックに付いているアナログハットを動かしてTSDに表示されている敵に合わせる。2度ほど押し込むとIRSTがその敵の方にレーザーを照射する。

マスターアームの蓋を開けスイッチオンに。視線入力トリガーをオンにするがシーカーが目の前に固定されたままになっている。

「ねえ!これシーカーのアンケージってどれでイジるの?!」

「対地か?!対宙か?!」

「どっちも!ー装備欄からか?!」

「そうだ!それのーうお!」

TSDのメニュー欄から装備欄をタッチ。今装備されている武装が機体のモデルとともに表示された。

AMMから始まる武装欄のパネルをタッチ。シーカーモードをロックドからアンケージに変更。

TSDをSOIに設定してレンジ内のターゲットにステイックのハットを使ってロック、そのデータをIRSTらしきシステムに受け渡す。

サイドステイックのトリガーを引くとエネルギー弾を撃ってくるダーカーに対してIRSTがトラックしたダーカーにシーカーが動きー。

『Shoot.』

甲高い電子音と電子音声が撃てとのオーダーをだす。

機体左側のランチャーから青白い煙を靡かせながらミサイルがダーカーに突っ込む。

飛んでいった飛翔体にすぐに気がついたダーカーがターゲットを俺からそのミサイルに変更、赤黒いレーザーを小刻みに放つ。

「もう一発だ！もう一発撃て！」

その言葉により再度放たれるミサイル。一発目が撃破される中その爆炎を突っ切ってー。

「よしっ！イイぞ！」

赤黒い霧となり飛散していくダーカー。それをP・O・T・S越しに見る俺と本来のパイロット。

「…にしてもダークファルス…ポラリスを使うだろうなあ…」

「ーはあ…終わったのか…ポラリスって？」

「ROEにて定められている対ダークファルス用オプションだよ。習わなかったのか？」

「…いや。もしかしたら寝ていたのかもしれない」

「…基本的に対ダークファルスはフォトン適正を持つアークスを突っ込ませてD因子を削り取るのが理想だ。んが、今の現状だと…」

「このエリア一帯に強力な電波妨害が掛かり俺たちオラクルがそれに引っ掛かっていると」

「基本的に初期の段階で迎撃出来なければ…惑星ごと消し飛ばすのが正しいんだが…ワープされたらそれそこ無意味だからな。気取られ

ないように囮としてアークスが前を貼ってー当たる直前に撤退が道筋だ。：取り敢えずテレポーター作ったエリアに着陸後、ナベリウス衛星軌道上の友軍に知らせ増援を要請。上が破棄するか徹底抗戦か：まあ、さつき言ったポラリスー対惑星用滅却用高機動誘導弾が30発前後撃たれて終わりだな。ジャミングから換算したら：下手したら大会開始前からの可能性も十二分にあり得る」

「…嘘だろ…？」

「しゃーない、生き残っただけマシだ。ーーそーういや戦技会って二人からなんだが…ーービーストで女ってことは…バディはニューマンのアフィンってやつか。そいつは今何処に？」

そう言われ実感が湧かない手で居ると思われる方向を指差す。

「…嘘だろ？一人で？」

「ダークファアルスのヤツと？」

「…馬鹿だろ？」

3つの問にコクンと答えながらーーテレポーターの使える場所まで退避していく。